

戦士たちの非日常的な日々

n i c k

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

けんぷファーとバカとテストと召喚獣と真剣で私に恋しなさい！（＋α）を融合させ面白おかしく脚色させた二次小説！知ってる人は知ってるでしょうが、真面目そうなタイトルとは裏腹に中身はギャグまっしぐらです。

寧ろシリアスはあるのか？王道のラブコメは?!

そんな忘れられない少年少女たちの青春の物語…。更新は亀の如く遅いです。

目次

4月

登校

————— 1

S H R

①

————— 8

S H R

②

————— 18

S H R

③

————— 24

1時間目 なんかビームっぽいのが飛んだ。

————— 31

2時間目 聖魔支配剣、さとうきびセイバー

————— 41

3時間目 違いますっ、果たし状じゃありません！」

————— 48

3, 5時間目 とある男女間の会話 あるいは青春の1ページ

57

4時間目 野郎に向ける愛などない

————— 59

5時間目 特別ルール

————— 65

5, 5時間目 物語の間の何気ない1ページ

————— 78

6時間目 好都合な奴

————— 79

7時間目 お前のそういうところが好きだよ

————— 87

8時間目 パロスペシャル・ジエンド

————— 96

9時間目 それが一番大事

————— 106

10時間目 アイアムスパルタ

————— 125

11時間目 俠道

————— 138

12時間目 彼女の心音・彼の本音

————— 148

13時間目 独国から来た少女

————— 161

14時間目 説得執行中／処刑進行中

————— 171

15時間目 生徒会へ一属

————— 185

16時間目 生徒会で二衝

————— 198

17時間目	生徒会の三劇	210
17・5時間目	物語の狭間の一ページ	221
18時間目	SWK	224
19時間目	Fate	233
20時間目	Justice	242
21時間目	”裏番” 冴島タイガ 前編	261
22時間目	”裏番” 冴島タイガ 後編	273
22・5時間目	”裏番” 冴島タイガ 後日談	288
23時間目	Grim reaper	298
24時間目	『屈辱だ』	312
25時間目	にこにここと這い寄る混沌(?)	319
26時間目	Friend	324
5月		
1時間目	Sorcerer	331
2時間目	どっちかていうと守護霊獣に近いです	341
休み時間	ある日を境にFクラスの机がサビ出したワケ	345
3時間目	どっかで見たような油断できない人	354
4時間目	トラウマって作るもんだろ?	357
5時間目	会議って眠くなるよね。でもこんな気遣いはいらぬ。	362
6時間目	クラスメイトが異常だと再確認させられた瞬間	369
6・5時間目	ある日、あるクラスの作業風景	374
7時間目	真実の時間	378
8時間目	衝撃の事実	384
9時間目	召喚大会①	389

10時間目	召喚大会②	394
11時間目	召喚大会③	400
12時間目	装備・腕：特性超高性能デバイス	406
13時間目	召喚大会④	409
14時間目	召喚大会⑤	414
15時間目	召喚大会⑥	420
16時間目	ゲスの一面	426
17時間目	2―S 水着喫茶『あるじ様とお呼び!』	431
18時間目	シユレディングアのパンツ	436
19時間目	2年Fクラス 中華喫茶『ヨーロッパアン』	443
20時間目	0以上1未満	450
21時間目	死神を殺す方法	455
21・5時間目	輝く星に、なれたらいいな。	469
22時間目	召喚大会⑦	472
22・5時間目	三回戦の裏側	480
23時間目	コラボ希望	486
24時間目	完璧には程遠い	490
25時間目	目測20cmの誤差	494
26時間目	召喚大会⑧	499
27時間目	召喚大会⑨	504
28時間目	召喚大会⑩	508
29時間目	召喚大会⑪	514
30時間目	召喚大会⑫	520
31時間目	龍虎の戦い	525
32時間目	容疑者、確保	532

33時間目	サンシャイン・アイ	536
34時間目	絶望教室	540
35時間目	ネメシスっ	543
36時間目	キレル男	548
37時間目	キレた男	554
38時間目	闇の中から蘇りし者たち	558
39時間目	やっぱり彼は気づかない	563
40時間目	AKIの世界	569
41時間目	ようせいさんのへやで	573
42時間目	彼の秘密	579
43時間目	彼の秘密	584
44時間目	きょう・きょう・きょうは、きょう。	589
45時間目	ハラヘリネズミ	602
46時間目	Month	609
47時間目	Wizard	618
48時間目	D4C	625
49時間目	Solar	633
50時間目	Executitioner	641
51時間目	Imperial	649
52時間目	召喚大会⑬	659
53時間目	召喚大会⑭	669
54時間目	召喚大会⑮	677
55時間目	召喚大会⑯	682
56時間目	白銀体験	693
<hr/>		
48時間目	〜いとも容易く行われるえげつない行為	625

57時間目	黄金三角	701
58時間目	悪の敵	709
59時間目	学園の祭り、戦士たちの宴	714
60時間目	真の英雄は眼でコロす	721
61時間目	Umpire	730
62時間目	Passion	736
62・5時間目	時間目時間目 学園一の集い	744
63時間目	Force	750
64時間目	蒼頭は恐怖した	754
65時間目	Pagoda	764
66時間目	Constellation	772
67時間目	汝は、我	779
68時間目	信じるか信じないかは貴方次第です。	791
69時間目	ナゾ	796
70時間目	俺の知り合いがこんな○○○な筈がない	804
71時間目	ノロイノシユレッダー	811
72時間目	キマグレでワガママでヒネクレ	816
73時間目	彼が彼女(たち)に出会ったワケ	822
74時間目	用法容量を守り正しくお使いください	828
75時間目	Thank	834
76時間目	秘書も筆の誤り	842
77時間目	アルカナ	848
78時間目	Moderation	853
79時間目	生温いコーラ	860
80時間目	アクティヴィストの足音	865

81時間目	逸材の花	870
82時間目	絶対私は、忘れない。	874
83時間目	僕は君を想うだろう	879
84時間目	君に出会えたキセキ	886
85時間目	蛍の光	891
86時間目	The Woman Pope・Reverse	899
86・5時間目	Gulliver	908
87時間目	ノーネーム	912
隙間時間	く小さすぎるお話く	921
88時間目	フィナーレのお時間です	924

4月
登校

おつす、俺瀬能ナツル。星鐵学院2年生だ

……なに？今回は設定が違う？チツ、仕方ねえな…

おつす、おら瀬能ナツル。星鐵学院2年生だ

…分かった分かった、分かったから脇腹に噛み付くのはやめろ！
つたく、テンドンは基本中の基本だろうが…、分かってねえな
んじゃあらためて…、俺は瀬能ナツル。文月学園に通う2年生だ

………なんだその顔は、なんか間違ったこと言ったか？

え？しんげっ神月学園？それが俺が通ってる学校？しかも二年に上がった
ばかり？

設定ころころ変えやがって…作品に対するこだわりってのが感じ
られねえな 《メタな発言をするんじゃない！》

「あ、ナツルじゃないか」

「あ？」

学校への通学路を歩いていると後ろから声かけられた。

「なんだ、ただのバカか…」

「いやちよつと、その反応はひどくない？」

「これ以上ないってくらい妥当だと思うが」

「何を打って倒すのさ」

そりゃ打倒だろーが。やっぱりバカじゃん。

吉井明久。一応知り合い。

あることがきつかけで名前と呼ばれる仲にはなった。そのエピソードはべつの機会に語るとしよう

なんか仲良しみたいに思ってるかもしれないけど、俺たち知り合ったの2〜3週間ぐらい前だから。ほとんど他人だから

吉井は当然のように隣へ、そのまま並んで歩く。

「今日から二年だね僕ら」

「そーですね」

「一緒のクラスになれたらいいね」

「hahaha 安心しろ、99パーセント無いから」

にこやかに笑いかけるので俺は冷めた目と半笑いで宣言する。

こいつと同じクラス？最低って意味じゃん

俺らが通う神月学園は他の学校と少々（大分？）変わっていて、1年の時は普通のクラス分けだが2年からは違う。進級試験の結果によってクラスが振り分けられるのだ。

クラスはS〜Fと分けられ、それぞれのクラスごとに設備が違う。つーかクラス多ツ。生徒何人いるんだ？

1年の時AからEの5クラスだったが、2年は7クラス。一つに30人弱いるとしても2年は210人いることになる。

土地が広いからって多すぎじゃね？

まあそれは置いとくとして…最上位のSクラスは最高級の設備が調っていて、最下層のFクラスはひどいなんてもんじゃないそうさ。

中には幽霊を見たと入院した先輩がいるとかいないとか…そんな噂を一年の時に耳にした。

流星に好きこのんでそんなところに行きたくはないので、必死こいて勉強したさ。そのかいあってBは無理でもCかDは確実だろうという点数が取れた。はず

ちなみに目の前の吉井の成績は一年の時下から数えた方が早かつ

たかうちのレベルらしい（クラスが別だから情報が入ってこない）。でもまあ、一緒な訳はないだろう

「お前ら、遅刻するぞ」

雑談しながら歩いているうちに学校の近くまで来ていたようだ。

正門に立つゴリラっぽいスーツ姿の男に注意された。

「瀬能、今お前失礼なこと考えなかったか？」

「なにをおっしゃるウサギさん」

カンのいい奴だ…まさしく動物並み^{ゴリラ}

「それと瀬能、お前はきちんと制服を着ろっ」

「失くしちゃったんすよ。ネクタイ」

今の俺はブレザーの制服を着てはいるが、ノーネクタイ・ノーボタイン留めの着崩しスタイルだ。

「なら新しいのを買えばいいだろう」

「いまさらそういうのも…ねえ？」

ネクタイ失くしたの去年の今頃だけど

「……ふー…聞いてた以上だな……。すごいな高橋先生は…」
目をつぶって深々とため息をつかれた。

高橋教諭は学年主任で、去年俺のクラスの担当だった人だ。

美人の先生で友達（友達？）の東田がハアハアと喜んでたのがとても気持ち悪かった…

「おはようございます、鉄じっ…西村先生」

「吉井、今お前鉄人って言いそうにならなかったか？」

「はっははは、そっそんなわけないじゃないですかっ」

ジロリと睨みつけられ、慌てて首を左右に振り言い訳（否定）する吉井。こいつバカな上に隙が多いな

西村教諭——。生活指導担当。下の名前は忘れた

趣味はトライアスロン。真冬でも半袖Tシャツを着用してること

や、外見故に生徒から『鉄人』のあだ名で呼ばれている。

「つーか遅刻するぞってまだ5分あるじゃないすか」

「そうですよ！それに僕、あまり遅刻はしてないですよ？」

しれつとのたまう俺と力説する吉井。鉄人はまたしても深々とため息をついた

「お前らの担任は大変だろうな…。まあいい、ほら受け取れ」

そう言って懐から取り出した封筒を俺と吉井にそれぞれ差し出す。クラス発表の用紙か？

「こんな面倒なことしないで普通に張り出しやいいのに…」

「まったくだよね…」

ぶちぶちと文句をつぶやき受け取る。

「そうしたいのは山々だが、神月学園ウチは世界的に注目されてる試験校だからな。この変わったやり方もシステムの一環だ」

「掲示板とかに張り出した方がエコだと思うんだが…」

これって人数分作ってるんだろ？資源の無駄使いじゃん。

「…吉井、今だから言うんだが」

「はい？」

封筒の糊付けを剥がそうと四苦八苦していた吉井が、目をつむる鉄人に向け顔を上げる。

「去年一年お前を見て『吉井はもしかしてバカなんじゃないだろうか』と思ってたんだ」

「ははは、そうなんですか。先生今に『節穴』ってあだ名されますよっ…」

隣の男は、面倒臭くなったのか封筒の上の部分をびりびりと破いていく。なんでそんな自信満々なんだろうか

つーか鉄人、あんた去年こいつの担任だったのか。どうりで学校にいる間1時間に5回ほど怒鳴り声が聞こえると思った

すごいよね。こいつにだけで週に約150回は怒鳴ってる計算になるだぜ？

吉井が卒業する前に血管が切れるなり高血圧なりで早死にするん

じゃないかなこの人。

閑話休題

「ああ、だが今日確信した」

吉井が封筒の中から紙を取り出し、広げる。

ちよつと気になって横からのぞき見てみた。そこには…

『吉井明久 Fクラス』

「吉井。お前はバカだ」

紙を広げたままの姿勢で固まるヤツに向かい鉄人がきつぱりと冷酷に宣言する。まあ当然のことだがな…

「ご愁傷様」

「人事じゃないぞ瀬能」

「はっ？」

人事じゃない？それって…

嫌な予感をひしひしと感じながら、急いで封筒を破っていく。

中から取り出した紙に書かれていたのは…

『瀬能ナツル Fクラス』

「ま、そういうことだ」

クラスを確認して固まる俺に、鉄人がやれやれといった風な声をかける。

…嘘だろオイ。1パーセントがきちまったよ

「つてちよつとまで！なんで俺がFクラスなんだよ！おかしいだろ！？」

テストの点数は悪くなかったはずだ！なのになぜ……！

「たしかに点数はよかった。Cはいつてただろうな」

詰め寄ってきた俺を迷惑そうに片手で制し、鉄人が口を開く。

「じゃあなんで!?!」

「だってなあ……」

「お前ら二人、観察処分者だろ?」

………

「一人でも問題なのに二人もいるんだ。ばらばらにするよりまとめいた方がいいだろう」

つまりあれか? 危険物は一カ所に集めて管理した方がなにかと都合いいみたいな感じか?

「それにしたってなんでこいつに合わせてんだよ、俺の方でもいいじゃねーか!」

「お前は罰も含められてるがな。それに吉井がついてこれんだろう」

学年ごとのカリキュラムなんてどのクラスも一緒だと思いが……こいつそんなに頭悪いのか?

……ってちよつとまでよ、もしかして吉井の成績が上がらないかぎりどんなに努力しても俺は最下層を脱出できないのか?

とても受け入れたくない事実を知って、膝から地面に崩れ落ちた。

隣を見ると吉井は、相変わらず紙を両手に固まったままだった。

クソがッ、こいつのせいで……!

こうして、俺の最低クラスでの生活が幕を開けた。
いつかなくならないかなあ、観察処分者の称号

S H R ①

「うっ……わー……い！」

三階2年Sクラス。他の教室三倍はあるであろう部屋の前で、明久は大口を開けて呆然とした。

ちなみにナツルは陰を背負いながら、重い足取りで一步一步階段を上がっている途中である。意外と引きずる性格のようだ。

「皆さん、ホームルームを始めます」

Sクラスの教壇上に、髪を団子状にして後ろにまとめたスーツ姿の眼鏡の知的美人が立つ。学年主任の高橋洋子だ。

「まずは進級おめでとうございます。2年S組を受け持つことになりました、高橋洋子です。どうぞよろしく」

彼女が告げると壁一面に敷き詰められたかのような大きさのプラズマディスプレイに名前が表示される。

「まずは設備の確認をします。デスクトップパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、その他の設備に不備のある人はいませんか？」

洋子の言葉に数人の生徒が手を挙げる。一介の学生が使うにしては贅沢すぎるはずだが、何が足らなかつたのだろう。

明久は確かめようと扉の窓から中を伺っていたが、後ろから声をかけられた。

「おい吉井、（もうしてるけど）遅刻するから先行くぞ」

「えっ、ちよ、ちよっと待ってよ！」

走り去るナツルの背中を慌てて追い掛ける明久。その後ろの教室では、Sクラスの代表であろう黒髪の少女が教壇で挨拶をしていた。

『霧島翔子です。よろしくお願いします』

『本来クラス代表は男女二名ですが、男子の代表は諸事情で欠席されています。皆さん、これから一年は——』

☆

★

☆

「初日から遅刻しちゃった…」

『2―F』と書かれたプレートがぶら下がる教室前、明久は思い悩んだ顔で扉を見つめる。

対してナツルはズボンのポケットに手をつ込み、あつけらかなとした様子。

「俺一年の時入学式と始業式遅刻したことあるぞ」

「神経太すぎだよナツルは…」

もつともである。

「でもそうだね、きつとみんな笑って迎えてくれるはず…!」

ぐっ…と拳を握り、決意をあらわに明久は扉を開けた。

ガララツ「すいません、遅れちゃいました♪」

「とつとと座れ、このウジ虫野郎!」

「いくらなんでも酷すぎるっ!」

まったくだ。

とても教師の台詞とは思えないが、教壇に立つのは学生服に身をつつみ短髪を上につんつんと立てている長身の男。どうみても教師ではない。

「…って坂本じゃねーか。なにやってんだ?」

「瀬能か」

少し遅れて入ってきたナツルが失礼する。それに教壇に立つ男―

――坂本雄二――は

「先生がまだ来てなかったからな。一応、最高成績者として挨拶してたんだ」

「それって…」

明久が反応する。雄二は腕を組んで得意げに笑い

「ああ、俺がこのクラスの男子代表だ」

目を輝かせながら「今日からこいつらが俺の兵隊だな」と口走る。
それを尻目に

(つまり雄二を説得すればクラスを動かせるわけか…)
(あれっ? 最高成績者って俺じゃないの? もしかして俺っていないことになってる?…もしかくはいらない子?)

明久は黒い笑顔で、ナツルは半目で物思う。三者三様といったところか。

☆

★

☆

くナツルSideく

「すいません、ちょっと通してくれますか」

後ろから声をかけられたので振り返ると、スーツ姿で眼鏡をかけた初老の男が立っていた。

誰だ? ってこの状況じゃ教師しかいねーよな

なんとも存在感の薄い担任だ

「すいませんが席についてもらえますか? ホームルームを始めますから」

その言葉に従い、俺ら三人は自分の席に移動する。

といっても初日だから座席が決まってるわけもない。ので空いてる場所に適当に座ろうとするが、見事に皆後ろの方しか空いてねえ

「あつ、タイガ!」

教室の奥の方へ移動したら、見知った顔が一箇所固まっていた。

「おおワン子よ。Fクラスにきてしまうとはなさけない」

「タイガだつてFクラスじゃない」

ぐもつとも

あと俺の名前は瀬能だからね? 瀬能ナツル。何度もいったでしょ
いい加減覚えろよ

「タイガ最近ちつとも川上院なに来てくれないけど、どうして？」
「骨が折れるからな」

―二重の意味で

「やあタイガ、久しぶり」「おー」

「冴島ー、今度また久しぶりにゲームとかしようぜー」「ゲーセンでならいつでもオツケーだ」

「…みんなナツルの知り合いなの？」

「まーな」

他の奴らにも適当に挨拶しながら席につくと、吉井が隣に座りながら尋ねてきた。

「タイガとか冴島ってなに？」

「先生がなんか言うみたいだぞ」

興味ありげな目で見てくるがとりあえず無視。ほら先生がこっち見てる（ような気がする）ぞ、前を向け

「えーそれでは皆さん初めまして。私が2年F組担任の福原槇です」

そう言って名前を書こうと黒板に向かったが、すぐにこっちに向き直った

たぶんチョークがないことに気付いたんだらう。学ぶ場所ならチョーク位常備されてもいいと思うんだが

「ではまず設備の確認から。ちゃぶ台、座布団、…えー…なにか不備のある人はいませんか？」

不満なら掃いて捨てるほどあるが

「Sクラスを見たあとだから余計酷く見えるね…」

「ていうかほとんど廃屋だろ…」

周りに聞こえない程度の音量で吉井と愚痴をこぼし合う。それほどこの教室環境はひどいのだ。

だっておもつくそ床に穴開いてるし。蛍光灯だって割れてるし

「先生、俺の座布団破れて綿が飛び出てるんですけど」

「あーはい、糸と針の支給を申請しておきますので自分で直してください」

「センサー、ちゃぶ台の天板が傷だらけなんですけど…」

「我慢して使ってください」

「先生、アタシの席のすぐとなりに大きな穴があるんですけど…」

「長板の申請をしておきます。無理だった場合は我慢するか、他の人と代わってもらってください」

「センサー！今そこに半透明な人影がいたぜ！」

「気のせいです」

予想以上に酷すぎる。

ほかの奴らもおんなじこと考えてるんだろうな

というか最後の、実際にいたけどいいんですか？

「必要な物や不備がある場合は各自、極力自分でなんとかしてください。ではそうですね…廊下側の人から順に自己紹介をお願いします」
納得できないことは多々あるが、皆口には出さず、一人ずつ名前などを言っていく。

☆

★

☆

「甘粕真与あまかすまよですっ。えっFクラスの女子代表をさせてもらってますっ。…えっ、えっど………よっよろしくおねがいますっ!!」

「木下秀吉じゃ。これから一年、よろしくたのむのじゃ」

「島田美波です。趣味は吉井明久を痛めつけることです♪」

「島田さん!?!なに物騒なこと言ってるのさ!?!」

「大丈夫。吉井アンタ以外にはやらないから」

「なにひとつ安心できないよ!!」

「源忠勝みなもとただかつ。…とくになにもねえ」

「ゲンさくん…。そこはなにか言ってくれなきや」「ねえもんはねえ」

「羽黒黒子はぐろくろこお。アタイいマジイケメン好きだしいいみたいな？」

次々にクラスメイト(あまり認めたくないけど)が自己紹介してく。
どうでもいいがいろいろ濃いうちのクラス

…
そしていよいよ俺の番が回ってきた。さてどんな紹介しようかな

「え〜瀬の『ガララッ』「す…すいま…せんっ、遅刻…してしまい…ました…!」…。」

名前を言おうとしたら華麗に被された。誰だコンニャロめー
見ると教室の前入口にピンク色の髪の毛の可憐な美少女が…、チツ命拾
いしたな、男だったらひき肉にしてた位のタイミングだったぞ今の。

「ちようど自己紹介してもらったところですから、あなたもお願いします」

「は…はいっ」

少女は担任に促され、深呼吸をする。

あれっ?俺の自己紹介は?なに?やっぱ俺っていらな子?

ふて腐れてるうちに自己紹介が終わったのか、少女が後ろの空いて
る席(ちやぶ台)に座る。他の奴が名前を言ってるあたり、俺の
アピールタイムは完全に終わったようだ

仕方なく少女を観察でもしようとして後ろを向けば、吉井が話し掛けよ
うと身を乗り出してる最中だった。

「ひめ「姫路」」

流行ってるのか?狙ったのかのように坂本が先に話し掛ける。

出鼻をくじかれ吉井がハンカチを噛んで悔しがる。どっから出したんだよ…

「はい？えつと…」

「坂本だ。坂本雄二」

「あ、はい。なんですか坂本君」

「もう体調は大丈夫なのか？」

「病弱キャラなのかこいつ？」

「あ、それ僕も気になる！」

吉井が坂本を押しつけて迫る。

「よ…吉井君!？」

「悪いな姫路、明久がブサイクで」

「雄二、そこはフォローするところだよね」

「モザイク処理すれば大丈夫」

「ナツル、僕はそういうフォローを期待してるわけじゃないんだよ？」

「だろうね」

「そんな…！目もパツチリしてて顔のラインも細くて綺麗だし…、むしろ…」

まあそう言われればかわいい系に入るかもな。俺は殴り飛ばしたくなるけど

「はいそこ、静かに——」バキツガラガララッ

担任が注意をしながら教卓を叩いたら、教卓は一瞬にして木材へと姿を変えた。それとともにほこりが教室中に拡がる。

「…代えを用意してきます」

そう言つてその場をあとにする担任。窓を開けたりと換気がなされるが、ほこりがこつちまできてキツイ…。ホント最悪だこの教室

「教育現場とは思えんな…」

「あはは…」

手団扇で辺りをバタパタと扇ぎながら少女が苦笑する。俺も扇いどい

「雄二、ちょっと…」

それを見て何を思ったのか、吉井が坂本を廊下へと連れ出した。な

んだ？

「よっ、ナツル」

「んあ？」

今まで座つてた奴がいなくなったことにより、一時的に空席となつたところに新しく別の奴がやってきた。

「なんだ、直江か…なんかようか」

「いや、べつになにかしらの用事があるわけじゃない。でも同じクラスになった知り合いに声をかけるのはごく普通のことだろ？」

「相変わらず理屈っぽいヤローだ」それに微妙に嫌味つたらしいんだよなコイツ

直江はそれ以上、とくに話しかけてはこなかった。ただ前の席のクラスメイトたちを眺めるような目で見続けるだけ。

…本当に用事はねえみたいだな

「そういえばよ」「んー？」

「どういうつもりだ？」「なにがだ？」

しらばっくれやがって

「お前の学力ならA…がんばりやSには行けただろ。なのになんでFクラス（こ）にいるんだよ」

「ナツルだつて特待生制度でSクラス入りできたんじゃないのか？」

ここ神月学園では、成績が芳しくない生徒でも才能しだい（絵とか音楽とか武術とか）で特待生としてSクラスに編入させてもらえるのだ。

ただ特待生になるには、当然なにかしら必要だ。

例えば世界的なコンクールや大会で優勝したなどの最優秀の成績を持つているか、もしくは制度試験で試験官を倒すなりなんなりして合格しなければ、その資格は得られないのだ。

俺？そもそも受けようと思ったこともねえよ。だつてめんどくさいもん

その上受けられない理由が——まあそれはどうでもいいか

「いろいろ都合があるんだよ」

「俺だってそうさ」

つまり言いたくねえんだな。じゃあいいや

☆

★

☆

吉井と坂本が帰ってきた。

それとほぼ同時に教卓を持って入ってくる担任。さっきのよりマシっぽいけど、それでもボロだ。

直江？話が一段落したところでワン子とかに呼ばれて本来の自分の席に戻っていったぞ

きつとはなっからクラス全体を観察するためだけに後ろに来たんだろうな。俺への挨拶はほんのついでだ。

体よくだしにされたみたいでなんかムカつくな。いつか仕返ししてやろう

「えー、それでは。あらためて自己紹介の方を…おや坂本、君で最後です。ではクラス代表として前に出てきてください」

「了解」

教師の言葉に立ち上がり前へ歩いてく坂本。教壇に上がり、向き直って教卓に手をつく。

「Fクラス男子代表の坂本だ、代表でも坂本でも好きに呼んでくれ。…さてみんなに一つ聞きたいんだが……」

そこでいったん止めて目を閉じる。

「廃屋と言っているほどボロい教室。傷だらけのちゃぶ台。カビてたり腐りかけた座布団……。Sクラスは高級リクライニングシートに新品のシステムデスクだそうだが——」

また目を開いて

「——不満はないか？」

『大ありじゃあ!!』

クラス全員（一部除く）が叫ぶ。むしろ不満しかねーよ

『いくらなんでもこれはあんまりだ！改善を要求する!!』

『Sクラスだっておんなじ学費だろ?!不公平じゃあ!!』

『彼女欲しいいいいい!!』

一人関係ないの混じってんぞ

クラスが混雑する中、教壇に立つ坂本が両手を上げ『静粛に』のポーズを取る。多少時間がかかったが、さっきまでの静けさが戻った。

「俺だっこの設備には不満がある。そこで提案なんだが——」

ニヤリと不敵そうに笑い、続ける。

「FクラスはSクラスに対し、試験召喚戦争を仕掛けたいと思う」

SHR ②

試験召喚戦争——。それはテストの点数に応じた『召喚獣』を用い、クラス単位で行う戦いである。

これに下位クラスが上位クラスに勝てば、そのクラスの設備と交換することができる。

しかし、逆に下位クラスが負けた場合、そのクラスは設備を1ランク落とされる。

くナツルSideく

『Sクラスって秀才天才の集まりだろ？勝てるわけないじゃん…』

『これ以上設備を落とされたらどうなるんだ？』

『姫路さんがいればほかになにもいらぬ』

『負けて悪くなるくらいなら今のままの方がいい』

坂本の提案に一気にざわめきだす教室。試験召喚獣は成績⇨戦力なのでそれも当然だろう。

Fクラスうちの戦力じゃ竹槍で戦車、いや爆撃機に突っ込むようなもんだ。

にもかかわらず壇上の坂本は相変わらず不敵な笑みを浮かべたま

ま
「そんなことはない、うちには勝てる可能性が十分にある。今からそれを説明してやろう」

そう言うとなぜか俺を…いや違うな。俺の隣の席か？を見ては

「おい康太、いつまでも姫路のスカートの中を覗いてるな」

「…!」

「なにっ!？」

「はっ、はわっ?!」

ふと隣を見れば黒髪の男が頬に畳の跡をつけて首を左右に勢いよくブンブン振ってた。

こいつ…いつの間にかいたんだ？

「紹介しよう。こいつがああ寡黙なる性職者ムツツリーニだ」

ムツツリーニ？聞いた覚えがないが有名なのか？

『馬鹿な、ヤツがそうだといいのか？』

『見ろ、まだしらを切ってるぞ。現行犯なのに』

『ムツツリに恥じぬ行いだ…』

「……………！！（ブンブン！）」

有名みたいだ。

その本人はなんかモヒカンヘアースタイルの頭の悪そうな（成績うんぬんじゃなくて見た目が）男に「どうだった？どんなパンツだったんだ!？」としきりに迫られている。

それでもなお否定し続けるのは正直すごいと思うぞ。散々擦つたのにも関わらず今だに畳の跡ついてるけど

「姫路については言うまでもないだろう」

「ふえ？私ですか？」

「ああ、うちの主戦力だ。期待してるぞ」

腕組みして笑いながら肯定する坂本。そんなに頭いいのか

『学年上位の成績優秀者…!』

『そうだ、うちには姫路さんがいるっ』

『ああ、彼女ならSクラスにも引けを取らない。可愛さでも』

いいみたいだな

「木下秀吉だっている」

「わしか」

一見すると女と間違えそうな美少年が返事をした。たしか演劇部のホープとか…東田が言ってた気がする

そっぴいあいつ元氣かな。クラス分けて疎遠になっちまったが

「他にも直江。川上。島津。師岡。椎名。源…：風間ファミリーだっ

たか？知ってるやつも少なくないはずだ」

「ん？なににか呼んだ？」

「……………」

それぞれ名前を呼ばれた奴らは、顔を上げるなり聞こえないフリをするなり、多種多様な反応を見せる。

『風間フアミリー……………！』

『あの有名な……………！』

さつきとは別な…質？でざわつきだすモブ達。話題の中心にされてワン子やモヤシ（師岡）とかはちよと落ち着かなそうな様子。

「…ってバンダナ（風間）は？」

さつきまでたしかにいたよなあいつ。半透明がどうか言ってたし

「キャップ？キャップなら」ちよつと冒険してくるぜ！』って出て出ていったけど」

なにやっつてんだアイツは。自由すぎるだろ

そんなんだから成績下がるんだよ

「他にも瀬能ナツルだっているしな」

え、俺？なんでそこで俺が出んの？

つーか何事もなかったかのように話を進めないでくれる？

『瀬能ナツル？どっかで聞いた気が……………』

『つーかいたかそんな奴』

そういや結局自己紹介しないままに代表挨拶になったんだっけ。じゃあ知らないのもムリはない

でも今の扱いは流石にグサツとききたぞ

「分かりにくいか？ならセノーと言えばピンとくる奴もいるはずだ」

「漢字からカタカナに直しただけじゃねーか」

自分のことだけに立ち上がってツッコんだ。そんなんで俺の何が分かるって…

『セノー…、破壊シンセノーか!?!』

『^{つが}梅の木二中の三羽鳥?!』

『初めて見た…!』

……なぜだろう。少し、切ない

視線を一身に浴びながらも上を向いて堪える、下手したら色々零れ落ちそうだ。不満とか

ちなみにシンがなぜカタカナかというと、相手の身しんを打ち抜き、芯しんをへし折り心しんを崩すからだそーだ。聞いた話じゃ脆いくせに突っ掛かってくる方が悪いんだつーの。

『なにより恐ろしいのはどれだけ大事件を起こしても問題にならなかったって…』

『何人も病院送りにしたってんだろ、なんで普通に神月学園に入学出来たんだ?』

なんでなんだろうね

「それだけじゃないぞ。なんとそいつは……」

三年の川上先輩に勝ち越している!」

『なっ……!!』

『「なににいいいいー!?!」』

「なんで直江^{おまえら}たちまで驚いてんだ!?!」

いたよね君ら現場に!えっ、なに。違うの?

「いや、ほかの奴の口から改めて言われるとつい…な？」

「えつと…うん、そんな感じ」

「ついノリで」

「お前ら…」

ノリ良すぎだろ

『でもいけるんじゃないかこのクラス…？』

『これだけのメンバーが揃ってんなら…たいていの奴らには勝てそうだよな』

『そうだよ、Sクラスにだって負けてねーよ！』

にわかには沸き立つクラスメイト達。もはや教室中のテンション・士気・熱気は最高潮に達したといってもいいだろう。

「さらに吉井明久だっている」

……………

そして一気にオチた。俺の名前が出た時とは全然違う静けさだ。さつきまであんなに騒がしかったのに坂本の一言でここまで空気が変わるとは…逆にすごい

『誰だよ吉井明久って』

『そんなザコっぽい名前の奴このクラスにいたか？』

「こ…こらそこっ！人の名前をザコっぽいとか言うんじゃない！」

今度は吉井が立ち上がり指を差して抗議する。俺と違い自己アピールまでしてこの扱いって…酷いどころか哀れだ。

いつまでも立ってるのもなんなのでとりあえず座るか

「雄二！なんでそこで僕の名前を出すのさっ！僕は普通なんだから——ってなんで睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょ

？」

微妙なところだね

「そうか、みんな知らないんだな。こいつの肩書は――

“観察処分者”だ」

S H R ③

観察処分者——学生生活を送る上で問題のある生徒に課せられる処分。

ただし多少素行が悪い程度ではこの処分は科せられない。

~~~~~

「つまり観察処分と認められる奴はよほどのバカか手におえないか、あるいはその両方だ」

雄二の台詞に教室中の注目が明久に注がれる。わずかだが、場の時間が止まったかのように静まり返った。

『…つまりそのバカはものすごいバカってことか?』

生徒の一人がその沈黙を破る

「ち…違うよ！観察処分者ってなってるけど僕はごく普通の「学園の恥」で——ってナツル！途中で割り込むから変な風になっちゃったじゃないかっ！」

「事実だろーが」

ナツルがちゃぶ台に頬杖をつきながら横槍を入れる。半目でありながら死んだ魚のように無気力だ

(単語聞いて一番最初にバカとか出るあたり不名誉以外のなにものでもねーよ。しかも二度も言われてるし)

無気力というよりもくさっていた。

「あの…」

そんな中、怖ず怖ずと手が挙がる。

「ん、なんだ姫路」

「観察処分者って、なんなんですか?」



「ああ…。ま、簡単に言えば教師の雑用係だな。力仕事とかの雑用を特例で物に触れることが出来る召喚獣でこなすんだ」

「へー…それってすごいですねっ」

坂本の説明に感嘆の声をもらす姫路。

「あははっ、そんなたいしたことないよ」

一人から注がれる羨望の眼差しに若干照れを見せながらも説明をする明久。

「そりゃ僕程度の学力の召喚獣でもかなり重たい荷物は持てるけど、教師の許可は必要だし…その時召喚獣が受ける負担の何割かは僕にフィードバックされるんだ」

「つまり召喚獣が重い物持てば疲れるし、傷つけば痛いって訳だ。ちなみに俺も観察処分者」

明久の言葉を受け継ぐようにナツルが補足する。

その後ギロリと目だけを動かして

「…吉井コイツが逃げたりするたびに俺に雑用が回ってくるんだよな……毎回毎回疲れるやら痛いやら」

「あ…あはははははは…」

殺意の籠ったそれを、乾いた笑いで返す。されどもその背は冷や汗でびっしりと濡れている。

『(瀬能が観察処分者ってのは妥当じゃないのか?)』

『(最上級危険人物だもんな)』

ひそひそ声で囁かれるが、当然ナツルの耳には届いている。

「つまりあれか！冴島おまえすごいバカってことか！」

そんな中、唐突に空気を読まず、長身で筋肉質の男——島津岳人が指をさして大笑いする。

不用意な発言は身を滅ぼすことになるということを彼はまだ知らないようだ。

「実力を知ってるくせにそんなこと言う…」

ナツルは島津の量襟首をガツ！と掴み、

「テメエほどじゃねえワ!!」

——古牧流・鉢崩し!

ゴツ!!

「ばボゴっ!?!」

反り返るようにして後ろのちやぶ台に叩きつける。

それだけで島津は天地逆さまの状態で床にめり込んだ。

幸い床と机がボロボロだったので命に別状はないようだが、ダメー  
ジは相当のようでピクピクと痙攣するだけで動く気配はない。

いくら腹が立ったからといって相手の命も取りかねない禁じ手と  
も呼べる技を級友に使っていいのだろうか?

ここまでたったの数秒、しかしその数秒でクラス一帯はまるで通夜  
のようなムードが漂いだす。

ぶつちやけドン引きだった。

「んっんん!とにかく、まずは俺たちの実力を示すために!まずはD  
クラスを攻めるぞ!!」

そんな空気を払拭するように、壇上の雄二が大声を出す。

「みんなこの設備には大いに不満だろう!」

『当然じゃあ!』

「ならばペンを取れ、戦いの準備だ!」

『オー!!』

「俺たちに必要なのはちやぶ台ではないっ!Sクラスのシステムデス  
クだっ!」

『サー、イエッサー!』

シャーペンや鉛筆などを高く掲げ一糸乱れず(一部除き)掛け声を  
合わせるクラス一同。ノリのいい、むしろよすぎる位の集団である。

ここまでの一体感は普通ない。このあたりは見習う価値があるだ  
ろう

「明久、お前にはDクラス宣戦布告のための使者をやってもらおう。無事大役をこなせ」

「え？僕？」

急に名前を呼ばれビクツとして聞き返す明久。

「…普通下位勢力の使者って酷い目に遭うよね」

「そりやマンガとかでの話だ。騙されたと思っ行っていい」

それでも渋る明久に、雄二は詐欺士のような微笑みを浮かべて

「心配するな。…俺が親友を危ない目に遭わせるわけないだろう？」

敵陣地に一人で行かせる時点で十分危険な目に遭わせてるのではなからうか。

しかし明久はふっ…と軽くため息をついて

「…分かった。行ってくるよ」

立ち上がり教室の外へ歩いていく。

やがてその姿がドアに隠れて見えなくなるとナツルが

「…：ボゴボゴにされて戻ってくる、に缶ジュース一本」

そうボソツと呟く。

それに続くように

『じゃ俺、痣一つね』

『服の袖くらいじゃねーの？』

『いやいや、帰ってこれないっしょ』

誰も心配しない。それ以前に無事に帰ってくるとは微塵も思っていないようだ。

ある意味まとまってはいるが鬼のような集団である。

「ちよっ…：どういう意味ですかみなさん!？」

そんな悪鬼の中でも抗議の声を上げた者がいた。

Fクラスの数少ない良心。姫路瑞樹だ。

「もしかして危険なのを承知で吉井君を行かせたんですか!？」

「仕方ないんだ姫路。こういうのは誰かが必ず犠牲にならなきゃならん」

「そんな…!いくらなんでも吉井君がかわいそうです!」

「そうです!お姉さんとして見過ごすことはできません!!」

周りのノリについていけず、先ほどまでオロオロしっぱなしだった甘粕真与が話に割り込んできた。

「私、ちよつと助けに行つてきます!」

すでに彼女の中では吉井はひどい目にあっているようだ。

「わっ、わたしも——」

「待て!二人とも!!」

教室から出て行こうとした両者を鋭い一括が止める。

「え……せつ、瀬能さん?」

「なんですか……?」

二人の視線を浴びながらもナツルは、自分の顔を覆い隠すかのごとく右手を広げ身体は側面だけを見せるようにポージングをして立つ。

いわゆる『ジヨ●ヨ立ち』だった。

「悪いんだけど行くんなら飲み物買ってきてくんね?」

わざわざ●ヨジヨ立ち状態で呼び止めまでして言うようなことかそれ?

「あつ、なにか買いに行くんならついでに僕も頼んでいい?」

『なら俺もたのむわ』

「ごめんマヨ。アタシもたのんでいい?ノド乾いちやつて」

「ええっ?えっと……」

あれよあれよという間にクラスメイトたちに囲まれる甘粕。

この後結局、姫路とその他数名と一緒に楽しくおしゃべりしながら自販機までパシ…買い物しに行くこととなる。

吉井のことは完全に忘却の彼方に追いやられてしまったのは言うまでもないだろう。

### 閑話休題

「おい瀬能。ちよつと待て」

「あ?」

すでに興味が失せたのか、自分の席に戻りそのまま寝ようとしていたナツルに雄二が声をかけた。

「大事な話がある。いいからちよつとこい」

「……………」

眉をひそめながらもナツルは壇上へと歩いていく。

「俺普通に可愛い女の子が好きなんだが」

「いきなり何言い出すんだお前は」

「おしとやかで清楚ならば尚のことよし」

グツとサムズアップ。薄く微笑み目に力が籠っていて、それが本心であることを物語っている。

雄二はため息をついて頭を降る。

「Dクラス戦の作戦についてだ。けしてお前への告白じゃない」

「まーもしそうだったら拳ぶち込んだがな。…なんで俺だけなんだ?」

「お前は悪名のせいで孤立気味だからな。作戦会議に出席したかったら戦争でクラス貢献するこった」

「…それで、何しろってんだよ」

雄二の台詞に面白くなさそうな顔をしながらも納得するナツル。

「戦況を引っかかり回してくれ。さっきも言ったがうちの主戦力は姫路だ。だが…」

「振り分け直後だから点数は0、時間を稼いで点数を回復させるってわけか」

「その通りだ」

雄二は一度深く頷き説明する。

「無理に相手を倒そうとしなくてもいい、長期戦に持ち込んでできるだけ長く時間を稼いでくれ」

「へいへい、努力はしてみるよ…他の奴らには言わなくていいのか？直江とか」

「実力が分からんからな。まずは戦力の把握からだ。実質、この作戦はお前一人にやってもらうことになるだろう」

「サラツと言ってくれるぜ。きついことを」

「それだけ評価してるってことだ」

そこで会話を打ち切って両者共ににやつと不敵に笑いあう。

かくして、Fクラスの挑戦は始まりを告げた。

1時間目　なんかビームっぽいのが飛んだ。

試召戦争——。それは、神月学園でもっとも過酷な戦いなのだ。

『南　慎吾、戦死！』

『ダメだっ！五十嵐先生側は相手が強すぎる!!』

『い…嫌だあっ！死にたくないいい!!』

『も…森岡あああっ!!』

混沌とする戦場。そしてまた一人、哀れな被害者が。

「ひ…秀吉—」

倒れ込む秀吉を慌てて抱き起こす。呼吸音が小さい、まさに虫の息だ。

「あ…明久よ…わしはもう…駄目じゃ…」

「そんなっ、何言ってるんだよ—」

ふるふると震えながらも手を目の前に出され、明久は咄嗟に強く握る。

「後を…頼む…!!」

そう言った途端に糸の切れた人形のように崩れ落ちた。

「秀吉…？そんな…嘘だよね…？秀吉…秀吉—!!」

明久は事切れた秀吉の体をぎゅっと抱きしめ、空に向かい力の限り叫んだ。

その頬には一筋、水滴が流れいった——。

☆

★

☆

「吉井っ！いい加減目を覚ましなさい！」

ブスリ

「ぎゃあああ！目がつ、僕の目があ—!？」

「オイオイ、今根元近くまでいかなかったか？」

「文字通りブスリといったな」

☆

★

☆

く明久Sideく

「まったく、部隊長なんだからいつまでもぼーっとしてないでよね！」  
目からとめどなく涙が流れ出てるせいで分からないが、声からして  
多分島田さんだろう。に怒鳴られた。

僕は今、Dクラスとの試験召喚戦争の真っ最中だ。

僕は小部隊の部隊長を言いつけられ、前線のすぐ近くまで来ている。

「木下が戦死したっつただけでえらい取り乱しようだな…、そんなにショックだったのか？」

すぐ側からナツルの声が、そうだ…彼も同じ部隊だったっけ。

「うう…だって…」

「運が悪かったんだよ。撤退中に武器が飛んできて、それが召喚獣に当たったってんだから」

「そうね…、ウチらも戦死にだけは気をつけないと」

点数が無くなる＝戦死だ、そうなった場合地獄の補習室行きになる。それだけは避けたい。

「ここは気持ちを切り替えて、木下の分まで頑張らないと。ウチらが負けたら木下の死は無駄になるのよ？」

そうだ、島田さんの言う通り、僕らは散っていったクラスメイトの分まで戦わないといけない！僕よりも先にそんな台詞が出せるだなんて、島田さんはなんて男らしいんだ！

この場と一緒にいるナツルも感動したのかパチパチと拍手をしている。

「…って瀬能、あんた携帯で何やってんのよ」

「吉井の顔があまりにも面白いから記念に撮っところと思って」

このパチパチって音カメラのシャッター音だったんだ。というか面白い顔ってなにさ。



「ねーねータイガー」

「あ？んだよワン子。つーか俺の名前は瀬能だって何回言わせんだ」

「アタシたちっていつまで待機してればいいの？前線の戦況を考えたらそろそろ行つた方がよくない？」

川上さんの言う通り、僕らの部隊の役目は消耗した前線が補給を終わらすまで持ちこたえさすこと。所謂『殿』というやつだ。

無理に相手を倒す必要がない分、楽つて言えば楽なんだけど…突撃するタイミングを間違えるとちよつとマズイ。

「機を待ってるんですよ…。一番ベストな条件で戦うための機を」

ようやく痛みと涙が引いてきて、ちよつと見えるようになった目でナツルを見ると、どこかさわやかな様子で窓の外を眺めていた。

君そんなキャラだったっけ。

「それならなおさら早く前線に行つた方がよくない？偵察とか」

「そういう裏方仕事は他の奴がやってくれてるからな。今は連絡待ち」

ピロリロリ〜ン

急にナツルの身体から電子音が響いた。

「お、来たか」

すぐに彼はズボンのポケットから携帯電話を取り出す。

なんかあきららかに育成ゲーム専用の小型機械が携帯につながれているが見えたけど、とりあえず気にしないでおこう。

「どれどれ…お、写真つきとはなかなか気がきいてんじや——つてストリートビュー風?!無駄に凝ってんなオイ！」

「なにが書いてあるのよ」

「前線の状況…。お前らも見るか？」

そう言っただけ。ナツルは持っている携帯を僕らに突き出して来る。

その画面には一枚の画像が映っていた。……いたんだけど…

「ナツルこれ…ものすごい荒いんだけど」

人の判別や教師・生徒の判別はできるけど、顔とかはまったく見えない。

「俺の携帯の解像度ではこれが精一杯だ」

「……………一応聞くけど、コレで状況わかるの？」

「フツ、愚問を」

島田さんの問いかけに不敵な笑みを浮かべるナツル。

そして一呼吸間をおいてから

「分かるわけねーだろ」

「ダメじゃん！」なに今の笑み！

「しかたねえ、実際に前線に行って確認すんぞ」

言うが早いのか、彼はさっさと携帯をポケットにしまい込んですたすたと歩いていく。

切り替えはやっ。

「タイガもしかしてさっきのメール届くのずっと待ってたの？」

「まーな。情報が入るまで待ってって指示あったし」

「でも分からなかったんでしょ？今の。アタシたちが待ってた意味ってなに？」

「文句なら直江に言え。俺の携帯が不良品だつての知ってて言ったんだから」

いや変えなよそれ。不便じゃないの？

☆

★

☆

『Dクラス八島、いきます！』

『試獣召喚!!』

『そこだ！食らえ——!!』

「きちやつたなあ……………」

D・Eクラスの面々が戦う階段近く。なるべく他の人たちに気づかれないようにしながらその様子を探る。

戦況はどうもFクラスのほうが不利みたいだ。弱ったなあ

あまり戦いたくはないんだよね…召喚獣が傷つくと僕も痛いし。

立ち会いの先生は…学年主任の高橋先生のほかに化学の五十嵐先生と布施先生が。

本当なら高橋先生だけのはずなのに二人も引つ張ってくるなんて、Dクラス側は一気に片をつけるつもりみたいだ。

「とりあえずどうすんだ？」

筋骨隆々の島津君がたずねてくる。そういえば君同じ部隊だったね。

初めはちよつと怖い人かと思っていたけど、話してみると彼はなかなかいい奴だ。

無駄にマツチヨなポーズを決めて筋肉をアピールしてくるけど、その辺はナツルの知り合いだし気にしなくていいか。

「そうだね…僕は科学の点数ちよつと自信ないから、五十嵐先生たちに近づかないように」

「試獣召喚！」

Fクラス 川神一子

科学 43点

川神さんの呼びかけに答えるように、彼女をそのまま小さくデフオルメしたような召喚獣が魔法陣から出てくる。

手には長刀のようなものを持っていて、ちょっとした戦国武将に見えるでもないこともない。

『Fクラスの新手だ!』

『慌てるな!一人ずつ確実に潰せ!!』

「つて川神さん!?なんでいきなり召喚してるの!?!」

他の人に気づかれずに高橋先生の所まで行こうとしてたのに、もうすっかり注目の的だよ!

「え?だってアタシたちの目的つて前線で戦ってる人たちの援護でしよ?」

「そうだけど!」もつとこう…作戦つてもものがあるでしよ!?

その辺を言おうとしたら、後ろから肩を叩かれる。

「…あきらめろ吉井。ワン子は基本的に一つのことしかできねー脳みそしてんだ」

振り返ると、ナツルが疲れた顔して頭に手を当てていた。

君、もしかして苦労してる?」

「ところでタイガ。召喚獣つてどう動かせばいいの?」

「前にやっただろ、二年に上がる前。あんな感じでやりやいいんだよ」

「忘れちゃった♪」

「君は実にバカだな」

二人とも戦場なのを自覚してほしいんだけど

「とりあえずあれだ。気を放つみたいにな気合をもつて——」

「わかった、こうね!せりやあつ!!」

ヴオオンツツ

ズガアンツツ!!

川神さんが元気よく掛け声を出すと同時に彼女の召喚獣が武器を振るうと、そこから三日月の形をしたなんかビームっぽいのが飛ん

だ。

『うおお!?なんだ!?』『なにが起こった!?』

『おっ俺の召喚獣がー!?』

それはちようど人(?)が密集しているところに飛来していき、そのまま着弾。

一気にみんなパニックにおちいった。

ていうか今のなに？

「てめーなにいきなり斬撃飛ばしてんだよ!」

「タイガがそうするって言ったんじゃない!」

「俺が言ったのはあくまでも心構えであって、実際にやるって意味じゃねーよ!!」

撃った本人は周りを気にせず、ナツルと喚き合っている。

僕が知らないだけでそんなに珍しいものじゃないのかな

「それでほんとはどうやれば動かせるのよ!」

「強く念じりゃいいんだよ。歩かせたきや『歩け』みたいな感じで。ただ動かす前に自分の点数確認しといた方が——」

「せりゃあッ!!」「聞けよ人の話!」

川神さんの召喚獣はさつきとは別の集団の中に飛び込んでいき—

ざくん

あっさり真つ二つにされた。

ちなみに切られる前にちらつと見えた彼女の点数は

科学 4点

だった。

さっきのあれって、点数削って撃ってたんだね。

「戦死者は補習ー!!」

『『ぎやああああああ!!』』

どこからか現れた鉄人が召喚獣を倒された生徒たちを次々に捕まえていく。

その中には当然、川神さんの姿もあるわけで、

「タイガーー!」

ちよつとした荷物のように運ばれていく。

「アオやー!・達者でなー!!」

ナツルはそれを地面にひれ伏すというすごい芝居がかった仕種で見送った。

オイオイと泣いてる様子は、心から別れを悲しんでるように見えるけど、ナツルがやると途端にうさん臭くなるのはなんでだろう。

っていうかアオってだれ?

川神さんの姿が見えなくなると、彼はすぐに起き上がる。

「…あいつに必要なのは武力よりも知能だと俺は思うな」

なにげに酷い。

ミシッ……ギギギ…

「ん?なんの音だ?」

島津君が急にキョロキョロしだした。

なにかあったのかな?

ミシミシミシッバキッ!!

「うおあ!？」

突然島津君が視界から消えた。

『うわっ!』

『こっ、こんどはなんだ!？』

いや、消えたんじゃない。床に穴が開いて下に落ちたんだ。

その証拠にあちこちにひびが拡がって、次々に人が落ちていく。

「ちよつ、ちよつと!なに、どうしたの!？」

「ただでさえボロいのにこんだけの大人数がばたばたして、揚句にさっきの一撃だ。そりゃ崩れもするわな」

あわてふためく島田さんとは対象的に、ずいぶんと冷静だねナツル。

「みなさん!急いで避難してください!」

高橋先生が大きな声で叫んだけど、それはちよつと遅かった。

その指示が出たときには本格的に床が崩れ、僕らは落下する。

「うわあっ!!」

そんななかで僕が見たのは――

「は――!!」

――床の破片を蹴つてもといた階に戻ろうとするナツル。

「君ホントに人間!？」 少なくとも同じ高校生とは思えないんだけど!

☆

★

☆

↳ 瀬能Side↳

「秘儀、岩石なだれわたりの術」

スタットと無事に3階に戻り、しばらくその場に片膝をついてうずくまる。

立ち上がりながら少しだけ付着したブレザーの埃をかるく叩いて落とし、後ろを振り返る。

落ちたつつつても下の階なんてすぐそこなんだから、とくに心配する必要はねえだろ

「心配なのはむしろ……」

再び後ろを振り返る。

『オイあいつ…崩れた床から這い上がってきたぞ』

『でたらめな奴だな…』

好き勝手言いまくっている奴らをざっと見渡すと、その全員にDクラスのバッチ（見分けるために全校生徒は胸にクラスバッチをつけてる）が

軽く見積もっても15人くらいはいるかな

「……………いっしょに落ちた方が楽だったかなあ……」

味方いねーし



## 2時間目 聖魔支配剣、さとうきびセイバー

前回のあらすじ

魔王・ユダとの決戦に辛くも勝利したアルフ。しかしそれは、新たな戦いの序章でしかなかったのだった…

「おい全然ちげーぞー！どこででつちあげたあらすじだ!!」

☆

★

☆

くナツルSideく

問一

一般的に考え、一人の人間が一度にあいてにできる人数を答えなさい。

こんな問題出されたところでみんな適当に2・3人で答えるだろうでも実際はそうはいかない。普通に考えりや人間のスペックなんて似たり寄ったりだ。なので答えは一度に一人が限界、が正解。

つまりなにか言いたいのかと言うと――

『どうする？誰がやるか決めるか？』

『あたし今日早く帰りたいんだけど』

『めんどうだから一気に全員で叩こうか？』

瀬能くんは軽くピンチです。

そして好き勝手ほざくコイツラに憤慨しています。

『試獣召喚！』

『試獣召喚!!』『試獣召喚！』

皆次々に召喚獣を出してくる。

当然か、相手は学年最低クラス。その上一人だけだもんな

そして俺もそろそろ召喚しなくちゃならん。だってそうしないと戦闘意識無しとみなされて戦死扱いにされるから。

流石に戦わずして負け扱いにされたくはない

武器がアレだから見せたくはなかったがそうも言ってもらえない。こうなったらもうどうとでもなれだっ

「試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚ッ」

掛け声と共に描かれる魔法陣。そしてそこから現れる召喚獣。その格好は

四本の腕

四本の足

着物装束

人形のような顔立ち——ってかまんま人形

『びっ…日●号だー!!』

違う意味で見せられなかった。

その場にいた生徒（状況が分かってない奴は除く）全員が思わず叫ぶ。

教師陣はなんのことか分からないらしく「？」マークを浮かべていた。

ってあれ？ここは格好普通で武器がアレで、そんで俺が「ハンディモップじゃねえかあ！」って叫ぶところじゃないの？

まあ尺の都合でカットされたんだろう。あまり気にしないで先に進める

「文月学園に赴任して結構経ちますが…このように変わった召喚獣は初めて見ますよ」

立会いの教師が苦笑いしながら呟く。そりやそうだろうね

あらためて観察すると髪型と髪の色は俺と同じで、大きさも召喚獣サイズ。尖んがった耳と獣尻尾もある。

絵とかにしたら著作権にひっかかるか、それはとても微妙だ。(小説でよかった)

しかしなんかちよつと違和感があるな…

って持つてる刀が一本づつちげー!!ギルガメツシュカテメーは!

「ひっ・怯むなっ!見た目はアレだが同じ召喚獣に変わりは——」

『対象、確認』

「しゃっ…喋った!」

いち早く正気に戻ったDクラス生徒が声を発した途端、そちらに顔を向けるからくりモドキ。…なんで喋るの?しかもオリジナルと台詞ちげーのがそこはかとなく怖いんだけど

「なんかもうどうでもいいや、いけっピヨリ号!」

流石に名前言うのはアレなんで多少変えとく。一気に弱そうになっただがな

『人形殺法・竜巻』

『ぎゃああああ!!』

四本の腕を振り回し、四方八方を斬りつけながら相手に突進するピヨリ号(仮)。すげえ、今ので半分近い召喚獣が一気になます切りにされた

なぜか数体だけ胸に『おきなわ』と刻まれて消えていくんだが、いたいなんてなんだろう

……よく見たらこのピヨリ号、一本だけ刀のかわりにさとうきび持つてる。なんで?

『聖魔支配剣、さとうきびセイバー』

もう全然意味が分からないよ。また喋ってるし

頭を抱えたくなくなるが、そんな俺に構わず、行動したことにより表示される点数。それを見て周りが一気にどよめいた。

Fクラス 瀬能ナツル

現代国語 213点

『なっ……こいつホントにFクラスか?!』

『一対一じゃ不利だ！まとめてかかれっ！』

現国は結構解けたからな。この点数は俺の教科の中でもトップクラスだろう。

代わりに……とは言わないが英語は酷いもんだがな

『』『』『瀬能覚悟ッ!!』『』『』

「あまいわっ、ピヨリ号ー」

『人形殺法・つむじ風』

囲んで襲い掛かってくる敵に対し、こちらは前後左右にそれぞれ一本ずつ腕を伸ばした状態で配置する。

そしてそのままフアンのように刀を回転。なんか扇風機みたい

『』『』『ギヤアアアア!!』『』『』

『くっ……!』

向かってきた5体中4体は斬り下ろす。が、残りの1体は踏み止まり難を逃れた。

でも自分、見逃すほど優しい性格してないのよね。

すぐさま召喚獣を動かす。まず四本の足のうち前二本で相手を挟みこみ、後ろ足で上空にジャンプ。

『なっ……なにを!?!』

本体が悲鳴のような声を上げるが無視。ある程度ジャンプしたところで相手をロックしたまま下敷きにして回転、すると当然錐揉みしながら落ちるので、手にもった刀をとどめと言わんばかりに突き刺す。

『人形殺法・乱気流』

ズザンツ！とすごい音がした。タービュランスよりもダウンバーストって感じだな。

「戦死者は補習ー！」

またしてもどこからともなくやってきた鉄人が点数が0になった奴らを引きずっていく。10人位いるのに全員を一度につてすげえ怪力だな…

『い…嫌だつー助けてくれえええ！』

『なんで俺がああつー！』

『瀬能オオ貴様アア！』

「俺のせいだよ」

まあそうなんだけどね

しかし強いぞピヨリ号、俺のイメージ通りの技を撃ってくれるし。

今も

『人形殺法・疾風』

『うわ、こつち来たつー！』

『くつ・くる——ぎやーつやられたー!!』

刃がある方を外側に四本の刀の切っ先を合わせ、突進・粉碎している。無表情なのが余計恐怖感を煽るな…

十数体いたDクラスの雑兵どもも気づけば残りは数える程度。

坂本には無理に勝つ必要ないって言われてるけど、別に全滅させても構わんよな？

「よっしやー、ピヨリ号！なんでもいいから一発派手なかましてやれ!!」

あらかた戦死させて相手がいらないけど指示を出す。テンション上がってきたぜー！

適当な指示を出されたピヨリ号は、なにを思ったのかすべての刀を身体に収める。

ってえ？なにしてんのこの子？

そのままくりんと顔を変え——って顔を変え!?

なんかウオーズマンスマイルみたいになつたぞ!?こんな機能召喚獣にあんのか!?

『うおっ!?なっなんだ!?!』

すぐにピヨリ号は自分の近くにいた召喚獣に4本の腕だけを使つて組み付き、足をヘリのプロペラみたく回転させて飛んだ。

これは…間違いない、全部腕だから分かりにくいけど、あの体勢はパロスペシャルだ!!

『なっ、なにをするつもりなんだ!?離せっ、離せー!!』

生徒のひとりが大声で叫んでいる。きつと捕まっている召喚獣の本体だろう。

でも俺に言っても無意味だぞ。俺もなにが起きるか見当もつかんからな

バキボキバキツ!!

急に上空から骨が折れるようなおとが聞こえた。

見ればピヨリ号が空中で捉えた召喚獣の腕を関節本来の方向とは逆に曲げている最中だった。

……エグい

思わずそんなこと考えたが、こんなのはまだまだ序の口だった。

ピヨリ号は空中に浮いたままにもかかわらず足の回転を止め、身体が落下するのを気にもとめずに体勢を変える。

あれは…オラップだ!しかも魔界のプリンスが使ってた方!

どぐしヤツツ!!

二体はクラッチを決めたまま・決められたままの状態で綺麗に着地

した。

もつともそれで無事なのはピヨリ号だけで、相手の方は手足の関節が捻じれた枝みたいになってるけどね。

ピヨリ号はゆっくりと技を解き、相手を踏み潰してその場を離れた。

ちよとした残虐ファイトを見たせいかな、あたりに微妙な空気が流れます。

しかも全員俺を見つめてくるし…居心地が悪いのなんの  
なんか言った方がいいかな

「んっんん！えー…」

なんという無軌道無慈悲な行い！お前はルール無用の悪魔超人なのかー！！？」

「テメーがやらせたんだろーうが！！」

違うよー、オートで動いたんだよー、すべて秘書がやったんだよー

「相変わらず無茶苦茶な野郎だなテメーは…」

「ん？」

遠巻きにこちらを見ている群集をかき分け、ゆっくりと近付いてくる人影がひとつ。

誰だ？実力以前にさっきのファイトを見て戦い挑んでくる根性あるヤツがいるとは思えんが…

「久しぶりだなあ、ナツル」

「お…お前は——！」

3時間目 違いますっ、果たし状じやありません！」

「おっ・お前は！」

人垣を抜けて現れた奴の正体は！

続きはWebで!!

「ここがすでにWebだボケえツツ!!」

「ゲブちょッ!?!」

突然腹部に強烈な痛みと小規模な爆発が生じた。

こっつ…この衝撃は…!間違いねえ、詩織特性のバーストフレアボム・改(3号)!!

あまりの威力に食らった奴は三日三晩生死の境をさま迷うと言われる禁断の弾丸!

俺も結構身体に自身はあるが(強度的な意味で)初めて使われた時は昏倒しかけたぞ

…こんな作り手すら使用を躊躇う危険弾<sup>モン</sup>簡単に撃つ奴、ひとりぐらいしかいねえよ!

「てっ、テメエ…:…茜か…!」

「元氣そうだなあナツル」

皮肉か?今お前のせいで体力がピンチなんだけど

美嶋茜<sup>みしまあかね</sup> 同じ中学出身の友達。(向こうはどう思ってるか知らんが)

こいつと俺、あと一人加えた三人が梅の木二中の三羽鳥のグループ名で呼ばれていたわけだ。

「髪の色から『危険地帯の信号機』とも呼ばれてたけどな」

俺それ嫌いなんだよね



「お前……この学校に入学してたのか……？」

一緒に学校見学したときに確か、「ここは気に入らねえ！」とか言っていたし、まる一年音沙汰なしだったから別の高校でエンジョイしてるんだとばかり思っていたけど……

「入ったんなら連絡のひとつでもくれりゃいいのに」

「はっ、てめーこそメールの一つもよこしてねえじゃねえか。お互いさまだ」

変わってねえな。こいつとは中学からのつきあいだが、機嫌悪くなる腕組んで目をつむるクセがある。今まさにそれをやってる最中だ。

しかたない、小意気なトークでもして和ませるとしよう

「そーいや、あの彼女はもうしてんだ？ほらあの告白してきたって――」

「死ねエエツ!!」

いきなりパンパンツと銃声があった。引き抜きから発砲まで数秒かかんなかったぞ。クイツクドロウってやつ？

ちなみに撃つたのは当然茜。中学時代常にエアガンを所持し、『赤鬼』『トリガーハッピー』のあだ名で恐れられていたちよつと危なくななりイタイ女の子。それが美嶋茜

「……痛い痛いっ、痛いって!!」

説明中も容赦なく撃つてきやがって、いくらブレザーの上からつつつても痛いものは痛いぞ。

「先生……教育に必要な物を持ってきてるけどいいのツ?」

質問しながらもパンパンツと背中にBB弾が何発も当たる。なんとか衝撃を減らそうとしゃがみ込み丸まって耐えるが、射的の的にみてーなあつかいだ。

現国の教師は俺の言葉を受けて茜を注意しようとするが、それより早く。

「護身用だ。不要な物じゃない」

「それなら許可します」

「オイ待てやコラ」

あつさり認めやがった。そもそも護身用を何もしてない奴に使っていいのか？

「問題はありません」

チクシヨウ：！発キツスは告白された相手のくせに！

そう思った瞬間当たる弾の量が2倍に増えた。

「イテイテいてててててッ！」

思わず地面を転げ回る。クソッ散乱したBB弾が地味にいてえ

「今、なんか考えただろ」

ドスの効いた低音で確認される。なんて勘の鋭い奴だ：！でも真実だし。

「美嶋さん、廊下に転がったBB弾を踏んだりしたら危ないのでそろそろ止めてください。あと掃除などはきちんと自分でするように」

なんでもない風にサラつと言ったが、生徒がいじめを受けてる現場を目の当たりにしてそれはねーんじゃねーの？

神経細い奴だったら登校拒否するなりひねくれるぞ。

「ところでお前なにしにきたんだよ。あいさつ？」

立ち上がり服についたほこりなどをはたく。茜は目を吊り上げたままニヤツと笑って

「おいおい、今は戦争中だぜ？戦いに決まってるんだろ！」

ですよねー

「試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚<sup>モン</sup>ッ！」

あーあー張り切っちゃってまあ、でも相手が挑んでくる以上、やらないと敵前逃亡と見なされるからな。

「しゃーねーなー。こいよ、遊んでやるぜ」

ずっと出しっぱだったピヨリ号を、取り敢えず近くにこさせる。

「はッ、強そうな召喚獣だな」

対する茜の召喚獣は目つきの悪さそのままに改造制服を着込んで二丁拳銃を持っている。ミニバージョン姿のまんまじゃん

「ハチの巣にしてやるぜ、ナツル」

「そりや無理だな。日本刀の切れ味は世界に誇れるから」

「銃は剣より強しって言葉知ってるか？あとテメエのは日本刀じゃねえだろ」

「トリ●アでやってたけど拳銃は剣に勝てなかったぞ。そして俺のは立派な刀だ」微刀という名の

.....

「オラあッ!!」

「しやらくせえ!」

お互いに口撃戦じゃ埒があかないと悟り、ほぼ同時に召喚獣に指示を出す。

茜の召喚獣は向かってくるピヨリ号に（当たり前だが）物応じた様子もなく、拳銃を構え銃口をこちらに向ける。

そしてある程度の距離まで迫った瞬間、引き金を引いた。

ガチッ

撃鉄が落ちる音はたしかにしたが、それだけだった。

Fクラス 瀬能ナツル

現代国語 216点

VS

Dクラス 美嶋茜

現代国語 121点

ぶつちやけコイツの点数じゃ弾は出ないみたいだ。

拳銃の意味ねーじゃん。ただのごついメリケンサックじゃん

「見かけ倒しにもほどがあるだろ」

「うるせー黙れ!!」

茜は顔を真っ赤に染めながらも、ひとつだけの武器を振り上げて殴りかかってくる。

なんかちよつと可哀想に思えてくるな  
まあ加減なんてしないんだけどね！（当たったら痛いし）

「おらあッ!!」

向かってくる茜（の召喚獣）に左前足でケンカキック。

すると都合よく武器を手離したので、すぐに左後ろ足を勢いよく振り回し、宙に舞う拳銃を相手に向けて蹴り当てる！

「自爆の極み!!」

「なっ?」

残念ながらジャストミートはしなかったが、肩をかすめたので多少は点数を削れた。

同時に茜の召喚獣は体勢を崩している。このチャンス、逃しはせん！

「ピヨリ号！追撃だ！」

俺の指示を受け、ピヨリ号は無手の（そういえば武器を持たず命令を出していなかった）右腕を肘の関節ごと左回転し、左の腕も関節ごと右回転させる。

その回転による圧力により生まれた真空状態の圧倒的破壊空間！

「食らえ必殺・神砂『Dクラス代表、平賀源二！討死つ!!』あら……し……」

唐突に入った朗報に今まさに作られていた砂嵐が霧散していく。

それと同時に遠くから聞こえてくる喜びの叫び。多分Fクラスのものだろう。この戦争は俺らの勝利で終わったようだ

なぜだろう、素直に喜べない。

でもいいさ。うちのクラスが勝った、それでいいじゃないか……ねえ？

パンパカパーン。

称号獲得！

「ん？」

いきなりファンファーレが響いたので召喚獣を見ると、点数が浮かび上がるような感じで文章が。何々：

Fクラス 瀬能ナツル

称号 撃墜王

「おお、なんかカッコイイ」

この称号システムは試召戦争に勝ったクラス。もう少し詳しく言えば活躍した何人かが得ることが出来るのだ。(ただし戦死者にはつかない)

別についたからって強さとかに影響はない。あくまでも点数が戦力値だからな。

この称号システムは製作者の遊び心みたいなもんなんだが：あつた方がなんかうれしいだろ？

活躍するためには頭を使うなり点数上げるなりしなきゃならんかな、学園側にとっても都合がいいんだろ。

今回は倒した敵の数が一番多かったんだろうな。：一部倒しきれなかったけど

「チツ、負けちまったか」

召喚フィールドが消え、召喚獣もいなくなったところで、茜が口を開く。

「これで明日から最低設備か…。ツイてねーぜ」

「それでもねーんじゃねーの？」

多分

「あ？そりやどうゆう意味だ？」

「まあいいじゃん：それより早く掃除しろよ」

転がったBB弾がトラップアイテムみたいで動きにくいだろ

「かったりい…。ナツル、手伝え」

「ふざけろ」

誰がするか

その後しばらく、箒で掃き掃除をする茜をたまに茶々を入れながら見てた。

キレた茜にエアガン乱射されたので慌てて逃げたが、彼女の下校時間はまだまだ先になることだろう。

く明久Sideく

「やれやれ、教科書忘れるなんてツイてないなあ…」

教室の前でため息をつく。帰り道で気付き、急いで戻ってきたけどもう誰も残ってないはず。

「たっだいまくなーんて…」

軽いジョークを言いながらドアを開けると

「…ッ!? よっ、吉井君?!」

シャーペンをにぎりしめ席(ちゃぶ台)に座っている姫路さんが。そのちゃぶ台の上にはかわいらしい感じの便せんが置かれている。

「あ・あのっこれは…えっと…!」

わたわたと両手を振って慌てる姫路さん。あーもうかわいいなあ…。

つといけない。少しトリップしてしまった。とりあえず今の状況を確認しよう。

夕日が差し込む教室。

シャーペン片手にわたわたしている姫路さん。

天井に張り付いているナツル。

「…ってナツル?!」

「ふえっ?…せ・瀬能さんっ?!」

「やっど気付いてくれたか…」

ちょうど、姫路さんが使っている席の上あたりの天井。そこに手足を広げ、忍者のようにへばり付き僕らを見下ろすナツル。

姫路さんが急いでちゃぶ台等をどかすとスタツと降りてきた。

「せ…瀬能さん、いつから…?」

「昔の知り合いに偶然出会ってな、話し込んでたら遅くなっちゃまって」  
手足をぶらぶらさせて続ける。

「鞆取りに戻ったら姫路が入ってきたもんでな…思わず天井に」  
「おかしいよねそこ絶対」

普通は掃除ロッカーに隠れるとかのはずなのに、なんで天井に逃げ  
るんだろう。やっぱりこいつはバカだ。

「なんか真剣<sup>マジ</sup>つぽかったから邪魔しちや悪いと思って…地味にきつ  
かった」

「あ…あのつ瀬能さん！」

ちやぶ台を綺麗に列べ直してた姫路さんが、最後の一つを動かし終  
えたところで大声を上げた。そんなことしなくてもいいのに、律儀だ  
なあ…。

「なに」

「えと…わ・私を書いてた手紙…」

なぜかそこで僕の方をチラチラと見る。はて…？

「手紙？あああの——果たし状か」

「姫路さん、そんなに憎い奴がいるなら言ってくれば——」

「違いますっ、果たし状じゃありません！」

「ジョークだよ。あれだろ？なんか『あなたが好きです』とか書いてた  
やつ」

「は…はわっ！」ポフツッ！

「ひっ・姫路さん！顔が一気に真っ赤になったけど大丈夫なの？あと  
ナツル今言ったのって…」

「教室でそういうの書くの止めた方がいいと思うぞ。…：…考えてるこ  
と口から出てたし」

「!!」?

ナツルが珍しくすまなそうな顔付きで言うと、姫路さんは顔どころ  
周りの空気すら真っ赤に(?)染めて、大慌てで荷物をまとめ逃げる  
ように去っていった。余程恥ずかしかつたんだろうな…。

「くっ…雄二のどっこがそんなにいいんだ…!!」

思わずハンカチを噛み悔しがる僕。あんな人を人と思わない外道

のどこが…！

「……………ハア」

なぜかナツルに「このバカはまったく…」みたいなため息をつかれた。

「このバカはまったく…」

「なにも言わなくてもいいじゃないか！」

「事実だろうに…。もういいから帰るぞ、明日も戦争やんだろ？」

帰って勉強だ、と言って鞆を持ち教室をあとにするナツル。

あのナツルがあんなにやる気を出すなんて…。そうだ、半ば僕のわがままから始まった戦争だ。僕もやる気を出さなきゃ。

「よしっ、がんばろう！」

そう決意を新たに、教室をあとにした。

数十分後、教科書を忘れてたのを思い出しました学校に戻った。また家まであとちよつとのことだったのに…！



3、5時間目 とある男女間の会話 あるいは青春の  
1ページ

ザッザッ…

「つたく、なんであたしがこんなことしなきゃなんねーんだ」

「一から十までお前のせいだからに決まってるだろ…」

ぶつぶつと文句を零しながら箒でBB弾を掃き集める茜に、ナツルが壁にもたれ掛かるような体勢でツツコミを入れる。

「しっかしお前が文月学園(ここ)にいるとは思わなかったぜ。…もしかして詩織もいるとか?」

「詩織はお嬢サマ方が通う有名女学院にいったらだろうが。聞いてなかったのか?」

「そうだったけ?」

本気の面持ちのナツルに、茜は長めのため息を一つ。

「…てめえはホンット忘れっぽいな。脳みその代わりにメリケンサックでも詰まってるじゃねえの?」

「酷っ…」

言う程酷いと感じてはいないのか、軽い口調で笑う。

しばらくして物思いに耽るように

「あれから1年ちよいか…、どうしてつかないかな…」

「案外本物のお嬢さまになってんじゃないか?」

「沙織さん」

相原沙織。詩織の姉(19歳)

「あーゆー大和撫子って感じの人好きなんだよなあ、高嶺の花だけどそこがまた——」

「死にやがれッ!!」ビュッ!

「危なッ!?」ガスッ!

砕けると言わんばかりに投げ付けられた箒は、ナツルには当たらず背後の壁——ちょうど頭部があった場所——に激突した。

教室側にだからよかったものの窓際なら大惨事である。

「なにすんだよ急に」

「うるせえ！人の気も知らねえで…！」

「そういやお前、なんでこの学園入学したんだ？近いつて訳でもないだろ」

「なツ…!?!」

瞬間的に顔を赤く染める茜。

「それは…だな、えつと……」

「ああ、いい。皆まで言うな」

しどろもどろになる彼女を前に、ナツルはなにかを悟ったかのようにふっ…と微笑む。

「え…」

「貴様俺を撃ちに来たんだろう、この鬼め！」

ブチッ

「お望み通りハチの巣にしてやらア!!」

四次元から取り出したかのように手の中に出現したエアガンが火を噴き、あたりにBB弾を撒き散らす。

「イテテテテテツ!!じよ・冗談つ、冗談だつて！」

「うるせえ！死ねっ!!」

怒りの形相で乱射、しかも的確に弾を当てられ、ナツルは大慌てでその場を後にした。

瀬能ナツル——。モラルとデリカシーが足りないかなり残念な高校男子。

## 4時間目 野郎に向ける愛などない

翌日。ナツルはいつも通り一人で登校していた。

天候は晴れ。穏やかな春の陽射しが温かく降り注ぎ、爽やかな風が吹き抜けていく。

今日はいいことありそうだ：ナツルはそう思った。

「瀬能。ちよつと」

「は？」

学校の校門に到着した途端、呼び止められた。学園で生徒指導を担当している教師（独身）だ。嫌味つたらしくてほとんどの生徒からは嫌われている。

その面持ちを見る限り、彼に『いいこと』が訪れるのは当分先らしい。

☆

★

☆

くナツルSideく

「直江ヤマトおおおツツ!!」

ドガツゴウツ!!

「ばやらすっ!?!」

勢いよく教室の戸を蹴りやぶり、中に押し入る。

その際蹴つ飛ばした戸が名も知らぬクラスメイトに激突したがそれは些細なことなので取り敢えず無視するとしよう。

「そこを動くなああああ!!」

席の最後尾、窓ぎわでゴリラ（※島津）たちと雑談してたであろう標的を見据えると、左腕を水平に伸ばしリアットの体勢を作る。

あとはこれを喉元につきたてりや俺の目的は達成される。壁まで：いや壁をぶち破つてふっ飛べ!



「仕方ないだろ。全員落ちてたなら老朽化つてことどうやむやにできたのに、お前一人だけ落ちなかったんだから」

悪びれもせずたんたんとして説明をする直江。落ちなかったんじやなくて飛び登ってきたんだけど

「それとも真実を話した方がよかったか？ワン子が気を飛ばして壊したって」

「え？それは……」

………

まあ

いいか。

朝からちよつと不快な気分させられた以外は『常識を問われたくないランキング』の1位になったくらいでとくに被害はでてないし。ランク1位も遅かれ早かれなつてただろうから無問題だ

決して、妹分的なワン子を気遣っているとかそんなことはない。断じてない。そこんとこ勘違いしないように

「おいコラ直江、テメーなににやにやしてんだ。ぶん殴つぞ」

「いや、ナツルのそういうところゲンさんにそっくりだなと思つて意味がわかんねえし。誰だよゲンさんって」

☆

★

☆

昼休み。

「うゝゝあゝゝゝ」

午前中のテストがすべて終わり、吉井は机に突っ伏した。

「もうつかれたよ…帰って休みたいなあ…」

「勝手にすりやいいだろ。困るのはためーだけだけだな」

「ナツルその言い方は愛がないよ…」

野郎に向ける愛などないわ

「よっし、学食に飯でも食いに行くか。みんなはどうするんだ？」

「わしも行こうかのお」

「……（コクコク）」

「弁当持ってきたけど白米が恋しいから俺も行く」

「あつウチも行つていい？」

坂本の台詞に秀吉・土屋・島田が同行の意を示したので、ついでに俺も乗っておく。

直江たちは…いないみたいだな。先に学食に向かったか？

「それじゃ僕もソルトウォーターを…」

それ普通に塩水だろ。

「あ…あのっ！」

一斉に移動しようとしたが、それに待ったをかけるように姫路が大声を上げた。その手にはどう見ても鞆には入らなそうな重箱が。

「昨日の約束通りお弁当作ってきたんですけど…」

「えっホント?!」

「…迷惑でしたか…?」

明久がすごい勢いで反応したため、姫路は一瞬ビクツと怯える。しかしすぐに怖ず怖ずと聞き返してきた。

「そんなっ迷惑だなんてとんでもない!ねっ雄二」

「ああ、試召戦争もあるのに。悪いな」

「いえそんなっ。あの、瀬能さんもよろしかったら…」

「いいのか?」

「はいっ、…でも瀬能さんお弁当持ってますよね…」

「いやこれは——」

言いながら持つていた包みを解き、弁当の蓋を開け中身を見せる。かぼっ

「なにこれ、全部サンドイッチじゃない」

覗き込むように中身を見た島田が思わずそうもらした。

「あんたさつき白米が恋しいとか言つてなかった?」

「そういう日もあるさ」

人は皆矛盾を抱えて生きているのだから。

「ちなみにこのサンドイッチ、一個だけ生わさびをたっぷり入れたや

つが混じってる」

「ええっーなんで!？」

「口に入れた瞬間とんね●ずでたまにやるモジモジくんみたいなことになるぜ」

「だからなんで!？」

「これ自分で食べるために用意したんでしょ!?! どうしてそんなリスクの高いことをするの!?!」

「俺の肉体と精神は時たま所持者の意思を離れて行動するからな…」

意識はあるはずなのに訳の分からんことばかりする。

多重人格とかじゃないんだろうが、原因は不明だ。精神科の医師にもサジを投げられた

「…そっ・そうじゃ、どうせ弁当を食うなら屋上で食わんかの？」

しばし微妙な空気が場に流れる中、それを払拭しようと木下が口を開いた。

「そ…そうねっ、そうしましょ？」

「じゃあ先に行って場所を確保しといてくれ、…飲み物買ってくるから」

どんなことを言えばいいか分からない。そんな感情が読み取れる程困惑した顔で提案に乗る一同。

こいつら結構いい奴なんだな

「坂本、一人じゃ持ちきれないでしょ？ウチも手伝うわ」

「あつ俺も行くわ。好きなもん買いたいから」

弁当箱を抱えて二人のあとに続く。

「…どうでもいいがお前や吉井たちは君付けなのになんで俺だけさん付けなんだ？」

「それって瑞希のこと？…そう言えばなんでかしら？」

「まだ完全に心を開いてないんじゃないか？それで無意識にさん付け

「なつてるとか」  
「軽くへこむなそれ…」



## 5時間目 特別ルール

（島田Side）

「ちよつと瀬能。早くしなさいよ」

三つ位連続で並んでいる自販機、そのうちの一台の前を瀬能が陣取っていた。

もう数分近く自販機に両手をつけてうつむいているんだけど、正直邪魔な上知り合いに思われるのがすごく恥ずかしい。

「…もう少し、もう少しだけ待ってください」

ずっと目をつむっているけど、いったいなにがしたいのかしら

「（ピツ ガコンッ）なんでもいいからさっさと決めなさいよ、他の人に迷惑がかかってあつツ!？」

ジュースを買って、それを取り出し口から取り出そうとしたが、予想してた温度と違っていたので思わず取り落としてしまった。

なに？なんでフ●ンタがこんなに熱いの？

ウチの突然の行動に、缶ジュースを抱えた坂本が声をかけてくる。

「どうした島田、どうかしたのか？」

「ううん、なんでもないわ。ただちよつとフ●ンタが熱くて…」

「これか？」

瀬能が自販機と向き合うのを止めて、転がってた缶を拾う。

「…これフ●ンタじゃないぞ」

「へ？」

フ●ンタじゃないって…じゃあいったいなんなのよ。

気になってラベルを見ると

『いつでもあつつくい、川神水!!』

って書いてあった。

……………なにこれ。

「業者が入れるとこ間違えたみたいだな」

「いやそれでもおかしいでしょ！どうして冷たい飲み物のところに  
入ってたのがこんなに熱いの!？」

「俺に聞くなよ…」

瀬能の返答はもつともだけど、納得はできない。

そもそも川神水ってなに!？」

「あつ、タイガ!」

「ああ?」

瀬能が振り向くのにつられるように後ろを向くと、同じクラスの

……川神…そう、川神さんが立っていた。

……これ（川神水）となにか関係はあるのかしら?」

「どうしたワン子。一人で」

「飲み物買いに来たの」

「学食にもあるだろ」

「壊れてたのよ」

「そうか……ならちようどいい。これをやろう」

そういつて瀬能は手に持っていた『川神水』を手渡そうとする。

…それウチが買ったものなんだけど。っていうかひとに押しつけ  
る気?」

「わーいありがとー!——ってアツアツじゃない!?いらないわよそん  
なの!!」

「ああ?わがままなやつちやな…」

やれやれと言わんばかりにため息をつく。

自分に言われたわけでもないのにちよつと、いやかなりムカつく  
わ。

「ならこうすりゃいいんだろ。はああつ!!」

——川神流・雪達磨!

パキイツ!!

瀬能の叫びと同時に突然、手に持っていた容器が凍った。  
「というか氷に包まれた？えっ、どうやったの!？」

「ほら、これでいいだろ」

「わーいありがとー!っつて中身が凍ってて飲めないわよ!？」

「そこは待てよ溶けるまで…。解凍しようとするとしてもやりすぎで蒸発するからな」

「どうなってるのあんた!？」

「気になる…ものすごい気になるけど、なんとなく怖くて聞けなかった。」

「ウチのクラスメイトは人間なのかしら」

「そうだ、川神。直江たちと一緒にだったなら屋上に集まるように言っておいてくれないか？次の相手について打ち合わせがしたい」

「坂本が会話に割り行っていく。」

「次のって…：試召戦争のよね？」

「結局Dクラスと設備の入れ替えをしなかったけど、次はいつたいたいどこに挑むのかしら。」

「それって急いだほうがいいの?」

「そうだな…：できれば、昼のこの時間をフルに使いたい」

「わかったわ!じゃあさつきタイガが使ってたので知らせてくるわね!」

「川神さんはすぐに後ろを振り向いて、クラウチングスタートの体勢を取る。」

「なんだよさつき俺が使ってたのって。なんかやってたっけ?」

「体育でやってたじゃない」

「は?それってもしかして…：ちよっ、ちよっとまっ!」「レディ、ごう!!」

ドンツ!!  
ドゴンツ!バキツ!!  
キヤーー!!

瀬能の静止を振り切って、文字通り目にも止まらないスピードで突然川神さんが消えた。

その直後に壁に人一人分の大きな穴が壁に空き、さらにその先の壁にも穴が……

これってもしかしなくても川神さんが空けたのよね?

「バカが……ちゃんと習ってねえ上にこんな障害物の多いところで瞬動なんてやりやがって……!」

瀬能はがつくりと肩を落とす。

もういちいち気にするのはやめようかしら。ついていけないし、きりがないから

☆ ★ ☆

「しかし島田もあれだな」

「え?」

買い物を終えて、飲み物を抱え屋上へ向かい歩いていると坂本が唐突に話し掛けてくる。

「いや、気のきく恋敵ライバルがいると大変だろ」

「なっ……なによいきなり?!」

思わず缶ジュースを握り潰すところだったじゃない!

「あ?なんだ、島田は姫路が好きなのか」

「あんたはなに言ってるの?!」

瀬能が足速に近付いてきてウチの後ろを歩く。気のきくライバルでなんでウチが瑞希のこと好きってなるのかしら。

「騒ぐなよいちいち……軽いジョークだろ?でも好きな相手にツープラトン決めるってのはエライ愛情表現だな」

「う…」

あれは…その…。

「正直嫌われる原因になると思うんだが。普通なら」

「お前はどうかんだよ」

なんて答えようか悩んでいると、少し前を歩く坂本が口を挟んできた。

「Dクラスにいる知り合いにエアガンで撃たれてたんだろ？」

「なんで知ってんだ？…まあいいや。あれはかなり前に照れ隠しと脳内裁判で可決されたのだ」

「ポジティブだな」

「それが健康の秘訣」

そう言いながら肩をすくめて階段を駆け上がり、ウチと坂本を追い抜く。その様子を見るかぎり嫌ってはいないみたいだ。

…なんかうらやましいな。

「おーす。遅れて悪いな」

屋上の扉を開け、坂本が吉井たちに声をかける。見えないけど。

瀬能が屋上に行った途端扉を閉めたからだ。

「ちよつと瀬能っ！ウチがまだいるのよ?!」

『おーこりやまた上手そうだな。一つもらうぞ』

『あつ雄二！』

『ほう…ならば俺はあえてこっちをもらおう』

『ナツルっ！』

扉ごしにみんなの声が聞こえてくる。なんかウチ一人だけ弾かれましたみたいで嫌な気分だ。

「ちよつと！両手塞がれてるんだから——」

ゴツ ガシャンガタガタガタガタ

ズズウ…ン ガタガタン

「？」

なにかしら今の音

☆

★

☆

（明久Side）

「ぎっ…坂本君に瀬能さん！どうしたんですかいきなり?!」

止める間もなく料理を口にした二人はすごい勢いで倒れた。それを見て慌てて近寄る姫路さん。

間違いない…こいつは本物だ…!

卵焼きを食べた雄二は、抱えてたジュースの缶を豪快にぶちまけ地面に激突した。ビクンビクンと痙攣してる姿を見ると震えが止まらない。

一方ナツルは熊が倒れたような鈍い音を立てた。が、雄二とは逆にピクリとも動かない。味がよく染み込んでそうなほうれん草のおひたしを一気に食べたからなあ…。

一緒に落ちた弁当と転がってくジュースの缶を見ると、どうしてもホラーやサスペンス物の番組の番組を頭に思い浮かべてしまう。

とそこで、今だ倒れて痙攣してる雄二が顔だけこつちに向けてきた。そして目で語りかけてくる。

『（毒を盛ったな…？昨日の仕返しのためかテメエ…!）』

毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ

昨日の復讐がしたくなかったと言えば嘘になるけど、ここまで強く望んではない。

というかナツルは大丈夫なのかな…？俯せのままずっと動かないんだけど。息はしてるのだろうか。

ガチャ…

「ふう、やっと開いた——って坂本に瀬能!?どうしたのよいったい?!」

いままで扉の外(?)にいて状況がまったく把握できてない島田さんが、屋上に来るなり大声を上げた。うん、僕も君の立場ならきつと同じことをしただろう。

「あ…足がつつてな…」

心配そうな顔をして駆け寄ってくる彼女に、雄二は多少いびつな笑みを浮かべて答える。

「あはは、ダツシユで階段昇り下りしたからじゃないの?」

「うむ、そうじゃな」

「そうなの?坂本って結構鍛えられてると思うけど…それに瀬能はどうしたのよ」

不思議がりながらもシートに腰掛け、ジューズを置く島田さん。余計なこと言う前に退場してもらった方がいいな。

「ナツルは疲れてるんだよきつと。それより島田さん」

「なに?」

「今君が手をついてるあたり、さつき虫を潰しちやっただよね」

「やだ、嘘っ!」

うん、嘘だよ。

でも島田さんは僕が言った瞬間、すごい勢いで地面から手を離れた。このへんはやっぱり女の子なんだなあ。

「早く言つてよもうっ!」

「ゴメンゴメン、下に行つて手を洗ってきたら?」

「はあ…そうするわ」

彼女はとぼとぼと肩を落とし屋上を後にした。

少し罪悪感が湧いて来るが、これも君のためだ。

「島田はなかなか食事にありつけんでおるのお」

「まったくだ」

ハハハっとみんなが笑い、その場に和やかな空気が流れる。表向きは。

『(明久!次はお前がいけっ!!)』

『(むっ無理だよ!僕だったらきつと死んじやう!)』

『(わしもさっきのを見たあとではのお…)』

『(……………危険…)』

姫路さんを除く全員とアイコンタクトで語り合う。付き合いが長

いからこそできる芸当だ。

そして全員が姫路さんの料理を食べることを拒否してる。無理もない、あのナツルですら一撃でKOを——ってそういえばナツルは？

「あ……あの……」

急に姫路さんが申し訳なさそうな顔で声をかけてくる。

「すみません……お弁当、瀬能さんが全部食べちゃいました」

「え？」

確かに、目の前の重箱は全部空だ。

でもあんな必殺料理を自ら食べるなんて……もしかしてナツルは姫路さんのことが好きで……？

「止めたんですけど、『ウヒヒ、もう少しでシンリが……』とかつぶやきながらすごい勢いで……」

ちがうこれ錯乱してるだけだ!!

その証拠に今もおぼつかない足取りであっちこっちさ迷っている。彼はもう駄目かもしれない。

「も……もうッ、ナツルったら食いしん坊だなあ。あ、そうだ。食いしん坊と言えば昨日テレビでグルメ番組やっててさ」

「あ……ああ、あれか！そういうや近所の店が紹介されてたな」  
「そうなんですか？」

冷や汗をかきながらも多少強引に話題を変える。姫路さんが「今度は皆さんにも食べてもらえるよう、多めに作ってきますね」とか言わないための配慮だが、うまくいったようだ。雄二のフォローもあったからだろう。

「今度みんなで食べに行こうよ。ナツルと雄二のおごりで」

「テメ……ふざけんなっ」

幸い姫路さんは料理の話はせず、しばしほのほのとした時間が流れる。



けて視界の端で混乱の舞を踊るナツルを気にしてはいけない。

「あ、そういえば…」

「ん？どうしたの？」

急に鞆をつかみ、ごそごそと中身を探る彼女。なんか嫌な予感…

「はいっ、デザートがあっただんでしたっ」

「えっ!? ナツル、まだ食べたらないの!？」

「まて明久！いくら瀬能でもこれ以上はマズい!!」

とつきにナツルに食べさせようとするが雄二に止められた。

くっ…でも確かに、立ったまま小刻みに震えて「コワレル…壊れる…?」とかぶつぶつ呟いている姿を見たら流石に危険かもしれない。いろいろな意味で。

「?瀬能さんはどうかしたんでしょうか？」

「っ…疲れておるのであろう! 昨日の試召戦争では八面六臂の大活躍と聞いたからの!」

謎な行動を取るナツルを不思議に思いながらも、手に持っていた容器をシートに置き彼を見つめる姫路さん。今だ!

『(おらあっ!!)』

『(むぐばっ!?)』

容器の蓋を素早く開け、中身を一気に雄二の口に流し込む。油断していたようでうまくいった。

そのまま口を押さえ、顎を掴んで咀嚼を手伝ってやる。僕って優しいなあ。

「…き…鬼畜…!」

ムツツリーニが若干震えながら小声で言ってくるが気にしない。

ついでに雄二も白目むいて震えてるけど気にしない。

「ただいまー——つてなにこの状況?」

「おーすっ、来たぜー」

「やあ」

「……………」

タイミングよく島田さんが戻ってきた。

なぜか直江君たちと共に。

「あらっ? みなさんどうして…?」

「来る途中に出会ったのよ」

「ワン子から坂本が呼んでるって聞かされてな。なんでも次の戦いについて話しがあるとか…」

代表して直江君が理由を説明する。

雄二を見ると、頷いて返してきたので間違いはないみたいだ。

「……………ところでナツルはいつたいなにをしてるんだ?」

そのまま屋上の片隅でカクカクと…ロボットダンス?を踊る彼を指差して尋ねてくる。

多分、この先ずつと分からない方がいいと思うよ。

☆

★

☆

くナツルSideく

「瀬能、いい加減帰ってこい」

「ぶべらっ?!」

突如頬に衝撃が、それと同時に覚醒していく頭。

「……………? ここは…どこだ…? 私は…なんだ!？」

「劇場版はいいから。次の戦いに向けて作戦会議だ」

言われてやつと正気に戻る。そうだ、今は昼休み、場所は屋上、オラは人気者。違う、瀬能ナツル。

よし、俺は正常だ。なんでそう思ったのかは知らんがとりあえず正常だ。

しかしなぜか違和感を感じる。辺りを見回すとどこも無く心配そ

うな視線を向けられてた。

「なあ、なんかあったのか？少し前までの記憶がないんだが」

「知らない方が幸せなことがあるって…本当なんだね…」

「あ？」

吉井、なぜ急に遠い目をしてそんなこと言いだすんだ？

しかも他の何人かがそれに同意するようにうんうんと頷く。なんなんだいったい

「ねえ瀬能。悪いんだけど…あなたのお弁当わけてくれない？」

そう言いつつ、島田が手に持ってた俺の弁当を軽く掲げる。いつの間に盗ったんだ

「お昼食べてないのよ…ね、お願い」

「好きにしろ。そのかわり俺も食うから残しとけよ、胃がぎゅうぎゅう詰めのはずなのに何か口に入れたくてたまらん」

飲み物でもいいんだが変なの買っちゃったからな

「…口直し、かのう……」

木下、その言葉の真意を聞きたいんだが

「モグモグ…ブホッ！かかか辛っ、ていうかもう痛い！」

「あ、吉井当たり引いたな。無断で食うからそうなるんだ」

「食べていいって言ったじゃん！イタタ、しゃべると痛い!!」

「当たりは一個だけのはずだから他は大丈夫だな。ひとつもらうぞ」

「いっただき、…モグモグブホッ!?辛<sup>かれ</sup>えってか痛<sup>いて</sup>え!?!」

「今度は島津が!?!」…一個じゃなかったか」

ぶつちやけ何個入れたか忘れちゃったんだよね

☆

★

☆

「…そろそろ本題に入っていないか？」

痛い目にあっただにも関わらず、弁当箱に手を伸ばしてくる吉井を引

き離しながらサンドイッチを食っていると、坂本が呆れながら訊いてくる。そういうや会議するとか言ってたな

ちなみに激辛の被害者は合計三人だった。どうでもいいが

無言で促すと腕を組み、なんか偉そうな感じで話し出す。

「まず最初にこれだけは言っておこう。Fクラスの戦力でSクラスに勝つのは、無理だ」

「え？」

この場面でそれ言っちゃうの？

いやまあね？俺もDクラス戦終わった辺りからそんな気してたよ？被害けっこう大きかったみたいだし

でもだからってそれ言うかね…まあ直前でぶっちゃけられるよりはマシだけど

「どんな作戦を立てても、代表を倒せない限り勝利はない」

「それじゃあどうするのよ？目標を他の上位クラスに変えるの？」

島田が疑問を口にする。

「いや、そんなことはしない。今まで通り最終目標はSクラスだ」

「雄二、意味が分からないよ。勝てないのが分かっているのに、なんで狙うのさ」

迷わない坂本の台詞に、吉井がツツコミを入れる。

「クラス単位では勝てないだろうって意味だ。個人の力量だけを見れば、むしろ勝ってる奴の方が多い」

「つまりあれか？戦争仕掛けるんじゃないやなくて、サシで挑もうと」

「そういうことだ」

……確かにそれなら、普通にやるより勝率はグンと上がるだろう。でもなあ…

「でも代表、どうやって一騎打ちに持ち込むつもりなのさ。向こうは

それをするメリットなんではないでしょ？」

モヤシが口を挟んでくる。

そう、問題はそこだ。

あつちは学年最高の成績優秀者の集まり。こっちはバカ共の寄せ集め。

戦争受けるだけでも億劫なのに、一対一で戦うなんてこと、してくれるとは思えない。

「ただ交渉するだけなら無理だろう。だから今回は、特別ルールを使う」

特別ルール？なんだそりや

「……そうか、その手が……」

「？ 大和、どうかしたの？」

「考えたな坂本。これは……いけるぞ！」

直江が興奮した様子で食いついてきた。

なんなんだよいったい

「神月学園の名物でもある、試召戦争特別ルール。その名も

”決闘”システム。これを使う」

## 5、5時間目 物語の間の何気ない1ページ

モロ「そういえば、ワン子が”氣”を使えるのってタイガのおかげなんだよね」

タイガことナツル「そうだったけ？」

大和「自分でやったことぐらい覚えておけよ…。金曜集会のたびに話題にするんだぞ」

モロ『「タイガってすごいのよ」って嬉しそうにしゃべるんだよね。正直もう聞きあきたよ…」

ガクト「肉体派な俺様としてはうらやましい限りだぜ…。なあな

あ冴島！俺様も使えるようにしてくれよ！」

風間「あ、ずりーぞガクト！さえちやん俺も俺も！」

ナツル「無理だあきらめろ。あとさえちやんいうな」

モロ「すごいバツサリといったね…」

大和「なんでワン子はできるって思ったんだ？」

ナツル「あ？姉と祖父が使えるんなら可能性は高いだろ」

大和「ワン子と姉さんは血が繋がってない義理の姉妹だぞ」

ナツル「え？」

一同『「……………」

ナツル「……………あく…あれだよアレ、長年気が使える奴の側で鍛練してるから準備は整ってるって思ってるから準備は整ってるって思ってる」

大和「いや嘘だろそれ、今考えただろ絶対！」

風間「え、じゃあワン子が気を習得できたのって偶然なのか!？」

ナツル「物事に偶然ということはなくすべては可能性と必然性の折り重なりによって成り立っていて——」

大和「詭弁じゃねーか！使えるようにならなかつたらどうするつもりだったんだよ!？」

ナツル「うっせーな！世の中ってのは大概終わりよければすべてよしだろーが!!」

大和・ガクト・モロ・風間「「「開き直りやがったコイツ!」」」

## 6 時間目 好都合な奴

神月学園名物

試召戦争特別ルール

” 決闘” システム!

「…ってなんですか?」

「さあ?」

「なにいつ!」

☆

★

☆

くナツルSide)

姫路の質問に素直に答えたら、坂本が驚いた。

なんで?

「ちよつとまで、お前三年の川神先輩を倒したことあるんだよな? なら一回くらいは経験してるはずだろ」

「よく分からんがそういう誘いが来たことは一度もないぞ」

基本俺目立たないし

ハハっ、哀しくなんてないよ?

「…いやそれでも…いや…まあ…好都合か…?」  
納得いかないながらもうんうんと唸っている。

結局決闘システムってなんなんだ? いや、だいたい予想はつくけど

「決闘システムってのはその名の通り、生徒同士が互いに決着方法を決めて争うシステムだ」

考えこむ坂本の代わりに直江が説明してくれる。

「学校側は認めてるのか?」

「むしろ推奨してくらいだ。社会人になったらあまりできなくなるってな。生徒手帳にも書いてあるだろ」

三日で無くしたよそんなもの

「じゃあ特別ルールってのはつまり…」

「代表者による一騎打ちだな」

なんと、

それはそれは俺たちにとってこれ以上ないありがたい存在だな

「これを使つてまずAクラスを攻める」

「は?」「え?」「ええつ?」「Aクラス?」

坂本の言葉に、ほとんどの奴が素っ頓狂な声を上げた。

「Aクラスを攻めるって…Sクラスじゃないの?」

島田が尋ねる。

「ああ。まずはAクラスを倒して、設備入れ替えを盾にSクラスを攻めると言うよう交渉する。向こうもFクラスの最低設備になるのは嫌だろうからこれは大丈夫だろう」

床に穴空いた教室なんて、誰だつて嫌じゃい

「雄二、なんでそんな回りくどい真似するのさ?その特別ルールつてのをSクラスに使つたほうが早くない?」

「残念だがそれは無理だろうな。試召戦争のルールの括りに入つてはいるが、これは宣戦布告と違って受け手側が拒否することができる」

なんだそりや。意味ねーじゃん

「Aクラスは承諾するつて根拠は?」

「乗せやすそうなのがいるからな」

「…:他には?」「ない」

「そこ空けろ、いまから坂本が空を飛ぶから」

「まてまてまて話は最後まで聞け俺の胸ぐらを掴むな屋上の端に移動しようとするな!」

わりと本気で引きずろうとしたが、坂本の抵抗が強くて無理だった。

「チツ」鋭い舌打ちをして手を離す。意外と力がありやがるなコイツ



「いいか坂本、この前のDクラス戦のうちには姫路という超戦力があるってことはもうバレてんだ。たとえ相手がどんなに挑発に乗りやすかろーが受けてくれるわけねえだろが」

「それは問題ない。姫路の出番はないからな」

「あ?」

出番がない?どういうことだ?

「どういうことさ雄二」

「今回の決闘の種目は『武道』にするからな。だから姫路の出番はない」

「なるほど」

『武道』は選択科目のひとつだ。その名の通り格闘技や武術の基礎を中心に教えている(らしい)。

このメンバーならたしか…ゴリラとワン子が取ってたな

「おおつ、てことは俺様の出番か?」

「いや、島津は止めておいた方がいいだろう。実力が知られてる奴だと警戒されるからな」

「そうなの?それじゃ、ワン子もダメだね」

「むく、残念だわ」

モヤシの言葉に、ため息をついて残念がるワン子。頭の上の犬耳も垂れ下がって、ベリーしょんぼり感がよく出ている。

……………幻覚?

「島津君も川神さんも駄目だとすると…いったい誰が出るの?あ、もしかして島田さん?」

「吉井、歯を食いしばりなさい」

言うが早いのか、島田は突風のようなスピードで駆け寄り拳を顔面に叩き込んだ。

そして間髪入れずに腕ひしぎ。

「いだだだだだだっ!島田さんギブツ、ギブだっ!!」

なんかもう本当に出てもいいんじゃないかって気がする

「島田が強くなるのは明久にだけだ。もっと確実に勝てる奴じゃないとな」

「うちのクラスにそんな奴いるのかよ」

「いるだろう。実力は折り紙付きのトップクラス、しかし知名度はまるでないっていう好都合な人材が一人」

そう言っつて直江がひとりの人物に指を差すと、つられて全員の視線がそいつに集中する。

その好都合な奴とは…

『……………』

「え、俺？」

俺だったく、今フタを開けていたのにく

「あー、なるほど」

「確かに、これ以上ないってくらい都合がいいね」

「そうなんですか？」

皆言いたい放題言ってくれやがる。

戦う（予定）前からテンションがだだ下がりだ。

「え、でもちよつとまってよ。タイガってけっこう有名でしょ？」

「冴島タイガはな」

真顔で訊いてきたワン子に即答。

一年ぐらい前からずつとその名前を呼ばれ続けたせいで、ついには学園にそういう生徒が本当に実在してるってことになっている。

そしてモモさんに初めて黒星を付けた男も冴島ってことになっている。

「いいのかお前はそれで…」

「ザコを相手にちまちまレベル上げる趣味はないから丁度いいっちゃ

いいな」

それに俺、人傷つけるのってあまり得意じゃないし

ナツルさんか弱い一般人アルヨ

なみに冴島タイガの姿形は、岩のようにゴツい身体をしていて常に眼を血走らせてる上に鉈やら斧やらを携帯してる身長5メートルを楽に超える大男だそうだ。

俺的要素まるでねえ

「まあそれならかなりの確率で向こうも乗ってくるだろう。頼んだぞ瀬能」

「気乗りしねえなあ…」

負けたら俺の責任だし、勝ったら勝ったで実力がバレて挑戦してくる奴が出てくるかもしれない。

俺にメリットないじゃん。デメリットだけじゃん

「やるとしてもいつすんだよ」

「今日だ」

「今日!?!」

「Aクラスの代表がいない今が一番都合がいい。だから——」

坂本がうんたらかんたら説明してくるが、それをすべて左から右へと聞き流す。

めんどくさくなってきたな…どうしよう

「そういえば坂本が指名しようとしてる相手って誰なの?」

「言ってなかったか。阿久津真<sup>あくつまこと</sup>。柔道部の問題児だ」

「あー、あいつかあ。あいつけっこう強えーぞ?俺様もてんで歯が立たなかったし」

「ガクトたしか、授業で組手やった時そいつに腕を折られたのよね?」

「……………あ?」

なんつった今?

「そーそー、あんどきはむちやくちや痛かったぜ。…ん？どうした冴島」

「別に。つーか今の話ホントか？」

「ん？ああ…折られたの左ですぐに治ったけどな」

「…ふうん……」

ガクトの腕の話が出た途端、ナツルの雰囲気が変わった。

顔つきこそ変わらないが、さっきまでやる気の欠片もなかったのに、今は抜き身の刃物のような威圧感がある。

「で、どうだ瀬能。やってくれるか」

「確認取ってるけどこんな策が出る時点で他に手がないんだろ？」

そうやってナツルは立ち上がる。

そしてそのまま、屋上の扉に向かい歩いていく。

「おい瀬能、どこに行くんだ？」

「トイレだよ。…なんならこのまま宣戦布告でもするか？」

手間が省けていいな。と軽い口調でドアを開けて、普通に去っていった。

「…ねえ、大丈夫なの？戦う相手ってけっこう危ないんでしょ？」島田さんが口を開く。

「まあな…素行が悪くてしよつちゅう騒ぎを起こしてるらしい。それでも大事になってないのは、それだけの実力があるからだ」

「……阿久津は神月ランキングの7位…」

「神月ランキング？」

「選択科目の『武道』を取ってる奴を対象にした強さのランキングだ。20位以内なら他校で即エースになれるな」

「……勝てるの？瀬能」

「…さあな。あいつが強いつてのは知ってるが、噂で聞いた程度だか

らな」

「こう言ったらなんだけど、瀬能ってほら…」

ひ弱そう

はつきりと口にした訳じゃないけど、そう思っているのはたしかだろ。

ナツルは身長は高いけど、ほっそりとした体格してるからな。

筋肉がまるでついてないってことはないんだが、普段から覇気がないせいでよく誤解される。

実際俺も最初にあいつを見たときおんなじ風な感想を持ったものだ。

実力を知らない坂本たちが心配する中、ワン子が自身満々に言いきる。

「大丈夫よ。タイガなら」

「でも…」

「だってタイガ、ものすごく強いものー!」

その目には、たしかな確信があった。

結局のところ。心配するだけ無駄なんだよな。

とくにあんな…姉さんと戦った時みたいな雰囲気を出しているんなら、なおさらに。

「(もぐもぐ)…唐辛子に鷹の爪、わさびカラシ豆板醤、デスソース。他にも何種類かのスパイスが入っていてほのかにオリーブオイルのような酸味が…あとで瀬能に作り方を教えてもらわなきゃ」

「しなくていいしなくていい」

京の奴さつきから静かだと思ったら、残ったハズレサンドイッチの内容物調べてたのか。

思わずシートの端に転がっている人物に視線がいく。

あれって木下が食って即座にぶっ倒れたやつじゃないか。なんで

大丈夫なんだ？

## 7 時間目 お前のそういうところが好きだよ

試験召喚戦争特別ルール " 決闘システム " 使用通達。

対戦者

Aクラス 阿久津真

Fクラス 瀬能ナツル

試合場所 東第二武道館

開始時間 4 : 30 より

↳ ナツル Side ↳

「……恐ろしいほどあつさりとことが進んだな」

放課後、教室でカバンに教科書をつめていたら隣に座っていた坂本が話しかけてきた。

「というか。俺が宣戦布告にいったときにはすでに怒り狂ってたんだが……お前もしかしてなんかしたのか?」

「いやー別にー、ちょっと相手側に顔出しておしやべりしただけですよ?」

「今にもうちに乗り込んで来そうな勢いだつたぞ」

もう少しで俺が被害受けるところだった。とその時の状況を思い出したのか苦笑いを浮かべる。

無傷などこを見ると、きつとAクラスの奴らが必死に止めたんだろ  
うな

「いやいや、本当に2・3話しただけだぞ。手は出してない」

↳ 回想 (坂本が宣戦布告をする15分前) ↳

— Aクラス前 —

「はろー、阿久津くんいるー?」

「ああ?なんだてめえは」

「……………」

「なんだって訊いてんだよ。人のことじろじろ見やがって」  
「(フツ…) 戦闘力だったの5。ただのゴミか…」

「あ”あ!?! 喧嘩売ってんのかてめえ!!」

「俺が相手をする間でもない」

「なんつ…まぢやがれクソが!」

『ちよつ、ちよつと待て阿久津!』

『なにがあつたか知らないけど落ち着け!』

「離せてめえら!あの野郎ブチ殺してやる!!」

「バカですねーアホですねー、そんなことできる訳ないじゃないですかー。(ぼそつ) 戦闘力だったの5のゴミじゃ」

「マジで殺す!」『だから落ち着けて!』『つかなんなんだよお前は!?!』

「2年F組の瀬能ナツルだ。別に覚えなくてもいいぜ?ザコに知っててもらっても嬉しかねーから」

く回想終了く

「つてな感じで」

こうやって思い返してみるとけっこう会話してたな

経緯を黙って聞いていた坂本は、若干引いたような表情を浮かべて

「…:相手<sup>マスター</sup>を激怒させることに関しては天才的だなお前」

「挑発<sup>マスター</sup>使いを自負しております」

んべつと舌を出してみせる。

そこにはでっかく「挑」と書かれていた。

「字が消えかかっているぞ」

「あ、やべ。昼休みに書いたから」

思いついたのチャイムが鳴る直前だったもんで、字も乱れてるし  
ちなみに使用した塗料は身体に害のないもの…:とかいう都合の  
いいもんじゃなく百数円で買った油性マッキー。まあ死にやせんだ  
ろ



「はあ…まあいい。俺は先に行ってるから、遅刻せずに来いよ」  
「善処するよ」

別れを告げる坂本にひらひらと手を振って見送る。

さて、時間まで何をしてヒマ潰そうか

とりあえずなんか飲み物でも買ってこうかな。そう思い立ち上がって教室をあとにする。

「—お、いたいた。おーいナツチ」

ぎくり。この声はまさか…!

廊下から出た瞬間、後方からとても聞き覚えのある声があった。

嫌な予感を全身で感じるが、無視する訳にもいかず後ろを振り向く。

そこには予想通りの人物が待ち構えていた。

「げえ、モモさん!」

「いや、そんな武将を見つけてしまったみたいな呼び方されても反応に困るんだが…」

気分的にはまさにそれなんですけど

☆

★

☆

〈百代Side〉

「……いかようなご用で来られたのでせうか?先輩」

「なんだよ、こんな美少女が来たんだからもつとよろこべよ」

苦い顔して見つめてくるナツチに背中から抱きついて、グイグイと密着する。

うむ…相変わらず男なのに抱きが心地いいなナツチは。

「……………暑いんですけど」

青色の髪の毛に頬ずりしてたら仏頂面で抗議してきた。  
なんだ照れているのか？初い奴め。

「あんた隙あらば絞めを決めようとしてくんだろうが、正直気が休まんねーんだよ。それに重いし」「失礼な奴だなお前は」

思わずキュツと両手に力を込める。

ナツチはとつさに首と私の腕の間に右手を差し込んだが、構わずに絞め続けるとぐえつと潰されたカエルのような声を上げた。

「…っ……………こっ……………ほつとに……………な、に……………しにっ……………来たんだよー！」

腕の拘束を外された。

「俺これから用事あるんであんたの相手してるヒマないんですけど!?」

「ああそうだ。それについて来たんだ」  
すつかり忘れてた。

「聞いたぞナツチ。今から決闘に行くんだろ？」おぶさるるように抱きついたらまま話しかける。

「私の挑戦は無視するのに…浮気か？」

「週一のペースで『やらないか』って言うてくる奴と付き合った覚えはない」

「つれないな…京の気持ちは今ならよく分かる」

私の愛が届くのはいつになることやら。

抵抗される方が燃えるけど。

「それで？嫉妬の言葉でもかけにきたんですか？それなら聞いたんでもう帰ってくれないませんか」

「対戦相手の阿久津についてだ。ガクトが腕を折られたことは知っているか？」

「知ってますよ。本人から聞きましたから」

「そのガクトの仇を取ろうとしたキャップが返り討ちにあつたのも知ってるか」

「っ、」

ピクツと、ナツチの体が一瞬震えた。

「…その日のうちに挑みに行つたが、鼻の骨を折られて惨敗したらしい。すぐに治つたみたいだな」

そういえばホントに骨折したのかつてくらい綺麗に治つてたな。あいつの治癒力は私の瞬間回復並みだ。

「……………」

「私やワン子が決闘を申し込もうとしても色々理由をつけて拒否してくる。気を使う相手や自分より強い奴とは闘いたくないみたいだな」  
「…それで？俺に島津や風間の敵討ちでも取って来いとでも言いたいんですか」

抱きつかれたまま、ナツチが目線だけを向けてくる。

「大和から聞いたぞ。もともとガクトの借りを返すつもりだったんだろ？ならキャップのも頼む」

「……勘違いも甚だしいつすよ」

するりと腕から抜け出して向かい合う。

「俺が闘うのはクラス代表に指示されたから。それ以上でも以下でもないです」

「…ん、そうか」

「もういいすか。試合に遅れそうなんで」

時計を確認すると4時を過ぎていた。

移動距離や準備を考えたらそろそろ行つた方がいいだろう。

「ああ、いいぞ。言いたいことはもう言つたから」

「じゃ、失礼します」

ナツチはそう言うところりと背中を向けて歩き出す。

……………嘘がへタだな、相変わらず。

「ナツチ、私はお前のそういうところが好きだよ」

真剣になったときの引き締まった表情。  
静かに闘志を宿す瞳。

そしてなにより、  
自分ではなく他の誰かのために本気になれる。  
そんなお前が、大好きだ。

☆

★

☆

~~~~~

東第二武道館。

午後4時30分。

「両者、前へ！」

選択科目『武道』の担当教師にして本日の決闘の立会人のルートの呼び声に、二人の男が姿を表す。

片方は身長二メートル以上、岩のような筋肉が全身についている柔道着姿。

もう片方は対象的にほっそりとしており、格好は神月学園指定の制服。そのの上着を脱いだけ。

阿久津真と瀬能ナツル。二人は東西にある別々の出入り口から入場し、向かい合う。

——真つつーかゴウキじゃねーか。つける名前完全に間違ってるんだろコレ

——背はそれなりだが、それ以外は普通だな。

一度顔を合わせているにもかかわらず、お互い第一印象のような感想を心に抱く。

とくに阿久津は、相手がほっそりとした体軀をしていると分かる途端に顔を緩める。楽な試合になるとでも思っているのだろう。

野球のグローブのような手がナツルの襟首に触れようとした瞬間、
「ッラア!!」ドガンッ!

「!!?」

阿久津の身体は綺麗に一回転し、背中から道場の壁にぶち当たった。

なんだ今のは、なにが起きた——?

トラックか何かと正面衝突でもしたかのような衝撃を受け頭が回らない。しかしそれでもなんとか状況を把握しようとして阿久津はさっきまで自分がいた場所に視線を移す。

「……なんだ、終わりか?」

そんな彼を、ナツルが嘗めたような目で見下す。

「とつと来いよ。7位さん?」

「っ…サ、マアアアッツ!!」

再び突進してきた阿久津。

ナツルは掴みかからんと伸ばされた腕を逆に掴み、そのまま捌いて
いなくす。

「!?!」

急にバランスが崩れて転びそうになったが、そうはならなかった。
なぜなら背後に回ったナツルが瞬時に跨るようにのしかかり、両足を絡めて両腕を決めるように掴んで捻り上げたからだ。

「なあ!?!」

「下手に動かん方がいいぞ。倒れたショックで腕が折れるから」

軽い口調で話しかけるが、実際にはコンクリートで固めたかのように
ピクリとも動かない。

阿久津はそのことに驚愕した。

「て、てめえいつたい——」

「さて上から目線で申し訳ないが、ひとつ訊いておきたいことがある」

冴島タイガ

裏・神月ランキング（全校生徒を対象とした強さのランキング）

順位

「折られたっていう島津の腕は右左どっちだったんだ？」

1 位

8時間目 パロスペシャル・ジエンド

〜試合開始10分前。武道館前某所にて〜

『さあ！他に賭ける奴はいないか？あともう少しで締め切るぞ！』

『阿久津に10枚！』

『俺は5枚だ！』

※神月学園では賭博が合法的に認められております。

※ちなみに彼らが賭けているのはすべて食券です。

※……………嘘じゃないですよ？

「派手にやってるなあ」

「決闘前はこれが普通さ。これも神月学園ちの一種の名物みたいなものだ」

「へー、そうなんだ。知らなかったわ」

「つか冴島人気ねーなー…今あいつに賭けたら大穴狙えんじゃね？」

「あ、確かに。しかも僕らは実力知ってるからリスクゼロだね」

「ようし、それじゃあ。さえちゃんの応援も兼ねてここはどーんと景気よく——」

「賭けるのは無理だぞ。決闘に出場してる奴と同じクラスの人は賭けに参加出来ないんだ」

「えーなんでだよ？」

「前にイカサマがされてそういうルールができたらしい。最低限の八百長対策だな」

「なんだよそれ、試合中は武道場にも入れないしやることないじゃんよー」

『阿久津に食券15枚！』

『俺はどーんといくぜ、30枚だ！』

「あたしはそれよりも、タイガに誰も賭けないのが納得できないわ。理不尽よー！」

「まあデータがまるでないからな。外見だけを判断材料に危険な橋を渡る奴もいないだろ」

『おいおい、みんな同じ奴に賭けてちゃ賭けになんないだろ。誰か相

手に賭けてやれよ——』

「瀬能ナツルに100枚」

『!!?』

「…驚いた。えらい物好きがいたもんだな」

「100枚って…!」

「当たったら何倍になるんだよ!?!」

「思い切った賭け方するな…しかもあいつ、Sクラスの奴だぞ」

「え?」

「おや、そろそろ始まるみたいですね。皆さん見なくていいんですか?」

「……とにかく今は決闘の方に集中しよう。……もう決着つきそうだけど」

☆

★

☆

↳ナツルSide↳

率直な感想を言う(口に出さずに心の中でだけ)

超・拍子抜けだ

こういった公式な試合をするのは実に…何年かな。まあそれくらい昔にやった程度だが、その中でも最短時間じゃなかろうか

ここ最近は何モモさんやワン子ぐらいしか相手にしたことなかったからよくは知らんけど、コイツレベルが標準なのだろうか。

だとしたら退屈で死にそうだって愚痴ってたモモさんの気持ちがちよっと分かるかも。いくらなんでも弱すぎるだろ…ランク7でこれかよ

ゴリぽん(島津)とバンダナ(風間)はホントにこんなのに負けた

のか？不甲斐なすぎると

「うぐぐぐぐぐつ、がああああ!!」

下になっているゴウキ（もどき）がなんとか抜け出そうと、唯一自由にかせる首を前後左右に振ってもがいている。

勢いすぎて必死感が伝わってはくるんだが、見た目とのギャップが酷すぎる。滑稽どころか逆に笑えない

「元気だなあオイ。なんかいいことあったのか？」

「ふざけんなクソ野郎！離しやがれ!!」

バカなのかコイツ？

「ていうかバカだろお前。なんでわざわざパロ決めたのに解放しなきゃなんねーんだよ。再放流か」

「うがああああつ!!」

聞いてねーし

ちなみに再放流とは釣った魚を川や海に戻す行為のことだ。キヤッチ&リリースとも言うな

「それよりさあ、さっきの質問の答え聞いてないんだけど。結局どっち折ったの？」

「な……なんのことだ」

……………へえーしらばっくれるんだー

「お…おい、なんか腕にかかる力が強くなってきたか？」

「うーでーがーピョンと鳴ーるー」

「まてまてまて！お前俺の腕になにをするつもりだ!？」

ピョンとするんだよ

「わ、分かった。俺が悪かった、島津の件は謝るから離してくれ!!」

「それは降参するって意味か？」

「ああー!」

「風間の件は?」「それも謝る!」「この結果しだいではFクラスと設備が入れ替わるかもしれないけど」「甘んじて受け入れる!」「他の奴が納得するかどうか…」「説得してみせる!」「本当に島津と風間に謝るんだな?土下座で」「…ああ!」

……………ふむ

「も…もういいだろうっ、そろそろ痺れてきた」

「そうだなあ。いつまでもむさい男の背中に乗ってるのは絵的にマズイだろうし、降りるか」

そう言っ握っている手首から力を抜く。

「――！」

「なんちゃって」

すぐさままた力を込めて捻り上げる。

一瞬気を緩めたゴウキもどきも突然来た激痛に悲鳴を上げた。

「ぐああああつ!! なっ、なんで…!?!」

「舐めてもらっっちゃあ困るねえ。そんじよそこらの純真無垢な子羊ちゃんと違って俺は立派に汚れた虎だ」

……なにを言ってんだろうか俺は

言わんとすることは分からんでもないがたまに自分でも理解不能なことが飛び出すな。テンションのせい？

「お前さつきからオウム返ししかしてねーよな。どうせあれだろ？適当に都合のいいこと言っつて少しでも体動かせるようになったら攻撃するつもりなんだろ？」

最大トーナメントの猪狩完全が使った手段だよ。ふりーんだよ

「そっ…そんなこと…」

「じゃあ今すぐここで敗北宣言してもらおうか。なるべく惨めに情けなく、かつ外にいるクラスメイトに聞こえるくらいでつかい声で」

ギブアップ、って

最後の言葉だけは阿久津にのみ聞こえるように、耳もとでささやいた。

それに対して奴は、歯ぎしりでもしそうなくらい――実際にしてるのかもしれないが――に身体をわなわなと震わせ、

「……っ…最下位クラスのかせに調子に乗りやがっつて…!」

「……………」

「俺はAクラスだぞ?!?てめえらみたいなクズになんで頭下げなきゃなんねーんだ!!」

こつちを向こうと首を精一杯曲げて叫ぶ阿久津。

その目には屈辱と怒りの感情がはつきりと見て取れる。

「……俺らがFクラスだからって人を傷つけていい理由にはならねーぞ」

「目立ちすぎんだよ!・ゴミで出来た奴らなんだからもつと肩身狭くして地味に生きてろ!!」

今まさにゴミに生殺与奪握られてるお前はゴミ以下だろ

「…人は皆傷ついたら痛いことを知っている。それは経験したことがあるからだ。拳で殴られたら痛い。手で叩かれたら痛い。」

故に誰かや何かを叩いたり殴ったとき躊躇うし考えるし胸を痛める。自分がそうだったんだから相手もそうなんだろうという思考が頭を掠める」

捻り上げた手にさらに力を込め、阿久津の体を前に傾ける。

ミシツ……メキ……

「お…おい、なにを……!」

「でも傷ついたら痛い^のことを知りながらも平気で他人に暴力を振るう奴がいる。なぜか?・答えは簡単だ、知っているのと理解しているのは違う」

理解してる奴は相手の立場になって考えれる。つまり優しい奴だ。

メキツ…パキツ……!」

「や…やめろ…」

「他人殴ってへらへらしてるくせに、いざ自分の番になったら尻尾振って逃れようとする。俺が一番嫌いなタイプだ」

「やめろ……!」

「殴られる覚悟もないのに軽々しく人を殴っちゃあいけないよ」

ギシッ、コキツメキッ！

「やめろー！ー！ー！ー！！！！」

「もう少し優しくなれよ」

——パロスペシャル・ジエンド

バキボキツメキ、ゴギツツ！！

「ゲハアツ！！」

前のめりに倒れ、阿久津の身体を地面に叩きつけると、その口から汚い悲鳴が飛び出た。

両腕は本来とは逆の方向に曲がっており——まあぶっちゃけ俺がへし折ったんだけどね

「それまで！勝者、瀬能ナツル！」

悠々と背中から降りると、それに合わせるように教員が声を張り上げる。（そういえばいたんだっけ）

試合終了が告げられると、道場の扉が開き数人の生徒がなだれ込んで来る。

多分Aクラスの人間だろう。バッチにもそう描いてあるし

『阿久津…おい、阿久津！』

『ダメだ、完全に気を失っている』

『おい誰か！タンカ持ってこい！』

ゴウキもどきはうつ伏せになったままピクリとも動かない。本当に完全に気絶してるみたいだな

それを一瞥してから出口に向かい歩き出したら、シチュー先生に呼び止められた。

「ワタシの名前はルーだよ」

「心を読むな」相変わらずデタラメだなこの先生

「いやー、いつもながら目を見張る闘いぶりだったネ。見事だったヨ」
「相手が弱すぎたんだよ」

実力に差があればあれくらいどーってことない

モモさんとかだところまで上手くいかないからな。

最近じゃワン子も一方的にやられるだけじゃなく奇抜な反撃方法をやってきては俺を驚かせ——っていいかそんなこと

「いやいや、阿久津君も中々の実力の持ち主ネ。…ただ、性格に少々難があるけど」

「俺の方が問題児だけだな」

「本来なら彼みたいな子の教育や指導はワタシたちの役目なのだけだど…」

無視しやがったよコイツ

モモさんといい…：そういうやあの人のジイさんも自分の都合のいいことしか耳に入れようとしらないな。もしかして人の話を聞かないのは流派の方針ですか？

「ちよつとやり過ぎな気もするけど、今回のことは彼にとっていい薬になっただろウ」

「そうかねえ」

『タンカ来ましたっ！』

『よし、運ぶぞっ。…：うわ、こいつ失禁してやがる！』

『きたねえ!!』

.....

「これを機に正しい武の道を歩んでくれることを願うヨ」
「いや、無理だろ」

ありや辞めるな、武道

☆

★

☆

「あ、ナツル！」

武道館から出ると、クラスメイトの面々が出迎えてくれた。次々に駆け寄ってくる仲間たち。

とりあえず向かってきた吉井に腹パン。

「ヴッ!!」奇妙なうめき声と共にその場に崩れ落ちた。

「なっ……なんで……？」

「いや、なんとなく」しいて言うならお前が一番近かったから「意味が分からないよ……！」

吉井が腹を押さえて恨めしげな眼差しで睨んでくる。

直前で拳は止めたが、勢いがついてたからそれなりにダメージがあつたみたいだ。

流石は虎落とし。加減しても強いね！

「あれ、坂本は？」

囲んでくるメンバーの中に一人だけいない。

こういう時にいなさそうな源はいるのに……ていうか先にいつてるつつたのに

「坂本なら今Aクラスの奴らと話してる最中だ」

「終わったばっかで即交渉か……Aクラスあちらさんも大変だ」その原因作つたの俺だけだ

ぱちぱちぱちぱち……

「ん？」

突如、手を叩く音が辺りに響いた。

「見事な勝利でした。流石は瀬能君」

「お前は……」

……誰だ？

「葵冬馬、S組のクラス代表だ」

どうしたものかと迷ってたら直江が耳打ちしてきた。

よかった。見知らぬ他人だった。顔見知りでも忘れるからな俺は

「さっきの試合、唯一ナツルの勝利に賭けてた奴だ」

「ああ…」なるほど、通りで

辺りに両手・両膝をついてorz状態になってるのが大量にいると思っただ。

時折そこから中からうめき声が耳に届いてきて正直かなりウザい。

ゾンビかてめえら

「しかし強いですね。神月ランキング7位で柔道部の問題児と言われている阿久津君をほぼ瞬殺ですか」

「俺の方が問題児だからな」

「そうですね。しかし些かやり過ぎ、という気がしますが」そう言っただけならしく髪を首を縦に振る。

スルーしやがった。貴様に俺のなにが分かるってんだ

「つつても両腕それぞれ一本つつ折っただけだぞ」それも比較的綺麗に

「とても骨二本が折れた音には聞こえませんでした」

「声帯模写だ」

「……………」

信じてねーなコイツ。まあいいけど

「つかあんた俺が勝つ方に賭けたんだっけ？それじゃあさぞかし儲けただろ」倍率すごかったらしいし

「ええ、食券が千枚を超えました」

「すごいどころじゃねえー」

いったいいくら賭けたんだ!?

つかそんだけ儲けたならいくらか分け前よこせ!

「つまりそっちはうちのナツルに借りがあるわけだな」

突然、直江が変なことを言い出した。

うちのナツルってなにさ

9時間目 それが一番大事

~~~~~

翌日。体育館。

本来なら朝のホームルームが始まっている時間だが、今日だけは学園のほぼ全員が集まっていた。

神月学園では月に一度、全校集会が開かれる。

主に月ごとの目標やら必要事項を発表したりするのだが、実際にはただ上級クラスと下級クラスの扱いの差を見せつけて向上心を煽るのが目的と言われている。

その証拠に、最上級であるSクラスには高価そうな椅子（座布団・ミニ机付き）が用意されており、逆に最下位のFクラスには何も無い。（それ以外のクラスは普通のパイプ椅子）

本来なら皆そんなFクラスを見て、ああはなるまいと決意を新たにするか、侮蔑の意味を込めて嘲笑するかなのだが：今回はそのどちらでもなかった。

『おい聞いたか？ A組の阿久津が負けたって話』

『聞いた聞いた。瞬殺された挙句にシヨンベン漏らしたってやつだろ？』

『正直私あいつ嫌いだったんだよねー。すぐ暴力振るうし、弱いものいじめするし』

『カツアゲされた人、けっこういたらしいよ？』

『いつかやられるだろうとは思っていたけど、まさかFクラスの奴に負けるとは思ってなかったぜ』

『あの最低クラスに？ ホントかよ…』

島田「…みんな盛り上がってるわねー」

島田がぼつりと呟いた。

大和「武道をやつてる中でも7番目に強い奴を、全く無名の間人が倒したんだ。無理もないさ」

坂本「しかも無傷で、な。あそこまで圧倒的な大差をつけて勝つとこを見られたら同じ手はもう使えないだろう。ま、それは分かったことだがな」

ガクト「で、その冴島はどうしたんだ？どこにもいねえみたいだけど」

島津の言うとおりに、青い髪が特徴の若干影が薄い瀬能の姿がない。ついでに吉井と姫路の姿も見られない。

ワン子「タイガなら朝一緒に来てたわよね。トイレかしら？」

秀吉「ぬ、お主らは一緒に登校しておるのか？」

モロ「タイガはたまにだけどね。」

島田「へー、みんな家が近いの？」

大和「そういうわけじゃないけど…学園に来るためにはどうしても多摩大橋を渡んなきゃいけないからな。それで自然に」

「え、ナツルもモンハン持ってるの？」

ザワっ…ばらばらな音量で話していた生徒達が、突如として静かになる。

「ああ、昔知り合いに貰って一応な。最近全くやってねえけど」

「へー、じゃあ今度一緒にクエスト行かない？」

そしてある人物が体育館に入ってきた途端、それまでのなりを潜めてヒソヒソと囁き声で話し始める。

あれが瀬能… 思ってたより普通っぽい… なんかひ弱そう

… ちよつとかっこいいかも… ほんとに勝ったのか？… でもモモ先輩って事例も…

「二人とも待って下さいー」

あれは姫路瑞希… Sクラス並の実力があるっていう…？ F組って最低じゃなかったのか？… 姫路さんかわええ…

「あ、ごめん。話に夢中になってつい」

あの二人と並んで歩いてる男は誰だ…？ バカお前あれは…誰だ？  
なんかザコっぽいぞ ホントだ、

ザコっぽい ていうかザコだろ うん、ザコだな

吉井「僕だけ扱い酷くない!？」

坂本「明久、そんなどうでもいいことはほっといてさっさと来い」  
若干影が薄い瀬能「全校集会ってメンド臭えなあ…なんで月ごとにやんだよ…」

吉井は叫び、瀬能はぼやきながらも坂本達が作る輪に近づいていく。

その後を少し遅れて、姫路が駆け寄ってくる。

姫路「み…皆さん…遅れて…すいません…」

若干影が薄い瀬能「あんまり無理すんな。身体弱いんだろ？ほら深呼吸深呼吸」

姫路「は、はい…:…すー…はー…」

京「優しいねー瀬能は」

若干影が薄い瀬能「茶化すなよ…流石にこういうの見せられて普段のノリ貫くほどガキじゃねーよ」

大和「ナツルってホントゲンさんそっくりだよな…」

モロ「キャップとガクトと足して3で割った感じだよね」

若干影が薄い瀬能「聞き捨てならねーなオイ、つかさつきから不当に罵倒されてる気がするんだが」

気のせいですよ。

☆

★

☆

くナツルSideく

「それではこれより、試験召喚戦争を始めます」

Sクラス教室。学年主任であり、クラスの担任である高橋教員がいつもと変わらぬ口調で告げた。

この人少し前まで俺の担任教師だったんだよな…

さて今はまさにS組との試召戦争が始まる直前なのだが、Dクラス戦や昨日の決闘と違うのはわけがある。

前に坂本がクラス単位での戦いでは勝てないので、一騎打ちを仕掛けると言ったのを覚えてるだろうか。

覚えてるならそれでいい、忘れてるなら前の話を読め。説明がめんどくさい

まあそんなこんなで昼休みに交渉に行っただが——条件をつけられて帰ってきた。

~~~~~

『5対5の団体戦?』

『ああ…交渉は比較的うまくいったんだが、一騎打ちにまでは持ち込めなかった。姫路や瀬能がいるから警戒されたんだろう』

『そこでなぜ俺の名前が出てくるのかよく分かんのだが』

『試合の詳しいルールは?』

『5対5の団体戦、先に3勝した方が勝ちで勝負方式の5回のうち3回はこっちが指定できる』

『有利か不利かよく分からないわね』

『で、オーダーだが、明久・康太・姫路・瀬能・俺の順でいきたいと思う』

『えっ、僕が最初なの?』

『直江とかは入れないのか?』

『ああ。今回は召喚獣を使ったことがある上で実力がある奴を出そうと思う。とくに先鋒は重要なポジションだが…俺はあえてお前に託す。がんばれ明久』

『雄二…うん、がんばるよ!』

パアアといい笑顔になり、両手でガッツポーズする吉井。こいつ絶

対賭け事でカモにされるタイプだな

そんなノー天気君を尻目に坂本に小声で話し掛ける。

『(吉井を一番手にする理由は?)』

『(まず向こうの点数を知っておこうと思っただけな)』

捨て駒じゃん

『(:それなら島田あたりでもいいんじゃないのか?)』

『(下手に点数高いと負けた時士気が下がりがねん。そういう意味じゃ明久は適任だ)』

非人道的なことをサラリと言いやがった。

『ねえ坂本』

『ん?なんだ島田』

『ウチや木下が出ないのはいいとして、なんで瑞希が三番手なの?』

『んお?あ、確かに。大将がクラス代表なら副将は二番目に成績がいい奴だろ?ならこっちは姫路の方がよくねーか?』

『まあ俺も本来なら姫路を4番手にしておきたいところだが:もう後がない、って状況で周りが囓り立ってたりした場合、精神的負担が大きすぎる』

『プレッシャーか。確かに強そうには見えねーな』

『す:すいません:』

『その点瀬能なら大丈夫だろ。成績もそこそこだし召喚獣の扱いにも長けてる』

『なるほどね:』

全員の視線が一気に集まる。

『瀬能、頼んだわよ』

『わしらも精一杯応援するぞ』

『まかせろ。:むしろわざと負け越してもいいぜ?逆境で勝てばスターになれるからな』

『頼もしいな』

『つーかお前はどうかなんだよ、召喚獣出してもいないんだろ?』

『そのへんはちゃんと考えてある。心配するな』

~~~~~

「今回は両クラス5人ずつ一騎打ちをするとのことなので、まずは一番目に戦う方、前へ」

「はいっ」

そう元気よく前に出たのは吉井。自分の役割も知らず哀れな奴だ

：

「によほほほほ、見るからに貧相な輩が出てきたのじゃ」

緊張気味の吉井を着物姿のチビが笑い飛ばす。

「：誰だあれ」学校であんな格好してる奴保護者以外で初めて見たぞ  
「不死川心。日本三大名家って言われてる家の娘だ」

とくに誰かに訊いたわけじゃなく、ただ口からぽろっと零れた一人ごとだったが、直江が律儀に拾って解説してくれた。

なるほど：あれが噂の七光りか。小物臭半端ねーぜ

「Fクラスの山猿ごときじゃ力試しにもならぬのじゃ。早々に這いつくばって許しを乞う姿が目には浮か——」

「ウっゼえーんだよ時代錯誤チビが。顔にヒゲつけてニョロニョロにすんぞ」

イラッと来たので軽く脅してやると、によっ：によわっ：と半泣きになって静かになった。ザコが

「流石は瀬能：顔に似合わず頼もしいわね」

「つーか相手側少なくてねーか？見たとこ20人くらいしかいねーぞ」

机の数もそれくらいしかない。前にちよろっと覗いたときこんなもんだったっけ？

「S組は成績上位20人、特待生2人の合計22人のクラスだからな」  
「それって2年の総数と合わなくてねえか？それに成績ってテストの度に変わるだろ」

「A・Bなんかの他クラスが代わりに多いらしい。あとテストで20位以内に入れなかった生徒は、その時点でAクラスに落とされるん

だ。これも生徒手帳に書いてあるぞ?」

だから無くしたっての、三日で

「猶予期間も無しに即他クラスに行かされるんだ。当然、風当たりは悪い」

「それまで散々見下してたらそうだろう」

在籍してる奴も落ちた奴も、歩み寄るなんて発想出てこないんだろ  
うな

しかしそうか、道理で……性格がとてもよろしくない人間が多いと思  
った。

「まあここは基本、『自分は選ばれた人間だ』って思ってる奴らの集ま  
りだからな。名家の跡取りや大金持ちとか」

「庶民と関わる気ははなっからないってか」

「ふはははははっ、九鬼英雄。見参である！ おおっ！一子殿ではあ  
りませぬか!!」

「ううっ、く、九鬼君……」

「……そうでもない変り者もいるみたいだな」

突如教室に入ってきた白髪でスーツ姿の男が、流れるようにワン子  
に近づいていった。

……ホントに同い年?

「このバカっ、成績に利き手は関係ないでしょうが!!」

「あがつ!!し・島田さん、フィードバックで痛いんだから止めてよ!!」

えっ、なに?いきなりどうしたの?

見れば島田が吉井に地獄を固めをかけていた。

え、なになに、ホントになにが起きたの?

どうやら他所に目を向けてる間に試合が終わってたらしい。

その証拠に前の巨大スクリーンに"木下優子○ — × 吉井明  
久"と出ていた。

早くね?



「そりや瞬殺されたからな——つてお前なにしてんだよ!？」

「あ?見りや分かんたろうが」

来るべき試合に向けて英気を養ってるんだよ。具体的にはリクライニングシートにゆったりと座りこんで付いてる機能をフル活用。

あゝ気分いいわー。マツサーズ最高

「明日からこの設備で勉強するんだから使い心地を確かめておこうかなーと」

でもヤバイな、居心地良すぎて寝てしまいそうだ。こんなの使って真面目に授業受けれんのか?

『なんて大胆でふてぶてしい…』

『自分たちから乗り込んでおいてあの行動…非常識なっ!』

『とうよりうらやましい…!』

Sクラス側からひそひそとモブの囁きが聞こえる。

でも俺は気にしない。強い子だから

「イタタタタタタタツ?!島田さんホントにつホントに痛いから!ホント反省してるから許して!!」

教室の前の方では、情けない声で吉井が許しを請うていた。

捨て駒にされたり技決められたりかわいそうなやつちやな

よし、せめてその状況をムービーで撮っておいてやろう

「本当に反省してる?嘘じゃない?」

「してます!すっごいしてます!!だから離して!」

「うーんどうしよつかなく?」

「今ならたいていのことは聞きますっ!」

必死だな吉井。まあそろそろ本格的に間接が悲鳴をあげてるだろうから当然か

「じゃあまず呼び方から変えてもらおうかしら。ウチはあんたを『アキ』あんたはウチを『美波様』って呼ぶように」

「みっ美波様!これでいい?!」

「あと今度の休み、駅前『ラ・ペデイス』でおいしいクレープ食べたいんだけど」

「うん？じゃあ一人でいって——ああ、あ、あ、嘘ですわかりました!!おごらさせてもらいますっ!!」

どうでもいいけどこれって結構問題じゃねえ？端から見れば教師の目の前でいじめが行われてるって感じだけど

…じゃあいにも見えるからいつか

「じゃあ最後に…」

「まっまだあるの?!」

「う…ウチのことを愛してるって、言ってみて？」

顔を赤くしながらも、さつきまでと違いお願いするように言う島田。それと同時に、今までハラハラと固唾を飲んで見守っていた姫路が目を見開いてハッと慌て、止めようと駆け寄ろうとした。

「みつ美波ちゃんそれは——!」

「う…ウチのことを愛してるって言ってみて—!!」

.....

その場にいた全員が一気に固まった。

いつも冷静な高橋教員までぴくりとも動かない。

「……………ばか」

（きより）

その日、学校中にある男の悲鳴が響いた。

それはそれは、聞くも無惨な叫びだったそうなの。

☆

★

☆

吉井が島田の正固めから解放され、それを尻目に二回戦が始まっ

た。

ちなみに吉井が悲鳴を上げる中、姫路はホッと胸を撫で下ろしていたんだが…まあ気づかなかったことにしよう。

「ねえ」

一回戦目をまともに見てなかった分、今度は真面目に観戦してやろかと思ってたら、急に声をかけられた。

「ん？なに？」

「そこ、私の席なのだけれど」

声をかけてきたのは黒いロングヘアの美人さん。でもなんか冷たい印象があるな

……？ どっかで見たような……？

「勝者、Fクラス」

考えても思い出せず、かといって無視して女子生徒の席に座りっぱなしでいたら、二回戦目が終わった。

今度も早くない？なに、流行ってんの？

Fクラス 《隠密戦士》 土屋康太

保険体育 572点

VS

Aクラス 工藤愛子

保険体育 446点

今度はこっちの勝ちみたいだけど…保体で400超えって普通ねーぞ。どんな頭してんだ？

「…あなた、瀬能君よね。Fクラスの」

スクリーンをぼんやり眺めていると、再び女生徒が話しかけてくる。

こここいつの席らしいし、退いた方がいいのかな

「昨日の決闘見たわ。…一つ訊きたいのだけど、なぜそれほどの実力

を持っているのに活かそうとしないの？あなたなら特待生制度を利用してS組に編入出来たでしょうに」

「…なんで俺がそれに答えなきゃならんのだ？見ず知らずのあんたに」

「人の席を勝手に使っているのだから、ささやかな疑問を解消してくれてもいいでしょ？」

そう言われ、真っ直ぐに上から見つめられ、机に頬杖付きながら考える。どうすっかな

その時、

『ちっ…工藤の奴、負けやがった』

『Sクラスの恥がっ』

『ま、所詮あいつも下賤な身。期待はしてなかったけどな』

教室の後ろ…Sクラス生徒がいる方から、そんな話し声が聞こえた。

……負けたとはいえ自分のクラスメイトを、よくまあこうまでボロクソに言えるもんだ

「成績じゃ品性は補えないからかな」

「……あれだけを見て決められると困るのだけど」

「なんで？」

机に手をついて立ち上がる。

そして女生徒に向き直り、

「別にあれがおたくらの全てとは言わねえ。でも一人でもあんなのがいるんなら、穴あきの教室の方がマシだ」

それで話を打ち切るように、背中を向けて自陣へ歩き出す。

その間、俺が直江たちのところに戻るまでの間。なにか言われるかと思っただ、結局女生徒はなにも言わなかった。

☆

★

☆

「これで1勝1敗ですね。では次の方、前へ」

「はいっ」

高橋教員に促されるように、姫路が前に出る。

「彼女ですか…、それなら私が行きましょう」

Sクラス側からは眼鏡をかけた優男風の奴。

たしかあいつ昨日見たな、名前は…

「葵冬馬…い…ここでくるか」

坂本が真剣な顔で呟く。そうだ、葵だったな。

「強いのか？」

「S組のクラス代表だぞ、決まってるだろ。学年二位の成績保持者だ」

べらぼうに強いじゃん。姫路で勝てるのか？

「科目は何にしますか？」

「私はなんでも構いませんよ」

葵の言葉に、姫路が振り向いてこっちを見てくる。

なんだ？なんか言いたそうってのは分かるが、あいにく俺にサトリ能力はないからそれ以上は分からない。

「おそらく科目の決定権についてだろう。一回は俺が使うから、次が事実上最後の権利だ」

坂本が答える。そういや五回のうち三回は試合内容決めていいっつわれたんだっけ。

次に戦うのは俺だから、『使っていいのか？』って確認してきたのか。律儀だねえ

「使っていいって言ってんだから使えば？」

「え…でもっ」

「大抵のことなら対応してみせるから心配するな」

いいからいいからと軽く手を振ってOKサインを出すと、姫路は一度申し訳なさそうな顔をし、すぐにキリツと表情を引き締めて葵に向き直り、

「総合科目でお願いします」

力強く言葉を発した。

「分かりました。では、初めてください」

「試獣召喚っ！」

掛け声と共に出現する魔方阵。

そこから出てきたのは、姫路を小さくデフォルメしたような姿の召喚獣。防御力が高そうな鎧を着込み、大剣を装備していかにも強そう  
だ。

「そーいや姫路の召喚獣を見るの初めてだな

んで、気になる点数は……見た瞬間話が眼を疑った。

Fクラス “一撃必殺” 姫路瑞希

総合科目 6109点

『6000?!』

『バカな、学年トップクラスの成績だぞっ』

『流石は姫路さん、桁違いだ。可愛さも』

にわかにざわめき立つ生徒たち。

無理もない。総合6000つてのは普通ないからな。

前に成績聞いた時は、確か4000そこらつて言われたけど何時の間に上げたんだろうか

「強いですねえ。その点数なら確実にSクラス入りできたでしょうに、惜しかったですね」

「…私、このFクラスが好きなんです、一人のために一生懸命になれるみんなが。だから、皆さんがいなかったらここまでの点数は取れませんでした」

「……………」

「私は、チャンスが来てもSクラスには編入しませんっ、皆さんと一緒に、頑張ります！」

「そうですか…では、私も手加減はせず全力でいきましょう。  
試獣召喚」

優しげに微笑み、試験獣を召喚する葵。

魔方阵から出てきたのは…柄が長い長刀タイプの青龍刀を手に、中

華風の道着を着た葵そっくりの召喚獣。けして弱そうには見えないが、姫路のと比べるとどうしても劣ってみえる。

これは……いけるか？

姫路はうちのクラスの最大戦力。向こうの葵はクラス代表（男子）実力だけを見れば実質これが大将戦だ。ここで勝利を得られれば、後の勝負に有利になるだろう：士气的な意味で

「いきますっ、やあっ！」

先手必勝とばかりに、大剣を頭上に掲げて突進する姫路の召喚獣。それに合わせるように葵の召喚獣も青龍刀を両手で持ち、槍のように構えて突進する。

十分に距離が近づき、互いに得物得物を振るい、ぶつかり合う。そして――

「…本当に、惜しかったですね」

姫路の召喚獣が、真つ二つになった。

「……………えっ?」

隣にいた吉井が間の抜けた声を出す。

その次の瞬間、タイミングよく空中に文字が現れた。

Sクラス 葵冬馬

総合科目 8775点

「はっ…」

8000人!?

なにそのデタラメな数字!?ありえねえだろ!チートにもほどがあるわ!!

「おおっ、また点数を上げたな。我が友よ!」

「ええ、FクラスがS組を狙っていると聞いて、備えていたのです」

「によほほほほ、流石は葵君じゃ。見よ、F組の猿どもが間抜けた顔

をしておるわ！」

によわ子の言葉を合図にS組どもがやいのやいのと騒ぎ出す。

『所詮Fクラス』『身の程知らず』『勝負あり』『時間の無駄だったな』『負け犬』『クズの集まり』…ガヤに混じってそんな単語ばかりが聞こえてくる。

エリートってこんなもんだっけ？

高橋教員が静かにするよう呼びかけてるが、誰一人止める気配がない。今にもなにか物が投げこまれそうだ。

「…俺こんな中で戦<sup>や</sup>うのかよ…」勘弁しろよな

ただでさえ後ろ（Fクラス）からお通夜みたいな空気が漂ってんだから。皆目線を下に向けて歯を食いしばっている。

姫路が負けたのが相当こたえたみたいだな。

こんなんでテンション上がるか

「逆境で勝てばーとは言ったがマジでそんな状況作らんでも……」

思わず頭を掻きながらボソリと呟いた。

プレッシャー感じてるってわけじゃねーけど、勝てるかどうか自信ねーなー

「……ツク……ヒック……ごめっ……なきッ……！」

「？」

なんか背中が引つ張られ…それに泣き声まで。

不審に思い首だけ後ろに向けると、姫路が俯き姿勢で時折肩を震わしながら、俺の制服を掴んでいた。

「……ツク……わたっ……私が……ヒッ………負けた……っから……」

「……………」

「本当に……ッ……ごめんっ……なきッ……」



よく見れば彼女の顔からは水滴がいくつも零れ落ちていて、それが床一面に敷き詰められてる…カーペット？にシミを作る。

なんだこれは、これじゃ俺が悪者みたいじゃねーか

「泣くなうっとしい。あとジャマだから離せ」

「っ！ナツル!!」

言った途端姫路スキーが大声で怒鳴りやがった。あーあーウツセえウツセえ

クラスメイト全員（一部除く）から軽蔑や怒りの眼を向けられながらも、今だ俺の制服を握りしめて離さない姫路の頭をグシャグシャつと多少乱暴に撫で回す。真後ろに立たれてるからしかたねーんだよ

「心配するな。…お前の思いは無駄にせん」

「…ツク…え…？」

小声で言ったから他の奴には聞こえなかったのか、島田がすぐに近寄ってきて、キツと俺を睨み姫路を引き離す。

完全に悪役だなー俺。なんかワン子ん時と状況似てない？まーあん時は当事者の俺とワン子二人だけだったけど。

今回は人数が桁違いだ。

ま、いいけどね。別に

とりあえず———今だに笑い続ける奴らに目に物見せてやろうじゃねえか

「勝つぞ、俺は」

俺も嫌いじゃねーからな、このクラス

☆

★

☆

「そろそろ次の試合を始めます。双方、準備はいいですか？…おや瀬能君、あなたが4番手ですか」

前に出たら唐突に高橋教員にそう声をかけられる。てっきり忘れられてると思ったが、そうでもなかったようだ。

「お久しぶりッス。高橋せんせ」

「そうですね、…Fクラスはどうですか？」

表情に変化はあまりないが、どこと無く心配したような感じだ。いい先生だなあ…

「まあ悪くはないツスよ。ただ畳にちやぶ台は飽きたんでシステムデスク、狙わしてもらいます」

「ええ、向上心があることはいいことです。一応言っておきますが、召喚獣ではなく直接相手を攻撃するのは反則行為ですから。それを行った場合即座に負けになります」

「…そこまで非人道的な精神は持つてねーツス」

俺が観察処分者だから言うんだろうが…吉井の時は言つてなかったよね？なんで今言うの？

「では、科目は何にしますか？」

いろいろ問いただしたい気持ちがあったが、その一言で切り替える。って相手はさっきの美人さんか

「レディファーストってことで、そっちが決めてどうぞ」どっちにしろ俺に決定権ないけど

「あらどうも。先生、総合科目でお願いします」

「分かりました」

総合か。現国が得意だからそっちの方がよかったんだが…いや向こうが一定点数超えてたら魔法使われるんだよな。それは色々面倒だ。そういう意味でこれはこれでよかったんだろう。これなら相手の点数高くてもテクニクでカバーでき――

「それではどうぞ」

「試獣召喚」

「すみませんちよっとタイムを」

召喚獣が出た途端、高橋教員に待ってもらおうよう即行で宣言した。だつて

Sクラス 三郷雫

総合科目 12024点

「誰か代われっ！頼むから!!」

ありえねーだろ！なんだよ12000って!?チートどころの騒ぎじゃねえよ！化け物か!?

「しっ・島田さん！お願いです、代わってください!!」

「むっムリよ！敵うわけないでしょ!?!」

「木下っ後生だ！代わってくれ!」

「無茶を言わんでくれっ!」

「島津、お前美人好きだろ!?玉砕してこい!!」

「砕けんの前提かよ!?!てかタフガイの俺様でも限度つてのがあるぜ!」

「代われ直江！お前ならやれる!!」

「俺まだ召喚獣ろくに扱ったことないんだぞ。瞬殺されるわ」

その後も何人かに恥を承知で頼んでみるが一蹴される。当然か

つか思い出した、あれ生徒会長じゃん！今朝全校集会で壇上で話してたもん！通りどおりで見たことあると思つたよ！

「あきらめろ瀬能、どっちにしろお前以外はまともにやり合うことすらできん!」

「ふざけんよ！葵より四千も高いじゃねーか！そもそもそんな成績ならなんでクラス代表じゃねーの!?!」おかしいだろ絶対！

「私はすでに生徒会長に就任していたから、クラス代表と兼任するのは無理だったのよ。だから霧島さんに代表になつてもらつたの」

当然の疑問に本人が答えてくれた。くっ…正論ではある

でも納得はできない。俺の総合点数がだいたい2000そこらだったから…、単純計算で5倍以上の実力差がある。いったいどう戦えつてんだ

前にも言ったが、俺は観察処分者なんだぞ？召喚獣のダメージの何割かはフィードバックされるんだ。

あんな点数で攻撃されて直撃でもしたら、痛みでショック死するわ  
「……………瀬能さん……………」

学園に入学して以来、これ以上ないつてくらい悩んでいるとまた姫路が話し掛けてきた。

誰が見ても「沈んでます」って表情をしている。

さらに目には涙が貯まって、今にも零れ落ちそうだ。

「~~~~クソッ！」

さつきは顔見てなかったから悪態つけたが今度は無理だ。

そーいや女を泣かして心が痛まん奴は外道でしかないとかジイさんも言ってたっけなあ！

残念だが俺はまだ外道にはなれてないみたいだ

彼女が口を開く前に両の頬をパン！と勢いよく叩き、気合いを入れる。男は根性！それが一番大事！！

「骨は拾えよテメえら！Fクラス瀬能ナツル、いきます！試獣<sup>サモ</sup>召喚！」

## 10時間目 アイアムスパルタ

おなじみの掛け声で展開される魔法陣、そしてそこから召喚される召喚獣。

その姿は紋服袴。顔は隈取りしていて：なんか歌舞伎役者みたいだ。武器も番傘だし

つーかこの前と姿形が全っ然違うのはなぜだ？他の奴もそうなのかな

あんな化け物みてーなの相手にすんならこの前のピヨリ号が出てきてほしかったが：、いや初めて出した時のモップじゃないだけまだマシか

生徒会長の召喚獣は戦乙女みたいな鎧姿で、武器は無骨な短剣に鎖がついたやつが二つ。両手に一つづつ持っている。

前の奴らに比べたらなんか小さく見えるな

「二人とも、準備はよろしいですね？では、始めてください」  
号令と同時に突進——しようとしたが、嫌な予感がしていったん身を屈ませる。

ゴオツ——！！

「うわっ!？」

すっ：すげえ勢いで短剣が飛んできやがった！普通の召喚獣は物や人に触れられないって分かっちゃいるが、俺自身に当たるかと思っただぞ！

幸い当たる前に前のめりに倒れるように屈んだので、無傷で済んだ。

長い髪には掠ったが、点数に変化はない。身体の一部と認識されていないのか？

とにかく、今のを食らうのはマズイ。

ぶつちやけ構えてから投擲するのがまったく見えなかった。

幸い向こうは操作に慣れてないだろうから、しばらくは回避に専念

して情報を――

「つて早あ?」

気づいたら三郷さんが目前に迫っていた。

何時の間にか手元に戻っている短剣ともともと持っていたやつ  
の二本をペケ字に構えて、すでに斬る態勢に入っている

今度は…駄目だ、かわせない!

ガツギイン!!

武器である番傘で攻撃を防ぐとそんな感じの音がした。  
くっ…ソ重てえ!!

Fクラス “Mr. 規格外” 瀬能ナツル

総合科目 1893点

いいのかわいのか分からんタイミングで発表される俺の点数。  
なんてこった…2000もいってなかったのかよ  
フィードバックで多少痺れる腕を摩りながら対策を考える。マジ  
でどうすつかな

ビュビュ、シュツ――バオツ!!

考えてる間も休みなく猛攻が繰り返される。

左手に持った剣で連続突きを仕掛けてきたかと思えば、即座に右の  
剣で回転斬り。

それをかわして切り込もうとしたら、短剣を投げ飛ばしてきた。

再び番傘でガードするも、さつきより勢いが強すぎて弾き飛ばされ  
る。

悪いことに俺は後方に、傘は三郷の後ろ側に飛んでいく。

しかも両腕が痺れてろくに使えないという二重苦。災難つてのは  
畳み掛けるもんなんだね

「ぐおっ…」

「勝負ありね」

ビュン

!!!

残ったもう一方の短剣が投げ飛ばされる。

その勢いは弓矢、いや弾丸のようだ。実物見たことないけど

しかも先ほど飛ばされたもう片方がUターンしてきて、二刀に挟まれる形になった。

左右どちらかに避けたとしても、すぐに軌道を修正して確実に息の根を止める。

そう考え勝利を確信したのだろう。S組の奴らが顔に笑みを浮かべる。

「舐めんなや！」

目前まで迫ってきたそれを、自分から突っ込みダッキングで

続けざまに飛び込み前転をすることにより、背後からの強襲を回避した。

「ついでに食らえ！」

一回転した直後、相手の腹目掛けてロケット頭突き。

態勢が崩れ身体が"く"の字に折れ曲がったところに、追い打ちで空中回し蹴り！

——前転の極み！

「っ!？」

「まだだまだ終わらんよ！」

地面に叩きつけられ、バウンドしてきた三郷。

その戦乙女風な召喚獣を前に、歌舞伎役者は大袈裟な構えを取り、即座に肩口から押し出すような猛スピードタツクルを繰り出した！

——酔鉄山の極み！

ドン！

車が激突したかのような鈍い音がして、戦乙女が吹っ飛ぶ。

その後ろには番傘が電柱のように刺さっており——ちようどいいから使っちゃおう

「おらア!!」

吹っ飛んだ彼女を追いかけ、番傘にぶつかったところを再び傘に押し付ける。

すぐに持ち手部分を掴んで飛び上がり、そこから落下からニードロップ2段蹴り!

——ポールクラッシュ!

更に倒れている相手の両足を抱え込み、ジャイアントスイングの形で力任せに振り回して番傘にぶつける!

——ヘブンスイング!

衝撃で傘が地面から抜け、回転しながら宙を舞う。

都合よく頭上にやってきたので、空中で掴みダウンした三郷に振り下ろした。

——大剣進討ちの極み!

「傘だけどね」

「容赦なさすぎだよ!」

一連の極みコンボが終わり一息ついたところに、吉井のツツコミが入った。

「いくらなんでもやり過ぎだよナツル!良心は痛まないの!」

「あーうっさい」

三国志を見ろよ。董卓相手に何人の諸侯が手を組んだことか

Sクラス 三郷雫



…流石にアレで終わったとは思ってなかったけど、千いくらかしか削れてない。げんなりだ

食らった方も何事もなかったみたい立ち上がったるし。普通ならオーバーキルなのに、俺・シヨック（大）

まあ差に大きな開きがあるからしようがないだろう。そんなことより

「ずいぶんと上手く扱ってるじゃねえか…召喚獣をよ」

かかって来る気配がないので、思い切って訊いてみる。

あの動きはどう見ても経験者のそれだ。観察処分者じゃないのになんでそんなに慣れてんだ？

「喧嘩や決闘といった争いが絶えない学校だと、どうしても戦力が必要なのよ」

「まあそうだな」いざいざ一つ止めるの力づくってのは珍しくないし「だから生徒会のメンバーは全員、物に触れる召喚獣を使用出切ることを許されてるの。もちろん学校内限定で武器も持ってないけどね」

「……………マジかよ…」

こいつ確か一年の時から生徒会長やってなかったっけ？

だとすると使用期間俺や吉井以上じゃねえか

反則でしょこの戦力にテクニクって

「ちなみに召喚獣が攻撃を食らったら本体も痛いなんてことは…」

「ダメージがフィードバックされるのは観察処分者だけよ」

なにその理不尽

「あなた達は罰なんだから、当然でしょ？」

「…腹立つわあその余裕」

内心焦りまくりながらも、精一杯の強がり悪態をつく。

どう足掻いても絶望。そんなフリーズが頭を過った

☆

★

☆

（零Side）

最初の攻防から十数分が経過した。

Sクラス 三郷雫

総合科目 9894点

VS

Fクラス “Mr.規格外” 瀬能ナツル

総合科目 315点

いく度となく彼の攻撃——対人ならばどれも一撃必殺であろう  
それ——を召喚獣の身に受け、それなりに多かった点数はかなり削  
られた。

それに対して私が与えたダメージの数はたったの二回。

それも武器の刃ではなく、短剣についている鎖をぶつけて与えたも  
のだ。

彼はとにかくかわすのが上手くて…クリーンヒットさせれる気が  
しない。

しかし、その彼はたったの二回でもう追い詰められている。

今も、召喚獣が受けたダメージのフィードバックのせいで呼吸は荒  
く、肩で息をしている。

終わりは近い。彼の姿を見れば誰もがそう思うだろう。

『ははっ、数回攻撃されただけでもう満身創痍か。所詮Fクラスだな』  
『あんなカスみたいな点数で挑むからこんな目に合うんだ』

『違うない』

『姫路も不幸だよな、底辺に落ちたせいで馬鹿な夢に付き合わされて  
や』

『瀨能の奴はいい気味だ。出る杭は打たれるってのはこういうことを言うんだな』

「山猿はどこまで行っても山猿なのじゃ、高貴なるこなたらの足下にも及ばぬわー!」

Sクラス側から嘲笑とともに、瀨能君を侮蔑する言葉が投げかけられる。

同時に私を褒め称える声も聞こえるが、全く嬉しくない。

どうして相手を褒めないの?点数に差があるのにここまで諦めないで食らいついているのに。

私が召喚獣を扱うようになったのは、生徒会に入ってしまったらしくしてから:約1年前だ。

彼の方も、観察処分者として召喚獣を扱う(扱わされる)機会が多いとはいえ、使用者としての経験値は断然私の方が多い。

それなのにこちらの攻撃はことごとくかわされ、向こうの攻撃だけがヒットする。

ここまで見事だと憤りも湧いてこない。  
だからだろうか。

「もう止めにしない?」

気づいたらそう、話しかけていた。

「……試合放棄、って訳じゃなさそうだな」

警戒を緩めない、鋭い眼差しのまま話しかけてくる。

その姿は気高く…そして痛々しい。

「このまま戦っていても無意味でしょう。勝ち目もないのに」

「以外に奇跡ってのは足元に転がってるって言うぜ」

「運任せなのね」

本気で言ってるのかそれとも強がりなのか:前者ならがっかりね。

「そこまでして戦う理由があるの?諦めないことは美徳だけど、理由

がなければ醜いだけよ」

「うわキツッ」おどけた口調で笑う彼は、しかしどこか覇気がなかった。

「理由…理由か。…ねえな、確かに」

つぶやくように吐露しながら、疲れたように遠い目をする。

本当は彼も分かっているのだ。

自分が勝つても首の皮一枚繋がるだけ。

しかも自分のクラスはすでに諦めムード。

これだけの状況下でよくもまあ粘ったわね。

「もういいでしょう。ここまで善戦したあなたを誰も責めたりしないわ」

「……………」

私が言い終えた後、彼は考えこむように瞼を閉じ、ふーつと深く息を吐いた。

知っている。

あれは悩んでいるわけではなく、なにかを決意した時に取る仕草だ。

「……………まー…いつかなー…」

眩きながら開かれた瞼。その瞳には投げやりな感情しか浮かんでいなかった。

その姿を見た瞬間、私は目を伏せた。

なぜ？自分から進めたことなのに…これ以上、傷つき罵られるのが我慢できなかつたはずなのに、

今の彼を見るのがたまらなく嫌だった。

「……………やだ…」

その時かすかに、Fクラス側から女子生徒の声が漏れた。

「…やだ…やだよ…やだよタイガ！」

声は次第に大きくなり、今にも泣き出しそうな悲痛な叫びとともに一人の少女が集団から飛び出した。

川神一子。

校内でも一・二を争う有名人。川神百代先輩の妹さんだ。

「おい一子！」

すぐさま鋭い目をした男子生徒が止めに入ったが、彼女は構わず喋り続ける。

「アタシ、変わったよ？タイガのおかげで、変わったんだよ？『俺のせいじゃないお前自身の力だ』ってタイガは言ったけど、あなたのおかげなんだよ？」

「……………」

「勝って、勝ってよタイガ！お姉さまと同じくらい、あなたはアタシの憧れなんだから、負けちゃだよ！」

「ワン子……」

感極まったのか、彼女は涙を流しながら瀬能君を見つめる。

「負けないで……」

「……………きつい注文してくれるぜ」

川神さんが真後ろにいるが故に、その姿を見るため完全に顔を背けている彼の表情を知るすべは私にはない。

「…昔、自分で言ったことがあったっけかな」

唐突に彼が語り始める。

一瞬、私に向けての言葉だと分からなかった。

『ヒーローとは諦めを知らぬものだ』って。…ま・あん時はネタで言っただけで俺自身ヒーローになれるとは思ってないし、なりたいたいも思っちゃいない」

でもね、といったん区切り、彼は身体ごとこちらに向き直った。

「仲間の期待一つ答えられない根性無しにもなりたくねーんだよ」

その顔には先ほどもまでの空虚な表情はなく、真剣な眼差しがまっすぐに貫く。

「一人でも俺に期待してくれてる奴がいるかぎり、俺は戦うのをやめない」

「…素質は充分あるように見えるけど」  
英雄ヒーローになるための

「でもどうするの？逆転するにしても、あなたの残りの点数は315点しかないわよ」

「余裕だね。300ありやああんた程度、百回は倒せる」

「その冗談、面白くないわね」

容赦無く短剣を投擲する。

今日一番の勢いだ。

このまま短剣が当たれば確実に試合は終わるだろう。

なのに彼は、微塵も召喚獣を動かさない。

いや、持っている番傘を正眼に構えさせたが、それだけだ。

「こいつが男の生き様よ…!」

傘の上を短剣が通過しようとした瞬間、召喚獣が素早く傘を開く。

そしてすぐさま傘を閉じた。

最後に私の武器が突き刺さったままの傘を開きながらぐるりと

その場で横に回り――

勢いよく大見得を切った。

……ポージングの意味が分からないわ。

びゅうん!

「っ!」

不意に視界が動く物を捉えた。

私の召喚獣の短剣。その柄の先に繋がっている鎖だ。

なぜ武器に鎖がついているのかは知らないが、それが先ほどの彼の動作で大きく波打っている。

このままいくとこちらに鎖が叩きつけられ、ダメージを受けるだろう。

：防ぐだけじゃなくて同時に攻撃も狙っていたのね。あの行動はフエイクってところかしら。

悪くないとは思うけど、策というにはおどなりすぎる。

鎖は武器と持ち主とで一直線に存在している。その間に障害物はなく、動きは丸わかりだ。

そもそも本気で当たると思っているのだろうか？こんな召喚獣に手を離させればそれだけで回避できる。

それとも他になにか…？

とりあえず私は、自分の召喚獣に回避行動を取らせる。

いや、取らせようとした。

しかし

『……………』

彼女——自分を小さくしたようなものをこう呼ぶのはちよつと変な気がするけど——はピクリとも動かない。

「どうして…!？」

慌てて様子を見てみれば、その表情はぽーっとしていて頬がうつすらと赤らんでいる。

もしかして見惚れてる？

バチンツツ!!

「ぎゃっ……!」

不用意に近づいたため、二つのものがぶつかる音と光景を間近で感じてしまった

実害はないと分かってはいるが、実際に衝撃が発せられているように錯覚し、思わず小さく悲鳴を上げる。

Sクラス 三郷雫

総合科目 8613点

…さつきまでと点数の減りが違う…！私自身の武器だから？  
だからって一撃で千以上ダメージを受けるなんて…いや、それより  
も

「あなた今、いったいなにをしたの…？」

「あー？わっかんないんですかー？」明らかに相手を馬鹿にした、ニタニタと嫌らしい笑みを顔面に。

「たいしたことなんだね。学年主席つつつても」

…挑発だということは充分理解できた。

理解はしたけど、苛立ちを抑えることはできなかつた。

気づけば召喚獣を突撃させていた。

「虎よ虎…！」

——瞬間、何が起きたか分からなかつた。

勢いよく突進していたはずなのに、気づけば彼のいた位置で立ち尽くしていて、

逆に彼は私がいた場所から、番傘を両手で掴み、振り上げた状態で召喚獣に突っ込んでいた。

「オラアアツツ!!」

ドゴツツ！

混乱する暇もなく、容赦の無い一撃が後頭部に決まる。

Sクラス 三郷雫

総合科目 7891点

また千点近く…！しかも今度は私の武器を利用せずに!?

「あなたいったい…！」



「スパルタ軍は300人で10万の兵を倒したらしいな」

Fクラス “Mr. 規格外” 瀬能ナツル

総合科目 315点

「俺に出来ない道理なし」

アイアムスパルタ。そう彼はつぶやき、ニヤリと口角を上げる。

なるほど…称号に偽りなしね

## 11 時間目 俠道

憧れを持たなかった。そう言ったら嘘になる

目指したことはない。そんなことはない

それでも

設備がいいってだけで、俺が欲しいものそこにはなかった

くナツルSideく

『なんだ今のは!?』『反則だろ!』

Sクラス側から非難する声上がる。

さつきまで余裕そうに嘲笑と侮蔑してたのに、いそがしい奴らだ『正々堂々やれー!』『卑怯者がっ!』

「いかなる手段を用いても勝ちにくるとは、山猿とまことに醜い奴らじゃー!」

「…うるっせーんだよド素人どもがッ!!」

口々に喚き散らしてくる連中に、ありつたけの怒号を放ち睨みつける。

何人が気絶したみたいだけど気にしないでおこー

「黙って聞いてりやピーピーギャーギャー好き勝手騒ぎやがって、調子にのんな三下どもが!」

「なっ…なんじゃと!」

「あ”あ?”」ギロリ

真っ先に反応したによわ女をより一層の殺気を込めて睨みつける。

途端に「によわっ…!」と小さく漏らして静かになった。(それ悲鳴?)

「自分らが有利な時や、相手が格下だと思った時だけ余裕ぶりやがって…大したエリート様だなあ?」

『…………っ、』

俺の物言いにカチンときたのか、何人かがキツと目尻を吊り上げる。

「なーに？なんか言いたそうだねー。言っつてごらん？聞いてあげるから」

んー？とにこやかに笑顔をつくり、厳しい視線を向けてきた奴らに問い掛ける。

しかしそいつらは、俺と目が合うと（あるいは合いそうになると）慌てて顔を背ける。

……………軽く傷ついた

それ以上にイラつときた

「なんだ？なにもないのか？流石はエリート様だな」

上っ面の

「他の奴より高え点持ってるやつが、どの口で卑怯とか抜かしてんだよ。正々堂々？おーいいよ。やってやるよ。その場合はお前らも俺らに点数合せてくれるんだよな？せーせーどーどーのSクラスさん？」

Sクラスを強調する際、大げさに両腕を広げて尋ねる。

その結果は、一握りを除いたほとんどが気まずそうにあさつての方角へ顔を向ける。というある意味予想通りのものだった。

「できもしねえことを偉そーに語ってんじやねえよ金メッキ共が。ハンドで貼り直すぞ」

完全に沈黙した群衆に向かい 緑青浮ろくしゅうきが、と最後に小さく吐き捨てた。

ちなみに緑青は銅。または銅合金の表面に生じる緑色の錆びのことだ。

有象無象の中に銅以上の奴がいるかどうかもあやしいがな（あ、シヤレじやないよ？）

「さて…」

あらためて今現在対戦中の相手に向き直る。

喋ってる間攻撃してくるかと思っただが、彼女はただ黙って立っただけだった。その姿が絵になるのがなんかムカつく

「待たせたみたいで悪いね、生徒会長」

「いいわよ別に。珍しいものも見れたし」

珍しいもの？

「Sクラスに真っ向から噛みつく人はいないから。素晴らしい啖呵切りだったわ」

「思ったことそのまま言っただけなんだけど」

実際<sup>うわべ</sup>上部：いや表面もろくなもんじゃねーだろあの自称エリートども

「まあ中にはあんたみたいな例外がいることは認めてやるよ。一握りだけど」ちらりと教室の後ろの方にも目を向ける。

クラス全員がこいつらみたいだったら：やっぱり入らなかったか。つまんなそうだし

「それでも嫌悪感持つことはなかったかな…」

「？ なにか言っただ？」

「いやなんでも」

それ以上の追求を逃れるため——そしてさっさと終わらせるために、召喚獣に戦闘体勢を取らせる。

「いくぜ三郷。手加減すんなよ？」

「…そんな余裕はなさそうね」

瞬間、二体の姿が弾けるようにかき消え——

同時にガギャアン！と鋭い金属音が響いた。

…向こうのは分かるがこっちは番傘だぞ。なんで金属音がするんだ？

「大した傘ね、どこで買ったの？」

「企業秘密だ。俺の傘が防ぐのは雨粒だけじゃねえぞっ！」

罅迫り合いの形から、無理矢理剣を弾いて若干の隙間を作る。  
すかさずそこに突きー！

「ボディがから空きだぜヒヤツハー!!」

ズガシユ！

「くっ…い！」「チイイツ！」

胴体部。正中線を狙ったそれは、会長の腕をちぎり飛ばすまでに終わった。

文面だけ見るとかなりヤバげだけど召喚獣のことですよもちろん  
つか寸前で身体を半身にそらしてよけやがったよコイツ。どんな  
反射神経してんだ  
「つてうおおっ!?!」

息つく間もなく短剣が今まで頭があった場所を通り過ぎていく。  
かわし損ねて横顔に紅い筋ができた。リンか俺は

Sクラス 三郷雫

総合科目 5986点

VS

Fクラス “Mr. 規格外” 瀬能ナツル

総合科目 281点

「やるじゃねえか…やっぱアンタ本物だよ！」

「あなたも…ねっ！」

微笑みながら素早く駆け寄ってき、残った右腕で鋭く斬撃を放ってくる。  
バックステップで射程距離から逃げるが、追撃で追いつてくる  
のでバク宙で後ろに跳ぶ。

そこで短剣を飛ばしてきた。

そこで短剣を飛ばしてきた。

ナッツ（俺の召喚獣）は天地逆さまにこちら側、つまり相手に背を向けてる状態だ。

おまけに絶賛空中浮遊中。もう刺さるしかないね！

「つぎっけ・ん・な、コラあ!!」

念心流・後髪うしろがみ！

逆さまの状態で、それまで勢いのままに動いていた歌舞伎役者独特の長い髪が、一つの生物のごとく動き出す。

まるで蛇が獲物に食いつくかのように真つ向に短剣に向かい、横からはたくようにしてその軌道を変えた。

うむ、始めて活用出来たな

逆さの状態から綺麗に半回転をして床に着地するナッツを見ながら、感慨深く思う。イメージ通りに動いてくれてよかった

「あなた…本当に何者なの？…どうしてあんなことできるの？」

「頭つま先から足のとっぺんまでずずいと神経張り巡らしゃあ、動かせねえ部位なんてねえんだよ」

「…デタラメな身体の作りしてるわね」

ため息をつきそうなほど呆れた目を向けてくる三郷。

その後ろにいるモブ達も化け物を見るような目でこちらを見ている。

ツッコんでほしかった

あなたの頭にはつま先があるの？とか、髪の毛にどうやって神経を通しているの？とか

個人的にはどこのサイファーポールだよ、って言われたかった！

「アンタにはがっかりだよ」

「なによいきなり…」

「生徒会長つつつてもこの程度か…ウチの学校のだから凄いなと思って

たのに、がっかりだよ！」

「ダメ出しをされる意味も、その理由もよく分からないわ」

わかってない。あなた、なにも分かってない（c.v. 吉野裕行）

「：飛ばしてるなーナツルのやつ。生徒会長相手にも絶好調だ」

「相変わらずわけわかんねーな…」

「タイガ節全開だね」

「ねえねえ、これいけるんじゃない？S組のトップ相手に互角にやり合ってるわよ」

「むしろ圧倒じゃね？ダメージ的にー」

「いける…いけるよきつとー！」

「瀬能さんがんばってくださいーい！」

「ナツル負けるなー！」

今の今までお通夜みたいなムードで押し黙っていたうちの連中が、水を得た魚のように騒ぎ出す。

現金な奴らだ。やめろよ今さら

「燃えんだろ」

おそらく、いや確実に三郷は勝負を急ぐだろう。

盛り上がり出したFクラス。それとは逆に若干勢いの衰えを見せ始めたSクラス面々。

これ以上調子づかしたら手が付けられない。そう考えてるはずだ。「…っ！」

予想通り、一度弾き飛ばされた短剣を引き戻し、再び投げつけてきた。

それだけでなく切られた腕からもう片方の剣をもぎ取り、自ら突っ込んでくる始末。

「髪吹雪ー！」

その三郷に向かい、青く長い髪が横殴り豪雨のごとく突き刺さる。

Sクラス 三郷雫

総合科目 5012点

「…くっ！」

途端に三郷の顔が険しくなる。

しかし焦りはなさそうだ。

俺が取るべきベストな戦法はヒット&アウエーの持久戦

時間制限はないし与えるダメージ量もこちらが上。ともなれば多少消極的と見られても慎重にチャンスを待つのが賢いやり方だろう

そう考えたところで、俺は持っていた番傘を横に放り捨てた。

「…えっ？」

困惑の表情をする三郷。

他の奴らも、俺の突然の行動に意味が分からないといった様子。

啞然とする周りをほつといて、ナツツに両手・両足を地面に力強くつけさせ、姿勢を低く構えさせる。

ちようど四足獣が獲物に飛び掛かる前の、臨戦大勢を取った時みたいな形だ。

「あなた、一体なにを」

「ちまちまやるのは嫌いでね」

現在一勝二敗、引き分けはダメ。負けたら終わりのこの状況。ポリシー捨ててでも確実に勝ちにいくのが定石<sup>セオリー</sup>。

だからこそ打って出る

逆転の兆しを見せたこの状態で派手に勝てば、流れは一気にうちにくる。最高の形で坂本に繋ぐことができる。

「…あなた本気なの？上手くかわしているけど点数は私の方が上なのよ？」

「髪装甲」



目を細め、軽く苛立った様子の三郷を無視し、髪の毛を身体全体に巻き付けて鎧のようにする。

その際ついでだからと、顔の部分だけ化粧をしたかのように髪の毛を配置させる。虎みたいにな

「……あまり、調子に乗らないことね…」

三郷の目が一層厳しくなったかと思えば、それに比例するかのごとく、召喚獣から発せられる威圧感が高まる。

触れちまったかな。逆鱗ってやつに

「チョーシこかしてもらうよ。若いからな」

「…残念ね。あなたのこと、少し好きになれそうだったのに」

「そいつはよかった。俺<sup>お前</sup>S組嫌いだから」

目指さなかった。わけじゃない

憧れなかった。わけじゃない

それでも

所詮てつぺんも変わらないもんだ

一年の後期——たしか三学期だったと思うが——俺はS組進級に乗り気だった。

学園一の秀才天才が集まるクラス。設備諸々含めて期待はできる。

幸い特待生制度といった、ズバ抜けた武力さえ証明できればSクラスに行く事ができるという俺にピッタリなものもあるし、狙ってみるのはありだと思ってた。

そして特待生試験当日。早めに帰って明日に備えようとした矢先、何気なく覗いた路地裏の陰で、

胸に“S”のバッチをつけた二年生が、下級生らしき男を二人がかりでカツアゲしていた。

それを見た瞬間、もうどうでもよくなった

エリート集団だのなんだのと自称しようとも呼ばれようとも腐っていたら価値はない。

どこも一緒なら、どこでも一緒だ。翌日の朝に目撃者に脅しをかけ

にきた二人組みを半殺しにして、そう思った。

思っていた。

Fクラスに来るまで

「掃き溜めにこそ鶴はいる」

瞬間、極限まで抑えつけられた筋肉を解き放ち、ナッツが矢のように飛んでいく。

しかしすぐに身体が縦に回転し、丸鋸のような形で三郷に向かい突っ込む。

——絶・天狼抜刀牙！

「食・らええええええっ!!」

「っ…!？」

勢いよく突っ込んでくる俺の召喚獣を見て、三郷が自分の召喚獣に防御体勢を取らせる。

残った腕で剣を使い、ガードが完成した所でナッツが激突した。

すさまじい音——チェーンソーが鉄製のものにぶつかった類いの——が教室に響くと同時に、全身に強烈な激痛が走る。

超いてえ

なんでこんな目に。疲れた。帰ってえ。もうヤダ。放り投げたい。よくやったじゃん。終わりにしてえ

そんなネガティブな考えが頭に浮かぶ。

心なしか回転も緩んだような気もする。だけど

「根性見せろよナッツ…っ！」

『……………!』

再び回転の速度と勢いが増した。

ボウッ!! さらにナッツの髪から炎が上がる。

自分で出した炎だからか、熱くはないしダメージもない。が、全身を覆っているから火だるま状態。

「るあああああつ!!」

「…くっ!」

数瞬、あるいは数秒だろうか。

その攻防はすぐに終わりを告げた。

ズガゴウツ!!

表現のし辛い音がして、勢いよく埃が舞い上がる。

そのせいで視界が塞がれ、召喚獣二体の姿が消えた。

勝敗は——?

全員が見守る中、次第に舞っていた埃が収まっていく。

そこには、

Fクラス “Mr. 規格外” 瀬能ナツル

総合科目 12点

VS

Aクラス 三郷雫

総合科目 0点

真つ二つになり、燃え上がりながらも床に倒れ伏す召喚獣と、衣装や髪など所々汚れて満身創痍に立ちつくすナツツの姿があった。

「勝者…瀬能ナツル」

しばらくして高橋教員が、信じられないといった顔で勝利者コールをした。

長かった四回戦が、ようやく終わったのだ

## 12時間目 彼女の心音・彼の本音

|     |         |   |   |      |
|-----|---------|---|---|------|
| 一回戦 | 吉井明久 ×  | — | ○ | 美咲陽菜 |
| 二回戦 | 土屋康太 ○  | — | × | 工藤愛子 |
| 三回戦 | 姫路瑞樹 ×  | — | ○ | 葵冬馬  |
| 四回戦 | 瀬能ナツル ○ | — | × | 三郷雫  |

「同点だー！ー!!」

「うるさい黙れ」

功労者への配慮ってのが感じられねえ

☆

★

☆

〳〳ナツルSide〳〳

『やった、やったぞ!!』

『これでかつる!』

試合も4回戦までが終わり、その結果を見てFクラスの面々が思い思いに騒ぎ立てる。本当に現金な奴らだ

「オイオイ、これほんとマジでいけんじゃね!？」

「Sクラス設備が現実味を帯びてきたねー」

普段は直江たち関連以外では口を開かない椎名も積極的に喋っている。

それほどまでに我がクラスメイト達は興奮しているということか

そして俺はそんな輪から少し離れてリクライニングシートに座り込んでいる。

なぜだろう。ちよつとしょんぼり

最大の功労者のハズなのに…

「タイガ大丈夫? まだ痛むの?」

そんな俺に近づいて来てくれるのは2―Fのマスコット(候補)、川神ワン子。その優しさに全英が鳴いた

ほんの一年前まで嫌悪感を裏から表から突き放っていたのにえらい変わったもんだ

「こういうとき不便よねタイガの召喚獣って。試合に勝ってもペナルティがあるのだから」

「まー観察処分者ってのはもともと罰の意味合い強いからな。しようがねえだろ」その辺は受け入れてるからどうでもいい

「というか今一番痛むのは脇腹だ。誰だピンチを救ったヒーローの横に蹴りくれた奴」

見てはなかったがああの感触は紛れもなく足だった。靴のつま先が腹にめり込んだからな

無骨ながらも体重の乗ったいいローキックする子がいるじゃないの…

「人が至福に浸ってるとこ邪魔しやがって…そんなに俺が憎いのか」

「試合前ならともかく勝った直後で憎む人なんて…」

「だいたいワおン子前が急に抱きついてくるからだろーが」

あれがなければ犯人の姿くらいは確認出来ただろうに

「……………」

「…なんだてめえ。その目は」

「いやいや別に。なんでもないよゲンさん」

今だ騒いでる連中の側で、直江と源が意味深なやり取りをしている。どっちかなんか知ってるのか？

まさかこいつらが犯人か!?!とも一瞬思ったが、片方はろくな接点がないしもう片方は軍師気取りのもやしっ子。流石に無理があるか

そうなるとSクラスの誰かかー?色々言っただし負かした直後だから可能性は高いが、奴らはずっと自分が見たものを信じられないといった表情で呆然としている。

試合終わってからそこそこ時間経つけど、あいつらずっとあの調子だな

「ふ…ふんっ、まぐれに決まっておるわ!」とか、かろうじて強がり

言ったやつもいたが、俺が顔を向けただけでバツの悪そうに目を逸らした。

こんなのがなにか行動するのは無理があるだろうか…この事件迷宮入りしそうだ

「そーいや坂本はどうした」

席に備え付けられている冷蔵庫から飲み物を取り出しながら尋ねる。

「ナツルその他の人の…」

「かたいこと言うなよ」

持ち主っぽいのが『あつ…』とか小さく漏らしていたみたいだが、それだけでほかになにも言ってくる気配がない。

本人が黙って見てるってことは貫つてもかまわないうってことだよ  
ね？

「よく見りやS組むこうの大将もいねえみたいだけど」

つーか立会いの高橋教員の姿も見えない

みんなしてどこ行ったんだ？

「雄二と霧島さんなら最後の試合しに行ったよ。筆記試験だから別室でやるんだって」

「…聞いてないんですけど」

試合内容も開始のやり取りも

「ナツルは悶え苦しんでたからね」

「おかしいだろそれ」

なんで俺が痛みと戦ってる時に話進めちゃうの？介抱とか待つとかするでしょ普通

「時間がもつたないしタイガなら大丈夫だろうって代表が言ったわよ」

「知り合って半年もしてないのにどんな根拠だよ…」

ぼやきながらペットボトルを口に運ぶ

ぶーーーーー！！

勢いよく吹いた。

「わっ!?!汚っ!」

「きやああっ!?!」

すぐそばにいた吉井とワン子が被害を受ける。

といっても軽くかかったただけみたいで、服についても簡単に落とせそうなレベルのものだ。

むしろ俺の方が被害デカイ

「げほっ…な、なんじゃこりやあ…!」

口に入れた途端なんとも言えない味が…

恐る恐る手の中のペットボトルに目を落とす。ラベルに書かれてた商品名は

「ドクトレペツパー」

「意味わかんねーよ!!」

思わずツツコミながら力一杯ぶん投げる。

投げた先に人がいて、『うぐえっ!?!』とか聞こえたが気にはしていない。(さっき『あっ』とか言った奴と同じな気がするけど気のせいだよね)

「ドクターじゃねーのかよなんだこのパチモン臭え飲み物は!?!」

「一部の人には大人気な高額商品らしいぞ」↑大和

「…いくらするんだ?」

「たしか30000円そこらだったような…」

「嘘だろ!?!」

「こんな産業廃棄物みてえな飲料物が3万!?!」

買う奴もアレだが製作・販売してる企業もなに考えてんだ

「味を二の次に高級で健康にいいものを大量に使ってるらしい。高麗人参とか」

「もつとそれらしい見た目にしろよ…」入れ物の形がアクエリそつく

りだから間違えただろうが

「…クソ、まだ口の中が変な感じする」

どうにかしようとか冷蔵庫を漁るが、さっきのいかれた液体以外飲み物は入ってない。

清涼飲料水とか入れとけや

コトっ…

外に買いに行こうかと考えていると、机にペットボトルが置かれる。

見たところポカリみたいだ

「おお、気が利くじゃねーか。もらうぜ」ワン子か姫路か？

「ええ、どうぞ」

返事が想像していた声と違ったので、キャップを掴む手をそのままにそちらに目を向ける。

そこには予想外な人物が立っていた。

「生徒会長…」

「三郷でいいわよ。試合中みたいに」

無表情で目の前に立たれると迂闊に呼べないんですけど

「……………」

「……………」

なんか喋れや

なにしに来たのあんた？

テンション上がりまくってたさつきまでと違い、通常運転でこいつと対峙するのは精神的にキツイ。誰か助けて

ポカ리를封開けて一気に仰ぎ、同時に周りにアイコンタクトを…つてオオイ！誰も目を合わせようとしねえ!!

しかもいつの間にか吉井たちも遠いところに…逃げやがったな!?

「さつきは、してやられたわ。完敗よ」



「は？」

なんだいきなり

「見事に召喚獣を使いこなしてたけど、なにかコツがあるの？」

「ああ…」

試合の振り返りをしてるのか。なにかしら思うことがあったんだろう。多分

対戦者の、しかも自分を負かした相手に躊躇なく話しかけに来たのは意外だが、本当に優秀な奴ならアリかな

「…俺は召喚獣を動かす時はゲーム感覚でやってるな。コントローラーをイメージしてコマンド入力したらその通り行動するとか」

動かすまでに時間はかかるけど、慣れないうちはゲーム機に繋がってるって考えた方がやりやすいんじゃないかな。

あくまで所感だけど

「最近はまだ少しフレンドリーに接してるけどな。タッグパートナーみたいなもんだと思って…愛称で呼ぶのも」

「…ちよつと待って」

結構乗ってきたところで待ったがかかった。

「訊いておいてなんだけど、そんなに簡単に喋ってしまっていないの？私は一度負けたとはいえ、また戦うかもしれないのよ？」

「そうだね」

プロテインだね

今回の試召戦争で勝って終わっても、S組側から申し出が来るだろう。間違いなく

でもだからって、教えんのケチって優位に立つってのはなんかイヤだ。小物っぽい

「(あんたは確実に強くなるだろう。なら俺はそんなあんたを超えてまた勝ってみせる) こんな美人に頼まれちゃ無下には出来ないしな」

「……………!?!」

「ナツル。多分思ってることと口に出したことが逆だぞ」

「うえっ!？」

直江に注意され、反射的に口を手で抑える。  
なに言った俺、今なに言った俺え!？」

「……………」

やべえ、こつちは下から見上げる形なのに、うつむいてる会長の顔が見えない。(どうなってるのいったい?)

昔友達に「呼吸するみてーに女口説いてんじやねーよたらしがっ!!」って怒られたし(そんな気はなかったんだが) ……早めに謝つた方がいいかな

「…瀬能君」

先手を取られた。

こつちを見つめる彼女の顔は、いつもの無表情ながらも頬がほんのり赤い。

赤面するほどに頭にきてるのか

負かされた上にあんなことまで言われちゃ当然かもしれない。他とは違うとはいえプライド高そうだからな

禍根を残すのもあれだし、こうなったら土下座をするしかないだろうか

「あなた、今からでもSクラスに来なさい」

「…はっ?」

「その才能を腐らせておくのはあまりにももったいないわ。お化けが出るわよ?」

「俺携帯はボーダフォンなんだけど」

そろそろ買い替えようかなコレ

「…高評価してくれるのはありがたいが買いかぶりすぎだ。今のところが合ってるよ」

「床に穴が空いてる教室が?」

「One for All, All for Oneなクラスが」  
少し視線をずらせば、今だ楽しそうに騒ぎ続けるクラスメイトたちが目に写る。

なんてことはない。俺が本当に欲しかったのは、こいつらみたいな仲間だったんだ

「雲みたいに空を流れるのも悪くはなかったが、今は風のように羽ばたきを感じたいのさ」

「……変わったのね。瀬能君」

「誰のお陰かは知らないけど、その役目は私がしたかったわ……」

「あ？ なんだったって？」

「そろそろ五回戦の結果が出るみたいよ」

教室の前方天井からスクリーンがゆっくりと下りてくる。

「ようやくか……聞いてなかったけど最終戦の教科ってなんだ？」

「日本史よ。ただし内容は小学生レベルで、方式は百点満点の上限ありの筆記試験。あなたのクラスの代表はなにを考えているのかしらね」

それは俺もよく分からない

ただ、勝てない勝負をする奴じゃないからなにかしら策があるとは思うが……

しばらくしてスクリーンに文字が映し出される。

Sクラス 霧島翔子

97点

発表された瞬間、歓喜の声と落胆の悲鳴がFクラス・Sクラス側からそれぞれ流れた。

「吉井君っ、やりましたね！」

「やったわね、アキ！」

「うん！今日は学年最下位の僕らが、Sクラスに勝った記念すべき日

だ！」

明久達を筆頭に、満面の笑みを浮かべて喜ぶFクラス。

「…完全に敗北ね」

生徒会長が落胆の声を漏らす。

「そんな…うっ、嘘じゃ!!こんな…!」

『そんな…!』

『会長に続いて代表まで…!?!』

この世の終わりみたいに嘆くSクラス。

勝者と敗者が明確に決まった瞬間だった。

スクリーンに再び文字が映し出されるまでは。

Fクラス 坂本雄二

53点

歓声が一気に消え失せ、誰も動かなくなった。

☆

★

☆

「雄二…いったいどういうことなのさっ!!」

Fクラス総出で視聴覚室になだれ込み、一番最初に乗り込んだ吉井が怒鳴り声を上げる。

当然俺も吉井のすぐ後に続いた。

「三対二でSクラスの勝ちですね」

高橋教員が、騒々しく押し入った俺らを特に気にした様子もなく冷静に告げる。

その通り だからよけいに 腹が立ち (川柳)

「…雄二、私の勝ち」

「…殺せ」

「いい覚悟だ!殺してやるから歯を食いしばれっ!!」

怒りをあらわに吉井が坂本に近付く。

「よっ・吉井君駄目です！」

「吉井、お前は足をキメろ。俺は首をヤル……！」

「落ち着くのじゃ瀬能！」

姫路が吉井を、木下が俺を必死で止めた。

「坂本お！てめえあんなに大口叩いて53つてなんだコラ!!」

「そうだよ！0点ならまだ名前の書き忘れてるって思えるけどこれじゃあ……」

「いかにも俺の実力だ」

「この阿呆がアアア!!」

身動きを封じられながらも渾身の力をもって坂本の頭を掴む。

「返せよ……数時間前の俺のかっこよさ気な台詞、返せよ!!」

「中2乙」

「殺す」躊躇せず掌に力を込める。

「止めなさいよ瀬能っ！あんだだったら30点も取れないでしょ!?アキも……！」

「否定しない!」「失敬な、あと20はいったわ!」

「たいして変わらないわよ!」

試合にすら出してもらえなかった奴が偉そうに……!いつペン対峙してみろってんだ

「……約束通り、一つ言うこと聞いてもらう」

「……言ってみろ」

今だに坂本の頭にアイアンクローを決めてるんだが、お構いなしに話が進んでいく。

「……………! (カチャカチャ)」

それと同時にすごい勢いでカメラを準備しだす土屋。

なんだろう、このおいてきぼり食った感じは

俺が悶え苦しんでる間にいったいどんなやり取りがあったんだ

霧島はちらつと一瞬姫路を見て、軽く深呼吸。そして

「…雄二、私と付き合って」

——そう言った。

「……え？」

間の抜けた声に釣られて思わず手を離す。ついでに木下も離れた（今まですつとくつついてたんだよな…）

「…やっぱりな。だがその話は何度も断っただろ？まだ諦めてなかったのか」

「…何度断られても諦めない。私は雄二だけが好きだから」  
今の霧島の一言で後ろの集団から殺気が噴き出してきた。

「…拒否権は？」

「ない、約束だから。…これからデートに出掛ける」

そう言うのと霧島は坂本の頭をぐわしっ！とわしづかみ、教室から出て行く。

「がッ…！は…離せ！やっぱりこの約束はなかったことに——！」

ドナドナドゥナドゥナ

連れていかれる坂本の姿を見ると、なぜか自然にそのようなBG Mが流れた。

やがて声すら聞こえなくなり、それでも茫然としていると。

「さて、坂本の方も片付いたようだし。今から我がFクラスの補習についての説明をしよう」

いきなり現れた鉄人（西村教員）がそんなことを宣った。…我がFクラス？

「お前らが戦争でSクラスに負けたことにより、担任が福原先生から俺に変わることになった。これから一年死に物狂いで勉強出来るぞ」

『なにー?!』

俺も含めたほぼ全員が叫んだ。当然だが

「とりあえず明日から補習の時間を二時間設けるが…、吉井・瀬能・坂本の三人は特に厳しく監視してやるから覚悟しておくように」

「ちよつと待った！なんでそこで俺の名前が出て来る!？」

…こんなに品行方正な生徒は他にいないぜ？

「そうですよ！ナツルと雄二は当然として、なんで僕が!？」

吉井、後で、シメる。

「…お前ら本気で言っているのか？二人とも開校以来初の観察処分者だろうが…、特に瀬能。職員室に入る時、扉外すのはお前位なもんだぞ」

「インパクトって大事だと思うんですよ」

「…か俺の場合、どんなに成績上げても吉井の成績が駄目ならずつとFクラスなんだが」

「お話は終わったかしら？」

「へ？」

声かけられたと思ったたら、いきなり後襟首を掴まれた。な…何事？嫌な予感がしつつも後ろを見る。そこには…

「か・会長？なに、なんかやうなの？」

「あら、負けた方は勝った方はの言うことを一つ聞くんでしよう？」

それって坂本と霧島だけの話だね。俺関係ないじゃん

それに勝者って俺じゃない？

「まずは…そうね。瀬能君には生徒会に入ってもらいましょう。」

「は…はあ!？」

「生徒会長として生徒のことはきちんとしてあげなきゃね？」

「なんで!？」いいよ別に理解しなくて！

気の合う奴とかだけに分かりあえれば俺は満足だよ！

無理矢理拘束から抜け出そうともがくが、いつこうに逃げれない。

それどころかどんどん引きずられて…どんな握力してんだこいつ

？

「くっ…！先生！0点になった戦死者は補習ですよね?!」

「ん？ああ…三郷」

「はい？」

「補習は明日だ。忘れないようにな」

「はい」

マテヤコラ

「鉄人テメエー！」

「卒業式に伝説の木の下で釘バット片手にキサマを待つ!!」

「見事に繋がった斬新な告白だなオイ」

見ると吉井が島田と姫路に両腕を捕まえられ叫んでいた。

両手に花…か、羨ましいね

「そうね…ちようど、副会長と庶務がいなくて困っていたのよ。だからあなたは副会長ね」

「クラス委員すらやったことないのにいきなり副会長?! ってかヤバイって!!俺が生徒会入ったらタイトル変わっちゃう!生徒会の日常的なものになっちゃう!!」

庶務でも面倒なのに副会長て

「大丈夫よ。『非日常的な日々』だから生徒会に入るだけでも十分非日常的よ」

俺を引きずりながら説明してくる生徒会長様。

正論だけどさ

…正論だけどさつ

「納得いかねえ!!助けてく改造されるううう!!」

抵抗虚しく、俺は生徒会の一員にされた。

…Sクラスに勝てたら、脱会させてもらえるかな

「ずいぶん長いこと待ったのだから、少しはわがまま言ってもいいわよねっ。」



## 13時間目 独国から来た少女

4月。

穏やかな気候。爽やかに吹き抜ける風。  
そして

「ブラヴオー……バツク、ブリカー……!!」

「(ゴキガツツ)ぎやばあああっ!!?」

晴れやかな青空に響き渡る、ヒートアクション。

☆ ★ ☆

くナツルSideく

「4月関係ねーじゃん」

担いでいたチンピラCを投げ捨ててつぶやく。

…なに言ってるんだろ俺。まあどうでもいいか

軽く周囲を見回して、殺り——取りこぼしが無いかを確認する。

……うん。これで全部みたいだな

「しかし最近この手の輩が増えたなあ」

今週入って今回で五回目だぞ。元気だねえ

…襲撃自体は前々から少ない方じゃなかったが、近頃はなんか異常に多い気がする。

人数も時間帯も、持つてる武器も毎回違いはするんだが……んーなんか引つかかるな

「ま、いいか」

深く考えてもいいことはないので、頭の片隅に留めておく程度にしておこう

そう結論付けて、倒れてる奴らのポケットをあさり始めた。

「えーっとサイフサイフ…んだよ、3千しか持ってねーじゃんコイツ」  
シケてんな近頃の不良は

「待て！」

「んあ？」

一人目の身分証を写真に収め、二人目に移ろうとした瞬間背後から声をかけられた。

…俺だよな？他に誰もいないみたいだし…  
仕方なく物色の手を止めて振り返るとそこには

馬

に跨った金髪ツインテールの美少女が鋭い眼差しで睨んでいた。

「罪のない一般市民を襲い、挙句金品を略奪するなど不届き千万！恥を知れ！」

・不届き

- 1 配慮・注意の足りないこと。不行き届き。
- 2 道や法に背いた行為をすること。また、そのさま。

公道を馬に乗り闊歩してる奴にそう言われても…

頭が残念な娘なんだろうか

若干生暖かい眼で見ていると、少女が馬上でもぞもぞと動き始める。

あの体勢は…もしかして飛ぶ気か？

「そこを動かくなつ、今すぐ自分が正義の鉄槌を下してやる！」

「その格好でジャンプしたらスカートの中身見えるんじゃないか？」

.....

「そつ、そこを動かくなつ！」

少しの間固まっていたが、また馬上でいそいそと体勢を変え始めた。

若干顔が赤いのはスルーしておいてやろう

言われた通り待っていたが、相手はスカートがめくれないように気をつけながら馬から降りようとしてるため、とにかく遅い。

.....うん、行くか！

「あつ、コラ待て！逃げる気か卑怯者め！」

「待てと言われて待つ奴はいない」

それにいい加減学校に遅れそうだしね

☆

★

☆

・学校

「よし、間に合った」

この時間なら出席確認には間に合うだろう

意外に思われるかもしれないが俺は出席率だけを見れば遅刻・欠席が

一つもない。いわゆる皆勤だ。

まあ教師が出欠席を取ってないものは普通に遅刻したりしてるから紛い物の皆勤なだけだね

「今日の一眼目はなんだったかなー…げっ英語かよ」

初めっから苦手で嫌いな授業とか…朝から最悪な気分だ

…朝といえばさっきの乗馬女、うちの学校の制服着てたな。

あそこまで目立った行為してたら噂でくらい知ってそうなものだが、全く心当たりがない。新入生か？

「…あ？なんだこりゃ」

考えながらもいつも通りに昇降口で上履きに履き替えようとしたが、Fクラス用の下駄箱に立て札が設置されていた。

見たところ他クラスのところには置いてないっぽい。なんなんだろうか

もしかしてあれか？試召戦争で負けたから、早速ランクを一つ下げたって通達か？

なにも入り口で知らせなくても…まさか靴入れもランクダウンの対象になるってんじゃないやねえだろな!?

恐る恐る立て札の内容を確認する。

そこにはこう書かれていた。

『Fクラス生徒は以下の場所でホームルーム、及び授業を受けること。

場所：第二グラウンド東隅』

靴入れどころのレベルじゃなかった。

☆

★

☆

「ジョーダンじゃねーツスよコリアツ!!」

4つあるうちの一つ、第二グラウンドの片隅で愛（× 不満）を叫ぶ俺。

たちの悪いジョークかと思っただが、本当にFクラス人数分席が置いてある。

っていうかこれホントに席か？ただのみかん箱じゃねーか  
椅子は1m四方のブルーシートだし…ホームレスか！

「一回負けただけで屋外とか酷すぎるだろ！上訴してやる!!」

「落ち着けナツル」後ろから直江がやってきた。

「いくらなんでも教室まで設備低下の対象にはならないよ。Cクラス以下は机と椅子だけだ」

「じゃなんだこの現場は…」

「木造校舎の倒壊が目に見えてるから、リフォームするための一時的な措置じゃないか？同じ校舎に入ってるDクラスとEクラスも他の場所に移動するよう指示があったみたいだし」

「む…」

直江の淡々とした説明を聞き、頭が冷めていく。

軍師を自称するだけあってか、こいつの情報収集能力は伊達じゃない。  
い。

今までいなかったのも事実の裏付けをしていた…んじゃないかな  
多分

「Fクラスは特に損傷が激しいのと、罰の意味合いも兼ねてるらしい。  
ほら、前にナツルが廊下破壊したから」

「冤罪だっつーに…どのみちしばらくは青空教室かよ。雨降ったらどうすんだ」

「さあな。体育館とかでやるんじゃないか？」

地味に嫌だ。避難民じゃねーか  
っーか

「お前らさつきからやけに大人しいな。どうした、そんな深刻そうな顔して」

もともと廃屋から不満を持って試召戦争始めた奴らだ。

この待遇に文句の大合唱が起こるかと思っただが、Fクラスの面々は誰一人口を開こうとしない。

いつも静かになんか食ってる熊飼とかならともかく、無駄に騒がしい…名前なんつったっけかなアイツ。まあいいか、Mつぱげ猿まで静かなのはちよつと不自然だ。

「なんだよ皆して…なんかあったのか？」

「……………(すっ)」

ゴリポンが無言で小雑誌を差し出してくる。

「なんだこれ。報道部が出してる学校新聞じゃねえか」

情報量が多くてファミ○並の厚さを誇るって言う。

噂通りの厚さだ。電子媒体にした方がいいんじゃないか？

「これがどうしたよ」

「…ランキングのところ見てみる」

「ランキングって…うわ、裏神月ランキングに俺の名前が入ってる！」

「え、ホント!？」

ワン子が横から割り込んできた。

「あー、ホントだ！タイガ20位に入ってる！」

「え、いや。ワン子お前どこから」

「武道を選択してる奴に限定した表のランキングと違って、生徒全員を対象にした裏神月にランク入りするのはかなり難しいのよ。タイガってホントすごいね！」

「いや…」

無邪気で純粹無垢な眼差しにどんどん居心地が悪くなっていく。

順位には本名が書かれてるけど認識してんならタイガって呼ぶな

よとか、気配感じなかつたけどどうやって近づいたのとか言いたいんだけど言葉が出てこない。

ヤメロ……！そんなキラキラした眼で俺を見るのは止めろっ！……自分が薄汚れてるのを再確認しちまうだろうが！！

ちなみに俺がランクインしたのは元の20位の奴（Aクラスののなんとかだっけ）を倒したからだそーだ

っーか俺すでに別の名でランクインしてるみたいなんだけどいいのかな。オセロだったらランカー全員ひっくり返るぞ

「最近やたらとからんでくる奴が多い理由はこれか……でも俺がランカーになったのこの沈みっぷりとどう関係があるんだ？」

「その次のページ……」

「次？」

言われるままにページを捲る。次は……

「学校で見た目がいい男50位までランク付けした神月イケメンランキングか。たしか上位10人を"十神"、トップ4を"四天王"とか呼んでんだっけ」

四天王好きだよなこの地域。武道でもそんなのあっただろ

お国柄か？

「うちのクラスからも何人が乗ってたよなこれ。確か上の方に……」

くく神月学園☆イケメンランキングくく

1位 京極彦一

2位 葵冬馬

3位 風間翔一

4位 源忠勝

5位 瀬能ナツル

.....

ん？

今なんか妙な違和感なかった？

「五位に瀬能ナツルって書いてあるぞ」

「あ、ホントだ。…いるんだなあ、俺以外に瀬能ナツルっていう奴」

「おめえ以外にそんな名前のヤツいるわけねーだろ!!」

ゴリポンが噴火した。

それに連鎖するように、一気にあちこちが騒ぎ出す。

『なぜだあ！なぜ瀬能なんかが!?!』

『こんなヤツただの無神経で乱暴で迷惑な性格ブサイクなのに!!』

『彼女ほしほしいいっ!!』

あつという間に火の海だ。

各々自分のことは柵に上げて好き勝手にほざきやがる。いっそ清々しいね！

当然粛清はしといたが

「みんな席につけーってどうしたお前ら」

突如校舎の方からやって来た、西村こと鉄人ゴリラ。もうホームルームの時間か

鉄人は地面に倒れ伏し、時折弱々しく震える生徒達を一瞥し俺に拳骨を落とした。

「ぶも” ツ!?” な…なんで…?!”

「誰が鉄人ゴリラだ。西村先生と呼ばんか」



そつちかい！口に出してないのになんで分かったんだ？

「ほらお前ら、いつまでも寝てるんじゃない。ホームルームが始められんだろうが」

しかも倒れてることになんの疑問も持たぬかの如く自然に教卓につきやがった！

いいの？なんでコイツら瀕死なんだとか気にしなくてもいいの!?

「昨日も言ったが、今日からFクラスを受け持つことになった西村だ。俺が担任になったからにはビシバシ！行くからそのつもりで勉学に励むように」

ダメだ。完全にこの状況を無視している。

これ以上話が展開しそうにないので、諦めて一番近くの席（ブルーシート）に座り込む。

「さてまずは出席確認だが…その前に新しく転入生を紹介する」

転入生？

「先生。その転校生は超能力的なものが使えますか」

「使えるわけないだろお前じゃあるまいし」

失敬な。俺だってできねえよ

「それじゃ次元を越えたりは…」

「できません。いいから黙ってる、どんなに時間を稼いだところで一限目はなくならんぞ」

ちっ、バレてるか

「いいかお前ら、今からこのクラスに新しく加わる生徒を呼ぶが…驚くんじやないぞ」

西村教員が厳めしい顔をより深くして、真剣な口調で忠告してくる。

…そんなにヤバい奴なのか？それにしても大げさって気が…

でもこんな時期に、しかもFクラスに入る奴だし…どんな人物なんだ？

「オイ、いいぞ来い！」

鉄人が大声で校舎に向かい叫ぶ。

見晴らしのいい校庭だから校舎内に入るとかしないと隠れられないってのは分かるけど、ここまでしてサプライズにこだわらなくてもいいんじゃないか？

：学園もので転校生の立ち位置は大概、主人公かヒロインって相場は決まってるよな

主人公は俺だからもう無理だとして、あと残ってるのはヒロイン。まあ相手が女ならだが

とくに事前に出会っているとかのフラグを立ててると一番親密な関係になる可能性は極めて高い。

たどえそれが

かつぽ      かつぽ      かつぽ      かつぽ

「どうどう…ストップだ。ご苦労、浜千鳥」

馬に乗って登場し馬に乗って挨拶をする。ちよつと頭が残念そう  
な金髪ツインテールでも

「本日よりこの寺子屋で世話になる、クリステイアーネ・フリードリヒだ。よろしく…むっ、貴様は!？」

「チェンジで」

早く一日終わらないかな

## 14時間目 説得執行中／処刑進行中

前回のあらすじ

クリスが仲間になった。

以上

「おおい！ちよつと待て！自分の登場をそんな簡単に終わらせるな！！」

「なんだようるせえな」

モノローグに割って入らないでくれませんか

☆

★

☆

くくナツルSideくく

今朝出会ったばかりの馬女——フリードリヒか——が、親の仇を見るかのごとく鋭い眼をして俺の目に立っている。

前回は馬上でもたついてから逃げられたけど今回は無理そうだし、しっかりと自分の足で地面に立っているから

そもそもこれから授業が始まるのにどこに行くんだっつーか、なんで俺が逃げなきゃならんのだ

「そういえば馬はどうした」

「浜千鳥なら厩舎だ」

厩舎？

くくくくくくくくくくくくくく

『……………（ブルル）』

「先生っ自転車置き場に馬が！」

「なにいつ!？」

~~~~~

「いいんか んなことして」

あらゆる点でダメな気がする

「そんなことよりここで会ったが百年目！朝から罪のない一般市民を襲い、あまつさえ金品を強奪して平然としている気様の腐った性根を自分が叩き直してやる！表に出ろ！」

「すでに外だよ」

揚々と芝居がかかった口上を述べる彼女に、頬杖をつきながら言い返す。

授業潰れてほしいとは思ったけどよりめんどくさいことに巻き込まれたな

「ちよつと、聞き捨てならないわ！タイガは腐ってなんかないわよ！すごいねじくれてるだけなんだから！」

「フオローになつてねえよ」

「千切れるすんぜんなんだからっ！」

「ワン子、お前ちよつと黙れ」同レベルが

前後で厄介に挟まれるって災難すぎるだろ

「朝から罪のない一般市民を襲いって言うけど、あれ逆だからね？俺が襲われて返り討ちにしたの」

「嘘をつけ！よしんばそうだったとしても、相手の財布を開く必要はないハズだ！」

正論である

「なんだナツル、また襲撃にあったのか？何度目だよ」

「今週三度目」

「：今日月曜だぞ」

「日曜に朝晩と二回来た。先週の金・土を入れたら七回になる」

「大人気だな」

ほんともーナツル君モテすぎて困っちゃう

次突っかかって来た奴には新技お見舞いしてやろうっつと！

「……………真実なのか？」

フリードリヒが信じられないといった表情で尋ねてくる。

「まーな。俺ってば見た目モヤシっぽいからカツアゲに遭いやすいんだ」

いくらひ弱そうとはいえ身長が180ある人間が恐喝の対象になるのか疑問だが、混じり気のない真実だ。

とはいえこんなもん、まず嘘だと思うだろうな。クラスメイトがフォロー入れたとしても口裏合わせてると言われりやそれまで…

「すつ、すまなかった…自分ほとんど思い違いをしてしまったように」

信じやがったこいつ！

一瞬口だけで真逆の認証を持つてるのかとも思ったが、顔を真っ赤に染めて狼狽する様子を見たら分かる。本気で『やつちまった』って思ってる！

これが演技だとしたら演劇部に入るべきだ。即主役になれるぞ

「しつ…しかしそれでもっ、相手の財布を漁る必要はないはずだ！」

正論である

「……………あんなフリードリヒ」

「なんだ。あとクリスと呼んでくれていいぞ」

「そのうちな。他の地から来たお前は知らんだろうが、この街の治安はあまりよろしくないんだ」

「……………そうなのか？」

彼女の目がすうっ…と細まった。

悪が許せんタチなんだろうか

「さつきも言ったが俺はカツアゲに遭いやすい。まあ絡まれても返り討ちにしてるが」

「本来ならそんな連中、気絶させた後に警察なりなんなりに任せるのが正解なんだろうが、それをしてもすぐに釈放されてまた似たような奴見つけて似たようなことをするんだ」

「なんと…嘆かわしいっ」

「それは同意する」

実際何ヶ月か前、退治した奴が別人相手に同じことしてるの見た時はそりやもう呆れたもんだ

「そこで俺は考えた。なぜ再犯者がでるのかを…ヌルいからだ」

一度軽く目をつむり、少し間を置いてから再び目を開いてフリードリヒを見つめる。

「ごくりと息を飲んだのが分かった。

「叩きのめした後に財布から身分証明書等を抜き取り、そいつがしていたであろうことをすることにより相手にトラウマを与える。そうすることで次にまた恐喝をしようとした時『また同じような目にあうんじゃないか』と思うわけだ」

「おおっ」

「つまり俺がしていることは強奪ではなく、犯罪の防止なのだよ！」

『なっ、なんだってー!?!』

なんでクラスの奴らまで叫ぶんだ？

「そうだったんだねナツル！僕はてつきり趣味なんだと思ってたよ！」

吉井がなんか興奮気味に話しかけてくる。

「そこまで深い考えがあったとは…！すまない、自分は貴殿を完全に誤解していたようだ」

フリードリヒがマジ顔で手を握ってくる。

ああ…彼女は間違いなく、Fクラスにふさわしい人材だろう。

「(ちなみに本当にそんな思惑は)」

「(あると思うか?)」

「(だよな…)」

坂本と直江が呆れたようにため息をつく。

誰かが困るわけじゃないし(絡んでくる不良以外)、しばらく勘違いさせておこう

吉井たちは知り合いが悪行を行ってるわけじゃないと思えばッ
ピー、俺は若干懐が潤ってハッピー。

いいことづくめじゃないか

「そのうち酷い目にあうぞお前…」

「そんなときやそんなときだ」

今に生きようじゃないかチミ

☆

★

☆

「そろそろ授業を始めるぞー、皆席につけ」

「先生、自分の席は」

「決まってるから適当に座りなさい」

一頻り騒いだのち、鉄人が合図を出した。

……あ、そうだ

「先生、ちよつといいすか」

ホワイトボードに板書をしようとした鉄人はあからさまに嫌な顔を
をする。

「…瀬能、お前が英語嫌いなのは知ってる。しかし授業の邪魔をする
のは——」

「そういう気持ちは確かにありますけど今回ののはちゃんとした理由が
あるっスよ」

そもそも俺がやる妨害って数分遅らす程度だから。それ以上やる
と補習の時間が増える。

「…手短にしろよ」

「努力します」多分無理だけど

軽く頭を下げ、会釈をしてから教壇に立つ。

一通り教室内…って言っているのかな。とりあえずクラスメイトが全員いることを確認する。

「さてと…時間もねえしさつきと本題に入るか。皆知つての通りわがFクラスはこの前の試召戦争に負けて施設を落とされた」

教室——は理由があつて今はないが、補修工事終わつてもろくな設備じゃねえだろ。元が木造廃校舎だし

机——とは名ばかりのただの段ボール。それも強く寄りかかつたら潰れるほどの強度しかない

椅子——ともいえないビニールシート。ほぼ地べた座り

「君ら納得は？」

『してゐるわけねーだろ!!』クラスの大半が叫んだ

『あり得ないでしょ一回負けただけでこの待遇は!?!』

『AとDクラスはそのままなんだろ!?!不公平だ!』

『彼女欲しいいいいいっ!!』

おおよそ予想通りのリアクションだ。

「まあ落ち着け。設備が酷くなったのは仕方ねえ、そういうルールだからな。あとA組・D組がそのままなのは交渉したからだ」

坂本が入れ替えをしない代わりに言うことを聞くように指示した。

「試召戦争で負けた俺らは最低でも数ヶ月は今のまま学校生活を送らなきゃならねえ。ここまではいいな？」

クラスメイトたちは「なにを今更」といった表情を見せる。

今日転校してきたばかりのフリードリヒと、あともう一人を除いて

「現状すぐに設備を向上させる手段は残念ながらない。しかしだ、各々が抱えているやり場のない鬱憤うつぶんを晴らすことはできる」

ダッ！

大人しく座っていた坂本が急に背を向けて駆け出した。

スパァン！！

その坂本の目の前を、目に見えない衝撃波が高速で通過した。

……ギ……メキ……メキメキメキ

ズズウウンツ

すこし遅れて校庭の隅すみに植えられている大きな木が倒れた。

その幹にはえぐり取られたような、拳大の穴が空いている。

「座れ坂本。これから本題に入るつてのにどこに行くつもりだ」

突き出した右腕をそのままに、ごくごく普通に話しかける。

「お前はデカイからな。数十メートルくらいの距離なら胴体狙うなんて朝飯前だ」

クラス全員が固まったまま見つめてくる。

少なからず冷や汗をかいている連中にはいるが、中でも坂本は水でも被ったかのようにびっしりだ。

——信賞必罰という言葉がある。

功績があれば必ず賞を与え、罪があれば必ず罰する、ということだ。

古来より戦争後 敗軍の将は大なり小なり責任を取らされた。

賞罰のけじめは厳正に、確実に言う必要があるのは歴史が証明している。

「さあ、戦後処理を始めようか」

おれだつてつらいんだ

☆ ★ ☆

「ではこれよりF組裁判を始めます」

「むぐあー!!」

「被告人は静かにするよーに」

数分後。教室中の机を適当に並び替え、簡易的な裁判所を作り上げた。

一番目立つ被告人席には、猿轡とロープで簀巻きにされた坂本が、判決を下す裁判長席には俺が

そして（形だけ）弁護士の前には吉井がそれぞれ陣取っている。

あとの奴らは全員傍聴人陪審員だ。

裁判として成り立ってないとツッコまれそうだが、すでに有罪は決定してるからこれでいいのだ。

ここでやるのはただ刑方を決めるだけ。証明も弁護も必要ないちなみに鉄人先生には席を外してもらった。長くなりそうだから授業については余分に補習を受ける。ということでも妥協してもらっている

「テメーのせいで余計に時間取られたじゃねえか。どうしてくれるんだ」

「（ズルっ）お前が勝手にしたんだろーが！」

自力で猿轡を外した坂本が、早速抗議をしてくる。

往生際の悪い奴だ

「あの…もう許してあげても…」

周りの連中（ほぼ男子）が『吊るせ！吊るせ！』と叫びたてる中、姫路がおずおずと手を上げた。

「…姫路、罪には罰なんだよ。もし吉井が小さな女の子に目を血走ら

せて話しかけてたらお前どうする」

「酷いお仕置きをしたあと美波ちゃんに連絡します」

即答しやがった

「そういう事実があるんですか？」

「え、いや……」あるんですか？」

「ボクハシリマセン」

プレッシャーに負けて思わず目をそらしてしまった。

怖い……！表情はいつもと変わらないはずなのに、瞳に光がないだけでこんなにも恐怖を煽るなんて……！

もちろん嘘は言っていない

しかし今の言い方は否応なく、そういう事実があるかもしれないと匂わせてしまうだろう

その証拠に姫路は、ゆっくりと俺から視線を外し、真っ直ぐに吉井のそばに――

「ふっふっふ、日頃の恨みをはらすチャンスがついに――って姫路さん？……どうかしたの？」

「吉井君」

「へ？なに――あがあつ!? 目が、僕目が――!!」

「美波ちゃんちよつと来てください。今から吉井君とお話をしますから」

吉井明久がログアウトしました。

姫路瑞希がログアウトしました。

島田美波がログアウトしました。

弁護役がいなくなってますます裁判の形をなさなくなってしまう……まあいいか

三人消えようが十人消えようがやることは変わらない

「自分は今日来たばかりだからあまり事情は分からないが、これはやりすぎだと思う」

フリードリヒが一步前に出て、鋭い眼差しを向ける。

……今度はコイツか……めんどクセえ……

「あー……フリードリヒ」

目を伏せながら彼女の肩に手を置く。

「この国にはな……切腹という文化があるんだ」

「おおい!？」

後ろ（被告人席）からなんか聞こえたけど無視。

「切腹……ジャパニーズハラキリか!」

「知ってるなら話が早いな。昔っから最高責任者はそうやってけじめをつけてきたんだ」

「おお……なんと潔い……!」

キラキラと瞳を輝かすようなことかなコレ

「しかし現代社会でそれをするといろいろ問題が出てくる。なにより責任一つ取るのに腹を切ったら、命がいくつあっても足りん」

「む……確かに」

「ゆえに、近代では切腹に代わる新しい責任の取り方が誕生した」

「それが罰ゲームだ」

「嘘つけ!!」 ↑坂本

「ときに痛みを体験しときに恥ずかしい思いをしながらも自ら進んで笑ものになる。これが最近の切腹だ」

「そう……なのか……、知らなかった」

「今日来たばかりのやつになに吹き込んでだお前!!」

あーうっさい

「ヤツのことを思うなら止めないでやってくれ。ここぞなにかしらして誠意を見せておかないと後々禍根を残すことになる」具体的には俺の

「武士の情け、というやつだ」

「そうか…わかった。少し心が痛むが、自分は止めない。最後まで見届けるぞ！」

「恩に着る」

「言いくるめやがった…！」

「ナツルってたまに詐欺師並の話術使うよな」

ゴリポンに直江、言いたいことがあるんならもつと近くで直接言いなさい

☆

★

☆

「さーて、と。それじゃあ刑を執行しようか」

「く……！」

「ここで俺が一方的に私刑リンチするのは簡単だが、それだと禍根が残るし他のやつらも納得しないだろう。そこで」

坂本の目の前に一抱えほどの大きさの箱を置く。

箱の上面には円形の穴が一つだけ空いており、中に手を突っ込めるようになっている。

机が段ボールだと工作こうの材料いうとにする便利とだな。ちなみにこれは吉井が使ってた机だ

中にマンガとか入ってたのでこっそり回収しといたのは…本人に言う必要ない情報だな

「この箱にはお前の今回の処遇をどうするか、クラス全員に紙に書いてもらったものが入ってる」

「当然中には過激な処刑を望むのが多数あるが、僅かながらも無罪判決の札もある。過激な処刑を望むものも多数入っているが」

「なんで二度言ったんだよ…」

「過激な処刑を望む人物がクラスの三文の一はいる」

「いらねーんだよそんな情報は！」

坂本の叫びを無視してずっと手に持った箱を突きつける。

「自分の処刑方法くらい自分で決めさせてやろう。引け」

「…そう言われて素直に手を突っ込むと思うか？」

「ちなみに俺は新技実の実験台って書いた」「余計引く気が失せたわ」

もともと縛られているからクジを引くことはできない。が、それを差し引いても手を伸ばす気はなさそうだ。

やる気があつたらロープを外してやろうと思つてたんだが…残念だ

「…しようがない、俺が変わりに引いてやろう。まったく坂本はシャイだなあ（ガサゴソ）」

「いつか見てろよてめえ…」

「(ぎっ) ジャン！ ナツルは紙を手に入れた！ なになに…」

『姫路さんの創作手料理一年分』…？なんだこりや、罰以前に褒美じゃねえか」

「(ブチブチッ!) オラアツ!!」

「坂本さん!？」

えー！いきなり縄引きちぎつてボックスに手え突っ込みやがった!! 脱出できるんなら初めからやれよ!

つかなんでコイツ自分から罰決めにきたの!?! 今俺が選んだやつにしとけばいいのになぜ自ら茨の道に!?! お前は修羅道に行く戦士なのか?!

そしてなぜ俺は震えているんだろうか。

紙に書かれた内容を読み上げてから身体が恐怖を感じたかのよう
に小刻みに痙攣し続けているんだが。原因が全く分からん

「(がさっ) これだつ!!俺はこの方法を希望する!」

「へいよ」坂本が取り出した紙を受け取る。

「クソっ…明久だろあれ書いたの。あんなの実行されたらいろんな意味で死ぬぞ」

「彼女に殺されたり？」

「ぼっ、翔子はそんなんじゃないやねえよ!!」

「あのSクラス代表そんな名前だったのか」

とっさに名前出てくるなんて意識しまくりじゃねーか。憎しみ五割増しだよ

「さてなにが書かれているのかなー？（ガサガサ…）」

『瀬能ナツルのドキ★ドキ新技お披露目会』

「……………」

「……………」

横から紙を覗き込んでいた坂本共々仲良く固まった。

「…神はいるようだ」

「待ってくれ」

「新しく考えたこの技はねー、キン○マンの正義超人の必殺技をうまく繋げて」

「待ってて言ってるんだろ!!」

「まさか考案して最初に使う相手がお前とは、皮肉なもんだな」

「じよっ、情状酌量は!？」

「俺もつらいんだでももう決まったことだから」

「棒読み止める！今回俺がお前になにかしたのか!？」

「たったひとつのシンプルな答えだ」

てめーは俺を怒らせた

「血祭り”正”」

その日、一人…いや二人のとある生徒の絶叫が学校中に響き渡つた。
そしてその二人は、しばらく学校を休んだ。

15時間目 生徒会へ一属

↳瀬能Side↳

放課後

チャイムの音が響き、皆が思い思いの行動に出る。

帰り支度をする者、友達と好き勝手喋る者、おもむろに頭巾を被り怪しげに呟く者。

他の学校とそう変わらないであろう光景だ。…一部を除けば

「さて俺も帰るか」

一年の時は「持つてくる必要あんのか？」って言いたくなるくらいスカスカだったかばんに教科書を詰め込み席を立つ。

……みかん箱にブルーシートだけど

「ん、なんだナツル帰るのか?」

直江が急に声をかけてくる。

「悪いかよ」

「いや…、お前生徒会に所属してなかったか?サボつたらまずいだろ」
なんでそう忘れてーことを蒸し返してくるの?言わなきゃ無かつたことにできたかもしれないじゃない

「あんな無理矢理入れさせられたもんになんで付き合わなきやなんねーんだよ。理不尽だろ」

「否定はしないけどな…。クラスに生徒会役員がいればなにかと便利だから、俺としては真面目にやってほしいと思ってる」

お前の都合なんて知るかつ。お得意のネットワークで他のカモ見つけるよ

…あーあ、誰かりコールしてくんねえかな

辞表(?)を出しても受理してもらえなさそうだしな

「冴島殿は生徒会に務めているのか?」

今度はフリードリヒだ

「…属してるだけでまだ活動はしてねーよ」これからもする気はないけど

「つーか俺の名前はナツルだ、瀬能ナツル。誰から聞いたんだその呼び名」

「ふむ…冴島殿はあれなのだな。えっと…そうインテリヤクザ！」

「お前実はわざと言ってるんじゃない？」

インテリは分かるがヤクザを付ける意味がわからない

「むう、違ったか…じゃあ三百代言というやつか？」

「それ以上口を開くと意味わかって言ってると思なすぞ」

三百代言：詭弁を弄すること。またはその人。弁護士を罵る言葉としても使われる。

明治時代の初期に資格のない代言人（弁護士）を罵ったことからいう。

「三百」は銭三百文の意で、わずかな金額、価値の低いことを表す。「代言」は代言人で弁護士の旧称。

喧嘩売ってるのかコイツ

そして名前直さねーし。このまま定着しそうな予感

「そもそも生徒会の副会長ってポジション的にかなり重要な位置だろ。なんで数時間そこらでさらっと決められんだ？」

三郷が用紙書いて教師に申請したらその場で採用されたぞ

「噂は本当だったのか」

「あ？どういう意味だよ」

「学校の生徒会長って選挙で決めるだろ」

まあそう…かな？

「…いや待て、やった覚えねえぞ」

「そう。神上学園かみかみに生徒会選挙ってのはないんだ」

「はあ？」なんだそりや

「学校の方針で生徒会長は代々、その前の年の会長が指名していくんだ。役員もそんな感じで受け継がれているんだろうと思ってたが：生徒会長が一人づつスカウトしてるのが真実だったわけだ」
「ドラクエか」モンスター仲間にする系の

むしろ俺の場合ポケモンに近い。強制だし

「そんな可愛らしいものじゃないでしょうあなたは」

うっさいボケ。俺はアレだ、グラードンやダークライ的な愛嬌：が

……

突然出現した聞き覚えのある声に一瞬思考が止まりかけたが、すぐに勢いよく背後を振り返る。

「こんにちは瀬能君」

予想通りの人物が微笑を浮かべて立っていた。

「ゲーツ会長!?!」

「ずいぶんな挨拶ね」

さして気にした風もなく、ただひたすらに見続ける彼女。俺が座っているからその視線は下向きだ。

…見下してジャネーヨ

『生徒会長…!』

『いったいなにしに…!』

『今日もお美しい…!』

回りの男子^{アホ}どもは美人生徒会長の突然の訪問にわかりやすく色めきだつた。

ほとんどが受け入れムードの中俺だけが眉間にしわを寄せ嫌な顔をする。

だって喜ばないんだもん

「あつ会長さん、こんにちははっ。なにかご用ですか?」

「姫路さん、こんにちは。心配しなくてもいいわ、今日は彼に用があるだけだから」

そう言って睨むように俺を見つめてくるが、あえて気付かないふりをする。

なんか怖いもん

「ねえタイガ、心配しなくていいってどうゆう意味？」

「宣戦布告しにきたわけじゃねえって意味だろ。負けたクラスは3ヶ月試召戦争の申し出ができないけど、挑まれたら受けなきやならんからな」

疑問符を浮かべてくるワン子に答えを返す。

てかなんで俺に訊くんだよ。直江にでも訊けよ

「瀬能君」

「さー長話もこれくらいにして、そろそろ帰るか」

「瀬能君」

「お前らも帰んだろ？どつか寄り道してこーぜ」

「せの「近くのゲーセンに新しい台が導入はしたらしいから対戦でもー」

プスッ

バタッ

突然チクリとしたかと思つた次の瞬間、いきなり身体が動かなくな
り前のめりに倒れた。

「な…何事？」

「心配しなくていいわ。塩化スキサメトニウムを注入しただけだから」

筋弛緩剤じゃねーか。なにに安心しろってんだ

つかなんでそんなもん所有してるの？注射器まで持ってるし
もしかして常備品？

「ところであなたどうやって喋っているの？身体中の筋肉が麻痺して
るから口も動かせないはずだけど」

「腹話術です」

「……………」

「腹話術なのです」

そうゆうことにしといてください

「……腹話術も微妙に口を動かす必要が……まあいいわ。さっさと行き
ましよう」

そう言うのと会長は倒れてる俺の襟首を掴んでズルズルと引きずり
だす。

そこそこ体重があるのにどんな腕力してんだコイツ

「おっおい、誰か助けてくれっ」

「そう言われも……」

視界に入る奴らは気まずそうに目線を逸らすか、憎悪の目で睨みつ
けてくるかの二種類だ。

前者は相手が生徒会長だからーってのは分かるが、後者はなに？も
しかして羨ましいとか思ってるの？

「ドナドナドーナードゥナゥ。タイガを乗ーせてー」

「おいなんだいきなり、やめろ縁起でもねえ」

「二二ドナドナドーナードゥナゥ。荷馬車が揺ーれーる」二二」

「合唱するなアアッ!!」

なぜかワン子を皮切りに、直江たちが息の合ったコーラスを披露し
てくれた。

本気でやめてほしい。リアルに笑えない

☆

★

☆

ズルズルズルズル：

生徒会室までの道のりをただひたすらに引きずられながら進む。

校庭から玄関を越えここまではほぼノンストップ。グラウンドの土や床の埃やらでズボンがもうえらいことになってる。流石に酷くない？

「着いたわよ」

そうやって耐え続けること十数分、生徒会室として使われている(らしい)教室の前までやって来た。

ここまで来ていい加減薬の効果が切れたのか、身体の方も少しづつ動くようになってきた。

万全とは言い難いが、自分で歩く程度はできそうだ。襟首を掴んで腕を振り払い立ち上がる。

余談だがうちの学校、生徒会室は二階に設置されている。

階段をどうやって移動したかと言うと…：なにも変わらない。斜面を引きずるように登らされた。この女やつぱり悪魔だ

しかも一回落とされた。

一昔前のドリフみたいなことさせられたせいで背中が超痛い。

「てめえいつか見てろよ…！」

「わざとじゃないわよ」

怨嗟の視線を込めて話しかけたのに、ピクリとも表情を変えない。

笑いやがったくせに

笑いやがったくせに！よくもまあいけしやあしやあと！

いつか必ずギャフンと言わせてやる

「入るわよ」

睨み続ける俺に全く気にした様子もなく、ごく普通に扉に手をかける。

こうなったら第一印象最悪の挨拶をして会内の空気を悪くしてやる。ついでに辞められたら御の字だ

駄目な方向に決意を固め、入った瞬間にどんな行動を取ろうか頭を回転させてるうちに会長がドアを開けた。

ガララッ

「すうー…すうー…」

会長の肩越しからまず初めに見えたのは、頭からマスクのようにブルマーを被り、椅子に座りながら布らしき物に顔を埋めている少女。スカート穿いてるから多分女だろう。

「……………」

「……………」

突然ドアが開いたにも関わらず、そのまま匂いを嗅ぎ続ける少女を前に二人して絶句する。

なんだこの空間。本当に生徒会室か

思わず振り返って教室表示の看板を確認するが、そこにはきちんと『生徒会室（2）』と書かれていた。（2?）

「かずは
一花」

「ふえっ?!あわわわわっ!」

三郷が声をかけると、一花と呼ばれた少女はビクッ!と一瞬飛び上

がりバタバタとパニック状態に陥る。

残念ながら生徒会室に忍び込んだ変態という線はなかったようだ

「はわっわ…：かつ・会長さん…：…！」

「学校では止めなさいと前にも言ったはずよ？他人ひとに見られたらどう
言い訳するつもり？」

「あうう…：ごめんなさい…：…」

声だけ聞いてたら姉が妹を窘めるようなほのぼのした場面。

しかしそこに視覚が加わっただけで、なんとということでしょう。ブルマーの変態仮面を叱る女子高生といった異様な光景に早変わり。

もう帰っていいかな俺

「瀬能君」

「はい、すみませんっ」

「何に対して謝ってるの？…まあいいわ。彼女は水無月一花、書記を
担当してもらってるの」

紹介された少女はいそいそとブルマーを外す。そこから出てきた
のは白銀色のショートツイントールの女子。

こんな妹がいたらいいなと思わず妄想してしまいそうな感じの可
愛い系少女だった。

でもさっきの見た後だから残念としか言えない。世の中色んなの
がいるもんだ

「いつ一年Bクラス、水無月一花です…」

近くに置いてあった。おそらく彼女なのであろうかばんにブルマー
などを多少慌てながら詰め込み、服装を整える女子。

俺が悪い訳じゃないんだが、なんとなく気まずい。

とりあえず自己紹介はしとこう。えーつと…：

.....

駄目だ！きっきの光景を超えるインパクトある紹介の仕方が思いつかない！

「二年Fクラス瀬能ナツル……」仕方なく無難な挨拶で終わらせる。
さようなら、俺の入会デビュー

「あつあなたが瀬能さんですか？噂はよく聞いてますっ」
どんな噂だろう

「あとおつ生徒会に入ってくれるんですよねっ？ ねっ？」
鬼気迫るような勢いで詰め寄ってくる。

彼女にとっては自分の性癖をバラされるかどうかの瀬戸際だろうから、その分必死なんだろう
俺に言い触らす勇氣は無いが

ガラガラっ「一花、この前の案件だけ、れど……」

この教室は隣接した部屋があるらしく、入ってきたものは別のドアが突然開いた。

そこから登場したのは……なんつーか……ゴスロリだった。
それも第何ドールとか付きそうな——多分それ意識してんだろうなアレ

「臭いフェチの変態の次はコスプレイヤーか……ここ本当に生徒会室か？」

なんか俺が考えてた生徒会とちよつと違う
「なっ、なんで一般生徒がここにいるんですの?!」

そう言っただたふたと身体を隠そうとするが、残念ながら全く隠れていない。出てきた教室へ戻ればいいのに
せつかくなので少し観察させてもらおう

顔は釣り目がちで高飛車なお嬢様。

腰辺りまで届いてるであろうソレを、ツインテールを基本に4〜5回ほどクルクルとロールしている髪。

その色は南国の海を彷彿とさせる鮮やかな水色。

「ちよつと待てやテメエ、誰に断つて髪を水色にしてんだゴラアツ!!」
「ひゃ!?!」

側で水無月が悲鳴を上げたが無視。

「俺と被るだろうが!!」

「はあ?意味がわかりませんわ。私の髪がどんな色をしてようと勝手にしよう。それにあなたはどちらかといえば青色ですわ」

まあそうなんだけどね。

「アンジエ。彼はたまにおかしくなる気があるみたいだから、あまり気にしないであげて」

口調はいつもとあまり変わらないが、諭すような感じで説明しやがった。あんた俺のなにを知ってんだよ

ゴスロリ(アンジエ?)は羞恥のためか顔を真っ赤にして会長に詰め寄り、後ろ向きに俺を指差す。

「会長! 部外者を室内に入れるなんて、どういうおつもりですの!?!」

「彼は副会長よ、部外者じゃないわ。:別に反対してもいいけどこのままだと困るんじゃない?」

会長さんなんか、人の弱みに付け込んで自分の意見を通そうとしてない?

事前に通達してなかったみたいだし最初から狙ってただろ

「誓約書でもなんでも書くんで帰らせてほしんですけど」

「うぐぐ:仕方ありませんわね……」

割と本気で言ってみたものの見事に無視された。

「それじゃ瀬能君、紹介するわね。彼女が会計の——」

「高杉・アンジエ・リツヒ・ベルム・リ・クラムニコ・メン・フロアー

ズですわ!」

「なげーよ。もうチョーでいいだろ」

「ひっぱたきますわよっ!」

あと、どう見ても完全外国人て外見なのになんで日本人の名前が入ってたんだよ

「分かってると思うがいかりやの方の『チョー』じゃなくて、長くて超めんどくさいの『チョー』だから」

「離しなさい一花!!この非常識をギタギタにしてやるんだからーっ!!」

「おっ、おちっ落ち着いてください高杉さん!」

チョーが襲い掛かろうとしたのを見て、咄嗟に水無月が腰にしがみつくようにして止めに入った。

さつきから怒ってばっかだな。カルシウムが足りてないんじゃないかな?

「そっそっだ会長さん。瀬能さんが副会長になるのなら、横橋さんはどうするですか?」

「横橋?」誰それ?

「あら、そういえばいたわね横橋君」

会長つめてー、でもそこにシビれるアコガれるう!!

「で、横橋って誰」

「さあ…?そんな人いましたかしら?」

ある程度冷静さを取り戻して水無月を引き離すチョーに尋ねるも、彼女は首を傾げるばかり

…仲間じゃないのか?

「横橋君は副会長だった人よ。厳密にはまだ生徒会に所属してることになってるけど」

「じゃあ——」変更は無理なんじゃ

「最初の一回出たきり今も不登校だったわね」

なにながあつたんだよ横橋に

「ああ、思い出しましたわ。確か私たちを見た瞬間『かみはしんだ!』とか叫んで走り去った人でしたわね」

やっべ、なんとなく気持ち分かる

悲しいわけでもないのに涙が零れそうになり、思わず上を向く。

「横橋君は正式に辞めたことにしましょう。いい加減三人だけだと不都合も多いから」

いつの間にか壁際に貼つてあるあるホワイトボードに移動した三郷が、喋りながら同時に手を動かす。

そこには役職と名前が書いてあり、『横橋』の名前が消されて綺麗な字で『瀬能』と記入されていく。

「オイ待てコラ、俺は生徒会に入らんと何度も——」（くいくいつ）

「入って…:くれないんですか…?」

うるうるうるうる…

袖を軽く引つ張られたのでそちらを向くと、水無月が目には涙をためて見上げてきてた。

「ぐっ……」

やっ…止めろ…!そんな目で俺を見るなっ!!

「女の子を泣かせるなんて、男として最低のことですわよ。瀬能ナツル」

おかしい。チョーには自己紹介してなかったはずなのに、なんで俺のフルネームを知ってたんだ?」

生徒会に属してるなら生徒の顔と名前を把握してても不思議ではないが(俺有名だしな。悪い方に)、秘密を知ってしまった以上脅され

てる気がしてならない。

どうする…どうすればいい!?

「……………よろしく……………お願い……………しま…す…」

しばらく考えた後、血を吐きそうなほど苦しげな声で答える。

もとよりここに連れてこられた時点で選択肢はなかったんだ。そう思う

そう思うしかない

答えを聞いた瞬間、会長が憎たらしい程に絵になる笑みを浮かべる。

「ええ、歓迎するわ」

「ただし！FクラスがSクラスに試召戦争で勝ったら即刻辞めさせてもらうからな!!」

「好きになさい」

こうして、俺こと瀬能ナツルは晴れて生徒会副会長の座についた（つかされた）

けして忘れることのできない、ある意味大切な青春の一ページ。

「生徒会の一員である今は、それなりに節度を守って行動してちょうだいね」

「いつもしてるじゃねーか」

「どの口が言ってますの」

「今日瀬能先輩のクラスから病院送りになった人がいるって聞きましたけど…」

日常の範囲内だ

16時間目 生徒会で二衝

生徒会役員たちへの挨拶が一通り済んだ後、すぐに場所を移動すると言われた。

「なんでだよ…もういろいろあつてお腹いっぱいなんですけど」

「次が最後だから我慢なさい」

「トラブルの予感しかしななんですけど…」

「多分当たりますわよ、その予感」

チヨーさんヤメテ、フラグ立てるのヤメテ。もう帰って休みた
いんだから。

「はあ…まあ駄々こねても仕方ないし、さつさと行ってさつさと終わ
らすか」

「そうしてくれると助かるわ。注射器の使いまわしは衛生面から見
てもよくないから」

「さつさと捨てろ」

まだ持つてんのかよ筋弛緩剤。

☆

★

☆

そんなこんなで生徒会室(2)から歩いて、別の棟へ通じる連絡通
路へやって来た。

ちなみにチヨーはきちんと制服に着替えている。そのせいでまた
時間がかかった。

「なあ会長、俺の記憶が正しければこの先は三年棟があつたはずだが」
三年棟とは名前の通り、三年生が使用する専用の校舎のことだ。

神月学園は無駄に敷地が広いのをいいことに、様々な施設を数多く
設置している。

体育館、武道館、図書館、屋内・屋外プール、リング場、資料館、ジ
ム、風雲川神城、飼育場、工場…

中には超巨大な樹をまるごとくり抜いて作った『天然棟』なんてのもある。

ここで病気にでもなったら助からなさそうだな。

「ええ間違ってるわ。偉いわね、学校の敷地内の間取りをきちんと覚えてるなんて」

「一度遭難してから、数日かけてマッピングしたからな」

嘘ではない証拠に作成した地図を取り出す。

過程で全部暗記しちゃったから、全く使っていないけどね。

「…生徒手帳に描いてあるのだけれど」

「無くした」

「これ、すごい正確に描かれていますね。お勧めスポットまでありますよ」

「もはやガイドブックですわね…」

始めると案外楽しくて、ついやり過ぎちゃった。俺って凝り性みたい。

「また意外な才能を…瀬能君、この地図だけど借りてもいいかしら？」

「別にいいけど、どうするんだ？」

「最新版の学校の見取り図として使いたいよ。コピーして配布してもいいかしら」

「それは構わんが…」

んな素人が暇つぶしで作ったもんでいいのか？

とか思っていたんだが、後日公式に発行されたものはとても分かりやすいと好評だった。

それまでかなりの数が出ていた遭難者も、それを証明するように減ってきていると教師陣も上機嫌だ。今までどんなポンコツが描いてたんだよ。

「で、三年棟行ってどうするんだ？」

「顔見せと組織図への名前記入よ。早いうちにやっておいた方があな

「たもいいでしよう」

え、なに、生徒会の役員他にもいんの？

会長、副会長、会計、書記。庶務がないつつつたから、これで全部のはずだぞ。

それに組織図への名前記入って、さっきのどこでもできるだろ。

俺の疑問を察したのか、会長が再び口を開く。

「瀬能君、神月学園の生徒が何人いるか知ってる？」

「は？」

なんだ藪から棒に…まあいいけど。

えくつと…

一年はAからEまでの5クラス。二年はSとFで7クラス。三年もそれと同じと考えると…

「600人くらいかな」

「870人よ」

は？

はあああああ？！

「そんなに多いのこの学校？！」

「小学から大学まで合わせるともつといるけど」

「もつと!?!」

そんなマンモス校だったのかここ!?!

「それだけの人数相手に対して、役員5人ではとても手が回りませんわ」

「武闘派や過激な生徒も多いですからね…」

「そういう理由で、三年生担当の生徒会と一・二年生担当の生徒会に分かれてるのよ」

「ちなみに三年生担当の方を『第一生徒会』、一・二年生担当の方を『第二生徒会』と呼ばれています」

「なるほどね…だから生徒会室に(2)ってあったのか。にしても800って…」

魔法先生がいる学校みたいだな。

そりゃ施設も多い訳ですよ。遭難者も出る訳ですよ。

「一年のとき、やけに机が多いとは思ってたが……」

「あなたや私みたいに高校から受験する人は気づき難いけどね」

後で聞いた話だが、いつも月一でやってた全校集会は実は学年集会だったらしい。

入学式や夏休み前の集会は遅刻したりボーツとしてたから人数の多さに気づかなかった。周りに興味が無かったってのもあるけど。

「……ってあんたも外部受験組だったのか。なんでここ受けたんだ？」

ちなみに俺は見学しに来たときにモモさんに会ったのが——やめよう。長くなる。

「……そろそろ行きましょう。いつまでも先方を待たせるのも悪いわ」

そう言つて会長はさつさと歩いていった。

他の二人も一瞬啞然としていたが、すぐにハツとして後を追う。

……なんだろう。なんか癪に障ることも言ったのかな。

ついか会いに行くのつて三年かよ。

知り合いはモモさんしかいないし他に見たことないけど、校風考えるとあまりいい印象は感じられない。

2—Sみたいな高飛車な奴が運営してて、俺みたいなのは速攻否定されるんじゃないかなー

☆

★

☆

・生徒会室（1）

「うむ、分かった。南條、組織図を持ってきてくれ」

「H A H A H A！了解デス！」

赤茶つぽく髪をくるんくるんさせた女性に言われて、インディアンな羽飾りを頭につけた女が壁に掛かっていたボードを外す。

そして『第二生徒会』と表記されているところの、副会長の欄に書かれていた名前を躊躇なく消す。

「ソコノアナタ。名前、ナンテイイマシタカ？」

「え、瀬能ですけど…、瀬能ナツル」

「セ……ノ……ウ……コレデアツテマスカ？」

「あ、ハイ。名前はカタカナデス」

「瀬能君、移ってるわよ」

ああいかん。つい…

俺の予想とは裏腹に、トントン拍子で話が進んでいく。おかしいな。

「…そんなあつさり決めていいんすか？」

「もともと私たちに第二生徒会の人事に口を出す権利はないのでな」

「そうなん？」

「そうだけど…強く言われたら、従わざるを得ないわね」

「え、意外」

なんだかんだ言っただけで自分の意思を押し通すんだと思ってた。

俺のとききみたいにな！

「あなた…私をなんだと思ってるのよ」

「腹黒生徒会長」

「……………」

「いたっ、あいたっ、ちよっ、やめ…無言でわき腹刺すのやめろ！」しかも万年筆で！

「ふふっ…中々、良好な関係を築いているな」

「どこが!？」

すっげー痛いんですけど！

「三郷が一年生の時からの仲だが、君が他人にそのような態度を取る姿を見たのは初めてだ」

「…見苦しいところをお見せしてすみません」

「なに、目をかけていた後輩が信頼できる仲間を見つけたのだ。かまわんよ」

「俺がかまうよ！」横から刃物突きつけてくる友などいらん！

「っーかこのためだけに連れてこられたのか俺は？いらんだろ正直！」

「顔合わせも兼ねてますから…」

「全員で来る意味は？」

「伝統ですので、仕方ないですわね」

「そうでもなければ来なくなかったですわ…」と憎々しげに眉間にしわを寄せて、嫌悪感を露わにするチヨウ。

水無月も困ったように「アハハツ…」と苦笑いをする。

「どんだけ嫌われてんだよ三年生。」

つか顔合わせ兼ねてるつつーわりには、向こう二人しかいねーじゃねーか。トツプは誰だよ。

「HEY！私、南條・M・虎子イイマス！ナツルト同ジ、生徒会副会長デス！チナミニ会長ハアツチネ」

インディアン風の頭飾りをつけた女が、組織図を元の場所に戻して話しかけてくる。

「ヨロシク！」

「え、あ、ハイ…」

ハイタッチを求めるように手を突き出してきたので、勢いに押されながらもタッチを返す。

「なんだろうこのハイテンション。」

今までに出会ったことのないタイプだ…ワン子をグレードアップさせたらこんな風かもしれない。

「三年ってこんな個性派ばかりなのか？」

イメージしてた生徒会と全然違う…反対されて脱退する計画がパアだ。

「会長と副会長がいることは分かったけど、他はどうなんすか？」

「ああ、それは——」

三年会長（と思われる）が口を開いた瞬間、生徒会室の扉がガララツと開いた。

「失礼します…むっ」

ドアを開けた先には、黒髪でオールバックのキレ目が深い男。

学校指定の制服を着てるから生徒だろう。

その人物は室内に入ってくるなり、あからさまに嫌悪感を露わにした。

「第二生徒会連中か…なぜここにいる。お前ら程度がいていい場所ではないぞ」

うつわー、感じ悪い☆

「阿久津、なんだその言いぐさは」

「事実でしょう」

向こうの生徒会長——面倒だな、超会長でいいか——に咎められても、オールバックの男はしれつとしている。

「…なあ、アイツ誰だ？」

側にいるチョーに小声で話しかける。

「阿久津障司。三年生徒会の書記で、性格はご覧の通りですわ」

「いや、見ただけの印象だとただの高慢ちきな嫌な奴なんだが…」

「ご覧の通りですわ」

なるほど、お前も嫌いなんだなアレ。

そりゃ用事でもなきや近づきたくないわけだ。

「今日は新しく入ったメンバーの顔見せと組織図への記載に伺いました」

空気が不穏なものに変わりゆく中、会長が何事もないかのように対応する。

「新しいメンバー…？Sクラスの者か？」

「クラスはFです」

「Fクラス？ハッ！話にならん」

会長の言葉をオールバックは鼻で笑う。

次いで、侮蔑を含んだ目でこちらを見て…いや睨んでくる。

「初めはDクラス。その次は特に目立つところのない庶民の一年生ときて今度は底辺とは、二年の最高学力生とは思えん暴挙だな」

なんとも生徒会の人間とは思えない物言いに、チョーは悔しそうに

顔を背け、水無月は「ひうつ…」と小さく悲鳴を上げて身体を硬くする。

「三郷、お前は生徒会を軽んじているようだな」

「そんなつもりはありませんが」

「言い訳をするな。まったく、いい人材なら他にたくさんいるだろう。同じクラスの不死川や九鬼、葵でもいい。いやそうすべきだ」

有名どこしか挙げてねーじゃねーか。こいつもしかして、二年の生徒会を利用してコネでも作ろうとか考えてんじゃねえか？

不審に思っていると、視界の端で超会長が片手を額に当ててため息を吐いているのが見えた。

俺の予想はあながち間違ってもいないようだ。

「今からでも遅くないからこんな奴ら切り捨てて、頭を下げてでもSクラスの奴に入ってもらえ。こんななどこの馬の骨とも思えない人間を生徒会に入れたところで品位が下がるだけだろう。まったく、もう少し二年の代表としての意識をだな——」

「おおーっとバスが急ブレーキッ」

ドカツ

パイプイスが一つ、勢いをつけて床の上を滑る。

「ぐはっ!？」

椅子はそのまま、進路上に存在していたオールバックにぶつかった。

その後、オールバックを巻き込んで壁際まで移動する。

「ぐぶぶっ!!」

最後には押し込むような形で壁に激突し、汚い悲鳴が上がった。

…想像以上の結果が出た。

「阿久津、ダイジョブデスカー!？」

一部始終を目撃し、皆が固まったままの中、南條副会長が真っ先に話しかける。

しかし彼女はその場に立ったまままで近寄ろうともしない。声かけるだけかい。

「グツ…い、いきなりなにをする…!」

机と壁の間からオールバックが睨みつけてくる。

「悪かったな、バスが急ブレーキして」

「嘘つけ！」

つきましたがなにか。

「貴様、自分がなにをしたかわかってるのか！私は生徒会の役員だぞ！！」

俺もですけど。

ついイラつとしてイス蹴っ飛ばしたが、ちよつと不味かったかな。後悔は微塵もしてないけど。

流石に即座に退学とかはないだろうが、数日停学はありそうだ。期間中なにしようかな。

「阿久津、少し落ち着け」

「落ち着いていられませんかよ！会長も見たでしょう？こいつは——」

「急に止まったんだ。仕方ないだろう」

…は？

「な…なにを言つて——」

「そうですね。バスに乗っていて急ブレーキを踏まれたら、勢いがついてしまっても仕方ないですね」

「宙を飛んでいかなかったのは幸いでしたわね」

「ええつと…」

「ナツルモ反省シテルミタイダシ、許シテアゲルトイイヨ！」

三年を含む女子陣が一斉に俺の行為を事故だと主張する。（水無月だけは困惑してるが）

なんだこの状況。

会長やチヨーはともかく、向こうのインディアンや超会長までもがかばうとは思わなかった。このオールバックそんなに嫌われてんのか。

「くっ…まあいい、今回は見逃してやる。感謝しろ」

自分の不利を悟ったのか、オールバックは舌打ちをしてそんな台詞を吐く。

正直許されても許されなくてもどうでもいいんだが。面倒臭いこ

とになりそうだから黙つとこ。

「それより、貴様は誰だ。興味はないが一応名前を訊いてやるから名乗れ」

一々癩に障る言い方するなあ。なんかいいことあったの？

「他人に名前を訊くときはまず自分から名乗るもんだ」

「…ふん、下級生が一丁前に礼儀を口にするとはな。まあいい、私は生徒会会計の「長いくどい興味ない俺は瀬能ナツルだ」

……………

あまりにもウザかったので食いきみに、それでいて簡潔に自己紹介したら場が凍りついた。

見事に誰も動かない。オールバックもなんか、自信満々みたいな薄ら笑いのまま固まっている。

もう帰っちゃっていいかな。

「……………ふ…ふ…ふ…そうか貴様が瀬能ナツルか。なるほど、噂通りの男だな」

いち早く立ち直ったオールバックが、前髪をかき上げる仕草をしながら変なことを言い出した。

「(阿久津先輩のこめかみすごいピクピクしてますよ…)」

「(それだけ動揺しているんでしよう。もともと上がってる髪形なのにあんなことして、ワックスが手に付かないのかしら)」

部屋の隅っこでチョーと水無月がひそひそと好き勝手喋ってる。

言いたいことがあるんならもつと堂々と言えよ。そんなだから舐められるんだよ。

「流石は『神月の癌』だな。入学の際には面接もあるが、これからは精神鑑定もつけたほうがよさそうだ」

「阿久津！」

「なにそのあだ名、超イカす。つけた奴はセンスあるな」

「瀬能!? 本気で言ってるのか!?!」

真剣^{マジ}ですがなにか。

「俺は自分が不良だつて自覚してますから。癌つてあれだろ？完全な治療法がない悪性の病気だろ？それだけ評価されてるのは、まあ嬉しいスね」

「か、変わった捉え方だな」

「俺が癌なら誰かさんは初期の血栓だな。体調に大きな変化はないけど血流を妨げて身体をダメにする」

「なんだと！貴様、私がそうだと言いたいのか!？」

「おや心当たりでも？」

俺は誰かさんとは言つたが、明確に名前を挙げてないよ？

「グツ：貴様、よく性格悪いと言われるだろう」

「あんまり言われたことないかなー」

「いい性格してるとは言われるけど。」

「やはり貴様のような人間は生徒会に相応しくない。良心がまだあるなら早々に辞表を提出しろ！」

「人を血も涙もない悪魔みたいな言い方しよつてからに：良心云々は別として、俺もメンドクせえから入りたくないんだよね」

「ならば「だが断る」なつ、なぜだ!？」

「あなたがそこまで自分の加入に反対するのであれば、俺は全力で職務を果たすことを宣言しよう」

生徒会の仕事つて大変そうだけど大丈夫！俺つてば意外にYDKだから。

うん、瀬能さん家のナツル君はやればデキる子！

「そんな理由で生徒会に：破天荒とは聞いていたが度を超えているだろう…」

「なぜかしら、喜ばしいはずなのに全然嬉しくないわ」

「見てください瀬能さんの表情。なんて清々しい笑顔…」

「中身は芯までこつてり濁ってますけどね」

外野の戯言は無視。

「瀬能ナツル!!」

突然、オールバックがポケットからなにか取り出し、それを俺に向かって投げつけた。

反射的に手で受け止めたからよかったけど、軌道からして目を狙っただろお前。

思わず力が入り、握り潰しそうになるのを我慢して手の中に収まっているものを確認する。

これは…ワツペンか？

「貴様に、決闘を申し付ける!!」

「はあ?」

17 時間目 生徒会の三劇

前回のあらすじ。なんか同じ学園に通う一歳年上の嫌な感じの男にの決闘を挑まれた。

なんで？

「私に勝ったら加入を認めてやる」

「言ってる意味が分からない」

いや実際は分かるよ？分かってるよ？

「あんたが承認しようとしまいとすでに俺は役員の座についてるんだよ。もう少し考えて喋れなんちゃってエリート」

「キサマアアアツ!!」

「おいおい、いくらなんでも青筋を立てすぎだろ。血管切れるぞ」

「貴様が怒らせてるんだろぅが!!」

人のせいにするのはよくないよ上級生。

「(…瀬能さんが頼もしすぎてちよつと怖いです……)」

「(一人でさせるのは不安だけど、交渉事をするときにいてくれると心強いわね)」

「(いつも澄まし顔で嫌味を言ってくる阿久津書記が、あそこまでの醜態を晒しているのは見ていて気分がいいですけど)」

「何をするのか分からないから味方にすのは不安だが、敵に回すのは出来れば避けたい。まったく、扱いに困る人物だ…」

外野がまた好き勝手言ってるが無視。評価がいいのか悪いのか分からねえ。

「まあとりあえず、やるだけ無駄なのでこの話はなかったということ
で」

「ふん！そんなことを言っつて、本当は私と戦つて無様に恥を晒すのが怖いだけだろう！所詮は最低クラスの腰抜けか」

あつはつは。なかなか面白いこと言うじゃない。

「^{やっす}安い挑発だなあオイ。今どきそんなのに引つかかるのはバカだけだ
ぜ」

「挑発？事実を言ったまでだが？」

「だから乗ってやるよ。その決闘受けて立つ」

侮蔑と、人を小馬鹿にする薄ら笑いを浮かべるオールバックを満面の笑みを持って見つめ返す。

手の中のワッペンがぐしゃり、と握り潰された。

☆

★

☆

場所を変えるぞと言われて連れてこられたのは、東京ドームの地下に存在する地下闘技場のような空間だった。

もつとも、本家とは違って選手が戦う場は砂地ではなくプロレスのマットが敷き詰められているが。

「こんな場所もあるんだな」

学園全域をマップピングした俺だが、学園にある施設全ての内部構造を知っているわけじゃない。

なぜなら一部の…というか大半の施設は立ち入りに制限があるからだ。上級生専用の棟とかは基本、許可がないと入れない。

なのでこの闘技場——外観は国技館——は初めて見た。

「ここは三年専用の施設だ。貴様ごときと戦うのに使うのは少々贅沢すぎるが、他は全て使用中なのでな」

「別にどこでやってもいいんだけどさ」

なんか…観客多すぎね？

見たとこ客席の八割が人で埋まっているんだが。

全体的にざわざわと好き勝手ざわめいて、耳を済ましてみれば『阿久津がまたやるみたいだぞ』とか、『今日の犠牲者は二年生か』などと聞えてくる。

こういうこと日常的にやってんのかこのオールバック？

気に入らない奴や自分に反抗する奴を大衆の面前で痛めつけて、自分の強さを見せつけ相手の心を折る。みたいな。

俺の勝手な想像だが、これが当たっていたらすごく…クズっぽいです。

つーか決闘するのが決まったのついきつきだぞ。どうやって集め

たんだ。

「ハイハイ。そろそろ始めるヨ、二人とも集まって」

リング上で客席側を見ながら物思いに耽っているとクラムチャウダー先生に呼びかけられた。

「ワタシの名前はルーだヨ」

「失礼しました、スパイス先生」

「だからルーだヨ。：それにしても、ナツルも大変ネ。こんな短期間で二度も決闘するなんテ」

「短期間で：モモさんなんて一週間フルで連載なんてのしたことあったでしょう。それに比べたら可愛いもんスよ」

まあ実は八日目には俺とやったから一週間超えてるんだけどね。

あの時は直江に『ゲームでもしようぜ』みたいな感じで電話で呼び出されたんだったな。

そしてその後、なぜか流れるようにモモさんと試合したんだ。ギリギリで俺が勝ったけど。

満身創痍で問い詰めたら『姉さんが滾ってたから：』て抜かしやがった。

ガスぬきに俺を利用するんじゃないやねえよバカヤロー。お前んとこの姉御と違ってこっちは回復魔法使えねえんだぞ。毎回数力所あざや骨折を作る奴の身になれってか治療費払えやコラ。

なんか、思い出したら腹が立ってきたな。

「百代は有名だからネ。でもナツルはこの前裏神月ランキングに入ってたばかりヨ。それなのに数週間以内で二回目は普通ないヨ」

「そう言われりやそうだが」しかもランクインつつつても最下位だし。

別名でならすでに一位に入ってるんだけどね。

「まあ、それだけナツルも有名になったという訳ネ。きつとこれからもっと挑戦者が増えるヨ」

「メンドくさ…」

たまにならいいけど連続はやだな。ザコを相手に『俺、最強!』とかやっても虚しいだけだし。

「先生、そろそろ始めましょう。時間の無駄です」

「ああ、すまないネ」

「…ま、すぐに終わりますがね」

ホント一々癪に障る言い方するなコイツ。

「二人とも決闘のルールはもう知ってるネ」

「はい」

「基本はプロレスのアレっスよね」

武器の使用。それ以外の全てを認める! ってやつ。

「武器は何を使うかは事前に申告する必要があるけど、二人とも素手で大丈夫ネ?」

早速ルールが瓦解した。

「アリなの武器使って!」

「ダイジョーブ。訓練用の模造品ネ」

「そういう問題!」

竹刀だつて当たりどこ間違えたら命落とすんだぞ!?

「ふん、所詮はFクラスのクズ…いや虫けらだな。ルールを再確認して早々に怖気付くとは。心配せずとも私は武器を使わん」

……………

「なんだその顔は?」

「別に。もういい加減始めましょうか」

なんかもう気づかうのもバカらしいし。

☆

★

☆

??? Side

観客席から見下ろす先に、二人の少年と一人の成人男性が向き合っている。

一人は道着姿で、私も所属している第一生徒会の書記、阿久津障司。

もう一人は選択科目『武道』を担当しているルー教員。
そして残る一人は学園指定の制服を着た二年生：瀬能ナツル。
神月学園に入学して——否、入学する前から、報告や噂で聞いている人物の一人。

言い回しは異なるが、皆似たような評価を彼に下す。

人の姿をした魔獣、と。

はたしてどれほどの実力を秘めているのか：少し、興味がある。

「それでは、時間無制限、一本勝負！レーツツ、ファイト!!」

ルー教員の掛け声を合図に、試合が始まった。

しかし双方共に構える気配がない。瀬能に至ってはズボンのポケットに手を入れている。

二人共なにを考えているんだ？

「……こんな覇気のない奴に弟は負けたのか。やはり解せんな」

瀬能を睨みつたまま、阿久津が口を開く。

「弟？」

「阿久津真は私の弟だ」

「……………？」

「貴様が数週間前、試召戦争特別ルールを使い倒した男だ!!」

本気で心当たりがないといった顔をする彼に、阿久津が怒鳴り声を上げる。

「いちいち声を荒げるなようっせえな：それで？アンタの本当の目的は可愛い弟の敵討ちだったってか？優しいお兄さんだねえ」

「可愛い弟？ハッ！あんなどこの馬の骨とも知れん奴に負ける屑を、そんな風に思ったことなど一度としてないわッ！」

怒りの形相でこの場にいらない者を罵る阿久津。

実の弟に対してそのような言い草を：

確かに阿久津真の素行の悪さは目に余った。しかし、そこまで言う程だろうか。

家族間でのことなので口出しすることはないが、なにか問題を起こしても、大事にならぬよう率先して後始末をしていたので、仲は良好

だと思っていたのだが…

その彼は両腕を骨折してから現在まで、休学して自宅で治療に専念していると言った。はたしてどのような扱いをされているのだろうか。

「…ある意味似たもの兄弟だな。それで？結局お前、俺にどうしてほしいんだよ」

「私を殴れ」

「は？」

……………うん？

なにやらおかしな流れになってきたな。

「なんだって？」

「私を殴れと言ったんだ。どうしようもない愚弟だが、武の腕前は私も買っていた。それが貴様のような雑草に負けたとはとても信じられん」

「どうせ小物らしく卑怯な手でも使ったのだろう。化けの皮をはいで、真の姿を白日の下に晒してやる」

そう言って一層、胸を張り堂々とした態度でリング中央に立つ阿久津。

……………なんとさえばいいやら…

「寸劇を見ている気分ですね」

「数秒後どんな反応をするか、楽しみですわ」

「えっ、ええつと…」

「オー、阿久津ハ演劇部ダツタノカー！」

私の隣、共に観客席の最前列に座る少女たちが、思い思いの感想を口にする。

ちなみに発言は三郷、高杉、水無月、南條の順だ。席もその順番で並んでいる。

二年生の二人は随分と余裕がある。先日の試召戦争でFクラスに挑まれていたから、瀬能の実力を少なからず知っているのだろう。

南條は別として、一年生の水無月も困惑はしているが彼を心配して

いる様子はない。

前々から思っていたが、我が校の生徒は自分より下の者を見下す傾向があるな…それも根拠もなく。嘆かわしいものだ。

「お前バカだろ」

「なに？それはどういう——」

「おわたアアツ!!」

ズガンツ！

阿久津が眉を顰めて疑問を口にした次の瞬間。瀬能が握りしめた拳が阿久津の頭に叩きつけられていた。

おかしな言い方だがそれ以外表現のしようがない。少なくとも五歩分はあろうかという距離を、いつ近づいていつ腕を振り上げいつ落としたのか全く気づかなかった。

「——ぎゃあああああつっ!!」

数秒の間を開けて、阿久津は足を抱え込むようにして床に崩れ落ちた。

「ものの価値が分からん金メッキ野郎は這いつくばってんのがお似合いだ」

「それまで、勝負あり！」

冷めた目で阿久津を見下ろす瀬能に、ルー教員が決闘の終了を告げる。

「順当だな。これ以上は命に関わる。」

「ま…待て…、私は…まだ…:…やれる…!!」

苦悶の表情を浮かべ、腕の力のみで上半身を起こす阿久津。

やはり、立ち上がるか。プライド高い男だからな。

「その身体じゃ無理ネ、両足が折れてるヨ」

「そうなるように打ったからな」

しれっと、なんでも無いように答える瀬能。

その言葉を聞き、阿久津はギロツと音が鳴りそうなほど彼を睨みつけた。

…そろそろ介入するべきか。

「貴様…自分がなにをしたか分かっているんだろうな…！私は生徒会の一員だぞ?!」

「それさつきも聞いた」

「貴様のようなどこの馬の骨とも知れんクスなど、本来なら会話することも許されんだ！それなのにこんなことしやがって…！貴様なぞ私の権限を使ってこの学園から追放してやる!!」

「それは無理だ」

観客席を隔てる壁を飛び越え、直接リングに降りる。

そのままリング中央へ近づいていくと、二人の様子がより一層分かりやすくなる。

阿久津は歯を食いしばり、目を血走らせて憎悪を露にしている。

人はここまで醜くなれるのか。そう思わせる表情だった。

一方瀬能は、道端の石でも見つめるような眼差しで阿久津を見つめ返している。

こうまで悪意を向けられたら普通、顔を背けるなりなんらかのリアクションを取るものだが…全く微動だにしない。

先程と違い氷のような表情に——不覚にも少し、美しいと思ってしまった。

「か…会長…?」

「いくら生徒会役員とはいえ、生徒を退学にすることはできない。なにより」

そこで一端区切り、阿久津の側で膝を屈める。

そして上体を支えている腕に手を伸ばし——

「生徒会を辞めた一生徒に、そのような真似をする権限は無い」

そこに付けられていた腕章を取り外した。

「な?!会長なにを?!」

「『なにかを賭ける時は双方共に同等の価値のものを賭けなければならぬ』、神月学園に置ける決闘のルールだ」

阿久津は瀬能の生徒会追放を提示した。

しかし瀬能は対価を要求しなかった。よって阿久津の生徒会追放

が彼に支払われる報酬となるのが妥当だろう。

「そ、それは知っていますが——」

「ならば受け入れろ。自分で言ったことだ」

「ですが！」

「阿久津、正直に言うのと最近の君の行動は目に余る」

一部の生徒への差別、有名病院や財閥の御曹司など権力者への賄賂
紛いの贈り物、決闘を利用したリンチ公開私刑……

証拠が固まり次第一斉摘発しようと思がせていたのだが、私に気づかれてないと本気で思っていたのだろうか？

「しっ、しかしっ」

「引き継ぎ等は気にしなくていい。残りのメンバーでうまくやってみせる。なに、いざとなったら頭でも下げるさ。君の言う通りにな」
「……………」

「残念だ阿久津。一年の頃の君は本当に——輝いていたのに」

すぐるような眼差しを切り捨て背を向けると、背後からドシヤツという音が聞こえた。

ギリギリのところまで保っていた意識が切れたのだろう。タンカも来ているようだし、放って置いても大丈夫だろう。

それよりも……

「瀬能、これは君の物だ。受け取れ」

持っていた腕章を突き出す。

「…付けなきやダメっスか」

「お前…生徒会室で宣言しておいて今さらそれはないだろう」

まあ数人しかいなかった一室と、何十人が見ている中では規模が違
うがな。

瀬能は深くため息を付いて、腕章を受け取り自分の腕に嵌めた。

裏返しに。

「おい、逆だぞ」

「知ってます」

しれっと悪びれもせず……まあいい。

これぐらいの反抗心なら可愛いものだ。

「なんか流れて完全に入ることになっちゃったけど、よかつたんスか？こんな問題児生徒会にいられて」

気絶したままタンカで運ばれる阿久津を眺めながら、瀬能が口を開く。

「言っただろう。第二生徒会の人事に口を出す権利はない。それに、君は中々理性的な人間だ」

「あれで？」

「頭を打ったのに、負傷したのは両足のみ。充分理性的だと思うが？」
観客の多くや、阿久津本人も気づいてないが、ついさっきの試合は本来ならもつと大惨事になっていてもおかしくなかった。

一撃で両足が骨折したのだ。あれを骨盤や内臓、勿論頭にでもあの衝撃が放たれていたら、とても怪我では済まなかつただろう。命に關わる。

「散々罵倒されたのに、君は随分と優しいんだな」

「あれぐらい日常茶飯事だし」

「ふむ…寛大だな。その実力と"裏番"の名前を示せばもつと楽な学園生活を送れるだろうに」

ビリっ…

瞬時に、目の前に立つ男の雰囲気が一変する。

外見は全く変わっていないのに、溢れる殺気で空気が震えるようだ。

先ほどから少なからず警戒心は持っていたようだが、今の彼はまるで猛獣だ。

「…そういえば先輩の名前をまだ訊いてませんでしたね」

「そうだったか？私としたことが…すまない。しかし、君は他人のことを気にする性格ではないと思っていたのだがな」

「相手が一方的に自分を知ってるっていうのは、誰だって嫌だと思いませんが」

ふむ…正論だな。

「では名乗ろう。神月学園三年、第一生徒会会長の桐条美鶴だ」

一端言葉を区切り、手を差し出す。

「これからよろしく頼むぞ。副会長」

「…リコールされるその日までは、まあ よろしくお願いします」

悪態とも皮肉とも取れるつぶやきをしながらも、瀬能は私の手を取りしつかりと握手をした。

17. 5時間目 物語の狭間のページ

〈美鶴Side〉

・夜

「瀬能ナツル…か」

自室で一人、昼間出会った生徒のことを思い出す。

「まさか通り名を出されたただけであのように反応されるとはな…」

—— 神月学園では様々な分類に分けてランキングをつけている。

中でも”強さ”を対象としたランキングは裏・神月ランキングと名付けられ、日々ランカーが目まぐるしく入れ替わっている。

しかし、絶対に順位が変わらず不動の地位を築いている者が二人だけいる。

一人は川神百代。ランキングの二位で、通り名は武神。

もう一人は冴島タイガ。ランキングの一位に君臨する、学園最強の人物。

最も、誰も姿を見たことがなく噂だけが一人歩きしているがな。

その冴島の通り名が…裏番。

周りに関心がなくとも、自分の呼び名は知っていたようだ。

「それとも誰かに教えられたか…。どちらにせよ有意義な会合だったな」

報告や噂でだけではなく、直接本人の人となりを知ることができた。

代わりに…というわけではないが、役員が一人減ったがな。

…阿久津は恨んでいるだろうな…私と瀬能を。

しかしやり過ぎたとは思っていない。あれは当然で必要な行為だったのだ。

あの場で即決しなければ阿久津は…死んでいただろう。

いや、そこまでいかないまでも、それに近い状態にまではなっただけだ。

敵と認識し、立ち向かってくるものは動かなくなるまで…戦闘不能になるまで攻撃する。

戦う姿を見て分かった。瀬能には欠落した部分がある。それを何と言えればいいか…あいにく当てはまる言葉が見つからない。

理性と狂気と獣性を兼ね備えた男。それが私が彼に持った印象だ。

「…戦士としては理想的、か…」

昔の資料を眺め、目についた一文がつい口から零れる。

殺気をぶつけられた時、猛獣を目の前にしたかのような錯覚に陥った。

恐怖を感じたがそれよりも、咄嗟に頭を過つたことがある。

試してみたい。

この男相手に、自分がどれほど戦えるかを知ってみたい！強くそう思った。

正直、レイピア武器を持っていたら決闘を申し込んでいただろう。

自分にあのような一面があったとは思わなかった。明彦のことを言えないな。

「面白い男だ…それ故に、残念ではあるな」

まあもう過ぎたことだ。気にするのは止そう。

わざわざ引っぱり出した資料を片付ける。

明日も早い。今日はもう休むとするか。

—適性者リスト—

対象者名：瀬能ナツル

×年10月31日、沖縄生まれ。

両親は単身赴任で他県へ行っており、現在は一人暮らし。

高い身体能力と、幼少期より教え込まれた武術を持っており、戦闘能力は極めて高い。

性格は少々難があるものの、戦士としてはある意味で理想的である
と言える。

しかし影時間にて象徴化を確認。適性は無しと判断する。

18時間目 SWK

4月。

穏やかな気候。爽やかに吹き抜ける風。

『H A H A H A！ついにワタシが世界一になる日がきたなゲイツ！』

『そうだねゲイル兄さん！』

「……………」

路上で外人二人に絡まれる主人公。

☆

★

☆

くナツルSide)

平日、いつも通りの時間に家を出ていつも通りの道を歩きいつも通りに学校へ向かっていたら、いつもとは毛色の違う奴らに行く道を塞がれた。

なんだこの展開。

これまでも何回か登校途中に絡まれたことはあるが、ストファイのアメリカ軍人みたいなのと一目でインテリっぽい外人コンビに絡まれたのは始めてだ。

本当になんだこの展開は。

『モモヨに勝った男というからどんなものかと思っていたが、見た目は平凡そのものだな！』

『ノンノンノン、見た目に騙されちゃいけないよ兄さん！この数週間観察し続けてきたけど、彼は中々凶暴なファイターだよ！』

(※カラカルIIゲイル・ゲイツ兄弟は英語を喋っています)

やべえ、なに言ってるかまったく分からねえ。

「お前ら日本語喋れよ」

『んん？どうやらアイツ、英語が分からないみたいだよ兄さん』

『OH：世界でもっともポピュラーな言葉が分からぬとは…なんとも可哀想なヤツだ』

外人二人はお互いに顔を合わせ、やれやれと肩を竦める。

馬鹿にしやがって。

『ククク…でもどんなに無知だからって油断は大敵だよ。モモヨに負けてから開発したこの小型スーパーコンピュータで、確実にあのナツルを倒す！』

インテリの方がノートパソコンを取り出した。

そのまま、カタカタカタと物凄い勢いでキーをたたき出す。

『そこらのならず者を使って集めたデータ、それに学園での戦闘記録を元に、ヤツの行動パターンを100%算出する!!』

『頼むぞゲイツ！』

なんか向こうの方盛り上がってんなあ。なにやってんだ？

…もしかして戦力分析？今から？

でもそう考えると最近の襲撃状況に色々と合点がいく。一度として同じシチュエーションがなかったのは調べてたからか。

でも結果弾き出すのをわざわざ本人の目の前でやるか？その間に攻撃されたらどーすんだ。

いいこづかい稼ぎになったし結果が気になるから待つけど。

『あとはコレを入力すれば…クククっ！これでナツルは丸裸さ!!』

カチ。

ボカアンツツ!!

『Noooooooooooooooooooo!!!』

『げっ、ゲイツうううっ!?!』

「PCが爆発した…」

インテリがエンターボタンを押した(と思われる)次の瞬間、ノー

トパソコンが木っ端微塵になった。

ノーパソを持つていたインテリは当然爆発に巻き込まれ、髪の毛をアフロみたいにチリチリにさせてぶっ倒れる。

『なんだ！一体なにが起きたというのだ!?!』

「俺の情報にパソコンが耐えられなかったみたいだな」

電子機器のくせに軟弱な。

黒煙を上げる機械の残骸と黒焦げなインテリを前に、分かりやすく狼狽える軍人もどき。さっきまでの余裕な態度が嘘みたいだ。

……さて、と。

「じゃあそろそろ始めますか。時間も無いし」

『なっ……まっ、待て!?!』

「待ったなし、だ」

『お前本当は英語理解してるだろう!』

ウォーターシー英語ワーカリマセーン。

両手を突き出し、あたふたと狼狽する外人に向かい、片手でゴキ…と拳を鳴らして一歩足を踏み出す。

その瞬間、殺気を感じた。

「スキありだぜー!!」「っ!?!」

少女のような声と共に、後頭部に鈍器が当たる感触がした。

——柳に風!

『グボツ!?!』

咄嗟に衝撃を逃がすと、外人が顔を凹ませて吹っ飛んだ。

…しまった、焦って前に衝撃送っちゃった。

まあ顔面殴るつもりだったし結果オーライでいいや。

「こ…コイツ、ウチの一撃を他人になすりつけやがった!?!」

「天！一旦戻りな!!」

打たれた箇所を摩りながら振り返ると、茶髪でツインテールの中学生ぐらいのガキが驚愕の表情を浮かべていた。手にゴルフクラブ持って。

オイちよつと待て。それで俺を殴ったのか。

一歩間違えたら死んでたぞ。

「思いっきりやったのに手応えがまるでなかったぜ!？」

「ちつ：挑んだ師匠が返り討ちにあつたて言うから不意をつけて仕掛けたのに、まったくダメージがないってどんな化け物だい!」

「でもいい男だぜ亜巳姉」

「黙ってな竜!」

闇討ち食らわされた上に散々な言われようだ。

襲撃者の数は：女が二人に男が一人か。なんか男の発言に身の危険を感じるんだが。

「テメーらいきなりなんなんだコノヤロー。罪もない一市民にドライバー打ち込みやがって。ホームランでも狙う気かバカヤロー」

「この訳の分からない喋り口調、瀬能ナツルに間違いないようだね」

無視か。

つーか間違いないようだねって、万が一でも間違いだったらどうするつもりだったんだ。

「俺の顔に口調を知っているとは：随分とお詳しいじゃないの。何奴だ」

「板垣家長女、板垣亜巳」

ムチを持ったサドっ気ありそうなおねーさんが真っ先に口を開いた。

名乗るんかい。

「くくっ、勝つたら食ってやる：板垣家長男!板垣——」

「隙ありやああアアツツ!!」

持っていた鞆を捨て、瞬動で喋り途中の男に飛びかかる。

そのまま相手の膝を踏み台に、勢いをつけて自分の膝を顔面に叩き込む。

「ぐぶおっ!」

「S…W」

膝蹴りが決まった後、即座に踏み込んだ足を男の首に巻きつける。

そして力一杯締め上げて、後ろに体重をかけて顔面を膝に落とす!

「Kエエエエエエッ!!」

勢いよく地面に着地するとどグチャツ!と派手な音がした。

これでSWK（シャイニング・ウイザード・虎王）！良い子はマネして友達に使っちゃダメだぞ！（※できねーよ）

足で拘束するのをやめて男から離れると、男はうつ伏せの体勢のままピクリとも動かない。まあ死んじゃあいないだろう。

「なっ…竜！」

「てめー、よくも竜兄を!!」

あーん？

「なんだテメーら。復讐かなんか知らんが、自分が傷つくこと考えてなかった口か？」

「…そういう訳じゃないさ」

「名前訊いといて喋ってる途中で攻撃すんのはなしだろーが！」

訊いてませーん。何奴ってゆっただけでーすー。

「ちっ…気を引き締めないとね…天、挟むよ！」

「オツケーアミ姉！」

言うが早いのか、二人して両サイドがら近づき武器を振り回してくる。

ガキンチョはゴルフクラブを上段から、亜美と名乗ったおねーさんはボクシングのスマッシュみたいなの軌道で鞭を振るう。

これは…片方を避けてももう片方に当たる絶妙な挟撃だ。いいコンビネーションしてんじやねえか。

だが…

「(ス…) 鉄塊…空木!!」

ガギンツ!!

「なっ、「うわ!?!」

脱力した状態で待ち、それぞれの武器が当たった瞬間にカウンターで跳ね返す。

六式を体得した俺にこの程度の攻撃効きはせん!!

「かかったね…！辰！やっちゃまいな!!」

「りようかーい」

「なに!?!」 伏兵がいたのか!?!

今までまったく気配を感じなかったぞ!?!どうやって隠れてたんだ

！
ヤバイヤバイヤバイ空木を使った反動か全身が硬直して身動きでき
ない！今攻撃されたら無防備でもろに食らう絶対ヤバイ！！いやい
やまでまで今の今まで存在感無かった奴だぞ？そんな大した攻撃力
は持っていないだろそうだそうに決まってる！！

(※ここまでに0.5秒)

大丈夫！瀬能さん家のナツル君は強い子だから大丈夫！なにがど
う大丈夫かはまったく分からないが、とにかく大丈夫！！

そうやって必死に自分に言い聞かせ、覚悟を固めている俺の頭上
に、

「や〜」

間の抜けた声と、
ブオンツ！！

四角柱の形をした設置型のバス停兼時刻表が降ってきた。

…次のバスは20分後か。走るのとどっちが早いかな。

グアシャアン！！

バス停が頭に突き刺さった。

しかも貫通しなかったからかぶり物みたいになつたし。

なに、このまま被せ手刀打ちの極みでもされんの俺？

「辰！本気でぶちかました！！」

「——っああああ！！」

ドグオンツツ！！

女の叫び声と共に、凄まじい衝撃が側頭部からやって来た。

まるで何百キロの鉄槌でぶん殴られたようで…思わず意識が飛び
かけた。

しかし身体は正確に反応した。

殴りかかってきた奴の右肩と左脇腹を、両手でガッチリ掴む。

「!?」

「…今のは……かなり、効いた…」

今だにクラクラする頭で、真っ正面からしつかりと相手を見据える。

かなりの美人さんだった。

：モモさんといい会長といい：最近の美女はハイスペックがデフォなのか？

「中タイイもん持つてんじゃねえか：でもそれぐらいじゃあこの辺では——」

通んねえんだよ。

「口おおおおおおおおツツツ!!」

「っ!?!」

掴んだ手をそのままに、全身全霊を込めて押し込む！

押す!押す!押す!!

「なっ、」「たっ、タツ姉!」

「:~!、っ!!、っ!?!」

向こうも力を込めて止めようとしてくるが、お構い無しに倍プツシュ!

プツシュ、プツシュ、プツシュ!!

勢い余って靴底踏み抜こうが、アスファルトが耐えきれなくなつて破壊されようが、気にせず倍ドン!

なぜなら僕は魚雷だから!!

そうして道路の端へと押し込み、民家を隔てるブロック壁にどんと軽くぶつかる。

そのままの状態で相手の顔を見れば、困惑と驚愕、そして若干の恐怖が浮かんでいた。

キーンコーンカーンコーン：キーンコーンカーンコーン……

遠くから学校のチャイムの音が聞こえてくる。

：チツ、ショートホームルーム S H R 開始のチャイムか。

ここから学園までの距離を考えると、今から行っても一時限目には間に合わないだろう。遅刻は確実だ。

じゃあバックれるかと言われたら…気が乗らねえ。久々に全力出したせいかな。

仕方ない、走るか。

掴んでいた手を離し、鞆が落ちているところへ歩く。

俺の突然の行動に、対峙していた女も含めて全員がぼかんとした表情をする。

……このままほっといたら追いかけてきそうだな。

「あー…その、なんだ」

鞆からシガレット（チョコ）を取り出し、口に加えて俺を見つめてくる全員に向かって口を開く。

「今回の俺の負け、ってことにしといてくれや」

返事を待たずに踵を返し、学園へと走る。

…やべ、まだクラクラする。

☆

★

☆

「えっと…ウチらの勝ち、ってことでいいのかな」

「本気で言ってるのかい？ たたく、四人がかりだったのに辰の一撃しか効いてないなんてね。竜！ いつまで寝てんだい、さつさと起きな
!!」

「……………かつこいい…」

「はあ!?」

〜おまけ〜

「せんせ〜信じてくださいよ〜。ホント、遅刻したのはそういう理由

なんですつてば〜」

最早おなじみとなつたF組の教室スペース——という名のグラウンドの片隅——で必死に鉄人教師に弁明する。

「ほう、じゃあその理由とやらを言ってみろ」

「産気づいたお婆さんを介抱してて…」

「水を張ったバケツを両手に二つづつ持つて廊下：はなかつたな。クラス中央に立っている」

罰にしても古典的な上にクラスメイトが見つめる中つてどんな羞恥プレイだ。

「…瀬能、お前はバカだが人として大切なことを知っている奴だと俺は思っている」

「なんすかいきなり」

そんなちよつと優しい：ゴリラが我が子を見るような眼をして。

「俺が許せんのは遅刻をした挙句に嘘をつくことじゃない。真実を話してくれないからだ。正当な理由があるなら俺もこんな仕打ちはしない」

「せ…先生…!」

「高橋先生も嘆いていたぞ。一年間担任だったのにお前は心を開いてくれなかつたつて」

あの先生のこと引き合いに出されるとちよつとキツいな。

「完全に信用しろとは言わんが、少しは歩み寄ってくれてもいいんじゃないか？俺たち教師陣にさ」

「…つ、先生。すいません、俺、嘘ついてました。ホントは別の理由で遅れたんです」

「そうだろう。で？もう一度訊くがなんで遅刻したんだ？」

「実は…実は…!」

感極まつた表情をしながら、懐から木彫りの熊を取り出して。

「天啓を…得てました…!」

「両腕を地面と水平に大きく広げスクワットを千回やれ。バケツの水を一滴でも零したらもう千回追加だ」

もうそれ体罰のレベル超えてるよね。

19 時間目 Fate

「流石にきつかった…」

一限目終了のチャイムが鳴り終わると同時にノルマを達成し、バケツを地面に下ろす。

朝からバケツ二つ持ってスクワット千回する高校生って全国で何人いるかな…

「お疲れナツル。よく水を零さなかったな」

汗だくのまま一息ついていたら直江が話しかけてきた。

「…お前か。あー、一年ぶり」

「昨日も会っただろ。なに言ってるんだ」

そうだったつけ。

「坂本と吉井はどうした？」

「二人とも入院中。吉井はともかく坂本は自分の手で病院送りにしたんだから覚えとけよ」

あー…あー、そうか、昨日血祭り食らわせたんだった。

吉井も間接的にだが俺がやったようなもんかもな。別になんとも思わんが。

「しかし結構激しく動いてたのに全く跳ねなかったな…なにかコツがあるのか？」

「あー？ 気で固定化したんだよ」

「…そんなことできるのか？」

普通は無理なんじゃないかな。

なんか…波紋みたいな感じで使ってみたらできた。コップの水面に振動膜を作って、水を協力に固定してプリンみたいにするアレ。

使えば使うだけ幅が広がるな。そのうち物質具現化とかできるよ
うになるかも。

「相変わらずタイガはすごいわね。アタシもできるかな…」

「おいおいワンス、前に言わなかったか？」できないと決めつけるのは…」

「…!」やれることを全部やってからでも遅くない”ね！うん、アタシ

も頑張る!!」

「おーガンバレガンバレ。できたら教えてくれ」

やる気に満ちた目で闘志を燃やす少女に、軽い気持ちでエールを飛ばす。

できるかどうか、そもそもどうやって試せばいいのか検討もつかんが言うだけならタダだろう。

「できないと決めつけるのはやれることを全部やってからでも遅くないねえ…それもなにかのネタか?」

「俺が実際に言った言葉だよ」

確か…ワン子が気を習得した時だったかな。

～～回想～～

「川上波……!!」

ドガン!

「うーむ…やっぱりあんま遠くに飛ばせねえな。離れると威力が落ちる」

「それでも飛ばせるだけすごいわよ。アタシなんかできないし…」

「出してみりやいいじゃねえか」

「ムリよ、お姉さまやタイガみたいにはできないわ」

「本当に?ホントのホントの、ほんと……にできないのか?自分にはできないって思い込んで可能性に蓋してるだけなんじゃねえのか?」

「えっ…?」

「できないって決めつけんのは、やれること全部やってからでも遅くないんじゃないのか!」

「タイガ…うん!アタシ、やってみる!」

「よし、じゃあまずは丹田に力を集めろ!丹田の場所はへソ下三寸だ!」

「うん!」

「まだだ!まだまだ、もっと集中しろ!!」

「うにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆ…にゆ…!!」

「もつとだ！もつと熱く！熱くなれよ!!」

「にゅわーん!!」

「(変な掛け声…)よし、今だ！これを唱えろ！」

「うん！ベホマズン!!」

.....

「タイガ…?」

「うわあ…ホントに唱えたよ、しかも大声で」

「っ、…タイガの…!!」

「ぶあかああああああつっ!! (ボツ!!)」

「(ドゴオツ!!) うぐえ!!」「…え…あれ?今…」

「ぐふ…なんだ…できるじゃあ…ないか…」

ドシヤ!

「たっ、タイガ…!!?」

〜〜回想終わり〜

うん、なんで使えるようになったのかさっぱり分からない。

なんであんなテキストなことではつと使えるようになるんだよ…

やっぱり天才なんじゃねえかワ^{こいっ}ン子。ハラたつわー

「中々熱いセリフだな」

「ほっとけ」

あの時はなんか…気を連発したせいかな、松岡修造っぽくなっちゃまった。

基本熱血だから体温上がると体育会系になるんだよな…気をつけよう。

「でもナツル、よく千回もスクワットできたな。お前なら適当に流すかと思ってた奴結構いたぞ」

「鉄人が見てたからな」

授業の合間合間で、俺のことをチラ見していた。

少しでもペースが落ちたり水が零れたら注意が飛んだだろう。結

局普通に授業進めるだけで一言もダメ出しくらわなかったけど。

メンドクせー説教されるくらいなら千回やり切った方が楽だ。

「なんだ、トップランカーの自覚でも出てやる気になったのかと思っ
た」

「？ トップランカー？」

「これのことだよ」

モヤシがフアミ○：いや、最新号の神月通信（報道部発行の学校新聞）を差し出してくる。

いたのかお前。

いや、いるのはいいんだよ。同じクラスだし、でもなんかサラツと
会話に入ってきたな。

「その裏・神月ランキングのところ、ナツル^{お前}十位に入ってるぞ」

「ええっ、マジ!？」

慌ててページをめくると…ホントだ。10位に”瀬能ナツル”っ
て書いてある。

「昨日ランキング入りしたばつかなのにもう二分の一に…」

「知らなかったのかよ…」

全然知らなかった。

直江が呆れた面して見つめてくるが、そんなこと全く気にならない
ほどびっくりだ。

裏・神月：いや表もだが、ランキングは入れ替え制だから、下位ラ
ンカーの俺が上位の奴を倒してその座を奪ったことになる。

心当たりと言えば昨日のあ…あ…名前なんつったかな、あの似非
エリートの高慢ちきオールバック。

あ…あ…アクジ？

（※阿久津障司。ある意味ドンピシャ）

てかアレ10位だったんだ…見掛け倒しにも程があるだろ。こっ
ちの17位…桐条超会長の方が強く感じたんだが。

……ん、特集に俺の事が書かれてる。

『彗星の如く現れ、瞬く間にランキングを駆け上がった”人畜有害”
瀬能ナツル！見た目と雰囲気には騙されるな！触れるな危険』

ははっ、好き勝手言つてら。書いたのは二年生の奴か。
三年には癌で二年は有害か。一年生にはなんて呼ばれるかな。
……………ん？

くく 神月学園☆イケメンランキングくく

1位 京極彦一

2位 葵冬馬

3位 瀬能ナツル

4位 源忠勝

5位 風間翔一

(見出し) 権力、武力、そして頼りなさそうな見た目とは裏腹に凶暴な
侠気を兼ね備えた男。 瀬能ナツル！他の上位陣にはないDSな部分
が人気を呼び第三位にランクイン!!

……………見なかつたことにしよう。

俺はぱたりと雑誌を閉じた。

☆

★

☆

「お主ら次の授業の支度をせんでいいののか?」

直江たちと話している最中に、木下が声をかけてくる。

「そういえば休み時間になってから結構経つたな。次の授業つてな
んだつたつけ。」

「次って選択科目でしょう? アタシは武道で、次はグラウンドだから
もう少しくらいは大丈夫よ」

「へへっ、俺様もー。武道は着付けから始まりだから準備する必要
がないのが楽だぜ」

「ああ、次は選択か」

選択科目は被ってない限り皆別々の所で授業するんだよな。

俺は音楽を選択したから、次は…次は——

「音楽室だよちくしょう!!」急いで鞆から筆記用具を取り出す。

音楽室は二年棟の最上階だ。今から行つて間に合うか？

「ナツルはホント身体張つて笑いを取りにいくな」

「芸人の鏡じゃ」

「ボケじゃねーよ!!」

しみじみと感心した表情をする直江と木下に大声を返し、校舎へ大急ぎで走る。

砂利が食い込んで痛い…そういえば素足だった。購買で新しいの買わなきゃ。

☆

★

☆

走る、走る、

俺たち。違う。

ほとんどの生徒が移動し終わったのか、無人の校舎内をひたすらに駆け抜ける。

目的地は最上階最端。ちなみに二年棟は6階建てだ。

なんでうちの音楽室こんな離れた場所にあるんだよ。こういうとこだけ無駄に普通の学校みたいな間取りさせやがって。

敷地広いんだからコンサートホールみたいな専用棟作れよ。

階段を二段飛ばして駆け上がり、6階に到着。ギリギリ間に合うか？

「……ん？」

再び走ろうとした矢先、床に一枚の紙…カードのような物が舞い落ちた。

思わず立ち止まり、拾つて眺める。

なんだこりや、トランプか？

カードから目を離し周りを見回すと、一人の女性の立ち去ろうとする後ろ姿が見えた。

他には誰もおらず、風もなかったのでこの落とし物はあの人の物だろう。

…渡すだけならそう時間もかからんか。

ここで見なかったフリをするのは人としてどうかとも思うし。

「あの、お姉さんちよつと!」

少し強めに話しかける。

どうでもいいが俺は（名前を知らない）歳上の女性を大概”お姉さん”と呼ぶ。

理由は…実は俺自身もよく分からない。

ガキのころは普通に「おばちゃん」とか呼んでたはず…そういうば最後にその言葉使ったのいつだったっけ。

確か、幼なじみの母親に言ったのが最期だった気がするが…記憶がない。

まあ別に困らないからいつか。

「あのちよつと!」

「はい?」

近づいて再び声をかけると、女性が足を止めて振り返る。

なんか知的美人って感じだな。

「コレあなたのもでしょ? 落としたっスよ」

「ああ、これはご丁寧に…あら?」

女性はカードを見て受け取る——かと思いきや、俺の顔をまじまじと見つめる。

なんだ? 顔になんかついてたか?

「これはこれは、誰かと思えば瀬能様でしたか」

「…そうですがどこかで会いましたっけ」

「ああ…そういえばまだ顔を合わせたことはございませんでした」
なんだ、ただの電波か。

「…瀬能様。あなたは”運命”を信じますか?」

「は?」

なんだいきなり。

「ええと…うちは仏教なのでそういうのは…」

「宗教の勧誘ではございません」

ああなんだそうなのか。まあ仏教云々は嘘だけど。

「あー：俺はアレっすね。見て殴れるもんしか信じない主義なんで」（拳）交じり気のないものしか、信じないよ！

「ふふっ、貴方らしいですね」

さも愉快そうに薄く微笑むブロンドさん。

「では瀬能様、もしも目に見えてどうしようもなく悪い運命が迫ってきたら、貴方はどうなさいますか？」

「殴って変える」

「…ご自分にそれだけの力がある、と？」

「運命ってのは変えられるんだよ。てめえの力でな」

てクロヒヨウの右京龍也が言ってた。

「大なり小なり、人間誰しも足掻くだけの力は持つてるもんだ。でもタチの悪い運命を変えられるかどうかはその時になるまで分かんねーんだよ」

「…貴方ならどのような運命にも抗い、変えることができそうですね。不思議な人です」

よせやい。んな大層な人間じゃねえよ俺は。

穴あきの教室を最高級設備に変えられなかったからな。

「せっかく拾っていただきましたが、そちらはお納めください」

そう言っただけ俺が持つてるカードを手で示す。

「いいのか？」

「はい。少しでも瀬能様の助けになれば幸いです。ですが、どのような結果もそれは貴方が選び抜いた末に起きるもの。後悔だけはなさいませんよう、お気をつけください」

こつちがなにか言う前に、ブロンドの女性は一礼をして去っていった。

「……ああまできつちりされるとツツコミ辛いな」

女性の姿が完全に見えなくなったころ、ぽつりと口を開く。

見た目はハイレベルな知的美人なのに相当の電波だ。もしくは中二病。

いやまあ、それが悪いとは言わんが。

「こんなん貰ってもなあ…」

正直反応に困る。

少しでも助けになればって、そもそもこれ白紙じゃん。なんの役に立つんだよ。

あれか？あなたの可能性は無量大ですっていうお守りか？それともメモ代わりにでもしろってか？

「…まあ葉に使えばいいか」あんま本とか読まないけど。

カードを胸ポケットに仕舞い、今度こそ歩き出す。

そういやさっきの人初めて見たな。

教師全員を知ってる訳じゃないけど、一体なんの科目の先生なんだ？

数分後、すでにチャイムが鳴っていたことを忘れてた俺は堂々と遅刻して音楽室に入った。

一日に二度遅刻したのは生涯で初めてだぜ…

「通りで声が掠れてるわけだ…よし、そんなナツルに学食を奢ってやろう」

「ん？奢る？お前が俺に？」

珍しいな。

「お前のおかげで儲かったからな」

「俺のおかげで？」何かした覚えはないが。

「一時間目にスクワットさせられただろう。何回でギブアップするか賭けてたんだ」

千回やりきるに賭けたのは俺だけだったな、と直江は朗らかに笑う。

その顔を見て（もともとする気はなかったが）遠慮せずに学食で一番高いやつを奢ってもらおうと思った。

確か一食五千円の高級ランチがあったはず。

「大和、冴島殿。二人ともなんの話をしているのだ？」

会話が途切れたのを見計らったかのように、フリードリヒが話しかけてくる。

珍しいな、特に接点もないはずなのに。

まだ転校してきて日が浅いので、積極的にクラスの人間と関わりにきたのか…直江と同じ寮で生活してるらしいから、俺はおまけで直江に話しかけただけかもしれない。

つーか、

「もう名前で呼ばせてるんだな」

「羨ましいか？」

「別に」

簡単に名前呼びさせる神経がよく分からん。

いやまあ俺だって、何年もつきあってないと呼ばせないって訳じゃないんだけど…なんかなあ。

なんとも言えない胸のモヤモヤに悩んでいる内に、直江がフリードリヒに先ほどの会話の内容を説明する。

「ナツルがスクワット何回できるかで賭けてて、俺が一人勝ちしたつてのを話してたんだよ」

「なに!？」

フリードリヒが目尻を釣り上げる。

「大和お前、級友を賭けに使ったのか!!」

「賭けに使ったって：賭け事自体は神月学園で公式に認められてるぞ」

「それは知っている、しかしそれでかけるのは食券だろう！大和、お前が先ほど受け取っていたのは現金ではないか!!」

「ほほう」それは聞き捨てならんな。

「今日の俺の昼飯は『英雄様の気まぐれメニュー』で決まりだな。勿論直江の奢りで」

説明しよう! 『英雄様の気まぐれメニュー』とは、その名前の通り二年S組に所属する九鬼英雄のその日の気分で決まる学園非公式の昼食なのだ!

ちなみに注文する場合は同じく二年S組のメイド（名前は知らん）に頼めばOKだ。

「ちよおまつ、あれ一食の最高金額30万だろうが!」

「最低金額は百円だぞ」税抜きで。

なにしろ完全に九鬼の気分次第なので、なにが出るかはメイドにすら分からんらしい。

今までの最高は超高級海鮮料理フルコース。最低はカップ麺というまさにギャンブルメニュー。

意外に人気なのが謎だ。

「冴島殿！お前もなぜ怒らぬのだ!!自分が賭け事に利用されたのだぞ!？」

「と言われましたも」

先日の試召戦争でも勝敗を対象にされましたし。

昨日のアクジさんとのやつも多分なってるだろうし。

「自分は断固として抗議するぞ！級友が級友を使って金品の取引をす

るなど、あつてはならんのだ!!」

拳を握り締め力説するフリードリヒを、周りが遠巻きに、迷惑そうに眉をひそめる。

「その自論だとクラスメイト以外だったらOKってことになるが」

「え?」

「クラスメイト同士でも食券ならいいってことにもなるが」

「……えつと……」

俺がちよつと反論すると、途端に静かになる。

なにがしたいんだこいつ。

「ええい、自分は正しいことを言ってるはずだ!なぜそれが分からないい!」

自分の主張が通らなかつたからって癩癩起こしやがつた。ガキかこいつは。

「"はず"なんだな。偽善者気取りは中途半端だなあ」

「なつ、自分が偽善者だと!」

「己の虚栄心を満たしたいがために他人を糾弾する。偽善といわずになんて言うんだ?」

「お…おいナツル」

直江が窘めるように声をかけてくるが、無視する。

「しよーじきさー、ウザいよ。フリードリヒちゃん」

「うつ、ウザい?」

「当事者である俺がいいって言ってるのに、なんでお前が噛みつくんだよ。なに、もしかして俺のこと好きなの?」

「なつ!」

その一言でフリードリヒの顔が真っ赤に染まり、分かりやすく狼狽する。

「ばつバカにや!そつそつ、そんなわけあるかつ!!」

「そりやよかつた。俺もお前みたいな自己中はおめんだからな」

「つ……もう勘弁ならん!」

言うが早いのか、フリードリヒはどこからともなくレイピアを取り出し、俺に突きつける。

…てかそれ、本当にどこから出したんだ？見てた感じだとなにも無い空間から突然出現したみたいだけど。

最近の武士娘はアイテムボックスを常備しているのかな…非常識な。

「冴島タイガー！そのねじ曲がった性根、たたき直してくれる!!」

「口で勝てないと見ると途端に手を上げる。そういうところがウザいっつってんの!!」

ドゴツツ！

ノーモーションで放った前蹴りがフリードリヒの持つ剣の、曲線状の鏢に直撃する。

その衝撃で彼女は、数メートルほど後ろに吹っ飛んだ。

「ツ!!?卑怯な!」

「自分から喧嘩振つといてなに言ってるんだあ？よーいドンで始める競技じゃねーんだよ!」

突然の戦闘に慌てて離れていくクラスメイトを気配で確認してから、空いた距離を瞬動で即座に潰す。

同時にフックとアッパーの中間点、斜め下から突き上げる強打"スマッシュ"をフリードリヒに放つ。

「オラッ!」

「くっ!」

咄嗟に剣でガードされるが、おかまい無しに連打。

スマッシュから始まり。右フック、左ボディ、少し溜めてからの後ろ回し蹴り。

その全てを剣で受けたり躲したりされる。

この程度に対応できるだけの強さはあるのか。（ランキングで言うなら18位ぐらい?）

「くっ…!…舐める…なっ!!」

猛攻をかい潜り、フリードリヒは鋭さを持った突きを繰り出す。

いい突きだ…。趣味やなんとなくでレイピアを扱ってる奴では、到底放つことができないレベルだ。

きつと一生懸命、真面目に練習したんだろう。

それ故にとても利用しやすい。

「古牧流…」

突き出される刃に自分から突っ込んでいく。
身体に当たりそうになった瞬間、

「無刀、転生！」

ダッキングで前屈みにかわし、フリードリヒの手首を掴んでそのまま投げ飛ばす！

「かはっ!？」

大地に叩きつけられて、フリードリヒが短く息を吐く。

「単純なんだよてめーは。もつと工夫しろ工夫」

良くも悪くもまっすぐすぎる。

それがダメとは言わんが、今のままだと軽い挑発に乗っては味方を困らせるだろうな。

「ぐう…まだまだ！まだ自分は負けていない!!」

フリードリヒはすぐに地面に手をつき、起き上がる。

打ち付けられた背中の痛みは無視できるほど軽くないはずなのに、そこに手を当てることをせず、背筋を伸ばして梟を構えてキツと俺を睨みつけてくる。

中々根性あるじゃねーの。

「おーおー勇ましいねえ、正義の味方気取りか？でもあんたの正義い…」

「無力ですからあああー!!残念！」

「…っ、言わせておけば!!」

ギョー侍風に酷評してやれば、予想通りに突っ込んできた。

「はああああっ!!」

そして勢いそのままにレイピアで突きを放つ。

それしかないんかお前。

「普通もつと、フェイントとかあるだろうに…」

その気配はまったくない。

ただただ、突っ込んで突く。それしかないと言わんばかりの気迫に満ちている。

闘牛の牛だなまるで。マタドールのマネでもしろってか？

「身を持って知れ」

フリードリヒの突きを半身になってかわし、すかさず左の二の腕をぶちかます。

「クオーラルボンバー！」

「がっ!？」

喉元に当たり、短い悲鳴を上げて後方に吹き飛ぶ。

「しゃーらっハーツ!!」

それを追いかけるように猛ダッシュ。

十分に助走が付き、フリードリヒにの近くにまで来たので飛び後ろ回し蹴り。

「オラあッー！」

「…っ、くらうかー！」

俺の踵は剣の鏢で防がれた。

裸足だから少し痛い…

「そのような攻撃、自分には通用しない！」

「だろうね」

軽い口調でフリードリヒの背後にいる俺が言葉を返す。

「防御させるのが目的だし」

「ねー」

「!？」

続けざまに俺の左右にいる俺が呑気そうに会話をすると、フリードリヒが驚愕の表情を浮かべる。

前後左右、四方を俺に囲まれ困惑で動きが止まったところを、彼女の前と右にいる二人が素早く、両方の腕をがっちり掴む。

続いて左と後ろにいる二人が片方ずつ両足首を掴み、引っ張る。

フリードリヒはちょうど地面と水平にして空中に張り付けにされる形になった。

『影分身・死刑執行!』

そしてそのまま四人全員が声を揃えて一齐に、綱引きをするみたい
に勢いよく引っ張る！

っバツチン!!

「つつ、ああ、あつ!!?」

ゴムを伸ばして引きちぎったような音がグラウンドに響いた。よ
うな気がした。

それほどの衝撃だったのだろう。その証拠に、フリードリヒはそれ
以上悲鳴を上げることでもできずに地面をのたうち回っている。

「吹けよ無情の野分の風よ〜」

両腕を某ライダーのように斜め右上に揃えて上げる。

「竜巻地獄!!」

そのまま腕を高速で振り回すと、竜巻が起きた。

「気」が使えるようになってから火・氷・風が生み出せるようにな
ったな。次はなんだろう。

「うわあつ!?!」

竜巻に巻き込まれ、フリードリヒが上空に舞い上がる。

すかさず月歩で宙を駆け上がり、後を追う。

数秒もしないうちに追いつき、今だ上昇を続ける彼女の身体を飛び
越えて、その首に右足の臍を引っかける。

そのまま全体重をかけて落下し——地面に激突した。

「地獄の断頭台!!」

グラウンドに蜘蛛の巣を張ったような亀裂が出来た。

昨日補修したばつかなのに……また怒られて穴埋めさせられつかな。

「——なにをしているんですか!?!」

地獄の断頭台の体勢のままこれからのことを考えていると、後方
から大声がかけられた。

振り返ると、遠くから小さな少女が必死な形相で駆け寄って来るの
が見えた。

あいつは確か……甘食? だっけ?

(※甘粕真与)

「瀬能ちゃん！クリスちゃんに一体なにをしているのですか!？」

ある程度の距離まで近づくと、大声で責め立てる。

本人は全身で、精一杯怒っているつもりなんだろうけどまったく怖くない。ハムスターの威嚇レベルだ。

「なについてケンカだけだ」

返事をしつつ、フェイバリットを解いてフリードリヒの上から退く。断頭台の体勢維持するのキツイ…

「どうしてクリスちゃんとケンカしてるんですか!」

「売られたから」

…よくよく思い返してみると、俺は誰かにケンカを売った覚えがない。

多少やり過ぎても、向こうが先だと「正当防衛です」で済ますことが出来るから自分からは手を出さないようにしてるんだよね。

「売られたからって…それだけでここまでするんですか!？」

甘食に続くようにして近づいてきた姫路が、ボロボロになったグラウンドを指差して怒鳴る。

なんだ？その信じられないものを見たような目は。

「ギャンギャン喚き散らした挙句噛みついてきた犬に手加減するほどお人好しじゃねえんでね」

「犬って…！どうしてそんなこと言うんですか!？Sクラスとの試召戦争の時は…あんなに…!」

「テンション上がって口走った時のを持ち出されてもな…」

ガリガリと頭を搔いて、気怠げな態度を見せる。

「勝手な印象や期待を持つのは構わないが、それを人に押し付けるのは止める。いい迷惑だ」

「……………」

俺の言葉にどこか、失望したような驚きの表情をする姫路。

失望と驚き^{それ}プラス困惑でオロオロする甘食。責めるように鋭い視線を向けてくる…名前なんつったつけ？スイーツとか呼ばれてた気がする。女。

遅れてやってきたながらも、状況を把握して睨んでくる島田。
若干困ったようにこつちを見てくる島津と師岡。モヤシ
他の奴らも差はあれど、皆似たような表情をして俺を見ている。
「……………」

少し大きさに肩を竦めて、校舎の方へ歩きだす。
去年もこんな感じだったな…なぜだろうあの頃は平気だったのに、
今はただただ居心地が悪い。

☆ ★ ☆

「なんであんな真似したんだ」

校舎に入るとすぐ、壁際から声をかけられる。

視線をやると一人の男が立っていた。

「源か。…なんのことだ？」

「とぼけんな。ついさっきのことだろうが」

言ってからグラウンドに顔ごと視線を移すので、釣られてそちらに
目を向ける。

そこには地面に座り込んだまま、周りを心配げなクラスメイト達に
囲まれてるフリードリヒの姿があった。

「あんだだけやって無傷なんだ。見せかけだけの攻撃してなにが狙い
だ」

「フリードリヒが頑丈なんだ、って風には考えないんだな」

「似たように痛めつけられた坂本が入院してるのにか？無理があんだ
ろ」

「あー…あれだよ、レディには優しいんだよ俺。紳士だから」

「鍛練の時毎回一子をボコボコにしといてか」

いかん、源の目に攻撃色が。

てかなんでそんなに詳しい…そういえば直江たちと同じ寮に住ん
でたっけ。

あー…どうすっかな。

適当に煙に巻きたいんだが、見た感じそれを許してくれなさそう

だ。いや分からんけど。

接点がるまるで無いから、こいつがどういいう奴かよく知らないんだよなあ。

島津や風間バンダナみたいに単純じゃないってのは分かるが…寧ろ会長雲に近い気がする。

「……ぼっちを見るのが嫌だったから、かな」

ガリガリと頭を搔きながら口を開く。

「景観を損ねるだろ。一人孤立してる奴って」

「テメエは孤立してもいいのかよ」

「我がクラスには鏡はないからな」

鏡どころか時計もない、っていうかそもそも壁がなかった。早く教室できないかな。

「正義でもなんでも、行き過ぎると迫害の的になるってのをフリードリヒチャが知ってりやよかったんだがな。まあ転入生への餞別ってことで」

これで学ばなかったら…もう一回ぐらいは泥をかぶってやろう。

「あんなので大丈夫なのか？」

「大丈夫なんじゃない？うちのクラスはお人好しが多いみたいだから」

視界の先には、立ち上がったフリードリヒと、彼女の周りであれこれと世話を焼いている数人の少女の姿があった。

できれば、俺もあそこにいたかった。

でも無理だ。自分で手放したから。もう、どんなに手を伸ばしても掴むことはできない。

「…テメエもそのうちの一人じゃねえか」

「ははっ！面白い冗談だな」暴力ふるうお人好しってこれいかに。

グラウンドから視線を外し、源に目を向ける。

「正直に話してやったんだから誰にも言うなよ。悪ぶってるけど実は…ってのキライなんだから」

「……分かったよ」

返事を聞いて、校舎の奥へと足を踏み出す。

とくに目的地はないんだが…面倒だな。今日はもうこのままサボるか。

☆

★

☆

く直江Sideく

「…あれでよかったのか」

「ばつちりだよ」

ゲンさんがもたれ掛かっている壁の、窓から顔を出して返事をする。

ナツルの態度がいつもと違って見えたので、あいつがクリスとケンカしてる最中にこっそり抜け出していろいろ画策してみたんだが…こうまでうまくいくとは思わなかった。

俺の気配を察知されたりして途中でバレるかもしれないって不安もあつただけど…相手がゲンさんだったから油断してたのかな。

「瀬能から本音を引き出してどうするつもりなんだ？」

「ん？ヤダなーゲンさん、決まってるじゃないか」

にっこりと笑顔になりながらグラウンドの方を見る。

よしよし、まだみんな揃ってるな。

「…言うなって釘を刺されてんだが」

「ゲンさんはね」俺は言われてないから大丈夫。

「なんでテメエがあいつのフォローすんだよ」

「あれ、ゲンさんもしかしてやきもち焼いてる？」

「死ね」

「うそうそ冗談、冗談だって」

短く呟いて立ち去ろうとするゲンさんを慌てて引き止める。

「今は行使する権利を剥奪されているからできないけど、期間が明ければまた試召戦争を仕掛けるって坂本が公言してるからね。となるとナツルがクラスに打ち解けてないのは都合が悪いでしょ」

「…たしかにな」

ゲンさんがいつもの仏頂面な表情で軽く頷く。

「それにほら、ナツルも言ってたじゃない」

「ああ？なにをだよ」

「うちのクラスはお人好しばかりだ、ってさ」

言いながら、まだ多くのクラスメイトがいるグラウンドに足を向ける。

さてどう言って説明しようかな。

「…あとで瀬能に殺されても知らねえからな」

いやいやいや、いくらナツルとはいえそんなことは……ことは……
………なにかしら考えておこう。

☆

★

☆

くくく

ナツルとクリスが激闘を繰り広げてから一夜明けて次の日。ナツルは神月学園へとやって来た。

いつも通りに朝起き、いつも通りに通学路ちを歩き、いつも通りの時間帯に学校に通う。

しかしただ一つだけ、クラスの人間の態度だけが違う。

とはいえそれもすぐに"いつも通り"になるだろう。ナツルはそう軽く考えた。

それ故に、自虐の意味も込めて教室に入ってすぐ挨拶の言葉を口にする。

「おはようーッす」

「む…：冴島殿！おはようー！」

「えっ？」

どうせ返事はこない…などと思っていたのだが、見事に予想を裏切られ、思わず間の抜けた声が彼の口から零れた。

昨日あれほど痛めつけた相手から勢いよく挨拶されたのだから無理もないだろう。

さらにその相手が、笑顔を浮かべて近づいてくるのだから。

「うむ、聞いた通り規定時間前にきちんと来たのだな。流石は冴島殿！」

なにが流石なのかは作者にも謎である。

「：昨日あれだけボコつたのになんで普通に話しかけてくるかな。しかも笑顔とか：頭おかしいんじゃないか？」

ナツルは「頭部を打った覚えはないんだがな：」と呆れた様子でつぶやいて、自身の頭をがしがしと乱暴に搔く。

「自分は至って正常だ」

「ならもともと頭が花畑なのか。流石は編入先がFクラスなだけはあるな」

半ば、自分のことを棚に上げている気がするのは気のせいだろうか。

随分といえば随分な言い様に、クリスは怒りの表情を見せる：ことはなかった。

寧ろ納得したような顔で、うつすらと柔らかな笑みを浮かべている。

「うむ、昨日までの自分なら怒っていただろうが、話を聞いた後だ：失礼だと思うがおかしさすら覚えるな」

「あ？どういう意味だオイ」

ナツルは訝しむような表情でクリスを睨む。

しかし睨まれた本人はとくに気にした様子もなく、むしろ堂々と胸を張り

「冴島殿は不器用で悪ぶりたがる性格だから、どうしても拳でしか語れない。昨日の行いは自分への警告だと」

「ぶっ!?!」

(本人に取って) 驚愕の一言を聞き、思わず固まる主人公。

次いで、困惑しながらも話の情報源であろう人物に目を移す。

「ジンベエ、言わない約束だったじゃないのヨーウ!!」

「ああ？もしかして俺か？：誰がジンベエだ」

心底めんどくさそうにため息を吐く源。

こんな時でもネタを使ってボケに走る辺り、意外と余裕があるのかもしれない。

「：言つとくけど喋ったのは俺じゃねえぞ。直江だ」

「ちよつ、ゲンさん!？」

「ナオエエエエエ!!」

いきなり引き合いに出され、焦りの声を上げる直江大和。

その大和に、ナツルは突風のようなスピードで近づき、前襟を掴んで締め上げる。

「ぐおえつ!？」

「ドおウいうことか説明してもらおうかああオイ：！全身の関節を反転させる前になあ：！」

ネックハンギングツリーのような態勢で大和を宙づりにしながら物騒なことをほざくナツル。

その瞳は白目の部分が真っ黒に染まり、黒目の部分が紅く——とでも常人がしていい眼ではない。

「ぐ……そ……そのまえにひとつ……いいか……!？」

このままだと殺される：そう直感した大和は、宙づりのまま口を開く。

「なんだあ、遺言か？」

「以前から……ぐつ……思ってたんだが……」

「？」

「ナツル：お前は、普通だ!!」

生死を別けるかの瀬戸際にこの一言は正直どうかと思う。

しかし言われた本人は衝撃だったのか、背景に雷鳴を背負って硬直する。

「ふ……ツウ……？俺が……不通!？」

「普通だよ」

不通：通じないこと。交通・通信などがとだえること。 便りや

行き来のないこと。

意味などが通じないこと。わからないこと。

ある意味合っていた。

「ふ…ふふフフフ、風間ファミリーの軍師サマーともあろう方がずいぶんと耄碌したもんだ。俺のどこがフフフツウだって？」

ナツルは襟首を掴んでいた手を離し、バキが取る宮本武蔵の構えのような姿勢をする。

臨戦態勢だった。

しかしその指先はふるふると細かく震え、眼は虚ろだった。どう見ても虚勢である。

まるで姫路料理を食べた後のような姿。

知り合って約一年、たった一言でこうまで追い詰められたところを見るのは初めてかもしれない——想像以上に効果があつた策に大和は軽く戦慄を覚えた。

「ナンでそう思うんだ？」

瞳孔の開いたかなりヤバイ眼をしながら、無理矢理口角を上げて笑顔（つばい表情）で尋ねるナツル。

豹変した赤司征十郎みたいで正直怖い。

「え？ いやだってお前…毎日欠かさず学校に来てるし」

「学生なんだからそりや来るだろう」

「お前不良って設定だろ？ ならもつと頻繁に休めよ」

「俺は常識を覆す不良なんだよ。だから毎日始業前に学校に来る」

「それもう不良でもなんでもないじゃん！ 真面目な一般生徒じゃん！」

「もつとも。」

言われた本人はまた衝撃を受けたらしく、雷鳴をバツクに硬直する。

「で…でも、人の腕折ったり、地面にヒビ入れたり」

「そこだけ見たら確かに異常だけどき、全体の一部だろ？ 誰だつて持つてるよそういう人とは違う一面」（ドシュツ）

誰だつて持つてる。

その一言は刃となつてナツルを貫いた。

「ぐっ…ううううう、ええい！俺はフツウじゃない！ないったらない！！」

胸を押さえた状態で、頭の悪い台詞をだだっ子みたいに言い出した。

どことなく昨日のクリスに被るが、こちらは可愛げのかけらもない。

「そうです直江ちゃん！瀬能ちゃんは普通じゃありません！」

四つん這いに近いくらいうつむいているナツルと大和の間に、一人の少女が現れる。

Fクラスの女子代表、甘粕真与だ。

「おお、女子のクラス代表。言つたれ言つたれ！」

「瀬能ちゃんは普通じゃなくていい子です！とってもいい子なんです！」

「(ドブズっ！)がはっ!!」

甘粕の台詞が鋭く尖りナツルの身体を貫く。

心なしか先ほどの大和の一言よりも威力が大きそうだ。

「そうですね。瀬能さんとはとてもいい人ですっ」(ザシユツ)

「うむ。強い人は優しいと聞いたが…正しくその通りだつ、冴島殿は人を思いやれるいい人だ！」(ドズツ)

「うんうんっ！タイガつてば凄いんだから！」(カンっ)

姫路、クリス、一子^{かずこ}。三人の“褒める”という名の口撃は容赦無くナツルの身体に降り注ぐ。

一子の言葉はいつも言われていることだが、多大なダメージを受けている今の状態では傷口を拡げるには十分だったらしく、ナツルは血を吐いて崩れ落ちた。

「ぐ…ううううう…ちくしよー！お前らなんかだいつ嫌いだあー！っ!!」

ぐれてやるー!とご丁寧に捨て台詞を残し、orzの体勢から素早く立ち上がって何処かへと走り去っていく。子どもか。その姿を見て一部を除いた全員が思った。

お前本当に不良か?と。

「あつ、瀬能ちゃん!」

心の中でツツコミを入れなかった者の一人・甘粕真与が、とっさに逃げたナツルを追いかけようと手を伸ばす。

そこに大和が待ったをかけた。

「ほっときなよいいんちよ。どうせ追いつけないし」

「直江ちゃん、でもつ、瀬能ちゃん泣いてましたよ?」

本当に高校生か?

「大丈夫だって。もうちょっとでチャイム鳴るから、すぐに戻ってくるよ」

どんな不良なんだナツルは。

というか不良という分類でいいのだろうか。

「ならいいんですけど…」

「冴島殿はなぜ急に走り去っていったんだ?」

クリスが不思議そうな表情で大和に尋ねる。

あなたのせいでもあるんですよ?

「今まで拳と皮肉と口の悪い言葉でしか物事を語れなかったから、照れたんじゃないか。あいつ捻くれてる上不器用なツンデレだから」

本人がいないのをいいことに随分な言いようである。

しかも全く間違っていないからたちが悪い。本人がいたら怒鳴りながら否定するだろう。

「そうなのか…よし決めたぞ!自分は、冴島殿と対等に話し合いをできるようにもっともつと強くなる!」

「!、あつアタシだって!いつかタイガを越えるくらい強くなってるんだから!!」

クリスは決意を露にした表情で宣言すると、一子もそれに続くよう

に宣言する。

この時の決意が嘘ではないことを証明するかのようにこの二人は、近い将来裏・神月ランキングのランクをものすごい勢いで上げていくことになる。

最終的に、3位と4位を独占することになるのだが——それはまた別の話。また、別の機会に話そう。

ちなみにナツルはチャイムがなつてすぐに教室（指定のグラウンド）に戻ってきた。

苦い表情で歩いてくる様子を見てクラスメイトたちは生暖かい眼で迎え——それを見たナツルが再び走り去ろうとしたがやって来た西村教員鉄人に捕まるという場面もあったが、長くなるので割愛させていただきます。

21時間目 ” 裏番” 冴島タイガ 前編

「なーなーナツチー。珍しいものが手に入ったんだが食べてみないか？」

「はっはっは、随分唐突だなモモさん。当然だが断る」

「!? なぜだ!」

「んな人面エリンギみたいなの靈障浮いた草食えるわけねーだろ!!なん
か『我は力にあつて生命にあらず』とか言い出しそうだよ!」

「失敬な、これは川神に伝わる由緒正しき食材。その名も川神草!」

「余計食う気が失せたわ!!」

「まあまあそう言わず。ほら少しだけ、先つちよだけでいいから!大
丈夫怖くない!!」

「いやああこわむぐう!」

☆

★

☆

くナツルSideく

「……………」

今だ復旧の目処がたたず、お馴染みになりつつある2年Fクラス野外教室。

なるべく目立たないよう、一番後ろの一番端の席にこっそりと座
る。

誰にも…気づかれてないよな?よし。

「…なにやってんだナツル」

数秒で直江にバレた。

バカな…なぜだ?なぜ一目で俺だと分かったんだ?

やはり軍師(自称)の名はだてではないということか…!

「5月近いつてのに冬物のフード付きロングコート着込んで、おまけ
にキツネのお面なんてつけてる奴お前以外にいるわけないだろ」

軍師(自称)の名はだてではないということか!

「で、今回はどういう趣向なんだ。正直見てるだけで暑苦しいからや
めてほしいんだけど」

直江がジト目で喋りかけてくる。

周りの奴らも俺の存在に気づいたのか、チラチラと注目しだした。
くっ…

「ええっと…実は少々風邪をひいて…コンコンっ」

「ああ、だからキツネの面なのか」

いやそんな納得されても…。家にある被りものの中でこれが一番マシだっただけなんだけど。

「風邪って…大丈夫なんですか瀬能さん？」

会話を聞いていたのか、今度は姫路が話しかけてくる。心配そうな表情で。

くっ…前回のやり取りでヘイト(嫌悪感)を下げてしまったから、普通に接してくるな。今はそつとしといてほしいのに…!

「あーその、大丈夫大丈夫、ちよつと季節の変わり目に油断しただけだから…」

「そうですか?でも瀬能さん、よく見たらすごい厚着してるし…声だつてそんなに掠れて…」

声の方はわざとだよ。服装もだが。

…なんでこんな格好してんだろう。

遠い目をしていると、姫路が俺の面に手を伸ばしてくる。

つてオイ。

「なにしようとしてんの!?!」

「いえ、熱を測ろうと…」

そう言いながら面を外そうとする姫路の手を、こちらから掴んで阻止する。

「瀬能さん手が暑いですよ、本当に大丈夫なんですか!?!」

「もともと体温たけーんだよ俺は!!」

平熱が常人より約3℃ほど高いんだよね確か。

「なおさら駄目じゃないですかそんな格好してたら!」

「それは正論だけど…」こっちにも事情があるんだよ!

しばらくそうして押し問答をしていると、視界の端でスっ…と動く奴が見えた。

「むっ?どうしたのじやムツツリーニよ」

「…百合の気配」

——突如、被ったフードが降ろされ、面を顔に固定している紐が切断された。

「つてえええええ!!なに?なにが起きたの今!?!」

なんか急に服が…コートのボタンも外されてる!?!

「…俺の嗅覚をなめるな」

今の声…土屋?か!なにしてくれんだいきなり!!

っ—か気配を全く感じなかった。コイツ裏神月のランカーになれるんじゃね?

などどうでもいいことを考えてしまったせいか、ずり落ちるキツネの面を止める事ができなかった。

一応、姫路を掴んでいた手を離して落下を阻止しようとしたが、その瞬間着ていたコートがバラバラつと分解していく。

あの一瞬で縫い目も切ったようだ。人間技じゃねえ。

身を守るものが無くなり、その下から出てきたのは——

足首辺りまで伸びた真っ青な髪の毛に、きりつと引き締まった唇。

今は困惑色に染まっているが、すつと通った鼻梁に日本人らしからぬ白い肌。

スタイルもボンツキュツボンとかなりよく、道を歩いていたら高確率で目で後を追う美人であろう。

少なくとも俺ならそうする。

自分自身でなければな!!

「わあああああつ!?!」慌てて落ちた面とコートの切れ端を掴む俺。

『うおおおおおおおおおつ!!』なぜかヒートアップするクラスメイトたち(男)。

「…!!」パシヤパシヤとシャツターを切る土屋。

「写真撮ってんじゃねええええつ!!」

「ぐぐっ!」

カメラ片手に動き回る土屋に迷わずジャツジメン^立トツイスト^ち。撮影は^ご遠慮願います。

「ナツルお前…女だったのか?」

「違うわい!」

去年の夏一緒に海に行っただろ!

「じゃあ、水を浴びたら女になるとか…」

「呪泉郷にも行ってねーよ!!」

困惑する直江にもう一度怒鳴りつける。

微妙に冷静っぽいのがまた腹立つ。

「昨日まではいつも通りだったのに、一日経ったら性別が変わってるって一体何があったんだ?」

「俺自身何があったのか分からんのだが…昨日モモさんに川神草とかいう物を食わされて」

「あー、あの肉っぽいアレか。俺様達も食ったぜ」

「ちつきくんだり浮いたり大変だったよね…」

「なんてもん食わすんだあのクソアマ!」

他人事だと思っ**て**好き勝手しやが**つて**!

「姉さんなんか男になったしな」

「自分にも害があったもん人に使うなや!!」

バカなんじゃねーのあの人!?

「でも姉さんは変わったの見た目だけだったぞ。お前はなんで声とかも変わってるんだ?」

「俺が知るかよ…」

数秒で急に身長が縮み、体型が変わり声も高くなり、髪が超伸びた。自分の変貌ぶりに困惑と恐怖が同時にやってきたぞ。川神ブランド怖っ。

「…瀬能よ、そろそろムツツリーニがまずいのじゃが」

「えっ…マジで?」

木下に促されて土屋に注意を向ける。極めてからずつとジヤツジメントツイストかけ続けてたからな。

拘束を解くと、顔を真っ赤にして鼻血を流しぐったりとしてる土屋が出てきた。

「そんなに強く締めたつもりはないんだがな…」

それとも逆上せたか？俺は体温が高いからな。

「…原因は他にあると思うけどな………」

直江が呆れ口調でつぶやいた。

その視線を追いかけると、最終的にたどり着く場所は…俺の胸部。

邪魔だからとサラシを強めに巻いたのにモモさん並に存在感を主張してくる困り者だ。

他人のを見る分にはいいんだが…

「(気づいてないな…) お前そういうところあるよな」

「?」 どういう意味だよ」

「天然って意味でしょ。まったく…土屋も土屋よ、こんな偽物に騙されて」

ふにゆ

「ひゃんっ」

いきなり会話に割り込んできた島田が無遠慮に俺の胸を触ってきた。

なんとも言えない初の感触に、思わず変な声出ちやったよ。恥ずかしい。

「いきなりなにをする」

「…瀬能、なんか今本物っぽい感触がしたんだけど」

「お前俺がクオリティ高い女装してるとか思ってたのか?」

そうだったらよかつたんだけどな。

いや、自ら女装に走るような男ってキャラよりは性転換の方がなんぼかマシか?まあとりあえず、今回の件は自分の意思ではない。

「どうでもいいけどナツル、お前なんで男子の制服着てるんだ?」

「女子の制服着てくる方が問題だろ」ないよ?女物の服なんて。

お袋の私服ならあるだろうけど着る気はない。絶対ない。おかげ

で身体のあちこちが窮屈だけど。

「…瀬能、あんたちよつと来なさい」

言うが早いのか、島田が服の裾を掴んで引つ張ってくる。

意外に力が強い…てか鬼気迫る勢いだ。なんか怖い。

「なんだよ、どこに行くつもりだ？」

「いいから」

「えっ…？その…や、優しくしてね…？」

「……………」

「オイオイ冗談だろ、怒んなよ。っておい、島田さん？ねえちよつと、なんで引く力強めんの？ねえ？ちよつ、聞いている？無言はやめてよオイ。オーイ…」

☆

★

☆

→数十分後→

「あ、戻ってきた」

校舎から出てきたところを、目ざとく——あるいはずつと気にかけてたのかもしれないが——見つけた直江が声を上げる。

再び注目しだすクラスメイトたち。そつとしておいてくれていいのに…

「てか一限目は？」

「自習になった」

都合のいいことで。

「島田は？」

「なんか…俺の身体を散々確認して、最後にはよく分からない言語叫んで去ってった」

全身を隈なく弄られたからあちこちが痛い…とくに胸が。

巨乳にコンプレックスがあるのになんでしつこく触るかな。もぐ勢いで揉まれたぞ。

触られた箇所を撫でて痛みを少しでも和らげようとする。

一番触られた胸に手をやることは流石にやらなかったが、二の腕を擦ると強調してみたいになった。そんな気はまったく無いのに。

「うおおおおおおおーシッターチャーンス!!」

ソフトモヒカンヘアーでM字額のサルっぽい奴が、鼻息を荒くしてカメラを向けてくる。

——オリオンソードベテルギウス
聖巨人の七連星!!

「ぐはっ!？」

撮影ボタンを押そうとした瞬間、レイピアを使った7発同時の連続突きが華麗に決まった。

剣戟は両手足に一発づつ、カメラに二発、生え際に一発入り、キモいサル似の男は汚い悲鳴を上げて地面に倒れる。

「写真撮影はご遠慮願いますクソヤロウ」

「うおーい!?!土屋の時と対応が全然違うじゃねえか!!」

即座に復活しやがった。瞬間回復使ったモモさんかお前は。

「ちゃんと攻撃しただろうが倒れるまで」

「土屋は関節技で俺は武器攻撃じゃん!俺にも抱きつきプリーズ!!」

キモッ。

「貴様に組み合うくらいなら素手でゲッブーに挑んだ方がマシだ!!」

「なによゲッブーって」

「命を持ったヘドロのモンスター」

「汚泥扱いかよ!?!」

うるさくて動き回る分、泥よりもたちが悪いよ。

淡々と感想を口にする、小笠原が「男子でもそう思うのね」と言った。他の奴らはどうか知らないけどね。

ぎやあぎやあと騒ぐキモザルを無視し、先ほど攻撃に使ったレイピアを拭き紙で丁寧に拭う。

綺麗になったところで、本来の持ち主の元へと歩いていく。

「悪いな勝手に借りて。許可を得る時間がなかったから」

そう言つてクリスに剣を手渡す。

「うえ？え！？いつの間にな！」

「おかげで助かったよ。ありがとう」

混乱する彼女を無視し、笑顔を向ける。つつこまれると色々面倒だから。

「……!!」

なぜか顔を赤らめて硬直するクリス。

「どうした？」

「ふえい！？いやその…」

顔を真っ赤に染めたままもじもじと恥ずかしがり――

「おっ…お姉様と呼ばせて貰つてもいいだろうか…？」

頭のおかしいなことを言い出した。

「あ、ちつ、違う、そうではなくて本当に言いたい事はお姉様と呼ばせて…じゃない、お姉様と呼ばせて…でもなくて、お姉様と…ああもう、全部違う！いや違わないのだが！」

なんかどつかで聞いたことがあるような言い回しだ。

「とにかく、お姉様と呼ばせてほしいんだ！」

「直江！、クリスが変だぞー」

「突拍子もない出来事が連続して起きたから、脳が処理しきれなくなつたんだろう。しばらくほつといてやれ」

「だからって急にお姉様はねえだろ…」一人っ子なのか？

「そういうえばタイガ、昨日からお姉様が帰ってないんだけどなにか知らない？」

ワン子が会話を割り込んできた。

こいつのお姉様っていうと…モモさんか。

「ヤツならこの姿になつた瞬間襲いかかつてきたから、咄嗟に締め落としした。まだ秘密基地で寝てんじやねーの？」

貞操の危機を感じてわりと本気で締め落とししたからな。

やったあと流石にちよつとまずいか？とも思ったが、呼吸はしてたし脈拍も異常なし、なによりもなぜか満足そうに気絶してたからほつといて家に帰つたんだが…

「つーか俺の身体、一体いつ戻るんだ？まさか一生このままってことはねえだろうな」

「それはそれで問題はないような…」

あるよ。超あるよ。

今は単身赴任（夫婦揃ってだけど）で家にはいないが、親が知ったら卒倒——しないか。いや、親父はするな。お袋は大爆笑するだろうけど。

「姉さんや俺たちの時は2・3日したら戻ったけど」

「数日かかるのかよ…休みやよかつたぜ」

いつか戻るのか一生このままなのか不安だったから、相談も兼ねて学校に来ただけけど…直るんだったら家に籠ってるんだったぜ。

何事もなければいいんだけど。

「たのもーう!!」

クラスメイトを含めてある程度、落ち着いてきたところで、聞き覚えのない男の声があたり一面に響いた。

…もしかして俺、フラグ立ってちゃった？

「誰だあいつ」近くにいた直江に小声で話しかける。

「…沙原政虎^{さはらまさこ}。三年生で刀術部の部長だ」

刀術部？

「剣道部じゃないのか」

「抜刀術、つまり居合抜きを主体にしてるんだよ。うちの学校は剣を使う部活だけでも5つ以上ある…ってというか、仮にも生徒会役員なら覚えておけよ」

神月学園^{かみづき}の部活動って同好会も含めると100はあるって聞くぞ。そんな面倒なこと覚える訳ないだろう。それに役員って言ったって入って数日だ。

「大会とかには剣道部として出てるけど、確か去年全国大会で優勝してたはずだ」

「ふーん。で、その刀術部の部長さんがこのFクラスへなににきたのかね」しかも一学年下の

「ちなみにあの人は裏神月ランキングの5位だ」

あ、なんかもう大体分かったわ。

「ここに冴島タイガという名前の奴がいると訊いたが」

突然やって来た男は、予想通りの言葉を発した。

いるんだよね〜モモさんに勝てないからって俺に突つかかってくる奴。

対象と互角以上に戦う奴に勝てると、本気で思ってたのかね。

まあいくら探し回っても見つからないんだけどね。俺も名乗り出ないし。

コイツもすぐに諦めて他のとこいくだろう。

「あのう…うちのクラスに冴島という生徒はいませんが…」

F組委員長がおずおずと進言する。

のはいいいけど、チラチラと不安そうにこちらを伺うの止める。気づかれんדרו。

「誤魔化してもムダだ、このクラスに在籍していることは分かっている。川神に散々貢いで手に入れた確かな情報だからな」

なにしてんだあのクソアマ。

貢いでって…向こうが媚びたのかこのおっさんが自分から持ちかけたのかは知らんが、かなり使わされたんだろう。当時のことを思い出してるのか背後から怒りのオーラが吹き出てる。

確かな情報って言うけど、そう信じただけじゃないの？

「…名乗り出る気はないようだな」

大げさなため息を一つ吐く。

直江やワン子といった事情を知る奴らが、「どうするんだ？」的な視線を送ってくる。

いや、行く訳ないだろう。そんな目で見るなよ。

いや別にさ、いいんだよ？名乗り出ても。都合よく今こんな状態だし。

でも絶対いざ尋常に勝負!!って流れになるよね。メンドクせえよ正直。

幸いというか、モモさんも瀬能^俺≡冴島とまでは喋ってないみたいだ

から、ここは黙って諦めるのを待とう。

「出てこないならそれでもいい。このクラスの人間に片っ端から決闘を申しつけてあぶり出してやる。まずは…タイミングよくこの場がないのがいかにも怪しい…瀬能ナツルから」

『私が冴島だ』

おっさんが喋っている途中で、つい口を挟んでしまった。

これは…あれだ。あのおっさんが俺に挑んでくると、力量から俺が冴島タイガだつてことが周知されるかもしれない。

それならば今のこの姿でやった方が誤魔化しがきくことを本能的に悟ったんだ。そうに違いない。

だからその生暖かい目をヤメロテメエラ。潰すぞ。

「ほう、お前がそうか…想像していたのとずいぶん違うな」

どんなの想像してたのやら。

ちなみに今の格好は学校指定の制服（当然男子なのでブレザー無し）で顔にはキツネの面。

固定する紐は切れてて使えないが、気を使用することによりピツタリフィット。激しく動いても一ミリもブレません。

「…声が某有名映画の犬神みたいなんだが、自前か？」

こないだのロードショーでやってたのを見たせいかな。咄嗟に出た。

もちろん声色だ。

『それに答える義務はない』

「…先輩に対する礼儀がなっていないな」

『土道無き刀使いよりはマシだろう』

顧問はなにを教えているのやら。一度確認した方がいいかな。アホなしで。

「減らず口を…これは性根を叩き直してやる必要がありそうだな」

おっさんはそう言って、ポケットから高速でワッペンを取り出し俺目掛けてぶん投げる。

流石は居合を主に置いている（らしい）刀術部の部長だけはある、素早い投擲だ。片手でキャッチしたけど。

「つーか決闘の申し込み方違くない？地面に叩きつけるのが本来のやり方って聞いたぞ。」

三年生はこれがポピュラーなやり方なのかな。

「『初めからそのつもりだっただろうに……まあいい。私も、お前を指導してやるとしよう』」

前と同じくワツペンを握りつぶして決闘を了承する。

正式な受け取り方は知らないんだよね。

22時間目 ” 裏番” 冴島タイガ 後編

時は進み放課後。

朝受けた決闘を行うべく、場所をグラウンドから国技館似の闘技場へ移した。

アクジ先輩の時にもお世話になったなここ。本来なら三年専用の設備で二年は使用不能はずなのに、数日で二回使うってどういうことよ？

おまけに…

『さあーやってまいりましたよ特大イベント!! 真の強者を決める裏・神月ランキング! そのランカー同士の意地と誇りとランクをかけた一戦まで、もう間も無く!!』

実況はわたくし、報道部の西野ますみがお送りしますーす!』

『解説はこの儂、川神☆鉄心じゃ』

客席の中段部に設置された放送席らしき場所—— 実際放送席なんだろう—— から、身振り手振りを交えた女の声が響く。

場内に設置されてるスピーカーからも大声が流れてくるからうるさくてかなわん。

しかも女の隣には見慣れたジジイ。

前回は無かったのに、なんで今回は実況と解説がついてんだ？

『今日決闘を行うのは、刀術部現主将を務める居合抜きの達人・沙原政虎!』

対するのはななななあんとお! 神月学園のトップに君臨しておりながら誰も見たことがない最強の人物・冴島タイガ!! 今まで謎に包まれていましたが今日! そのボールが明かされるー!!

見た感じはステキなお姉様です!』

テンションたけー…なんか戦う前から疲れてきたんだけど。

『タイガお姉様ー! 素顔を、素顔を見せてください!』

『断る』

朝から放課後の今まで、ひっきりなしに見物人が来たせいで外すに外せなかったんだ。なぜキサマの懇願程度で外さにやならん。

それどころか余計に着込んでやる。そう思ってた羽織っていた上着の前を閉じた。

この上着は、土屋にバラバラにされたコートを縫い合わせてブレザーのようにしてみたものだ。休み時間のたびに来る野郎どもの視線がウザいから作った。

『おー、服の上からでもわかるダイナマイトボディ！ステキです！抱いてください!!』

さぞ残念がるだろうと思いきや、逆にヒートアップしやがった。

なぜだ。つかホントに女子高校生？エロオヤジでももう少し考えた発言をするぞ。

ギョラリも同意するように熱狂の声を上げる。あ、ウェーブしました。

この学園に入学したことを少し後悔する瞬間。

「ハイハイ。二人とも、そろそろ始めてもいいかな？」

若干鬱に浸っていると、ルー教員が声をかけてきた。

…あ？今回は普通に名前を呼ぶんだって？

一々呼び方考えんのに飽きたんだよ。

ここ数日で会うの三回目だぞ、三回目。そう簡単に思いつくか。

つか他に決闘の立会人いねーのかよ。

「試験召喚獣を使わない普通の決闘ハ、武道の心得がある教員しか出来ない決まりネ。ワタシは川神院の師範の仕事もあるから、学園では他の先生より余裕があるヨ」

なるほど、ようするに暇なわけだ。

…もう人の考えをどうやって察してるのか気にならなくなってきた。

お面をしているのに分かるってことは、表情から思考を読んてる訳じゃなさそうだな。

「二人とも、ルールの説明はいいかい？」

「必要ないです」

『同じく』

おっさん——名前なんつったつけ?…まあいいか。——の返事に続けて頭を軽く下げる。

「沙原君は武器の使用申請を出してるけど、受理してもいいかな?」

『問題ない』

ここで却下したらどんな反応が返ってくるか、内心では結構興味がある。が、面倒だし長くなりそうだからやめておこう。

『武器が使われたからといって、私が弱くなる訳ではない』

「…随分と自信があるようだな」

目の前のおっさんからゆらり、と怒気が立ち昇る。

あれ?そんなに怒るようなことを言ったつもりはないんだけど?

A君とB君の二人の人間がいて、そのうちA君が武器を持ってもB君は弱くならんだろう。A君が強くなるだけだ。

まあだからってB君が負ける、って訳じゃあないけどね。

「それじゃ、指定の位置について。…レーツツ、ファイト!!」

☆

★

☆

く沙原Sideく

立会人であるルー教師の掛け声と同時に、右手で鞘を掴み、いつでも刀を振るえるように居合の構えを取る。

無駄に動くことはない ” 待ち ” の技。獲物を狩る狩人のような、落とし穴やトラばさみといった罠のような技術、それが居合抜き。

相手は学園最強と言われているが、一部を除いて誰も戦うところを見たことがない人物。戦闘スタイルはまったくの未知だが、居合ならば即座に対応できる。

たとえ模造刀だろうと問題ない。俺の一撃は立ち木も斬り裂く。

『ほお、流石はランキングの5位だな。中々構えが堂に入っている』

冴島が腕を組んだ状態のまま、偉そうな口をきく。

『だが所詮その程度のようなだ』

——気づいた時には、足のつま先が下段から迫っていた。

「!?」

咄嗟に刀を引き抜こうとするが、どんなに力を込めてもビクともしない。

後から聞いた話ではこの時、冴島の右足が刀の柄を踏んづけていたそう。

いかに女とはいえ、人一人の体重が乗っているんだ。抜刀できる訳がない。

しかしこの時の俺はそんなことまったく知らなかったので、突然起きた不測の事態にパニックを起こし——

ズガシユツ!!

それを表現する間もなく、顎を蹴り上げられた。

『狐脚』

吹き飛ぶ瞬間、山犬声でそんな言葉が聞こえた。

「ぐっ!!」

数メートルほど地面を滑るように後退させられ、それでも倒れぬように踏ん張る。

『む、耐えたか。…あちらがタフなのかこつちが弱体化してるのか判断に迷うな』

キツネ面の女はふわり、と音もなく地面に着地しながら、誰ともなしに呟く。

そのまま軽く腕を上げ拳を握り、背筋を伸ばして、左半身を前に、身体を斜めに構えた独特のファイティングポーズを取る。

どこかで見たような気がするが…ダメだ、頭が回らん。

ただ、一対一を想定した"武道"ではなく、多人数に対抗する喧嘩寄りなのは間違いないと思う。

その証拠に今も油断無く、こちらだけではなく周囲までも警戒している。

時折「視界の高さが…」やら「手足の長さが…」などと呟いている

がな。舐めやがって…！

『先制攻撃はタイガお姉様のサマーソルトキック！見事に決まりましたねー。正直わたしにはなにが起きたのかまったく分からなかったんですけど』

『相手だけではなく、会場のほぼ全ての者がほんの少し意識を逸らした瞬間を狙って動いたからの。流石は学園一位じゃ、技術力も他の者と比べて頭一つ飛び抜けておる』

思わずカツとなつて頭に血が登り始めたところに、設置されている拡声器から学長と女子生徒の声が響く。

意識を逸らした瞬間につて…そんな武道の達人みたいなことをさらつとやってのけたのか…!? すごいえば着地の時も羽毛かなにかが落ちたかのように軽やかだった。

くつ…迂闊に突つ込むのはまずいか…！

一瞬そう考えたが、すぐに自分のスタイルを思い出して、いつでも居合抜きを出来る構えを取る。

右手を鞘に、左手を刀の柄に添えるように置く。

このスタイルで何人もの相手を沈めてきた。

そうだ…なにを恐れる必要がある。奴は人の意識の間を突いてきただけだ。

ならば常に集中していて、隙を与えなければいい。

同じ手が二度も通じないことを教えてやる！

『…打って出る気は無し、か』

構えを解き、ため息を吐かんばかりのオーバーリアクションをする
冴島。

『自分から決闘を申し込んだくせに、随分消極的だな』

挑発のつもりか？その手には乗らん。

『仕方ない、私からいつてやろう』

そう言つて冴島は、ボールでも蹴るかのように足を軽く後ろに上げて

『狐閃』

そのまま振り抜き、一筋の衝撃波を放ってきた。

「なっ!? チイツ!!」

自分に向かつてまっすぐに飛んでくる衝撃波を、刀を振り抜いて対処する。

これは…気か!?

幸い威力はそれほどではなかったようで、一度の斬撃で霞のようにかき消えた。

しかしホツとするのもつかの間、学園指定の男子制服に包まれた足が、勢いよく迫ってきた。

『孤判!』

『ゴハツ!』

靴の裏側が深々と鳩尾に突き刺さる。

一瞬本気で呼吸が止まった。

しかも冴島の攻撃は一度に止まらず、追い打ちをかけるようにスタンプピングを続けてきた。

『孤群』

「うおっっ!?!」

堪らず腕で頭や体を守り、耐える。

一撃一撃が重くて早い。手馴れている感じもするし、蹴り技に特化したこれが冴島のファイトスタイルなのだろう。

『タイガお姉様の蹴りの猛撃が炸裂!! 堪らず沙原先輩ガードを固めて防戦一方に追い込まれました!!』

『ダメージを与えるほどには強くなく、無視するには弱くない。しかもがむしやらに見えて、要所要所で急所を狙ってくる。なかなかえげつない攻め方をするのう』

「くっ!」

学長の言葉通り、ガードしている腕に攻撃が集中したかと思えば突然足を蹴るなど急に場所を変えたり、胴体を連続的に攻め、そちらに意識がいった瞬間に頭を狙うなど実に嫌な攻め方をしてくる。

防御を固めているのにダメージが蓄積する。

「がッ!!」 また一つ、つま先が顎を掠めた。

しかし、戦闘スタイルは概ね把握した。どうやら足技オンリーの戦

い方のようだ。

スタイルが分かれば対処は容易い。

蹴り攻撃は必ず片足が地面に接している。人間は二足歩行だからな。

！
どんなに猛攻を仕掛けようとも、その接している片側は攻撃が薄い

「がっ、あああああ!!」

頬に一発食らった後、引き戻すために一瞬攻撃が止む。

その隙について無理矢理前進する。

多少ダメージは負ったが、その甲斐あって攻撃の内側に入れた。

狙うは右足首！地面に接している方の足!!

「かあああああっつ!!」

気合いとともに刀の切っ先を思い切り突き刺す。

模造刀とはいえ、この勢いなら確実に骨を折れるはずだ。この試

合、貰った!

『……………』

刃（模造刀だから実際にはないが）が冴島の足にぶつかる瞬間、その足が忽然と消えた。

咄嗟にジャンプして逃れたようだ。

あの状況で、それも片足立ちで膝も曲げずに1メートル近く飛び上がるのは見事ではあるが、ただの悪足掻きでしかない。

即座に刀を切り返し、上空の冴島に目掛け振り上げる。

今度こそ勝った!!

『狐空』

瞬間、前方に向かって勢いよく吹っ飛ばされた。

「ぐあっ!!」

そのまま前のめりに倒れ、数メートルほど地面を引きづられるように移動する。

なにが起きたのか分からない。

切っ先が相手を捉えたと思ったのに、

学園最強を倒し、高らかに勝利宣言をする自分を思い描いていたのに、現実にはマツトのザラついた感触だった。

本当になにが起きた!?

それでも両手をつけて立ち上がろうとする。

が、上半身を起こした途端に酷いめまいがした。

『強い強い強すぎる〜!!タイガお姉様、一度も攻撃を貰わないままに裏神月ランキング5位の沙原先輩をダウンさせました!!でも気のせいでしょうか、一瞬タイガお姉様消えませんでした?』

『消えたのう。正確には消えたと思わせるほどの速度で空を蹴って移動し、沙原政虎の背後から延髄蹴りを放ったのじゃ』

は?

『おー、なんかよく分からないですけどすごいですね!瞬間移動ですか?』

『実質そうだと言ってもよいじやろう。あれは普通の人間ではまず避けられん』

なんだそれ、なんだよそれ!!ありかそんなの!?

俺はランキングの5位だぞ!四つしか離れてないのに、それほどまでに差があるのか!?

『私は普通ではないからな』

冴島がなにかつぶやいているが、それも気にならないほどのシヨツクが襲いかかる。

強くなりたい——小さい時からそう願いつけて今日まで、様々な“努力”を重ねてきた。

日々の鍛錬はもちろん、筋力トレーニング、技の練度上げ、精神トレーニングなど思いつく限りなんでも行ってきた。

その甲斐もあつてか、神月学園でも上位の実力者になれるほど強くなれた。

でも、そこが限界だった。

一度ランキングの4位の奴に挑んで、負けてランク外に落とされた。

だから次はそいつを避けて3位の奴に挑み、また負けてランク外になつた。

そこから死に物狂いでランキングを駆け上がり、なんとか5位に返り咲いた。

その様と戦闘スタイルから、俺には『侍ゾンビ』ってあだ名がついてる。

4位と3位に敗れ、順当に行けば次は2位の人間に挑むべきなんだろうが、ランキングの2位はあの川神百代だ。勝てるはずがない。

ならばと思いい位の冴島タイガに挑んだのだが――

『さっさと立て』

呆然としていると両肩を掴まれ、そのままグイッと引き上げられる。

『ボクシングルールじゃないんだ、こういうことをしても問題はないだろ?』

「――!!」

真後ろから囁くようにかけられたセリフに思わず、背後目掛けて刀を振り切る。

『おっと』

棒読みに近い声とともに肩にかかる圧力が消える。

刀は虚しく空を斬った。

勢いのままに振り返れば、後ろに向かって跳躍している冴島の姿が目映る。

――着地際!!

「かああああっ!!」気合いとともに突きを放つ。

模造刀とはいえ、その硬度は木刀より少し柔らかい程度。使い手によつては簡単に骨を砕けるし、命を奪うこともできる。

それを知りつつ、俺が取った行動は刀による突きだった。それも相手の正中線、胴体を狙って。

『狐舞』

切っ先が触れようとした瞬間、冴島はぐにやり、と音がしそうなほど上半身を反らし、刀の突きを回避した。

猫かお前は!!

「ウオオオオオおおっ!!」

今日何度目かの気合いの掛け声とともに刀を引き戻す。

——そのタイミングで素早く上体を起こした冴島が、刀を引き戻すのと同じくらいのスピードで突っ込んできた。

いやむしろ、俺の引き戻しよりも速い!

「……………」

そのまま攻撃するかと思いきや、至近距離からじつと眺めるだけで他に何もしてこない。

時間にしてわずか数秒ほど、しかし何時間も長い時間観察された気分だった。

それ以上にあの能面——狐の面をつけてるから当然なんだが——で見つめられると、失望されているような、馬鹿にされているように感じて苛立ちと焦りが湧いてくる。

「ああああアアアア!!」

それを振り払うように、持っている刀とその鞘を、無茶苦茶に振り回す。

胸薙ぎ、袈裟斬り、唐竹、逆袈裟。正面から行くあらゆる斬り方を連続して行うが、その全てがあと数センチのところまで当たらない。

完全に見切られている。

しかし相手は攻撃をかわすだけで、反撃をするそぶりすらない。

あの豪脚をカウンターで貰ったら……。そう考えるとますます焦りが募り、太刀筋が大雑把になる。

それに気づいてまた焦り、修正しようと振り方を変えればまた太刀筋が大雑把になり余計に焦る。

悪循環の堂々めぐり。

それ故に——

「っ”!?”

鞘での攻撃をかわされた瞬間、通過した髪を掴むことに躊躇はなかった。

相手も予想だにしなかったのだろう。髪の毛を思いきり引っ張ら

れた瞬間、体勢を大きく崩した。

その隙を逃さぬよう、右手に持った刀を力任せに振り切る!!

ボキッ!

頭部に当たるはずだった刀は冴島の左腕に阻まれ、そこから骨が折れたような音が聞こえた。

勝機!

振り抜いた勢いを殺さぬように、小さく弧を描くような動きで刀を切り返し、再び冴島に刃を振るう。

今度こそ勝った!

ズガシユツ!

———?

いきなり刀身が消えた。

変な：斬撃音?がした瞬間、模造刀の鏢から上数センチを残して刃がなくなった。

突然の出来事に頭がついていかない。

いや正確には、理解しようとする前に頭頂部付近の髪を両手で掴まれて———

『硬狐顎』

そこからの記憶はない。気がついたら病院のベッドの上に横たわっていた。

ただ記憶が途切れる刹那、最後に見た映像は、般若のように牙をむく、怒れる狐の顔だった。

~~~~ナツルSide~~~~

「そこまで、勝負あり!」

俺の膝蹴りにより吹っ飛んだ沙原が、地面に転がると同時にルー教

員の声が会場に響く。

それを聞きながら、手に掴んだ髪の毛をパラパラと地面に払い落とす。ばっちいー。

(いってー…)

完全にゴミがなくなったのを確認してから髪の毛を撫でさする。沙原バカに掴まれて引つ張られたせいで頭皮が痛い。

その後の斬撃は腕の肉で受けた上で、骨を外して衝撃を逃したからあんまり効いてないけど。

そういえば戻しておかないとな。そう思い右手で左腕の骨をはめ直す。

今更だが、我ながらよくもまあ脱臼したまま相手の髪を掴んだもんだ。

『けつちやーつく!!勝ったのは、冴島タイガお姉様です!!強い強い強すぎるくくく!終わってみればなんと、攻撃を受けた回数はずかずか一回!これが一位の実力かくく!!それに引き換え沙原先輩は…』

言われてさつきまで対立してた男を見てみれば、今だに気絶しているのか担架に乗せられ退場する途中だった。

起きたら驚くだろうな。自分の髪型が変わってて。

『まあ、自業自得とも言えるのう』

『ですよー。女の命とも言える髪の毛を無遠慮に引つ張ったんですもん』

俺男だけどね。

『まああんな漢字の山みたいな頭した人はほつといて、ここからは勝利者インタビュの時間です!タイガお姉様ー!』

山みたいな頭!面白い表現するなあ的一年。それでいて中々の射てる。

俺は黒いブリーフ被ってるみたいと例えるけど。

などと考えてるうちに実況の一年がマイク片手にすぐそばまで近づいてきた。

今から立ち去るのはちよつと不自然…てか後々めんどくさそうだな。

『タイガお姉様、今の感想は?』

『…感想と言われてもな』楽勝でしたとか?

『なにか一言お願ひしますようくなんでもいいですから』

なんでも…か、それじゃあ…

『私に勝てるものはいないか!?』

「ここにゐるぞー!!」

なに!?

ネタのつもりでやったのに返してくる奴がいるとは…嬉しいじゃないか!じゃない、誰だ!?

内心ワクワクしながら声が上がった方を振り向くと。

「よーナツ…タッチ。昨日ぶり」

『…モモさん』

こんな厄介な状況を作り出した川神<sup>元</sup>百代<sup>凶</sup>が、不敵な笑顔を浮かべてリングに降り立った。

そのままゆっくりと近づいてくる。

…あの顔は絶対碌でもないこと考えてるな。

つか誰がタッチやねん。

いやまあ、ナツ<sup>いつもの</sup>チで呼ばれても困るんだけどね。

「びっくりしたぞー。目が覚めたらいつもと違う場所だったし、時間は正午を回ってたし」

もう二・三日寝てりやよかったのに。

「登校してみればナツ…タッチが決闘するって言うじゃないか。二度びっくりしたぞー」

びっくりついでにぶつ倒れちまえばよかったのに。

「まあそんな些細なことはどうでもいいか。という訳で——」

ある程度の距離までくると、そこで立ち止まりなぜか戦闘体勢を取る。

「死<sup>や</sup>合ろうか、ナタっち」

なんでやねんな…

『誰がナタっちだ…それになぜ私がお前とやり合わねばならん。理由がないだろう』

ホントに意味がわからないよ。

「理由ならあるぞ。なぜならば…今ここで私はお前に決闘を申し込むからだ!!」

『断る』

先ほども使った、しかし先ほどよりも強い意志を込めた言葉で即答する。

すると目の前の女性はすぐにブーたれた表情になった。

「なんだよー、ここは『是非ともない』とか言って受ける場面だろー?」  
知るかそんなお前事情。本当に碌でもないこと考えてやがって。

「他者からの挑戦を受けるのは神月ランカーの義務だぞー?」

『そんな義務はない』

上位ランカーから下位ランカーへの決闘の申し込みなら基本的に断ることは出来ないけど、この場合冴島梅の方が上だからな。

それ以前にすでに一戦やってるんだぞ。誰がやるか。

「ノリの悪い奴だなー。しょうがないじゃあ…問答無用でいくか!!」

言うが早いのか、数メートルの距離を一瞬ともいえるスピードで詰めてくる。

そのまま腕を振るい、顔面に拳が——当たる直前で止まった。

いや正確には俺が止めた。

「なに!?!」

『迷いなく顔面を振り抜いてきたな…』 止めなかったら直撃・粉碎コースだったぞ。相変わらずあぶねーねーさんだ。

「お前、一体なにを…!」

『操そうご狐。…私が本気になれば、指一本使う必要もない』

え?…ならなんでさっきの奴(沙原)には使わなかったの?…ハッ

砂利と本気でケンカする大人がいるか?

「どんな原理で押さえつけてるのはかは知らんが、この程度の拘束——」  
『すぐにでも外すだろうなお前なら』

喋りながらも突き出されたモモさんの腕を左手で掴み、右腕を首筋に回し、

『なので先に攻撃させてもらおう』

——テリブルペインクラッチ

『もう一度眠れ深く!』

思いきり力を込めて絞めあげる。

昨日もこうやって気絶させたんだ。同じ技が二度効くほど甘い相手とは思わん。反撃に来たところで、より効果が高い絞め技を——  
などと考えていたのだが、

「(ギユウウウ…) ……」

なんか、すごい効いてる。

昨日もそうだったけど、本家とは違い足4の字固めをかけてないから比較的簡単に抜けれると思うんだが、なんでこの人素直に受けてるんだろう。実はMなの? 恍惚とした顔もしてるし。

あと: 西野ますみとかいったか? 食い入るように見つめるのヤメ口、気持ち悪い。(なんでハアハアしてんの?)

そうして絞めること約数十秒。モモさんの身体から力が抜け、ぐったりとしたところで技を解く。

……うん、完全に落ちてるな。

『おおーつとタイガお姉様、沙原先輩に続いて川神先輩もノックアウトー! 本当に強い!! これはもうつ、私生活からその強さの秘密まで根掘り葉掘り訊いてみないとわたくし気がすみません!!』というわけでお姉様、まずはスリーサイズから——』

『狐空』

言い切る前に文字通り跳んで逃げた。

最初から試合終わった瞬間にこうしておけばよかったと軽く後悔した。

## 22. 5時間目 ” 裏番 ” 冴島タイガ 後日談

・あいる、びー・ぱつく

くナツルSideく

「ああナツル。やっと見つけたヨ」

『うん?』

突然ルー教員に後ろから呼び止められた。

モモさんを気絶させた後、一旦選手控え室まで移動してそこから窓を使い外に逃げた。

一番目立つ場所から立ち去れたとはいえ、下手にお面を外すわけにはいかなないので、現在はスネークさん張りに周りを警戒しつつ普通に歩いてたんだが…こんなにも早く見つかるとは思わなかった。

「声を無理して作らなくてもいいヨナツル。モモヨが迷惑をかけてすまないネ…」

そういつて目尻を下げ、申し訳なきような顔をするルー教員。

「どうやら事情を知ってるようだ。あの怪しい草(川神草)、川神院經由で手に入れたのか?」

「まったく、本当にモモヨには困ったものだヨ。人が栽培しているものを無断で持っていくのは止めてほしいネ」

「お前の自作かい!!」なんてもん作ってくれんだ!

「つーか今の台詞、断りいれたら持つてっていいって聞こえたんですけど! 破棄しろよそんな人体に影響がある異常食材!」

「いやはや、山での修業中に偶然見つけてネ。観察しようと思っ帰って育ててみるとこれがなかなか」

「さつさと要件を言え要件を!」

霊障浮いた草の談義がそうだったつたつたらぶっ飛ばすぞ。

「ああ、渡すものがあつたんだヨ。はいコレ」

「そう言つてルー教員が手渡してきたのは一つの茶封筒。

「なにこれ」

「裏神月ランキングの1位から10位の人物は、公式な試合に勝つと



ファイトマネーが入るのヨ」

「は？」ファイトマネー？

封筒を開いて中身を確認してみると、学園で使える食券だった。ただ量が半端じゃない。100枚くらいがぎっちり入ってる。

「多いな」

「ランキングのトップだからネ。それくらいはあたり前ヨ」

いやでもこれ、購入のコツペパン（1個50円）から学食の高級ランチ（1食500円）まで使える共通学食券ですけど。

やったねパパ！明日はハンバーグだ！

「今日の試合を見て、決闘を希望する人が大勢いるネ。みんな血眼になって冴島タイガという人物を探してるヨ」

「敗者がどうなったか見てないわけじゃないだろうに…：どういう神経してんだ」

「あれは相手が悪かったと思ってるんじゃないかな。最後の方、攻撃を回避することを主体にしてたのは、一撃で気絶させられるタイミングを狙ってたんだろウ？」

「からかってみただけだ」

「ちなみに川神草だけど、川神水同様副作用とかはないから安心していいヨ。ただ念のため、一度食べたら一週間は間を空けた方がいいかもしれないネ」

「聞けよってかなんか服用計画立てられてる!？」まだやるって言うてないよ俺!？」

…しかし……

ちらっと手の中の茶封筒を見る。

………たまになら……いい……かな……？

「入り用になったら、ワタシに言ってくれればすぐに用意するヨ」

「まだなにも言っていないぞ」

「見てれば分かるヨ」

物欲には勝てなかったよ…

|||||

川神草は用法・用量を守って正しくお使いください



ちよつと見過ごす訳にはいかないな。

しかもそれが真剣な表情をしていたなら尚更だ。無いとは思うがなにか弱味を握られてて、どこかへ連れて行かれる最中かもしれない。俺は直ぐに気配を殺し、クリス達に見つからないように身を隠しながら後をついて行く。もしもの時のために携帯が使えたらよかつたんだが、あいにく電池切れで沈黙中だ。こっちの方こそ買い替えを検討するべきか。

そうやってしばらく、スネークさんよろしくのストーキング行為を続けていくと、やがて一つの空き教室に全員が入っていった。今から中でなかが始まるんだろう。

好奇心の赴くままに、ドアに耳を当てて室内の様子を探る。

『全員集まったようだな』

『はい、抜かりなく』

『会長、今日は…』

会話の内容はなんとか拾えるが、声の判別がし辛いな。この学園無駄に防音設備高めてやがる。

『集まってもらったのは他でもない……先日 of 件だ』

『おお…』『ではやはり…』『あの方が……』

『うむ、……冴島タイガ殿だ』

ずっこけそうになった。

『狐のお面を付けていたのはなぜなのでしょう？』

『神力しんりよくが足りないのだろう』

神力!?

『おそらくはあの面を外したら煙のごとく消えてしまうはず…それを押しつけてまで現世に降臨したのは、昨今の武闘者の質の低下を嘆いてのこと。くっ…、自分にもっと力があれば…!』

『会長!』『会長のせいじゃありません!』

『そうです!それを言ったら私たちだって…!』

なんだこの会合。

その後も注意深く聞いてみたが、どいつもこいつも『現代の戦神に認めてもらうようもつと鍛錬を』やら『冴島様のためにより強く、美しく！』など、どう頑張つてもイカれた盲信者の一歩手前みたいなことを延々と言い合うだけだった。

もう一度言おう、なんだこの会合。

あとずっと聞き続けて思ったんだがこの会長ってクリスじゃね？  
なにやってんのお前？

『うむ、皆の心意気を自分は大変嬉しく思う。これからも一層の努力をしていこう。しかし間違つても先日の沙原なる男のようにはならぬように』

『はい、それはもう！』

『清く正しく、ですね！』

『うむ、では時間もないので解散しよう。全ては冴島殿のために！』

『『『『冴島様のために!!』』』』』

室内の気配が入り口へと移動し始めたので、足音を立てないようにこっそりと物陰へ向かう。

掃除用具用のロッカーの陰に身を隠すと同時に複数の男女が教室から出てきた。

…ぱつと見たところ、目当ての人物はいない。

逐一人の出を確認しながら、イベントリから"ある物"を取り出す。

昔戯れで作った一品だ。まさか使う日が来るとは思わなかった…あるいは今日この日のために制作したのかもしれない。

準備が整ったところ、タイミングよく目当ての人物——当然クリスだ——が教室から出てきた。

しかも最後の一人のようだ。好都合。

「ふう…冴島殿、自分は今日も正しい行いをしたぞ」

「そういうのをエゴつつーんだよボケ」

自分自身の行いに酔ってるようなことをほざくので、背後から正直な感想をかけてやる。

するとビクツと身体が一瞬跳ね、硬直。

しかしすぐにギギギっ…と、サビついてんじやないの？と言いたくなるほどぎこちない動きで振り返る。

それを顔につけた、ウォーズマンスマイルの面の位置を直しながら見つめる。

「ちよおつとお話しようか？フリードリヒちゃん」

大丈夫、昼休みはまだまだあるから。

|||||

・ウォーズマンスマイルの面

某ロボ超人のマスクを真似て作られた一品。高品質。

防御＋5

特殊効果：威圧（弱）。相手をたまに恐怖状態にすることがある。

|||||

・物語の狭間の一ページ

~~~~~

・神月学園の敷地から少し離れた場所にある学生寮

伊織 順平「今日のある、凄かったなー」

鳴上 悠「今日の？…ああ、ランカー同士の決闘か」

伊織 順平「そそ、とくにあの…冴島タイガ？だっけ？ヘタしたら俺らペルソナ使いより強いんじゃないやね？」

岳羽 ゆかり「強いかどうかは分かんないけど、じゅんペーより頼りになりそうなのは確かだね」

伊織 順平「ちよおつ！ゆかりっちそれはないでしょ!?!」

里中 千枝「冴島さんかあ…同じ足技としては、ちよつと興味あるかな」

花村 陽介「同じって…里中と向こうじゃ全然違うだろ。月とすっぽん？みたいに」

里中 千枝「なんだと花村！」

花村 陽介「ちよつ、やめろ危ねえ!？」

鳴上 悠「みんな仲がいいな…そつとしておこうか」

有里 湊「そうだね…割とどうでもいいし」

花村 陽介「いや、言つてねえで助けるよ！」

がちやつ(↑ 寮入り口の扉が開く音)

汐見 琴音ことね「ただいま。つて陽介と千枝はなにしてんの？」

岳羽 ゆかり「あ、琴音。おかえりー」

伊織 順平「琴音つちく聞いてくれよ、ゆかりつちつては俺のこ

と頼りにならないつて言うんだぜ？ひどくねえ？」

汐見 琴音「え、じゅんペーつて頼りになるの？」

伊織 順平「琴音つちまで!？」

花村 陽介「お：おい：いい加減助けてくれ……」

>陽介は千枝に首を絞められてぐったりしている…。

>どうしようか？

▶？千枝に話題を振る

陽介を助ける

千枝を助ける

汐見 琴音「あ、そうだ千枝おめでとく」

里中 千枝「え？どしたのいきなり」

汐見 琴音「今日付けで裏神月ランキングの10位になったから」

里中 千枝「ええ!?あたしが!？」

真田 明彦「ん？ああ。沙原が負けてランキングから外れたから、

順位が繰り上がったのか」

花村 陽介「げほつ…死ぬかと思つた……」

鳴上 悠「そういえば里中11位だつたな」

汐見 琴音「うん。だから今日は…ご馳走だね！荒垣先輩、よろし

くお願いします！」

荒垣 真次郎「ああ？なんで俺が」

汐見 琴音「お祝いになにか美味しいもの作ってくださいよう」

里中 千枝「あ、じゃあ肉！お肉がいいです！」

荒垣 真次郎「……っち、めんどくせえな……」

汐見 琴音「とかなんとか言いながらもキッチンに足を運ぶ荒垣先輩、大好きです!」

荒垣 真次郎「うるせえ!」

天城 雪子「あはは……でも凄いな、千枝。学園で強い人の10人目になっちゃうなんて」

里中 千枝「いやいや、まだ上に9人いますから。真田先輩とか」

天城 雪子「でもどの部活にも入ってないんでしょ? やっぱり凄いや。私も頑張らないと」

岳羽 ゆかり「いや雪子はいいでしょ」

伊織 順平「そーそー。ゆかりっちもそうだけど、ゆきっちは魔法特化のペルソナ使いなんだからあんまり気にしないでいいって。俺なんてバリバリの前衛タイプなのにランキングに擦りもしてないぜ?」

天城 雪子「……やっぱり頑張らないと」

伊織 順平「なんで!?!」

有里 湊「あれで慰めてるつもりなのかな」岳羽 ゆかり「じゅんペーだし……」花村 陽介「そもそも慰めなのかアレ?」鳴上 悠「もつとがんばろう」

伊織 順平「ちよっ! みんなひどくね!?!」

汐見 琴音「大丈夫だよー」

伊織 順平「へ?」

汐見 琴音「じゅんペーがどんなに頼りなくても、きちんとフォローするから。タルタロスでもそうでしょ?」(↑ランキング12位)

………

☆

★

☆

がちやつ

桐条 美鶴「戻ったぞ」

汐見 琴音「あ、美鶴先輩。おかえりなさい」

桐条 美鶴「君か、ただいま。……伊織は何をしているんだ？」

伊織 順平「(ぶつぶつ)……1位から5位までは……ちよつとムリくさい……なら6位は……」

>順平から気迫を感じる……

汐見 琴音「ランキングの10位圏内に挑戦するから相手を選んでるんですよ」

桐条 美鶴「そうか……それはいいんだが、台詞の内容を聞くともの凄いい情けないな……」

伊織 順平「……8位はみなちだし……ちえっちは确实とは言えない……よし決めた！」

有里 湊「どうでもいい」

伊織 順平「みなち酷い！でもいいもんね、俺っちはこの9位の奴を倒してランカーになってやる！」

桐条 美鶴「(ぴくっ) 9位？」

真田 明彦「この前トップ10入りしたばかりの奴じゃないか。確か……瀬能だったか」

伊織 順平「記事では結構やる奴みたいに書かれてるけど、タルタロスで実戦やってる俺ら程強いわけじゃねーっしょ。帰宅部っぽいし」

岳羽 ゆかり「小さい理由……」

伊織 順平「うっさいやい！とにかくこいつに勝ってバラ色の学園生活を——」

桐条 美鶴「止めたおいた方がいいぞ。伊織」

伊織 順平「へ？」

里中 千枝「桐条先輩？どうしたんですかいきなり」

岳羽 ゆかり「止めといた方がいいって……あ、そういえば瀬能ナツルってこの前生徒会に入った人でしたよね。後輩が傷つくのが嫌とか？」

桐条 美鶴「そういう意味で言ったわけでは……まあいい、どうしてもやるのなら止めはしない。だがやるのなら召喚器の申請と病院の

手配をしておけ」

伊織 順平「へ？」

真田 明彦「おいおい、病院の手配とは穏やかじゃないな。それに召喚器って：試合でペルソナを使わせる気か？適性のない一般人には見ることもできないんだぞ？」

桐条 美鶴「それでも攻撃を避けることは出来る。実際単体の攻撃魔法は擦りもしなかったからな」

『え？』

桐条 美鶴「：そうだな。知り合いのよしみだ、病院の手配は私がしてやろう。桐条グループで用意できる最高級の所をな。いいか？伊織」

伊織 順平「へ!?!え、え〜つと：：やっぱり！挑むのやめときます！」

桐条 美鶴「そうか。：明彦はどうだ？戦闘のスタイル等を考えると闘ってみるのも悪くないんじゃないか？なにか得るものがあるかもしれないぞ」

真田 明彦「なに?!いや：：そろそろボクシングの試合が近いからな：：」

桐条 美鶴「そうか」

>言うだけ言って美鶴は去っていった：

岳羽 ゆかり「今のって：桐条先輩流の冗談？」

伊織 順平「とてもそうは見えなかったけどなー：：」

「テレットー、俺さまのターン！」

「血祭り・悪」

23時間目 Grim reaper

「この…失敗作め!!」

——…失敗作?

「私は悪くない!配合は完璧だった!こんな欠陥品が出来たのは他に原因がある!!」

——…欠陥品…

「私には才能があるのだ…他の無能ものとは違う!!これはなにかの間違いだ!!」

——…間違…い…?…?

「バカなあいつらに分からせてやる…認めさせてや——オイなにをしている?」

——…間違い…正す…

「な…おっおい待て!止め——!!」

☆

★

☆

~~~~~

島津「昨日の天神館との東西戦、すごかったよな——」

クリス「うむ!クラスの垣根を越えて皆が一つになったのを感じたぞ!」

一時限目開始前の教室——という名のグラウンドの片隅——  
で、2年F組の楽しいな声が響く。

吉井「なになに、昨日なにかあったの?」

師岡「なにかあったのって…ああ、吉井君は昨日まで入院してたから知らないんだっけ」

吉井「あ、うん…」

納得した様子を見せる師岡と疲れたように乾いた笑みを浮かべる吉井。

何気に、初めての会話だった。

大和「関東に神月学園と似たような、武術や科学技術を推進した学

校があるんだ。それが天神館。昨日の日曜にやった東西戦っていうその天神館との交流試合のことだよ」

坂本「天神館か…戦闘分野に力を入れているって話を聞いたことがあるが、科学技術もそうなのか？」

直江の説明に、同じく昨日退院した坂本が質問する。

大和「確かに元々は戦闘技術なんかを主に扱ってたんだけど、神月学園ができてから変わったらしいよ。なんでも東西のバランスを保つためだとか」

坂本「バランス…科学と武術のか。正直かなりの差があると思うがな」

もちろん関東が上で、との言葉で坂本は締めた。

坂本「今朝の全校集会で紹介された編入生、大昔の偉人のクローンだろ？世界最高峰の九鬼財閥が創ったって言っても、その財閥は関東に本社があるんだ。どう頑張っても勝てないだろ」

大和「それでもなにかしらやらないと差は開く一方。関西の技術者は涙目だろうな」

すごい他人事で東西の技術事情を語り合う高校生二人。ホントに十代か？

秀吉「ちなみにその東西戦とはどちらが勝ったのじゃ？」

木下が師岡に話しかける。

師岡「あ、うん。ウチが勝ったよ。全校集会で紹介された源義経さんのおかげで」

吉井「へく、強いんだね。ナツルとどっちが上なのかな」

島津「冴島は俺様と同じで素手で格闘するタイプだからな。刀使う義経とは…どっちが強いんだろうな？」

坂本「あいつが戦闘で遅れをとるとこなんて、ちよつと想像しづらいな」

現在この場所にいない見た目は草食系だが中身はRPGのお使いクエスト並みに面倒くさいクラスメイトを思い出し苦笑いを浮かべる坂本。

吉井「そういえばナツルいないね。どうしたんだろう」

坂本「朝礼をサボるくらいなら普通にしようだが、授業が始まる直前だったのに姿が見えないってことはまだ来てないみたいだな。珍しい」

姫路「桐条生徒会長ものすごく不機嫌そうでしたね…」

桐条美鶴。 神月学園第一生徒会会長。

全校集会などの大きな催しは生徒会役員全員が出席することを義務付けられている。

今までこれを破ったものはいない…少なくとも彼女が生徒会に入ってから今日までは。

桐条美鶴。 現在は事前に説明したにも関わらず出席しなかったナツルを想い、処刑用に召喚器の手入れをしている真つ最中。静かに怒気を発する彼女を恐れて誰も話しかけるところか近づくことさえできない。

大和「…気になるな。ちよつと電話してみる」

直江は懐から携帯電話を取り出し、登録されている番号にかける。

吉井「え？ナツルって携帯持ってたの？」

大和「型の古いガラケーをな。買い換えたいとかいつも言ってるけど」

ワン子「吉井君、前にタイガが使つてるとこ見てるじゃない」

吉井「そうだったっけ？」

※ 一時間目（五話）参照。

姫路「なんとなく、使わないタイプだとずっと思っていました」

大和「今度それとなく番号訊いてみるといいよ。泣いて喜ぶから」

プルルルル…プルルルル…

プルル『（ガチャ）…お前か』

大和「お前それ毎回やるよな。気に入ってるの？」

『…直江か？』

大和「そうだけど…どうかしたのか？声が固いぞ」

『悪いが今ちよつと手が離せそうにない。用なら後にしてくれ』

大和「別に用ってほどじゃないけど…もうすぐ一時間目始まるぞ」

『ふけるって言ったって』

ブツッ、直江が口を挟む間もなく一方的に通話を切られた。

吉井「ナツルなんだって？」

大和「急用があるからふけるってさ」

坂本「まだ来てすらいらないのかよ…」

坂本のつぶやきに、周りでやり取りを聞いていたクラスメイト達も呆れた表情を見せるが、話題にあがった人物の性格を考えるとすぐに興味を失い、日常へと戻っていく。

しかしただ一人、直江大和だけは違った。

大和（さっきのナツルの口調：かなり前にも一度、聞いた覚えがあるな：いつだったっけ？）

携帯から聞こえてきた悪友の、今にも飛び出していくのを我慢しているような：嵐の前の静けさを表しているような声に意識を傾ける。しかしすぐに一時限目開始のチャイムが鳴り、教師が来て授業が始まったので、直江は考えるのを止めた。

☆

★

☆

〈ナツルSide（朝礼開始十数分前）〉

日常と非日常の境は曖昧だ。

いつも通る道をいつも通りの時間帯にいつも通り歩いたとしても、昨日とは微妙に違う。

ましてやいつもの通学路から一本外れた道を進んだら、それはもういつも”とは違う、非日常だ。

つまり非日常というのは日常の一部なのだ。  
だからそうつまり、

「……………」

「……………」

「う…ああ…た…助け…て……」

いかにもチャラチャラした軽薄そうな男が、所々破れた拘束服を着込んだ女に半殺し状態で釣り上げられている状況を目撃しても、それもまた日常なんだ。

「——いや無理あるか流石に」

現実逃避してみたけど無理だったわ。

つーか途中から自分でもなに言ってるか分からなかったわ。

先週の金曜日にモモさんと試合して、軽く骨折したから土・日と家で寝て過ごし、月曜の今日は朝から全校集会で早く来いと言われてブルーな気分。

そんな気分を変えようと学校への道を少し変更しただけで、こんなバイオレンスな光景に出くわすなんて…運がいいのか悪いのか。(明らかに悪いだろ)

つーか俺ちよつと冷静すぎない？普通なら恐怖で腰が抜ける状況だよ？俺は普通ジャナイケドナ。

冷静ついでに目の前の男女をもう一度確認してみる。男の方はさつきも言った通りのチャラ男。頭は染めたような金髪だし、耳にピアスをしている。顔はフツフツぽい。

現在はその顔やら身体やらを血で赤く染めて、女の方に片手一本で胸ぐらを掴まれて宙釣り状態だ。後瀕死。

女の方は…こちらもさつき言った通り破れた拘束服姿。なんだが…こいつどつかで見たような顔してんな。どこだったつけ…

………あ、思い出した！こうわんせい港灣棲姫だ！褐色肌で髪は真紅だし角も無いけど間違いない！

俺アレだと加賀さんの方が好きなんだけどなあ、同じ褐色肌なら武蔵の方が良かったよ。

てかなんで艦これ？ブームだけど最新かって言われたら正直微妙だよ。

「あく…とりあえず、そろそろ離してやった方がいいんじゃないか？

そいつ」

今だに宙釣り状態の男に指差して提案する。

先ほどは力なく俺に助けを求めてきたが、もうその気力もないのか（そもそも気絶してるっぽい）、ぐったりと虚ろな瞳で上空を見つめている。

正直助けてやる義理はないんだけど、朝っぱらから人死にを目撃したい気分じゃない。

それに——どうしてこんな風になったかはよくわからんので想像だが——ナンパしただけで殺されちゃあ、俺がやる時に困る。今のところその予定はないけど。

「……………」

俺の言葉に従うように、手に持っていた男をゆっくり地上に降ろす。

意外だな。てつきり無視やら拒否やらすると思ったんだが…

やがてチャラ男が座り込むような姿勢でアスファルトの地面に着地する——と同時に俺の顔面が鷲掴みされる。

って次は俺かよ!?!だから素直に解放したのか!?!っ—か速っ!!

しかも女はそのまま俺の頭を、体重をかけて地面に向ける。地面に叩きつける気か!!

「ぐ——おおああっ!!」

——順逆自在の術!

瞬時に受け手と掛け手を入れ替える技で、相手の女の顔面を鷲掴みにして下に押し付ける。

非道なようだがあつちが先にやってきたんだ。正当防衛だよね。

「らあああああつ!!」

女の後頭部がアスファルトの大地に直撃!

ゴシヤツツっ!!

アスファルトを盛大に破壊し、その下の土を削りながら頭が地面にめり込んだ。

俺の。

「……ツ!?がはっ!?!」

自覚すると同時に口から大きく息を吐いた。

なんだ?なにが起きた?技を返したと思ったら、気がついたら再び技をかけられてた。

え、なに。体軀鸚鵡返し?カラスマンだったのコイツ?

……いや違う、なんていうか……もともとの持ち技だったようには見えなかった。

まさか、見ただけで自分のものにしたのか?存在さえも知らなかった技を?

どんなチートだよ。

………おもしれえ。

☆

★

☆

??? Side

地面に叩きつけた青い髪の男の頭から手を離す。

死んではいないだろうけど、しばらくは動けないはず。

「どこへ行くこうというのかね?」

別のものを探そうと男に背を向けた途端、後ろから声がした。

振り返ると男が上体をこれ以上にならないほど反らして立っていた。

「やり逃げなんて許さないよ。……いつ以来かなあ、一撃ダウンなんて?1年前のモモさんが最後か?」



男は喋りながら上体を起こしていく。

「ふつくくくくくガッハッハ！ホンット退屈しねえなあオイ！」

完全に起き上がった男は先ほどまでと違い、狂気的な喜びに満ちていた。

変わっているのは様子だけじゃない。

青色だった髪と瞳は真紅に染まり、身体全体から炎のように”気”が吹き出ている。

……本当に同一人物？

ほんの数秒前との違いに思わず困惑する。

その一瞬の隙を突かれて目の前、手の届く位置にまで肉薄にくはくされる。

「!?」

「うおらあつつ!!」

そのままの勢いを維持しつつ、脚を、腰を、腕を捻り込んだ拳を繰り出す。

バオウツツ!!

咄嗟に後ろに跳んだおかげで食らわずにすんだ。

空振りの音を聞かきり、当たったら相当痛そう。掠った服の裾も切り裂かれた。

男は、思いつきり拳を振り抜いたせいで身体が流れ、無防備な背中をこちらに晒す。

迷わず反撃。さっきの動きを真似て、身体全体を捻り、拳を打ち出す――!

「おラアツツ!!」

こつちの一撃が当たる瞬間、男は振り抜いた拳をさらに振り抜いて、その場で横に回転した。

「!?」

「テンペスト・アロー!!」

さつきと似たようなやり取りが繰り返される。今度はこつちが無防備に背中を晒しているけど。

さつきと同じ状況なら、対処するのも難しくはない。

男の真似をして拳を振り抜き、身体を横に一回転させる。

そして再び向き合ったとき、男の腕を掴んで背負い投げを行う。

「それは悪手だよ」

——ガゴツツツ!!

「っあ!？」

男の身体が宙に浮き上がった瞬間、後頭部に鈍器で殴られたかのような衝撃と痛みが走る。

「念心流・八咫鳥。やたがらす…後の先を取るってのは、武道では割とポピュラーな戦法だぜ」

頭上から声がかけられる。

そのまま男は自分の身体を仰向きに反転させ、小脇に抱えるような感じで首に腕を回す。

そして肩から滑り降りるように、わたしの背面へと落下する。

これは——ダメだ!

咄嗟に先ほど、瞬時に相手と位置を入れ替える技を使おうとする。しかし、

「一度喰らった技は二度喰らわねえ」

返せ…ない!?

「断ち落とし!」

ゴガツ!

「——っはあっ…!」

後頭部を強く地面に叩きつけられる。

受け身を取れなかったから衝撃が余すところなく襲いかかってきた。目の前がチカチカする。

「…っ!」

男の腕に力が込められるのを気配で感じて、慌てて身体を捻り男の

拘束から抜け出す。

が、思いのほか力が強くて頭を抜くことができない！

「俺の本気を見せてやる……！」

ダメだ、やられる！

ピリリリっ、ピリリリっ、

攻撃を受けることを覚悟した瞬間、甲高い機械音が唐突に響く。

「……………」

なぜか男が小さく舌打ちして、わたしを捕まえていた腕を放す。

しかもそれだけでなく、立ち上がって前に向かい歩き出す。…とは

言え立ち去る気はないようで、数歩進んだらこっちに向き直った。

そして懐ふところから何か取り出して、自分の耳に当てる。

「…お前か……その声は直江か？…悪いが今ちよつと手が離せそうにない。用なら後にしてくれ…ああ、ふけるって言つといて」

一方的な物言いで会話を打ち切り、長方形の物体を再び懐に仕舞う。

「…悪いな、中断しちゃって」

直江は空気読める方なんだがタイミングが悪いところがあるな…

と男は呟く。そして、

「じゃ、死合ヤろうか。続き」

無邪気とも取れるほどの満面の笑みを向けてくる。

しかしそこには、確かな狂気が浮かんで見えた。

「…お前…」

「ん？」

「お前、変」

思わず率直な感想が口から零れた。

しかし男は怒る事なく、むしろ心底嬉しそうに唇を歪める。

「そいつはどうも。ありがとうだね」

「…やっぱり、変」

壊れてる、と言ってもいい。それほどまでに何かが致命的に欠けている。

なのに…なのになんで、どうして否定されない？

「人じゃ、ない。みたい」

どうして、普通に他の人と接することができる？

「…三度の飯より死合いが好き。他人の特定部位に性的興奮を覚える。盗撮写真に全力を尽くす。フェティシズムと言い換えれば聞こえはいいが、ぶっちゃけたただのイカれた趣向だ」

「…？」

「人間なんてどいつもこいつもどっかしらに異常抱えてんだよ。ただ人前に出すのはハズかしーから、みんな必死こいて隠してる」

「つまり俺は誰よりも人間らしいってわけだ。なぜなら普通じゃないからなあ!!んガハハハハハッ！」

男が両腕を大きく広げて高らかに笑う。

しかしそんなものは気にならないくらい、言われたことで頭の中が埋め尽くされていた。

☆

★

☆

くくナツルSideくく

「…みんな…異常…普通じゃない…人間らしい…？」

「オイどうした？」

突然襲撃してきた女が、突然虚空を見つめてぶつぶつと呟きだした。

本当にどうしたんだコイツ？

今なら無条件でクリティカルヒットを叩き込めそうだけど、俺がしたいのは一方的な蹂躪じゃない。血湧き肉躍る闘争だ。

しかしそれも、何があつたのかは知らないがこの辺でお開きのようだ。つまらん。

髪の毛も元に戻っちゃったし、スイツチ完全に切れたなー。あーダ  
ルい。

もう学校サボっちゃおっかな。

「桐山ア!!」  
きりやま

背後から大声がかけられた。

思わず「ハイすいません!」と口から出そうになったのは内緒だ。

「テメエなにこんなところで仕事サボって…って なんだよ、見つけてん  
じゃねえか。チツ」

「見つけたのならすぐに連絡をする決まりのはずでしょう。なぜしな  
かったのですか?」

恐る恐る振り返ると、金髪でスタイルのいいお姉さんと黒髪で知的  
な雰囲気的美女が近づいてきていた。

ただし服装はメイド。

「ぶはっ、ていうかお前、なに学生服着てんだよ。自分の歳考えろ!」

「学園内を搜索するつもりだったのですか?あずみに…今はヒューム  
様とクラウディア様がいるから必要ないと思います」

現役なんですけど…

てかなんでこの人たちこんなフレンドリーに話しかけてくんの?

初対面ですよね僕たち。

あれ?もしかして忘れてるだけ?

「ええと…」

「どうしたお前?なんかやけにおとなしいじゃねえか」

「たしかにそうですね。いつもならすぐ母がどうか言うのに」

この作品どころか原作ですら一度も言ったことないんですけど。

「いつものファックな感じより今の方がいいな。李もそう思うだろ  
?」

「そうですね」

あー：薄々分かっちゃいたけど、この人たち俺を知り合いの奴と勘違いしてるみたいだな。

自分と同じ顔した人間は世界に三人はいるって言うし、他人に似てもおかしくはないんだが：ろくな印象持たれてねえなこの二人の同僚。

「ま、んなことどうでもいいか。見つけたならとつと行くぞ」

金髪の方が親指を立てて移動を促す。

「え？行くつてどこに？」なんか、そこはかたなく嫌な予感が：

「なに言つてんだお前？九鬼のラボに決まつてんだろ」

「まさか彼女を探し出して連れ帰るといふ命令を忘れたんですか？」

聞いてすらいねーよ。

「いや自分学校が…」

「ああ？行つてどうすんだよ。紋もん様に報告でもするのか？」

「電話でもいいでしょう。授業中だから出ないかもしれませんが。

……電話に出んわ：ぶぶツ………」

くつつだらねーんだよ。よくそんな明治時代からありそうなダジャレで笑えるなオイ。

「いやいや、自分ホント部外者なんで：行つても中に入れませんか？」

「九鬼家の執事が部外者なわけねーだろ」

「いやいやいや、だからそれが勘違いなんだって！」

「：頭でも打つたんですか？戦闘の形跡もありますし：」

確かに後頭部打たれたけど正常だよ！

駄目だコイツら。人の話全く聞きやがらねえ！

不吉な単語も聞こえたし、多少強引にでもここから離脱しよう。授業に遅れちゃうしね！（もうだいぶ遅刻してるけど）

「クツ、そんなところ行つてられるか！悪いが俺は逃げるふ」

——そこからの事は覚えていない。

急に、テレビの電源を切ったかのように視界が暗転して、気がつけば違う場所にいた。

やっぱり使った台詞がマズかったかな…

☆

★

☆

「お…オイ、どうした。いきなり桐山<sup>そいつ</sup>気絶させて…」

「(すくつ) …帰る」

「帰るって…ラボにですか?」

「(こくつ) …この人も、一緒」

「その肩に担いだ奴か。まあ運んでくれるってんなら文句はねーけど…」

「少し急ぎましようステイシー。規制はしているとはいえ、いつ誰が来るかわかりませんから。そこの方の治療も手配しなくてはいけませんし」

## 24時間目 『屈辱だ』

青い空。

白い雲。

ここは、自分だけの時を過ごす、とっておきの場所。  
おはようございます。渡辺篤史です。

「なに言いだしてんだいいきなり…」

☆

★

☆

〜ナツルSide〜

「と〜きど〜き〜 とおく〜を〜 みつめ〜る〜 ふあんそうなくあ  
なたの〜よこがお〜」

「本当に寝てるのかねこれで…まあいい、起こしな」

「(こくり)…わかった」

今日の建物探訪はエーゲ海の家を思わせるような白

「…起きる」

「いっしょくっ!?!」

なっなんだ!?!いきなり後ろ首筋に衝撃が!

半ばパニック状態に陥りながら目の前に視線をやれば、そこには喪  
服のような黒い衣装?に身を包んだ鬼のミイラが…!

「誰が鬼のミイラだい。あたしや人間だよ」

「心を読むな」

「声に出てたよ」

マジでー?うわ、はずかしっ。

「微塵も恥ずかしくってないね」

「また声に出てた?」



「顔を見てりやだいたい分かるよ」  
さよけ。

あらためて周りを見渡してみる。どうやら俺は映画でしか見たことのないような豪華な造りの一室に、これまた豪華なソファに座っていたようだ。身体が沈みきっている。

なんでこんなところにいるんだっけ。

「気を失う直前の記憶はあるかい」

「あ？」

現状を不思議に思っていると、テーブルを挟んで向かい側にいる婆さんが話しかけてきた。

「えっと…確か周りが海に囲まれた監獄のような建物内にいた」

「それは寝てる間に見た夢だろう、さつさと忘れな」

俺もそう思う。

「…メイド二人と言い争ってたかな」

「そう、そしてそこにいる奴に気絶させられてここに運び込まれたのや」

そう言っただけで婆さんは俺の背後にいる奴を視線で示す。

…起きてからずっと気になってたが……

「なあなんでこいつ俺の後ろに立ってんの？」

指で後ろを差しながら尋ねる。

そこには先ほどまでガチファイトを繰り広げようとしていた（繰り広げてた？）真紅髪褐色肌の女が従者のように佇んでいる。

正直落ち着かない。

「知らないね。来てからずっとあんたの側を離れないんだ、本人に訊いてみたらどうだい」

にべもない。が、その通りではある。

なので座ったままの状態で、身体を捻って女の方を向く。

「あー…なんで俺の背後に控えてるんだ？」

「……………」

なるべく刺激しないように優しく（※ナツルの感覚で）話しかけると、こちらを見つめ返したままで不思議そうに小首を傾げられた。

「……………」  
「……………」  
「……………」

互いに見つめ合うこと十数秒。ゆつくりと身体を婆さんの方に戻し――

「どうやって来たかの経緯は分かったけど、なんでまだ俺ここにいるの?」

>ナツルは コミュニケーションを あきらめた!

「端的に言えば謝罪だね。うちの馬鹿共が迷惑をかけてすまなかった」

「ホントだよ」拉致は立派な犯罪です。

よしんば知り合いと勘違いしてるとしてもだ、気絶したまま運ぶとかどんな同僚だよ。頭おかしいんじゃないの?

「そういやそのきつかけ作ったメイド二人はどうしたんだ」

上司よりも先に頭を下げにくるのが筋じゃないのか。

「李とステイシーなら罰として全館のトイレ掃除を命じてるよ」

地味にキチー!!トイレいくつあんのここ!?

「あんたが起きるまでに終わらせられないなんてね…こりや追加でなにか考えなくちゃいけないねえ」

しかも追い打ち!?!なんかすいません逆に!

「まあ、あの二人のことはいいだろう。それより」

婆さんが一旦言葉を区切る。

するとそれを合図にしたように扉が開き、ルームサービスとかで使われてそうなワゴンを押してメイドさんが入ってきた。

「せめてもの詫びだよ。口に合えばいいがね」

そう言ってテーブルの上に置かれたのは…イチゴのショートケーキだった。

…ケーキで…しかもホールまるまる。

「おいおい婆さん。俺は不良だぜ?『ケーキ』なんて女子供の——サクサク——食う物なんて——サクサクが:サクサク!——チャンチャラおかしくて——言うなればそう——サクサク!!」  
なんだ:このサクサク感は!?

「シエフを呼べ、いやレシピを寄越せ。これは店では作れん味わいだ」  
「気に入ってもらって何よりだよ」

「パイ生地などは使ってないんですけど:」  
「……………」

バカな:このサクサクは幻だというのか:!?

☆

★

☆

「そういやあさ、さしあたりなければ訊きたいんだが」

一品だけだと飽きるだろうとの配慮か、色々な菓子を用意されたので遠慮なく食っていく。

レシピ集も貰えたし余は満足じゃ。

「うん?なんだい」

「こいつってなんなんだ?」

隣に座っている、俺以上に遠慮のない奴を指差す。

「はむはむはむはむ:」

いつの間にか許可なくバクバク食ってんだが、それって俺のじゃないの?」

もうなんか:メイドさんもこの女のために運んできてるようなもんデスヨ?」

「おや、気になるのかい?」

「まあな」桐条超会長にも言われたが、俺が他人の素性を尋ねるのはそんなに珍しいんだろうか。

「気を抜いてたとはいえ、ああまでいいようにあしらえる奴はそうはいねえ。ただもんじゃねえだろ」

少なくともモモさんクラスの強さは持つてるはず。

見た目もこんななのに全く(直江に)情報がないのは流石におか

しい。

「ふむ……まあいいだろうね……お前さんクローン技術は知ってるかい？」

「あ？羊のドリーがどうかしたか？」

「よく知ってるねそんなこと……」

1997年だっけ。話題に上がったの。

なんで知ってるんだろ俺。

『『武士道プラン』』という、過去の偉人に学ぶことを目的としたプロジェクトがあつてね。つい先日それが完成したのさ」

「その二つの話題から察するに、こいつがその過去の偉人のクローンって訳か」

横目でチラツと様子を伺うと、マカロンを喉に詰ませたのか両手に複数持った状態で顔を青くして小刻みに震えていた。

バアン!!

「迷わずその背中を強く叩く。

すると彼女は「けほっ」と咳き込み、少し欠けたマカロンを口から吐き出した。

「こんなのからなにを学べって？」

「その娘は確かに過去の偉人のクローンだが、武士道プランには組み込まれてないよ」

「うん？どういうことだ？」

「いつの時代のどの分野にも馬鹿はいるもんさ……しかも能力が高い馬鹿がね」

「そう言って婆さんは悲しげな目を女に向ける。

「そいつは自尊心がとんでもなく高い上、出世欲の塊みたいな奴でね。それでも能力的にどうしてもプロジェクトに参加させるしかなかったんだ」

「実際、奴がいなかったらあと十年は計画は遅れてただろう。と当時を振り返っているのか、遠い目で宙を見つめる。」

「最初のうちは大人しくしていたんだがねえ…」

「だんだん本性表してきたのか」

「監視の目を欺きながらね。知力と武勇に優れたクローンを作って帝様みかどに取り入ろうとしたのさ」

誰だ帝つて。

訊いてみたいけどなんか訊ける雰囲気じゃないな。

「しかし蓋を開けてみればご覧の通り、誕生したのは武力は申し分ないが知能は幼子並な未熟児だ。これがどれだけ危険か分かるかい?」

「身を持って体験したからな。…で、結局こいつはなんの偉人のク

ローンなんだ?」

「呂布奉先りよふほうせんだよ」

ちよつと待とうか。

「飛將軍呂布ー!?三国志最強の武人じゃねえか!」そんなのと戦やつてよく無事だったな俺。

「よりによってなんでそのチョイスだよ…ただのカスが猛獣従えられるわけねえだろ。つーか元々知力に優れてるイメージないんだけど」  
「自分ならどうにもできると思ってたんだらうさ。結果は最初の被害者として病院の集中治療室で生死の境を彷徨彷徨ってるよ」

どうにもできてねーじゃねーか。

「愚か者のことなんてどうでもいいさ。問題はその娘だよ」

「どうすんだ?」

「どうするもこうするも、生み出された以上は面倒みるさ。…理想と違うからって勝手に失望されるなんて、可哀想な子だよ」

「やめろ」

思わず硬い声が出た。

「可哀想」だなんて安っぽい同情、相手に向かって直接『お前は哀れだ惨めだ』って言うのと変わんねーんだよ。テメエ他人を簡単に見下

せるほど偉いのか？」

「四肢が欠損してようと性格が破綻してようと、生きているって時点じゃ誰だって平等なんだよ。分かったか？分かんねーなら分かりやすくテメーを格下にするぞババア」

「わ…わかった」

鋭く睨みつけると婆さんは怯えたような顔で頷く。

よかった。分かってくれて。

満足したので食事を再開しようとケーキにフォークを刺す…と思ったらフォークがなかった。

どうやら握り潰したようだ。

興奮しすぎたな…久々に本気出したせいかな熱くなりやすくなってる。落ち着かなきゃ。

クールダウンクールダウン。

「……………」

「ん？」

ふと視線を感じて横を見てみれば、呂布子ちゃん（↑ヲイ）がじつとこつちを見つめていた。

「……………」

どことなく、相手の心の中まで見透かしてきそうなその瞳に――  
思わずそっと、目を逸らした。

## 25時間目 にこにここと這い寄る混沌（？）

「やー、なんか悪いね。すっかりご馳走になっちゃって」

先ほどとは場面を移し、豪華な造りの廊下を出口へと案内されながら歩く。

正直一人で歩かされたら五分で迷いそうだ。似たような通路多すぎじゃね？

「別に構わないよ。初めに言った通り、今回の件はうちに非があるんだ」

「それでもお土産まで貰っちゃうとなんかね」

レシピ集とは別に、様々な珍しく且つ高価な食材の詰め合わせを婆さんからプレゼントされた。荷物になるから全部イベントリに入れたけど。

今夜はご馳走だ！

「…すごいや結局学校完全にサボっちゃったな」

「それもこっちの方で連絡を入れておいたよ。欠席扱いにはならないはずだから安心おし」

至れり尽くせりだ。あと半日なりにしよう。

「あ、ミス・マープル、と呂布ちゃんと…知らない人」

「うん？あ、ホントだ」

「……………」

曲がり角に近づいた辺りで、向こうから先に三人組が現れた。

先頭のポニーテールの女子の発言からしてこの家の関係者だろう。婆さんマープルって名前だったのか。（そーいやお互い自己紹介してないや）

見たとここいつら、俺と同年みたいだが…全員私服だ。

「おやあんた達かい。…ちようどいい、紹介しとこうか。この男はあんた達が通う神月学園で一番おかしな生徒だよ」

謝罪云々言ってたくせにずいぶん物言いだ。

「よせよ婆さん…照れるだろ？」

「…こんな奴だけど一・二年生の中で二番目に偉い第二生徒会の副会長だから、なにか困った事があつたら話だけでもしてみるといい」  
相談されても解決できるか微妙だけどね。

「あー、ご紹介に預かりました学園一の変人でまことに遺憾ながら第二生徒会副会長の瀬能ナツルです。お前らがアレか、過去の偉人のクローンってやつか」

「ああ、義経は源義経みなもとのよしつねのクローン、源義経みなもとのよしつねだつ。よろしくな、瀬能君つ」

三人の中で一番小柄な女が、即座に笑顔付きで挨拶を返してきた。  
こいつ今義経三回言ったぞ。

なんとなくアホの子っぽい匂いがするのは気のせいじゃないはず。

「私は弁慶べんけいだよー」

今度は気だるげな雰囲気ふんいきの女が口を開く。

弁慶：武蔵坊弁慶か？なんでどいつもこいつも女子供なんだ？

別にそれが悪いって訳じゃないが、『女のくせに』とか言う弱者は絶対出てくると思うぞ。

俺？戦闘に性別年齢立場は関係ないと思ってますがなにか。

つかこいつら、分かりやすく”クローン”を”クローン”と言い換えるボケをかましてやったというのになにも言いやがらねえ。婆さんや呂布子ちゃんも含めて総スルーだ。

仲良くやっていける気がしない。

「んでまあ、最後にこいつが…」

「(ブツブツ)なぜだ…どうやって俺の中に眠る闇黒龍の力を見破った？…くつ、封印が弱まっているのか…それともまさかコイツ、組織の一員——」

「ただのナスだよ」

小声でなにやらつぶやいていた男を弁慶さんが素早くシメめる。  
クローン  
九龍のくだりに全力で食いついていた上に独自の設定を作りさらに



それに全力で浸っていた。お兄さんビックリだよ。

彼とはなんとなく上手くやっていけそうな気がする。

本当に名前がただのナスってのは流石になしだろう。あらためて名前を訊こうとぐったりしてるナスくん(仮)に声をかけようと一歩足を踏み出す。

——瞬間、刃を首に横薙ぎに突き立てられた。

「うおおわああああっつ!!?」

瞬時に床を蹴って窓際に移動する。

そのまま窓のない場所(壁)に背を付け、ファイティングポーズを取りながら辺りに最大限の注意を払う。

なんだ今の殺気は!?!思わず自分の首が落ちる未来をリアルにイメージしちゃったじゃねえか!

無事である事を確認するように、片腕を構えたままもう片方の手で首を摩る。

「せつ、瀬能君?どうしたんだいきなり?」

「……………」

「苦手な虫でもいた?」

義経ちゃんたちがいきなりの俺の行動に怪訝な顔をする。

呂布子ちゃんまで不思議そう(無表情だけど)に小首を傾げている。なんで気づかなかったんだよ!?

まさか…俺にだけピンポイントで殺気当ててきたのか?なんのために?

周囲に目を向ければ、俺たちが歩いてきた方の廊下からやって来る人影が一つ。

「あ、みんなここにいたんだ。…どうかしたの?」

「清楚<sup>せいそ</sup>さん」

義経が近づいてきた人物(女)に気さくに返事をする。

「どうやら知り合いみたいだ。」

「…誰だ、アレ」

瓢箪に口を付けて、なにやら飲んでいる弁慶に話しかける。

「んくつんくつ…ぷはー。あー、やっぱり川神水はいいねー」

「おーい…」

「んー？ちゃんと聞いてるよー？あの人は葉桜清楚。一つ違いの歳上だけど、私たちと同じ過去の偉人のクローンだよ」

意外としっかり答えてくれたな…てか川神水ってなんだ？

「なんの偉人のクローンなんだ？」

「それは私だけじゃなくて本人も知らない。成人してしばらくしたら教えられるらしいよ？」

そう言っただけまた川神水を飲み始める。知り合いの正体に微塵も興味無さそうだ。

とそこで、自分のことを話題にされているのに気づいたのか、葉桜…先輩がこつちに近づいてくる。

「初めまして。瀬能ナツル君…だよ？私は葉桜清楚。神月学園の三年生だから会う機会は少ないかもだけど、よろしくね？」

邪気の無い、美しい華のような笑顔を浮かべながら手を差し伸べて握手を求めてくる。

その顔を見ると先ほどの殺気とは無関係そう…なんだが…

なぜだろう。彼女から得体の知れないものに対する漠然とした恐怖を感じる。

しかもさつきから俺の本能がしつこいくらいに警笛を鳴らしている。

大丈夫かな。この手を握った瞬間バツサリやられたりしないかな。いやだぞ、いきなり『第3部完！』みたいな流れになるの。俺はモモさんみたく便利な速攻回復技なんて使えないんだからな。

「どうかしたの？」

なんのリアクションも返さない俺を不審に思ったようで、若干眉をひそめる葉桜先輩。

見た目が美麗なのが逆に恐ろしい。

まるでそう：美味いだろうと予想して口に入れたら、実は混乱・瀕死の状態異常を引き起こすほうれん草のおひたしだった：みたいなの。：なんだこの例え。俺最近おひたし食ったっけ。

「瀬能君？」

「あー、いや…」

多少迷いはしたが、結局相手に応じることにした。  
なにかしらの隠れた悪意があったとしても、この場で敵意を示すのは得策じゃない。

掌を自分の服で擦って、平常を装いながら突き出す。

「よろしくお願いします。：葉桜先輩」

「うん、よろしくっ」

久しぶりにした歳上の異性との握手は、とくになんの波乱もない普通なものだった。

## 26時間目 Friend

〈義経Side〉

「そーいやおたくら、神月学園に入学するんだよな？」

義経たち全員との挨拶が終わってから、一拍置いたくらいのタイミングで瀬能君がふと思いついたかのように口を開いた。

「うん？そーだがそれがどうかしたのか？」

「見たところみんな私服みたいだけど学校は？」

？なにを言ってるのだ？

「編入のこと言ってるなら今日からだよ。ちなみに私たちは2―S」

「おお、そういうことか」

弁慶に言われて気づいた。

義経はまだまだ駄目な主だな…

「えー？でもお前ら私服じゃねえか。あ、学校終わってからすぐ帰って来たのか？」

「いや。放課後に学校のみんなが歓迎会を催してくれて、それを終えて今帰ってきたところだぞ」

「え？」

「というかもう夜だよ」

「はい？」

瀬能君はギギギ…と錆びついたネジが回るような音がしそうなほどゆつくりと、側にある窓に顔ごと目を向ける。

「……うわーい……そらにきらきらおつきさま……」

その口からぽつりと言葉が零れる。

つられて窓の外を見るが、辺りは一面の真っ暗闇。

瀬能君、今夜は新月だぞ…

「てうおーい！マジでもう9時じゃねーか!?嘘だろ!?!」

今度は腕時計を見て叫ぶ。

「もう9時って…こんな時間までなにしてたのだ？」

「ずつと寝てたよ。時折おかしい寝言口にしなげらね」

「あー、あるあるそういうこと。一回起きたのに気づいたら夜だったり」

それは弁慶がだらしないからだぞ…

「くうう…！せつかく沸いて出た俺の休日が…！いったいなぜこんなことにつ」

「いや寝てたからでしょ」

「はっ、まさかこれが…ボスの能力!？」

彼はなにを言ってるんだろうか。

「あつ…あの場所へ…あの場所へ逃げなければ…！あの場所へっ！」

「…ミス・マープル、瀬能大丈夫？なんか目がヤバイよ？」

「問題は…無いとは言えないけど、瀬能は思春期特有の病を患っているとの話だからあれでも正常なんだろうさ。報告は聞いてたけど実際目の前にすると刺激が強いね」

「あー…与一の同類か」

弁慶が呆れたような顔のため息をつく。

与一と同じ病気…？それってえつと…なんだっけ？

確か”ちゆうに”とか言ったような…義経には難しくてよく分からないぞ。

「逃げなくてわあっ!!」

瀬能君がいきなり両腕を バツ字に交差して、近くの窓に突っ込む。

どんな結論が出ればそんな行動を取れるのだろうか。

> 『物理反射』発動  
バキインツ「ぐはっ!!」

窓に激突する！と思わず身構えた瞬間、瀬能君の身体が弾かれたように後方に吹っ飛んだ。

え？！いったいなにか？

「言っでなかったけど、九鬼家の窓ガラスはすべて特殊なガラスで出来てるよ。桐条グループきりしやうで研究開発されたもので、なんでも物理攻

撃をはね返す特性を持つてるとか」

「そうなんですか？」

「あんたたちにも言つてなかったか。必要もないと思つてたからねえ……。そういうことだから窓に攻撃とかするんじゃないよ」

普通ないぞそんな機会。

「くっ……たかが窓に弾かれるなんて……これもはみだし者の宿命か……」

孤独は優れた精神の持ち主の運命、か……とうずくまりながらニヒルな笑みを浮かべる瀬能君。

どうしよう、義経は彼がなにを言っているのか全く分からないぞ……

「しかしこの程度で俺は負けない！挫けない！顧みないいいっ!!」

叫びながら再び窓に突っ込んだ。なんで!?

「オラアツ!!」

バキインツ

> 『物理反射』発動

瀬能君が勢いよく拳を突き出すと、先ほどと同じく窓ガラスが一瞬光り攻撃を反射する。

パンチをと言うより、それで発生した衝撃を返しているようだ。

そして返した先には当然、衝撃を生み出した原因がある訳で、

「クロスカウンター!!」

衝撃が瀬能君を襲った———と思つた瞬間、最初に振るつたのとは別な方の腕で再び窓を殴りつける。

反射返し!?!すごい運動神経だ。正しく反射神経だな。

「一度食らつた技は二度食らわぐはっ!!」

> 『物理反射』発動

そのすごい反射神経の持ち主はまたしても窓ガラスに弾かれ、猛スピードで宙を舞い反対側の壁に激突した。

一度目よりも威力が高い……!?!

「ぐ…ゴフツ…」

「ふむ…傷ひとつついてないね、いい性能だ。これなら…」

廊下の端で苦しそうにうづくまる瀬能君に見向きもせず、窓ガラスを触りながら思案するミス・マープル。

自分で招いた客人じゃなかったのか？

「ぐ…ま、まだだ…まだ…メイン……がやられた程度で…！」

「メインの後なんて言ったのかな？よく聞こえなかったんだけど…」

「思いつかなかったんじゃない？ぐ…ごによごによつて濁してただけみただし」

義経は瀬能君がなにを考えてるのかよく分からないぞ…

「うおおっ…！」瀬能君は若干ふらつきながらも立ち上がり、再び窓に向かって一歩踏み出す。

その勢いは最初の頃と比べると見る影もない。もう止めればいいのに。

> 『物理反射』発動

「ぐはっ」

三度、弾かれて廊下に投げ出される。

ただ前ほど勢いがなかったからか、通路の真ん中あたりまでしか飛ばなかった。

「めっ…メインストロームパワー……！」

それでもめげずに立ち上がり、窓に向かおうとする。なにが彼をそこまで駆り立てるのだろう。

「も「もう止めろ！」」

見かねて声をかけようとしたら、それより早く瀬能君に近づく人影が現れた。

与一よいちだった。

「それ以上は危険だ！身体がどうなってもいいのか!？」

片足を引きずりながら歩く瀬能君を必死な表情で押し留める。

…なんか、主であるはずの義経ですら見たことない顔してるぞ…  
「止めるな離せ！俺がやらねば…人類の未来がないのだ!!」

「…窓ガラスを割るのと人類の未来にどんな因果関係が…？」

「清楚さんダメだよ！真剣に取り合っちゃあ。どうせ理由も意味もないんだから、適当に流しとかないと」

「そもそもテーマにや関係ねえだろ俺がどうなろうとよ！もうほつとけよー！」

「一人で死地に行く奴を放って置けるか!!」

与一が今までに出したことのない大声を…!?

「未来がなんだよ…そこに、お前も含まれてるんじゃないのかよ…！」  
「っ、……」

与一の台詞にハッと驚愕の表情をする瀬能君。

なんだ、この状況。

「お前も…そうなのか…！」

「ああ、組織に狙われる身だ」

「…ふっ……人気者は辛いな…」

「………う………？」

「なんなんだいこの状況…」

「いったいどんな設定なんだろう…？」

「世界観がまったく分からないねー」

よかった。義経だけじゃなかったんだな…あの二人のやりとりがわからないの。

瀬能君と与一は一旦離れ、あらためてお互いに向き合いながら会話を続ける。

「こんな状況じゃなかったら、情報交換の一つでもしたかったんだがな…残念だがそろそろ拠点に戻らなきゃならん」



(※訳：もう夜遅いし、明日も学校だから帰らなくちゃいけないです。語り合えなくてごめんね?)

「そう…か…だが——いや…俺の都合を押し付ける訳にはいかないな…ならせめて、俺の連絡先アドレスを教えておこう。こまめに連絡を入れてくれ。ただしどこに組織の目があるか分からないから、他の奴にはバレないようにな」

(※訳：メアド交換しよう? いつでもメールしてくれてもいいけど、恥ずかしいから人に見られないようにしてね?)

「ああ…もちろんだ。堅気に迷惑かける訳にやいかねえからな」

「ふっ…嫌いじゃないぜ。そういう考え」

もう一度思う。なんだこの状況。

あと二人ともずっと——瀬能君は右手で口元を、与一は左手で顔を——覆い隠してるけど、その行為になんの意味があるんだろう? しかもそのままの状態で携帯を取り出そうとするから、すごいもたついでる。

あ、でも瀬能君はするっと取り出せた。…なんか慣れてないか?

「……今日は…来れてよかったよ。来なければ、永い旅路の途中にもこんな出合いがあると知れなかったからな」

「組織に追われる身の以上、孤独は仕方ない。そう思っていたんだがな。これも特異点故か…」

連絡先の交換を終えた二人は、真剣そのものの表情で見つめ合い、「あらためて自己紹介させてもらおう。神月学園2年Fクラスの瀬能ナツルだ。ナツルと呼んでくれ」

「俺は那須与一なすのよいち。与一でいいぜ」  
がっちり**と**強く握手を交わす。

「これからよろしくな、友よ!」

——男たちは分かり合った。

義経には、まだ早い。

「なんだこの状況は…」

あ、つい口から出ちゃった。

5月

1時間目 Sorcerer

（直江Side）

春のうららかな陽射しもだんだんきつくなり、初夏の兆しが近づいてきたある日。

俺たちの通う神月学園に『清涼祭』という、新学期最初の行事の季節がやってきた。俗にいう文化祭だ。

開催日までもう何週間も無く、校舎の方ではお化け屋敷や屋台、発表会の準備で連日大忙しだ。

そんな中、我らがFクラスはというと――

「秘技！ナイスガイ・ホームランスイングー!!」

カキーン「うわっ打たれた!」「まかせろー!!」

野球をしていた。

☆

★

☆

「はっはっはー、俺様華麗に三塁打!」

「ホームランじゃないんだ…」

両腕を空高くに広げて堂々とサードベースを踏むガクトに、モロが小さくツッコんだ。

「仕方ねーだろ。キャップが取っちゃったんだから」

「ランニングじゃなくて場外ホームラン狙えよ」

不満気に言い訳すると、今度はナツルがツッコミを入れる。

「あの程度の球高く打ち上げるなんて当たり前なんだよ。校舎越えれないなんてだっせーヤツ」

「言ったなナツル！意地でも三振にしてやる!」

バッターボックスに入ったナツルに、ピッチャーマウンドにいる吉

井が伊勢よく啖呵を切る。

今までの投球を見る限り、とてもナツルからストライクを奪える技術があるとは思えないんだが…なにか秘策でもあるのか？

「フジサンまでカツとぼしてやるぜ…。ぐわらきーん!!花は桜木漢は瀬能。松井秀樹が国民栄誉賞なら…俺はテレ朝栄誉賞だ!」

「とんねるずか」

「秩父名物、天狗打法!」

「ゴルゴか」

バッターボックスでいちいちネタをするナツルに、キャッチャー役の坂本が律儀にツツコミを入れる。

反応返してやらないと不機嫌になるからなあいつ…その点を考えればありがたいんだが、つい数週間前に病院送りにさせられた奴の相手をよくできるな。

しかし…どうしたものかな。

負けたチームが勝った方にジューズを奢る約束を交わしてるから、なるべくこの回は無失点で抑えたい。時間の関係で一人一打席までだから。

吉井はちよつと頼りないが、坂本は結構知恵が回るっぽいからなにかいい策を出してくれるといいんだけど…。

すると坂本がおもむろに手を動かし出す。試合前に予め決めていたサインだ。なににな…

スクリューを

バッターの

眉間に

「それやったらかなり危険だよね!」「難易度高えっ!」

思わず吉井と被った。

スクリューって、シュートしながら落ちる変化球のあれ!?球がネジみたい回転する!

なんて指示出してんだ…(そもそも投げれるのか?)しかも眉間っ

て…!

やっぱり病院送りにされたこと根に持つてるのか？当然だけど。知り合いを使って復讐しようとするあたり、ナツルの危険性をよくわかってるな。

吉井は必死で首を横に振り球種を変えるよう訴える。当てる外す以前に狙う時点ですでに危ないからな。いろんな意味で。

しかし坂本は頑としてミットを指定した位置から動かそうとしない。鬼か。

「ヴァーヴァ ヴァンヴァヴァヴァヴァーヴァ、ヴァンヴァヴァーヴァ ヴァンヴァヴァヴァヴァーヴァーヴァ。うヴァアン、ヴァアン、ヴァンヴァンヴァんつ、かつ飛ばせくふ・る・たっ！」

「誰だ古田って」

「知らん」

「っーかいつまでやってんだ天狗打法」

「逆襲の…逆・天狗打法！」

逆って字二回使ってるぞ。

吉井の挙動不信な態度を見てたら様子がおかしいって、ナツルなら気がつきそうなんだが…。野球という集団競技に参加させてもらって気が緩んでるのかな。

誘ったときとても分かりやすく喜んでたからなあ（本人は隠してるつもりなんだろうけど）。

「とつとと投げろや吉井イツ!!ボークにすんぞ！」

ナツルがイラついた様子で、構えを一般的なスイングの形に戻して叫ぶ。

後頭部のすぐそばにキャッチャーミットがあることを知ったらどう思うだろう。（というか気づいてやれ）

ちなみにボークとは、走者が塁にいるときに投手が規則に違反する投球動作をすることだ。

審判がないから今回は適用されないけど、されたら相手に一点

入ってたな。(ガクトが三塁にいるから)

やがて、まったくミットを動かす気配がないキャッチャーに諦めがついたのか、吉井が投球のポーズを取る。

ボールが吉井の手から離れた瞬間——坂本は突然ミットを構える手をストライクゾーンに戻した。

ゴスっ……

ボールは若干の変化(ネジを巻くような動き)を見せながら——ナツルのこめかみにジャストミートした。

「……………」

グラウンド上が凍りつく。

当てられた本人も、ボールをぶつけた吉井も、それを見ていた俺たちも、全員が全員立ち尽くしたまま動かない。ただボールだけがてん、てん、てん……と静かに転がる。

ナツルが今なにを考えているか表情から確かめてみたいが、あいにく角度が悪くて見るできない。

吉井が顔面蒼白でだらだらと滝のような汗を流す中、俺を含めた(吉井とナツルを除く)全員が申し合わせたかのように無言で後ずさる。

「あの……その………なっ、ナツル、……大丈夫？」

「………テメエで当ててといて声かけるたあいい度胸だ。そこは褒めてやる」

声をかけられた男は、カラン……と静かにバットを捨てて、柔軟体操を始めた。

坂本が二人のいる場所を大きく迂回してこちらにやってくる。……十字を切りながら。

「人が嫌々ながらもしよーがなく参加してやったっていうのに、こんな扱い受けるとはな……まったく、人生ってのは儘ならねーもんだ」

ノリノリだったじゃないか。そう、ツツコミを入れたかったが我慢する。

なぜなら、ナツルの全身から炎のように揺らめく“気”が静かに立

ち上っているから。

「そこを動くな、つっても無理な話か。なら——せいぜい足掻けや」  
だつ、と吉井が素早く後ろに反転して走り出す。

ちよつ、まだそんなに遠くに離れてないの!?!

「いいいいいやあああー！ー！ー！ー！！」

「ハッハッハッ、どこへ行くこうというのかねっ」

「脇目も振らずに逃げ回る吉井と、それを口角と目尻を釣り上げながら追いかけるナツル。怖っ

よくよく考えるとおかしな光景だ。なんで全力疾走してる人間に競歩程度のスピードで引き離されずについていけるんだ？

「ゆっ、雄二雄二っ雄二に指示されたんだよっ！あつちに逃げてるけどいいのっ!?!」

「まずは実行犯のキサマから仕留める。ヤツはその次だ!」

「止めてくれ」

いつの間にか直ぐそばを走っていた坂本が、首だけをナツルの方に向けてつぶやいた。

気持ちには分かるがあいつが忘れてもしない限り無理だと思うぞ。

ていうかナツル：その気になったら即座に捕まえることができるはずなのに、それをせずに一定の距離を保って恐怖心を煽っている。

なんて嫌な主人公だ。

「フン、いつまでも逃れられると思うなよ」

なに言ってるんだお前。わざとそうしてるんだろ。

知ってるんだぞ、50mを2く3秒で走り抜けること。

「キサマはチェスや将棋でいう『詰みチェック・メイト』にはまったのだ——生まれい時よ！<sup>ザ・ワールド</sup>世界!!」

——  
っ!?!

ナツルの台詞に、再びグラウンドが凍りついた。

「つてできるわけねーだろバーアカ!!なに止まってんだ!!」  
「ぎゃああああああ!!?」

次の瞬間には吉井がナツルに馬乗りの体勢で殴られていた。  
……つてできないのかタイムストップ。

「…まあ、冷静に考えたらそうだよな。それでもナツルならあるいはつて一瞬思っちゃったぜ」

分かるよ坂本、その気持ちよく分かる。

「似たようなことは前にしたことあるけどね」  
「……は？」

坂本が驚愕の表情で見ている中、顔だけをナツルの方に向けて動向を確認しながら校舎へと走る。

結局吉井は、鉄人が注意に来るまでの間延々と馬乗りの体勢で痛め付けられ続けてた。

☆

★

☆

くナツルSideく

「さて、みんな分かっているとと思うが、もうそろそろ清涼祭の出し物を決定しなきゃならん」

吉井に適切な裁きを与えた後、ボールをぶつけられたところを治療するため、一度保健室に行った。吉井と。

デッドボール受けたバッターよりピッチャーの方が負傷箇所が多いって普通ないよね。

で、教室に戻ってきたら坂本が教壇に立っていた。

まあ場所はさつきとは別のグラウンドなんだけどね!

…そろそろ出るところ出た方がいい気がしてきた。



「学校行事である以上F<sup>う</sup>クラスも参加しなければいけない。…面倒だ  
がな」

クラス代表にあるまじきセリフだな…

「とりあえず今から議事進行並びに実行委員を…適当に決めておいて  
くれ」

そう言いながら坂本は教壇から自分の席に戻り、ダンボール箱に  
つつ伏せる。数秒後には寝息が聞こえてきた。

どうしよう…一応は生徒会の役員として、焼きを入れるべきだろう  
か？

吉井にだけで坂本に処罰を与えてないし、丁度いいといえど丁度い  
い。

「吉井君…大丈夫ですか？」

悩んでいると姫路の声が耳に入った。

見るといつの間にか自分の席についている吉井が、心配そうな表情  
の彼女に話しかけられていた。

顔をミイラ男のように包帯だらけだから無理もないかな。

「あつ、姫路さん。見た目は酷いけどこれぐらい平気だよ」

「そうか。じゃあもう二・三度シバいても大丈夫だな」

「ああつ！もうだめ死んじやう!!」

ゴキゴキと拳を鳴らしながら言ってみると、少し…いやかなり大げ  
さにのたうち回る。

こつちの方に転がってきたので足で思い切り踏みつけておく。

側頭部に硬球ぶつけられた恨みはこんなもんじゃねーぞ。

「おいナツル、クラスメイトとスキンシップを取ってる場合じゃない  
ぞ。文化祭の実行委員を決めない」と

自分の席に座ると、それを見計らったかのように直江が話しかけて  
きた。

その側で吉井がうつ伏せの状態で痛みを堪えているのは気にしない  
ことにする。

「出し物決めないとお前も困るだろ。生徒会役員の」

「じゃお前がやれよ実行委員。得意だろ」

危機感煽って仕切らせようとか考えてるんだらうけどそうはさせん。

面倒なのはみんな一緒ですから、残念！

「いや俺は…ほら、材料調達とかの方が得意だから」

「じゃあ裏方も兼任だな、はいけってーい。Fクラスの文化祭実行委員は直江大和君に決まりましたー」

はい拍手ー。と合いの手を促すと、クラス内の人間ほぼ全員が手を叩く。

ノリのいい子は好きさ。

「…藪へびだったな…貧乏くじを引いてしまった…」

「他人を利用しようとした報いだ。甘んじて受け入れろ」

苦々しげにため息を吐く直江に、しっしつと手を払う。

「ていうかホントに大丈夫なのか？出し物について言われたりしてるんじゃないか？」

「まあね」

瀬能君あなたのクラス、清涼祭に参加しないのかしら？

文句を言われない程度に業務をこなしているが、生徒会室に行くたびに必ず一度は<sup>糞</sup>に言われる。

もう耳にタコができちまったよ。

会長ですらチクリチクリと言ってくるんだから、超会長（※桐条美鶴）にはなに言われるか分からない。

そう思っただけに何度かある定時報告会には出席しないようにしている。

「それはそれでマズイんじゃない？」

「大丈夫だろ」

ろくに話したことはないけど、会長と同じでクールっぽい人だし俺程度がサボったところでどうこうするような奴じゃ——

ピンポンパンポンツ

『二年Fクラスの瀬能ナツル、二年Fクラスの瀬能ナツル、至急第一生徒会室に出頭しなさい。繰り返します。二年Fクラス瀬能ナツル、至急第一生徒会室に出頭しなさい』

校内放送で呼び出し来た。

しかもこの声本人（桐条美鶴）だ！

『瀬能、今お前がなにをしているかは知らないが、五分以内に来なかったら連続処刑してやる』  
ダブルジョパデー  
二重処罰の禁止はないんかい。

微塵も隠せてない（隠す気ない？）怒気と殺気に満ちた言葉を最後に、放送は終わった。

完つ全に怒ってたなあの人：定時報告毎回サボったくらいでここまでするかふつー？てか今日あつたつけ第一と第二の会合。

もう少し冷静な奴だと思ってたんだが：認識を改める必要があるな。

やれやれ、もつと大らかに生きろよ。俺みたいに。

「おいナツル：行かなくていいのか？」

「うん、行かなきゃヤバイね」

処刑されちゃう。

初めて食らった時は衝撃的だったな：アレ。超会長がどこからか銃っぽいもの取り出したと思ったら、いきなり全身氷漬けにされたから。

今更だがどうやったんだあれ。もしかしてあの銃ブレイズガン？

まあそれはいいとして。

「悪いけど抜けるわ。役割分担まで決める場合は裏方にでも割り振っててくれ」

「どっこいでも樂するなお前…」

しょうがないじゃないか。人間だもの。

## 2時間目 どっちかていうと守護霊獣に近いです

くナツルSideく

初夏の兆しがありありと感じられる強い陽射し。  
若干の熱気を帯びた生温い風。

「瀬能、なにか申し開きはあるか」

それらを全く無視した氷点下な眼差しが真っ直ぐに突き刺さる。  
選択肢を間違えたら物理的に突き刺さりそうだ。

「えつと：アハハーっ、ごつめーんねっ☆」

「ペンテレシアっ（パキイーン）」

——瞬時に視界が半透明なガラス色に染まり、身動きが取れなくなる。

僕と氷だらけの20xx年夏。

☆

★

☆

「いきなり氷漬けはどうかと思うんだ流石に」

数十分かけて解凍され、やっと身動きが出来るようになった。

うー寒っ。他人より体温高いとはいえこれは堪えるわ。

「この数週間どれだけ忙しかったと思ってる。それなのに全く手伝いに来なかった挙句、久々に顔を見せての第一声がアレなら仕方ないと思わんか？」

「ウィットに富んだジョークじゃねーすか、笑って流せよ」

あ、ダメだ。目尻が一層険しくなった。これ以上は危ない。また氷漬けにされちやう。

「そういえば先輩、なんか見ない顔の人がいるんですけど」

話題を変える意味合いを込めて、室内のことに目を向ける。

いやまあ、実際気にはなってたんだよね。

「そういうお前の方こそ、見たことのない人物を連れてきているようだが」  
そう言った超会長の視線の先には、タオルでゴシゴシと俺を摩る呂布子ちゃんの姿が。

多分体温を上げるのと濡れた身体を拭くのをいつぺんにしてるんだらう。健気な娘。

「彼女はムグっ…かのっ…グっ…ぶはっ、彼女はム…りよ…ふっ…りよ…おいつ、顔にタオル押し付けるな！」それも話してる最中に！

息もし辛いのでタオルを持つ手を掴んで止めるが、なぜ止められるのか分からないらしく不思議そうな雰囲気（顔は無表情）で俺を見つめる。

小首傾げんなや！腹立つだろが！

そんなやり取りを眺めていた桐条超会長がため息をついてかぶりを振る。

「…瀬能、仲がいいのはよく分かった。しかし部外者を、それも許可なく生徒会室に連れ込んでほしくはないんだが」

「いや、勝手について来るんですよ」マジで。

おはようからおやすみまでは流石と一緒に居ないけど、それに近いレベルで付きまとわれてる。

朝は我が家の門の前に（そーいやなんで住所を知ってるんだ？）何をするでもなくジツと佇んで俺が出てくるのを待ってるし、夜は就寝するまでべったり張り付いている。

初めて知った時は頬が引きつったよ。外聞悪いから朝起きた時は家に入れてるようにしてる。

夜の方は…時間になつたら九鬼の家の奴が迎えに来るんで、その時「今日は一日ご苦労だった」とか言ったら素直に帰ってくれるようになった。

これでもだいぶマシになった方だ…いちいち指摘しないとどこまでもついてくるからな。

前に一度、後ろにいるの気づかずにトイレ入って、用をたしてる時に気づいたときはもうホント…心臓止まるかと思っただわ。

従者気取ってるくせにちよいちよい俺を殺しにきてるぞこいつ(物理的社会的に)。頼むから風呂とかくらい一人にさせてくれ。

「綺麗な娘ネー、ナツルドコデ拾ッテキタデスカ？」

インディアンな南條副会長が話しかけてくる。どうでもいいけどこれからの季節暑くないのそれ？

「拾った…っか。街中で突っかかってきたから応戦したら、いつの間にか懐かれてた…ってとこかな」

「テレビゲームみたいな理由ですネ」

一花ちゃんの確うー！ただ倒してないのに勝手に仲間になったんだだけだね。

あれだな。初登場イベント終了後にパーティに加わるけど、普通の戦闘には参加させられない・イベント戦闘には出るけど操作できないNPCみたいなポジションだな。

正式にパーティに加入して自由に使えるイベントはいつ起きるんだろうな。

「でもこんな綺麗な人を連れて歩いて、騒動とかなかったんですか？」  
「あつたよ」むちゃくちゃあつたよ。

ちよつと、騒動じゃ片付けられないほどのいざこざがあつたよ。しかもそこだけで終わらず後々まで尾を引くタイプの騒動があつたよ。

具体的に説明する前に、呂布子ちゃんの恰好について触れておこう。

といつても、学園の生徒なんだから当然制服だ。まあかなり改造されてるけどね。

下は膝上何cm？って言いたいくらい超ミニスカートだし(でもスカートの中は見えない)、上は…夏近いからかブレザーはないが、袖が半端なく長い。白衣みたいだぞ。

そして襟元がなんか…宇宙服みたいにとんがってて、口元がよく見

えん。ヘルメットでも装着すんの？

見ようによつては制服の下に首輪をつけているようにも見えないため、学園では今『二年の瀬能は女の子に飼う犬を強要している』ともつぱら噂になっている。

頗る心外だ。

俺は猫派なんだよ!!じゃなかった。恰好もついてくるのも本人が勝手にしてるのに、俺の印象に悪すぎる批評だ。

おかげで間に受けた馬鹿が何人も決闘仕掛けてきて正直ウザい。勝つと食券<sup>フアイトマネー</sup>貰えるからいい小遣い稼ぎにはなるけどやっぱウザい。

こんな噂を流した奴(＝発信源)は、お礼も込めて血祭りにあげてやろう。今月の俺の目標だ。



休み時間 ある日を境にFクラスの机がサビ出した  
ワケ

くナツルSideく

「お前ホントについて来んの?」

ある朝の学園への通り道。なぜか俺の斜め後方を歩きたがる呂布  
子ちゃんに尋ねる。

「(こくり) ……行く」

「目的地が一緒なら与一たちと行きやあよかったのに、なんでわざわざ  
ぎ俺んち回って行くかね」

「……………いっしょ」

「一緒って…まあ百歩譲って通学を合わせるのはいいとしよう。ただ  
家の前に待機するのはやめてくれんか?」

「(ふるふる) ……やだ」

言葉足らずではあるが、そこには明確な強い意志があった。こいつ  
はなにがあらうとも絶対に引かないだろうと思えるほどの意志が。

ここで使うなやと率直に思う。…まあいいや。

「そういえばお前、学年とクラスは?」

「……………二年、Sクラス」

「…俺Fクラスなんだけど」

「……………変えてくる」

「待て待て待て待って待って待ってお願いだからマジで待って!!」その握り  
拳でなにをどう代えるつもりだ!

急に歩くスピードを上げた呂布の腕を掴んで引き止めるが、全く意  
図した様子もなく平然と引きずられる。

力つええよバカ!軽く…いやかなりシヨックだ。

「個人の都合で編入先を変えることなんてできるわけねえだろっ!」

「……………」

「ゴフツ、だ…だからその捨てられた小動物みたいな眼差しは止めろ  
と…!」

俺は萌えでダメージ受けるんだよ。

なんてバカなやり取りをしてる間に学園に到着した。

クラス云々については、郷に入っては郷に従えということでもSクラスで真面目に授業を受けるように納得させた。不満ありありなオーラ出して睨んできたけど。

その代わりというわけではないが、休み時間とかは好きにさせとく。この辺で妥協しないと後が怖いからな。

いつも通り校門を通り抜け、靴箱に…向かわずグラウンドの方へ歩いていく。

「…?…靴は?」

「んあ?ああ、そういやお前初めてだっけ。2—Fは教室外なんだよ」

「…変」

「俺もそう思う」

「…雨の日はどうするの?」

「知らん」 幸か不幸かまだ一度も降ってないからな。

☆

★

☆

ゴザとみかん箱、それにホワイトボードだけの教室(?)に足を踏み入れる。

「はよーす」

「あ、タイガ!おはよ…う…」

「ナツル、今日は来た…んだ…」

「昨日は学校サボってなに…を…」

自分から話しかけてきたくせに、俺の姿を…正確には俺の後ろに控えている奴を見て、固まるワン子<sup>三</sup>・吉井<sup>人</sup>・直江。

無視して適当な席に着く。

ゴザの上にあぐらをかけば、呂布子ちゃんが持っていた俺のカバン(家を出た途端奪い取られた)を差し出す。

「ありがとよ」

「……」

ぶつちやけ持ってもらわなければならないんだが…まあいいや。カバンを渡した後は当然のように隣に座る。正座で。

……ちやんとホームルーム前に自分のクラスに行くんだらうなこいつ…不安だ。

まあいいや。今日の一限目なんだったつけ？

「いやいやいやいやナツル、無理があるぞ流石に」

直江が無理矢理視界に入りこんできた。

見ないようにしてたのに…

「誰だよその隣の奴」

「あ？あー…」めんどくせえな。なんて説明しよう。

………どうボケてもうるさそうだな。正直に話すか。

「武士道プランってあるじゃん？あれで生まれたクローンの一人だよ」

「武士道プラン…ていうと義経たちの仲間か。誰の偉人のクローンなんだ？」

「呂布。」「……？」いや、お前を呼んだわけじゃないから」

なんでこの流れで自分が呼ばれたと思うんだよ。

「呂布!?三国志最強の武将じゃないか!なんでそんなの従え…いや、ナツルなら納得か」

「なんでやねんな…」どういう意味だろう。

「前々世が董卓だからな」

「なんでやねんな」

どういう意味だろう。

なんで前々世?生まれる前の前が董卓なら前世はなんだったんだ俺?

後で訊いたら「織田信長」って言われた。照れる。

「そんなことどうでもいいんだよ!それよりっ、どうしてそんな美人連れてんだどうやって知り合ったどんな魔法使ったんだよおー!!教

えろよナツルー！」

「うるせーよ島津！」この万年発情ゴリラが!!

少し前から本名で呼ぶようになったから(昔は冴島だった)こっちも呼び方変えてやったが…調子に乗ってんなこいつ。シメるか？

そんな風に思いながら、暑苦しくつめ寄ってくる男を煩わしく見つめていると。

「……駄目」

「へ？」

ヴオウンッ

一瞬間の抜けた表情を浮かべたかと思いきや、その姿が急に消える。

ふと空を見上げてみれば、間の抜けた顔のまま逆さまに宙を飛ぶゴリ…島津の姿が。

おー飛ぶ飛ぶ。まるでロケットのように——って飛びすぎじゃね？目測だが校舎越えたぞ。

「うおおおおおつ——!?!」

『がっ、ガクトー!?!』

「へっ、きたねえ花火だぜ」

「まだ爆せてねえよ！」

まだ？木っ端四散する予定でもあんのあいつ？

まああの体勢であの高さから落ちたら頭がパンするかもね。

脳内で学園の地図を引き出し、おおよその島津の落下地点を照らし合わせると…：屋外プールに落ちるな。

ならいつか。ほつといて。

むしろ問題なのは——

「……………」

どこことなく誇らしげな雰囲気で俺を見つめてくる呂布子だ。

これはアレか、小動物が飼い主によくやる「頑張ったでしょ褒めて褒めて！」的なアピールなのか。

正直さっきのは褒めるどころか叱るべき行為なんだが。

誰か近寄るたびに無双投げされ続けたら、あつという間にボツチに

なってしまう。

「……………」

ただなあ…こっちの葛藤を微塵も感じた様子がない、無邪気な瞳に見つめられると…こう…恐怖が湧いてくる。

仕方ないので頭をぐしぐしと撫でてやる。

「……………（／／／）」

褐色の肌をほんのり紅く染めて、襟首に顔を深く埋める。  
照れてんのか？ハッハッハッ愛い奴よのう。

『うがああああああつっつ!!』

「!?!」

いきなり奇声が上がリ、思わず身をすくめる。

「リア充ぶりやがって…！瀨能のくせに…瀨能のくせに!!」

「ヤっちやう？ヤっちやう？ていかもう殺ヤっちやうよ？」

「憎い憎い憎い憎い憎い憎いニクイニクイニクイニクイニクニクニクニクニクニクニクニク——」

「ひいいっ!?!」気がつけば周りがカルト集団に！

さつきまでは普通の教室（？）風景だったはずなのに、今は頭からすっぽりと被る黒ローブだらけのサイレントヒルな裏世界！

お前ら暑くねえのか?!じゃない、少し意識を外していた間にいったいなになが!?!

「覚悟はいいな瀨能お…!」

「いや、ちよつ、まつ…俺がなにをした!?!」

「黙れ!!FFF団団長の名の下、俺が直々に鉄槌をくれてやる。歯を食いしばれ—」

言うが早いか、黒ローブの男（声で判断）が拳を振り上げ、猛スピードで突進してくる。

意外に速い!?!

「うおおおおお！喰らえ、俺の怒りと憎しみと嫉妬のいちげ——」  
「……………駄目」

「ぶげらっ!!」

『すつ、須川ローラー!?』

拳が俺を捉えようとした瞬間、黒ローブの男（須川か?）が先ほどの島津と同じく宙を舞う。

…きたねえ花火だ。

「ちくしように、よくも会長を…瀬能許すまじ!」

「いや、今の俺じゃねえし」

「許さねえ…許さねえぞ! 瀬能ローラー!!」

聞けよ。

「……駄目」

「ぐびどっ!」

「横溝ー!!くそッ、おのれ瀬能!」

「……駄目」

「じえ”ーん”っ!」

「福村ローラー!!チキシヨウ、瀬能貴様!」

「……駄目」

「ばざる”どっ!!」

「工藤ローラー!!うおおお瀬能ローラー!お前の血は何色だあローラー!!」

以下、似たようなやり取りの繰り返し。

もう一度訊くがこれって俺のせいかな?指一本触れてないんだけど。

全部呂布子ちゃんがやってるから。

おー、また一つ黒ローブが飛んでいく…同色を三つ揃えると空に打ち上がるっていうパズルゲームが昔あったな。

「おはようございま——てええ?!なっ、なにやってるんですか皆さん!?!」

最後の一人が投げ飛ばされるのを見送っていると、小走りに近づいてくる人物が一人。

我がクラスの数少ない良心（最近はずっとアレに染まりつつあるけど）である、姫路だ。

「おう姫路。おはようさん」

「あ、おはようございます…じゃないですよっ!なんなんですか瀬能

さん!？」

なんなのって…なにが?この状況?

んなもん俺だって知らんわ。

「本人に訊くのが一番だな。おーい、呂布ちゃんやーい」

向かってくる奴がいなくなつたからか、どこか虚空を見つめてポーンとしていた彼女に話しかける。

俺の呼び声に反応して、すぐにとてとてと近寄ってきた。

こういうちよつとした言うことは聞いてくれるんだよなあ…

「……なに」

「あのさ、なんで俺に向かってくる奴を投げ飛ばしたりしたんだ?」

「…?…護る、当然」

「ごめん、君の常識よく分かんないや。」

「別に護ってもらわなくて結構なんだが。自分の身は自分で守れるし」

「……反応できてなかった」

「あ?…さっきの一撃か?」須川(仮)とかいう奴の。

「あれは…俺だって人間だからな。油断くらいするさ」しなかったらむしろマズい。常に気を張るとか早死にしそうだ。

「つーか、たとえ油断して食らつたとしてもだ。」氣も使えない、格闘もろくにしたことないだろう奴の拳だぞ?せいぜい痛い程度で痣ができるかどうかってのくらい、どうってこと——」

「…駄目」

むぎゅっ

「怪我するの、駄目」

意識をする間もなく、頭を呂布ちゃんの両腕で抱き抱えるように押え付けられる。

…うわーい。ふかふかでむにむにで…すっごいいい匂いするー  
…

「あの瀬能さん…大丈夫ですか?顔が真っ赤ですよ…?」

「人肌って温度高いよね」俺ってばとくに体温高いから。暑くてしよ

うがないよ。

「とうわけでそろそろ離してくれないかなセニヨリータオーバーヒート熱暴走しちゃうから」

「いきなり早口になったな。動揺してるからか？」

黙れ尻フエチ。

「……やだ」

「やだ!? 駄目じゃなくてやだ!? 我が儘じゃねーかなんで!?!」

「……くせになる」

くせ?…癖?なにが?

もしかして抱き心地?なんか昔、モモさんも似たようなこと言ってたような気がする。全然嬉しくない。

あの人と違って絞め落とししてくる気配がないから変な心配しなくていいが、邪気のかけらも感じられないから罪悪感ハンパない。俺がやってるわけでも、強制してるわけでもないけど、すごいいけないことしてる気がする!

あとふつうに恥ずかしい。

「いいからはなせよ! 女の子のおっぱいは正義なんだから、悪道外道を地でいく俺はきえちやうだろ!!」

「タイガなに言ってるの?」

「普段全くないシチュエーションに相当混乱してるんだろう。マンガみたいに目をぐるぐる回してるぞ」

「消えるっていうか、死にそうだね」

「…! 死んじゃう、駄目っ」

椎名のつぶやきに反応して、呂布の抱きしめる腕にいつそう力がはいる。

むぶぶ…! 顔面をおっぱいにおしつけられて息が…! 死期がちかづいてるのをひしひしと感じる。

「ぶ…! ……ぶはっ! 殺す気か!? いいかげんはなs——ひいつ! いつの間にか辺りが薄暗く赤錆びた裏世界に!!」

いつの間にか戻ってきたクラスメイト——黒いローブを頭から



すっぽり被ってる奴らを級友と認めたくないけど——たちが、一人残らず全身をぐっしより湿らせて俺たちを取り囲んでいた。

その身体からは地獄の瘴気のような黒いオーラを煙のように撒き散らして……なんでダンボールの机が錆びるんだ!?

「おっ、お前らいつからいたんだ……?」

『……………』

「おい、なんか言えよ。さっきの元気はどうした」

『……………』

「喋れよなんか!無言やめろ!!」怖いよ!

結局、ホームルーム開始のチャイムが鳴って呂布ちゃんが自分の教室に戻るまで……いや戻っても、奴らが口をきくことはなかった。

流石に、やって来た担任鉄人に注意された時にローブは脱いだが、隙あらば俺を憎しみの籠った眼で見ってくる。物理(力)じゃ叶わないから精神的に訴える方向に切り替えたようだ。

辛い。

ちなみに異界化については、今だに解けていない。

そのうちクリーチャーでも生まれそうだ。ツライ。

### 3時間目 どっかで見たような油断できない人

「それで、その見たことない奴はいったい誰なんだ？」

呂布ちゃんの話がひと段落したところで、別のところに目と話を向ける。

その人物は、俺が来た時から今までずっとノートパソコンと向き合っている。氷漬けにされた時も微動だにしなかった。

見たところ三年生みたいだな：腕章を付けてるからきちんとした生徒会役員みたいだが、本当に見た事ない。

もともと所属してたけど会う機会がなかっただけか？

「彼女は阿久津の後任で入ってもらった人材だ。名前は：おい、いい加減パソコンを見るのをやめないか」

「：ああ、すみません。南條千紗ちさです」

超会長に注意された人物は、そこでようやく顔を上げてこちらに注目する。

茶髪で眼鏡をかけていて：知的な印象を受ける女だ。

でもなぜだろう。この人を絶対に信じることができない。

頼ることも任すこともできるだろうけど、心の内をさらけ出すのは危険だと俺の本能が警告している。

「あなたが瀬能さんですか。お噂は予々」

「はあ」どんな噂だろう。

「生徒会など面倒なのでやりたくはないのですが、美鶴様と虎子様に命令：いえ頼まれてはいやとも言えないので、仕方なく会計の仕事を担当させていただいてます。これからどうぞよろしく」

「うおおおおいっ!」

なにこのよろしくし辛い自己紹介!?

「いいの!?!そんなこと言っちゃって：いいの!?!」思わず超会長をチラ見。

「事実ですから」

あ、超会長またため息ついた。

「仕事は早いしミスもないのだが、いかんせんこんな性格でな…」

「三度の食事も好きですが、貯金を増やすのも大好きです」  
「ぶつちやけすぎだろ！」

南條さんがさつきまで弄つてたノーパソを覗いてみれば、でっかい折れ線グラフや複数の企業の名前と数字が書かれているページが開かれていた。

…株式市場？

「学校でデイトレードしてるんすか？」

「いけませんか？」

堂々と訊き返された。

「我が校の規則に『学園内で株の取り引き禁止』とはありません」

「…そうだな」（↑美鶴）

普通ねえよそんな規則。

「…ん？先輩今南條って言いませんでした？」自己紹介で。

「それってもしかして…」

「南條・M・虎子様とは、親族関係です」

ああ、やつぱり…って様付け？

「虎子様はこう見えて、世界でも有数の名家『南条家』の次期当主です。そうは見えませんが」

「ハッハッハッ！苦シユウナイネ！」

使いどころ間違つてんぞそれ。

あとこの会計ちよいちよい失礼。

「苗字違くないすか」

「成人するまでは南条の姓を名乗ってはいけないしきたりなのです」

「ややこしっ」

「私もそう思います」

「ていうか、…アレが次のトップって…」

思わずインディアンな羽根飾り頭に付けた女子生徒を見る。

なにやら鼻歌を口ずさみながら紙にラクガキしてた。

南条家終わったな。

「将来的には私がサポートすることが決まっています。現当主である虎子様のお父様の命令で」

「まあそりゃ不安はあるわな……」

仕事してるとこ見た事ないけど、書類仕事とかできんの？

前なんか……農産部（牛や羊等の家畜や野菜類を育てる部活）の視察行った時、兎と会話しながら草食ってた。

（人）外交なら安心して任せられそうだな。

まあ……支える人材がいるんなら大丈夫……だろう。

「……当主補佐……実質全権を握る者……給金を貰いながらお金儲けができるって素敵……」

なんか小声でぶつぶつ言ってるけど聞かなかったことにしよう。

#### 4時間目 トラウマって作るもんだろ？

「そーいやさつき副会長と超会長に頼まれたら〜とか言ってたけど、超会長ってそんな偉いのか？」

何気ない口調で尋ねたら、この場にいる八割程が信じられないような表情で見てきた。

「…その超会長というのは、もしかして私のことか？」

残り二割の内の一人、桐条先輩が怪訝な表情で口を開く。

ちなみにもう一人はインディアンな方の南條先輩。さつきからずっとラクガキしてるけど何描いてんの？

「そーだけど」

「瀬能さんはセンスがないですね」

黙れ眼鏡。黒く塗り潰すぞ。

「というか、本当にご存知ないんですか？」

「なにを」

「…桐条グループとは南條グループと分家の関係を持つ世界有数の名家です。美鶴様はその一族の末裔。つまり次期当主です」

「へー」偉そうな人とは思ってたけど、実際偉い人だったんだな。

「…ナツルさん、反応が薄くないですか？」

「自分九鬼家の長女ガチで殴りつけたことあるんで」

「…世界でもトップクラスの有力財閥じゃないですか！なにしてるんですか瀬能さん!?!」

一花の疑問に答えたら、眼鏡さんが食いついた。

「そんな名家の令嬢と知り合いなんて…いったい何者なんですか、あなた」

「令嬢って…」いやまあその通りなんだろうけどさ。

初っ端インパクトを思い出すとどうしてもイメージができないんだが…

登校しようとか家を出れば、なんの前触れもなく道路の真ん中で腕を組みながら仁王立ちしてて、いきなり「貴様が瀬能ナツルか、我は九鬼揚羽。立ち合いを所望する！」とか抜かしてきた。

あれを令嬢と認めたら俺の中の令嬢のイメージが四散する。

「まあ色々あるんだよ」

「色々、ですか」

そう色々。

できれば触れんとして。

ついでに言うとな俺の背後に控えてる長身の女の子はもろ九鬼家の関係者なんだが…この人にそれを教えるのは危険な気がする。黙ってこう。

「そういや第一生徒会ってこれで全員なんすか？」

ふと気になったので超会長に尋ねる。

「そうだがそれがどうした？」

「いや、少ないなと思って」

三年って全体で三百そこらだろ？人数。

たった三人でどうにかなるもんなのか？

「優秀な人材というのはどうにも引つ張りだこでな。私が初めに声をかけた千紗以外はいいい返事をもらえなかったのだ」

「あくなるほど。つまり」

きりじようせんぱいは、ともだちがいなくてことですね。

——ピシッ

無邪気ともいえる何気ない一言に、室内が凍りついた。（※悪意には満ちている）

文化祭の準備をしているのであろう、外の微かな喧騒が室内に響く。

「……なぜ、そうなるのだ？」

数十秒後、桐条先輩が（↑超会長呼び飽きた）口を開く。

「いや、あれから結構時間経ってるのに加入したのが身内一人じゃないですか。だからそうなのかなーって」

「有能な知り合いに声はかけたと言っただろう」

「じゃプライベートで電話使ったのはいつが最後ですか？ 仕事関係は一切抜きで」

俺の一言でまたしても静寂が訪れる。

しかし先ほどとは違い、桐条先輩だけが「ええと…」や「たしか…」だの小声でつぶやき悩んでいる。

そんな記憶を掘り下げなきゃならんようなことか？

「…ごめん」

「あつ、謝るなつ！ちよつと…思い出せなかつただけだ！」

うん…ホントごめん。

初めて出会ってから今日まで見たことがない、本気で焦っている姿を見ると罪悪感が途轍もなく湧き出てくる。

他の連中も気まずそうに顔を背けている。本当に申し訳ない。

「そつ…そういう瀬能、お前はどうかんだつ。プライベートで電話をかける知り合いがいるのかつ」

「この前の休みに遊びに誘われましたが」

——三度、みたび室内に静寂が訪れる。

「なんで!？」

「瀬能君あなた…その知り合いは本当に現実に存在するの？」

「いるわボケエ！」失礼だな三郷あんた！

妄想じゃないから！ちゃんと直江に電話貰ってゲーセンやボーリング風間ファミリーの奴らと一緒に行ったから！

「という夢を見たんですね」

「現実だつっつてんだろ!!」一花まで失礼だなオイ！先輩に対する態度じゃねえよ！

「まさか…あの」瀬能ナツルと一緒に遊びに行けるだけの知り合いがいるなんて…!」

「瀬能ナツル…つい数日前までは『エレガンテ・クアットロ』の一員

だったが、今は辛うじてイケメンランキングに名前を連ねる程度。学園での主な評価は『見た目詐欺』『思ってたのと違った』『わりと残念』『鬼畜』『悪魔』『流石は常識を問われたくない男No. 1』『人よりも獣に近い』などと多岐に渡り、教師・生徒関係なく全員が認める学園一の問題児」

「バカな…、この瀬能にすらいるというのに…!!?」

キ・レ・ちゃ・おっ・か・な〜? 流石に〜?

驚愕の表情を浮かべるチョー、冷静にパソコンでデータを読み上げるメガネ、心の底から狼狽している様子の桐条先輩。

いかに俺が温厚と言っても、これはちよつとあんまりだ。限度がある。

思わず額に青筋が浮かび、身体全体に力が入り、そのせいで全身がわなわなと細かく震える。

ていうかみんな失礼すぎじゃね? とくに桐条さん。どんだけショック受けてんだよ。

なんで俺ろくに話したことない奴らから寄つてたかつて貶されてんの?

腹立ってきたななんか。

「…そんな学園一の問題児以下の交友関係の先輩はこれから先も灰色の青春を過ごして社会人になっていくんですね」

「うっ」

「想像してください…」

誰もいない、深夜のオフィス。

たった一人、書類のチェックのためだけに会社に残って残業中。

同僚や部下は定時に上がり、みんな楽しんでそうに仲良く飲みに行つた。



…そこでため息まじりに一言、

「『…なにをしてるんだろうな、私は…』」 c v. 田中理恵

「うあつ…うああああああああああつ!!」

桐条先輩が頭を抱えて絶叫し出した。

それを見て（珍しく）慌てた様子で宥めに走る三郷<sup>会長</sup>。

「会長、会長落ち着いてくださいっ、今のは全部瀬能君の妄想ですっ」  
ヒドいなオイ。

「人が想像できることは人が必ず実現できる。 b y ジューヌ・ヴェ  
ルヌ」

「うああああああああああああああああつ!!」

「瀬能君!」

怒られた。理不尽。

5時間目 会議って眠くなるよね。でもこんな気遣いはいらぬ。

「会長さんもあんな風に取り乱したりするんですね…」

「ちよつと…かわいそうに見えてきましたわ」

チヨと一花が、これ以上ないってくらいにパニック状態の桐条先輩を気の毒そうに見つめる。

そんな珍しいのか…じゃあいい機会だから、もう少し追撃しよう。

「瀬能君、なにを考へてるのか知らないけど、バカなマネは止めなさい」

「言われなき誹謗中傷」今日は”酷い”の大安売りや。

「俺はただチャンスだからトドメを刺そうと思っただけだ」

「立派な『バカなマネ』じゃないの」

「よくもまあ誹謗中傷とかぬけぬけと…」

「瀬能さんゲスすぎですよ…」

酷くね？とくに一花。

先輩に向かつてゲスとか…ありがとうございますっ！

「……………」

む、マズい。会長の睨む眼がキツくなった。より具体的に言うとう尻が上がった。

これ以上は危険だな…かといってこの空気をそのままにしておくのもヤバイ。

ここはふざけてごまかそう。

「ンもー、会長さんたら、そんなに怒っちゃイヤクマ、キュートな顔が台無しよー？」

ほおら、笑って笑って！」c.v. 山口勝平

「その不快な口調を今すぐヤメ口腹立たしい…！」

うえー!? 赤い方の会長さん釣れたー!!?

さつきまで蹲るように頭抱えてたのに、今はどこから出したのか、よく手入れのされたレイピアの切っ先を俺に突きつけてくる。

流石は名家のお嬢様。いい武器使ってやがるぜ。

素材といい鋭さといい、鉄板ぐらいなら簡単に貫けそうだ。

「んんっ、あー…オーケイ、分かった。俺が悪かった話し合おう。だからそのアブねー」モン”の切っ先を向けるのをヤメロ」c.v. 東地宏樹

「処刑だっ!!」ビュッ!

「だっぶなッ!?!」

コイツ本気で刺しにきやがった!!

「処刑処刑処刑処刑、処刑だーーーーー!!」

「ドゥおおおおおおおっ!!?!」

息もつかせぬ連続突きーーーー!!疾風怒涛とはこのことか!

ぶっちやけクリスより速いんですけど!?!

「さて、ふざけるのもこの辺にしておくとして、そろそろ会議を始めますか」

「了解です」

「異論はありませんわ」

「あたし議事録書きますね」

「ちよオオイ…ここに絶賛追いかけられ中の人がいるんですけど!?!」

そしてそれと同時に追いかける中の人もいる。俺の真後ろに。

なにこれトムとジェリー? 仲良くケンカしてないよ?

「はあッ!!」

「ぬをっ!?!」

ちよっ! 今一瞬で二度突きを繰り出したんですけどこの人! ホントに一般人!?

この学園の女、容姿に比例して武力高すぎじゃない!?

容姿: はっ、そうだ、呂布ちゃん! 彼女なら助け——ダメだ、餌付けされてやがる。

なにしてんのお前なにしてんのおまえええっ!?! 主(ばい扱いしてる

奴)の危機だぞ!?なにほのぼのとインディアンと菓子食ってんだオイ!

つかそもそもこっちに気づいた様子がねえ!マジ使えねえしこのポン子こツ従者(もどき)!!

「今回の議題は前回同様、すぐそこにまで差し迫った『清涼祭』についてです」

「ちよっ、ホントにこのままやるのか?」赤毛の怖い人がレイピアの切っ先で急所狙ってるんですけど。

「準備期間もあと僅かですが、なにか問題とかはありましたか?」

無視!?

「そういえば一年のCクラスが三年生に、決闘で負けて使用場所を取られたって泣きついてきたんですけど…」

「その件は双方同意の下、正式に受理されているので不当性はありませんね。代理を立てることも決闘を受けないこともしていませんし、陳情を期待されても困ります」

「部活の先輩で断れなかつたって、言っていました」

「諦めてもらうほかありませんね」

「セイツ!!」ビュツ!↑二連突き

「無駄アツ!!」パンツ!↑白刃取り

「次は…体育館や武道場を使った大型イベントですね。主なものとしては学園主催の二人一組で行う試験召喚獣を使った勝ち上がりトーナメント、『召喚大会』。複数の運動部合同開催の『力自慢コンテスト』。過去に行われ、せっかくだからと復活した男子が女装して美しさを競う『ミス?・コン』」

「あ、軽音部や合唱部がやる音楽の出し物の『バンドオーケストラ』。あたしの友達も出るんですよ。よかつたら皆さん見に来てくださいねっ」

「ふふっ、ちやつかりしてますわね一花は」

「むうっ…！やるな、瀬能！」

「だてに総合九位にやいませんからね…！ 無刀転生！」  
「うわっ!？」

レイピアを両手で挟んだまま、背負い投げの容量で桐条先輩を投げ飛ばす。

投げた際に先輩が武器から手を離したので、これ幸いとイベントリに放り込む。高そうな突剣、ゲットだぜ！

「終わりましたね。そういえば会長、生徒会の人間で誰か召喚大会に出すようにと顧問から言われてましたけど、いかがいたしましたしょう」  
「はあはあ…ああ、それならもう決まっている」

桐条先輩が多少なりとも乱れた呼吸を正して、室内全てを見渡し口を開いた。

「当日の大会に出場するのは三郷と瀬能だ」

「…はい？」

なにそれ。

なんか聞いたことない案件が飛び出したぞ？聞き間違いか？

「会長が出るんじゃないんですか？」

「当日はお父様が見物に来るのでな。その時間帯私は付き添いをする  
ことになっている。瀬能、必ず優勝しろとは言わないが、せめて一般  
の観客に公開される三回戦までは勝ち上がれ」

「聞き間違いじゃなかった！」なんで俺指名で命令すんの？

「三郷<sup>会長</sup>が出るのは分かるがなんでパートナーが俺なんだよ！南條先輩  
らでもいいじゃないすか！」

「公平性を保つために同学年の生徒としか組めませんので。…：面倒  
ですし」

リアルでクラス格差がある学校で公平もクソもないと思うんです  
けど。あとほろっと本音飛び出したな？

「じゃチョーとか…」

「三郷会長に勝てるあなたを差し置いて立候補するほど、私わたくし自信家  
ではありませんわ。所詮はしがない一般市民一般市民ですから」

それ言ったら俺なんかFクラスなんだけど。

「じゃあ…えつと…そうだ、呂布ちゃん！彼女なら同じSクラスだし  
——」

「生徒会の役員じゃないものに任せられるわけがないだろう。いい加減にしろ！命令だ、三郷と一緒に召喚大会に出場しろ！さもなくてば処刑だ！」

有無を言わせぬ気迫で怒鳴られる。

「それとお前のクラス、まだ出し物の企画書を提出してないだろう。  
さっさと出せ」

しかも追撃まで。

「あと私のレイピアを返せ！」

忘れてなかったか。

~~~~~

・学園の廊下

「チクショウ…面倒なのを押し付けられてしまったぜ…」

「……がんばる」

「しかも清涼祭当日は役員全員見回りとか…祭は三日やるんだぞ？前
半二日が試召大会と巡回って、文化祭を楽しむどころかクラスの出し
物にすら参加出来ねえじゃねえか」

「……がんばる」

「おまけに手に入れたレイピアも没収されたし…いいことなんもね
え」

「……がんばる」

「さつきからそればつかだな。正直イラツとするからやめて？ろくに
助けてくれないくせに、ダメな方に優秀だなお前」

「……人間らしい?」

「その返し腹立つ」

「……それに。大丈夫そうだった」

「まあ……あの程度なら……怒りで我を忘れてたのか手加減してたのか知らんが、本気じゃなかったからな。不可視の氷結^魁攻撃^刑使われたらその時点で勝負ありだし……てか気づいてたんなら止めろよ! フリでもいいからさー!」

「……信じてた」

「過去形!? そんな信頼いらない!……つたく、俺の周りにはこんなんばつかか!」

「……類は、友を呼ぶ」

「……否定できないのがつらい」

タツタツタツタツ ↑ 進行方向から走り寄ってくる音

「……あつ、ナツルくん! さようなら!」

「はーい、さようなら」

…ピタつ ↑ ナツル、立ち止まり後ろを振り返る

「善、ぜーんー! 忘れ物あったー!」

「そうか。よかったな」

「……あんなやつ学園にいたっけ」

「……? ……制服、着てる」

「まあそうなんだが……」

「……名前、知ってた」

「俺ってば有名人らしいからな。ま、800人? だっけ? そんなぐらいいれば知らない顔がいてもおかしくないか」

「(こくり) ……ない」

「それより文化祭だなー、生徒会の業務やりながら間見つけてクラスの出し物手伝わねーと。普通逆じゃね? いや、普通の奴は生徒会業務やんねえけど。つーか呂布ちゃん、お前はちゃんと自分のクラス手伝いに行けよ?」

「……………」

「ごっち向け目をそらすな」

「文化祭、楽しみだね！善！」

「ああ。…そうだな、玲」

6時間目 クラスメイトが異常だと再確認させられた瞬間

〃〃吉井Side〃〃

清涼祭当日。

この行事の売り上げで教室の設備を向上させる事ができると知った僕たちFクラスは、いつものやる気のなさを忘れさせるくらい張り切って準備を頑張った。

さらにはこの期間中に催される『召喚大会』に優勝すれば、Sクラスまでとは言わないけど、Dクラス並に整った教室を用意することをババア：じゃなかった、学園長に約束させた。

清涼祭の出し物と召喚大会：どちらか片方でも失敗すると、姫路さんが転校させられてしまう。絶対に成功させないと…！

そんな風に決意を固める僕と、気合いを入れるFクラスの面々。

「……………」

そんな中一人だけ、机に突っ伏して死んでいるナツル。

「ってなんで死んでるの君?!」

「タイガーーーーー!!?」

始め…いや、始まる前から前途多難な予感がする。

☆

★

☆

様子に気づいた川神さんが慌てて駆け寄る。

「うむ？瀬能はどうしたのじゃ?」

「今川神さんの悲鳴が…えっ?瀬能さん?」

騒ぎに気付いた秀吉と姫路さんが近づいてくる。

「タイガ大丈夫!?!しっかりして!」

ナツルは肩を掴まれて、ガクガクと勢いよく頭を揺すられる。すると虚ろだった目に光が戻る。

「う……あ……ここは……うつ、……なんだ……気持ちわりい……」
それはきつと揺さぶられたからだね。

「どうしたんですか瀬能さん、かなり疲れてるみたいですけど……」

「……激務が……」

激務って……ああ、そういうや君生徒会役員だっけ。どうりで最近見ないと思った。

「室内にいれば書類整理、廊下を歩けば厄介が起きたと駆り出される……誰だ、トイレの中だけは安息の地みたいと言った奴……!」

「たっ、大変なんですわね……」

再び机に突っ伏したナツルから黒いオーラが……! いったいトイレでなにがあつたんだろう。

「俺このまま休めるなら一生働かなくていいやあ……」

「タイガそれただの駄目な人だよ……」

「ごもつとも。」

普段からやる気がある奴じゃあないけど、今のナツルはいつも以上にやる気が見られない。

ていうかなんか正直抜け殻っぽい。

周りがテンション高いからすごい目立つ。どうにかして復活させないと……頼みごともし辛いし。

「えつと……そ……それにしてもさ、よくこの教室押さえることできたよね」

とりあえず話題を変えることにする。

「うむ……確かにのう、むしろFクラスは自前の教室がないから、外でやるものだとばかり思っておったが……どうやって二部屋も確保したのかの?」

これは何気に結構気になってたことだ。

清涼祭の出し物が決まった次の日にはもう、直江くんが当日使う教室を確保していた。

しかも召喚大会を行う体育館や武道場からあまり離れていない、つ

まり人通りが多い場所に位置している。

飲食店をやるにはなかなかいい立地だ。ホントどうやったんだらう。

「この教室ならあれだ。もともと1―Cが使う予定だったんだが、3年が決闘で勝って使用権を得たんだよ。それを俺が決闘吹っかけてぶん取った」

「なにやってんの君」割と力技だった。

「後々問題にならないかろう？」

「しかたないんだ：気づいたら直江が決闘申し込んでたから。それにほら、裏方で活躍する的事なこと言っちゃったし、頼まれたら断れないじゃん？」

いや知らないけど。

「タイガ：相手の人全治1ヶ月の怪我したって大和から聞いたけど」

「けしてふだんのイライラがばくはつしたわけではありません」

「棒読みではないか…」

ありがたいんだけど素直に喜べないのはなんでだろう…。

「そーいや聞いてなかったんだが、結局うちのクラスってなにやるんだ？」

「え？瀬能さん、クラスの出し物知らないんですか？」

なんで自分が所属してるクラスの出し物知らないの？

「仕方ねーだろ、生徒会の業務が忙しかったんだから。裏方仕事も直江に言われるままに物作ってただけだしな」

「この机とイス、全部タイガが作ったのよ？」

「え、全部？」

あらためて教室内を見渡す。

机：6つ。この他にも別室に2つあり、合計8つ。

椅子：1つの机に4個。別室にも10個ほどあり、合計で34個。

「え、…えっ嘘。ホントに？なんか、お店で売ってそうな出来栄えなんだけど!？」

「上に掛けられてるテーブルクロスとかはノータッチだけどな」

「それはわしが演劇部の備品を拝借して仕立てたのじや。しかしこの

ぬいぐるみとかはしらんのう」

秀吉が机の上に置いてある、垂れ耳で白い毛並みに覆われた…兎？いや、どことなく犬にも似た外見のぬいぐるみを指差す。

なんだろう。どこかで見たような気がする。

「それは俺が作ったやつだな。ミミガーのトロ子だ」

「言っちゃうの!？」せっかくボカしてたのに！

「こっちの木彫りの人形とかも全部そうなんですか?」

「まあな」

「凄い数じゃな」

パツと見たところ50以上はある。

「木像は机と椅子作る合間に作成したものだな。気付いたら彫ってた」

「ナツル凄くない!?!もうなんかいつ社会に出ても立派にやっていけるレベルだよコレ!?!」

「大げさな…木造工作部とかいうところから直江が材木の切れ端とか貰ってきて、それを加工しただけだぞ」

「ほとんど木屑だった物をな」

話の最中に直江くんが割り込んできた。

彼は身近にあった机をコンコンと軽く叩きながら言葉を続ける。

「これら全部、元は2×3cmの木の板だっというんだからすごいよな。作業風景をこの目で見てたけど、今だに信じられない」

「木の板!？」

「しかもこれら全部ほんの30分ほどで」

「30分!？」嘘でしょ!？」

「ナツル、君どんな匠!？」

「どんなツッコミだよ」

いやだつて…えっ!?!だつて…ええっ!?!なんでそんな冷めた目してるの!?!

「これぐらい木彫り人形作ると大して変わんねーよ。大きさに騒ぐなうるさい…」

「いや、無理ないだろ。それにお前、作業してるとき1mほどの材木を

どこからともなく取り出したりしてただろ。あれとかどうやってたんだ?」

「受け取った木屑をイベントリ内で合成して出した」

「今なんかおかしな台詞サラっと言わなかった!？」

「……なんだって?」

「ザ・物質ハジケ融合」

「……………まあいいや」

「理解するのを諦めた…」

「ていうかこれ、クラスの設備とかもナツルに作ってもらった方がいいんじゃない?」

「それはダメだろ流石に…疲れるだけで俺にメリットないし」

6. 5時間目 ある日、あるクラスの作業風景

くく直江Sideく

「はぁー！ー！ー！！！」

ガツ ガツ ゴツ !!

気合いのこもった一声と共に、ノミ一本で木の塊をガツガツと削っていくナツル。

つい何週間前にも見た光景だ。

ただあの時と違い、今回はきちんと意味のある物を作ってもらっている。

文化祭で使う食事用の卓と椅子だ。

といっても、相談したときは正直、あまり期待はしていなかった。

いくら人間離れた特技を持つてるといっても、清涼祭当日までに使用に問題のない家具が作れる筈がない。

ではなぜ依頼したかというと、ただの冗談だ。

…いや、悪意じゃないよ？最近ナツルは、生徒会の業務でてんこ舞いみたいだったし、そんな中無理言って3年生から教室の使用権をもぎ取ってもらったし。（情報からなまでに全部ナツル任せだったな）

だからせめて少しでもストレスを和らげようと頼んだんだけど…

「あかん、沸かへん！」

ちよつと、逆効果だったみたいだ。

「…別に沸かなくていいんだけど」

完成した木彫りの…ウサギ？の人形をドンツと卓の上に置くナツルに話しかける。

「テメー俺に手抜き工事をやれってのか!!？」

「いや、怒鳴るならせめて注文通りにやってくれ」

あと一卓作ってくれればそれで完了なのに、どうして関係ないものばかり作るんだ。

「もう少し…もう少しでなにか、大作が出来そうな予感がするんだ！」
「暇な時にやってくれよ」頼むから。

いやまあ、超ハイスピード仕事で時間は余ってるんだけどさ。

まさか30分そこらで出来るとは思わなかった。(しかも全部ハイクオリティ)

こいつなにかしらの加護でも持つてるんじゃないか？

「とうにかわき道に逸れて工作をするから、もう材料がないんだけど」
またどこかしらから調達してこなきゃ。

「ああ？んだよ、それなら」

ナツルは喋りながら、ヒョイヒョイと周りに落ちている木屑群を拾い上げる。

ある程度集め終わると、突然それらの木が姿を消し――

チーン！

次の瞬間には、ナツルの手に長さ1cm程の木材が握られていた。

「ほら、これでいいだろ」

「お前今なにをしたの？」

すぐ側で見てたけど全く分からなかった。

あとあの『チーン！』ってトースターが焼けるみたいな音なに？どこから出たの？

俺の疑問を無視して、ナツルはどんどん木屑を拾い上げては木材を生み出していく。

どうしよう、余りに堂々と非現実的なことをやられるから逆にツツコめない。

「はぁーーーーー！」

ある程度の材料が揃うと、再びノミを握りガツガツとそれらを削っていく。

「天啓が…天啓が…：…あかん、沸かへん！」

そしてまた失敗したらしい。

ドンツと、またしても出来上がった人形を自分が作った卓の上に置く。

今度のは…ぐらぶるのビィか？

再現度高いけどマンガ読んでるの？

「ダメだ…こんな…こんなのじゃ駄目だ!!」

「完璧に見えるけどなにが不満なんだよ」

「魂がぜんつつぜんこもってない!」

なにを指摘してるんだお前。

「チクシヨーーー!! 笑神さまー! オラに元気を分けてくれー!」

本当になにを指摘してるの？

『むっ、呼んだか!?!』

呼んでねえよ。さっさと自分の世界帰れパン神。

「(ブツブツ…) 闇の中から蘇りし者リンプ・ビズキット…我とともに来たれ…」

マズイな。だんだんおかしなこと呟き出した。

生徒会の業務という慣れないことを押し付けられて、しかも半ば過酷な労働状況な環境を味わってるからなあ…根性以上に責任感が強いからストレスでヤバいことになったんだろう。目が死んでる。

異界とも交信し始めたし…ここは無理やりにも休ませた方がいいだろう。卓はもういいや。

「ナツル!!」

「…あ?」

名前を呼んで注目を集める。

ナツルがこっちを見たところで、すかさずポケットに入ってたあるモノを取り出し――

「ファイトーーー!!」

「…勃発!」

取り出したピンを勢いよく突き出すと、すぐさまガシツ!とそれを奪い取り、

「リボンナポリ、D!!」大きくあおり、一気に飲み干す。

そして音もなく倒れ伏した。

「許せ…友よ」

お前のためだ、これ以上は持たないよ。キャラとか。

自分に言い訳しながら、足下に転がってきたビンを拾い上げる。

中身はクリス特性のいなりドリンクだったんだが…まさか倒れるとは思わなかった。材料になに使ったんだあいつ。

DはDeath^{デス}のDだったな。

「さて…ガクト呼ぼうかな」

倒れたナツル運んで貰おう。

☆

★

☆

くくく

明久「ていうかこれ、クラスの設備とかもナツルに作ってもらった方がいいんじゃない」

ナツル「それはダメだろ流石に…疲れるだけで俺にメリットないし」

ナツル（それだけじゃなくて自作の椅子と卓見ていると吐き気がしてくるんだけど、なんでなんだろう…）

7 時間目 真実の時間

（明久Side）

「それで、なんの話だったか…うちのクラスがなにをするかだったわけ？」

直江くんがナツルの返答を振り払うように首を振って話題を変える。

いや、この場合は戻すって言うのが正しいのかな？

「そうだな。食い物屋ってのはなんとなく分かるんだが、テーマはなんだ？」

「飲茶、つまり中華だな。もっともごま団子や桃マンといったお菓子ばっかだけだな。ちなみに名前は中華喫茶『ヨーロッパ』だ」

「中華ねえ、だから丸テーブルばっか作らせたのか」

ナツルは納得したような台詞を言いながら、机の上にあるメニュー表に手を伸ばす。

「…なんかメニューに大福とかずんだ餅とか書いてあるんだが」

「クリスがおねてな…出し物も最初は『峠の茶店』を押ししてた」

「そんなに言うんだから作れるんだろうな和菓子…」

「いや、まったく」

「誰かシバけよ。これ以上調子に乗る前に」

過激なこと言うなあ…ナツルらしいや。

そして“シバけ”と言われた本人はというと。

「冴島殿！この子ら（ぬいぐるみ）を自分に貰えないだろうか!？」

ナツルが作った（らしい）学ランを着て頭に『猫のヒタイ』と刺繍された鉢巻をした三毛猫っぽいぬいぐるみを抱きかかえてはしゃいでいた。

「どーぞー。ただ文化祭終わるまでは教室に置いていてね」

「いいんですか？ 凄い凝った作りしてますけど…」

確かに、姫路さんの言う通り学ランの生地もフェルトじゃなくポリエステルを使ってる——って着脱可能!? 凝りすぎでしょ!?

「愛着とかないんですか？」

「なくはないけどさ、小学校の時からちよくちよく作ってるから置き場がないんだよ。今はもっぱらイベントリの肥やしになってる」

そんな収納場所用意できるの君だけだよ。

「このまま際限なく増え続けるの目に見えてるからな…貰ってくれるなら正直嬉しい」

「クオリティ高いのにもつたいないな。いつそ売ればいいのに」

「売れるかよ。第一どこに持ってくんのだ」

「フリマとかなら、買う人が何人かいると思うけどな」

.....

ナツルが「その手があつたか…」みたいな表情をして顔を手で覆う。考えつかなくなつたんだね。

「…まあいいや。ていうかこれ、メニューに書かれてるやつ全部作れるのか？結構手間かかるぞカステラとか」

「…問題ない」

「どわっ!？」

いきなり現れたムッツリーニに、椅子から飛び上がるナツル。

そこまで驚くことかな…？

「土屋かよビックリしたあ！気配殺して後ろに立つな！呂布かと思つただろうが!？」

そういえば今日は1人だったね。珍しい。

「呂布さんはどうしたんですか？」

「自分のクラス手伝ってるよ。俺にかまけて孤立した、なんてのは寝覚めが悪いからな」

意外に面倒見がいいなあナツルは。

「…話を戻してもいいか？」

ムッツリーニから催促が来た。

「…メニューに書いてあるものは、全部作れる」

「ああ、そう土屋が言ったから大丈夫って判断したんだ。作り置きも用意して貰った」

「作り置きねえ、いくら作れても味が駄目なら客は来ないぞ」

「…試作品」

挑発とも取れるナツルの言動に怒った様子もなく、いつもと同じ感じでテーブルにお皿を置くムツツリーニ。

その上にはごま団子やあんドーナッツが乗っていた。

「えー、食べていいの?」

「…(コクリ)」

「おお、では遠慮なく…うむ、美味なのじゃ!」

「ほんと、美味しいです!」

川神さんの問いに対するムツツリーニの返事を皮切りに、みんな次々とお菓子に手を伸ばす。

あつという間にお皿の上が寂しく——ってヤバイ!せつかくの貴重なカロリー摂取の機会が!

「ぼっ、僕にも1っ!」「そーいや朝飯まだだったわ。貰うぞ」

お皿の上に残った最後の1つに手を伸ばそうとした瞬間、さつと横から別の手が出て掠め取っていった。

「ちよっ、ナツル!僕まだ食べて無いのに!」

「俺もだよ。いいだろ減るわけでもあるまいし、ケチケチすんな」

減るよ!思いつきり減ったよ!僕のお腹も!

「ふむふむ、外はがりがり。中はぬまぬまとしてて甘酸っぱすぎず苦い味わいがなんとも言えずん——ゴパッ」

あんドーナッツをひと口齧ったナツルは、静かに倒れ伏した。

「つてええっ!?!なんで!?!」

まるで姫路さんの料理を食べたような——つてまさか!

「あ、それ私が作ったやつです」

お菓子を食べて恍惚としてた姫路さんから裏が取られた。

必要じゃない、知りたくなかった裏が。

「少しでも皆さんの力になれたらと思って、家で作ってきたんですけど…」

「姫路ちゃん…!なんていい子なんですか…!」

「健気だねえ」

事情(料理の腕)を知らない甘粕さんたちが、姫路さんを囲んで次々に褒めていく。

そして事情を知ってる僕らはというと、

「……!」

「むっ、ムツツリーニ!? どうしてドーナッツの残りを僕の口にねじ込もうとしてくるの!? 無理だよ食べられないよ!!」

Fクラスの最大戦力をも一撃で倒す料理の押し付け合後始末いをしてい

た。

「ぐっ……! なっ……なにが起きたんだ……?」

その最中目を覚ます最大戦力。

頭を押さえて立ち上がる。

「……数日前も同じ体験した気がする……直前の記憶がないんだが、俺だし。」

鍛えてるからかな。

「……数日前も同じ体験した気がする……直前の記憶がないんだが、俺なりにしてた?」

真剣な様子で問いかけてくる。

「……うまいえ、姫路さんの料理の威力を知らないんだっけ。」

「寝不足じゃない? ほら、君忙しいって言ってたじゃない」

「え? あんドーナッツ食って倒れたんじゃないのか?」

うまくごまかそうとしたけど、すぐに訂正された。

直江くん……!

「ドーナッツ……アレか」ムツツリーニが持っているものを睨む。

「アレ作ったのはどこのどいつだ」

「はい? 私ですけど……」

いつもと違った雰囲気の中、おずおずと緊張した表情で手を挙げる姫路さん。

「お前か……」

「はい…あ、お口に合いました?」

「口か…うん、口に…」

大丈夫かな…いや、相手が姫路さんなんだ。ナツルなら気を使つて笑顔で優しい嘘をついてくれるはず——

「不味い美味くねえ以前の問題なんだよボケ!!」ドゴツ!

「ぷもっ!」

いきなり、高速で額に頭突きをした。

「つてちよつ、ナツル! 姫路さんになにをっ」

「お前もうわあああ!!」スパアツン!!

「ごぼーっ!?!」僕もー!!?!

勢いのいい平手打ちを食らつて壁際まで吹っ飛ばされる。

「みつ、瑞樹! それにアキも…瀬能! あんたなにしてんのよ!?!」

「(だ)ヤツさーまり(れ) ペ タ テー ル、 も と い 島 田 美 波 イ イ !!

クリ(こ)が怒(こ)らず(れ)んかい(こ)いら(ら)ゆる(か)んかー!!」

なんかちよつとドラゴンボールっぽく怒った!

ていうか何語!?! (※沖縄方言)

ナツル、さつきからなんかおかしいよ! いやいつもおかしいけどさ

!

でも今は…頭の上に緑色の輪つかと赤色の煙と紫色の泡がぐるぐると渦巻いてる。(ついでに目の周りが真っ黒)

おかしいの度合いが違う。

「あんな劇物食わされた上に、美味いかとか訊かれて平常心保てるか!! 僧侶じゃねえんだよ!!」

「げっ…劇物?」

あ、まずい。

「ナツル、ちよつと——」

「どういうことですか瀬能さん…?」

咄嗟に止めようとしたけど、それより早く姫路さんが話に割って入

る。

「お前の料理っぽいナニカは一撃で対象を殺す即死魔法だ。間違いない」

「言いがかりですつ。私、そんなもの作ってません！」

「ならテメーで試してみやがれ!!」「もがっ!?!」

目にも留まらぬ早業で、ナツルがムツツリーニからドーナツツの残りを奪い取り、姫路さんの口にねじ込んだ!

ちよっおお! ナツル、それは!!

「どんな味か言ってみろ!」

「むぐ…えつと、外はがりがり。中はぬまぬまとして甘酸っぱすぎず苦い味わいがなんとも言えなくてん——ゴパツ」

「みつ、瑞樹—————!!?」

…この日、姫路さんは真実を知った。

8時間目 衝撃の事実

・前回のあらすじ：

姫路さんが自分の料理（っぽいナニカ）を食べて倒れた。

「こんなのを作ってたんですね私…」

気絶から目覚めた後、姫路さんはこれ以上ないってくらい落ち込んだ。

「姫路さん…」

「おかしいとは思ってたんです…なにかしらの記念日に、お父さんに手作りのクッキーとかをプレゼントすると顔を青くしてましたし…」

姫路さんのお父さん…苦労してるんだらうなあ…

「吉井君たちも…知ってて、黙ってたんですよね？前にお弁当を作りましたから…」

「え？いや…あの…」

突然訪ねられて、思わず口ごもる。

誰かフォローを——って秀吉にムツツリーニ、露骨に目をそらさないで助けてよ！

「言い訳は嘘よりももつと悪くもつと恐ろしい。なぜなら言い訳は防衛された嘘だから。b yアレキサンダー・ポープ」

違う。違うよ。僕が欲しいのはそういうったフォローじゃないよナツル。

ていうかなんでそういう余計なの知ってるの君。

「…ごめつ、ごめんなさい…！そんなに気を使わせて…!!」

「ちよつ、姫路さん!？」

「泣ーかした、泣ーかした。せーんせいにーゆってやろー♪」
ナツルうるさいー！ていうか泣かせたのナツルじゃないか！

『おい、聞いたか今の』

『ああ…吉井が姫路を泣かせたって…』

『なんて奴だ吉井…クズめっ!』
『吉井コロす。姫路さんのために』

やばい。聞き耳を立ててたクラスメイト達が殺気立って、黒フードの準備をし出した。

「ちよっ、まっ、待って!泣かせたのはナツルだよ!」

『なに?瀬能?』

『あいつか…なら納得だな』

『いつも誰か泣かせてるイメージあるもんな』

『この前も騒動起こした他クラスのやつ泣かせてたぞ。パロスペシャルで』

『まあそれは別として吉井を制裁しよう』

『吉井コロす。姫路さんのために』

僕への殺意が変わってない!?なんで!?

「アイされてるネっ」

「ナツル黙れ!」 いらぬよそんな愛!

怒鳴りながら振り返るけど、本人はこっちを向いていなかった。

振り返った瞬間に身体の向きを変えたのか、そもそも僕に言ったんじゃないのか…後者だとしたらタイミングが良すぎる。

「みつ、瑞樹!瀬能の言うことなんて気にしちやダメよ!料理の腕が悪いなら、改善すればいいじゃない!」

「そうですよ姫路ちゃん!私も委員長として、力になりますから!」

「うむ、自分も力を貸すぞ!」

「皆さん…!」

「友情のための最大の努力は、友人に我々の欠点を見せることではない。彼に彼の欠点を悟らせることだ。byラ・ロシュフーコー」

「絶妙なタイミングで割り込んでくるなお前…」 ↑大和

このナツルめんどくさい。

「…どうせ割り込むんなら少し協力しろ」

直江くんはナツルと肩を組むように首に腕を回し、教室の隅に連れて行ってひそひそ話を始めた。

どうでもいいけど、頭から赤い煙は無くなつたけど、緑の輪っかと紫の泡（あと目の周りの暗闇）はいまだに存在している。

アレ触れても大丈夫なのかな？

「……ていうのを彼女に言っただけよ」

「オーケーオーケー」

なにを吹き込まれたのかは分からないけど、腕を外されたナツルは姫路さんに近寄っていく。

彼女を慰めている人たち（みんな女子）は咄嗟に警戒するが、それを気にした様子もなく姫路さんの目の前に立つ。

「姫路」

「っ、」

「…あきらめたら、そこで試合終了ですよ」

「…！はいっ！　そうですね！『出来ない』で済ませて努力しなかつたら、いつまでたつても出来ないままですよ！瀬能さん、私、頑張ります！」

「信じれば、望みはきつと、叶います」

「はい！」

「うーそーだーよー！セガなんていらないうー！」

「うわああああああああん！！」

姫路さんが再び泣き崩れる。

ナツル上げてたたき落としやがった！

「ひっ、姫路ちゃん!?泣かないでください！」

「瀬能ー!!あんたちよつと黙ってなさいよ!10分でいいから!」

「絶好調、誰も僕をとめることはできない」

慌てて姫路さんを慰めるクラスメイト達に非難されるが、全く気にした様子がない。

このナツルホントめんどくさい！早くいつもの調子に戻って！

今もまだ紫の泡と緑の輪っかを頭に浮かべている（目の周りの暗闇は消えた）ナツルに、直江くんが怒鳴る。

「おおーい！なにやってんだよお前！なにいきなりアドリブきかせてるの!?!」

「人生はどうせ一幕のお芝居なんだから、あたしはそのなかでできるだけいい役を演じたいの!」

「毛皮のマリーかつ、寺山修治の名言使うな!!」

君も詳しいよね。

☆

★

☆

ガラガラつ「ういーす」

突然教室の入口ドアが開き、ブサイクが我が物顔で入ってきた。

「ああ、坂本」

「今戻った…ってなにがあったんだ?」

「あはは…ちよつとね」

顔を覆って泣き続ける姫路さんと、それを慰めるFクラスの女子達。

それを遠巻きに見つめる男子達。

そして床にうつ伏せになって、ピクピク痙攣しているナツル。

「…本当になにがあったんだ。ナツルはどうして気絶してんだ?」

「いやあ…ちよつと…」

正直に言うとな僕も分からないんだよね。

なにせいきなり倒れたから。

「紆余曲折があつてな。一言じゃちよつと説明できない」

僕が言い淀んでいると、すかさず直江くんがフォローを入れてくれた。

流石、どこかの問題視とは違うね!

「そうか。気にはなるが、もうすぐ清涼祭も始まるから時間がない。…できればナツルにも聞いててほしかったが…まあいい。直江、

ちよつと協力してほしいんだが」

「了承」

早っ。即答？

「いいのか？俺としては手間が省けるから嬉しいんだが…」

「いや、流石に冗談だ。協力するかどうかは頼みの内容次第だな」

「…あまり話す機会がなかったから知らなかったが、お前中々面倒な性格してるな」

「直江くんナツルみたいだね」

「!!？」

人生で一番のショックと心外と、屈辱と絶望を受けた。

そんな感情が混ぜられた表情をされた。

気持ちは分かるけど、そっくりだよ？

9 時間目 召喚大会①

くナツルSide

どうも、俺です。

『艦コレ』では加賀さんが好きだけど、『グラブル』ではダヌアが好き
な瀬能ナツルです。

ダヌアいいよねダヌア。好きになったの最近だけど。

あの言葉足らずなところが愛くるしい。保護欲を掻き立てられる。

…呂布ちゃんに侵食されてる気がしてならない。

「どうしたの瀬能君。いきなり頭を押さえて」

「え？あ、いや…なんでもない」

隣を歩く会長（三郷雫）に軽く手を振って返す。

ここは第二修煉場…前の渡り廊下。

普段は…空手部だったかな？が稽古とかに使ってる施設だが、今日
は召喚大会の会場として使われている。

そう、今から俺と会長の『生徒会チーム』は一回戦目へと挑むのだ。

「清涼祭開始してすぐにやるとは思わなかった」もう少しゆっくりや
ろうや。

「参加チームが予想より多く集まったから、開始も終了も試合会場も
大幅に変更されたのよ」

「迷惑な話だ」

…こんなのに参加してなにが面白いんだ。

「この大会って優勝したらなんかあるのか？」

「…？優勝賞品は事前に周知されてるはずだけど」

「賞品？」なにその心踊る単語。踊りだけに。

（※タンゴ・アルゼンチン・ブエノスアイレスやウルグアイ・モンテビ
デオのダンス及び音楽）

※こんなしょうもないこと説明させんなやナツル^{ホケ}。

「優勝者には如月ハイランドのペアチケットと、『白銀の腕輪』というものが贈られるそうよ」

「なんか防御力高そうな腕輪だな」

白銀……て事は……プラチナか？装備したらかつこよさが上がるな！

「プラチナは白金よ」

「心を読んでまでダメ出ししないでくれる？」

無知でスミマセンね。

まあかつこよさ云々は置いて、装飾品の類いやテーマパークに正直興味はない。決勝辺りで適当に負けるとするか。

……？なんで決勝なんだ？三回戦辺りでもいいだろうに。

「……………」

「瀬能君、どうかしたの？急に立ち止まったりして」

「あつ？ああ、いや。なんでもない」

まあいいか。

くく（数十分前）くく

直江「それで？なんだよ頼みたいことって」

坂本「ああ……実は、清涼祭での成果いかんで姫路が転校させられるかもしれないんだ」

直江「は!?!なんで……って今のFクラスの状態を考えれば納得か。みかん箱にゴザに青空教室だもんな。普通の親なら当然だ」

坂本「加えて最低クラスだから、だ。話が早くて助かる。明久が『大好きな姫路さんが転校しちゃうなんて嫌だ！なんとかして！』ってうるさくてな」

吉井「ちよつ、雄二！言ってもいない台詞ねつ造しないでよ！」

直江「それで？俺になにをさせたいんだ？」

坂本「協力してくれるのか？」

直江「仲間の明日がかかっているからな」

吉井「直江くん……！本当にありがとう！」

坂本「やってほしいのは単純だ。店に集中して少しでも多く売り上げを伸ばしてくれ」

直江「？ それだけか？」

坂本「売り上げが多ければ、それだけいい設備を揃えることが出来る。なにもおかしくないだろ？」

直江「まあそうだけど…机や椅子だけあっても、教室がなかったら意味ないんじゃないか？」

坂本「その辺も抜かりはない。ババア…もとい学園長に直談判して、俺と明久が『召喚大会』に優勝すれば、手頃な教室を用意することを約束させたからな」

直江「なるほど…教室についてはOKってことか。かなり難しい条件だけだな」

吉井「そうだね…姫路さん達や霧島さん達を倒すのはちよつと…かなりしんどそうだよ」

直江「それ以外にも厄介そうなのが多数参加してるけどな。ナツルも生徒会長の三郷雫とペアで出場してるし」

吉井「ええっ!？」

坂本「やっぱりか…」

直江「知ってたのか？」

坂本「トーナメント表には『生徒会チーム』としか書かれてなかったが、当日の忙しさと実力を考えたらこいつ（足下に転がっているナツル）は当然出るだろうと思っていた」

直江「そしてナツルを御ぎよすることが出来るのは三郷だけ…ま、当然か」

瀬能「御されてねー…し…:…」

坂本「気絶しながら反論しやがった…。どうなってんだ？」

吉井「そんなことどうでもいいよ!…どうするのさ雄二!？」

坂本「どうするもこうするも、やるしかないだろう? 幸いナツル達とは別ブロック。当たるとしても決勝だ。それ以前にやる気のないナツルがそこまで勝ち上がると思うか？」

吉井「そつ…それならいいけど…」

直江「……いや、勝ち上がったってもらった方がいいんじゃないか？」
吉井「えっ？どういふこと？」

直江「学年成績最高とはいえ、三郷だけで勝ち上がるのはいくらなんでも無理だろう。どうしてもパートナーの力が必要だ」

坂本「なるほど…ナツルもFクラス。姫路の父親がいつどのタイミングで試合を観戦してるか分からないが、決勝戦くらいは必ず見るだろう」

吉井「なるほど…するとどうなるの？」

直江「……………」

坂本「…すまん直江、吉井はどうしようもない馬鹿なんだ」

吉井「ちよっ、雄二！なにさいきなり！」

直江「いや…えつとだな、吉井。つまり…決勝に最低クラスと言われるFクラスが三人揃うんだ。吉井と坂本は優勝するんだろ？」

坂本「他の成績優秀者を押しつけてな。そうしたら少しはFクラスを見直されるだろ」

吉井「ああつ、なるほど！」

直江「ナツルは三郷のお陰って言われるだろうけどな。俺も出た方がよかつたか？」

坂本「いや、直江はクラスの出し物に集中してくれ。備品も外装もいいから他のクラスに引けは取らないだろうけどな」

直江「まあ…な。どっちみち今からだと出場できないしな」

坂本「そうなる後はナツルの説得なんだが…時間がないな」

吉井「ホントだ。もうすぐ一回戦目が始まっちゃうよ」

坂本「正直、ナツルならなんだかんだいって協力してくれるとは思うが…どうなんだ？」

直江「仲間事なら大丈夫だろう。でもなあ、頼みの内容が八百長だから…しかも負ける方だし…」

坂本「すぐには無理か」

吉井「雄二、もう行かないとっ」

坂本「分^わーってるよ。さて、どうしたもんか…」

直江「…そうだ。成功するかは分からないけど…」

坂本「ん？どうするんだ？」

直江「気絶してる今のうちに、睡眠学習の要領で脳に刷り込む」

吉井「それって洗の——」

直江「睡眠学習だ」

坂本「…どつちでもいいけどな。でもナツルに効くのか？なんか効かなそうなイメージあるんだが」

直江「本格的なやつなら無理だな。でもちよつとした意識誘導なら大丈夫だろう。もともと負けず嫌いな性格してるから、『決勝まで勝ち進む』ことだけを意識するだけなら受け入れるはずだ」

坂本「…そういう物事の抜け道を見つけるのが上手いところとかナツルそっくりだよな」

直江「!!？」

吉井「実は兄弟なんじゃないの？」

直江「俺はひとりっ子だよ！協力するのやめるぞ!？」

坂本「その返し方もナツルっぽいな」

直江「!!？」

くくく

10時間目 召喚大会②

くくナツルSideく

・第二修煉場

普段は道着着た奴らがキャツキヤウフフしてる(※違う)場所も、今日は閑散としていて少し物寂しい。

こういう施設って普通、イベントで使うために真っ先に確保されるはずなんだが：ああ、召喚大会のために学園側で確保されてるのか。こんなでかい会場いくつも押さえてるのに、出し物やるスペースが足りないどころか有り余ってるって話だ。どんだけ広いんだよこの学校。

「相手のチームはまだみたいね」

会長の言う通り、試合場は立会人の教師しかいなかった。

「もう！時間にルーズな人ってサイッテーよねっ！」

時間は有限なんだからさっさと始めさせてよ!!

「あなたいつも会議に遅刻してくるじゃない」

聞こえんな。

「開始までもう少しですから、予定時間から五分経っても来なかった場合は生徒会チームの不戦勝となります」

立会いの教師が苦笑しながら進言してくる。

そんなルールあったんだな。

面倒だから不戦勝にならねえかなーとか考えながら待っていたが、あまり時間を置かずに俺たちが来たこと別の出入り口から、二人の男女がやって来た。

誰かは知らん。初対面の人物だな。

ただ女の方はこっちの姿：正確に言うとか会長を見た瞬間、分かりやすく苦々しい表情を見せた。

他は人名をそのままチーム名にしてるけど、うちだけ名前が『生徒会チーム』になってるからな。もう少しやりやすい相手が来ればとか思ってたのか？

「せつ、瀬能!?!お前つ、生徒会役員だったのか!?!」

「あん?」

いきなり相手チームの男の方が驚愕の表情で指差してきた。

…人に指差しちゃいけないって、親御さんから教わらなかつたのか?
?

「…どうしたの根岸君。確かに学年一位の生徒会長がいるチームは厄介だけど、男子の方はそこまで警戒する必要はないでしょう」

酷い言われようだ。

顔は覚えたからな。

「それは…でも…優香…あいつは…」

男の方（根岸だっけか?）がしどろもどろに、変な動きをしながら狼狽^{うろた}える。

はて?どこかで会ったことあつたか?

「瀬能君、知ってる人?」

「いや、全然」

会長が小声で話しかけてきたので、それに合わせて小声で返事を返す。

見たところ俺に対して…怯え?の感情が見て取れる。

相手が一方的に知ってるパターンか?それならしよつちゆうあるから気にしなくていいか。

でもコイツ…どつかで見たことあるような…?

「そろそろ始めてもいいですか?」

何か昔の記憶が浮上してきそうだったが、立会の教師の一言で霧散した。

「大丈夫です。邪魔してすみません」

「いえ、緊張しすぎてないのはいいいことです。三回戦までは他の人の目もありませんし、引き続き気を楽にして大丈夫ですよ」

俺には縁のない言葉だな。

むしろもう少し緊張感を持ってとよく言われる。

「それでは召喚してください」

「『試獣召喚《サモン》』」

おなじみの掛け声で召喚される召喚獣。それぞれ実力に見合った装備をしている。

そんな中俺の召喚獣はというと

全身は羽毛で覆われており、ダチヨウを彷彿とさせる体躯。

顔の大半を占める、突かれたらちよつと痛いじや済まなそうな大きなくちばし。

それでいてマスコットののようなデフォルメされた姿。

……つて言うかー

「チヨ●ボじゃねえかつー」

もはや人型ですらない。

Dクラスとの試召戦争の時、カラクリ人形ピヨリ号スタイルになったが、アレより人間離れすることがあるとは思わなかった。

「この学園に赴任してそこそこになります、人型以外の召喚獣を見たのは初めてですよ」

立会人の教師が興味深気に俺の召喚獣（ニックネーム：ナッツ）を見つめてくる。

正直コメントに困るわ。

しかしこれ毛並みは青だが、はたしてこれは俺らしさを表していると取っついていいんだろうか？ 見た目完璧に川チヨ●ボなんだけど。

つーか無手（無足？） だけど武器は？ もしかして無し？

問題はないけどなんとなく損した気分だ。

「……はっ、すみません。つい見入ってしまいました。それでは…準備はよろしいですか？」

「…て俺このままやるんすか」

チョコ●ボですけど。

「時間がないので、自分で工夫してなんとかしてください」

「無茶苦茶言いますね…」

試験召喚獣つてもう一人の自分みたいなもんだろ？

鳥類の自分を想像したことはない。

俺の返事に、教師がちよつと困ったように眉をひそめる。流石に自分でも無茶を言ってる自覚があるようだ。

「そんなの心配する必要ないわよ」相手側の女が急に口を開く。

「だってあなたFクラスでしょ？すぐに沈めてあげるわ」

.....

「わかりました。自分で工夫しますからハジメテください」

「あ、はっ、はい…」

いい度胸だ。俺のことをよく知らんと見える。

なら教えてやらんとなあ…？

「それでは、試合開始！」

「はあっ！」

「死ねっ、瀬能!!」

立会の教師の合図と共に、二体の召喚獣がナッツに襲いかかる。

見た目のせいでモンスターを狩るハンターみたいな構図だな…ってことは俺が悪者？

なら何やつてもいいな。

——
ダウンロフ?
強制
?????
!!

ドゴゴゴンツツ!!

「えっ?」「なっ?」

突然相手の召喚獣が、地面に垂直に叩きつけられたかのようにうつ伏せに倒れる。

Sクラス 三郷雫 物理 451点

&

Fクラス 瀬能ナツル 物理 103点

VS

Bクラス 根本恭二 物理 109点

&

Cクラス 小山友香 物理 83点

そして空中に浮かび上がる各自の点数。

攻撃を受ける・与えるをしなきゃ表示されないのは調整すべきじゃなからうか。

「なっ、なによ今の!?それにその点数…!あんたFクラスでしょ!?!」

「もともと俺はCクラス程度の学力はあるんだよ…つと」

ザシュツ!!

地面に倒れ伏している(というか若干めり込んでいる)女の方の召喚獣に、第一趾あしゆび(人でいう踵部分にある、鳥の後方の足)を突き立てる。

外道? 敵対してる奴が無防備に隙を見せてるんだぜ。普通やるだろ、追撃。

Cクラス 小山友香 物理 0点

「なっ…嘘…私が、Fクラスの奴なんか…!」

「友香!クソツ、瀬能!」

男の方の召喚獣が、即座に身体を起こして剣を振るってくる。

迎撃——は、距離が近すぎて無理だな。

ガキイン!!

「なっ!?!」

根岸の召喚獣が振るう剣が、途中で鎖付きの短剣によって止められ

る。

凶刃を防いでくれた短剣。そこから伸びた鎖の先にいるのは、
ヴァルキリー戦乙女のような鎧に身を包んだ女型の小人。

(今だけは) 俺のパートナーである会長の召喚獣だ。

「どーも」

「パートナーとして当然よ」

頼もしいねえ、という訳で

——ざん 斬・飛翔分身拔刀牙！

瞬間、ナッツが横一列に並ぶように三体に分身する。

ガドズツツツ!!

そして正面のナッツが剣をくちばしで弾き、左右に展開している二
体が同時に胴体と頭を貫く。

Bクラス 根本恭二 物理 0点

そして表示される相手の点数。ステータス

「……………はっ?」

間の抜けた根岸の声が、なぜかやたらに印象的だった。

11 時間目 召喚大会③

「こんなの無効よ！ズルじゃない！」

戦闘が終了して、お互いの召喚獣が消えた途端に相手側の女が噛みついてきた。

終わってから抗議とか、遅すぎだろ。せめて試合中にやれよ。

「ズルって言うけど、具体的にどんなことを誰がしたんだよ」

「白々しい…！あんたが…改造ツールみたいなもの使って、召喚獣に細工したんでしょ！」

話にならないな。

「試験召喚獣と召喚システムはこの学園の根幹の一つと言ってもいい。それを一学生の俺がどうこうできると思ってるのか？」

それもFクラスの、と最後に付け加えると、とても分かりやすく害虫を噛み潰したような顔をされた。

「あんた、生徒会の役員でしょ？だったら機会なんていくらでもあるじゃない！」

しつけないこのクソアマ。機会があっても技術がないっちゅーねん。

「それは私に対する批判と侮辱かしら？」

それまで黙っていた会長が急に口を開いて会話に割り込んできた。

「…え？」

「瀬能君は私が生徒会に引き入れたのよ？そんなくだらないことをする人を私が選ぶと思ってるの？」

「え…えつと……」終始高圧的だった女が、一気にオドオドと萎縮し出す。

…褒められてるのか？

俺は今褒められたのか？

まっつたく、そんな気がしなかったんだけど。

「第一、私だけならまだしも桐条会長が身内の不正を見過ごす訳ないでしょう」

「ああ、それはある」

あの人の目を誤魔化してシステムハッキングとか大それたマネするの、ちよつと今の俺じゃあ無理かな。

「でも…だって……」

色々理由を並べられたにも関わらず、小山とかいう女は納得せずに
渋る。

めんどくせえなあコイツ。結局のところ自分が手も足も出ずにF
クラスの奴に負けたのを認めたくないだけだろ。

会長が味方についてるし、口論で屈服させるのは簡単だけど、こつ
ちもいつまでもつき合つてやれるほどヒマじゃあない。

早々に納得させなきゃいけないんだが…さてどうしたもんか。

「もう一度試合をする時間はないのですけど…」

「試合する必要なんでねえ！瀬能が反則行為をしたのは明らかだろう
？この勝負は俺たちの勝ちだ！」

教師の言葉に根岸が食つてかかる。

コイツ妙に敵対心出してくるな…しかも俺だけに。なんかやつ
たっけ？

……………あ、思い出したかも知んない。

「おい、その…根岸とやら」

「ああ？なんだよ」

一人だけを呼んだのに、全員が注目してくる。まあいいけど。

俺はイベントリから一本のDVDケースを取り出した。

「どつかで見たことあるかとずっと引つかかかってたけどお前、これの
主演男優だろ？」表紙がよく見える様に軽く掲げる。

そこには四つん這いでボンテージ服を着た男のケツを踏みつける、
バニースーツ姿のガチムチのオッサンの姿が写っていた。

見るからに吐き気を催すこの作品のタイトルは

『ネギシーヒルズ青春白書〜イタイのがイイんだろ？〜』

言うまでも無いが、四つん這いになってる方が根岸だ。

「うわああああああああああああああああああ!!?」

根岸が絶叫した。

無理もない…プロレスとかをよく見る俺でも忌避感を覚えるからな。

「なっ、なによ。それ…」小山が唾然とした様子で、指先を震わせながらDVDを差す。

「中学の時の友人が一時期、突っかかってきた馬鹿で悪趣味なビデオ作るなにハマってな。その押し付けられたやつの一つだ」

全員（根岸はまだ絶叫中）ドン引きだった。

「瀬能君…あなたの交友関係に口煩く言うつもりはないのだけれど……」

「そいつとは中学卒業以来連絡取れなくなったよ」

全寮制の学校に進学したらしいから、そのせいかもしれん。

懐かしいな。当時（中学時代）は茜も入れた三人組で、色々な事をした。

他校の生徒なんかと喧嘩する際は、まず最初に俺が絡まれては正当防衛でボコリ、途中から茜が混じってボコリ、最後に友人がもう二度と刃向わないように（精神を）ボコボコにするっていう抜群のチームワークを見せていた。

そこで頭抱えて震えてる根岸も、フルボッコにされた一人なんだろう。

奴主演のDVD。そのケースの背面には『新しい世界を体験した、生まれ変わった私をミテ!!』と書かれている。

根岸のアへ顔ダブルピース（ほとんど意味がない薄い目線隠し入り）のどアップにでかかと。

俺が言うのもなんだが性格ゲスすぎやしないかい？

実家が有力財閥で、その次女らしいんだが…好き勝手に生きすぎだろ。

その上飽きたからって大量の作品を俺の家に送ってくる始末。

こんな精神汚染物質、捨てる姿を見られたら嫌だしかといつて置いとく訳にもいかないから、今日までずっとイベントりに封印してきた。

…あ、そうだ。

「小山とやら、素直に負けを認めるならこいつはお前にやろう」

ポータブルDVDプレイヤー（昔友人がくれたやつ）付きで。

「…断つたら？」

「学園中にばら撒く」

イベントリから取り出した、少し型落ちしたDVDプレイヤーにディスクをセットする。

「俺の負けだあああああっ!!それだけは勘弁してくれええええー!!!」

根岸が詰め寄ってきた。

こんな映像、音声だけでも流出したら自殺もんだな。

「てこらししいので、この勝負俺らの勝ちでいいっすか？」教師に確認を取る。

「あ、はい。…もともと生徒会チームの勝ちでしたから」

そうね。それなのにゴタゴタで一話使うとかありえねーだろ。

「というわけで…ほらよ」

DVDプレイヤーを小山に押し付ける。

「ちよっ、瀬能!?!なにを!」

「いや約束したし」負け認めたら渡すって。

『イッターイノガイインダロツ?ブンブン!』

『ア~~~~~!!』

あー、しまったー。渡す際ー、再生ボタンを押してしまったー。

これは俺のミスだー。めんごめんごてへぺろっ。

「テメーわざとだろ絶対わざとだろ!!なに済ました顔で舌出してんだ!!」

「言いがかりやめてくれない?あとあつちはほっといていいのか?」

『ブットイノオークレテヤルヨツ、ブンブン！』
『ンぎぼぢいいいい！』

俺の襟首をつかんで怒りを露わにする根岸に、冷めるを通り越してもはや死んでいる表情で動画を見ている小山を指差す。

聞いてるだけで脳みそが腐り落ちそうだ…誰か俺の鼓膜を破壊してくれ。

よくあんなの見続けられるな。

「ゆっ、優香?!見ないでくれ!!」

「近寄らないで。…別れましょう」

「なっ…!そんなっ?!」

慌てて駆け寄ろうとした根岸を、小山が冷たくバツサリと切り捨てる。

おお、なんということでしょう。あれほどまでに仲が(表面上は)良かった二人が、あつという間に修羅場ムードに。

「瀬能君という匠の手によって…」

会長がなんかぼそつとつぶやいたけどよく聞こえなかった。

「まっ…まっってくれっ、あれは俺の意思じゃ…信じてくれ!」

「次私の許可なく5メートル以内に近づいたら、この映像ネットには撒くから」

「やめろ!頼む、考え直してくれ!!」

さあさあ盛り上がって参りましたよ。

不快なバツクミュージックをシャットアウトしさえすれば、非常に愉快な見せ物だ。ポップコーン片手に観戦したいね。

が、しかし。この後校内の見回りをしなきゃならん。ままならないもんだ。

「それじゃあ、俺らはこの辺でおいとましますか」

「そうね。先生、よろしいですか?」

「そうですね。あとは彼ら二人の問題ですし」

めんどろくさ：空気を読んだのか、教師の人も一緒に出口へと足を進める。

そして気づかれないように、そっと修練場の扉を閉める。

その時に中の様子を窺ってみたが、DVDプレーヤーを片手に冷めた目をした小山と顔に『絶望』を貼り付けた根岸が激しく言い争い：いや、一方的に根岸が騒いでいる光景が目映った。

アイツら付き合ってるみたいなこと言ってたな。ついさつき破局したが。

ザマア!!

：数日後。『某Bクラス代表、華麗にフラれる！』との記事が学園新聞の一面で大きく報じられることになるのだが、どうでもいいことなので割合させていただく。

12時間目 装備・腕：特性超高性能デバイス

二回戦進出が問題なく決まり、次の試合まで見回りをして時間を潰して過ごす。

できれば自分のクラスを冷やかす……もとい盛況しているか確認したかったんだがな。残念だがその時間はなさそうだ。

あん？見回り名目で行けばよかったんじゃないかって？いい指摘だ。

実は超会長命令で、時間内に指定された場所チェックポイントを通過しなければ延々と警告音が流れる携帯端末を腕に装着されているのだ。

……ここまでやるかと本気でツッコんだ。

いくら生徒会の役員だからってこれはあんまりだろ……

思わずその場で「俺たちはアンタのロボットじゃねえんだぞ!!」て叫んだら、「これを付けるのは瀬能、お前だけだ」って冷静に返された。

俺ってそんなに信用ない？

……ないんだらうね。こんなの用意するくらいだから。

「しかし……これ妙に高性能だな」

一つのチェックポイントを通過すると、すぐに新しいチェックポイントが数メートルごとに出現する。

地図機能は当然ながら、時計に通信、今現在どこでどんなイベントが開催されているのかがリアルタイムで確認できる。

さらには予測してんじゃないの？ってタイミニングで、チェックポイントがトラブルが発生した場所に切り替わる。

さらにさらに録画もできるし、撮った映像をその場で見られる視聴機能付き。

さらにさらにさらに重さが1kgほどで、大きさもスマホ並み！しかも僅かな振動もエネルギーに変えて発電するので、充電器も必要な

し！

さらにさらにさらにさらにさらに機能を追求したが故のミリタリーデザ
インがとても魅力的で、周りの視線を一人占め！

これでお値段なんと、据え置き価格！・（※非売品です）

「この学園の技術力半端ねえとは思ってたけど、一学生に持たせてい
いもんなのかな」

あきらかにオーバースペックでしょコレ。俺の携帯より機能的だ
よ。

文化祭終わったら貰えないかな。

「つと、そろそろ時間か」

液晶を見るついでに時計を確認すると、もうすぐ二回戦開始時刻
だった。

場所は…剣道場か。

チェックポイントもそこを指してるし、急いで行くか。

「その君」

足を踏み出そうとした途端に背後から呼び止められる。

振り返るとスーツ姿の初老に入りかけみたいなおっさんが立って
いた。誰だこいつ。

「間違ってたらすまないが…君が瀬能ナツルかい？」

「あ？…人に名前を尋ねるならまずは自分の名前を教えるべきじゃな
いスかね」

「…：正論ではあるが…：普通は知ってるはずなんだが…」

知らんな。俺は普通じゃないし。

「まあいい、私はこの学園の教頭の竹原だ」

「はあ、そうスカ」いたんだな教頭とか。

「…それで、君が瀬能でいいのかな？」

竹原センセの目つきがちよっと鋭くなった気がするが、とりあえず
無視する。

「そうですがなにか」

「いや、とくに要件があるわけではないんだ。ただ噂の生徒がどんなものなのか気になってね」

噂ねえ…どうせろくなもんじゃないでしょ。

「立てば外道歩けば非道。口を開けばガツカリ玉子と言われていたら一度は見てみたくなるだろう」

「教師からどんな扱いされてんすか俺」

なんだあい外道非道のガツカリ玉子ってえっ!!どんな玉子だよ!せめて点取れやあ!

「…ちなみに目の前にした感想は?」

「うむ…聞いてた通りだな、と」

エツグチョップかますぞコラ。

もう少し突っ込んだことを問い質したかったが、そろそろ移動しないと二回戦開始に間に合わなくなる。

「すいませんが自分急ぎのようがあるので、もう行ってもいいですか」

「ああ、結構だ。呼び止めてすまない」

そう言っって自称教頭は、俺に背を向けて歩き去っていく。

…なにあれ、カンジわるーい。

ここの学園、いけ好かない教師チャッはそうまでいないと思っってたんだが、俺が知らないだけでいるにはいるらしい。

「…まあ関わんなきゃいつか」

懐から携帯を取り出し、操作をしながら離れていくおっさんに背を向けて歩きだす。

次の試合はどんな奴が相手かな。

13時間目 召喚大会④

・剣道場

二回戦開始の十数分前に来たにも関わらず、試合会場には立会いの教師と会長がすでにいた。

教師は分かるが会長はいるのおかしくね？ちゃんと見回したんでしようね？

「あなたじゃあるまいし、きちんとしてるわよ」

「失敬な、俺だって真面目にやっとなるわ」

強制だけどな！

…もはや考えを読まれてる事にツツコミを入れる気すらなくなってきた。

「ところで瀬能君。…さっきの試合、本当に不正はしていないの？」

「あー？なんだ会長。疑うのか」

パートナーとか言ってたくせに。とんだ相方だな。

「そういう訳じゃないけど…一定以上の点数じゃないのに、分身したり手も触れずに相手を押し潰したりされたら気になるわよ」

少し気まずそうに眉をひそめながら、言い訳がましい台詞を返す。

自分でも今のはどうかとも思ったのか？平気で筋弛緩剤打ち込むような奴が、んな殊勝な神経してるとは思えんがな。

「あれは俺の持ち技の一つ…いや二つか？まあそんなもんだ」

「…召喚獣なのに、あなたの技術を使えるの？」

「あんだとの試合でもやって見せたけど？」

極みコンボに始まり自流派の技の数々、締めには天狼抜刀牙。

当時のことを思い出したのか、会長が額を押さえながら目を瞑る。

「…そういうええそうだったわね……」

「それに技術を使うつつつても、他の奴らだってやってるしな」

召喚獣の身体を動かす、持っている武器を振るう。

突き詰めればこれらも立派な”技術”だ。

「自分の身体動かすのが得意な奴は、他の素人より一步先の行動ができるんだろ。ワン子も”気”を飛ばしてたし」

Dクラスとの試召戦争の時に。

先ほどの試合やワン子のケースを参考して察するに、“気”を使う攻撃は本来なら体力を削るところ、代わりに点数を消費するようだ。詳しくは覚えてないけど、俺の物理の点数は確か130点くらいあった。なのに表示された点数は100そこら。

技一発放つたびに体力を三割以上消費つかうってどんな鬼ゲーだよ。レベル上げて物理で殴った方が早いじゃねーか。(あ、シヤレっぽくなっちやった)

それとも強力な“気”攻撃ほど多く点数を消費するのか…?よく分からん。

小技がどれくらい威力で、どれほど点数を削られるか調べてみたい気もするが…他に誰か協力してくれる奴いるかな?

実戦以外に調べる機会ないだろうから、一歩間違えたら点数零で即補修室行きだ。俺ならやりたいとは思わないがね。

しかしそうする大々的な“気”を使った攻撃がほとんど撃てなくなる。もどかしい、

「検証するべきか、やめるべきか…それが問題だ」

「あら、ハムレット?瀬能君は昔の偉人や詩人の台詞に詳しいのね」

中二の影響です。

「…とか言ってる間に、相手側のチームが来たみたいね」

会長が入り口に視線を移すと、二人組がゆっくりと入ってくる姿が見えた。

一回戦目とは違い両方とも女のペア。今度は先ほどと違い、つい最近どこかで見たような顔をしている。

…というか。

「茜?」

「なっ、ナツル!」

かつての悪友であり、対Dクラス試召戦争で敵として戦った女・美嶋茜だった。

「久しぶりだな。一年ぶりか?元気してたか?」

「試召戦争の時会っただろうが!!先月だぞあれ!」

うん、そうだよ。だから大体一年ぶり。
むしろ一年超えたよ。

「あれから全く音沙汰なしだったけど、どうしてたんだ？」

「なんでテメエにあたしの日常をいちいち報告しなきゃならねえんだ」

あいさつくらいしに来てくれないと思うんだけど。

「グラウンドの片隅で青空教室開いてる奴のどこなんて行けるかよ。恥ずかしい」

「納得の理由だけど、俺が開いてるみたいない方やめろ」学園の方針だから。

あとそんな恥ずかしい奴の所に休み時間毎回来てくれる娘もいるのよ？（↑呂布ちゃん） 言わないけど。

「…瀬能君、そちらの娘とは知り合いなのかしら？」

旧友と旧交を温めていると、隣に立つ会長から声をかけられた。

「ん？ああ、中学の頃の同級生だな。よくつるんでたんだ」

「……そう」

「おいナツル。誰だそのクソアマ」

今度は茜から声をかけられる。

どうでもいいけど初対面の相手をクソアマ呼ばわりすんなよ…

「こつちは あー…職場の上司？みたいなの？ほら俺生徒会役員だから」

「知らねーよバカ、いつなったんだよ。聞いてねーぞ」

…なんで俺が自分の進捗状況いちいち報告しなきゃならんのだ。

「まあ…各々そんな感じの仲です」

「……………」

「けっ」

会長は無言・無表情で、茜はイラついた顔で舌打ちを一つしながらお互いに睨み合う。

え、なにこのいきなりの険悪ムード。居心地むちゃくちゃ悪いんですけど。

俺こんな中今から試合すんの？勘弁してよ…

☆ ★ ☆

「えー。両チームが揃いましたので、これより二回戦を始めたいと思います」

二人の女子の異様な雰囲気をもガン無視して、立会いの教師が口を開く。

確か田中先生だったっけ？初老の男らしい大人の対応…いやマイペース？どっちにしてもかなりの余裕が感じられる。

こつちとしてはありがたいけど、空気を読まん人だな。

「ふ…ふふふつ、相手側に生徒会長がいるのはちよつと驚きましたが、まったく問題ないのです！」

ついでに今までまったく口を開かなかった茜のパートナーが、こちらをキツと睨んで騒ぎ出す。

「美春の思いを踏みにじったこと…後悔させてやるのです！」

「…踏み躪る？あなた、Dクラスの女子のクラス代表の清水さんよね？なにかした覚えはないのだけけれど」

「とぼけるつもりですか？美春が一生懸命考えた企画を何度も何度も却下したくせに…！」

今にも飛びかかってきそうなほど、分かりやすく怒気を噴出させている。

「……ん？Dクラスの企画…？」

「あ、それ否決おとしたの俺だわ」

「ええっ!？」

「あん、そうなのか？」

清水と茜がほぼ同時に声を上げる。

いやまあ、書類仕事してる時にたまたま回ってきたんだよね。

「瀬能君…きちんと仕事をしてきてくれるのはありがたいのだけれど、
クラスの出し物の是非を勝手に決めないでちょうだい。こういう問
題が起きたりとか、後々困るでしょう」

『美波お姉様の素晴らしき博覧会』とか企画出されたらあんだだって
却下するだろ」

最終的に少し変わった喫茶店に落ち着いたが、そこに行くまで延々
と『美波お姉様』が必ず出店名と説明文に出てきた。

途中から面倒になって、もう通しちやっていいかな？って思ったけ
ど、流石にクラスメイトのプライバシーを侵害するもんを公表させる
訳にはいかないので我慢して落とし続けた。

「……………せめて次からは報告ぐらいしてちょうだい…」

「覚えてたらな」

ていうかままずない事を祈る。

14時間目 召喚大会⑤

「ルールは事前に周知した通りで、科目は世界史です」

ゴタゴタが目の前で発生していたにも関わらず、立会いの田中教員はそんなものなかったと言わんばかりに進行を続ける。

マイペースすぎる…ここまできるとゲームのNPCみたいだぞ。

「あなたの相手は美春なのです。ちょうどよく向こうの生徒会長の相手は美嶋さんがしてくれるみたいですから、遠慮なく恨みをぶつけさせてもらおうのです!!」

「恨みを買うようなことした覚えはないんだけど」

「さっきの話を聞いてなかったのですか！これだから男は——」

「仮に企画が通ってお姉様の素晴らしさとやらを公開できるようになったとして、それに共感して似たようなライバル^ヤが出てきたらどうするつもりだったんだ？」

「……………あなたの相手は美春なのです！」

考えてなかったんだな。

清水の怒気が見る見るうちに小さくなって消えていく。Fクラス並みの考えなし&行動力(＝バカ)だが、ぶっちゃけクラスメイトじゃなくてよかったと心から思う。

「問題がないようでしたら、召喚獣を呼び出してください」

「『試獣召喚《サモン》』」

田中教員のマイペースな言葉に促され、俺を除く三人が同時に召喚を行う。

やべっ出遅れた。

「それでは始めます」

「さっ、試獣召喚《サモン》ッ」

慌てて召喚するが、一体少ないのに構わず試合が開始される。マイペースにもほどがあるだろ！

一人遅れて展開された魔法陣。そこから出現するのは——

ひっこぬかかれてく あなただけにく ついいていくく

「今度はピク●ンかよ!!」

文化祭だからってやりたい放題し過ぎだろ!

「しかも水中でも溺れない青とか…ハズレじゃねーか!」

沖繩の島出身の男子舐めんな!泳ぎは大得意じゃ!!

そもそもここ水ねーし!

『!!』

俺の一言を聞いて(?)青ピク●ンはショックを受けたようにビクツと身体を一度大きく揺らす。

次いでわなわなと震えさせて――

『!!』

「うっ!?」

頭から清水の召喚獣の口内に突撃した。

ああピク●ンは さいごのちからをふりしぼり

しみずのくちに とびこんだ!

「つてアホなこと考えてる場合か!」

痛い痛いいたいイタイ!!頭部がゴリゴリとまるでヤスリで削られているかのように痛い!

説明しよう!俺こと瀬能ナツルは観察処分者という処遇を受けていて、召喚獣の感覚がフィードバックされる仕様になっているのだ!!とどのつまりナツツに攻撃入ると俺もダメージ受けるというわけだ!

「現実逃避を兼ねて設定説明してみたけどやっぱり痛いー!!」しかも全然逃避できてねえし!

頭の痛みを堪えながら、首元まですっぽりと口内に収まっている(!?)ピク●ンナツツの両足を掴んで思いつきり引つ張る。

「この子はもーこんなこととして！ぺっしなさいぺっし！」

絵的にもマズイよこれ！清水もドン引きしてるし！

結構力込めて引つ張っているのに、中々抜けない。

相手も踏ん張っている上に、少し引けたと思ったら腕を使ってすぐにまた口内に潜り込んでいく。なにがお前をそこまでさせるの!?

「謝るっ、ハズレって言ったの謝るからもうやめえええッ!!」頭痛が酷くなつてキタアア!

スッポン!!

数分の攻防の末、なんとかナツツを引き抜くことに成功した。

「あーいったあ…ったく、なんで俺がこんな目につてちよつと欠けるー!!?」

痛む頭を押さえてナツツを見ると、頭部の葉っぱの生え際(?)の左部分が少し無くなっていた。

食われたのか?食わせたのか!?!どっち!?(※どうでもいいわ)

『…!?!』

「ん?」

ドサツ

清水の召喚獣がいきなり苦しみだし、そのまま苦悶の表情を浮かべて倒れた。

Dクラス 清水美春 世界史 0点

さらには点数が表示され、役目を終えたと言わんばかりに黒い霧となつて消えていく。

「えっ…う…えっ、なんっ?」

本体である清水も、うまく言葉が出ないくらい困惑している。無理

もない。

…ひよつとして

「お前…毒持ちか？」

『……………』

にやり

ピク●ンナツツが口角を僅かに上げて微笑んだ（ような気がする）。
怖エエエエエエエエエツツ!!

見た目青なのに（というか群青色）性能は白だったよこのピク●ン
！初見殺しじゃねーか！

「まつ…まあいいやつ。とりあえずこっちは片付いたから次は茜の方に…」今回も無手だけどなんとかなるだろう。

ていうかもう終わってるかな？

のん気に考えながら茜たちの方に目を向けると、剣呑な雰囲気を漂
わせたまま睨み合って立ち尽くしている。

なにやってんのお前ら？

召喚大会は一試合いくらまでと時間の指定はされていない。流石
に三十分を超えたりしたら待ったがかかるだろうけど…早く終わら
せられるならそれに越したこたえない。

ていうかぶつちやけ飽きた。頭も痛いし。

なにより、そろそろ自クラスの様子を見てみたい。

というわけで――

「悪魔に粹なんて概念はないんだよー！ー!!」

ナツツを茜の召喚獣に向けて突撃させる。

余談だが俺の中学時代のあだ名はブルーデビル、縮めて『ブルデビ』
だった。ハカイシンとどっちが格上だろうか。

『！、！、！、！、！』

鳴き声とも取れる奇妙な音を発しながら、頭に葉っぱを生やした小
人が同サイズの女の子に突進していく。

正直かなり危ない絵面だ。止めないけど。

許せ茜、後で（多分）なんか奢るから！

ぎろり。

ピク●ンナツツが一定の距離にまで近づくと、二体の召喚獣とその本体がすごい目力がナツツを捉えた。

…え？なに、なに今の。茜は分かるけどなんで会長まで睨むの？

思わず背筋がゾツとしたんだけど。

「ナツルてめえ…あんまり調子に乗んなよ、ぶっ殺すぞ」

「空気ぐらい読みなさい。手出しは無用よ」

二人とも目がマジだ。

自然界の不文律^{おきて}

割込みは御法度

絶対的な法則であった…

原子の鎧をも切り裂く毒

破壊^{こわ}れるハズがなかった——

絶対の自信。

ブチ折られ…

びくみ…

生誕1455文字(約)……………

社会を 学ぶ

「なんだ今のナレーションわー！ー！！」

どっから聞こえてきた今の!?誰が喋った!?びくみって誰!?こいつ^{ナツツ}!?なんか体育座りし出したし!?

ええい!ツツコミ所が多すぎてまずなににツツコめばいいか分からん!!俺は本来ボケキャラなのに!!(※そうか?)

そして俺の召喚獣、動かそうとしても微動だにしねーし!

「それじゃあ あらためて、始めましょうか」

「ぶっつ殺す」

再びお互いにお互いを睨み付け合う二人の少女。

主人公そっちのけの戦いが今、始まる！

「またナレーションが!?!てか俺置いてけぼり決定なの!?!」
続く。

15時間目 召喚大会⑥

く茜Sideく

あたしを含めても片手で足りる人数しか居ない空間で、”そいつ”と対峙する。

名前は：知らない。バカがきちんと紹介しなかったからだ。

まあ正直、興味もねえからクソアマでいい。けど確かなことは――

このクソアマはあたしの敵だってことだ。

☆

★

☆

ガキインツツ！

クソアマが投げた鎖付きの短剣を、武器である拳銃のグリップ部分で防ぐ。

Sクラス 三郷雫 世界史 516点

VS

Dクラス 美嶋茜 世界史 269点

そのタイミングで空中に表示されるあたしとクソアマの点数。

他は比較的平均的なDクラス相応な点数だが、世界史は点が取れる科目だ。

担当の田中先生の採点が甘いつてもあるが、一番の理由は知り合いが世界中飛び回っていて、旅先のいろんな国々から手紙を送ってくるからだろう。

中途半端に歴史が絡んでくるから、つい気になって調べてしまう。

そうしているうちに詳しくなった。

いや、詳しくなったつもりだった。

「ナツルとは別方面でバケモンだなてめえ…」500つてなんだよ。

「理解不能な独自のルールで動いてる、無法者な瀬能君を引き合いに出されても困るのだけど」

「別の星から来たエイリアンだっつってんだよ」

「あら、酷いこと言うわね」

「テメーら協力して俺をデイスるのやめろ！」

外野が騒がしいけど無視する。

相手が異星人だろうと関係ねえ、ぶっ殺す!!

パンツパンツ

あたしの召喚獣がクソアマ目掛けて発砲する。

試召戦争の時は弾は出なかったが、今回は大丈夫みたいだ。ちよつと頼りない発砲音だが。

点数が200超えないと使えないのか？

キンキンツ

涼しい顔して銃弾を短剣で防がれる。

この程度屁でもねえってか？舐めやがって…!

「死ねっ!!」

「野蛮ね」

再び引き金を引くが、同様に防がれる。

それだけじゃなくて、召喚獣が猛スピードで向かってきやがった。接近戦も出来んのかよ!

「短剣だからな…」↑ナツル

すぐさま拳銃ぶきを盾代わりにして攻撃をかわす。それでも少し点数を削られた。バケモンが!

パンツ、パンパンツ

お返しに連続して弾を撃ち込むが、短剣の一振りですべて破壊される。

こんなものどうしろってんだチクショウ!!

「大物ぶって頭使ってんじゃねえよバカ! テメーにやれんのは泥試合だけだろうが、アクビが出ちゃうぞ!!」

ドパントツ!!

「がもっ!」

口汚い雑音が聞こえたので、そっちを見ずにエアガンをぶつ放す。

使用した弾は特製とりもち弾。作った奴は『ホワイトベリー』とか呼んでたな。

名前の通りほんのり甘いそうだけど、衝撃を受けて何かに当たった瞬間、破裂して広範囲を絡め取る物体を味見したいくはねえから本当かどうかは分からない。

「……!!」

「瀬能君、大丈夫ですか? 口と鼻が溶けてなくなったみたいに白いものが貼り付いてますけど、息出来てます?」

どうやら口に当たったらしい(※正確には歯に当たった)。丁度いいから後でどんな味がしたか聞いてみよう。(※鬼か)

…ガヤに同調するみたいで気分悪いが、このまま戦^やっててもジリ貧だ。

それなら――!

「くたばれ!」

「物騒ね」

2・3発撃つと同時に銃のグリップを抉^{えぐ}りこむようにクソアマに叩きつける。

Sクラス 三郷雫 世界史 489点

VS

Dクラス 美嶋茜 世界史 212点

中学の時、ナツル相手に散々試した接近戦での攻撃方法は流石に効果があったみたいだな。

「…瀬能君にも困ったものね。パートナーは私なのに、敵側の相手にアドバイスを送るなんて」

「耳鼻科か精神科に行け」

あんな頭の悪そうなヤジがアドバイスとか、正気かこいつ。

「声をかけられる前と後とで、雰囲気がるで違うじゃない。迷いがなくなった顔をしてるわよ」

「関係ねーなっ!!」

横薙ぎに振るわれた短剣をグリップで防ぎ、即座に顔面に照準を合わせて引き金を引く。

2発 3発 4発：普通ならリロードが必要だけど、何発撃つても弾切れを起こす気配がない。

無限なのか？銃使う身からすると夢みみたいな状況だな。

「たった一声言われただけでこうまで変わるなんて、3年の信頼は凄いわね。いえ、想いの力かしら？」

「はっ、なに言ってるんだてめえ!」

「だって好きなんでしょ？瀬能君のこと」

「はっ？」 頭が真っ白になった。

スキ？あたしが？誰を？……ナツルを!?

待て、待て待て待て待て！ちよつと待て！

ナツルだぞ!?あの…普通によく分からない、正体不明のナツルだぞ!!

そんなのに恋愛感情持つ訳…!

思わずチラッとクソの方を見る。

(ト…モ…ダ…チ…)

『……………』

プルプルと小刻みに震えながら、ピク●ンみたいな自分の召喚獣と

手を取り合っていた。

「(ブチッ) テメエなにポルナレフとチャリオツツゴツコしてんだ！」

「(ドゴッ!) イーティーですっ!!」

あまりにもムカついたので、すぐさま走り寄ってナツルの腹にそのまま蹴りを入れる。

つま先がいい感じに横隔膜を貫いたみたいで、口についたとりもちを引き剥がすくらい大きく息を吐き出し、ゴホゴホと盛大に咳き込み出す。

「ゴホっ…ゲホッ! ハー…ハー…死ぬかと…思った…!」

「勝手に死ね!」

っ—かお前 死にかけたら宇宙人との友情育むのか?

「…隙だらけよ」

「ハッ!」

背後からかけられた言葉に、慌てて振り返ると、あたしの召喚獣がクソアマの召喚獣の手によって切り裂かれる光景が目に入った。

Dクラス 美嶋茜 世界史 0点

身体が上下に別けられて無事な筈もなく、当然0になる点数。

「それまでですね。勝者、生徒会チーム」

無情にも田中先生ジジイに試合終了を告げられた。

☆

★

☆

「テメエのせいで負けたじゃねえか!!」

「(ドゴッ!) りふじん!」

足元で今だ転がるクズを蹴飛ばすと、奇妙な音がした。

「ごおおっ…酸欠に脇腹はキツイ…!…ていうか敵同士で争ってんだからどっちか負けるのはあたり前——」

「ならテメーが負けやがれ!!」

「(ドゴッ!!) ふじょうり!」

言い訳をするクズにもう一度トーキック。

さつきより強く、つま先をみぞおちに打ち込む。

「…あまり生徒会の役員をいじめないでほしいのだけれど」

悶絶するナツルに連続で蹴りを食らわしていると、呆れたような雰
囲気なクソアマガが近づいてくる。

「うるせーよ！そもそもテメーがあんなこと言わなきや…！」有利
だったあたしが勝ってたハズだ！

「あんなこと？」

足下のナツルが目ざとく食いついてくる。

「なんか話してたのか？」

「っ、」

『好きなんでしょ？彼のこと』

「~~~~~うるせーバカヤロー!!」

「(ドゴツ!!) ふかかいつ!？」

立ち上がろうと膝立ちになったナツルの顎にひざ蹴りを入れて、足
早に剣道場から出る。

あたしはぜつつつたい、認めねえからな!!

会長「ところで、なぜ彼女をパートナーに選んだの？」

清水「美嶋さんも召喚大会に参加したがってたからですわ！なんでも
ペアチケットが欲しいとか…」

ナツル「…換金でもする気だったんじゃないの？」

会長「(きつと話すきつかけに使いたかつたのでしようね…それが
分からない瀬能君は鈍感を通り越して異常だわ)」

16時間目 ゲスの一面

くナツルSideく

無事に召喚大会第二試合を勝利で終え、桐条先輩から課せられたノルマ（最低でも第三試合まで勝ち上がることを達成した俺たち。

しかしその代償は大きかった。主に俺の。

いや俺だけが代償支払ったのか。肉体的ダメージをこれでもかつてくらい食らったし。

「……まだお腹いたい……」

蹴られた箇所をさすりながら思わず呟く。

あの野郎（女だけど）、蹴るだけ蹴って去って行きやがって……その前に口にとりもちつけるとか完全に殺しにきてるだろ。頭おかしいんじゃないか？

つか召喚獣同士の戦いのはずなのに、操ってる本体直接攻撃するって普通に反則じゃね？キチンと注意しろよ田中先生。

「ちくしょう……茜の奴覚えてろよ……」俺は忘れんぞ。

「心にもない事を言うのね。どうせ明日には覚えてないでしょ」

隣を歩く会長が呆れたような眼差しを向けてくる。

否定はしない。

三回戦目から外部の人間と校内の生徒が観戦出来るようになるんだが、思いの外 観戦希望者が多く来たらしく、急遽会場を変更せざるを得なくなった。

それ故、予定されていた開始時間も変更。見回りする時間が増えちゃったな。

こうやって会長と二人で一緒に行動する必要はないんだが、まあそこは流れということだ。

「美嶋さんだつて女の子なんだから、もう少し優しく接してあげれば大人しくなるかもしれないわよ？」

「疑問形じゃねーか」アドバイスならもつと信用出来るように断定して言ってくれ。

「つーか茜が大人しく？ないない。明日世界が終わるとしてもあの狂犬のような性質は変わりはないだろう。」

「もしも奴が姫路みたく淑やかになつたら、吐血する自信があるね。」

「あ、でも最近の姫路はちよつとなんか…たまに強大こわくになる時があるな。可能性が少し出てきた（ような気がする）。」

「どうしよう…いつ吐血してもいいように、タオル持ち歩かなきゃ。」

「失礼なことを考えた挙句、脇道にそれた後でどうでもいいことを思いついたわね」

「キミは実に失敬だな」そんなに分かりやすいか俺。

「…（まあ今の方が私としてもありがたいけど）」

「？　なんか言ったか？」

「あまりにも小さな呟き———周りの喧騒もあつて全く聞こえなかった———に、思わず会長の方を振り向く。」

「それが良くなかった。」

「ベチャツ」

「きやうつ…」

「あ？」

「突然なにかがぶつかったような、軽い衝撃が胸に走る。」

「それと同時に上がる小さな悲鳴と、今まさに後ろに倒れようとしている少女。」

「つ、とっ」

「反射的に手が出て、少女の腕を掴んで引き上げ、転倒を防ぐ。」

「っあ…」

「それでびっくりしたのか、少女が持っていたモノが手から離れ、前方に投げ出される。」

「ちなみにモノはアイスだ。」

ベチヤアツ：

最初のやつも含めて、俺の服に盛大にアイスが降りかかり、色鮮やかに染め上げる。

しかもタチの悪いことにアイスはサー●イーワンで出されるような丸い形状じゃなく、ソフトクリーム状だった。みるみるうちに流れてズボンにまで染みを作る。

「……………」

「…あイスう……………」

思わず無言で服が汚れていく様を見つめていると、少女が目には涙を浮かべて今にも泣き出しそうになる。

俺の方が泣きてえよ。

「……………」

少女の腕を掴んだまま、空いた方の拳と顔を少女の目の前に近づけていく。

「っ、瀬能君っ」側にいた会長が慌てたような声を上げる。

「…悪いなお嬢ちゃん。俺の服がアイス食っちゃった」

握っていた拳を開く——と同時に千円札をさりげなくイベントリから取り出す。

側から見たら手品で出したように見えただろう。

「次はもつと高いのを買うといい」

札を手渡し、少女がキチンとしつかり地面に立っているのを確認して、掴んでいた手を離す。

「あと歩きながら何か食うのは、危ないからやめた方がいい。どこか腰を落ち着けるところで食べなさい。いいね？」

「…うん……………」

「よし、いい子だ」

「うみゆう……………」

わしわしと軽く頭を撫でてから少々から離れる。

「会長、次のチェックポイント通過しなきゃいけないから俺もう行く

わ

「私もついていっていいかしら?」

「うえ〜?」 嘘ですついて来ていいですっ」

速攻で注射器きょうきチラつかせてきやがったコイツ!

日に日に恐ろしくなつて行く存在に恐怖を覚えながらも、その場を立ち去る。怖いのは最初からか。

少女から十二分に離れると、会長が口を開いた。

「瀬能君、さっきのことなんだけど」

「言うなよ」 柄にもない事をした自覚はある。

が、よそ見をしていたのはこっちもそうだし なによりあんなリアクション取られたらいつもの対応は

「それもあるけどあなた、さっきからアイスを食べに付けっぱなしだけで気持ち悪くないの?」

「よく聞いてくれたなコンニャロー」

キモチ悪いですがなにか?

モノがアイスだから冷たい上ベトベトする。

夏指定の半袖Yシャツもカラフルに染めあげられてて、周りからの注目度もUP!

「イチゴにレモン、あと…紫芋にブルーハワイかな。それにバニラ」

指で搦って舐め、その味と色で内訳を予測する。

赤・青・黄・紫・白。思わずピク●ンを思い浮かべたのは先ほどの試合の影響だろうか。

「つかこれ甘すぎだよ。多分砂糖入れすぎだよ」だからこんなベタベタするんだよ。

水飴以外の糖はクリームミックスを凍結しにくくするんだぞ。(※ウイキ調べ)

「瀬能君…意地汚いわよ。それに、それさっきの娘が口をつけてたじゃない」

「美少女が口にしたものはご褒美です（キリッ）」

変態？オイオイ…バカをおっしやるな。ペロペロ。

うちのクラスの男にアンケートを取ってみろ。多分源と風間以外全員がYESと答えるぜ。（熊飼は…微妙だな）

「……………」

「ゴフっ、ちよっ、ゲフっ、まっゴっ、待って待ってゲっ、無言で腹パンやめて！」

その時の会長さんの目は、桐条先輩のエターナルフォーสบリザード並みに冷たかった。

会長「どうかあなた、よく大人な対応で流せたわね。試合でのこともあったから、てっきり八つ当たりするんだと思ってただけだよ…」

ナツル「あんたが俺をどういう目で見てるのかよくわかったよ…よそ見してたのはこっちだって同じなんだから、無闇矢鱈に暴力振るうかよ」

会長「とか言って、相手が可愛い女の子だからじゃないの？」

ナツル「否定はしない（キリッ）」

会長「……………」

ナツル「ぐふっ！だから無言で腹打ちやめろ！」

17時間目 2—S 水着喫茶『あるじ様とお呼び！』

「着替えた方がいいわね」

的確なボディブローを十数発決めた後、まるでそれが無かったかのように話題を変える会長。

なんとという変わり身の早さ。お兄さんビックリだよ。

周りのギャラリイも——って誰も見てねえ。なんで!?

「瀬能君。ジャージか替えの制服はある?」

「…持つてない」

色々と言いたいことはあるが、何一つ満足できる答えが返つてきそうにないのでとりあえず流す。それよりも現在のことだ。

今日が文化祭ってことだから、体操着もなにも持つてきてない。

そもそもカバンを持つてきてない。

ついでに言うとな財布も持つてきてない。(↑オイ!)

イベントリがあるとなにか持つのバカらしくなるからなあ。

「でも流石に衣類は…入つてないか」仕方ないな。

「ならうちのクラスに来なさい」

決意を固めて一歩踏み出そうとしたら、会長さんが命令口調で待つたをかける。

「…うちのクラスって…S組か?」

「あなた、今から何かするつもりでしょう。顔を見れば分かるわ」

そんなに分かりやすいですか自分?

「どんな行動をするかまでは分からないけど、どうせろくでもないことでしょう。問題を未然に防ぐのも生徒会長の務めよ」

「君はホント実に失礼だな」

俺が問題起こすの前提って酷くない?なんだよ未然に防ぐって。

エライ偏見だよ!

「じゃあどうするつもりだったのよ」

「吉井の制服を強奪する」

身長差を考えたら坂本や島津の方がいいんだが、一番後腐れがないのはやっぱり奴だけだからな。

幸いソーイングセットはあるから、服のサイズは合わなかったら直せばいいや。

「…ろくでなしじゃなくて、人でなしなことを考えてたわね」

山田くん、座布団一枚あげたってー。

☆

★

☆

結局、俺は2―Sの教室に行く事にした。時間勿体ないし。

そうすると問題なのは当然…このデバイスだ。

さつきも言ったがこれ、進むべき道順勝手に決められるから自分が行きたいところに自由に行けないんだよね。どうしよう。

というかトイレとかどうすりゃいいんだ？

「桐条先輩に訊いてみればいいんじゃない？そのデバイスを用意したのも取り付けたのも先輩なんだから」

「なるほど」言われてみりゃ確かにそうだ。

じゃあ早速デバイスの通話機能で…俺の携帯 電池が切れてるか
らな。

マジでこれ貰えないかな。

ピッポッパツ、…プルルルッつ プルルルッつ

『(ガチャッ) はい、桐条です』

「メイ・リンツ、サムスが…サムスが脱いだぞー！」

『……………』

ブツ、ツー ツー ツー

ノーリアクションで通話を切られた。失礼な奴だなあ。

「……………」

いかん、隣にいる会長が液体窒素よりも冷めた眼差しでこっちを見てる。身体に霜がつきそうだ。

違うんだよ、あの…プルルルルって電子音が無線の呼び出し音にそっくりだったからつい…、だからけして悪気があったわけじゃっ。

あ、ハイ、次は真面目にやります。

ピツポツパツ、…プルルルルつ　プルルルルつ

『(ガチャツ)…はい、桐条です』

「お前か」

ブツ、ツー　ツー　ツー

又しても無言で切られた。しかもさつきより早く。

「…瀬能君」

「いやっ、ちがつ、今のは素の対応だ！」

「なおさら悪いわよ」

「…もつともです。」

☆

★

☆

その後、会長の携帯で——俺のは着信拒否されて繋がらなかった——無事に自由行動を許された俺たちは、そのまま二年Sクラスが出し物を主催している教室へと足を運ぶ事にした。

「そういえば会長のクラスってどんな出し物をしてるんだ？」

「喫茶店よ。ごく普通の」

「へー」正直意外。

だってSクラスだけ？ほんの一部を除いてクツソエリート意識(笑)持ちっちゃってる奴らの集まりが、喫茶店とかいう接客業を選ぶとか。ねえ？

出来る出来ない以前に、なんでその案が出たのか疑問だよ。

「作成・接客・経営。その他色々なものを学べるから、是非喫茶店にしようって葵君が提案したのよ」

「葵…ああ、あの優男風の」 試召戦争のときに姫路に勝った奴だったな。

インテリみたいに見える目だったが、外見だけじゃなくて中身もそうだったのか。

つーかこの流れから行くと、俺店の制服着せられるのか？ 召喚大会にも出なきやならんし、いい広告塔にされそうだな。

「ちなみに店名は？」

「水着喫茶『あるじ様とお呼び！』よ」
「帰るわ」

即座に踵を返す。

「どこに帰るのよ。自宅？」

が、腕を掴まれてしまった。

……くっ、力強えな…

「…会長。あんたのクラスの方針にどうこう言うつもりはねえけどよ、水着喫茶はどうかと思うぜ」

一歩間違えたら営業停止されるぞ。よく企画通ったな。

「つーかそこでどんな服を俺に貸すつもりだったんだ」

水着か？ 水着なのか？ テイルズじゃねーんだぞこの世界は。

足は普通に靴を履き、腕には近未来的なデバイス付けて身体は海パン一丁ってどんなファッションだよ。

フランキーだって上にアロハシャツ着とるわ。

「勘違いしないでちょうだい。いくら企画が半裸でも、それをあなたに強制するつもりはないわ」

「どうだか」人を勝手に生徒会に入れたり、筋弛緩剤撃ち込んだりする奴だからな。

「…一時間もしないうちにチームとして同じ舞台に立つんだから、お

かしな格好をさせるわけないでしょう」

…それもそうか。

「でも水着喫茶だろ？」

「二人か二人は制服の替わりになるようなものを持つてる人はいるでしょう」

…：ほ・ん・と・う・だ・ろ・う・な・く・く？

なんかそこはかたなくイヤな予感がするんだけど。

「疑ぐり深いわね…少しは信じなさい。女の子にモテないわよ」

「うるせーな…そこまで言うなら信じてやるよ」

「そ、じゃあ行きましようか」

そう言っつて俺の腕を離し、歩みを再開する。

…いい加減、軽くでもいいから身体を拭きたくなってきた。

ここはパートナーを信じるとしよう。

18時間目 シュレディンガーのパンツ

ヴィクトリアンスタイルを基調とした、シンプルな黒のワンピースのエプロンドレス。

スカート部分は足の先まで隠れそうなほど長いロングタイプ。

頭には清楚な雰囲気を醸し出す純白のフリルカチューシャ。

そしてなんと言っても忘れられないのは、満面の笑顔っ。

「お帰りなさいませ、ご主人様っ」

今日の私はかわいいのよっ♪

「っじゃねーだろクソガ!!」

頭に装着^{っけ}られたカチューシャを思いつきり床に叩きつける。

あまりの衝撃に現実逃避してしまった。ぶっちゃけ自分でもどうかと思う。

「おや、大変可愛らしいですよ?」

「ぶつつコロスぞテメー…」

それ程親しくもないのに話しかけてきた優男（葵だっけ?）に殺意オンリーで睨みつける。

「いやー義経も可愛いと思うぞっ?」

「んー、とても男には見えないねー」

「うるせーよへっぽこ主従コンビ!!黙ってる!!」

我が友^{よいち}はどうした!?あいつが居れば（多分）こんな酷い事にはならなかったハズだ!

後で訊いたらサボって校舎の屋上にいたらしい。ちくしょう。

でもそれが原因で弁慶に絞められたらしい。ざんねん。

「ていうかなんで俺こんな格好してんの!?!」

会長にSクラスに来いっつわれて、まだ数十分も経ってないんですけど!?そんな短時間で一体俺の身に何が!?

……よし、ちよつと待とう。冷静に思い出すんだ。

まず…会長と一緒にこの教室に来た。それは間違いない。

その後……金髪で額にバツ印を付けた男（九鬼、だったな）が、メ

イド服着た女に服を用意させたんだ。たしか。
で、今に至る。

冷静に思い返してみてもよくわからなかった。なにやってんだろ
う俺。

そして服を手配したメイド服の女が、なぜか今俺の頭をワックスで
固めてる。

なにやってんだ、お前。

「…よしできた。つぶ、くくくくく…あはははっ！メイドっ、メイド姿
の桐山ー！髪型揃えるとそっくりだ！」

作業を終えて、俺の顔を見た途端に腹抱えて笑い出しやがった。
ぶちころすぞクソアマ。

桐山鯉きりやまこい——俺に似てるという九鬼家の執事だ。

前にそう言われ、気になって顔写真を見せてもらったが、ぶっちゃ
け似てるような気がしなかった。

なんか…向こうは優男だけど、俺はヤル気なさ男だよ？

髪の色も、あつちは純粹な青だけど俺は水色に近いんだから…偏見
じゃね？

「…満足か？」いたいけな青少年弄んで。

「あ？てめーなにタメ口きいてんだ。自分の序列忘れたのか？」
「……………」

来る日も来る日も血のシヨンベン。
最初に習ったのは…これだった。

『へっ、ヘッドロック…！』

『バカなっ、初動が見えなかったぞ?!』

メイドの頭を脇に抱え込んで、両腕に力を込めて頭を締め上げる。
たったそれだけの行為をただだけで騒ぎ立てるなんて、大袈裟な奴
らだ。（※技完成まで1フレーム）

所詮S組つつつてもモブはモブか。

「瀬能、あずみが気を失つておる。もうやめよ」

「キ・レ・イ……」

「聞いてませんね」

嗚呼……キモチいい……………

「瀬能君。忍足さんの顔が青白くなってきたから、そろそろ本当にやめてあげなさい」

キリキリキリ……と力一杯締め上げると、妙な幸福感に包まれる。

それに浸っていたが、至福の時を邪魔する無粋な声が一つ。

無視してもよかったが……いや、無理だな。なぜなら僕は魚雷だから。

ウソだ。話しかけてきたのが会長だからさ！

「会長、あんたよくも俺の前に顔を出せたな……」

「……………ごめ……なさい……………こんっ、こんな……こんなこと……なるっ、なんて……………！」

「身体震わすくらい笑いをこらえるなら、いつそ思いつきり笑ってくれない？」もちろん俺がいらないところで。

そんな腹と顔面を手で押さええて、俯き加減に顔を逸らされると腹立つんだけど。

「テメー、パートナーである自分を信じろとかなんとか言つてたくせに、この結果を見てなにか思うことはねーのか」

「今のあなた、とつても、輝いてるわよ？」

「（やかましじ）かしまさいっ!!」

もうヤダ、ヤダコイツ！完全に騙されたし！いやこんなの信じた俺がバカだった!!

所詮人間なんてみんな、産まれた時と死ぬ時は一人ぼっちなんだ。他人と触れ合うことでそうじゃないと錯覚するんだ！

「数分以内にもっとマシな男物の服を持つてこい！さもないとコイツ（※あずみ）の頭をスイカみたいにパーンするぞ!!」

「脅迫に走った……」

「とうまー、あの人目が危ないよー?」

「ええ、犯罪者みたいですね。ユキ、あまり見てはダメですよ」
「うん、わかったー」

「かまってほしくてさあ！天気とか成績とか…どんなにくだらなくてもいい！現実の話がしたくてさあ!!」

「分かった分かった。分かったからあずみの頭を搔きまわすのをやめよー」

(メイドの) 主人が声を荒げて命令してくる。

赤の他人に恥をかかすバカメイドでも大事ですかい坊ちゃん？

どうでもいいけど今のこの構図。はたから見たらどう映るだろうか？

メイドがメイドをヘッドロック。それを嗜める禪一丁(※水着です)の金髪大男。

シユールってレベルじゃねーぞ。

「てかこの髪型戻らないんですけど!」

服を待ってる間暇なので、とりあえず頭だけでもいつものヘアースタイルに戻そうとしたが、一向に戻らない。

くっ…!このっ…!なんだこのワックス!まったく落ちないんですけどお!?

髪の毛も手でくしゃくしゃと乱雑に弄ってみたが、少しするとすぐに固められた髪型に戻る。なにこれ形状記憶!?

困惑する俺の様子を見てメイド——^{抱えているの}あずみとは別の奴——が近寄ってきて、

「…あく、これはアレですね。英雄様が使われているワックスですね」
あずみさんにもここまでしなくても…と呆れながら、困ったような顔で脇に抱えられて気絶している女を見つめる。

「なんだ。そのワックスだとなんか悪いのか」

「英雄様が使われているワックスは九鬼財閥で作られている特注品で、これで固めると数日間はその髪型が保たれるんです」

「ええええ」なにそのとんでももひみつ道具。

あの髪型作るためにそんな金かけてんの？

「つてオイちよつとマテ。つまり俺は数日はこの髪型で過ごさなきや

いけないってことか？」

「こんな…ぱつと見直江みたいなヘアースタイルで、数日？
ぜってーなんか言われる。」

「一応中和剤はあります」

「ならそれも持ってこい！」

「九鬼本家にありますので、取り寄せに時間がかかりますが…」
む、そうなのか…通販みたいだな。

「つーかワックスを持ってんならセットで用意しとけよ。」

「しようがねえな。じゃあなるべく早く持つてこいよ」

「かしこまりました。すぐに手配いたします」

「そう言っつてすぐさま携帯電話を取り出し、通話し出すメイド。よきに計らえ。」

「しかしあれだな。こんな近づいてもなにもしようとしないなあんな」
た」

現在の距離約1メートル。手を伸ばせば触れられる近さだ。（ていうか髪を触られた）

人質を奪おうとしたり、危害を加えようとしてきたら即座に反撃しようと思っただが、その気配がまるでない。

「瀬能様には手出しをしないようにと従者一同に通達が出てますので」

「…コイツは？」

「あずみさんは…身をもって危険性を目の当たりにしないと分からないらしい性格ですから」

「そんな性格で大丈夫か？」

「…まあ、身をもって体験してくれたからこれからは態度を改めてくれるだろう。しかしこの格好まったく落ち着かねえ」

ロングドレスだからまだ平静を保ってられるが、ミニスカだったら客のズボンを強奪してたぞ。

「お似合いですよ？」

「嬉しくねえつーの。やたらと視線を感じる気がするし…変なの来る前にさっさと着替え」

ぞっ…

いきなり背筋に悪寒が走った。

「ぱんつ〜」

「——っ、！」

咄嗟に持っていたものを身代わりにして、急いでその場を退く。

後には棒立ちの状態で立ち尽くすメイド（※あずみ）と、

中華風の服を着た水色の髪の女が。

それだけでも驚愕なのに、女はあろうことか両手でなにやら布っぱいものを掴んで匂いを嗅いでいた。

「くんくん…このパンツちよつとおばさん臭い……」

本人に聞かれたら殺されるぞお前。

誰のかは知らんがな〜。

「……………」

呑気なことを考えながらも全力で警戒していると、水色女が布（あえて布と言っておこう）をズボンの腰部分に差し込んで、

「おねーさん、パンツちよつうだい？」

などと、俺に向けて宣った。

さつきまで側にいたメイドは、気がつけば影も形もない。つまりこの台詞は俺個人にのみ言った言葉だろう。

……………今の俺の格好、外見はアレだが…あれだ。下着の類は着替える前とおんなじハズだ。確かめる勇氣はないけどな。

そうまさに、シュレインガーのパンツ！（※ちよつと混乱してる）

もう一度言おう。確かめる勇氣はない。

メイドすがた
この状態で下着を盗られた場合、

女物の下着 ↓ 男なのにそういうものを着用していると周りに知られて世間的に死ぬ。

男物の下着 ↓ 青髪の女に変態扱いされた上に、人前でノーパンにされるといふダブルパンチで二度死ぬ。

↓ そもそもスカートを捲られた時点で精神的に死ぬ。

……………うん。

生まれ落ちて十余年。

人生最大の危機、到来です。

19時間目 2年Fクラス 中華喫茶『ヨーロッパ
ン』

〈直江Side〉

・2―F 中華喫茶『ヨーロッパ』

人通りは良く、方向性も他の店舗と被っていない。

店内も、調度品・装飾品共に見栄えは良い。

出す料理のクオリティも高い。

売り上げ店舗1位とかは最初から狙ってないが、姫路の件もあるからそこそこの利益追求はしていた。

だから設備の向上は余裕でできるくらいの稼ぎは手に入ると思っていた。

しかし、その予想は裏切られた。

☆

★

☆

『どら焼き完売！』

『カステラもだ！』

『おい餡子もうないぞー！どうする!?!』

バタバタと忙しなく動き回るクラスメイトスタツフ達。

：一応客前なのでもうちよつと静かにして欲しいんだが、そうも言ってもらえないくらいの忙しさだ。

と言っても、店の中は比較的空いている…いや、人がいる事はあるんだ。ただ客と呼べるのはそんなにいない。

もっと言えば飲食しているのは、一人だけだ。

「はわわ、みんなすごく美味しいです〜！（ヒュゴッ）」

水色の髪をした少女が又しても、配膳途中の和菓子を乗せた皿をピ
ンクの悪魔みたいな食事方法で空にする。

せめてテーブルについてから食ってくれ。

『うわっ!? またあの食い方か!?!』

『掃除機みたいに吸い込まれたぞ、どうなってるんだ!?!』

俺も知りたい。

この少女のこの食い方のせいで、見物人は多いのに客が全く入らな
いという謎現象が発生している。

さしずめ動物園のパンダと言ったところか…じゃあ俺たちは飼育
員?

あまり歓迎したくない状況だな。

「大和…もう材料ほとんどないって厨房の土屋君が言ってたよ。どう
しよう」

「まだ昼だぞ…!」

それも初日の。

こんな早くに閉店の心配するとは思わなかった。完全に予想外だ。
飲茶用の軽食とはいえ、あの少女の細い身体のどこに何十人分の食
材が入るんだろうか。女体って不思議。

…というか。

「お客様。食事中すみませんが、支払いの方は大丈夫ですか?」

食券の作成は間に合わなかったから、後払い形式なんだよな。

俺の台詞に少女は食事の手を止めて、

「むぐっ、お支払いですか?」

「はい。こういうのです」

自分の財布から硬貨や札を取り出して少女に見せる。

そもそも日本円を持ってない可能性があるからな。見た目的に。

案の定 百円玉や千円札を見た瞬間、少女はあたふたと慌て出す。

どうしよう…こうまで好き勝手食い尽くされた挙句に無線飲食は
勘弁願いたいんだが…

とはいえこんな華奢な少女相手に借金の取り立て屋みたいな事するの、人としてどうかと思うし…くそ、こんな時ナツルがいればっ。

「あつ、あのっ…これじゃあ、ダメですか…？」

恐る恐るといった様子で少女がなにか差し出してくる。

その掌に乗っているものは、

金貨

「……………」(↑あまりにも予想外な事態に思わず固まる大和)

「ダメ…ですか…？あつ、もしかしてもつと必要ですか？」

そう言つて少女は、じやらじやらとポケットから次々と金貨を取り出し、机の上に置いていく。

見る見るうちに、かるくソフトボールくらいの小山ができた。

明らかに服に入る量を超えているんですけど…胃袋が四次元ならポケットも四次元か。

…今の金の価格^{きん}つて、純金で1グラムだいたい4000円くらいだったよな。多分。

パツと見た感じ、机の上には50枚以上ある。店ごと食い尽くす気かこの娘^こ。

「だっ…ダメ…ですか…？」

俺が無言でいると、少女が泣きそうな表情で不安がる。価値が分かっけないようだ。

騎士みたいな鎧着た女性とかと一緒に入店してきたから、どこかの国の貴族なのかもしれない。

ちなみにその騎士みたいな人たちは、店内の人形(ナツル作)に夢中だ。

「…………どう思う？」

「これは…信じられませんっ、これが…木彫りだなんて…！」

「私も同じ意見だ…これは間違いなく、名のあるビイクン職人の仕業

だろう」

「姿形は元より、身長や鱗の質感まで完璧に再現されている…!」

「木目を上手く、身体の模様に利用するなんて…」

「しかもただ現物をなぞるだけじゃなく、アクセサリーを持たせたりしてオリジナリティを出している…人間技とは思えない…!」

「あえて木目を際立たせる手法を用いたものも、これはこれで素晴らしい…」

「…っ、バカなっ、触感まで同じだと!?!」

確かにクオリティは高いと思うけど、あそこまでのめり込むなんて…外国人のツボはよく分からない。なんだビイくん職人って。

人間技と思えないのは同意だけど。

まあそれは置いといて…どうするかな。

正直金額がデカすぎる。一介の学生が開く模擬店で扱っていいものじゃないぞ。金貨って。

とはいえ他に持ってないみたいだし…本当にどうしよう。

『受け取っておけばいいじゃないか。売り払えば大金持ちだぞ? 軽食の代金は俺が立て替えればいいんだよ』

うぐっ…悪魔の囁きが…!

『見ろよあの金貨の山。あれだけあれば大抵のものは買えそうだな? ヤドンとカリンの住居とかさ?』

ヤドン…カリン…!

『ダメだッ、ちよつと待て!』

『ッ、』

悪魔の囁きが舌打ちのような音を小さく漏らす。

これは…天使か? 助かった…

『金貨はとりあえず懐に仕舞っておいて、もっと金の価格きんが上がってから売り払う。これがベストだ!』

『なっ、なるほど!』

確かに、金の買取価格で最高は1グラム6945円…それを考える

ともう少ししたらもつと値段は上がるかもしれない。

それにこれだけの量をまとめて売りに出したら値崩れを起こす。

ここは慎重に――

「って違うだろ!!」

「ひうつ!?!」

なんで横領が前提だよ! おかしいだろ!

「あの…?」

「あつ、いやつ、…すみません。発作です」

間近でいきなり大声を上げられたせいで、不安げな表情をより一層深めて目を白黒させる少女。

咄嗟の言い訳に別な意味で目を白黒させている。

若干かわいそうなものを見るような目をされている気がするの
は気のせいだと思いたい。

「あの、えつとですね。できれば日本円で支払って貰えるとありがたいんですが…、これ（金貨）だと金額が大きすぎまして…」

為替取引の議論を始めた脳内天使と悪魔の声を意識の外に追いやり、ベターだ
と思う答えを返す。

「もし他に通貨をお持ちでないなら、お手数ですが両替を…」

してほしいんだけど。そんな知り合いいるかな。

「あうう…そうですか…えつと…そうだ! シャロさんならなんとか
してくれるかもしれません!」

「シャロさん?」

「知り合いの商人さんです! えつと…呼んでもいいですか?」

尋ねるような視線に接客スマイルで「大丈夫です」と答えると、少
女は席を立って、一緒に来店してきた面々に近づいていく。

2・3回なにか言葉を交わすと、集団から2人ほど抜け出して教室
の外へと歩いていく。多分シャロとかいう人を探しに行ったんだろ
う。

とりあえず、タダ食いされる事態は避けられた…かな？

商人の人が無理だったら、天使の案を実行しそうで怖い。ナツル、早く帰ってこい。

「すまない、ちよつといいだろうか？」

遠い目をして、今この場にいない悪友のことを考えていると、金髪の女性に話しかけられる。

さつきまでナツル作の木彫り人形に夢中になっていた内の一人で、その中でもとくに熱を上げていた人物だ。

なぜか腕には数体の人形を抱えている。

「…お客様、調度品を勝手に持ち出すのはご遠慮ください」

「この子達を譲ってほしいのだが」
聞けよ。

「…申し訳ありませんが、そちらはスタッフの私物ですので」

作成自体は数秒しか時間がかかってないが、販売の提案をしなかったんだ。愛着はあるんだろう。

なんか似たようなの複数体作ってるし。

「本人の了承無しに勝手に売買などをするのは…」

「そこをなんとかッ！」

食い下がるなあ。そんなに気に入ったのか？

「頼む！価値あるものだというのは百も承知だが、どうしてもこの子が欲しいんだ！」

いや、とんでもパワー使って作り上げた一品ですけど、元はタダで貰った木屑です。

「100枚までなら出すから！」

なにを？もしかして金貨？

執着が強すぎて軽く…いやかなり引く。

頼むから製作者本人と交渉してくれないかなあ。

「この子と離れ離れになるなんてイヤだー！！！」

「お客様、お客様っ、それクラスメイトの私物なんで握り潰すのは勘弁してください！」 圧迫されてメキメキいってる！

鎧込みとはいえ腕の力だけで木の塊凹ますってどんな力してんだこの人!?

なんか人形の口から出てはいけない液体が出てる!?!なにあれ樹液!?!どうなってんの?!

「お願いだから一緒に行かせてくれー!!」

「先に逝きそうですけど!?!」 圧死で。

一難去ってまた一難。売り上げは結果を見れば初日完売だから、売り上げは問題なさそうだけど…明日以降客が来なさそうだ。

それ以前に営業できるのか?

…ナツル…お願いだから、一刻も早く帰ってきてくれ…!!

20時間目 0以上1未満

くナツルSideく

もう何度打つただろう。

ジャブ・フック・ストレート…何百回何千回、気が遠くなるほどの数を叩き込んだきた。

すべては——この一撃のために!!

「古牧流・虎落としー!」

「へっふっ!」

ガドツ!と普通なら音がする勢いで、向かってきた中華風の服着た水色の髪の女を殴り飛ばす。

が、全く手応えがない。女は弾かれたように後方に吹っ飛ぶが、くると空中で猫のように一回転して、何事もなかったかのように床に着地する。

それも音一つ立てずに、だ。完つ全に威力を殺されている。

ダメージうんぬんよりも、引き離すのが主だからいいっちゃいいと…いややっぱダメだな。気絶してくれないとこの攻防終わらない。

体つきはワン子並みなのに、技術力がハンパねえ。

虎落としても、何回も撃つちやあいるが最初の一度でモーシオンを盗まれた。今は緩急をつけたり他の技組み込んでなんとか誤魔化して当てているが、もうそろそろ攻略されるだろうな。

間違いなく強敵だ。

モモさんあたりなら喜んで死合うだろう。

「強いね、お姉さん。いいパンツ履いてそう!」

さも嬉しそうに微笑む水色髪の女。パンツ関係あんのか。

…ハイレベルな駆け引きしてるのに、戦闘の理由が下着の取り合いと思うと悲しくなってくるな…泣けるぜ。

てかい加減止めるよ誰か。教室前に人だけ出て来てんぞ。

これ下手したら営業中止になるんじゃない?

「とあっ!」

「っ！」

ほんの少し、意識を別のことに向けた隙に女が仕掛けてきた。間の抜けた掛け声とは裏腹に、鋭く速い…突風のようなスピードで近づいてくる。

「っさあっ!!」

迷わず虎落としを放つ。狙いは眉間。

当たる——!と思った瞬間、ダッキングで避けられた。

ただでさえ前傾姿勢だったのに、屈み込むことで地面すれすれの位置に頭部が。

しかもその体勢のまま俺の足元に迫ってくる。蛇かお前は。

「近寄んなクズが!」

「ぶあっ!」

虎落として突き出した拳を、完全に戻さずに軌道を変え、女の下に滑り込ませてアッパーをかます。

改良版・飛燕。右だけど。

もつと違う場面で使いたかった。

顎を跳ね上げられて怯んだ隙を突き、背後に下がる…

…：サガル?誰が?

…：俺がか?

退いてどうするんだ?逃げるのか?きつとどこまでも追ってくるだろうね。

というか俺が悪い訳でもないのに、なぜこんな変態から逃げねばならんのだ。理不尽だ。

そしてなにより、ここで背中を見せたら調子に乗るだろう。

俺は自分より下だ、とかなんとか。

こんなただの変態女に舐められるのは、たとえ神が許しても俺が許さん。

——1フレームキル——

今だ顔面を天井に向けている女の背後に、瞬時に移動する。

—— 気絶の極み！

側頭部にモンゴリアンチョップ。さらに追い打ちで首元にダブルスレッジハンマーを叩きつける。

え？ 本家と違う？ 細けえ事はいいんだよ。

それに、結構力を込めて行った攻撃も、目の前の女の意識を奪うまでは至らなかった。

半失神状態なのか、身体をふらつかせ時折「うあ……う……？」と呻き声を発している。

アレで気を失わないってどんだけ頑丈なんだよ。本家の通りにやってたら反撃で下着盗られてたじゃねーか。

……しよすがねえな。

「よろこべ、お前が一人目だ」

「……ふ……え……？」

朦朧状態の女の襟首を、背後うしろから両手で掴む。

そのまま背負い投げのように担ぎ上げ——

「古牧流・鉢崩し」

ゴツツツ!!!

近くに設置してあったテーブルに後頭部から思い切り叩き付けた。ただでさえ人を殺傷する危険性が高いとされる技。

しかもそれを、本来の顔面（あるいは顎）ではなく後頭部に食らったんだ。即死、最低でも後遺症は免れないだろう。

無論、

『あいつ……テーブルぶち抜きやがった……！』

『さっ、最高級のアンティーク家具が……！』

まともに決まれば、だけどな。

どうも攻撃の土台として利用した机が脆かったようで、叩き付けたと同時に崩壊してしまい威力を存分に発揮できなかつたようだ。本気でやったのに。

「虚偽申告になっちまったな」

仰向けの状態で寝転がって、時折弱々しく震える女を見つめながらぼつりと呟く。

完全に意識のない奴を手にかけることは、流石に出来ねーぜ。

☆

★

☆

「本当にこんな服のしかなかったのか？」

「はい。もう少しお時間を頂ければ別の衣装を用意できたのですが…」

「いや、別にいいんだけどよ…マシなのではあるし…」
ぶつくさと言いながらも、受け取った服に袖を通す。

変態を撃退した後、測ったかのようなタイミングで着替えを持った九鬼の従者が到着した。

もっと早く持ってこいよ…いや 戦闘中に渡されても困ったけどさ。

早速、Sクラス所有の更衣室を（許可なく）利用して、メイド服からコスチュームチェンジ。

長かった…数分しか経ってないはずなのに、やたら濃い時間を過ごしてしまった。誰のせいやら。

そういえばあの青髪の女はどうしただろうか。

移動する際チラッと見たが、担架みたいなものに乗せられていた。保健室にでも連れていかれたかな。どうでもいいが。

「着替え終わったぞ」

「はい。…これは」

今まで着ていたのを、付き添いでやって来た従者に差し出す。
なぜか驚きの表情をさせられた。

「燕尾服を着るとますますそっくりですな」

「……………」

受け取ったのは執事服だった。

おめでとう！ ナツル は メイド から しつじ

に しんか した！

21 時間目 死神を殺す方法

何はともあれ、ようやく落ち着いた格好になれたので水着喫茶に戻る。

燕尾タイプの執事服が落ち着くつてのも変な話だがまあそれは置いておこう。

でも普通に着てたら右腕だけ違和感があるから、そこだけ肘あたりまでめくつている。ほらオーバーテクノロジーがね…？

このままFクラスにでも行こうとも考えたが、時間もなさそうだからやめた。流星にそろそろ始まんだろ。召喚大会三回戦。

「ただいまー」

このクラス

2—Sに所属してる訳ではないので完全にギャグで発言しながら扉を開ける。

これくらいはいいだろう。

「む？桐山ではないか。なんのようだ」

教室に入った瞬間、禪一丁の金髪が第一声でそんな言葉をかけてきた。

「……………」

「しかもなんだその台詞は。巫山戯ふざけてるのか？」

お前が言うな。

「……………」

「…どうした？なんとか言ったら——なんだこの音は？」

キュイーン キュイーン

「ダッシャーボム！」

「グハツ!？」

終始偉そうな態度を取るふんどしマンに、力を貯めて右エルボー。

「ダッ！シャツ、シャツ、シャツ!!」

「グハッ！ごっ！ゴフツ!？」

衝撃を受けて大きくよろめいた男に、追撃で左アッパ。

られる。

この声は会長だな。

「落ち着けだ？これが落ち着いて——つてテメーなに飯食ってんだよ!?」

振り返るとそこには、モダンな感じのテーブルで一人、優雅にお食事を頂いている生徒会長の姿が：

「お昼よ。今のうちに食べておかないと、時間を取れない可能性があるから」

「ならもつとふさわしいもん食えや！」

お茶漬けじゃなくてさあ！

モダンな感じの食卓に一人で座り、どんぶり飯を匙で、スープでも飲むように頂いている姿はなんか：もうなんて言っていていいかわかんねーや！

「ステーキとか食えよ！フィレ肉とかよ！」

「軽食を主とした喫茶店でそんなのがある訳ないでしょう！」

ならパンケーキでも食ってろ。ギャップを狙うな。

「あーもーームシャクシャクするっ！」

衝動的に頭を掻き回すが、数秒でセットされた髪型に戻った。

ムシャクシャする!!

「さつきも言ったけど落ち着きなさい」

「敵を目の前にして拳^{けん}を退けだど？できるか!!」

こうなったら全員血祭りに上げてやる：！塵殺だ!!

「お昼ご飯奢るわよ」

「しようがないにゃあ」

マスクを外して会長と同じ卓につく。

塵殺？やだなあ。慈愛に脊髄生えているような私がそんなことを言う訳がないだろう。

「：あなたってすごい現金よね」

「人間ってそういうもんだろ？」

少なくとも俺は、現金じゃないって奴に今まで出会ったことはねー。

☆

★

☆

（雫Side）

「そういえばふと気になったんだが」

同じ食卓に向かい合うように座り、私はご飯を食べ、瀬能君はメニューを眺めている。

そしてなぜか、彼の隣にはSクラスの男子代表である葵君が同席している。

「…これちょっと高すぎじゃね？学祭で出すものの値段じゃねーぞ」

「高級な食材を惜しみなく使ってますから。ちなみに料理を盛り付ける食器も高級品です」

「だからって最低が千円とか…丼もののチェーン店なら二杯はいけるぞ」

無駄にプライドが高い子が多いから、気付いたらこんな料金設定になつてたのよね。本当に社会を学ぶ気があるのかしら。

でもそこそこお客は入っているみたい。不思議ね。

「瀬能君、訊きたいことって料金のこと？」

「ああいや、それじゃなくて」

私の問いに、メニューに向けていた目をこちらに向ける。

どうでもいいけどすごい絵面ね。執事服の男の子と、上半身裸の男の子が同じ席に並んで座っているって。

「呂布ちゃんってどうしてんの？姿見ないけど」

「ああ、あの娘」

最先端技術で現代に蘇った、呂布奉先のクローン…と言われている娘。

史書で呂布は、勇猛さと卓越した武芸を持ちながらも自分勝手に人

をすぐに裏切る。と言われている。

しかし普段の彼女は、授業中はぼーつと虚空を見つめていて、休み時間になるといつの間にか消えている。

そして授業が始まる時には、これまたいつの間にか席に着いている。これの繰り返しだ。

瀬能君に付き添うような形で生徒会に参加したり、教室以外で姿を見ることは多少はあった。

ここ数週間はずっとSクラスで準備を手伝っていたみたいだけど…正直なにを考えているのかさっぱり分からない。

「気になりますか?」

「まあ一応。出会ってからずっとべったり付きまとって、俺を主みに扱ってるからな。結構おざなりだけど」

さつきだつて助けに来なかつたし…とぶつぶつ文句が溢れる。

普通に考えて女装してる主君を助けに行くのはちよつと憚れると思っただけ。

……メイドの…かつこ、…かつこう…した………!

「オイなんだ会長、いきなり俯いて肩なんか震わして。よく分からんが不愉快だからやめろ」

「ごめ…なさつ…!」

分かってるけど止められない。

瀬能君が似合いすぎるのがいけないのよ!

「彼女は厨房で調理を担当しています」

「え、あいつ料理できたの?」

「ええ。とてもお上手ですよ」

「知らなかった…うちだと食ってばっかだからな…」

今なにか聞き捨てならない言葉を聞いた気がするわ。

「てことはここにあるもの、呂布ちゃんを作る物も何品かあるのか」「何品か、というよりほとんどが呂布さんの料理する物ですね。このオムライスとか」

問い詰めてみたいけど、二人で一つのメニューを開いて楽しげに会話をしている姿を見ると、そうしてはいけないような気がする。

いつの間にそんなに仲良くなったのかしら。

「オムライスも二千三百円か。たっけえなあオイ……ん？なにこの『愛』って」

「ああそれは……試しに頼んでみたらいかがですか？」

「値段が一万円って書いてあるんだけど……」

とつさに卓にいくつか備え付けで置いてあるメニューを手に取った。

………本当に、リストの一番下に、『愛』という文言が筆記体で書かれている。値段も瀬能君の言う通り一万円。

「なにが出てくるんだよ一体……」

「それは秘密です。ですが、損はしないと思いますよ？」

「俺そんな金持ってねーぞ……ここって学園発行の食券使える？」

「それはちよつと……ですが、支払いは会長では？」

葵くん？

「あーそうだったな。じゃあ試しに一つ」

「こちら単品でのオーダーは出来ない品となっております」

「抱き合わせかよ。うまいことするな……じゃオムライスとセットで」

「畏まりました」

そう言い残して葵君が席を立つ。

多分厨房に料理を注文しに行ったのだろう。相変わらず仕事が早いわ。

……じゃなくて。

「瀬能君」

「なんだ会長……いきなり万年筆なんてチラつかせて」

ああいけない。つい気持ち先走ってしまった。

「ひよつとして脅しか？……甘く見られたもんだな。いつまでも凶器そんなもんで俺を従わせれると思ってるのか？」

そう言っただけを思ったのか、メニューを置いて目に見えて分かるほど大きく、鼻で息を吸う。

……まさかっ。

「追加だ！愛をさらに二つ！」

止める間もなく、大声での追加注文が厨房に直接通る。

「瀬能君、あなた……！」

「くくく…倍プッシュユだ。まさか生徒会長様ともあろうお方が、自分で言ったことを反故にはしないよなあ？」

ニタニタと嫌らしく——事あるごとに自分をゲスと称するにふさわしい——嬉しそうな満面の笑みを浮かべる。

「反骨精神を搭載した俺をいつまでも好き勝手動かせると思わないことだ」

……合計で三万二千三百円。手痛い出費ね。

自分から奢ると言った手前きちんと払いはするけど、その顔一回殴っていいかしら？

☆

★

☆

「……お…お待ちどう…さま…です…」

注目をしてからしばらくして、料理がやってきた。

結構時間かかったわねえ…お茶漬け食べ終えちゃったわ。

「おうやつと来たか…ってお前その格好っ」

瀬能君が右腕に装着しているデバイスに向けていた視線を外して（待っている間ずっとゲームをしていた。取り付けられたのが今朝だというのに、手慣れた感じがする…）、顔を上げる。

そこに居たのは、

190cmはあろうかと思える程の高身長。それでいて出るところは出て、引っ込むところはキュツと引き締まっている。

褐色の肌、真紅の髪、整った顔立ち。私のクラスメイトでもある、呂布奉先さん。

現在はSクラスの出し物のコンセプト通り、水着を着ている…いるのだけ…

見たところ学園指定の女子用スクール水着。ぴっちり張り付い

て身体つきが強調されているから、スタイルがいい事を改めて確認させられる。

でもそれで分かるのは下半身まで、上はなぜか改造制服を着用しているの、肌はよく見えない。

よくよく考えてみれば、スカートが無い以外はいつも通りだ。

『うおおおおおおおおおっっっ!!』

「……………」

しかし女の私と異性の感覚は違うのか、常日頃からその姿を見ているはずのクラスメイトを含めて、ほぼ全ての男子が歓声を上げる。

視線を一身に浴びて、褐色の肌が朱くなるほどに恥ずかしがる呂布さん。

少しでも身体を隠そうと、片方の手で襟首を、もう片方の手でシャツの裾を掴んで上下に引っ張る。

当然その程度で隠せる訳はない。…が、その様子を見てますますテンションを上げる男子たち。

…バカばかりね。

どうせ瀬能君も同じように両手を上げて喜んでいるんですよ。

「ガツデム!!」

予想に反して、悔しそうに卓に拳を叩きつけていた。

「おや、お気に召しませんでしたか？」↑葵 冬馬

「嫌いな訳じゃねえ…嫌いな訳じゃねえんだ、俺だって男だからな。でも…俺が一番欲しいところが全くみえねえ!」

「欲しいところって…どこだよ。胸か？」↑井上 準
「喉のど」

…教室内が一瞬で静寂に包まれる。

「…なんだって?」

「喉」

「…そうですか、瀬能君はうなじが好きなんですな」

「いやそれ後ろ側だろ。それはそれで興味あるけど俺が言ってるのは前面だ」

惜しげも無く自分のフェティシズムを語る（見た目）麗しい執事。心なしか活き活きとしている。

どうしましょう。瀬能君が遠い…

「齧ったら美味そうだよな。姫路とかさ」

しかも趣向の理由が獣的だった。

「頼んでみたらいかがですか？ 姫路さんは無理でしょうけど、呂布さんなら了承してくれるかもしれませんよ？」

「!？」

葵君の提案に呂布さんがビクツと身体を震わす。

「ああ？ バカ言うな。慈愛に脊髄が生えて動き回っているナツル君は、人の嫌がる事が出来ないんですよ」

どの口が言うのかしら。

先月の運動部の視察で、模擬戦を行なった際に笑いながら相手を痛めつけたの、一花かずはから報告があつて知ってるのよ。

「それに…ナツは呂布ちゃんに嫌われると、とつてもとつても悲しくなるクマよ」 c.v. 山口勝平

ザク

「いってエツ!!」

「あら、ごめんなさい」

ついイラつときて、無防備な瀬能君の手を万年筆で刺してしまった。

…ペン先が根元まで突き刺さつたと思つただけで、痣だけで血の一滴も滲んでないわね。

「ちよ、見た!? 見た今の!? ていうか見たよね呂布ちゃん、いいの? ああ、このほつといていいの?」

「……がんばる」

「このなんちやってクサれ従者が!!」

痛そうに手の甲を抑えながら尋ねたけど、いつもと変わらぬ様子で袖にされる。

目の前で主人が害されたのに、全くの無反応って…

「ぐううう…!もういい!所詮人間なんて一人ぼっちなもんなんだ。気にしてたまるか!」

「口に出してる時点で充分気にしてるんじゃないの?」

「とつとつその飯をよこせ」

瀬能君は私の台詞を無視して、オムライスが乗ったサービスワゴンを指差す。

その口からぶつぶつと文句が溢れる。

「このクラスに来てから散々だ…なんで飲食や雰囲気を楽しんでリラックスするはずの喫茶店でこんなに疲れるんだ…」

災難ね。

じめじめとキノコでも生えそうな空気を発してる執事をよそに、いそいそとオムライスをテーブルに並べる呂布さん。

「……どうぞ」

「…ああ。まあ落ち込んでてもしょうがねえ。いつも食ってばっかの子の料理の味を拝見させていただこうかな」

そう言つてスプーンを手に取り、そのまま卵に突き刺す…

「あ、ちよつと待ってください」

寸前で葵君から待ったがかかった。

「なんだよ。なんかもう食う前から腹一杯で、さつさと終わらせたいんだけど」

「難儀なものね」なにも口にしてないのにお腹がいっぱいって。

「もう一品、頼みましたよね。先にそちらをお楽しみください」

「あ?ああ、そういやそうだったな。確か愛とかなんとか」

その台詞が発せられた瞬間、呂布さんが又してもビクツと震えた。

「なんだ?ケチャップでハートでも描くのか?」

「…………お……」

「?」なにかしら今のか細い声。

「……お……おい……しく……なあ……れ……もえ……もえ……きゅん……つ……」

「か細い声の主は呂布さんだった。」

彼女は顔を自身の髪の毛と同じくらい真っ赤に染めて、手でハートマークを作る。

その矛先にはオムライス……ではなく瀬能君。

目を瞑ってたから狙いが外れただけで、狙ってやったわけではないと信じたい。

「がハッ!!」

その瀬能君がいきなり血を吐いて横倒しに倒れた。

……彼の血がオムライスに……

「?!、?!」

「瀬能君……ケチャップがないからって、自分の血を代用するなんて……」

「それはないと思います」

冗談よ。

「ごふっ……こ……これが、愛……か……?」

卓を支えにゆっくりと、震えながら椅子に座り直す。

少し突いたらまた倒れそうね。

「そうです。お気に召しましたか?」

「そうだな……中々パンチが効いてイイ味してたぜ。だからもうすんな」

「っ、」

呂布さんが一回小さく震えたあと、なぜか悲しそうな雰囲気醸し出し始めた。

基本は無表情なのに感情が分かるってすごいわね。

「おや、なぜでしょう」

「見てただろうが……俺は萌えるとダメージ受けるんだよ」

なに、そのおかしな体質？

「親父も爺さんもそうだったらしい…一族特有のものだな」

「なるほど…大変ですね。ではあと二回頑張ってください」

「話し聞いてた？」

発言を無視して水着姿の男が執事を背後から抑えつける。

店内のあちこちから小さな歓声と…先ほどの男子のソレとは比べ物にならないくらい、興奮した視線が向けられる。

「おいテメエ、なにを！」

「お客様、頼んだからにはキッチンと召し上がっていただかないと困ります」

「ざけんな、取り下げに決まってる！クーリングオフだ！」

「通販ではありませんので、返品はできません」

先ほどの一撃(?)のダメージが抜けていないようで、振り払おうともかく腕が弱々しい。

「呂布さん、お願いします」

「…もえ…もえ…にゃんっ！」

「お前手先まで真っ赤じゃねーか！そんなに恥ずかしいならやるのヤメろー！」

瀬能君が羽交い締めになれながらもなんとか止めさせようとするが、少女はそれを無視して行動を続ける。

家臣に命令を無視される主…

「…もえ、もえ…にゃんっ」

「がバはッ!!」

今度はさつきのとほ違い、軽く握った拳を頭の上に持ってきて、まるで猫のようなポーズだった。

しかも身を屈めて下から覗き込むように見つめると、申し合わせたように瀬能君が吐血する。

呂布さんの髪に血が付いたわよ。

料理にかかった分は数十秒程で跡形もなく消えたけど、どうなっ

るのかしらあれ？

「お…お前…変化はなしだろ…!!」

「大変可愛いですねえ。では最後の一回」

「ヤッサーからやめろでいあびてるやつさーろツ!! (だからやめろって言うてるだろ)」

なにを言ってるか全くわからないわ。

「離せー！そっだ！世界の半分をお前にやろう！どうだ!？」

「いません」

ひと昔前のRPGの最後の敵みたいな台詞を…

「ていうかお前なんか怒ってない？なんで!？」

「いえいえ、散々暴れられて店内をめちゃくちゃにされた挙句にクラスメイトを傷つけられたら普通は怒ります。とはいいませんよ」

「思っきし言ってんじやん!」

それだけが理由じゃなさそうだけど。

「それでは呂布さん。最後にもう一度お願いします」

「やーめーろー!!」

「……も…もえ……もえ——」

——ぎゅっ

両手を胸の高さ辺りで震わせたまま立ち尽くしていたかと思いきや、次の瞬間には呂布さんが瀬能君を抱きしめていた。

しかも羽交い締めにしてた葵君を少し離れた場所に移動させて。

なぜ彼女がやったと思うのかというと、移動した本人が困惑した表情をしているから。

先ほど瀬能君も転移の真似事をしていただけ、流行ってるのかしら

？

「……♪」

「……」

満足げに頬ずりする赤毛の少女と、されるがままの青髪の執事。

その場所だけ静寂が訪れる。

——数秒後、ゆつくりと呂布さんを引き剥がした瀬能君が、火山が噴火するように勢いよかつ盛大に吐血した。

天井一面を真っ赤に染め上げるくらいの血とともに意識を失った彼だが、その表情はどこか幸せそうだった。

……………なんとなくイラつとするわね。

われれば変わるもんだねえ」

義経「抜き身の刃か：確かに昔の呂布ちゃんはそんな感じだったぞ」

弁慶「いまは錆びついた上に低反発やらなんやら、クツション性の高いものでぐるぐる巻きになってるけどね。まあでも、前よりはいいんじゃない？」

義経「うんうん！瀬能君は流石だな！義経も見習わなきゃ——」

弁慶「それはやめて」

義経「そう言えば呂布ちゃん、料理はどこで練習したんだ？九鬼の家でやってるの見たことないぞ」

弁慶「いつもナツルにべったりだったからねー。ああ、もしかしてナツルに教わったの？」

呂布「(ふるふる)……教わってない」

義経「え？じゃあどうして……」

呂布「(すつ……)……覚えた」

弁慶「なんだいナツル指差して……って覚えたって、もしかして見て覚えたの？」

呂布「(こくり)……」

義経「呂布ちゃんすごいぞ！」

弁慶「どうりで家庭的な味だと思ったよ」

呂布「……おいしい」

弁慶「へー、ナツル料理上手いんだ。意外だね」

呂布「……お昼」

義経「お昼？……そういえば呂布ちゃんいつも学食で瀬能君と一緒に食べてるけど、瀬能君学食で呂布ちゃんお弁当だぞ！」

弁慶「学園で九鬼の人間から渡されてるんだと思ってたけど、あ

れつてもしかして…」

呂布「(こくり)……作つてくれる」

義経「なんで瀬能君自分のも用意しないんだ？」

弁慶「面倒なんじゃない？」

22時間目 召喚大会⑦

くナツルSideく

散々だ。

来た途端に制服を剥かれてメイド服を着せられ、変態と戦わされる。

それが終わったかと思ったら、不当に乏しめられた挙句に吐血させられた。

ついでに顔に無いこと無いこと書かれたし。最悪だよ二年S組。
清涼祭後の人気投票で絶対悪票入れてやる。

(※悪票・通常なら加点の対象になるが、これを入れられると減点される。一票でマイナス3ポイント)

「そろそろ三回戦が始まるみたいよ。急ぎましょう」

「へーいよ」

会長の台詞に適当な返事をしながら、手鏡できちんと顔の文字が消えているかを確認する。

手で頬肉を引っ張って隅々まで…。クソツ、ベンジンで字を消したからガソリン臭え。なんでサラダ油やハンドクリームが無くて、原油から分留精製した揮発油きはっゆがあるんだよ。

引火性が非常に高いからしばらく火の側に寄れないだろうが。三回戦終わったら速攻シャワー室行こう。

「…おい、どうするよ」

「ああ…完っ全に当てが外れたな。テーブルも教室も…出す料理も立派なもんだった」

「あれじゃ、下手にケチつけたら逆効果だぞ。作戦がパーだ」

「噂の問題児も居なかったみたいだしな…チツ上手く行かねえもんだ」

「どうする？危ない橋渡るのはごめんだぜ」

「そうだな…とりあえず報告だけして、俺たちは召喚大会に専念するか。他にも協力者はいるらしいし」

「それが妥当っぽいな。人数増えて試合数も増えちまったし…」

「？」

近くのテーブルに座っている二人組の男が、人目を憚るように、頭を屈めてひそひそと話し合いをしている。

なんだこいつら。大会の出場選手か？それにしちやおかしな会話してるな。

「瀬能君、行くわよ」

「分かってるよ」

少々気にはなったが、時間もないので無視して鏡を仕舞い席を立つ。

………そういえば結局俺オムライス食ってねえや。

気がついたら下げられてたらしく影も形もなくなってたから。

…昼飯は、どっか他所で一人で食おう。

☆

★

☆

『只今より、召喚大会、三回戦を始めます！』

——ワアアアアアアアアア…!!

急遽用意された特設会場。

そこに設置された全ての席が人で埋まっており、足の踏み場もないと言っているほど溢れ返っている。

百 二百の数じゃねーな。千人くらいいるんじゃないの？

「すごい数ね」隣に立つ会長が感慨深く呟く。

その表情に緊張の色は見えない。肝が太くて頼もしいというか、いつも通りすぎて可愛げがないというか…

「学生服着てる奴もちらほらといるな…あ、桐条先輩だ」

「この距離から見えるの？」

大自然の島産まれだからな。視力はそこそこ自信あるんだよ。

しかしあの人も観戦とか…暇なのか？生徒会長のくせに…

ああいや、そういや父親の付き添いするとかなんとか言ってたっけ…じゃあ隣にいるのが親父さんか？

敵つい顔な上に、眼帯までしてるぞ。全然似てねえ。

『一回戦・二回戦と勝ち上がってきた両チーム！お互いに申し分ない学力^{実カ}を持ち、白熱した戦いを約束してくれるでしょう!!』

俺Fクラスだから学力に申し分あると思うんだけど。

あとなんでこの先生、いちいちプロレス張りの実況するんだ？

相手チームも疑問に思っているのか、苦笑いを浮かべながらも口には出さない。

まあ…いつか。

『それでは召喚…お願いします！』

「二二試獣^{サモ}召喚^{モン}」

おなじみの掛け声をかけると、それに合わせて出現する魔法陣。

その輝きと共に登場するのは当然召喚獣。さて、毎回姿が変わる俺の召喚獣は、今回どんな奴になるやら…

「つておお、案外まともだったな」

幾何学模様の陣から出てきたのは全身を和風の鎧兜で武装した真っ黒い猫。前立が三日月で伊達政宗みたい。

背中には二本の旗を背負い、手には軍配^{ぐんぱい}団扇^{うちわ}（相撲の行司が持つてるアレ）を装備している。

人型じゃない時点でもうアレだが、一・二回戦よりかはだいぶマシだ。

大勢の客の前だからシステムも空気を読んだのか？

Sクラス 三郷雫 古文 569点

&

Fクラス 瀬能ナツル 古文 170点

VS

Cクラス 竹田甚太 古文 98点

&

Aクラス 下杉賢治 古文 238点

一般公開される三回戦からは、事前に点数が表示される。教科が古文だからか？謎だ。

「ただ俺らしき皆無だな…」

前の二体は身体の色を髪の色と合わせるとか、ギリギリでらしさがあつたが今回のこいつには全くない。

毛色は黒だし、鎧なんか着たことないからな。

それともまさか背中の中の旗がそうなんだろうか。『売ります買います喧嘩上等』とか『大サービス50%増減』とか書いてある。

買取はしてるけど売ったことあんまりないよ？

「ムラマサー、こっち向いてー」

腕に付けられたデバイスで写真撮影を始める。

普通携帯電話のカメラは、レンズが背面についてるがこの機体は横についてる。コロン君の時計型麻醉銃みたいで少しカッコイイ。

こういう男心をくすぐる機能の付け方…嫌いじゃないぜ！

ビシツと軍配を高く掲げたポーズでパシヤリ。うん、よく撮れた。勇ましいぞ！

「村正って妖刀…」

黙れモブ。刀剣マニアが。

「その機械借り物じゃなかった？」

そうなんだよね、写真データだけでも貰えないかな。欲を言えばこのデバイスごと欲しいんだけど。

客席からもシャッター音っぽいのが聞こえるし、無理だったら同じ学生から貰えるか打診してみよう。人形作りの参考にしたい。

『…そろそろ始めてもいいですか?』

立会いの教師が若干イラついたような雰囲気です。

もう少し観察したいんだが…言う前に他の三人が頷いたので、仕方なく俺も了承する。

相手チーム瞬殺して時間を貰えばいいか。

『それでは試合、開始!!』

ボキッ!

合図と同時にムラマサが軍配へし折った!

「ちよ、えええ?!ムラマサくん一体なにを!」

(くわっ) 武器にやど、いらニユ!

気のせいかなんか今変なテロップ見えた!

呑気にニヤーとか鳴きそうな面してるのに、なんて漢らしい!

突撃ニヤー。

「あ、オイ!」

一瞬固まった隙に、ムラマサが敵召喚獣目掛けて走り出す。腕(前足?)を後ろに向けるア○レちゃん走りで。

なんかあいつ自分の意思みたいな持ってない?

………前の試合で出たびくみもそうだったな。じゃあおかしくないか。

「てか速っ!!」

フィードバックで風を感じる。

その勢いに見合った速度で相手に——狙ったのかは知らんが点数が高い方——瞬く間に接近する。

しかしあと少しで間合いに入るといところで、手にした武器（ちなみに槍）を突き出され、相手から逆に先制攻撃をかけられた。

「もらったー！」

「ヤバ——」こいつただのモブじゃねえ！有段者か!?

いきなり突っ込まれたら多少は動揺するはずなのに、その様子がまるでない。

こつちの武器（武器か？）は開始早々折って捨てちまって、とてもじゃないがあんなコミカル猫が無手で槍を止められるとは思えない。

槍の先が文字通り目前にまで迫り、当たった！と思った次の瞬間。

ガキーン！

「なにい!？」槍持ち召喚獣の本体が驚愕の声を上げる。

それもそのはず。うちの子は刃が接触する直前で首を捻り、槍の穂先を自らの兜で弾いたのだ。

そのまま後ろに回した腕の片方を

ズドツ

相手の喉に、

そしてもう片方、左手（前足？もう面倒だから手でいいや）で相手の腰帯（※召喚獣は道着袴スタイル）を掴んで——

念心流・奈落谷ならくだにやー

肩越しに担ぎ上げ、一直線に頭から地面に叩き付けた。
グシヤリ、とリアルな音がした。

Fクラス 瀬能ナツル 古文 170点

VS

Aクラス 下杉賢治 古文 87点

……今の一撃で倒しきれなかったことを嘆くべきか、一発で自分と同程度の体力を削ったことに驚くべきか……

そもそもなんのぎこちなさもなく滑らかに流派の技を行えたのかを疑問に思えばいいのか……ダル○ムみたいに腕が伸びたこともアレだな。冷静に考えればおかしい。

俺は伸びないぞ。腕。

人間だもの。

ダメだ。あまりに色んなことが起こりすぎて逆に冷静になっちゃったよ。

ん？ムラマサが首と腰帯を掴んだまま相手を引き起こして……？

追撃にやー。

——奈落咲き！

バーベル上げみたいに頭上に持っていく、勢いをつけて尻餅をついた。

兜が召喚獣の胸に突き刺さる！

「この猫容赦ねえ!!」流派にない展開技をなんで使えるんだ!?

大地に咲く一輪の花はニャとなるにやー。

「しかも追い討ちまで!」

ムラマサくんは相手の召喚獣を投げ捨てると、トドメと言わんばかりにローキックをかます。

マジで容赦ねえ!間違いない。こいつあ紛れもなく俺の召喚獣だ!

「白々しい……あなたが操作してるんでしょ」

「イヤそうなんだけどさ」

軽くアタックを命じたのに、ジエノサイドしてみせたんだぜ?信じ

られねえよ。

初めて呼び出したときからそうだったから気にしなかったけど、俺の召喚獣おかしくない!? 学園キチンと調整しろよ!

それとも深層意識下で蹂躪を望んでたんだろうか。それはそれとはとてもいやだな。

『勝者、生徒会チーム!』

会長の方も敵召喚獣を危なげなく倒し、勝利コールが告げられる。

そのまますぐに、承認を解かれて召喚獣を強制的に還された。

会長の召喚獣と共にムラマサも消たんだが…去る間際にあいつ、こつちに向けて手を振ってたぞ。

……一度責任者に確認取った方がいいかな…

22. 5時間目 三回戦の裏側

~~~~~

召喚大会のために改築された特設会場。

リング上で二組の選手がお互いに召喚獣を使いしのぎを削っている中、観客席でそれを見つめながらも試合に集中していない人物がいた。

「……………美鶴」

「はい」

厳つい顔をした、壮齡期をとうに過ぎ初老に差し掛かったような年頃の男性が隣にいる少女——桐条美鶴に話しかける。

桐条武治。それが彼の名前であり、世界有数の多国籍企業「桐条グループ」の総帥。

そして桐条美鶴の父である。

「先ほどの試合の勝者……あの二人が、お前が言っていた生徒会の後輩か」

「はい。そうです」

「少年の方が瀨能ナツル。少女の方が三郷雫だったな」

「はい」

質問。というより確認を取った後、備えつけの椅子に座ったまま膝に肘をつき、指を組んで考え込む。

当初はVIPとして特別席に招待する……という話が学園側から出ていたが、一般人と同じ目線で観戦することを武治自身が熱望したため、この観客席に付いている。

もつとも警護の関係上、最上段の端の席で周りは黒服だらけで、その黒服の隣は一つ席が空いているという、一般とは程遠い異様な空間になっただけはいるが……（こんなナツルじゃなくても気づくわ）

「三郷雫の方は前から聞いていたな、非常に優秀だと。瀨能ナツルは



…最近生徒会に入ったんだったな」

「はい。三郷の推薦です」

「ふむ……影時間、いやペルソナの適性はないのか？」

「それは…ない、です」

若干迷いながらも、ハッキリと否定する。

「試しに一度、私は物陰に隠れた状態でペンテレシアを彼の目の前に出現させましたが、全く反応しませんでした」

「全くか…」

「はい。数cm目前にまで接近させたりしましたが、見えていないようでした。しかし攻撃スキルを使おうとしたら、直前で逃げるなどの行為はします。おそらく直感で危険を察知しているのでしょうか」

「それはそれで興味深いな。存在を認識できなくとも害意は分かるということか…」

何気なく見つめる視線の先。試合の勝敗が決したのか、立会いの教師を挟んで二人一組みのうち片方がガッツポーズを取って喜び、もう片方が肩を落としてがっかりしている。

「…文月カラルが開発した『試験召喚システム』。当初システムの実験のために造られた学園はもつと規模の小さいものだった」

「文月学園…でしたね」

美鶴の台詞に無言で頷く武治。

その眼前のステージでは、次の試合が始まろうとしていた。

「桐条グループや九鬼財閥、川神院などの有力団体がそれぞれに出資をして、最終的に出来上がったのがこの神月学園だ」

「関東一、いえ日本一と言っていいほどの大規模な学校になりましたね。利権の関係等で相当揉めたと聞いています」

「他の者たちが何を考えて資金や技術を提供したのかは知らないが、我が桐条グループはどうしても捨て置くことができなかった」

武治はそこで一旦言葉を切り、当時のことを思い返しているのか目をつむり黙り込む。

それに合わせて美鶴も口を閉ざす。

試合は盛り上がり上がっているようで歓声はひっきりなしに飛び交うが、そこだけ空白地帯になったかのように静まり返っていた。

「科学と偶然とオカルトから生まれたと言われている試験召喚システム。そのシステムの存在を知った時、咄嗟に『あるもの』が頭に浮かんだ」

「……………」

「…悪魔召喚プログラム」

「その名の通り悪魔を容易に喚び出すプログラム。しかし呼び出すだけで、意のままに操ることはできない」

「開発者不明。製作意図も、流出ルートすら誰も突き止めることができなかったそのプログラムは突如世界中にばら撒かれ、世界各地で悪魔が召喚された」

「中には使役できた者もいたそうだが…大半は呼び出した悪魔に襲われ命を落とした。そして」

「呼び出された悪魔はそのまま。…甚大な被害が出たと聞いています」

「そんな生易しいものではない。悪魔を使役した人間ができなかった人間を奴隷のように扱い、悪魔自体も好き勝手に振る舞い暴れ回る。人類の暗黒時代だ」

記録の少ない当時のことを思っただか、険しい顔をする二人。

心なしか周りの黒服たちの表情も芳しくない。

「ある時を境に事態は収束し、平和に戻ったらしいが…原因は今だに不明だ。誰が収めたのかも含めてな」

「召喚システムにプログラムの技術が使われているとお考えで？」

「そうは言ってはいない。本当に偶然という可能性もある…。が、そう思わないものも研究員の中にはいる。プログラムを改造して、外部

装置として使いペルソナを覚醒させているとな」

また一つ、試合が終了したステージ上を見つめながら、二人は会話を続ける。

「荒唐無稽な話ですね。人為的にペルソナを喚び出すなど…」

「私もそう言った。それにペルソナにしては制限が多いとな」

当時を思い出し、遠い目をする。

「しかしそれで納得していないのだ。とくに幾月などなにを考えているか分からん。…先ほどの瀬能を研究の対象にしようと言いつつも、もしかしたら…」

「…まさか」

「そう思わせることを彼はしたのだ。試合で喚び出して見せた召喚獣。あれは確かネコシヨウグンと呼ばれるものではなかったか？」

ネコシヨウグン。

二頭身ほどの体軀。中華圏の甲冑と猫型の軍配を装備し、背中に二本の幟を背負った黒い猫。

「…そうですね。有里・汐見・鳴上が召喚するペルソナとよく似ていました」

そこまで言って、美鶴は黒服の一人に声をかけ、タブレットを受け取る。

それを素早く手慣れた様子で操作する。

「先ほど瀬能が撮った写真です。ご覧ください」

画面の中には、軍配を片手で高く掲げる二足歩行の猫が写っている。

「鎧兜に身を包み、黒猫で二本の幟と軍配など類似する点があります。…前に見たペルソナとは違います」

美鶴はまたタブレットを操作して、新たに一枚の映像を写し出す。

「右が瀬能の召喚獣、左が有里達のペルソナです」

「ふむ…左側のは中国古代の甲冑だが、右側のは日本のものだな」

武治の言う通り。画面上にはよく似た、しかし微妙に違う二体の猫

がまるで間違い探しのように並べて表示されている。

「比べてみると似て非なる別なものだろうと思うな…しかしこれだけでは判断がつかん」

「観察処分者として一年生の時から何度も召喚獣を使っていますが、全て人型だったそうです」

「となると召喚したのは今回が初めてか…なぜ今このタイミングで…まさか試作の特殊デバイスが原因か？」

「っ、！」

武治の一言に、美鶴が思わず息を飲む。

「あれには黄昏の羽根が…！すぐに、回収をっ」

「待て、まだそうと決まったわけではない」

立ち上がろうとした美鶴を武治が諫める。

「しかしっ」

「と言うより、原因であって欲しくないというのが本音だな。…瀬能の戦力データを知り、彼を試作モニターにすることを決定したのは私だ。それがこんなことになるとはな」

「お父様……」

沈痛な表情を浮かべる父親を見て、娘も思わず上げた腰を下ろす。

武治はすぐに周りの黒服に指示を出す。

「モニタリングを続行しつつ、同時に送られてくるデータを急いで解析。なにか分かったらすぐに知らせろ」

『はっ』

「どんな些細な変化も見逃すな。異常があればすぐに報告するんだっ」

『了解しました！』

携帯電話を取り出したりどこかへ走り出したりと、数人が慌ただしく行動を開始する。

「すまんな美鶴。せっかくの学園祭だというのに…」

「いえ、大丈夫です。…生徒会長ですから」

「瀬能の試合は継続して観戦するでしょう。直に見なければ分からないこともあるかもしれんからな。それまでは自由にしてかまわん」

「ありがとうございます」

武治が立ち上がり、それに続くようにして美鶴も立ち上がる。

「…なにかが…起ころうとしている。……それなのに後手に回ること  
しかできぬとは。…私は、無力だ」

## 23 時間目 コラボ希望

くナツルSideく

「あーさっぱりした」

イベントリから取り出したタオルで乱暴に髪を拭きながらシャワー室を後にする。

三回戦終わってすぐにガソリン臭を落としに来たんだが、思った以上に時間がかかってしまった。

見回りサボっちゃったな…桐条先輩になんて言われるだろう。問答無用で氷漬けにされっかな。

「仕方ないんだ…だってデバイス全然外れないだもん」

ありったけの力込めたのにビクともしなかったよ。引っ張りすぎて俺の腕と指の方がダメージ受けたし。

利き手と逆だからってのを差し引いてもどうなってるのコレ？

最終的に諦めて腕につけたまま湯を浴びた。…まったく問題はなかった。

耐水性抜群だねっ！

数十分格闘したのがバカみたいだろ。腹立たしい。

「これ本当に高性能だな」

思わずそつと液晶部分を撫でる。

これだけ長時間装着してたら、普通不快感とかいろいろ不都合出てくるんだが、そういったものがまるでない。

外したら逆に違和感覚えそう。ちよつと怖いな。

ていうか外せるんだろうなこれ。悟空の輪つかみたいな一生装着とかないよな。

自力で外せなかったからちよつと不安だ…呪われてるみたいで違和感より恐怖感が沸いてくる。

「あつナツル！ やつと見つけた！」

「あん？」

時計を確認するとそろそろ次の試合の時間が迫っていたので、会場へ行こうとしたらいきなり大声で名前を呼ばれた。

誰だ恥ずかしい…と思ったたら直江が人混みをかき分けて近づいて来た。

「探したぞまったく…てなんだその髪型」

「紆余曲折があまりまして」

詳しくわ訊かんといて。

シャンプーで洗っても落ちないってどんな成分使ってたこのワックス…

「それで、なんか用かよ」

「ああそうだった」

くだらない用だったらビーフケーキハマーかますぞ。

「実はクラスに飾ってあるお前の人形を売って欲しいって人がいるんだ」

「……売る？」

俺の、人形を？

「どうしたナツル。いきなり顔押さえて天を仰いだりなんかして」

しくったああああ自分で作った人形学祭で売ればよかったあああ。

イベントリの肥やしになってるもん放出すれば整理はできるし金は稼げるしの一石二鳥じゃねーか。なぜ俺はあのととき気づかなかつたんだ！

しかし今さら気づいてももう遅い。もう手遅れだ。

事前申請したものの以外は取り扱っちゃいけない決まりになってる。

昔無断で川神水売って大騒ぎになったらしい。匂いもアルコールもゼロで酔うからなあれ。

「…まあ嘆いても無意味だな。規則で無理つつって帰ってもらえよ」

俺はこの後召喚大会があるから対応すんのは無理だ。

「そーいやまだ昼飯食ってねーや。軽くでもいいからどっかで食えないかな。」

「似たようなことは俺も言ったけど、諦めてくれないんだよ。製作者と直接交渉するまで動かないって居座り続けてるんだ」

「直江の横をすり抜けて移動しようとしたが、そうはさせまいと回り込んで目の前に立ち塞がれた。」

「追い出せよ。営業妨害だろ」

「それがその…その人の連れが料理のほとんどを食い尽くして、売りに超貢献してくれたから…」

「悪い方じゃなくて良い意味で迷惑な客かよ。厄介な。」

「人形の買取も、百枚までなら出すそうだ」

「なんだ百つて。硬貨百枚か？」

「最大でも五万円。元手がタダだからぼろ儲けだな。」

「大袈裟だなオイ。そこまで琴線くすぐるようなもんあったか？」

「似たようなのばっか作ってた気がする。半ばトランス状態だったから覚えてないんだよね。」

「見た目一緒だけど微妙に違うのが沢山あったろ。ほらあの…トカゲみたいな珍生物の木彫り人形」

「ああ、アレか」

「あれを選ぶとはお目が高い。」

「ヒーローらしくもない。けど何にでもなれる。」

「無限の力を持った伝説のヒーロー」

「空と星の戦士」

「その名もカー”ビィ”くん」

「なんだいきなり…」

「ちなみに俺の推しメンはスマブラだ」

「バリエーション豊かなのが気に入ってる。」

「ただ無敵状態になるダッシュ技と、遠距離攻撃ができないのが不満だな。」



「訊いてないし…それにソレ多分壊れたぞ」

「バカなアアアアあツツ!!」

直江の両肩を思わず掴む。

「一応は俺の私物だぞ！それを無断で破壊しやがって！どこのどいつだ!?!」

「さっ、さつき言った居座ってる人が…」

欲してるものを自分の手で壊すって矛盾してない？ストレス発散の某ウサギのぬいぐるみみたいな感じで買取を希望してるんじゃないだろうか。

それとも傷つける程愛してるってやつか？ヤンデレじゃねえか。そんなのにうちの子はやれませんか！

## 24時間目 完璧には程遠い

教室の惨状は気になるが、今は召喚大会に集中しよう。急がないと時間に間に合わなくなる。

パートナーが会長だから最悪不戦敗なんてことにはならないだろうが、遅れて行ったらなに言われるか分かったもんじゃねえ。

「とういうわけで、いっちよやってみつかあ」

「悟空か。なにが」というわけ”なんだよ”

そんなことも分からんとは…やれやれ、ダメなやつだ。

「……………」

「どうしたナツル、いきなり真面目な顔して」

「…直江テメー、俺を探しながら客引きもやってたのか？」

気配を殺して機会をうかがってたのか、ついさつき追いついたのかは知らんが、流れる人混みから不穏な雰囲気をした男たちが抜け出して近づいてくる。

周りに人が大勢いたからか直江の相手に集中してたからか…今の今まで全く気づかなかった。いかん。

『…………あの青髪の方…………』

『…………間違いない…………』

『…………隣のは…………』

『…………面倒だから二人いっぺんに…………』

周りの雑音に紛れて、小声でなにやら物騒なことを話し合っている。

あまり、歓迎したくない客だな。

「おっ、おい…なんかやばそうなのがぞろぞろと来たぞ…！」

直江が不安げな様子で口を開く。

自衛手段がないから襲いかかられたひとたまりもないだろう。そりや安心はできんさ。

でも（多分）お前が連れてきたんだぞ？

「どいつもこいつも殺気だつてんな。祭りの最中なんだからもつと穏やかにいけよ」

「本人に言えよ。聞いてくれなさそうだけど…：なにか、心当たりはないのか？」

「心当たり…：心当たりねえ…：…」

うん。

実はある。

《お前一体なにをした!?!》

表情から何かを察したのか、直江が目で訴えかけてきた。

なので俺も空気を読んで視線で返す。

《昼辺りからかな？なんかやたらと腕のデバイス スろうとする奴ら  
が大量にいてき。なんでつい、気絶させて金目の物全部奪った》

《おまつ、おーまーえええええつ!!なんてことしてんの!?!》

《ついカツとなって》

《カツとなってじゃねーよ!》

《大丈夫だ。人には見られてない》

《なにひとつ安心できねーよ!!》

《人の物を平気で盗もうとしたんだからいいだろ別に。人を殴っていい奴は、殴られる覚悟がある奴だけだ》

《だからって金目の物全部はやり過ぎだろ！そんなのだから色々おかしいって言われるんだよ!》

《いやあ》

《褒めてねーよ!》

なんだ残念。

『しえあつ!!』

「っ!？」

突然、俺の背後から同世代の男が金属バットを両手で振りかぶり、フルスイングしてくる。

しまった!直江との会話(?)に気を取られている隙を突かれた!

回避を…!ダメだ。避けたら直江に当たる!

「にっ…肉のカーテン!!」

即座に振り返り、打たれる箇所を両腕でガード。

最悪流血もののダメージはこれで防げるだろう。超痛いだろうけど。

ゴツツツ!!

「ツツツツ!!」

痛<sup>っ</sup>つてえ——くない。

「あれ?」

予想していた痛みはまるでなかった。

『うえ?なんっ…』

襲撃してきた相手も、俺の腕にバットを当てた状態でア然としている。コイツがなんかした訳じゃないのか?

とりあえず腕を突き出しバットを弾く。邪魔だし。

『うわっ!』驚いて尻もちついたが無視。

無意識に”気”を使ったか?いやそれならバットが壊れてるはずだ。無傷なのはおかしい。

無傷…そうだ、咄嗟に腕で受けちゃったが、借り物のデバイス嵌ってるんだっ!壊れてないよな!?

慌てて起動してみる。液晶にヒビとかはないみたいだが…

” バッテリー充電：＋18% ”

……なんだこの文言。

充電に繋がるようなことした覚えなんて———そういえば些細な振動でも電力に変換できるとか聞かされたな。

え？なに、打撃もオツケーなの？今の衝撃をエネルギーとして吸収した？なにそのインパクトダイアルみたいな活用法。

明らかに一学生の行動を縛るための装置の範疇を超えている。超えすぎてる。珍しいや凄いで済ませていい代物じゃない。

これは……もしや……いや、間違いない!!

「技名間違えた！」パーフェクトデイフエンダーだこれ!

急いで銀のマスク製作しなきゃ!

「どうでもいいわー!」

側にいた直江に頭を叩はたかれた。テラ屈辱。

## 25時間目 目測20cmの誤差

『なんだ今の…!』

『落ち着け!とにかく逃さないようにするんだ!』

リーダー格の男の言葉を皮切りに、チンピラ達が俺たちを囲い込む。

ひい、ふう、みい…全部で八人か。

『散々探し回らせやがって…ぶっ殺す!』

『だから落ち着け!まずは時間稼ぎに徹するんだ!』

『まさか変装して誤魔化してるとは思わなかったぜ…でも見つけたからにはこつちのもんだ!』

なに言ってるんだコイツら?

変装?ごまかす?なんで俺がそんなことしなきゃいけないんだ?

この格好は不可抗力であって自分の意思じゃねえんだぞ。

「おいナツル、考え込んでる場合じゃないぞ。どうするんだ?」

思考の海に浸ろうとした瞬間、直江に揺さぶられて現実に戻る。

そうだった。囲まれてんだった。ここで別なことに意識を割くのはマズい。

どうするかな…バットやメリケンサック持ってるとはいえ、たかだか八人程度。殲滅するのは容易い。

だが時間がない。次の試合会場はここからちよつと距離がある。今から走ってギリギリだろう

ならチンピラどもの間すり抜けて逃げちまえばいいんだが――

直江がいるからな。見捨てるのは流石に…

流石に…さすが…に……………

|| 直江大和 ||

・平気で嘘をついて人を利用する。

例) 遊びに誘われて、ついに行つてみれば臨戦状態のモモさんが：

・人の情報、秘密をすぐにバラす。

例) 20時間目 Justice 参照

・なんかムカつく

例) さつき頭叩かれた。

うん。

見捨ててもいいかなつて、思えてきた。

「なつ：なんだよナツルいきなり、そんな売られていく子牛を見つめるような目をして…」

「直江：昔の偉人はこう言ったそうだ」

所詮この世は弱肉強食。強ければ生き、弱ければ死ぬんだー

「志々雄真実か！架空の人物だろそれ！」

残念、宗次郎だよー。

「まつて、まつてまつて、ちよつと待って！ナツルお前そんなこと言うキャラじゃないだろ!?もつとこう：『ガキをかばっちゃまうなんて最低だ、へへっ』みたいな奴だろ！」

「ピッコロか」人生で一度も使ったことないんだけどそんな台詞。

これから先も使う予定は無いし：よしんば言ったとしてもお前にじゃない。第一死んでるじゃねーか。

「ちよつ、これ見よがしに柔軟とか始めないでくれ！この場面で置いていかれたら俺死んじやう！」

「みじかいあいだったがおまえとすごしたひびはたのしかつた」

「棒読みやめろ!!」

弱いチームには早く消えてもらわなくてはな。

焦る直江を余所に軽い体操を終わらせて、いざ走り出そうと前傾姿勢を取る。

が、すぐに直江に抱きつかれた。

「まって！ほんと待って！なんでもするから見捨てないで！」

「離せ気色悪い、誤解されるだろうが！」

必死な形相で人の腰に手を回す奴の顔を、掌で押し引き剥がすが、全く離れない。

こいつこんな力あったのか？それとも火事場の馬鹿力？

困った…本気でどうしよう。

直江を引き剥がすのは簡単だ。イベントりに常備しているもので二、三回シバけば離れるだろう。

でもそれをするとな俺のイメージダウンになる。困ったもんだ。

時間も刻一刻と流れていくし…こいつも『ここは俺に任せて先に行け！』くらい言えんのか。

「桐山ア！」

またしても思考の海に浸ろうとした瞬間、強制的に引き戻される。

「テメーこんなところで油売ってたのかファック！あちこち探し回っちゃったじゃねーかファック!!」

「今まで何をしていたのですか？」

人混みから文句を言いながら出てきたのは、金髪ツインテールでナイスバディな美女と、黒髪ショートカットのナイスバディな美女。

二人ともに不機嫌オーラを出している。

しかも両方メイド服。

ぶつちやけ見知った顔だった。

「ちゃんとリクエスト通りのもん買ってきたんだろなあ？ここまで待たせておいて違うもんだっいたらただじゃおかねえぞ」

二度目の邂逅だが相変わらず桐山さんの扱いがヒドイ。パシリかよ。



つーかこの人ら、また俺を同僚と間違えてんのかよ。全然違——そういうえば今俺、間違えやすさ二割り増し(執事服+髪型)だった。じゃあしようがないか…

……いや、しようがなくねーよ！他の同僚や雇い主も人違いしてたけど、よく考えたらおかしいだろ!?

雰囲気で分かれとは言わん、髪の色が微妙に違うのも目を瞑ろう。だがせめて、せめて背丈に違和感を覚えろ！

(※ 桐山：165cm ナツル：187cm)

「どうかしましたか？黙り込んで…しかもなんですかこの状況」

黒髪の方が話しかけてくる。

俺もよく分からん。

「腰に男巻きつけてんじゃねえか。マザコンの次はゲイに走ったのか？お前ヤバくねえ？」

誤解です。俺もヤバいとは思うけど誤解です。俺の意志じゃないです。

また面倒なのが来やがって…！今はまだチンピラの輪の外側にいるが、入ってこられたら厄介だな。誤解を解くのに時間もかかる。もういつそ全部、誰かにまる投げしてえ…さてよ？

咄嗟に出た思いつきとも言えないアイデアだが、案外イケるんじゃないか？

ちようどいいイケネ…もとい代役もいるし、助かるためなら拒否はせんだろう。

《と言う訳で直江、後ヨロシク》

《ちよ、え？なにが》

目で合図したが困惑した表情しか返ってこなかった。

察しが悪い奴だ。まあいいか。

「お姉さん方——！」

腰にしがみついている直江の襟首を片手で掴んで引き上げ、逆の手

でベルトを掴み頭上にリフトアップ。

「お届けものでー！ー！ーす!!」

文句が出る前に即座にスロー・イン。

ハロー。そして、グッバイ!

「うわああああああつ!!」

『うおっ!!』

『飛んだ!』

『え?』

「ああ?!なんだいきなり!」

空を舞う一人の男に、関係者のみでなく様子を見守っていた野次馬の視線が集中する。

今だ!

「デビルバットゴースト!!」

『なっ!』

『にい?』

『うおっ!』

一瞬の隙について、目くらましの影分身を使いながらチンピラどもの間を走ってすり抜ける。

走りながら時計を見ると、試合開始の時間が差し迫っていた。

間に合うかな……距離を考えると全速力で走っても微妙だぞ。いかに人の渋滞を避けられるか、目的地までのルート選択にかかってくるな。

技名叫ぶの結構恥ずかしかったのに、これで間に合わなかったらマヌケすぎる。

## 26時間目 召喚大会⑧

く美鶴Sideく

召喚大会、第四回戦試合会場。

と言っても場所は三回戦目の時と同じ、急遽設置された特設会場。

他の出場選手には悪いが、瀬能の試合を観るためだけに再びお父様とここへやって来た。

やって来た…のだが…

試合開始の時間が過ぎても、三郷のパートナーである瀬能が一向に姿を見せない。

『なんか遅くねえ?』

『まだ始まらないのかよ』

客席に座る観客も徐々にざわつき出す。

「遅いな…なにかあったのか?」

「さあ…」

隣に座るお父様の疑問に、なんとも言えずに簡潔に答える。

召喚大会のルールで、選手は試合開始から五分以内であれば参戦することができる。

しかし5分を過ぎても現われなかったら、試合に参加できない。

一人遅刻なら一人で戦わなくてはならないし、二人なら不戦敗となる。

三郷が簡単に負けるとは思わないが、相手は三年。一人だと厳しいだろう。

まさかそれが狙いか?はじめから乗り気ではなかったからな。ここでわざと負けて大会から降りるつもりでは…

三回戦までは勝ち残れと命じはした。それは確かに守ったから文句は言えない。

しかし、状況は変わってしまった。今瀬能に試合放棄されたらとて

も困る。

「デバイスを使って現在位置を特定してみます。最悪通信で呼び出しましょう」

タブレットを取り出して起動する。

今から呼んでも間に合わないだろう。それでも何かせずにはいられない。

「美鶴——さて、なんの音だ?」

咄嗟の行動をお父様が窘めようとしたが、その台詞が途中で怪訝なものに変わる。

音…??

『なんだ?なんか音楽流れてるぞ?』

『ホントだ…ロッキーか?』

周りの観客達も突如聞こえてきた音…メロディはあるが歌詞がない、テーマソングのようなものに気づいたようだ。

音楽が流れ出したことにより、ざわつきが苛立ちから来るものではなく、困惑を含んだものになる。

大会のスタッフが機転を利かせたのか?

テテ〜テ〜テテ〜テ〜♪

テテ〜テ〜テテ〜テ〜♪

音楽に合わせるかのように、試合会場の選手入場口から一人の男が現われる。

頭からタオルをフードのように被っているため顔は確認できないが……先ほども見た燕尾タイプの執事服を着ている。

テテテ〜テテ〜テ♪

テテテ〜テテ〜テ〜テ〜テ〜♪

男は軽やかに、ランニングするような走りでも会場の中央——立会  
いの教師と生徒達がいる場所——に近づいていく。  
そして音楽も佳境に入ったところで、

テテ〜テツ！

「エイドリアー————ン!!」

タオルを払い、拳を握りしめて高らかに両手を挙げる。

……なぜか、客席が盛大に湧き歓声と拍手が鳴り響いた。  
中には立ち上がる者までいる。

意味が分からない。

「…大丈夫そうだな」

「……………ええ」

「…なかなかユニークな男だ」

「……………そうですね」

瀬能、後で処刑だ。

☆

★

☆

〜ナツルSide〜

「瀬能君、遅刻ですよ」

「あ、ハイ、すいません」

っべー。マジやつべー。立会いの教師高橋先生じゃねーか。やら  
かしちまったぜ。

一年の時担任だったせいかな、なんかイマイチ強気になれない。背中  
がゾクゾクする。

「5分以内ですので参戦は認めますが、次からは注意してくださいね」  
「はい」

不可抗力なんだけど…説明が面倒だから言うのやめとこ。時間  
もったいないし。

「あははっ、ナッチはいつも面白いな」

「あん？」

対戦者側から急に話しかけられる。

「!? あっ、あんたは——!」 果たしてそこにいたのは!

モモさんだった!

……あ? 『次回に続く』とか『CMの後で』とか無いのかつて?

別作品含めてもう二、三回やっただろアレ。もう飽きたんだよ。い  
いだろやんなくて。

そんな事より。

「なんでいるんすかモモさん」

明らかに大会の趣旨にそぐわない人がここにいる。

その疑問を解決する方が先だ。

「豪華賞品が貰えるって聞いて」

「他の大会行け」 腕ずもうとか力自慢とか。

「いやあ、それがな? 『川神禁止』っていうルールがあつて出場できな  
かつたんだ」

まさかの完全出禁!?

「まったく…こんな美少女を禁止にするなんて、酷いと思わないか?」

「…格闘系の催しの過去の記録を見ましたけど、すべて優勝者は川神  
百代さん。対戦した全員が病院に運ばれてると書かれてましたね」↑  
雫

「順当じゃん」

どう考えても酷いのはモモさんだよ。

「むうう、ナッチまでそんな事言うのか! 酷いぞ!」

「あんたも大変だな。こんなのパートナーって」

むくれる馬鹿(先輩)を無視して、相手側のもう一人の方に話しか  
ける。

「問題はない。もともと召喚大会に興味はあったからな」

淡々とした様子で返された。

同学年の奴としか組めない決まりだから、この人も三年なんだろう。

「しかし、瀬能といったか？学園祭とはいえ中々変わった格好をしているな」

「いやあんたに言われたかねーよ」

着物じゃん。どんな出し物の衣装だよ。

「失敬だな。普段からこの格好だ」

「余計悪いわ」

これが許されるって、今更ながらフリーダムな学園だよな。

俺もライダースーツとか着て来ようかな。

## 27 時間目 召喚大会⑨

「話を進めてもよろしいですか?」

高橋先生が口を挟む。

やんわりとした口調だが、クール寄りな見た目と元担任で色々面倒を見てもらったという負い目で、なんか責められている気がして萎縮してしまう。

「これより召喚大会の四回戦を始めますが、今回は少し趣向が変わります」

? どういう事?

「トーナメント表にも書いてありますが、今回の科目は『選択科目』です。普段とは勝手が違いますので、注意してください」

ああ：選択なのか。てかアレでも一応試獣召喚できたんだっけ。

選択科目。

複数ある教科の中から一つを選択して、その分野の物事について学ぶ特殊授業。

大概どこの学校にもあるありふれたもんだ。

しかし前も言ったが神月学園は超マンモス校だ。敷地面積・校舎数・校風、全てが世界に誇れるマンモス（常識はずれ・規格外）っぷり。

当然選択授業も半端ない。数もそうだが授業内容もな。

全部説明すると長くなるからやめておこう。：項目が確か三十くらいある選択科目って普通ないよ。生徒もそうだけど教師っていたい何人いるんだ?

：話が逸れたな。

まあつまりだ。それだけ科目が多い授業、担当の教師も別々に存在する。

例えば五人の生徒のうち、一人だけが『武道』を選択していて、立会いの教師が武道の担当だった場合。



召喚獣を喚び出せるのはその一人だけだ。

もし五人全員が別々の科目を選んでたら、立会いの教師が五人必要になる。もう生徒が喚び出してるのか教師が喚び出してるのか分かんねーよ。

そんなわけで試召戦争の時には全く、触れる事さえなかった。

「科目ごとの担当教師いないみたいすけど、いいんですか?」

「大丈夫です。私の担当は総合科目ですから」

聞けばこの選択科目。試合ブロックごとにずらして行い、その全ての立会いを高橋先生が受け持っているそうだ。この人もようやるわ。

「時間も押してますし、そろそろ試合を始めましょうか。皆さん召喚獣を出してください」

「はい」「了解つす」「分かりました」「かわりに私がナッチと死合<sup>ヤ</sup>っちゃダメ?」

最後のは聞こえなかったことにする。

お馴染みの掛け声をかけ、お馴染みの魔法陣から、(俺だけ)お馴染みでない召喚獣が喚び出される。

今回も動物タイプか……動物か?

なんか、ギリギリ自分が通れないところに無理矢理体ねじ込んで身動き取れなくなった進化モルモットみたいな見た目してんぞ。

身体の色もピンクと白だし……現物には近いかもしれないが、今回も俺的要素ゼロだ。

まあ写真は撮るんですがね。とりあえずデバイスでパシャリ。

カメラ向けたときに気づいたけどこのモルモット、口が 3 の形してた。一気にパチモン臭が。

「ナッチの召喚獣は変わってるな」

「ふむ、興味深いな。ぬいぐるみか?」

いきなりモモさんとその相方がわさわさと無遠慮に俺の召喚獣をいじり倒してくる。ちよつ、あんたらなにしてんね!?

……あ…あつ、ダメ！変なところ触らないで！  
この人たち痴漢です!!

「きもい」

「きもつ、会長!?!」予想外なところから口撃来た!

あんたそんなこと言うキャラじゃないだろ!?

ナツツ（召喚獣）に向けていた視線を慌てて移動し隣に立つ会長を見たが、いつもと変わらない無表情で試合開始を待っていた。

「どうかしたの瀬能君」

「え、あ、いや」

もう一度言うが見た目が変わった様子はない。

もしかして今のは幻聴だったんだらうか。最近は何れもない事務仕事とかずつとやらされてたからな。疲れてるのかもしれない。

思わず目頭を指で押さえて天を仰ぎ見る。

Sクラス 三郷雫 純文学 581点

&

Fクラス 瀬能ナツル 音楽 1026点

V S

Sクラス 京極彦一 語学 676点

&

Sクラス 川神百代 武道 1058点

いつの間にか点数が表示されていた。

「モモさんSクラスだったの?」

全く、微塵もそんな要素ねえだろ。キャラ的に。

「うん?ああ。特待生制度でな」

「納得です」心のそこから納得です。

疑問が解決されてスッキリ。

雰囲気が出たのか、モモさんがみるみるうちに不機嫌な表情

になる。

「なんだよー、私は座学の成績もいいんだぞ?」

「はいはい」

自称自称、自演乙自演乙。

実際どうかは知らないけどぜったい嘘だね。間違いない。

言ったら殺されるから言わないけど。

「川神先輩のことより、私はあなたの方が疑問なのだけど…:なによあの点数」

会長が心なしか驚いたような表情（※普段より少し目を見開いてる）を向けてくる。

すごいよね、音楽で千点って。我がことながらちよつと引く。

「なんか、課題でライトハンドやったら先生がくれた」

「トリル奏法（指板上の弦を叩きつけるように押下したり引つ掻くようにして音を出す、を間断なく繰り返し返して反復する奏法）を拡張したギターやベースの演奏法ね。それくらいなら私も出来るわよ?」

「ハープでだぞ」

「どうやったのよ一体」

俺もよー分からん。

どーして原始的な撥弦楽器はっげんでエレキ音が出るのかな。

## 28時間目 召喚大会⑩

「それでは召喚大会第四回戦…始め！」

高橋先生の掛け声とともに、試合が始まる。

同時に俺を含めた選手全員が気を引き締めた真剣な表情になる。

さつきまでちゃらんぼらんな感じだったモモさんまでキリツとしてる。この辺は流石だな。

「ふっ!!」

まず最初に動いたのはそのモモさん。

召喚獣が猛スピード…というかワープに近い速度で接近し、ナッツ目掛けて拳を振るう。

「ムダアツ！」

即座にパリングで払いおとす。

そしてお返しと言わんばかりに、正拳突きをイン・ザ<sup>ボディ</sup>胴体。道着よ紅く染まれ。

説明してなかったが、相手の召喚獣。モモさんのは柔道着姿で手にはなにも持っておらず、その相方の男（京極？）のは本体とお揃いで着物を着ていて、手には扇子を持っている。

俺が言うのもなんだが舐めてんのか？会長一人がフルプレートアーマーで浮いてるじゃねーか。

まあいいけどさ。

「……」

会長の召喚獣が鎖付きの短剣をモモさんの召喚獣目掛けて投擲する。

「甘いっ！」

空気を切り裂いて飛んできたソレも、ナッツのボディブローも、背後に跳び退くことで回避。

流石に一筋縄ではいかないか。

しかし…なんか妙だな。

「動かないわね、京極先輩」

会長の言う通り、モモさんが速攻で仕掛けてきたのに対して、その相方は試合開始位置から全く動こうとしない。

開始直後だからってこれはおかしい。なぜだ？

『……………』

京極先輩の召喚獣が、手に持った扇子を閉じたままで切っ先を口元に当てる。

『……………』

そしてそのままゆっくりと…言葉を紡ぎ出す。

「つてええっ!?喋れんの!?!」

『ヤッ!』とか『ハッ!』とか、ゲームのキャラみたいに掛け声上げるのは知ってるし見たことあるが、ここまで流暢に話せるのは見たことがない。

隣の会長も驚いた表情をしている。

つまりそれだけすごいことだということだ。

でもそれがどうした？

『……………』

呆然とする周囲をよそに、ミニ京極は言葉を発し続ける。

「——ッ!!?!」

唐突に、脈絡なく俺の頭に痛みが走る。

「ぐ…おあつ…!?!」

「瀬能君!?!」

思わず頭を抱える。

なんだいったい!?!

見ればナツツも同じように両手で自分の耳を塞いでいる。(耳ない

けど)

まさかあの般若心経もどきか？怪音波の類いで聞いた奴にダメー  
ジってやつだったのか？

でもその割にはモモさんや会長に被害があるように――

「っ、避ける!!」

大声を出すと同時に、ナツツに回避行動を取らせる。

強烈な頭痛のせいで、横に転がるような無様な逃げ方しかできな  
かった。

進化モルモットがボールのように…

そのすぐ隣。ついさつきまで召喚獣がいた場所を、背後から  
鎖付きの短剣が猛スピードで通り過ぎていく。

しかも後頭部直撃コース。当たったらフィードバックだけで意識  
飛びそうだ。

「会長てめえ！こんなときにふざけんな!!」

「ちがっ、勝手に動いたのよ!」

頭を押さえながら怒鳴ると、本体が怒鳴り返してくる。

勝手にだあ？もうちよいマシな言い訳を…ってこんな場面で嘘言  
う理由も俺を攻撃する理由もないよな。

となると…

「…ソレがあんたの召喚獣の能力か」

思わず殺気の込もった目で京極先輩を睨む。

普段と勝手が違うと言っても、総合科目じゃあない。一定以上の点  
数を取れば召喚獣に特殊能力使用可能を示すアクセサリが装着さ  
れる。

そしてこの場にいる召喚獣全てが、腕輪オのようブなものシヨの付きンだ。

ちなみに会長のは剣と魔法の世界に出てきそうな金属製、京極先輩  
のは紐に勾玉がいくつもつけられた古風なもの。

モモさんと俺のは幾何学模様が入ってるリストバンド。

…シヨボいのか特別なのかよくわからん。モルモットなんて手と手首が一体化してるからアームカバーみたいだし。

「そうだ。私の召喚獣は他の召喚獣を操ることが出来る」

「けつたいな能力だな…」

こみ上げてくる不快感を乗せて吐き捨てるように言葉を返す。

……冗談抜きで頭が痛い…！二日酔い&船酔い状態のところ、黒板を発泡スチロールで擦る音をステレオで延々と聞かされているような気分だ。経験ないけど。

抵抗レジストしてる分がダメージとしてフィードバックされてるのか、脳に干渉して操ってるせいで頭痛が発生するのか。どっちだろう。

「アンタこれまでもこんな方法で勝ち上がってきたのか？」

「いや、この特殊能力はあまり使ってはいない。今回は特別だ。点数が千を超える物が相手だからな」

うわーい。俺のせいだったー。VIP待遇だー（違う）。

嬉しくねえんだよクソが。

「会長、操作権を奪い返せないか？」

「さつきからやってるけど…無理そうね」

ファック。眉間に軽くシワを寄せてるけど、基本いつも通りの無表情だから本気でやってるかわかんねーや。使えねえ。

「まあいい、周りが敵だらけというのも一興だぜえええ!!」

台詞の途中で顔面目掛けて右ストレートが飛んできた。

咄嗟にダッキングで回避——するとスラリとした綺麗な脚の、綺麗な膝がアツパーするように迫ってくる。

「ガツっ!!」

両掌てのひらを重ねて攻撃を防ごうとしたが、そんなのお構いなしに掌を巻き込んで膝蹴りが顎に決まった。

あまりの衝撃に視界が揺れる脳が揺れる。ブロックしてコレなんだから、ノーガードで食らってたら意識飛ぶぞ。

思わず数歩後退。ふらつく頭を二・三左右に振って正常に戻すと、突然の強行：いや凶行に及んだ人物をキツと睨む。

「川神イ…、テメエこんなときにふざけんな!!」

「ずーるーいーぞー!!ナツチばかりー!!」

なにがだよ。サイヤ人みたいに叫びやがって。

お願いだから会話をしてください。言葉のキャッチボールを。

返投で元氣玉使うな。

「俺のなにがズルイんスカ」

「私の（死合の）誘いは散々断るくせに、自分は目新しい強者と戦った  
り可愛い子とキャツキャウフフしたり！美少女的にも我慢の限界だ  
!!」

今どきの美少女って、キャツキャウフフとかいう死語使わないと思  
うんだ。

「というわけで今すぐヤルぞ！ナツチ!!」

「俺以外の他の誰かで発散してください」

と、一応言ってみたが聞く耳は全く持っていなかった。

瞳は爛々と闘志三、狂気七くらい割合で輝いていて、口は裂けそう  
なほど三日月型に笑みを浮かべている。

.....

召喚大会の真っ最中。相手方の特殊能力によって、こっちのパート  
ナーの召喚獣は操られて敵対するようになった。

その相手方の能力の副次的な効果により、俺の召喚獣は常時脳をか  
き回されるような痛みを与えられ、ダメージのフィードバックで本体  
の俺も頭痛に苛まれる。気になってどうしても集中力に欠ける。

そんな最中にモモさん参戦。もう集中力に欠けるとかいう次元  
じゃない。

片手間で相手できるレベルじゃないし…。かといってモモさんと  
対戦してたら召喚獣が疎かになり、召喚獣の操作に意識を割けば俺は  
一方的に攻撃を食らうだろう。



あつちを立てればこっちが立たず、こっちを立てればあつちが立たず。八方ふさがりだ。

……うん。

帰らせてえ…

## 29 時間目 召喚大会⑪

迫り来る拳。

「うわっ!!」

飛んでくる短剣。

『…!』

情け・容赦のない、“気”で生み出された炎や氷が襲いかかる。

「あぶねっ!」『!!』

瀬能ナツル1×歳。本気で泣きそうです。

☆

★

☆

「てかこれ反則じゃね!」

実際に楽しそうに振るわれる拳を、頭痛を堪えながら丁寧になして捌さばいてる途中で気づいた。

なにクソ真面目に対応してんだよ。自分のことながらバカじゃねーの？

「……………」

立会人である高橋先生を見てみれば、眉をひそめて思案顔を作っていた。

「……………どうなんでしょうこの場合」

うえっ…うえええっ？

「大会のルールでは『召喚者同士の直接戦闘の禁止』等はありませんから…」

「そりゃねーよな普通!」

まともな神経してりゃあ、ロボコンの最中に操縦者襲うとか考えねーもん! スポーツマンシップ(?) あるもんな!

「つまり川神、テメーはダメだ!」

「なんだ。いきなり?」

ガツチリとモモさんと両腕を絡めて組み合い、全身全霊を込めて動きを封じる。

チラツと召喚獣を見てみれば…両耳を塞いだ状態で攻撃から逃げ回っていた。

半ばオートで動いてくれるのは助かるな…思うところがないとは言わんが、今は置いておこう。

つかモモさんすげえな。俺とやり合いながら召喚獣を的確に動かし——いやあれか、京極先輩が操ってるのか。

フアツク!!

「せめて多少は手加減しろよ…!」

「だが断る!」

ロックアップ状態のまま、引っこ抜くように持ち上げられる。

「っ、バカ力がっ!!」

——順逆自在の術!

一瞬で掛け手と受け手が入れ替わる技で、逆にモモさんを持ち上げる。

そのまま地面に叩きつける!

「ふっ!」

ブチブチツ!と音がしそうな勢いで、掴んでる腕を身体を横に回転させることで外される。

回転しながら後方に宙返りして距離を取られる。やっぱり最近のザコどもと違って一筋縄じゃいかんな。

「…ふ…ふひっ…フハハ、ハーツハツハツハツ!楽しいなあナツチ、やっぱりお前は最高だ!!」

いきなり壊れたように笑いだしたかと思えば、そんな事を言い出した。

こういうところを見ると、あらためてこの人は戦闘狂なんだと思う。少し自分の攻防に付き合ってもらっただけで笑い袋みたいにはしゃぐとか…頭おかしいだろ。

(※ 四月 23時間目 Grim reaper)

「でもなあナツチ、私はスカートなんだぞ？ いやそれ以前にこんな美少女を逆さまに持ち上げるのは男としてどうなんだ？」

……びしようじよ？

「その美少女つてのはちゃんと存在して万人ばんにんの目に見えるんだろうな。少なくとも今俺の目の前にいるのは慇懃無礼な戦闘民族メスゴリラだぞ。だいたい」

「ぶあツツ!!」

喋ってる途中で眉間に衝撃が走った。

しかもいきなりフラッシュでも浴びせられたように視界が効かなくなる。

そして後から遅れて痛みがやってくる。ジワジワズキズキと。

どうやら俺は殴られたようだ。攻撃が全く見えなかった…

——スパアツ!!

「ぢゅおっ!?!」

悶える暇もなく、間髪入れずに今度は左内脛に強い衝撃と鋭い痛みが。

硬質で尚且つしなるような一撃…多分ローキックだな。

その威力の強さに思わず脚が払われた方へ持つてかれる…ていうか強すぎて足ピンンってなる。お股裂けちゃう!

勢いに任せて横っ跳び。…元いた場所から3mくらい移動したぞ。

「なにしゃがるー!」

数秒ほどで問題なく目が見えるようになった。

なので攻撃してきたモモさんを睨みつけければ——修羅がいた。

「…ナツチ」

全く目が笑っていない笑顔のまま、修羅が口を開く。

「はい」

「いくら私が可憐で温厚な美少女だといっても、我慢の限界はある。…分かるな？」

わかんねーよ。

俺が知ってる『可憐』や『温厚』と、この人がやっている行動がどうしても結びつかない。教わった意味が違うのかな。

目に見えるほど濃密な“気”を全身から立ち昇らせ、今にも飛びかかって来そうな人の形をした獣の前に、自然と汗が吹き出てくる。サウナに入ってるみたいだ。

右手は開き、左手は軽く握って拳を作る。そして全神経を集中させ、いつでもどんな攻撃にも対応できるように臨戦体勢を取る。

……ここが俺の正念場か。

「瀬能君、大変よ」

「見りや分かんたらそんなの」

「そうじゃなくて」

なんだよ煮え切らねえな。

少し離れたところで、どこか一点を指差している会長。

その指の先にいるのは俺の召喚獣。あいつがどうかしたのか？

と、一瞬思ったが、よくよく見ておかしな点があることに気づいた。進化モルモットの口が、数字の3の口が……

2

減ってた。

…口が減らないって、ウソだったんだー。

「つてちっげーよー！なんだよアレなんなんだよあれ!？」

三回戦でも腕が伸びるとか変な事やってたけど、なんで本体ができないとんでも現象おこせんか？

1

また数字減った!？

カウントダウン？地獄のカウントダウンなのか!？

「ゼロになったらどうなるんだ!？」

「召喚者であるあなたが分からないのなら、私に分かるわけないでしょ」

そりゃそうだけど！

なんて話してる間にナッツの口の形が0になった。

カッ！

……カットイン？

突然目が光り輝いたと思えば、肌が全体的に紫色に染まる。

続いてコメカミあたりから二本の角が生えてきて——羊のソレのようにくると捻れる。

最後に背中から、コウモリのような二対の羽根が広がる。

——地獄乱舞!!

変化が終わるとすぐに、モモさんの召喚獣に猛攻撃。胴着の襟を掴んで、逆の手で顔面ラッシュ。

「つていきなりすぎるだろ!？」

Fクラス 瀬能ナツル 音楽 1003点

VS

Sクラス 川神百代 武道 639点

しかも威力高つ。

よく見ればナツツの額に青筋が浮かんでいる。

相当お怒りのようだ。格闘スタイル故に一番しつこく追い回してたからなあ。

本体としては程々で止めといてほしいんだが……。召喚獣だからか腫れや出血がないとは言え、ファンシーな動物(?)が女の顔を殴る姿はシユールを通り越してホラーだ。

：いや、モモさんの召喚獣。殴られる度にその箇所が光ってるな。なんか瞬間回復を彷彿とさせるような……。攻撃される端から修復してるのか？

あれが彼女の召喚獣の特殊能力かもしれん。すごいものなんだろうけどぶつちやけ、技の欠陥知ってる俺からすれば無駄な能力だぞ。

### 30時間目 召喚大会⑫

前回のあらすじ。

ナッツマル、魔獣形態へ。

喜ばしいはずなのにいまいち喜べないのはなぜだろう。口が0のままだからかな。

「喜ばしいの?」

「お得感あるだろ」

ノーマルよりは進化してた方が能力高いし。ステータス見れないけど。

そんな彼(?)は只今殴打の真っ最中。ガチンコファイトクラブだ。「くっ!」

見かねた京極先輩が動いた。

先輩の召喚獣を通し、操られた会長の召喚獣がナッツ目掛けて短剣を飛ばす。

ぶんっ!

迫りくる凶刃を見て、手に持っていたモモさん(召喚獣)を、短剣に向かって投げる。

地面と水平に投げ飛ばされた召喚獣は、一直線に短剣に突き刺さる…直接で止まった。

短剣共々、空中で固定されたように停止する光景に、観客席から『おーっ!』とため息が漏れる。

他人の召喚獣操れるって言ってたけど、割と無茶苦茶な操り方するな。物理法則無視すんなや。

——クオーラルボンバー!

しかしパチモン悪魔は、そんな事御構い無しにモモさんの召喚獣にアックスボンバー。強引に刺しにいった。

ザシユツ!と勢いよく刃が胴着から生える。



「さらにそこから追撃で”気”を使い、腕に冷気を纏わせる。姿形は変わろうとも、基本ウチの子に容赦はない。」

——川神流・雪達磨！

ビシビシバキンツ！

ナッツが掴み、まとめたプチモモさんの両手足が氷に覆われて固まっっていく。

最終的に豚の丸焼き見たいな格好になった。ちよつと哀れ。

瞬間回復は自分のダメージを文字通り一瞬で回復する技。

手足が潰されて身動き出来なくなつたとかなら、即座に治して戦線に復帰できるだろう。しかし無傷での拘束なら、能力は発動しない。(胸の刺し傷には発動して修復された)

これがモモさん本体なら氷ぶち破って自由になるんだろうけど、散々痛めつけられた分体じゃどうしようもないみたいだな。

Fクラス 瀬能ナツル 音楽 936点

VS

Sクラス 川神百代 武道 451点

残り二人。

次にナッツが標的にしたのは、二体を操っていた京極先輩の召喚獣。

——ワンフレイム・ハリケーンミキサー！

「なっ!?!」

先輩が目を見開く。

気づいたら召喚獣が宙を舞ってた。

ナッツは打ち上げたプチ京極先輩が落ちてくるのに合わせてもう

一度角タツクルを——いや羽根を広げて空を飛び、追撃しやがった！

——フライング・ハリケーンミキサー！

ナッツとプチ極先輩がすれ違う度、先輩が上昇していく。

そのまま上空に設置してある、選手の点数を表示する機械にぶつか  
る！というところで、ナッツがプチ極先輩の足を抱えるように掴み、

——アトランティス・ドライバー！

リングに叩きつける！

どグシャ！

Fクラス 瀬能ナツル 音楽 936点

VS

Sクラス 京極彦一 語学 112点

もうちよつとで終わるな。

「…瀬能君。私の召喚獣、操作できるようになったわ」

「あん？…ああ、お経が途切れたからか」

そういえば俺も頭痛がしなくなったな。

よかったね！

まあ 関係ないけどね！

——吸引・ブラックホール！

Oの口を大きく広げ——なんか宇宙が見えた——ヒュゴオツ！と  
風を巻いて吸い込む。

…マスコットののような見た目とそれっぽいものを大量に作ったせ  
いでなんとなくカ●ビイに見える…

「くっ！」

床に踏ん張り耐える召喚獣。

しかし抵抗出来たのは一瞬で、すぐに頭側から引つ張られるように吸い込まれていく。そして…

パクツ 頬張られて。

ゴツクン 飲み込まれて。

デロレロリンっ

……デロレロリン？

「つてええっ!!また姿変わった!？」

プチ極先輩を飲み込んだナツツは、魔獣形態から別の方面に進化を遂げた。

頭のくるんとした角は、DJが使ってそうなヘッドホンに。

背中の羽根は消え、その代わりかは分らんがてに電動シェーバーみたいなマイクを持っている。

………

Fクラス 瀬能ナツル 音楽 936点

VS

Sクラス 京極彦一 語学 0点

その格好のまま、手足を凍らされてピクリとも動かないモモさんの召喚獣に近づいていく。

寝っ転がっている召喚獣の顔近くまで行くと、おもむろに息を吸い込んで――

どりやーーー!!

どりやーー…

どりやー…

マイクに向かって叫ぶ。

Fクラス 瀬能ナツル 音楽 936点

VS

Sクラス 川神百代 武道 0点

「一撃い!?!」

マイクの破壊力はハンパなかった。

「そこまでですね。勝者、生徒会チーム」

モモさんの召喚獣が消えると、すかさず高橋先生が宣言する。

…いちやもんつけられるかと思っただけど、この人に限ってそれはないか。良くも悪くも平等に物事を見てくれるからな。

そう、俺が喧嘩をした時も…

どりゃー、どりゃー、ジエスタ、どりゃー、ジエスタ、ジエスタ、  
はぁー、ジエスタ、デエデデッデッデデー!!!

「やかましい!!」物思いに浸ろうとしたところに横槍入れんな!

### 31 時間目 龍虎の戦い

「はあっ!」

「うおっ!」

視覚の外からいきなり殺気を感じた。

慌てて俯くように頭を下げると、髪を掠めてロングフック気味の拳が通過する。

「話は終わったか? なら続きをヤルぞ」

「げええっ!! モモさん!」

荒ぶる (自称) 美少女。溢れ出る闘気で若干髪が浮いてる。

怒らせたままなの忘れてたわ。

「ふん!」 返事を待たずしてローキック飛んできた。

鋭く、勢いもある蹴り。直撃したら大木もへし折りそうな威力だ。

しかし俺は大木ではない! 頭痛に気を取られてなかったら対処はできるわ!!

「念心流・腿捌たいさばき!!」

ビキ、メチっ、

「っ、っ”あ”あ”ああっ!!」

咄嗟の反撃を食らい、モモさんが脚を抱えて床を転げ回る。

その顔には無数の油汗が滲んでいて、苦痛に歪んでいる。

即座に骨と筋肉を捌く (剥ぐ) 技だからなあ。さぞ痛いだろう。

皮とかあるから完全に分離することはないので、すぐに治療すれば元に戻る。まあモモさんの場合、すぐにでも修復しちゃうだろうけど。

…分かつちやいるけど、あんまり気分いいもんじゃねえな。知り合いがのたうち回ってる光景みるの。

「ぐっ…川神波!」

横たわった状態で気弾を放ってきた。

「エア・ハンマー!」

”気”を掌に集中させ、丸めてゴムボールのような形を作る。

それを向かってくる川神波にぶつけると――

ぷにゃんっ。

気弾の起動が変わり、上空へと飛んでいく。

返却してもよかったんだが、激痛で苦しんでるところにそれは流石に咎められた。

かといって客席に逸らす訳にはいかない。ということで必然的に上にやるしかない。後はどうなろうと俺は知らん。

弾けることに関しては、あえて触れない。

「はあっ!!」

その隙に瞬間回復で傷を修復される。

「…やってくれたなナツチ…：すっごい痛かったぞ」

ゆっくりと足の調子を確かめるように立ち上がるなり、めっちゃ恨みがましい目で見られた。

「そりやどうも」

「いやそれよりも、なんだ今の！新技か!？」

そっちなかよ。

自分でやっついてなんてなんだけど、筋骨剥離されて『それよりも』で流すのはどうかとおもうよ？

「最近開発した…：技ではあるけど、初披露じゃないっす」

「ナツチのバカッ!!」

拳が飛んできた。

「なんで!？」

「新技ができたなら真っ先に私に見せるべきだろ！このいけず！」

ぷりぷりと怒りながら拳を連続で振るってくる。

可愛く言ってるつもりだろうけどあんた、クツソ可愛くないっすから！知ってんだぞ。その拳で打岩（岩を道具を使わずに素手のみで丸く加工する行為）したの！

しかも素材は合金でグープンだけでやったそうじゃねえか！現物見たけど砲丸サイズだったし！圧縮でもしたの？

ゾクゾクとした恐怖を背中に感じながら攻撃を避け、一瞬の間をついて両手を捕獲。手四つの体勢になる。

「ぬぐぐ……知るかそんな自分ルール！俺の技をどこで使おうと俺の勝手だろ！」

「どうせ他にもまだ未発表のがあるんだろう、この場で全部出せ！」

「聞けよ人の話！そうぼんぼん新作ができる訳ねーだろ!!」

ウソだけど。

後三つほど使い所が難しくて死蔵してるのがあるけど。

「ならその三つを出せええええっ!!」

「うおっ!？」

先ほどのロックアップの時と同じく、両手を掴まれたままで上下逆さまに持ち上げられる。

違う点はそのまま肩に担ぐように——キン●バスター!？」

「変形川神バスター——!!」

「ごは——!!!？」

飛び上がることなく即座に尻餅をついて、衝撃を俺に伝える。

本来の形とだいぶ違うために威力は半減されたようだが、速攻でやられたから返す暇がなかった。

肩超痛え。

「変形川神バスター——!!」

「ごは——!!!？」二回目!？」

立ち上がる振りしてもう一度尻餅つきやがったこの女！鬼か!!

今度は肩から背中まで痛え！

「変形川神——」「ヤラセねえヨオオ！」

立ち上がりに合わせてクラッチを切り、両腕をモモさんの首に絡める。

そのまま後ろに倒れて——

「変形・断ち落とし!!」

自分の肩に相手の頭を乗せるようにして、尻餅ドロツブ！

ぶつちやけただのショルダーバックブリーカーだ！

気にしたら負けだ!!

そして今ので肩と背中と腰を痛めた。

考えたら負けだ!!!

「…はっ、せっ、瀬能君、川神さん！何してるんですか!?もう四回戦は終わりましたよ！」

「ようやく事態の理解に追いついたのか、高橋先生が今更なことを言い出す。」

「今すぐ戦闘をやめなさい！」

「俺よりもあつちに言っつくくんないすか」

「はっはっはっ、だが断る!!」

「だよね、知ってた。」

「仕切り直しと言わんばかりに距離取って構えてるし。」

「食らえ、川神正拳!!」

「甘い、シールドガード!」

「風を巻いた正拳突きを腕に付けられたデバイスで受ければ、ドガンッ!!と大きな音がする。」

” バッテリー充電：+97% ”

「ふっ、あの時の俺と——って充電率高アツ!?」鉄バットの五倍じゃねーか!

「半端ねえとは思ってたけど、この人の破壊力マジパネエな！」

「隙あり!」

「はっ!」

「しまった!」

「デバイスに気を取られた一瞬の不意を突かれて、腕を掴まれる。」

「そのまま流れるように立ち関節。アームロックを決められる。」

「技としては単純なものだ。が、それだけにやる奴によって難易度が



上がる。

「ぐあああああつ!!」

「ふんっ!」

ただでさえキツイのに、先ほどの川神バスターのダメージの影響でうまく身体が動かん。

現在進行形で腕に痺れるような激痛走るし…散々だよ!

「どうしたナツチ?逃げないのか?」

そう言いながらモモさんは掴んでいる腕を捻る。

「ムリムリムリムリムリムリムリ!千切れるっ、右腕が腕!げーるー!」

ブロッケンJr.になっちやう!隻腕を利用した必殺技編み出しちやうかも!?

「折れるー!ねじ飛ぶー!最悪の未来しか見えないー!」

「大げさだなあナツチは」

大げさジャネーヨ!あんたこないだ俺に何した忘れたのか!

「タワーブリッジだー」とか無邪気に笑いながら担ぎ上げて締め上げやがっただろうが!

やめろって散々言ってもやめねえし、背骨が折れそうになったから声帯模写で骨折音出せば「あ、ヤバっ」て投げ捨てて逃げやがって!本当に折れてたらどうするつもりだったんだ!!

てか誰かいい加減とめてくれよこのくされバーサーカー!!

「まつ…マジ勘弁してください…!俺にできる事ならなんでもするかっ!」

「んー?じゃあ…私と付き合ってくれるか?」

「それは俺にできる事の限界を遥かに超えて——あああああああ!折れる折れる折れる折れる!!」

より強く腕が捻じ上げられた。

これヤバイ、ヤバイよマジで!今解放されても後遺症残る!

左右で関節の曲がり具合変わっちゃう!

こんな状況で告白してOK貰える訳ねーだろ!発想が島田と同じ

なんだよ！

「しょうがないな…じゃあ…あ、そうだ。代わりに呂布ちゃんをくれ。あの娘なら可愛いし強いからナツチの代わりに十分——」

「——テメーの敗因はただ一つ」

楽しそうな笑顔を浮かべている川神の首を、身体を“く”の字に折り曲げた状態で正面からキツく締め上げる。

「かつ…は…?」

「たった一つ、シンプルな答えだ」

テメーは俺を怒らせた。

——ワンフレーム・ギロチンチョーク

ゴキユツ

びくんつ、と一瞬だけ痙攣して、ぐったりと全身から力が抜ける。完全に気絶<sup>オ</sup>した<sup>チ</sup>たな。

「せめて苦しまず安らかに死ぬがよい…」

「…死んだのか?」

いえ、ネタです。

ちゃんと呼吸もしてるし、ほっといても勝手に目覚めるだろ。

介抱はしないぞ。

調子に乗りすぎなんだよテメーは。

「…クラスメイトでパートナーとして言わせて貰えば、川神も本気ではなかつた筈だぞ」

見かねた京極先輩からフォローが入る。

”筈”なんですね。

「先輩、冗談にも二種類あるんですよ。『笑える冗談』と『笑えない冗談』の二種類が」

「川神先輩が言ったのはどっちなの?」

会長が尋ねてくる。そりやあもちろん…

「笑える冗談だ」

「お前なぜ気絶させたんだ？」

「笑えるのと許せるのは別だよ。言っていることと悪いことがある。どんなに親しくてもな」

「……………」

「だーいじょうぶ。大丈夫。あの人のことだから笑って許してくれるさ、ただの冗談なんだから」

「すごい皮肉ね」

高橋先生が手配したのであろう、タンカを持った人間が会場に入ってきて、モモさんをそのタンカに手際よく乗せていく。

そして会場を静かに去っていく様子を、全員で見守る。

まあ多分、次会った時には忘れてるだろう。いつも似たような感じだし。

### 32時間目 容疑者、確保

・召喚大会特設会場前

「(いろんな意味で)強敵だったな」

モモさん&京極先輩ペアをうち破り、無事五回戦目への切符を手に入れた俺たち生徒会チーム。

次勝てばとりあえず、召喚大会は一区切りだな。残り(六回戦から決勝まで)は明日やるから。

「私は次の試合まで見回りをするけど、あなたはどうするの?」

「俺?俺は…」

どうするかな。

さっきの試合散々攻撃受けたからな。もう身体のあちこちがボロボロだよ。

ていうか腹減ったよ。昼飯食いっぱぐれた上に盛大に動き回ったから。

「休憩ついでに飯食っていいかな。流石に限界だ」

「…そうね。本当は手伝って欲しいけど、あまり無理もさせられないわね」

分かってくれて嬉しいよ。

今も肩と背中と腰と右腕がズキズキ痛むからな。

次モモさんに<sup>お誘い</sup>死合を持ち掛けられたら、おんなじこととしてやる。

「さて…じゃ、ここからは別行動だな。あー腹減った」何食おう。

農産部が確か、焼きソーセージや牛丼売ってたな。がつつりいか。

それとも養殖部の方行くか?出し物は…魚や貝なんかの海鮮焼きだったな。

学生のうちから自分たちで丹精込めて育てた生き物を、自分たちの

手で加工させていいんだろうか？教師は一切手出ししてないって聞いたけど。

野菜類はともかく魚や牛とかをさばいて料理させるって…ウチは農業校じゃねえんだぞ。

「ナツル！」

我が校のあり方を考えていると、不意に名前を呼ばれる。

「直江！」

声をかけてきたのは先ほど別れたクラスメイト。

「無事だったのか、心配したぞ！」ドーナツ一個分くらい。

一時期某携帯会社が無料チケットを配布してたな。

他意はない。

「ああ…九鬼家のメイドさんたちに助けてもらったからな」

「どうも」「ウーツス」

ああ、さつきの李とステイシー<sup>人</sup>か。

外聞悪くなるから助けないとかはないと思っていたが、きちんと救助してくれたんだな。

「で、どうしたんだ？いきなり呼び止めたりして。俺これから飯に行こうと思ってるんだが」

「ああ。それは…すまないけどちよつと手を前に出してくれないか？こう、小さく前ならえするみたいに」

「なんで」

「理由は後で話す」

真剣で頑なな眼差しで見据えてくる。

仕方なく両手を揃えて前に突き出す。これになんの意味があるんだ？

ガチャン

…がちやん？

俺の両手首に黒色の手錠がはめられた。

「容疑者確保！」

イチコンフタマル

『14:20、容疑者確保。速やかに連行願います』

「了解、直ちに署に連行します！」

…直江<sup>こいつ</sup>一人で何やってんだ？わざわざボイスレコーダーで自分の声入れてまで。

「え、ていうかなにこの状況」

「ついさつき京から電話がきた。例の客が暴走したらしい」

例の客？…ああ、俺の木彫り人形を欲してるっていう物好きか。

「暴走とは穏やかじゃないな。人形の頭でも食い千切ったか？」

「エヴァか。そんなイカれた行動取るのお前くらいだよ」

失敬な。いくら俺でもそんなことせんわい。

「店内で大袈裟なことをやられると営業に支障が出る。明日以降もあるんだ、厄介<sup>ぐ</sup>とは早く解決したい」

「それとこれはなんの意味があるんだ？」

自分の手にはめられた手錠を軽く上げる。

「四回戦前にも言ったが、製作者本人じゃないとろくに話も聞いてくれないんだ。交渉を頼む」

「いやそれは分かるけどさ。俺が言いたいの<sup>こんなもの</sup>はなんで手錠を使うんだ、ってことだよ」そういう趣味でもあるのか？

「ほつといたら別の厄介<sup>ぐ</sup>ごとに、首どころか身体をねじ込むだろ。そうさせないためだ」

「順当な処置ね」

隣の会長が賛同の意を示す。

メイドの二人までもが直江の意見に同意するように頷く。

貴様らア…

「大人しくついてくからこれ外せ」

「信用できない。このまま行くぞ」

直江は喋りながらも、素早く手錠のチェーン部分に紐を結んでいく。

どんな羞恥プレイだよ。

俺がそんなに信用できないのか！

できないんだろうね。こんなもの用意してるんだから。

「こちら四号車、これより容疑者の連行を開始します」

『了解。十分に注意されたし』

「：お前だんだん俺に似てきたな」

「!?」

ボイスレコーダー片手に熱演していた男は、その一言で手に持っていた機械を地面に落とす。

さらに口に手を当てた体勢のまま固まって動かなくなった。そのままでシヨツクなのか：

### 333 時間目 サンシャイン・アイ

「くうくぜん絶後のお、ちよおくぜつ怒涛の最強戦士い!!」

「武道、喧嘩、格闘、その全ての戦闘を制する究極の男!」

「そう、我こそは! サンシャインくうくぜん、せの「とつとと入れ」おぶつ!」

上体を後ろにそらした姿勢のまま、上から体重をかけるように押しつぶされた。

そこまでいったら最後まで言わせるよ。

☆ ★ ☆

く直江Sideく

2—F が使用する教室に来ると、ナツルが突然奇行に走った。

「おつふ…おまつ、車のトランク閉めるみたい…きょうだい姉弟で俺の背骨を折るつもりか」

「いきなりアホなことをするからだろ」

さつきまで疲れた様子でも静かだったのに、急に元気になったな。

「髪型と一緒に調子まで元に戻ったか?」

先ほどまでいた九鬼家のメイドの二人（李さんとステイシーさん）から貰った薬品で、ナツルの頭はいつものヘアースタイルに戻っている。服装は燕尾服のままだけだ。

あの二人、元々今日は学園に来てなかったらしい。ただワックス落としを渡すために急遽来校したんだとか。

でも来たなら来たで目当ての人物は見つからず、仕方なく探し回っていたそうだ。

…とても、真剣に探しているとは思えない第一声を発していたように思えるが、助けてもらったから気にしないようにしておこう。



「なんか歩いてるうちに良くなった」

「どういう理屈だよ…ホントお前変な身体の作りしてるな」

「いやあ」

「褒めてないから」

メイドの二人と別れる時に手錠を外して返却したけど、もう少し借りとけばよかった。

よく分からないことで照れている悪友を適当に流して、室内の様子を伺う。

来て早々に奇行に走ったからな。お客さんたちがさぞ不審に思つて――

「催しか？いきなりで驚いたが、悪くはなかったぞ」

「はい！掛け合いも良くて、面白かったです！」

意外と好評!?コントだと思われてるし！

「掴みはオツケーだな。んで、暴走してるっていう困ったさんはどこだ？」

何事もなかったかのように教室に入っていくナツル。

…オツケーか？オツケーなのか？本当にOKなのか？

いや、お客さんも悪感情を持ってないみたいだし、良しとしておこう。

キョロキョロと辺りを見回すナツル。――その視線が一点で止まった。

その先には…

「………!!」

栗色の髪をした、騎士風の女性が目隠し・猿ぐつわをされた上で縄でぐるぐる巻きにされていた。

「なにあれ」

横たわる女騎士を指差し、ナツルが俺に尋ねてくる。

訊かれても困るんだが…教室出るときはなかった光景だぞ。

「カタリナは溢れるビイさん愛が抑えきれなくなったので、みんなで拘束したんです」

水色の髪の少女が説明に来てくれた。

「…むーむー言いながらも正確に人形の方ににじり寄ってるけど」

「ビイさん愛です」

「なんか光ってるんだけど」

「ビイさん愛です」

ビイさん愛怖っ。

「それで…その、あのビイさん人形を譲って欲しいんですけど…もちろんお金は払いますっ」

「いや、欲しいって言うんならいくらでもあげるけどさ。あっても場所取るだけだし」

室内の3分の1をナツル作の人形が占めてるからな。

それでも愛着あるのかと思ってたんだが…さらっと譲る約束するところを見ると、そうでもないのか？

まあ元手は貰いものの木屑でタダ。作製時間も数秒だから無くても不思議じゃないけど。

「ありがとうございます！それで、値段はおいくらほど…」

「タダでいいよ。金も時間もかかってないし」

「いえそういう訳には！」

「(ブチブチッ) ビイーくーーん!!!」

ガバツ！

「うわっびっくりした！」

「かつ、カタリナ!?!」

縛られていた女性がいきなり、縄を引きちぎって近くの人形に飛びついた！

そして勢いよく撫で回し——強く抱きしめて頬ずりを始める。

彼女の知り合いと思われる人たちが止めに入るが、全く止まる気配がない。ビイさん愛怖っ！

「止めなくていいのか?..」

その様子を眺めていたナツルに尋ねる。

「あ？なんで」

「なんでって…」

4 回戦前にした会話を覚えてないのか？

「あのままだと破壊されるぞ」

「ああ…言ってたなそういや。でもいくらなんでも同じ轍を踏みはしないだろ。それにそう簡単に壊せるとはとても思えな——」

「鈍色にびいろのビイくんかわいい！」（バキベキボキッ！）

「メタルカあビイ——————!!!」

唯一、鉄塊で作られた人形がいつも容易く抱き潰された!?

昔姉さんが拳で加工した鋼鉄。川神院の倉庫の肥やしになってたものが原材料だったはず。

相当な硬度でナツルでも削るのにかなり苦戦したのに、なんで数秒で粉々にできるんだ!?! 愛のなせる技か!?

ビイさん愛ホントに怖い!!

### 34時間目 絶望教室

さらに女性の行動は続く。

「葉っぱつけたビイくんかわいい！」（バキベキボキッ！）

「リーフカあビイーーーーー!!!」

「まんまるのビイくんかわいい！」（バキベキボキッ！）

「ボールカあビイーーーーー!!!」

「着ぐるみ着たビイくんかわいい！」（バキベキボキッ！）

「アニマルカあビイーーーーー!!!」

「モフモフがーーーー!!」

阿鼻叫喚の地獄絵図。飾ってある人形を抱きしめては潰し、抱きしめては潰しが繰り返される。

その度ナツルが絶叫と共に名前を呼ぶ（一部他の人間も叫んだ）。そして床には破壊された木彫りの残骸が…あんまりないな。どうなってるんだ？

「しつかりしろ！君たちを死なせたりしない!!」（ガッ、ガッ、ガッツ!!）

「っってお前の仕業か!」

砕かれて破片にされていく人形を、ナツルが片っ端から回収しては謎原理で木の塊にして、木彫り人形に戻していく。

10秒そこらで一体のビイくんになっていくのは、自分の目で直接見ても信じられない光景だ。

「ナツル、やめてくれないか」常識を軽々無視するの。

「む、まて直江これは!」

台詞を遮られて話しかけられる。

「会心の一体…だ…!」

見せられた手の中には、虹色に輝くビイくん像が。

思わずその木彫りの人形をひったくって、ナツルの胸に押し付けるように叩きつける。

「さらっとどうでもいい奇跡起こすな!!」

「ぐはっ!!」

その頭部が接触すると同時に、悪友の身体が後方に吹っ飛び、壁に激突した。

いいよそういうの、演技派なのは分かったから。

「ぐふっ…、流石は無敵カあビイだ。凄まじい威力…しかしこれならっ」

「キラキラなビイくんかわいい!!」

ベキボキバキツ!!

「無敵カあビイーーーーー!!?」

5秒も持たずに他の個体と同じ末路を…

「トゲトゲしたビイくんかわいい!」(バキベキボキツ!)

「ニードルカあビイーーーーー!!!」

「布のビイくんかわいい!」(バキベキボキツ!)

「ゴーストカあビイーーーーー!!!」

「…ビイくんかわいい!」(バキベキボキツ!)

「ミサイルカあビイーーーーー!!!」

球体だけと隙間無くトゲが生えたもの(ニードルカあビイ)など、触るのも危険そうなものもお構いなしに抱きついては粉碎していく。

でも布ですっぽりと身体全体を覆ったもの(ゴーストカあビイ)とか、正直顔しか共通点ないやつは抱きしめる必要ないんじゃないか? さっきのなんてただの置物だし。(※ミサイル変身中)

「うわっ、ウワアアアアアアアアアアッ!」

また一体、完成した瞬間のものを奪われ、すぐさま木片に変えられたのを見てナツルが絶叫をあげる。

「どうやら精神が耐えられなくなったようだ。」

10秒で回収して修復してもそれを上回る速度(約3秒)で一体破壊されて、流石の鋼鉄の心も折れたか。

「と言うか直し続けるより元凶を止めた方が早いと思うんだけど……なんでやらないんだ？」

「アアアアアアア!!」

「」

「アアアアアアア!!」

「なんだ今の間は!?!」

「変な表情しなかった!?!」

モロの言う通り一瞬。本当に一瞬だけ、ブリキの兵隊みたいな顔をした。

「前々から人間離れしてるとは思ってたけど、こいつは一体どこまで行くつもりなんだろうか。そのうち帰ってこれなくなるぞ。」

「ああ……あんまりだ……!?!なんだこれは……!?!」

四つん這いの姿勢で、粉々になった木彫り人形たちに手を触れる。

「地獄じゃないか……!?!死にゆく君の……体温すら感じられないなんて……!?!」

「もとからねーだろ体温」

「製作者にしか感じられないものがあるんじゃないかな?」

「あそこまで好きだったのか……!?!いらなとか言ってたくせに」

「ヤベー……俺様あの人形落したり水かけたりしちまったよ」

ガクトバレたら殺されるかもね。

### 35時間目 ネメシスつ

「ビイくん、ビイくううんっつ!!」

騎士風の女性が勢いを増して、人形を抱きしめて粉碎していく。そろそろやめてくれないかな。幸い店内には彼女（と仲間？）以外の客の姿はないが、あんまり騒ぎすぎると明日の営業に支障がでる。（というか営業停止になりそうだ）

「ビイくっ!」

順調：と言ったらおかしいが、淀みなく動いていた女性の手が急に止まる。

その手の先には。頭頂部に角があり、本来はコウモリのような羽がある背中に外骨格つきの翅がついている：カブト虫を彷彿とさせるビイ人形が。

…?なんか困ったような顔をしてるな。

「もしかして虫系がダメなのか?」

「ホントか!?!」

今まで失意のどん底にいたナツルが、俺の一言を聞いてガバツと起き上がる。

そして女性の様子を見ると――

「勝機!」

猛スピードで頭程の大きさの丸太を削り出す。

「追い討ち・工作の極み!!」

「そんな技はない」

思わずツツコんだが無視された。

数回ノミを振るっただけで、カブト虫の角と外骨を付けたヘンテコなトカゲが出来上がる。

それを次々と繰り返し――30秒も経たずに10体の人形が女性を囲うように設置された。

結界?

「完成だ、ビートルカアビイの陣!!」

満足げに額を拭う人間離れの悪友。いい仕事した風の笑顔ヤメロ。対して女性の方は…困ったような表情で、人形に手を伸ばしたり引つ込めたりを繰り返す。

そんな迷うようなことか？頭と背中以外は他のやつとあんまり変わらないように見えるけど。

…いや、よく見たら結構アレだな。気持ち悪いな。

角も翅も妙にリアルで…マスコツトみたいな見た目と反したカブト虫感がむちゃくちゃキモい。

瞳も複眼で手足は附節（昆虫の脚）…凝りすぎだよナツル。

「…今度、ヤドンとカリンの人形も作ってくんない？」

「面倒だからヤダ」

ケチ。

☆

★

☆

「ようやく人心地ついたな」

追加でいくつかの木彫りを女性の周りに設置して、服についた木屑を払う似非執事。

「なんだこの芋虫の出来損ないみたいな人形」

「それはビイドルだ」

「…ポケモンの？」

作業時間1分そこらなのにすごい凝ってるな。

顔は例のトカゲなのに身体は芋虫で…うん、すごい気持ち悪い。リアルに作るな。

「客はそこそこいるのに、なんか食事してる奴が少なくねえか？」

ナツルが周りを軽く見回して呟く。

いきなり話題変えるなよ。ついていけないだろ。

「みんな知り合い同士みたいよ？」

「…人数いるけど実質ひと組だけかよ。料理を出してないのは？」

「食材全部無くなっちゃったの」



「…………この集団以外に客は来たのか？」

「誰も来てないわ！」

「威張って言うなや」

正論だ。

でもこの人たち朝一で入って来て、今までずっと居座ってるんだよ。

人数が多いから他の客を入れるスペースもない。(たまたま仲間と思われる人は入室してくるけど)

「それよりタイガ、なんで執事服着てるの？」

「色々あつたんだよ。詳しくは聞くな」

むっちゃ気になる。

「つまり今できることはなにもないってことか…なら壊された人形の補充でもするか」

「まだ作るのかよ」

もはや原型を留めていない木屑を拾いながら、教室のあちこちに新しく人形を設置していく。

その様子を女騎士の人が困り顔のまま羨ましそうに見てる。少しは自重してください。

イベントリとかいうのに仕舞ってたのを出してるのか？加工技術を知ってるから回収して高速で木彫りに戻してるみたいだ。

「さっきまでのとデザインが違いますね？」

「まあ色々作ったからな」

クラスメイトの姫路さんの言葉に返事をしながら、木彫りやらぬいぐるみやら様々な小物をどこからか出していく。

「…おい、なんだこの鳩サブレかひよこ饅頭がよくわからない木彫りは」

「ハンサだ」

「なんでこんな大量に…」10体ぐらいあるぞ。

「複数作って『エンハンサー！』とかネタにしたかったんだが、宙に浮かないからただの不安定な置物にしかならなかった」

君はホントバカだなあ。↑吉井  
…ネメシスつ。↑ナツル

「ぐぼあッ!!」

「よっ、吉井くん!」

気がついたら吉井が大きな音を立てて壁に激突した。

その彼の腹部には先ほど話題に出た木の鳥が。飛ぶ瞬間が見えなかった…!

「貴様のようなただのバカと一緒にするな。この俺様は…熱血バカだ」

「バカであることは否定しないのか…」

「熱血バカだ」(バシユッ!) ↑ネメシス発射

ぐぶおッ!!?

☆

★

☆

目が覚めたら、京が俺の上に馬乗りになっていた。

「…なにしてるんだ?」

「…おはよう大和。昨夜は激しかったね」

「なにもしてないだろ」

誤解を招くデマを言うな。クラスメイトの男子が次々にカッターを取り出し始めたじゃないか。

いつものように「結婚して」とにじり寄ってくる京に「お友達で」と返して引き剥がす。

そのまま立ち上がって周りを見回すと、何事もなかったかのようにナツルが自作人形の説明をしていた。ほってかないでくれよ。

教室の壁際には横たわって気絶している吉井の姿が。ほっといういいの?!

「この消防士の格好をした子はなんて名前なんですか?」

「それは火消しかあビイだな。纏まとと消化器が武器だ」

「冴島殿、こつちの鎧を着ている子はどのような名をしているのだ？」

「そつちのは足軽かあビイだな。基本は刀装備だが弓や火縄銃とかバリエーションに富んでいる」

「それじゃあ……この筋肉質で大型のものは……」

「アイドルかあビイだ」

2mはある上に鎧とブーメラランパンツ姿のどこにアイドル要素が。

「リングネームはロビイン、趣味はラグビーだ」

超人じゃないか。アイドルってそつち？

### 36時間目 キレル男

「ロビインってお前…カあビイ関係無いじゃないか」

「オプション付けるとレスラーに進化するんだ」

「オプションってそのマスクか？」

ナツルがどこからか取り出した鉄兜（素材は木）には、キチンと採寸したようでビイ人形の頭に合うような形をしている。

でも柔軟さがある生物ならともかく、完全固形の木彫りに装着できるのか？耳とか絶対引つかかるだろ。

「ナツル。試しに被せて見せてよ」

吉井がリクエストを出してくる。いつの間に目覚めたんだ？

「おお、いいぞ。変身！ロビインマス…マス…くつ…変だな。入らなっ、いっ、」

「当たり前だろ」

苦戦するナツルを前に、坂本が冷ややかに答える。俺も同意見だ。

「…これって人間でも無理なんじゃないか？」

「材質が木だからなあ。よほど頭が小さいか、子供じゃない限り入らないと思うぞ」

試しに被ろうとしてみたが、どんなに押し込んでもこめかみを超えることができなかった。

これうまく入ったとしても、壊さなきゃ外せないパターンじゃない？

「じゃあナツルは余裕だねっ！」

「…どういう意味だ？吉井」

「そりやあもちろん子供並みの頭を持つてるからさ！心も小さいしね！」

「弁解の機会を与えてやったのになんでそのまま言うかな」

高速で木のマスク（バカ殿筋肉マンV e r .）を叩きつけるように被された吉井は、教室の床にうつ伏せになって（させられて）気絶した。

せっかく起きたのにまた夢の中か、同意見ではあるけどやりすぎだ

よ。

☆

★

☆

「ああ!? んだとコラ!!」

「っ?」

いきなり、教室の入り口付近から聞き覚えのない男の怒号が響いた。

そちらを見れば、いかにもガラの悪そうな風貌の男が委員長に食ってかかっていた。

「すつ、すみません!」

「すみませんじゃねーだろ!! ナメてんのかアア!」

「そんなことないですつ! ですけど…今日はもう…出せるものがないんですよ!」

「…なにかあったのか?」

駆け寄ってきた女子…じゃない、木下か。彼に話しかける。

女物のチャイナ服なんて着てるから間違えちゃったよ。

「直江、問題発生じゃ」

「内容は?」

「客が来店してきたのじゃが、料理が出せないと云ってるのに納得して帰ってくれないのじゃ」

…なんだって?」

「閉店してなかったのか?」

「張り紙は出してあったんじゃが…中に客がおるせいで、勘違いして入ってきたようじゃ」

「あきらかに店員じゃない奴らが20人はいるからな…」

納得だ。

納得だが…マズい状況になった。

あの格好や態度からして、素直に説得に応じて帰ってくれるようには見えない。

かと言ってこのままにしておく訳にはいかない。明日以降も店は開くから、変な噂でも立ったら客が寄り付かなくなる。どうしよう。

「客一人の要望も叶えられないなんて、大した店だな！」

「アニキー、腹へったよー」

「おうおう弟よ可哀想に。オイ聞いたかコラ、今すぐ食いもん用意しねえとどうするかわかんねえぞ!!」

最初に委員長に噛みついてきた奴に続いて、チンピラ風の男が当然のように入ってきた。

全部で5人。いずれもスキンヘッドでサングラスをかけていたり、小太り・細身の兄弟（全く似てない）といった物語に出てくる名前のない小悪党のような人物だ。

絶対口より先に手が飛んでくるだろ。

勘弁してくれ……！ウチは血気盛んな奴が多いんだから。

「ですからっ、今日はもう閉店で……！」

「ああっ!?なんだとテメ、騙しやがったのか!?許さねえ!!」

チンピラの一人が近くにあった木彫り人形（トロ子とか呼ばれてた奴?）を片手で掴み、振りかぶって委員長に襲いかかる。

「っ、ちよっ!」それはシャレにならない!

「キヤ——」

「お客さん、お触りはご遠慮願いますよ」

木像が振り下ろされる瞬間、チンピラの男の動きが止まった。

いつの間にも移動したのか、青い髪のエセ執事が男の腕を背後から掴んで前に進まないようにしている。

ナツルナイス! でも正直お前以外の奴に止めてほしかった。

血の気が多い奴の中でもダントツじゃないか。

「っ、んだテメエ!？」

「せつ、瀬能ちゃん…!」

「困りますよお客さん。スタッフを傷つけるのも、スタッフの私物傷つけるのも」

そこで木彫りに囲まれて身動き取れなくなってる人、散々スタッフの私物傷つけてたぞ。

「ウチはもう閉店してるんすから、なにか食いたいなら別のところ行つてください。肉出してる農産部とかオススメです」

「肉…アニキ」

「…オレは今食いてえ気分なんだよ!」

ナツルに掴まれていた男が、怒鳴りながら力づくで腕を振り解く。なんだ? あいつ今、ナツルを確認してから怒ったように見えたぞ。それに他のチンピラ達もなにかおかしい。小太りの男が釣られ掛かったのに、周りが無理矢理黙らせた。

Fクラスフクラスの近く、1教室ほどこか離れていないところにも食べ物扱ってる店はあるのに、なんでウチに拘るんだ?

「だから閉店してるんすよ。表に張り紙してませんでした?」

「知らねーよ馬鹿、そっちの落ち度だろが」

「どう落とし前つけてくれるんだ ああ?」

いけない、ナツルが囲まれた。

注意が逸れたからか委員長は相手にされなくなったけど、もつとヤバい事態に陥った。

「…皆さん相当気が立っているようで。ではここはひとつ、小粋な手品でもお目にかけましょう」

「ああ? 手品だあ?」

男の疑問の返事をよそに、なんでもない自然な様子でその手から人形を取り返すナツル。

「……はああああ……！」

それを片手で持ったまま、いきなり静かに気合いを溜め始めた。  
なんだ。なにをするつもりだ一体。

「はああああ!!！」

「分身」

……………

タレ耳像が、一瞬でビイくん変わった。

しかも両手に1体ずつ。人形は頭に鏡の装飾付きの二股の帽子を被っており、手には先端がひし形のステッキを持っている。

ミラーカあビイか。

「…おかしいな。普通に考えたらもの凄い事してる筈なのに、シヨボいって思っちゃまった」

「うむ？雄二もか？」

坂本のつぶやきに木下が同意の言葉をかける。

周りで騒動の様子を伺っていたクラスメイト達も、皆似たような感想を抱いたのようで頷いたりしている。

よかった。俺だけじゃなかったんだ。

ナツルが何かやるってだけで自然とハードル上がるな。

「お気に召しましたか？」

「召すわけねーだろバカが！」

バシヤ！



「!!」

チンピラがテーブルの上に置いてあった花瓶を掴み、中の水を思い切りナツルにぶち撒けた!

勿論自身は学校の蛇口から汲んだ普通の水道水。おかしなものなにも入ってない。

しかしだからと言って安心はできない。それを顔面にもろに受けたのはクラス1怒りの沸点が高いナツルだ。

角度の関係でどんな表情をしてるのは分からないけど、この後の展開はよく分かる。

数日前に、スクリーンボール当てられた時と同じ雰囲気だ。

「……………お客さん……………」

ポタポタと水滴が滴り落ちる中、ナツルが徐に口を開く。

ダメだ、キレル! 営業停止になる! でも止められない!

どうしよう!

「かつ……………勘弁……………してくんないスカね……………」

キレ……………ない……………!?

### 37 時間目 キレた男

「勘違いさせて悪いんすけど…本当に、出せるものはないんですよ…」  
尚もナツルは、軽く俯きながら説得を続ける。

苦虫を噛み潰したような顔に頭を下げた姿勢。 見ようによつては…いや誰がどう見ても、真摯な謝罪そのものだ。

1年近い付き合いの中で、1度として見た事がない。初めて見る。

なぜだ…ナツル、お前そんなことする奴じゃないだろう。

たとえ老人・子供でも、友達や家族が人質に取られていても構わずにやられたら倍返し…いや10倍くらいに利子をつけてボコボコにするのがお前だろ？（※酷い偏見）

「直江…お前ナツルに姫路のこと話したのか？」

坂本が信じられないものを見た表情をしながら、小声で話しかけてくる。

姫路の…そうだ。教室やクラスの学力が改善されなかったら親に転校させられるって言ってたっけ。

クラスについては学力だけじゃない筈。恐らくは素行も問題になつてくるだろう。

クラスメイトが暴行沙汰を起こすなんて、子を大事にする親なら見逃すことはできない。たとえどんな理由で起こしたとしてもだ。

言葉よりも拳を使う方が慣れてるとはいえ、アレで結構仲間思いな奴だ。事情を知っていれば我慢して自分を抑えるだろう。ただ――

「…いや、話してない。お互い忙しくて顔を合わせても説明する暇がなかったんだ」

「はあ？じゃああいつ事情をなにも知らないのか!？」

そうだ。ナツルは姫路の件を知らない。

召喚大会に学園の見回りと、教室に近づく機会さえ無かったんだ。他の人から教えられてもいないだろう。

だから余計に訳が分からない。

なぜだ…なぜ耐えるんだ!?

「おいおいよっちゃんやり過ぎだぜ、店員さんびしょ濡れじゃねえか。俺が拭いてやるよ」

「…あざす」

机に備えられていた布巾でゴシゴシと乱暴に拭かれても、態度を変えず身体を動かさない。

血管が浮き出るほどに両手を固く握り締めて、小さく震えるほどに力を込めているのに、その拳を上げることを決してしない。

そこまでされてなんで何もしない!?

「冴ちゃん…!」

「はっ!」

キヤップが殺気立ってる!

いやキヤップだけじゃない。ショッキングな光景を見て気づかなかったけど、ファミリーの皆んなを含めてクラスメイトの何人かが今にも飛びかかろうと身構えている。

こういう場合、真っ先にナツルが突っかかって行ってそれをみんなで止めるってのがいつものパターンだ。

しかし今回はどういう訳か、そのナツルが全く動かない!そのせいでみんなの怒りのボルテージがどんどん上がっていく!

ヤバイ…非常にヤバイ。

この人数が一気に雪崩れ込んだら暴動になる。

さらにその状態でナツルがキレたら店が…いや下手したら校舎が崩壊して更地になる!

あのチンピラなんてことしてくれるんだ！自分がいかに危険な事をしてるか分かってるのか!?

「(オイ話が違うぞ)」

「(少し刺激すりやいいって言われてたけど、どこまでやればいいんだ?）」

チンピラ2人がひそひそと話している。

遠くてよく聞こえないけど、周りの剣呑な雰囲気気づいたのか?

「ぐちやぐちや言ってねーで——」

初めにナツルに水をぶつ掛けた男が持っていた花瓶を大きく振りかぶる。

オイヤめっ、

「さっさと持ってこいよ!!」

ガシヤツ!!

「っ!」

「タイガ!!」

勢いよく叩きつけられて、陶器製の花瓶が口の部分だけを残して粉々に砕け散る。

それに合わせてナツルの額から赤いものが——破片で切ったか!

「——!!」

吹き出る血を見て、殺気立っている面子から怒気が溢れ出す。

さらに打たれたナツルからも”気”が放出されて：もうダメだ。

ドガツツ!!

案の定、教室内にいる奴が客に殴りかかった。

ゴウツツ、                   ドババツツ！

しかも連続で。

…その攻撃した奴は——

——爆裂ハンマー投げ！

——石ころアツパーカット！

——バルカンジャブ！

「ぐばはっ!?!」

——オブジェとして飾ってあった、カアビイくん達だった。

### 38時間目 闇の中から蘇りし者たち

——ムチ打ち！

——引つかき！

——ミラーぎり！

「すびっ、ばっ ぎい!？」

木彫りのビイくんたちが、それぞれに手に持った武器を駆使してチンピラをタコ殴りにする。

——バルカンジャブ！

——バルカンジャブ！

——ダブルバルカンジャブ!!

「ぼぼぼぼぼぼっ!!」

特に鉢巻した奴（※ファイター）と、特徴のないノーマル？（※実はスマブラ）が酷い。チンピラの両肩に一体つつ陣取って、瞳を血走らせながら力強い連打を容赦なく浴びせ続けている。

「なっ なんだこれっ!?!聞いてねえぞ?！」

布中でナツルの顔を好き勝手拭いた男が、半ば恐慌状態に陥りながら怒鳴り散らす。

そんな彼に、背後から近づくと影がひとつ。

——オイラはロビイン！

ぼん、と軽く肩を叩く。

「ひっ…」

——オイラはケビイン！

手を振り払って逃げようとしたところを、マスクと鎧をつけたムキムキマツチヨの木彫り像が正面から立ち塞がる。

「ひいっ!?!」

男の正面にいるマツチヨ——ケビインマスクとか言ったっけ?——は素早く相手の両手首を掴む。

そのまま両腕をクロスに交差させ、ゴム動力の飛行機のように捻じり上げる。

——天使のように、繊細に

「うっ うわっ!?!」

持ち上げるようにして手を離すと、男の身体が弾かれるように上空に飛んでいく。

——悪魔のように、大胆に!

同時にケビインも後を追うように上空に飛び上がり、左腕で相手の足、右腕で左腕、両足で右腕と頭部を拘束していく。

そのまま地面に——と思ったらもう一体(ロビイン)が飛び上がり、逆さまの体勢で男に首4の字固めをかける。

——ビイッグベン・エッジ & ロビインスペシャル合体技。

『王朝の歴史』!!

「グボエツ!!」

ツープラトン!?

気のせいかな、3 mメートルもないはずの教室の天井が一瞬消えて広々とした空間が見えた。

ナツルの作品ならではということか。

うん。じゃあ……帰るか。

「待て直江、現実逃避するな！」

扉の方へ歩いて行こうとしたら、坂本に肩を掴まれた。

「離せ坂本！ヤドンとカリンがお腹を空かせて待っているんだ！」

「餌ならいつも麗子さんやクツキーがあげてるでしょ」

「意味が分からん言い訳をするな！」

意味が分からないとか言うなよ、たとえどんな大事な用事があつてもヤドンのカリンのことはいつだって俺の最優先事項だ。

「教室中の人形が好き勝手に動いてるぞ！いったい何したんだ!？」

「知らない！俺は何もしてない！」

「分かるとるわ！どうせナツルだろ！作製を一番多く見てたのは直江おまえなんだ、何か心当たりあるだろ!？」

そんな急に言われても…！

作製風景を見た回数は皆とあまり変わらないし、そもそも素材集めの段階で理解が出来なかつたんだから心当たりもなにも……

『(ブツブツ…) 闇の中から蘇りし者リンプ・ビスキット…我とともに来たれ…』

あるなあ。

自然の木も生きてるから、木彫り像は言ってみればはく製のようなもの…と考えれば、ゾンビになって動き回ってもおかしくはないな。

(遠い目)

あとは…当たってほしくないけど俺が用意した木材が悪かったのか？

木造工作部の良樹君、最近黒魔術に手を出したとか聞いたような…いや、ナツルの謎パワーが作用してるんだろう。きっと。

——リトルビツクシェフ！リトルビツクシェフ！ファイヤービツクシェフ！リトルビツクシェフ！

——義翔閃！



——アイシテルぜー!!

——こんなん食えるかつ!!

「ぎゃああああああああっっ!!」

情け容赦ない連携でまたひとり、ガラの悪い男が袋叩きにされる。  
テイルズか。

そういえばナツルの奴やたら好きだったな、ヴェスペリア。主人公の性格を心底リスpektしていた。

しかしあのカあビィ。途中に回復を挟んで痛めつけるとかえげつない真似を…創造主の血(?)を脈々と受け継いでるな。

「あつアニキ!なにこれ、なんなんよこれエツ!」

「知るかバカ!とつ、とにかく写真だ!言われた通りカメラ撮れ!!」

5人組の内、まだ手を出されてない残り2人が慌てた様子で携帯を取り出す。

そしてレンズを暴行受けている奴らに向けて——つて撮影はマズい!

ドウンっ、ドウドウン!!

「ひびっ」「ぎゃっ!」

いきなりの轟音と共に、男たちの手から携帯が弾かれるように吹っ飛ぶ。

なんだ今の。銃声みたいな音だったけど。

——サイクロンガンナー!

発声したであろう場所を振り向いて見れば、奇妙な形の銃…銃?を構えたビィくん像が。

——クラウンシールド！

「うわっ!!」

さらにもう1体、モーニングスターらしきものを持った木彫りトカゲが素早く、その武器を使って落ちた携帯を叩き割る。

ビイトだ：ビイトがいる。あんなのも作ってたのかナツルの奴。あれ？でも確か他にも剣とかあったよな。使える武器。そいつらはいないのか？

——ボルテイツクアックス！

——バーニングランス！

——エクセリオンブレード！

「ぐはあっ!!」

「島津!」

残りの奴こっちいた——!!ガクトが総攻撃にあってるし！なんで!?

よく見たら3体ともシミなんかで微妙に汚れている。

そういえばガクトさつき、人形を落としたりしたとか言ってたよう  
な…

「必ず報復するあたり、ますますナツルの作品だな」

「ゴフツ！かつ、感心してねーで止めてくボフツ!!」

ごめん、それ無理。

### 39 時間目 やっぱり彼は気づかない

——ハリケーンミキサー！

——グレイトホーン！

——君が泣くまで殴るのをやめない！

——謝れよ…（死んだ）王子に謝れよ…!!

「グボ！ひいイツ！たっ 助けベツ!!」

カブトを初めとしたクワガタやカマキリタイプのビートルカあ  
ビイシリーズが男たちを追い詰めていく。

なんか、段々なにを考えているか分かってきた気がする。

……完全無機物が”考えてる”と思うことに疑問を抱かなかった。  
いやむしろ動き回っている事を当たり前前に受け止めてる自分がい  
る。だいぶナツルの異常性に毒されてるな。

ん？そういえばあの昆虫トカゲ（もどき）、女騎士みたいな人の破壊  
行為を止めるために置いてあったんだよな。持ち場を離れていいの  
か？

——オイラはビイクーン！

…蛹に進化してる!?

芋虫のような姿形をした木像がいた場所に、ドローンみたいな形を  
した物体が置いてある。

ちよつと目を離れた隙にいったいなにが？

…びしっ

さらになんの脈絡もなく、数個の人形の頭部に一筋の縦線が発生す  
る。

すー…するんっ

——オイラはスビィアー!!

切れ込みが一直線に背中まで走ったと思ったら、そこから飛び出るように蜂姿の木像が出てきた。  
それも3体。

——ダブルニードル × 3 !!

ドストドスト

「ぎゃあああああ!!」

流れるように刺しやがった！（ナツルに花瓶叩きつけた奴を）  
てか飛んだ!?!どうなってんのあの人形!?

……?あれ?

1、2、3…4。

脱皮したあとに残された抜け殻(?)は全部で4つ。  
しかし現在飛び回っている蜂は3匹。残りはどこに…?

——オイラはバルビィート!

教室の外でいきなり怪しい光が!?

見るとずんぐりむっくりしたホタル?みたいな姿の木彫り像が、集まった野次馬たちの間を忙しなく、発光しながら動き回っている。

蜂じゃねーし!進化の過程でいったいなにがあった!?!ダーウィンもびつくりだよ!

『…騒がしいからなんかあるのかと思ったけど、なにもないみたいだなー』

『なーんだ』

『次どこいくー?』

教室のドアから様子を窺っていた野次馬たちは、ホタル(?)の光を浴びた途端、何事もなかったように離れていく。

しかしその顔はトロンと…恍惚とした表情をしていた。

…洗脳!?

どうしよう、止めた方が…いやしかし今のこの状況で通報されたらとても困るからみ消せるならありがたい…いやいやでも後遺症とかの心配がつ、

「……下手に出てりやあ調子に乗りやがって…」

不意に耳に入った、地の底から湧き上がる溶岩のような低い声。

普通にビビった。

「覚悟はできてるんだろぅなあ…?」

顔を手で覆って静かに立ち尽くしていたナツルが、ようやく動き出すようだ。

手を顔からゆっくりと剥がす…その動作に同調するように木彫りたちが一斉にビクツと震えた。

「テメエらまとめてぶつころ——…ぶつころ…?」

ナツルの殺気が一瞬で萎む<sup>しほ</sup>。

ポッコボコにしてやろうと思った相手が、やる前にすでに瀕死に近い状態に陥ってるんだもん<sup>な</sup>。そりややる気も萎えるし思考も止まるわ。

動いてた人形たちもナツルが顔を上げた途端に元の位置に戻った。

ご丁寧に作られた当初のポーズで停止したから、余計に意味が分からないだろう。

「なんだこれ、誰か無双でもしたのか?」

やったのは大乱闘だよ。

ていうか結構騒いでたのに、まったく気づかなかったのか?

「その奴ら（チンピラ5人）はまあいいとして、なんで島津もボロボロなんだ？」

「おめえの人形のせいだよ……！」

ついさっきまでビイトたちに倒され、総攻撃（シールドとガンナーが途中から参戦した）を受けてたガクトが、痛めつけられた箇所を押しさえながら立ち上がる。

「人形？…移動させる拍子にバランスでも崩したのか？」

一応私物なんだから気をつけろよな…とぼやきながら、ガクトの足元に転がってるソレを拾い集める。

さっきまで暴行を働いていたビイトたちだ。

直前まで動いてたから定位置に戻れなかったみたいだな。

「ちげえよ！その木彫りが襲ってきたんだよ！」

「はあ？襲ってきた？木像こゑが？…頭大丈夫かお前。ロボットじゃあるまいし、ただの木が動くわけないだろ」

し〇らアツ、うしろうしろおおおっつ！！

真後ろにいるビイトたちが同意するように首を縦に振ってるぞおっ！

俺の表情（後で聞いたが他の人も似たような顔をしてたらしい）を見たからか、ナツルは背後を振り返る。

が、それに合わせるように人形たちは動くのを止める。

なにあいつら！そんなに動くこと知られたくないの？なんで？

「舐めやがって…!!」

和気あいあい（？）とした雰囲気の中、憎しみと怒りの込められた荒い声が響く。

「どいつもこいつも、大人しく思い通りにしてりやいいのに、よおっ！」

最後に一際大きく叫びながら、1番ボロボロにされたらチンピラがナイフを取り出す!

ってナイフ!?ヤバい、どうしよう!

まったく怖くない!!

この教室、あんな全長が手のひらほどの凶器より怖いもので溢れるから!

「…おう直江、お前なんで今俺を見た?」↑ナツル  
他意はないよ。

「もう指示とか関係ねえ!全部ぶっ壊してやる!!」

男はそう言つてナイフを逆手に持ち替え、身近にあつたビイくん像に切っ先を――

「わたしのビイくんになにをするつもりだ?」

――突き立てる前に女騎士さんに腕を掴まれ捻り上げられる。

あなたまだいたんですね。

「ぐあああつ…!」

「お客さん、揉め事なら他所でやってくださいな」

「む?…そうだな。店側の迷惑になることは控えよう。みんな手伝つてくれ」

ナツルの一言に素直に頷き、仲間を促す騎士さん。

興味深げに木像を眺めてた数人が、同意して床に寝転んでいる男たちを引き上げる。

「あーそれとは関係無しに今日はもう店じまいですので、申し訳ないんですが退出してくれませんか?」

チンピラたちと一緒に出ていく人たちを眺めていたが、不意に思い出して室内に呼びかける。

「えー、俺なにも食つてないぞ!」

「オィアレク、文句言うなよ。ねえもんはしようがねえだろ」

「あう…すみません、わたしが全部食べちゃったから……」

「うっ…いや、ルリアが悪いってわけじゃ…」

しよんぼりと落ち込み出した青髪の少女を見て、金髪の少年が慌てて慰める。

事実だから否定のしようがない。

「明日もやりますから、良ければ来てください」

「いいんですか？」少女が表情を明るくして訪ねてくる。

…ちよつとキツイけど、今からなんとか材料の手配を試みよう。  
学園祭を回るのは最終日でいいや。

吉井や坂本も頑張ってるんだ、俺も教室改善のために頑張らないとな。



## 40時間目 AKIの世界

「そーういや吉井は？」

「明久？それならナツルおまえが気絶させてそこに…」

坂本が振り返った時、そこには誰もいなかった。

つい先ほどまで、木のマスクを被されて寝っ転がっていた吉井明久。その姿は影も形もない。

「いないみたいだけど」

「あれ？おかしいな。確かにさっきまでそこに…」

「人は策を弄すれば弄するほど、予期せぬ事態で策が崩れる」

『!?!』

突然背後から声がして、振り返る二人。

そこには奇妙な木製の仮面をつけた、少年が立っていた。

「人間の能力には限界がある…それが僕の短い人生で学んだことだ」

「明久…？」

「お前何言つて——」

ドゴンツツ!!

ナツルが口を開いている途中で、一陣の風がその脇を駆け抜ける。

それとほぼ同時に、隣に立っていた坂本が猛スピードで壁に叩きつけられた。

「…は？」

振り向くとそこに、殴った後の体勢で停止している吉井の姿。

「だが僕は手に入れた…ナツル、キミがくれたこの仮面から！こんな素晴らしい力を！」

彼はゆっくりと体勢を戻し、愉快そうに雄叫びを上げる。

「僕は今、人間を超越したゾー……!!ナツル……!!」

…顔に装着しているもののデザイン故に、いまいち危機感を覚えづらい。

しかし黒板にめり込んでいる坂本の姿を見ると、凄まじい力を得たのは間違いないだろう。

時折かすかに震えはするので死んではないようだが、普段の吉井では考えられない威力である。

「そんな…！俺が、俺の作品がつ、こんな魔物を作り出してしまったなんてっ！」

「魔物？おいおい魔物は酷いなあ、超越した人間なんだ。超人と呼んでよ」

笑っているのか、肩を小刻みに揺らしながらも拳を構える吉井。

「雄二を瞬殺したこの力で…次はお前だ！ナツル!!」

「あの吉井がこんなになるなんて……」

苦しい表情を浮かべ、対峙するようにファイティングポーズを取るナツル。

「俺の責任だ…俺がパトスの赴くままに作った物が原因なら、俺が戦わなければ！」

「ただ異常なだけのキミに、この僕をどうにかできるか、バカめ!!」

るヴオツ!!と風を巻いて、自分より頭一つ分身長が高い男を殴り飛ばした拳が勢いよく振るわれる。それも二つ。

左右から迫り来る攻撃にナツルは、

ガシッ

一步背後うしろに下がり、何事もないように吉井の両手首を掴む。

「……………え？」

「舐められたものだな。たかだか少し、人間を外れた程度で俺を倒せると本気で思ってるのか？」

先ほどとは違い、厳つい雰囲気で見尻を釣り上げるナツル。腕を捕まえたまま、上体をゆっくり逸らしていき――

「ツアー!!」

「へべツ!?!」

ブリッジで吉井を上空に弾き飛ばす。

「ツアー!! ツアアアッー!!」

さらに自分も飛び上がり、追撃するようにブリッジで何度も跳ね上げる。

「なっ、なにを!?!」

「教えてやる、怪物たる俺と人間であるお前の差を!!」

一定の高さに達したところで、吉井の身体のあらゆる部位を荒々しい関節技サブミッションで極め、締め上げる。

「パギヤア!!」

「喰らえ、パーフェクト・セカンド奥義――」

降下とともに、拘束を解除。

即座に背中合わせになって、相手の両手を自分の両手で掴み、相手の両足に自分の両足を絡ませた状態となる。

そう、それは文字通り”必殺”を前提とした、非常に高いテクニクを要求される幻の技。

「アロガント・スパアアアアクツツツ!!!」

ガガアアンツツ!!

「ニヤダバアツ!!」

「…これで今夜も安心して熟睡できる」

くくく

ナツル「なんか吉井がビクンビクン痙攣してるぞ」  
雄二「悪夢でも見てるんだろ」

## 41時間目 ようせいさんのへやで

↳直江Side

ようやく客がいなくなったので、『本日閉店』の張り紙ををつけてドアを閉める。

誰も入らないようにした後は教室内の掃除だ。色々と暴れて内装がめちやくちやだからな。

その際（ナツルが見えないところで）木像たちが壊れた物の修理とかを手伝ってくれた。

…童話なんかに出てくる妖精みたいだな。

「そういえばナツル、お前頭の怪我はそのままでもいいのか？」

「あ？…あー…そうだな」

血が止まってカサブタ状になっている箇所を軽く指で触れて、逡巡するように黙り込む。

「悩むくらいなら保健室行ってこいよ。人前に入る機会があるんだろ？」 召喚大会とか。

どんなに寛大な人でも、目の上を切った痕があったら追求するぞ普通。結構目立つし。

「時間も無いんだし、さっさと行った方がいいぞ」

「俺まだ昼にも食ってないんだけど…」

…諦めろ。お前なら一食抜いたぐらいは大丈夫だよ。多分。

「そういえばナツル。さつきはなんですぐに反撃しなかったんだ？」

いくら考えても、あの時手を上げなかった理由が思いつかない。

結果的に全て丸く収まったが、まさか狙ってたわけじゃないだろう。

「お前なら花瓶をぶつけられる前に…いや水をかけられる前に相手を制圧できただろう。なんで黙って受けたんだよ」

俺の問いかけにナツルは気怠げな雰囲気で見つめ返して、

「……さあな…」

「さあなって…」

「そういう気分だったんだよ。いいだろ別に、問題なかったんだから。保健室行ってくるよ」

そう言っつて、一方的に会話を打ち切つて教室から出ていく。

そうなんだけどさあ…なんか引つかかるな…

いつになく真剣な顔してたし。どうしたんだあいつ？

☆

★

☆

くナツルSideく

「ありがとうございます」

「ええ、お達者で〜」

保健室でなんかよく分からんナースコスの美女に治療してもらい、ついでに見送られてFクラスの教室に戻る。

うちの学校の保健医の教師あんなだったっけ…？前に利用した時と違う気がするんだけど…

………まあいいや。ただの記憶違いだろう。

もしくは頭を打たれたから、ちよつと混濁してるのかもしれない。

「……………」

絆創膏が貼られているところ…陶器を叩きつけられた部分をそつと指でなぞる。

なんであんなことしたかなあ。

『お前なら花瓶をぶつけられる前に…いや水をかけられる前に相手を制圧できただろう』

確かにな。

制圧どころか、あの程度のザコなら五秒あればひき肉にできた。

でもしなかった。やろうと考えなかったし、身体も動かなかった。

なぜだろう？

「……………ま いったか」

俺の肉体と精神は時たまに俺自身の理解を超えた行動を取るから、今回もそれだろう。

結論が出たところで、教室に向けて再び歩き出す。

いつの間にか足が止まった。

思考に没頭しすぎたな。

いきなり廊下の真ん中で立ちつくしてぼーっとするとか、不審者として周りから白い目で見られてねえよな？

『あの人かっこよくない？』

『憂いを帯びた表情の執事…いい！』

『九鬼の人かな。ランクたかーい』

……：そういえば俺今 燕尾服だったわ。いい加減着替えたい…

汚れた制服メイドに持ってかれたままんだけど どうなったんだ？

……：洗濯されて返ってくると信じよう。

あんま九鬼の家行きたくないから。

「つと、到着か」

色々考えてたらFクラスに戻ってきてた。危うく通りこすところだったよ。

『本日閉店』の貼り紙がしてあるドアを開けて——鍵かけてなくていいのかな——中へ入る。

かつたるいからサンシャインのくだりとかは無しだ。お腹が減って力出ないし。

「ただいまー」

……：返事がない。ただのしかばねのようだ。

いや冗談だけど。

俺が入ってきたと言うのに、クラスメイトたちは教室の真ん中で固

まっている。

何してんのお前ら？

「ん、ナツルか。どっか行つてたのか？」

坂本が目敏く気づいて、人の輪を外れ近寄ってくる。

「ああ、ちよつと保健室にな」

「そーいや額を切つてたな。大丈夫か？」

「大丈夫だ…問題ない」

「そうみたいだな」

さらつと流しやがった。

「…みんなで固まつてるみたいだけどなんかあつたのか？」

「ああ、島田の妹が来てるんだ」

それだけでアイドルが来たみたいな状態になるんか？

もっと他にやることあるだろ。明日の店の準備とか学園祭を楽しむとか。

そーいやウチの学校、一年生に現役のアイドルがいるらしいな。どうでもいいけど。

名前なんつたっけ………まあいいか。

「で、その島田の妹をなんでみんなして囲んでるんだ？そんなに美人なのか？」

たとえばどんなに美人でも、姉を見たらだいたい予想がつく。どうせぺったんこだろ。

ボディに鉄拳食らった。

「ゴバアツ!!」何事!?

「瀬能、あんた今何か失礼なことカンガエタデシヨ……?」

ヒイイツ!?!いつの間にか島田さんが女子がしてはいけないレベルの怒りの形相でファイティングポーズを取っていらつしやる!

ホントにいつの間にも現れたの!?!つい一瞬前までいなかったらう



に!!

「……気のせいだろ……」

「聞こえないわね」

「けして！島田さんを貶すようなことは考えておりません！すいませんした！」

握り込まれた拳に力が入っていくのを感じて、速攻頭を下げる。

恐ろしい……！”気”を使えないハズなのに、拳を中心に赤い闘気が渦巻いて見えるぞ。

「今回は許してあげるわ。教室が騒がしいみたいだけどなにかあったの？」

よかった。荒れ狂ってたオーラが四散した。

あの状態の一撃を食らって無事でいられる自信がなかったからな……、どうしてウチの学校の女子は強いこわいのが多いんだ。

「島田の妹が来てるんだ」

「ウソ、葉月が？ホントに？」

「なんで疑うんだよ」

つーかまずなんで来てること知らねえんだよ。

「さっきまで召喚大会に出てたのよ。朝家を出る時もなにも言っていなかったし」

「あっそ」

召喚大会か……島田は確か姫路とチーム組んでたな。

んで、俺とは別ブロックだったはずだ。そろそろ俺も次の試合の間が近いかな？

「あの子一人で来たのかしら……葉月！」

「！お姉ちゃん！」

島田の声に反応して、クラスメイトの集団から一人抜け出してくる。

それは周りの人間と比べると（一部除く）随分小さく——小学生くらいの少女だった。

ガタタツ、

思わず引いた脚が椅子にぶつかり、音が鳴った。

## 42時間目 彼の秘密

「? どうしたナツル」

「……………いや…なんでも」

坂本の言葉に適当な返事をして、僅かに動いた椅子をもとに戻す。

落ち着け…! 動揺するんじゃない!

いんちよう甘粕みたいなもんだろ、あんなの。

むしろ委員長よりマシのハズだ。本物のJSだから。

ゲロを吐くぐらい怖がらなくてもいいじゃないか。落ち着け…  
落ち着くんだ俺……

「葉月、アンタ一人?それともお母さんと?」

「驚かせようと思つて、一人で来たの!」

「アンタね……」

「えへへっ」

ゴメン、俺ちよつとリバーシしてくるわ。

じゃなかった。リバーシしてくるわ。もうヤバイ。

昨日の夜からなにも食つてないから、純粋な胃液が喉元までせり上がつてきてるのが分かる。

込み上げるものを頑張つて嚙下していると、俺に気付いたのか幼女がこちらに視線を向ける。

おいやめろ。近づくな。逆流性食道炎になる。

「あれ?どうして執事さんがいるんですか?」

「さあ?きつと趣味でしょ」

「違あらんうわい」

これはな、止むに止まれぬ事情というやつがな。

「…それがあれか、島田の妹か」

説明すると長くなるので、否定だけして話を進める。

早く…とにかく早く済ませてこの場を離れなければ……!!

「そうだけど…瀬能、あんた大丈夫？ 顔色がすごい悪いわよ？」

「大丈夫だ、問題ない」

「イヤ、真っ白じゃない。大丈夫じゃないわよ」

ハハつなにおつしやるウサギさん、瀬能君ちのナツルさんは昔つから大根肌つて言われてるんだぜ？

「調子に乗って食い過ぎたかな…」

「え、ナツルお前、昼食まだじゃなかったっけ？ いつの間になにを食ったんだ？」

「霞」

「仙人か」

うちの祖父じいさんそんな感じのあだ名で呼ばれてるらしいけどね。

「ナツル、お前ホントにおかしいぞ？ どうした？」

「おかしい？ 俺が？ ハハツ、何言つてんだお前…いつものことだろ」

「自覚はあるんだね」

そりゃあ…ね？

「なんで照れるんだよ…」

「出会つて一年くらい経つけど何考えてるか今だに分かんねえ…」

「執事さん、大丈夫ですか？」

さりげなく距離を置いた（※本人基準）幼女が再び会話に混じつてきた。

しかも物理的に距離を詰めてくる。や…やめろ……!!

——俺に近づくなああ—— !!

「なんでいきなりデ●アボロ？」

「声に出してないのに台詞がはつきり聞こえたんだけどどうやったの？」

直江とモヤシ。お前らのそういうところ嫌いじゃないぜ。

「しっ、執事のお兄さん…葉月、なにか気に触ることをしましたか…？」

幼女がいきなりの拒絶に瞳を潤ませて狼狽する。

今にも泣き出しそうな表情を見て…とくに何も感じないな。

むしろスカツとする。イエー！なぜなら僕はゲスだから！

「瀬能！あんたなに葉月泣かせて笑ってるのよ！」

「うわっ、さいってー」

「お、お姉ちゃん、葉月泣いてないですよっ」

「瀬能ちゃん、そんな態度はダメですよ！お姉さん怒りますよ！」

いかん。クラスの女子から非難の眼差しと声が。

つい最近上がり始めていた俺の株が一気に下がっていくのを確かに感じる…いやまあそれはどうでもいいけど。

問題はアレだ。いいんちよの甘粕が目尻を上げて近づいてくる。

きつと説教でもする気だろう。

奴は…奴はマズイ……！

「ここは退くのだ…ここで一時退くのは敗北ではない……!!」

「おいなんかあいついきなり眩きだしたぞ」

「しかも髪の毛になんか…キノコみてーな斑点が浮き出てんぞ」

「瞳の模様までディアボ●に…あれもう演技じゃなくて変身じゃないか」

「瀬能は多芸じやのう。ワシも見習いたいもんじや」

俺には頂点に振り返れる能力がある。

「まあまあちよつと待てよナツル。帰って来たばかりじゃないか、少し話そうぜ」

ダツシュで出口に移動しようとはほんの少しだけ後ずさったところで直江が近づいてきた。

…島田の妹を前衛にパーティを組みながら。

「断る。俺は忙しいんだ。近づくな」

「そんな冷たいこと言うなよ、クラスメイトだろ？友好を深めると思ってるさ」

「プライベートでいつも深めてんだろ。こっち来んな」

「フアミリーだけじゃなくて、その他の人間とももつと仲良くなろうぜ。卒業まで付き合っっていくんだから」

「まったくの正論かもだが今じゃなくてもいいだろ。だから近づけんな」

「いやいや、こういう大きなイベントの時とかでもないと動けないだろう。だからさ、そんな警戒しなくてもつと心を開こうぜ。そもそもなんで逃げ腰なんだ？」

「は？ちよつと、言ってる意味がわからないんだけど。警戒もしてないし腰も引けてないんですけど。あと寄ってくんなし」

「……………」

「……………」

「あ…あの…う？」

ナツル は にげだした !!

「ここで姿をくらませたらこの子連れて自宅に押しかけるぞ」

しかし まわり こまれて しまった !!

「汚ねえぞ直江えつ!!」

「まさかホントに止まるとは思わなかった」

こんチクシヨウ!!

「というかお前の家つて、学園こじから歩いて一時間くらいかかるだろ。そんな所夜に小さい子連れて行けるかよ」

クソがツツ!!ハツタリかよ!

「で？なんでそんなにこの子を恐るんだ？もうバレてるんだからキリキリ話しちやいなよ」

「ヤダよ。バレてるんならむしろ説明したくないよ」弱味になるから。

「……………」 ↑ 直江 じつと見つめる。

「……………」 ↑ ナツル そつと目を背ける。

「なんでえ？ねえなんで教えてくれないの？ねえねえなんでなんで？」

「ぼつおまつ、や…やめ…やめろやめろほんとマジでやめろ!？」

「教えてほしいなツ！」

幼女抱<sup>か</sup>えて迫<sup>か</sup>って来んな！

「…直江ってあんな奴だったか？正直ナツルの狼狽ぶりよりも衝撃的なんだが」

「なんだかんだ言<sup>つ</sup>て冴ちゃん<sup>と</sup>出会<sup>つ</sup>て大和が一番変わったよな」

「だな」「うん」「言<sup>え</sup>てる」

「あはは…瀬能さんが2人いるみたいですね…」

「少し前まではあんな風じゃなかったのに…でも好き」

しばらく逃げ続けてたが、的確に進行方向を先回りされて教室隅に追い込まれてしまった。

コイツこんなスペック高かつたつけ!?覚醒イベント?!

「分かった!言<sup>う</sup>!言<sup>う</sup>から!!」

「スネエエーク!まだだ、まだ終わってはいない!!」

「ブツ殺すぞ!」誰がスネークだ!

### 43 時間目 彼の秘密 　　くそして伝説へく

く直江Sideく

文化祭1日も終わりが近づいてくる中、偶然ナツルの弱点を知った。

普段からなかなか主導権を握れない相手なのでちよつと嬉しくなり——つい調子に乗って追い回してしまった。

いやまさかあそこまで狼狽えるなんて思わなかったから。

お陰で手ひどい反撃にあったよ…殴られた顔がまだ痛い……

「で、なんであんなに避けてたんだ？そろそろ試合が始まるから早く言ってくれ」

「うう…じ、実は俺には一つ年下の親戚がいるんだが…」

坂本に促されてナツルがうなだれながら語り始める。

「ソイツがその…見た目は小学校低学年の女子児童みたいなんだが…運動神経が抜群で武の才能の塊みたいな奴で…」

「お前、親戚までそんなのかよ…」

ナツルだけでもオリンピックの全種目金メダル制覇できそうなくらいなのに。こいつの一族っていったいどうなってるんだろう。

「それでその…性格が悪ノリしたモモさんくらいひどつ、無邪気で…祖父が開いてる道場に行くたびに……」

「あー…」なんか察したわ。

「折られた？（骨を）」

「折られた…（骨を）」

やっぱり。

ていうか今「ひどつ」ていったら。百代ねえさんの性格が酷いつて。まあ聞かなかつた事にするけど。



「そういうことを毎日続けられるうちに極端に年齢離れた見た目の娘に畏怖するように…」

「なるほど」

そうやってトラウマを築かれていったんだな。

委員長に注意受ける度に身体を強張らせてる理由がやっと分かった。

…『毎日』？今毎日って言った？子供の頃から毎日骨折してたのか？

俺が親なら道場通い止めさせると思うけど…もしかして一晩で骨繋がってたのかな。だとしたらこいつもこいつでやっぱり色々おかしい。

「そういうえば最初の頃ワン子に対してもぎこちなかったよね。それっでもしかして」

「あの頃めっちゃ睨まれてたし…ぶっちゃけ今でも下から見つめ上げられるの自体が結構キツイ」

「そうなの!？」

知り合ってばかりの時、ワン子はナツルの事をよく思っていないかった。敵視していたと言ってもいいくらいに。

理由は自分と同じ年でありながら姉さんに勝つっていう、ワン子の目標を難なく達成した奴だから。のちに本人が明かしてくれた。

当時は理由も分からず困惑してばかりで——これ以上話すと長くなるからやめよう。

「そんな訳で私瀬能ナツルは幼女がベリーベリー苦手なわけです。終わり」

「なぜいきなり物語口調…」

ナツルだからな。

しかしそうか…小さい子が弱点なのか…そうかあ。

「直江テメーなんだそのしたり顔は。くそッだから知られたくなかったのに…」

「大和すっげえいい笑顔するな」

「前はあんな、悪役みたいな表情する奴じゃなかったんだけどな…」  
「やっぱり大和が1番影響受けてるよね」

酷い言われようだ。とくにモロが。

「そしてお前はさっきから何やってんだ？」

ナツルが自分の目の前にいる吉井に話しかける。

説明が始まって、しばらくしてからずっとナツルの前でしやがみこんでじっとしている。

…なんとなく予想はつくけどどこれまさか……

「え？下から見つめ上げられるのが弱点って聞いたからやってるんだけど」

「……………」

その後、吉井は間柴ばりの打ち下ろしの右を食らって保健室に緊急搬送された。

容体？それは分からない。ただ坂本はのちの召喚大会五回戦を一人で出る羽目になったのは確かだ。

☆

★

☆

くナツルSideく

『ただ今より、召喚大会5回戦を始めます！』

立会いの教師のマイク越しの声に、客席が大歓声で返す。

本日最後の試合らしいから興奮もひとしおの様子。いや知らんけど。

そして当然のようにいる桐条先輩親子。

こういうイベントごとの時 生徒会長って忙しいんじゃないの？  
なんで一般公開される試合全てでその姿確認できるの？ホントは暇なの？どうなの？

答えて！

「瀬能君、承認はもう済んでますよ。早く召喚してください」

「あつはい、試獣召喚」

教師に促され慌てて召喚獣を呼び出す。

同じみの魔法陣から出てきたのは…ふむふむ、装備は二本のコンバットナイフ。腰にウエストポーチのような四角いカバン。

姿形は背中にコウモリのような羽根が生えたペンギンか。

なんか語尾に「ツス」とか付きそうな某ゲームの有名キャラみたい  
な見た目だ。

というかそのまんまだ。

「あら、思わず持ち上げたくなる体躯ね」

「ちよつ会長!？」

突然戦乙女姿の召喚獣がペンギンを頭上高くに抱え上げる。

いきなりの意味不明な行いにプリナツツもビックリした表情で暴れ回る。

もつとも手足が短いからどんなに振り回してもわずかに身体が揺れる程度でしかない。

「ダメよ瀬能君、そんなにジタバタしちや。手が滑って地面に落としたり大変でしょ?」

こ、コイツまさかつ、知っている!? プ●ニーの特性を知っているのか!!

「やつ、やめろ! 鬼! 悪魔! 冷血漢! あんたには血も涙もねえのか!」

「鬼でもないし悪魔でも、ましてや漢でもないのだけれど」

冷血なのは否定しないの?

「なぜだ! なぜこんな事をー!!」

これから起きるであろう事を予測して止めようとするが、召喚獣からのフィードバックのせいで妙な浮遊感がある。

おかしいよね。ちゃんと地に足ついてるのに浮いてるって。

矛盾する二つの感覚のせいで下手に動けそうにない。油断するとすっ転びそうだ。

「この1年、私の出番全くなかった…存在すらも触れられなかったわ

…」

「会長さん!?」なに言ってるのいきなり!?

あんたそんな事言うキャラじゃなかったでしょ!しばらく顔合わせなかった間にいったいなにがあった!?

てかそれ俺のせいじゃねーし、八つ当たりじゃねーか!

「それでは試合、開始!」

「オオイッ…この状態で試合もクソも「えいつ」おマアアツ!!」躊躇なく投げやがった!

飛んでいく。

放り投げられた青い獣が飛んでいく。

フィードバックで風を切る感覚を全身に感じ——空中で水平移動。ほんの少しの間空を漂って…山なりに落下。またも風を切る感覚を味わう。

軌道の先には相手側の召喚獣が二体。直撃コースだな。

その時ふつ…と、なぜかプリナツツの顔が脳裏に浮かぶ。

彼(?)は優しげに、微笑むように目を閉じこう言った。(※幻聴)

——…自分、次は人型に生まれてきたいッス

ぷ…プ●ニ—————!!!!

どっかーん

「ぬ”え”っ”!”」

着地と同時に爆発が起きて三体の召喚獣がそれに巻き込まれた。

さらに俺だけフィードバックで全身くまなく核熱系の激痛が走って思わずその場に倒れ伏す。

むちやくちや熱痛え……



「はい？」

後ろから肩を掴まれ強引に振り返される。

外国人風で20代くらいなのがイラついた表情で立っていた。

「ヤットキツイテモラエタ：アノ、オネガイガアルンデスガ、イイデスカ？」

「はあ？…」

いきなりなに言ってるんだコイツ。

初対面で得体の知れない奴の頼みをなんで俺が聞かなきゃいけないんだよ。お人好しあたりにも言えや。

と言ったところで納得してはくれないだろう。お願いとやらを聞くまで解放するつもりもなさそうだ。これお願いという名の脅迫だよね。

ため息を吐きそうになったが我慢する。

それでも表情には出たのか、肩に置かれた手に力が込められた。

今日は厄日か。

「…内容だけ教えてもらっていいですか」

このままだと肩の骨を外されかねないので、仕方なく下手したてに出る事にした。

——この時、俺は間違いなく油断していたのだろう。後になってそう思った。

「アつ、ハイ！ソノ、ブシツケナノデスガ」

「いいから早よ言え」

下手に出ようと思ったけどさっそく無理そう。

コイツの片言喋り、聞いてたら腹立つんだもん。三年の生徒会副会長セイジと違って。

案の定俺の言い方にムツとした様子を見せる金髪女。

それを隠そうともせず言葉が続ける。

「ソノ、アナタノウデノキカイ。ホシイデス」

「はあ？」

今なんつったコイツ？

腕の機械？桐条先輩に付けられた、このダークブルー色の高性能デバイス（そーいや返し忘れたな）の事か？

「馬鹿言うなよ。なんで見ず知らずの人間にこんな見るからに高価なものやらなきやなんねーんだよ」しかもタダで。

いやっ違っ、けして言い値を表示されたら渡すって訳じゃないぞ？借り物だし。

……そもそも外せないし。

「ソコヲナントカ」

「無理だ」

「オネガイシマスヨ」

「しつけえな。いい加減はなせ」

掴まれた手を振り払おうとした瞬間、俺の意識は脈絡なくブラックアウトした。

「…ま、渡しても渡さなくても結果は変わらないんだけどね」

☆

★

☆

「……………う…」

ゆっくりと意識が覚醒する。

『どうだ、調子は？』

『ダメだ。やっぱりどうやっても外せない』

『ハッキングも難しいですね、専門の機材を使わないと取っ掛かりすらつかめません』

同時に聞き覚えのない声で、よく分からない言葉の会話が入ってくる。

英語か？これ。今俺どんな状況なんだ？

『打つ手なし、か…』

『腕に付いてるだけにですか?』

『バカ、冗談言ってる場合か』

HAHAHAHAHAHA!と外国人特有の笑い声が響く。

ちよつと整理しよう。

自分の状態は…パイプイスっぽいのに無理矢理座らされてるな。両腕を別々に拘束されて。

右手はイスに手錠で繋がれていて、左手は机のような台のようなものの上に鎖で固定されている。

その腕に装着されてるデバイスからはなんかコードが伸びていて、その先はパソコンに繋がっている。

なにしてるのか超気になるけど一旦置いといて。

現在いる場所は…どっかの廃工場?すっごい荒れてて汚くて寂れた施設だつてのは分かる。

そしてそんな俺そっちのけで色々作業してる特殊部隊の隊員が着てそうなスーツ姿の外人たち。

うん。

俺、拉致られたっぽい。

映画みたいな状況だ…

『ハロー、調子はどう?』

『っ、…おまえか』

男だらけの空間に、軽やかな様子で女が一人やって来た。

あれは…気絶する前、俺に話しかけてきた奴だな。

『なによ。まだ終わってなかつたの?もう夜も遅いんだから早くしてよね』

『簡単に言ってくれる…そもそもおまえの仕事は終わってるんだから、先に戻ってもいいんだぞ』

『そもいかないわ。顔を見られてるもの』



女は黒スーツの男たちの中でもリーダー格と思われる人物と親しげに喋っている。当然英語で。

二か国語話せるとかスゲーな。俺は日本語で手一杯だ。

『白々しい…わざと素顔を晒して接触したんだろう？変装でもすればよかつたじゃないか』

『確実に成功させるにはアレしかなかったのよ。昼間の連中がどうなったか知ってるでしょ？』

『まあ…な。正直こうまで手こずるとは思わなかった。さてどうするか…』

『そんなに難しく考えなくてもいいんじゃない？その子のを切り落として腕ごと持ってきましょうよ』

女の何気ない一言でざわつ、とあたりにどよめきが走った。

会話の内容は分からないがなにやら雲ゆきが怪しくなってきた様子。

『腕ごとつておまえ…』

『証拠隠滅も兼ねて、その方が手っ取り早いでしょ？遅くなると色々騒がれて厄介よ』

『…とか言つて、恐怖で泣き叫ぶ顔が見たいだけじゃないのか。この前も任務中に一人壊して死なせただろう』

『否定はしないわ。この子、よく見たらかわいい顔してるし。きつといい声で泣いてくれそう』

さらりと髪を撫でられる。

鳥肌立ったわ。寝たふりするのも限界かな。

『サゲイストめっ』

『失礼ねえ。どっちにしても始末はしなきゃダメよ、あなたたちも顔を見られてるんだから』

『なにっ!?!』

『気づいてなかったの？この子、とっくに目を覚ましてるわよ』

触れるだけだった手にいきなり力が入り、上方向に引っ張られて無理矢理頭を上げされる。

いてーなコラ。思わず女を睨みつけたらにんまりと笑顔を返され

た。

『オイオイなんてこった…！本当に起きてるじゃないか！』

『見知らぬ場所で拘束された状態で目覚めて、悲鳴どころか身動き一つ取らなかつたのかよ…？』  
『あつたかよ…？』

『あと数時間は意識が戻らないはずじゃなかつたのか？』

『今までの奴らはそうだったけど、この坊やは違つたみたいね。耐性

でもあるのかしら？』

”まだつたらむしろわからない不幸いよね”台詞と楽しげに呟きながら、女は髪を引つ

張つたまま俺の顔に自分の顔を近づけてくる。

「これからなにが起きると思う？」

英語ではなく日本語が囁かれた。

「あなたの左腕を…そうね、肩あたりから切断するの。きつとすごい痛いだろうけど、がまんしてね？」

「……………」

「あいにくここにはナイフぐらいしかないから、終わるまで何度も何度も刺したり切つたりするでしょうね。こんなことになるならもつと鋭くて大きな刃物を用意しとくべきだったわ。ゴメンなさい」

女はまったく悪びれた様子のない笑顔で喋り続ける。

俺が一言も口を開かないからびびつてると勘違いでもしてるんだろう。

「オイ」

「…？なにかしら？」

「今すぐ手錠を外して俺を解放しろ。んで、ジョジョ園の焼き肉弁当買ってこい。そしたら許してやる」

「……………は？…？」

ぼかんとした表情で固まる女。

いい加減手を離せや。

「聞こえなかつたか？手錠外して肉買ってこいっつってんだよ。日本語分かるだろ」

会話は成立してる筈だが…なんか不安になってくるな。

?急に髪を掴んでいた手が離されたぞ?

それだけじゃなく、女は片手で自分の顔を隠すように覆い、よろよろと後ろに二・三歩退がりだす。

『…ぶっ、アハッあははっ、あはははハハハハハッ!!』

いきなり狂ったように全力で笑い出す。

その様子に周りにいた奴らもビツクリしてドン引きだ。

『お…オイどうした急に』

『ごっ、この子、こんな状況なのにつ…アハハっ、今すぐ自分を解放したら許してやるですって!』

『ハア?』

今度は特殊作業員な男たちが呆けたように固まる。

そして一拍置いてから巻き起こる大爆笑。

『ハハハハハッ!腹イテー!!』

『頭のネジが飛んでるんじゃないかコイツ!』

『強がりにしても大胆すぎるだろ!』

やっぱりなんて言ってるかは分からない。

それでも馬鹿にされてるのは何となくわかる。テラ腹立つ。

しかし、そんな笑い転げる奴らの中、真面目な表情で俺を見つめる者が一人。

『……』

『隊長?どうかしたんですか?』

『いや…何故か、ちょっと前に再会した知り合いの傭兵のことが頭をよぎってな』

やっぱり何喋ってるかわっかんねえなあ。

でもあのおっさんだけは他とは違うみたいだ。記憶の片隅にでも覚えておこう。

「で、どうすんだ？」

「アンタバカア？ いえバカよね。それともそれが日本人の特性なわけ？ お気楽で平和ボケしてて：自分は絶対に安全だと思ってるんでしよう？」

「その台詞は、” No ” って意味だと受け取っていいのか」

「つたりまえでしょバーカ!! 今すぐアンタの腕を切り取って、少年好きの変態オヤジにでも売り飛ばしてやるわ! その余裕がいつまで続くか楽しみねえっ!？」

女はケラケラと高笑いを響かせながら、喜々としてナイフを取り出す。

あんまり質はよくないみたいだ。自分の装備にくらい気を使ってほしいな。

しかしそうか：交渉は決裂か。できれば穏便に済ませたかったんだが：

しょうがねえな。

「ホット・リミット」

ほんとうに　しょうがねえ　なあ　？

☆

★

☆

く美鶴Sideく

ヴウツ　ヴウツ　ヴウツ　ヴウツ　ヴウツ　ヴウツ

「っなんだ!？」

自室でくつろぎながら今日上がった報告書を読んでいると、突然携帯が鳴り出した。

いや、これは地震災害を知らせるアラーム? どこかで発生したのか?

とつさにテレビをつけたが、それらしい情報はどのチャンネルも報道していない。

ヴウツ ヴウツ ヴウツ ヴウツ ヴウツ ヴウツ

その最中も携帯からずっとアラームが鳴り続けている。一体なぜ…？

とりあえず、携帯を操作してみよう。

パンツ、パンパンツ、

『クソツダメだ！やっぱり銃弾が当たらない!!』

『なんだよあのバケモノ!!聞いてねえぞ!!』

起動させた瞬間、いきなり銃声と英語の怒声が響き渡る。

「なっ、」なぜロックの解除もしていないのに通話モードになるのだ？

私の混乱をよそに電話から聞こえる状況は切迫したものを強制的に伝えてくる。

『につ逃げろ！手に負えない!』

『ダメだッ、完全に囲まれてる！火の勢いが強い!!』

『ハッハッハッ、どこへ行こうと言うのだね?』

英語で交わされる会話の中で、それほど大きくないはずなのにはつきりと聞き取りやすい日本語が飛び込んでくる。

この声は…瀬能か？だとするとこれは彼の腕に着けられているデバイスからの通信か？

そういえば回収し忘れていたが、それがいったいどうしてこんなことになっ…？

『ヒイツ、く、来るな…こっち来んなよお!』

『なんだよ、その顔。そんなに怯えなくたっていいじゃないか。傷つくだろう?』

『来るなあああアツツ!!』

パンパンツパンパンツツ!!

『俺は繊細なんだよ…』

『ヒイヒイヒイツツ!』

ぼキッ、

『ギャアアアアアアアツ!!!?』

木の枝でもへし折ったような音と共に、男の悲鳴が上がる。察するに瀬能が発砲した人物の骨を折ったのだろう。

『ああ…最高だ。じ・つ・に・気分がイイ。ここ最近溜まりに溜まったストレスが発散されていくようだ…』

『ピゲツ!!グミヤ!!ヤツヤベボツ!!』

眩きとともに飛び込んでくる打撃音。

学園では聞いたことのない生き生きとした後輩の声に、思わず冷や汗が流れる。

『慣れない事務仕事。<sup>つくえぎぎょう</sup>急に呼び出されてからの頼み<sup>むちやぶり</sup>ごと。口に入れたら状態異常起こす<sup>どくぶつ</sup>手料理。会長の命令<sup>けんりよく</sup>、ダメージフィードバック、幼女、てめえらみたいなバカども、ウオウオウオウオウオウオウオウオウオウあーもーめんどくせえ、めんどくせえめんどくせえめんどくせえ!パーティーはどこだよ!!文化祭中だろお!?!』

重い打撃音は続いているのに、悲鳴の方は発せられなくなってきた。た。

気絶したのか…考えたくないがまさか死——

『ふ…フレッド…フレッドオツ!!』

『安心しろよおっさん、”まだ”生きてるから』

会話の後に、ぶんつという風切り音。それに少し遅れて重い荷物でも落としたような音がした。

おそらくフレッドという人物を放り投げたのだろう。

『記念すべき初めてを適当にはできないからな』  
『ヒッ！』

今までと全く違う音程の声。これは女性のものだ。

『や…イヤ……やめて…来ないで…！』

『つれないな。アンタが連れてきたんだろ？ほら、そんな隠れてないで出てこいよ』

『イヤっ許して、あやっ、謝るからっ！』

『おせーよ』

「イヤっ」だとか、「ヤダッ」とか、「イダイイ」といった涙声に混じって、机や椅子などの軽くて硬いものを蹴り飛ばす音や重い何かを引きずる音が響く。

『ヒック、ツク、も”づ、ゆ”る”じで、アツイ、』

『泣けば許してもらえるか思ってたんのか？腕ちよん切るとか変態に売り飛ばすとか散々好き勝手言ったくせに』

『あ”や”ま”る”がら”あ”あ”な”ん”でも”がつであ”げる”がら”あ”あ”あ”』

『だから遅いつて。ちゃんと聞いただろ？チャンスってのは一度しかないんだよ。自分は絶対に安全だとも思ったか？』

これまでの経緯がおぼろげにだが読めてきた。

瀬能はこの英語で話す人物たちに拉致されたのだろう。彼らの狙いはおそらく、瀬能の腕に付けている試作機…

私のミスだ。





しかも瀬能のこの口ぶり、とびきり惨たらしくやる気だ！  
ガタンツ、

思わず、座っていたイスが倒れる程の勢いで立ち上がった。  
どうにかしなくては。

つい最近親しくなった1つ年下の後輩。厄介ごとばかりで可愛げのない男子だが、不真面目ながらも真剣に物事に取り組む姿に不思議と他人をひきつける魅力を感じた。

彼を人殺しには決してさせられない!!

「瀬能っ待て、早まるな！」

そう携帯電話に向かい話しかけようとした瞬間、遠くからウー…とサイレンの音が聞こえてきた。

『………消防か、意外と市街地に近かったのか?』

誰だよ通報なんてしやがって…無粋な奴がいたもんだ。等という  
眩きとともに、今まで声から感じられていた寒気がするような雰囲気  
に熱が戻ってくる。

『萎えたわ。…いつでもリベンジしに来てくれていいぜ。ただ、一番  
の席は早い者勝ちだ』

その言葉を最後にブツツという音がして、沈黙が訪れる。どうやら  
通話が切れたようだ。

………

一方的、嵐のように過ぎ去っていった展開に、しばらく呆然と立ち  
尽くすことしか出来なかった。

## 45時間目 ハラーヘリネズミ

くナツルSideく

お・は・よ・う・ご・ぎ・い・まーす。  
ヘローヘリネズミ。瀬能ナツルです。  
なんか違うな。

拉致騒動から一夜明けて翌日。何事もなく俺登校。

何事もなくとは言ったが、問題が全く無いわけじゃない。軽度なもののから上げていこう。

まず一つ。鞆をなくした。

昨日の夜家へ歩いて帰ってる途中で気づいた。多分監禁場所——ちなみに町外れの廃工場だった。誰が消防車呼んだんだろう——に置いてあつたんじゃないかと思う。

犯人捜査されたらめっちゃヤバい気がする。中に入ってる物に俺の名前書いてあるし。

拉致の被害者だけど放火の加害者だからな……警察来たらどうしよう。自衛行為で納得してもらえるかな。

二つ目。昨日の朝から何も食っていないこと。

拉致られて超暴れて疲れたから、家についたら思わず眠っちゃったんだよね。起きたら玄関でうつ伏せに横たわってたよ。

しかもがつつり寝たからか……危うく寝坊しかけた。起きたの始業時間ギリギリだったわ。

慌てて身支度を整えて——燕尾服のまま寝たから速攻制服に着替えた——学校まで走って来た。身体の内こち超痛え。

故に今朝は飯抜きだ。

そしてよくよく思い返してみると学祭初日。昼は食いっぱぐれ、朝は即死ドーナツを口に入れただけ。

胃の中に入れたのがあの劇物のみと考えると最悪の気分になって

くる…気分はブルーだ。  
俺の髪の毛の色みたいだね！

…  
そして栄えある第一位は？フッフッフ、ダララララララララララ  
…  
「グバアッ!？」  
…  
つい今しがた口にしたブツから昨日のドーナツと同じ味がするこ  
とだよ!!

「ナツルー…!!？」

「昨日に引き続きまた倒れたぞー!」

「ごふっ…、空きっ腹にこの扱いは効く…!」

完っ全に油断してた。寝起きと昨日の疲れで警戒心が仕事サボっ  
て危険に気づかなかったぜ…

朝一・教室で出される試作品・口に入れてからの転倒って完璧昨日  
と同じ流れじゃねーか。なにこれルーティーン？

「た…<sup>(だれだ)</sup>たーが…<sup>(この)</sup>クヌクツキー<sup>(つく)</sup>作たのたーが…<sup>(だれだ)</sup>……?」

地面と友好を育みたいとわがまま言う身体に鞭を打って立ち上  
り、犯人を捜す。

クソツちよつと力抜くとまた倒れそうだ…!

「ハイッ、私が作りました!」

姫路がなぜか勢いよく返事をした。

やっぱり犯人はおまえかバーロー。そんな気はしてたよ!

「テメー、なんてもん食わせてくれんだ…自分の料理スキルがどんな  
もんか、知ってんだろ…!？」

おぼろげだが俺が糾弾した記憶があります。火サス(※火曜サスペ  
ンスの略)のごとく。

崖の上で刑事の代わりに死神が周り囲んでたけど。

「はいっ、知ってます!」

「……じゃなんで作ったんだよ」

気合いたつぷりの返事にイラツとする。

まだだ、まだ……ぶん殴るのは待とう。

せめて弁明を聞こう。

「料理の件は……本当にショックでした。今までずっと、美味しく食べてもらってると思ってたので」

「ひどい思い込みだな」極刑に値するレベルだ。

見た目と性格の良さで積み上げられたポイント全部ブツ込んだから、周囲の被害者もなにも言えず昨日まで隠し通してこれたんだな。

ゲスの俺はそんな優しさ全くないけどねっ！

遠慮のかけらもない言い方に姫路はショックを受けた表情を、周りの人間たちは非難するような目を向けてくる。

「はうっ、……そっ、それですね。昨日一晩、あまり眠れなかったからじっくり考えたんですっ」

「……なにを？」

そこはかとなく嫌な予感が……

「ハイッ、私、決めました！絶対に瀬能さんをぎゃふんと言わせる料理を作るって！」

「想像しうる中で最悪な結論出しやがった!!」なんでそうなる!!

俺個人を指名って余程じゃねーか！糾弾か、糾弾したからか!?

一口食べただけでぶっ倒れるんだぞ、ぎゃふんなんて言えるわけねーだろ！殺す気か!?

「私、こんな気持ち初めてですっ、なんか……メラメラと高ぶってますっ！」

「テーマなに闘志燃やしてんだ!?!」

「料理は気合い！」

別のところで使えやその気合いい！一撃必殺技でも放つ気か！

間違ってもこんなキャラじゃなかっただろこの子。出会った当初

のヒロイン感はどうした、どこ置いてきた。どこで落つことしたんだ。急いで拾ってこい。

「絶対…ぜったいに成し遂げてみせますっ！」

「その意気よ瑞樹！」

「姫路ちゃん、ガンバってください！」

決意を固める少女にクラスメイト（女子）がエールを送る。

他人事だと思つて無遠慮に煽りやがって…かけらでも口に入れてみるよ。それでもまだ応援できるか？

高校生活はあと二年弱。卒業が先か俺が死ぬのが先か…転校か中退をしない自信が全然無い。

まあ、とりあえず。

「成績優秀つて設定のその頭に…味見つて言葉と意味を擦り込んでこい!!」

「ぽもツ!?…よくやツツ!!」

「ひ、姫路さ…んっ!!」

残つたクツキーを口にねじ込んでやったら謎の悲鳴をあげて教室の床にぶつ倒れた。

自分でも耐えられないものをどうやって作つてんだコイツ…

☆

★

☆

ザワザワガヤガヤざわざわがやがや…

清涼祭二日目が始まつてからしばらく経つたのち、まだ朝だというのに学園内は見知らぬ一般人であふれかえっている。

姫路をぶつ倒した後、召喚大会の時間が迫っていたのですぐに教室を移動した。

その際なぜか大和や坂本が話しかけたそうに手を伸ばしていたみたいだが、無視して駆け出した。

俺なんのためにクラスに顔出したんだろう。

あ、ちなみに大会は勝ったよ。とくに変わった事もなかったから省略したけど。

次は準々決勝か。なんだかんだ言っつて結構勝ち上がってしまった。そろそろ負けてもいいかな？ 面倒になってきたよ。

「まあそんなことより…」

朝飯だ！

いい加減空腹なんだよ！ 怒りで誤魔化すのも限界だよ！

腹の虫がならないのが不思議なくらいだよ！

「許可ももらったしどこかで飯にするか」

美鶴先輩にもきちんと言ったからアラームが鳴ることもないだろう。

電話した時はなんか深刻そうな雰囲気だったけど何かあったのかな。

最高学年ともなると色々あるんだろう。生徒会長だし。

それともブルーデー？

「ここから近いのは…農耕部の出し物かな」

とにかく腹減った。屋台もいけどせっかく時間ができたんだから腰を落ち着かせて食事がしたい。

早速店に行き暖簾のれんをくぐる。

内装はあまり金かけて無いみたいだな…まあ部活で使ってる部屋を使ってるみたいだから、無理に凝る必要はないか。元々マ〇―牧場みたいな見た目だし。

ただ匂いがちよつと家畜臭い。生徒会の視察で誰も行ききたがらない訳だよ。（大概俺と南條先輩が見回る。唯一の男と野生児だから）

「いらっしやい。注文は？」

「えーつと…」

適当な席に座りメニューに目を通す。

…なんかこれおかしくない？チーズやヨーグルトなんかの乳製品が肉より二倍以上高い値段書いてあるぞ。

まあ注文するのは決まってるからいいけど。

「ステーキ一つ。いや二つで」

「えっ…」

——カッーン…

店員がショックを受けたような顔でメモ用のボールペンを落とし  
た。

「ステーキ…食べるんですか…？」

「え、いや。メニューにあるし」

「……………そう、ですか……………」

眩くように小声で返事をして、落ちたボールペンをそのままにふら  
ふらと立ち去っていく。

なにこれ。なんなんだこの状況。なんかよくわからないけども  
のっそい怖いんだけど。

……………店員が去っていった隣の部屋から会話が聞こえてきた。

——おい山田、どうした？顔色悪いぞ。

——…肉の…オーダーが入った…

——なっ…ホントか!?

——ああ…

——そうか…だから…くそッ誰だ、肉なんて頼みやがって！

——しようがないよ。メニューに載せちやつてるんだから…

——しようがないっておまえ…！共進会（※全国和牛能力共進会…

和牛の能力と斉一性の向上を目指して開催される大会）に一緒に出る  
んだって張り切ってたじゃないか！いいのかわよ!?

——よくないよ！いいわけないだろ!?!でも…仕方ないじゃないか

…！俺のわがままで部の伝統を曲げるわけにはいかないんだ！

——っ、…くそッ！なんだってこんな…飲食店で、注文を取った奴が育ててる牛を捌くなんて残酷な事させるんだ…！！

——…ンモー

——花子…ごめん……ごめんな…！せめて、美味しく食べてもらえるよう、頑張つて料理するから…！

「すいませー…んやっぱりさっきの注文無しで…、この手作りチーズケーキくださーい」

後味悪いわ。食事前なのに。

通りでこの店俺以外の客がいない訳だよ！



## 46時間目    M o n t h

「…ウツプ……………食い過ぎた……………」

胸焼けのする腹を押さえながら人通りの多い廊下をふらふらと弱々しく徘徊する。

つい先程の農耕部の出店での食事。ステーキの代わりに頼んだチーズケーキは数はそのままと判断されたのか、ふた皿来た。それを完食したらこのざまさ。

許容量見誤ったぜ…丸一日ぶりのまともな食事だったからな…

しかも新鮮なミルクから作られてるらしいからすげえ美味かったし、調子に乗ってペロつと食べてしまった。反省はしない。だけどちよつと後悔はしてる。

もう肉を入れるスペースが無い。この調子だと昼飯は抜きだな。

ムー

意気消沈ながらも歩み続けていると、いきなり左腕に振動が走る。メールか？もはや自分の携帯じゃなくこのデバイスが主な連絡手段になってる気がする。借り物なのに。

……………借りパク、という言葉が不意に頭に浮かんだ。

「まあ無理だけどね」

軽口を叩きながら端末を操作して、メールを開く。  
なになに…

『ステイ』  
待

……………ぬうがうりいや。

えー…………つと…？なんなんだ一体。訳がわからない。

宛先も件名もない。スパムメールか？それにしたって意味不明過

ぎる。

無視だな。

ム”ー

『ステイ』

…また来た。

何これ。なんなんだホント。ちよつと怖くなってきたんだけどマジで。マシンでも入ってるの？

従うべきか否か…：ゲームとかだところこういうの言う事聞いた場合ロクなことないよな。

やっぱり無視しよう。

『ここにいろ』

「怖ッ!!」深●廻!?

なんなんだよさつきから!?!マジで意味わかんないよ!

てかこれ確実に俺の行動逐一把握してるよね!どうやってんの!?

…：メールの送り主美鶴先輩なのかな。それなら宛名とかなしに直接メッセージ送れるのも説明がつく。

しかしこんな事してどんな意味が…?この場所に何があるっていうんだ?

ピンポンパンポンっ♪

『2年Fクラス瀬能ナツル、2年Fクラス瀬能ナツル。至急学園長室に来なさい。繰り返しします。2年Fクラス瀬能ナツル、至急学園長室に来なさい』

ピンポンパンポンっ♪

突然響いた館内放送に人波の流れが止まった。

しかしすぐに自分とは無関係と分かって、滞りなく流れだす。俺がいるところを除いて。

一部の人間（制服を着てる奴）がこっちを見てるな…まあ気にしなくていいだろう。

それより…このタイミングで呼び出しか。正直昨日の件があるから嫌な予感しかしない。

部屋行ったら警官がいて即任意同行の流れになったりして…バツクレようかな。

『いけ』

ダメだ、逃げられない。

心なしかさつきより文字の圧が強い。

「仕方ない腹を括るか…」

幸か不幸か今いる位置から近いしな。

だからここで待機させてたのか？掌の上で転がされてる感がハンパねえな…

☆

★

☆

・学園長室前廊下

外部から大量の一般人が入ってきてはいるが、この辺りは店が無いので割と静かだ。それでもちらほらと人影が見えるが。

「失礼しまーすよっ、と」

ガチャッとドアノブを回し中へ入る。

「おや、意外だね。素直に来るなんて」

「む、随分早いの」

「……………」

嘲笑・驚き・黙認。三者三様のリアクションが俺を出迎える。

「イヤイヤイヤ、なんで三人いんの？」

学園長のババアがいるのはいいよ？腐っても部屋の主だから。

でもあと二人は…川神のジーさんと美鶴先輩の親父さんじゃねーか。なんでこんなところにいるんだよ。

「こんなことは随分な物言いだね。アタシは結構気に入ってんだよ」

「おのれ妖怪ババア。人の心を読むとは」

「口に出しておったぞい」

「治んねえなあこの癖。」

「で、なんの用すか学祭中に」

両隣に二人侍らせて、エヴァの司令みたいに机に腰掛けているババアに担当直入に問いかける。

「見当はついてるんだろ。昨日の件さね」

昨日…昨日か。

「<sup>コスプレ</sup>執事服は俺の趣味じゃねーっす」

「それじゃ無いよ」

「じゃアレっすか、衆人環視の中モモ先輩にギロチンチョークで落としたことっすか。アレは不可抗力」

「その件でもないわい」

思い返してみると結構多くって逆に分かんねーや。

「いつまでもとぼけるんじゃないよ。夜に起こしたことって言えば分かるだろ」

「あーそれかー（棒読み）」

「なんのことやら」

「…隠したい気持ちは分かる。が、娘の美鶴が物事の大まかな事情を聞いているのだ」

そう言っただけで眼帯をしたおっさんが足元から何かを持ち上げる。

デカイ透明な袋に詰められた俺のカバンだ。

「昨夜火災現場で警察に押収された物だ。桐条グループの方で手を回しておいたから君に捜査の手がいくことはない」

「はあ」そりやよかった。

どうすつとぼけようか考えてたんだ。これで悩まずに済む。

「なんか、すいませんね。お手数かけちゃったみたいで」

「いや、元はと言えば私たちの考えが至らなかつたせいだ。…申し訳ない」

隻眼の人に深々と頭を下げられた。

…桐条先輩の父親にこんなことさせたつてバレたらヤバいんじゃないか。あの人のファンクラブとかあつたよな確か。

「気にしてないつすよ、えーつと…」

「そういう自己紹介がまだだつたな。桐条グループ総帥の桐条武治だ」

「アタシは神月学園学園長の藤堂カヲルだよ」

「そしてワシがラブ☆テツツンこと川神鉄心じゃ」

ジジイが●<sup>ビ</sup>したいほどうぜえ。

「なんで二人も自己紹介したんだよ…」

「主張したい年頃なんじゃもん」

明治以前から生きてる奴がほざいてんじゃないやねーよ。納骨すんぞ。

「川神のジイさんがどうしてもやりたいつて言うからね。ま、アンタみたいな頭の悪いクソガキは顔を合わす度に教えとかないとすぐに忘れるからちようどいいさね」

「あなたしつれいですよ」

誰が頭の悪いガキだ。

覚える必要を感じないだけだ！

「つーか用事つてそんだけすか？ならなんで学園長とジーさん居るの

よ」

要件の内容的に必要なくない？

「それだけ……？殺されかけたんじゃないのか!？」

日常茶飯事です。今朝も死にかけたし。

「秘密裏に素早く解決したと言つても、生徒が拉致されたんだ。アタシがいるのはおかしくないだろう」

「ワシも、最高責任者の一人としてこの場にいる義務があるのじゃ」

最高責任者の一人つて……そういえばこの神月学園は複数の有力財閥が共同で出資して設立された結果。学長とか理事長というか、とにかく本来一人だけの役職に複数の人間がついてるって前に会長から聞かされたような気がする。

ババアが学園長でジーさんが学長で……あと何人トップがいるんだよ。円卓の騎士か。紛らわしい。

「アタシらは役職的には対等だけど、立場で見れば雲泥の差がある。研究者、武流派の師範、多国籍企業の総帥」

「なんすか突然」

「アンタが新型機械のテスターに選ばれたって知ったのは今朝さ。拉致の被害者にも、一歩間違えたら殺人の犯罪者になってたってことも一緒にね」

「情報伝わるの遅くない？」

報告・連絡・相談は素早くって組織の基本だろ？少なくとも俺は会長にそう叩きこまれたぞ。

いやもう……万年筆でがつつりと。

「耳が痛いもう……」

「……………」

「アンタの言う通りさね……大人つてのは、問題がどうしようも無い所の一歩手前にまで迫っているのに、見栄を張って自分だけで解決しようとするのさ。他の陣営の奴に弱味を見せまいとしてね」

沢山の超大手が関わってるからバランスが崩れたら学園の気風が

ガラツと変わっちゃまうから、しょうがないっちゃしょうがないんだろ  
うけどな。

嫌いじゃないよ？今の学園。

「でも無関係な人間を巻き込んでまでプライドを優先させる訳にやい  
かないよ。だから信用できそうな人間には事情を話すことにしたん  
だ。ここに居るのは秘密を共有してる仲さ」

「三人しかいねえのか？生徒会でももうちよい多いぞ」

「時間の都合と秘密の内容上これが精一杯だったのだ」

秘密の内容がちよつと気になるけど、教えてくれないんだろうな。  
「情報が漏れている以上、これからも狙われることがあるだろう。可  
能な限り君や周囲の人間に危険が行かないようにするつもりだが、そ  
れもゼロではない。なので一旦君のデバイスを外そうと思つたのだ  
が…何故かロックが掛かっていて遠隔操作ができなくなっていた」  
「は？」

今なんつったこの眼帯。

ソウサガデキナイ？えつなに、じゃあコレ外せないの？

重さも感じないし違和感もないんだけど、美鶴先輩にリアルタイム  
で監視されてんだよね。無茶苦茶気分悪いんですけど。

「不便を強いるのは心苦しいし申し訳ないが…電子ロックを採用して  
るから鍵はない。さらに色々な素材を使っているせいで強度が計り  
知れず、装着者に被害無く外すこともできないのだ」

モモさんの一撃も充電に変えちゃうくらいだしな…

「まあお主なら問題ないじゃろ」

「否定はしないけどあんたが言うなよ」残ってる頭の毛を筆取り取るぞ。

「アンタがデバイスを持つてるって情報がどこから流れたのか、大体  
予想はつくよ。瀬能、お前さん昨日色んな奴に絡まれただろう」

「ああ？まあそうだな。人混みでスリに絡まれたりクラスメイトとい  
る時にバットとか持つてる奴らに絡まれたり一つ年上の先輩に試合  
中絡まれたり教室でチンピラに絡まれたり」

「そんなに絡まれてたのかい…」

がたんとババアが椅子から立ち上がる。

そして改めて俺に向き直り——深々と頭を下げた。

「アンタなら力づくでもっと楽に解決できただろうに、穩便に済ましてくれて感謝するよ」

「穩便…」衆人環視の中プロレス技で女を失神させるのは穩便なのかな。

「それと、迷惑かけて本当にすまなかつたね。目立つ見た目に短絡的って噂の性格、おまけにそのデバイス。狙う理由が揃いすぎてアンタに全て集中しちまったみたいだ。…これからはもう、アンタの手を煩わせないことを誓うよ」

「? それってどういう…?」

「藤堂の、しかしそれでは——」

「黙んなじいさん。それ以上口を開くんじやないよ」

学園長は下げていた頭を上げて、川神のジイさんを鋭い目で睨みつける。

「コイツは無関係なんだ。こっちの都合で巻き込んだってのに、これ以上巻き込めるわけないだろう。我慢して耐えて貰っただけで充分だよ」

「藤堂……」

「心配しなくてもアンタらに迷惑はかけないよ。たとえ最悪な結果になっても、責任は全部アタシが取るさね」

なにやら複雑な事情があるご様子ですね。シリアスで居心地悪いや。

ま、俺にやあ関係ないだろうけど。

しかしこのままいくと流れるに川神のジイさんも俺に謝罪するかね。

いやむしろ真っ先に詫びるべきなんじやなかろうか。主にモモさん関連で。

大体週に一・二回のペースでいつも迷惑被ってるんだけど。ストレス発散みたいな理由で試合させられて。



それで毎回身体のどこかしらに怪我をさせられるが、そのことについてただの一度も謝罪されたことがないんだ。孫の方にも。

おかしいよね？

この前なんか胸骨を亀裂骨折させられたんだけど治療費のひとつも渡されなかったよ。学祭の準備期間中だったんだけど。

おかしいよね、絶対におかしいよね？なんか思い出せば思い出すだけ腹が立ってきた。

このジジイ、孫共々いつか酷い復讐してやる。

## 47時間目 Wizard

（武治Side）

「そーいや質問なんですけど」

話しかけ辛い空気が漂う中、瀬能ナツルが口を開く。

「昨日の連中って結局なんだったんすか？」

「うん？気になるのかい？」

「まあそりゃ…なんの前触れもなく気絶させられたし」

瀬能の問い掛けに学園長である藤堂が反応を示す。

それと同時に重苦しい雰囲気が少し緩和されたような気がする。

「突然意識を失うってのは呂布ちゃんにも前にやられたことあつたけど、あれはあれでも武道の達人だからいいとして、昨夜のあれはそんな様子がまるでなかつた。いくら思い返しても触れられてただけで、どうやったのか全く分からねえ」

「それにあの現場にいた隊長格のおっさん、悪魔とか言っていた。…英語が苦手だから単語くらいしか分からなかつたけど」

「そうか…」

そこまで知られているのなら説明しない訳にはいかないだろう。

「桐条」

「話せる範囲でのことは話しておくべきでしょう。彼はもう立派な関係者だ」

正確には私が巻き込んだ被害者だ。

私自ら説明するのがせめてもの誠意であり、けじめだろう

「…アンタがそれでいいなら、アタシが言う事はないよ」

「すまな…すみません」

「敬語なんて使わなくていいよ。天下の桐条に敬って貰えるほどのものじゃないからねアタシは」

「尺を無駄にしてないでキリキリ白状しろよ妖怪腐りきった干物もどき」

「はっ倒すよクソジャリ…!」

…長引くと喧嘩になりそうだから早く説明しよう。

「まず聞いておきたいのだが瀬能、悪魔と聞いてなにを想像する」  
「ゲーム」

「エンタメ以外でだよ」

「……………神話とかでよく出てくるやつ?」

少し考えた後、本人もよく分かっていないような曖昧な答えを出した。

なにも知らなければ普通はそう考えるだろう。

「詳細は省くが悪魔というのは実際に存在し、一部の素質ある人間が悪魔と契約する事でその力を使うことが出来る。その者たちを『契約者』と私たちは呼んでいて、昨夜の外国人の女もその一人だな」

「……………説明したのが川神のジーさんや学園長のババアだったら『妄想乙』って返す台詞だな」

「どういう意味だい」

「どういう意味じゃ」

瀬能にとつて二人はどういう存在なのだ?

「彼女は裏では『眠気袋のメアリー』と呼ばれている傭兵崩れだ。契約している悪魔はあまり強いとは言えないが、それでも一般人からしてみれば問答無用で相手を気絶させれる恐ろしい人物だった」

それがまさかライバル企業の一つに所属しているとは思わなかった。

彼女には表には出ていない余罪が多くあるだろう。いくつかは会社主導のものもありそうだ。

今抱えている案件が片付いたらその辺りを追求してみるとしよう。

「人を簡単に無効化できる存在がなんで人に従うんだ?」

「通常、悪魔はこの現実世界とは異なる次元に生息しているらしい。現世へ来るには誰かに召喚してもらわねばならず、留まるためには人間を依り代にしなくてはならない」

召喚者と契約を交わすのが一番手っ取り早い。

「悪魔の力は人類、いや全ての生物にとっても脅威的だ。その事に危機感を覚えた私の祖先が対抗する為に立ち上げたのがグループの始まりと言われている」

「…そうだったのかい？」

「初耳じゃな」

…意外そうな表情を見せる二人に罪悪感を覚える。

あえて今グループと私は言った。本当は違うが、関係者以外には開示できない情報がある。

これは決してこの場にいる人間が信頼できないからという訳ではない。悪魔関連の素質がないの人間が詳しい情報を持つのは危険すぎる。

「ふーん…あ、そーいやその契約者？の女はどうなんすか？昨日の奴。生きてます？」

「うん？ああ、大丈夫だ。生きてはいる」

”生きては”な。

とても平穩無事とは言えないが、今までの行いからすれば自業自得だろう。詳細を知らせる必要はない。

「気になるかね？」

どんなに強大な力を持っていても彼も娘と同じ10代の少年。他人を気遣える心の持ち主なのだ。

——次の瞬間、この考えが見当違いである事を思い知らされた。

「んーまあ、最初の一人くらいは覚えといてやろうかなって思ってるんですよ。俺がこれから先手をかける人数は多そうだし」

「はっ」「何？」

思わず藤堂と言葉が被る。

今この少年は何を言ったんだ？

「あ、もちろん学校側にも周りの人間にも迷惑はかけないから、ご心配

なく」

和かに微笑む彼が、急に自分とは異なる何か別の存在に見えた。

昨日の今日で時間が無かった故に詳しくは無理だったが、それでも瀬能を襲った者達を一目見る事は出来た。

最も軽傷な者でも足の骨折。それ以外の大半は打撲による内臓破壊や複雑骨折など、完治するまでに数年は要するであろう重症を負っていた。

そして悪魔憑きのメアリーなる女は…

頭皮の半分以上、とりわけ顔の部分に酷い火傷を負い、彼女の仲間から享樂的と言われていた性格は完全に破壊されていた。

医者の話では起きている時でも寝ている時でも関係無く常に「青い悪魔が自分を焼きにくる」と怯えているらしい。

さらには誰か人が近づくと粗相をしながら泣いて謝罪の言葉を繰り返す。

ここまで酷い患者は初めてだと困り果てていた。打つ手なしだと。

それらを目の前にいる瀬能ただ一人で行ったなどと、普通ならまず信じない。信じられない。

しかし今、直接対峙して彼の目を見れば分かる。

彼は確実に——人を殺すと。

「瀬能、お主やはり…!」

「あ、やべ、そろそろ時間だ」

先程までと違って真剣な声を出す川神をよそに、次の試合が始まっちゃうよーと呑気な台詞で腕のデバイスを覗く瀬能。

「すいません自分ちよつと用事入ってて、話以上ならもう行っていいっすか?」

「あ、ああ…」

藤堂が咄嗟に返事をする。

それを聞いて床に置いていた自分のカバンを手に取り、出口の方へ振り返る。

「待てッ瀬能！」

不意にかけられた叫びに足が止まる。

「なんだよジーさん」

「お主どこまで行くつもりじゃッ」

？ 川神は何を言っているんだ？

つい先程、召喚大会の試合が始まると本人が言ったはずだが…

「自らを解き放てと声がする」

背を向けた状態のまま瀬能が語り始める。

その声は試合中のものとはまるで違い、異様な凄味を感じる。

「目を閉じ耳を塞ぎ、どんなに振り払おうとしても囁くように突きつけるように聞こえてくる。その声からは決して逃げられない。自らの内側から発せられるから」

「…!!」

「思うに…コレは俺自身の欲求、いや本性なんだろう。ならその道を歩んで——」

「いかん、いかんぞ瀬能！お主が歩もうとしているのは修羅の道、行き着く先は孤独しか無いぞ!!」

学園の設立の際の会合などで何度か接しているが、川神のこのような真剣な様子は見た事がない。いつも飄々として掴み所のない人物と思っていた。

それが今は余裕など微塵も感じられず、詰め寄らんばかりの勢いで話しかけている。

しかし近づくことはできない。背を向けたままで顔も逸らさない

瀬能の態度が、明確に近づくことを拒否しているから。

「考え直せ瀬能！今ならまだ間に合う、なにも好き<sup>す</sup>好<sup>この</sup>んで一人孤独の道を行かぬでもよいじゃろう！」

「光灯る街に背を向けー。武の道つてそういうもんだろ？産まれた時と死ぬ時はみんな独りぼっちさ」

「違う!!断じて違う!お主の考え方は間違つておる!」

「煩いなあ」

「説教なら川神院しぶんとしこの門下生にでもしとけよ。俺らそこまで深い関係じゃないだろ」

「っ、…!」

一瞬、ほんの一言分の短い間、頭のみが振り返つてどのような表情をしているかが分かる。

召喚大会、先程までの会話中とは違う険しい顔。

そしてその瞳に映る感情は…拒絶。

見つめる、というより睨むような視線に、川神を含めた我々全員は言葉を失う。

その間に瀬能は扉から外へ出ていった。

一人少なくなった室内でしばらく、静寂のみが支配する。

「なぜじゃ……」

不意に川神が崩れ落ちるように膝をつき、俯いて床を殴る。

「ワシは…ワシはまたしても……!…なにもしてやれぬのか…!釈迦堂の時のように…!あ奴はあの人の孫だというのに……!!」

タイル張りの地面に数滴雫が溢れ、少し陥没した箇所箇所に流れていく。

教える育てると書いて"教育"。その難しさに私は、いや私たちは改めて対面させられた――

☆

★

☆

テツツン「なぜ…話すら聞いてもらえん…!」  
カヲ「…(自分の孫も上手く御せてないジジイの言葉なんて…)」



48時間目 D4C くいとも容易く行われるえげつない行為く

くナツルSideく

・学園長室近くの廊下

とくになにをするでもなく、廊下の壁に背を向け身体を預け、立つたまま虚空を見上げる。

本来なら召喚大会の試合をしているところなんだが、会場に向かっている間に会長から連絡が入った。

なんでも対戦を予定していた相手が救急車で運ばれて不戦勝になったとか…

ちよつと気になったので詳しく調べてみたら、理由は重度の食中毒らしい。

まさか姫路のヤツじゃ…！と咄嗟に思ったが、事件現場は2う―Fちではない。

被害者は部室棟の、文化系の部活が出してる店で倒れたとかなんとか…絵の具でも調味料に使ったか？なんてな。

ともかく、思いがけずヒマになった俺は何をするでもなく、こうしてぼーつと次の試合まで時間を潰しているのである。

といつてもまだ一時間以上あるよ。美鶴先輩も俺のこと忘れているのか連絡（見回りの催促とか）も無いから好き勝手にサボってたんだが…

「流石に飽きたな」

さしてどうしよう。

昼飯にはまだ早いし…（そもそも腹減ってない）寝るのもちよつとな。去年やったし。

いい機会だから出店回って遊んでくればいいんだが、一人だと味気ない。八方塞がりだ。

「あーやっと思つけたぜナツル！」

——咄嗟に身を翻した。

「はいストロップ。私たちだよー」

「え？ああ、なんだ。島津と椎名か」  
脅かすなよ全く。

「いや俺さまとしては声かけただけで窓から逃げようとしたおまえの行動にびっくりなんだが……」

なんで俺躊躇なく窓に向かったんだらう。

気づいたら冊子に足をかけて前のめりに体を外に出した状態。

ル●ンでももうちよつと選択肢多いぞ。

「で、どうしたお前ら。なんかあったのか？」

窓枠に腰掛け……ようとしてやっぱり廊下に降り立つ。ゴツゴツして痛いからね。

島津の台詞からして俺を探してたのは間違いないだらう。

「ああ「いや」！そうだな「やだ」ツル！ちよつと「ムリ」頼みがある  
「NO」<sup>ノ</sup>んだけどつてオイ！まだ内容言つてすらねーのに断わんなよ  
!？」

「のっけから飛ばしてるねえー」

だって嫌な予感するんだもんお前らの頼みごと。

「別にクラスがどうかかって訳じゃないんだろ？」

「うん。困ってるのはプロレス研究部」

プロレス研究部？確か武闘派の部活の中じゃそこそこデカイ団体  
だったな。

「お前無所属じゃなかったっけ」

部活や委員会などに属してない奴を、生徒たちはまんま無所属と呼

んでいる。

「プロ研に所属してる奴と選択科目が一緒だよ、そいつと仲良くなっ  
たんだ」

「さよけ」

僕音楽の授業で仲良しとかいないからからワカーンない。

「そのプロ研が出し物で『M―1グランプリ』つてのやってるんだけど  
よ、それがちよつとまずい事になっちまってよ」

「M―1グランプリ？」

漫才でもやってんの？どこが何やってるとかはぶつちやけ全く知  
らないんだよな。

なんの略なんだ？

「マスク狩りナンバー1グランプリだ」

「お前らバカだろ」

なんでそんな企画考えたんだ。

そしてなんでそんな企画通ったんだ。誰が通したの？

「俺さまに言うなよ…で、そのM―1なんだけだよ。本来なら部の奴  
が優勝して終わりにするはずだったんだけど部外者、しかも学園の外  
の一般人が勝ち上がったちまつたらしいんだよ」

「ふうん」割とよくある展開な気がするけど。

「で、まずいと思ったプロ研の奴らが今必死にその部外者を引き止め  
て一人づつ挑戦してるんだけどよ、強すぎててんで歯が立たねーんだ  
！」

なんと。それは凄いな。

さつきそこそこと言ったが、それはあくまでもこの学園内の話。

他校に行ったら即エースになれるぐらいの実力はあるはずだ。

俺やモモさん？大会出禁レベルですがなにか？

「島津は？」

「やったんだけどよ…恥ずかしい話触れることもできずに負けちまっ  
て」

うーむ：聞きはしたけどぶつちやけ、こいつの戦ってるどこ見たことないから実力がよくわからん。

けど確か神月ランキングで上位とかなんとかだったはずだから、そこそこ強かった。はず。

それを触らせず、かつ怪我一つさせないで勝利したってことは、相当な実力者なんだろう。

「て訳で頼むー！ナツル！負けた時に学園で一番強い奴を連れて来てっつてつい相手に言っちゃまったんだ、俺さまの顔を立てると思って試合に出てくれ！」

両手を合わせてギュツと目をつむり「この通り！」と本気の様子で頼み込む島津。

腹芸ができるタイプじゃないのは知ってるからポーズ通り本気で困ってるんだろう。仲間思いの奴だからな。

その点は好感が持てる。

「だが断る（c.v. 神谷浩史）」

「なんでだよおおおおおおおおおおおおおおおおっつ!!?」

うるさい黙れ。当たり前だろうが。

逆になんで承諾してもらえらと思っただよ。

「二応最後まで聞いてやったけど、結局はプロ研の奴ら一人勝ちを狙ってたんだろ？」

外部公開一般参加を謳ってるのに、部員の優勝って半ば八百長じゃねえか。嫌いなんだよねーそういうの。

「そうだけどよお…」

「優勝した一般人もインチキしたってわけじゃねえんだろ？」相手に怪我させないって紳士的な対応取ってるみたいだし。その証拠に島津は無傷。（どうやって勝ったんだ？）

「自分たちが実力不足だったって事で諦めるんだな」

「いやでもっ、今回の結果次第じゃ廃部もあり得るって言ってたんだよー！」

いいじゃねえか別に。

確かウチの学校、プロレス系の活動してる団体20くらいあっただろ。少しは減らした方がいいって前々から思ってたんだよ。

「そもそもマスク付けるつつつても外見で誰が立つか丸わかりじゃねーか」俺以外の男子生徒で青髪の奴なんていないぞ。フルフェイスでも被れってか？

「それなのに俺に出ろって？なるべく決闘挑まれないように目立たず過ごしてるのにお友達のためなら俺はどうなってもいいのか？」

「ううっ…そっ、そう言われると……」

お前ひどい奴だなと蔑んで見つめると、島津は居心地悪そうに狼狽える。

「つか俺ってば島津氏の友達じゃなかったらしい。地味にシヨツクだ。

そっちがその気ならいいさ、なんかあったら真っ先に切り捨てるから。」

「まーまー瀬能、ガクトも悪気があつて言ったんじやないんだよ」

いままで黙っていた椎名がいつもと同じ、気楽な風で口を開いた。

「ただちよつと熱くなっちゃったってだけで。とりあえずこれでも飲んで、落ち着こう？」

「なんで疑問系なんだよ…貰うけど」

差し出された水筒に遠慮せず口をつける。ちようど喉が渴いてたんだ。

「……………なにこれ、なんか変な味するんだけど……生肉みたいな…。しかも妙に青臭くてどろっとしてるし、中身はなんなんだ？」

「ミキサーでペースト状にした川神草」

ブウツ!!

「うわっきたねえ!？」

衝撃の回答に口に残ってた分を吹き出してしまい、島津が被害を受けた。

「なんてもん飲ますんだテメエ!？」

説明しよう。川神草とは？

見た目はちよつと幅広い葉っぱで真ん中に人面みたいなシミがある、川神特有の植物だ！

食感は普通の葉物野菜だけど肉のような味がする。しかし人によつては様々な副作用が出るので、食用するのはあまりオススメしないぞ！

「スムーズにするな んなもん!!」

いかん、髪伸びてきた！

俺がこの草食うと副作用で性転換するんだ！（冷静に考えるとなんだこの副作用…）

『瀨能ナツル』じゃなくて『冴島タイガ』なら、目立っても大丈夫だよねー」

「はあ!？」

冴島タイガは俺がこの状態（女姿）の時に使ってる仮の名前だ。

このタイミングでそういう事さらつと言うつてことは…初めから狙つてやがったな！

「なぜだ！そもそもなぜお前が島津の手助けをする!？」

ずつと引つかかかってたんだ！

最初見たとき「珍しい組み合わせだな」とは思ったが、コイツは昔からの仲間だからつて理由で協力するような奴じゃないはずだ！

「夏の大形イベントで荷物持ち」

買収!？」

「そんなもんで俺をはめたのかテメエ!？」

「そんなもの？1975年の12月から今日まで開催こんにちされ続けられて2013年では3日間で約59万人の一般参加者が押しかける同人

誌を中心としてすべての表現者を許容し継続することを目的とした表現の可能性を広げる為の「場」でありやおいの先駆けとも言えるイベントがそんなもの？本気で言ってる？」

椎名さんコーわーいーよー、光なき眼で見つめるのやめて？精神が不安定になる。

コイツのこんな長台詞初めて聞いたんだけど…庄も凄い。

つかそこまで詳しく熱弁しといて最後に出てくるのがやおいってなんだよ。腐ってんなコイツ。

そして今のやりとりの間に変身が完了してしまった。服のあちこちがぼつんぱつんで苦しい…

あと島津の卑猥な視線に晒されて大変不快。

「……この姿になったからって俺が素直に出場するだけでも？」

絶対に何か考えているだろうけど、あえて挑発的な台詞を使う。

川神草の効果は約一時間：何度も服用して耐性が付いたのか、それとも習慣性がもともとあったのか、初めは戻るのに一日かかっていたが、だんだんと効き目が長続きしなくなってきている。

いつもはいつ効果が切れるかとヒヤヒヤしてるんだが今回は好都合だ。男に戻るまでどこかに隠れているのも一つの手だな。

「西野ますみって子知ってる？」

椎名は変わらぬ口調と無表情面で答える。

それは質問の内容とマッチしていない。しかし明確に何をするかがよくわかる答えだ。

どんなに忘れっぽくても、印象に強く残ってしまった中々忘れられない事がある。

誰しも経験あるだろう。「嫌なこと」はいつまでも記憶に残り決して消えてくれない。

俺が西野ますみと言う名前を知っている…いや覚えているのは、つまりそういうことだ。

「あの子に冴島タイガの正体を明かされなくなったら…どうすればいいかは分かるよね？」

「…きつとあなたみたいな人間がキリストを売ったんてすよねっ」

「嫌味たつぷりの返事を返ししながら、イベントリからある物を取り出す。」

「やっぱり逃げてりやよかった…学祭始まってからロクな目にあつてねえな俺。」



## 49時間目 Solar

???  
Side

あーあ、拍子抜け。

『また一人挑戦者が倒されたー！ー！ー！ー！！強い！！強すぎるぞチャンピオン！！その華奢な身体はどこにそれほどの強さを秘めているのか見当もつかない！！誰がこの女を止められるのかあー！ー！ー！ー！！』

野外に設置された特設リング。そのコーナーポストに背中を預けて、叫びに近い実況を聞き流す。

そして今倒した挑んできた男の人が担架で運び出されるのをポーっと見つめる。

私の倍はありそうなムキムキとしたマッチョな肉体。でも正直、見掛け倒しで全く興味がそそられなかった。

つていけないいけない。筋肉に貴賤なし！

うーんでも、やっぱり……あーもう！やんなっちゃう！

私は筋肉が好き。

男の人でも女の人でも、必ず初めは筋肉の付き方を見てしまう。

考えるのも大概筋肉について。肉が付きにくい体質なのか私自身はマッチョって訳じゃないけど…

そんな事ばかりしていたせいで、両親や昔の友達からは気味悪がられている。

はあ……この学園に転校する予定だったけどやめようかなあ……噂の川神百代って人も見たけどイマイチピンとこなかったし。実力・筋肉・見た目全部高水準だけど性格がちよっと…見つけたとき人に食

べ物たかってたし。

ここは色々な人がいるから退屈はしなさそうだけども…勧められてる秀尽学園の方に行こうかなあ…

変な人が多い神月学園なら私の趣味もあんまり気にならないかもって思ってたけども、敷地が広い以外は他とあまり変わりなさそう。

武道や格闘技なんかと全く関係ないところに行って、普通な性格に改善した方がいいのかな……………

『え？…おお、な、なんとここでビッグサプライズ!!強いチャンピオンの快進撃を止めるため、学園最強が挑戦者に名乗りを上げたあつっ!!!』

えー、まだやるの？

興奮した様子の実況の台詞に思わずため息が零れる。

確か2・3人くらい前に対戦した相手（シマズ、だったかな？）が去り際に「この学校1番の奴を連れてきてやる!」とか言ってただけど、あれって本気だったんだ。

1番ってさつき言ってた川神百代って人かな？確かに見た感じ私じゃ勝てないだろうけど…

そんな人と戦っても楽しくもなんともないわね。試合開始と同時にギブアップして帰ろっかな。

リングの赤コーナーで待っていると、対角線上から一人の人間？が歩いてくる。

人間？て思ったのは、その格好があまりにも不自然だったから。顔は狐のお面を付けてて見えないし、それ以外は大きな黒い布ですっぽり覆われていて体型すら分からない。

あれがこの学園で1番強い人？

『ある者は言う、彼女こそが現代の戦神だと。またある者はこう言っ

た、自らの未熟さを性根に合わせて教え導いてくれると。その証拠に武力に物を言わせて我を通してきた者には苛烈に、それ以外の相手には怪我をさせずに勝利を収めています!』

『学園で姿を見ることは稀で決闘は予約制ですが、挑戦する者は後を絶たず試合は毎回満員御礼! 最近では学園の生徒以外でも試合を申し込む人間がいるのかもつばらの噂です』

『彼女の人気は義経ちゃんを軽く上回りますからねー。私もぜひお相手して頂きたい』

いたんだ解説の人。

マイク越しに聞こえてくる声が急に変わったからびっくりしたよ。さっきまで実況席に一人しかいなかった筈なのに、いったいいつの間に現れたんだろう。

それにしても1番の人遅くない? 姿見せてから1分くらい経ったけどまだ花道の途中だし。もしかしてリングに上がるの嫌なの?

『挑戦者リングインに時間がかかってますね。どうかしたんでしょうか? まさか体調が…』

『焦らしプレイですね。嫌いじゃないです』

急に1番の人の歩くスピードが上がった。

『ご褒美ですね、ありがとうございますっ!』

…「あの実況●してやる…」ってなんか物騒なつぶやきが聞こえたけど…怖いから気のせいだったってことにしよう。

そうこうしてるうちに相手が青コーナーのすぐ側までやって来た。そしてロープに触れる事なく、文字通りひとつ飛びでリング内に入る。

飛び上がる瞬間も着地のときも、音が全くしなかった。この人凄く強い…!

『殺陣は妖狐、在るいは猛虎、出で立ち振る舞い竜が如く!!裏番、冴島大河————!!』』

実況のアナウンスに合わせて、相手の人が身に纏っていたマントを豪快に脱ぎ捨てる。

「はうわっー」その全貌を一目見た瞬間、思わず変な声が出た。けどしようがない、だって、制服ふくの上からでもはつきりとわかる完璧な肉体がそこに在るのだから！

強靱かつしなやかそうな筋繊維！鍛錬を積み重ねながらもそれを否定するかのような脂肪のつき方!!

これは幻なの？1番の人——冴島さんの身体、皮膚が透けてその下が輝いて見える!!

きき極め付けは…自分には無駄な部分など一切無いと言わんばかりの堂々とした態度！

こんな…こんなの……！

「ずるい…」

「？」

ぱたっ…

『オーツトこれはどうしたことだ——!!?チャンピオンいきなりのダウ————!!』』

実況を始めとした周りの音が急速に遠のき、意識が薄れていく。でもそんなことはどうでもいい。

私、絶対にこの学園に転校する。

あんなすごい見たらもう他のところなんて考えられない…

くくく

これから先二年間卒業するまで、あるいはそれ以上の間。冴島として瀬能としてこの少女と長い付き合い——付きまとわれるとも言う——になることを、この時のナツルはまだ知らない。

☆

★

☆

くナツルSideく

これから闘おうとしていた相手がいきなり前のめりに倒れた。

『放送席——いや観ている全員が、冴島選手がどうやってチャンピオンを倒したのか見ることができなかつた——！！！！これが学園最強の実力なのか——！！?』

何もしてないんだけど。

使われてない空き教室から拝借した黒カーテンをマント代わりにして、それをパーズしたらいきなり気絶しやがった。意味がわからない。

つかチャンピオンって女？プロ研の出し物っていうから無意識に男だと思ってたわ。

今まさに担架で運ばれていくけど格好がすごい。体操とかで使うレオタードに目を隠すアイマスク姿ってホントに外部の人間？アレ全部私物？あんなの持って学園祭に来たの？なんで？

島津とかが負けたのって別の理由なんじゃなからうか……

『その辺りも混じえて、勝利した冴島選手にインタビューをしたいと

思います！冴島選手、今のお気持ちは!?!』

なんかいきなり実況が自分勝手なこと言いながら近づいてきた。

『近くで見ると本当、拝みたくなるほど素晴らしい肢体ですねー。私もお相手していただきたい』

ちよつと、聞きようによつてはセクハラとも取れる発言しながら  
実況へんたいもリングインしてきた。

『冴島選手！新チャンピオンとなりましたが今のお気持ちは!?!先程は  
一体何をされたんですか!?!』

『お面で隠されているから妄想が止まりませんね。悶々とイメージする  
のも悪くはないですがやはりお顔を拝見させていただきたい』

『今日はなぜ急に出場を!?!我がプロレス研究部へ入部を決めてくれた  
のでしょうか!?!』

『香水とか使ってます??:いえ、コレは違いますね。女性特有の香り  
といえますか:ああ!顔を見ていないにもかかわらず私つ、あなたの  
匂いだけで一目惚れしてしまいました!どうかお近づきの印にお手  
合わせ願いたい。寝技や関節技多めで』

イラッ  
.....

無言のまま今もマシンガントークを続ける二人組に手を伸ばす。

『おっ?』『え?』

右と左で別々の頭を、親指と小指をこめかみに引つ掛けるように掴  
み――

『フンツツ!!』

剛力の極み × 2 !!

ドゴツツツ

『『ゼボツ?!?!』』

思い切り地面に叩きつける。

勢いが強すぎて海老反りでリングに生える不気味なオブジェが出た。(ふたつも)

『何故ここに来たのか、か…』』

声色を使つて喋りながら、床の穴から両手を引っこ抜いてゆつくりと立ち上がる。

『知りたいたら教えてやろう、プロレス研究部なるこの学園に相応しくない集団を潰しに来たのだ!!』』

「なっ、」

「ええっ?!」

『抗いたければ今すぐリングに上がれ!!一人二人などの遠慮はいらんツ、文句がある奴全員かかって来い!』』

突然の物言いに観戦していた連中は啞然とした様子を見せる。

しばらくして状況を理解したのか、明らかに関係者と思われる屈強な男たちの顔が険しくなっていく。

ぐるりと辺りを見回すと殺気立つ奴らが何人も…意外と多いな。プロ研つて大型サークルだったのか?

視線を動かした際に電光掲示板が目に入る。

そこには先程戦った(戦った?)チャンピオンの女の名前が表示されていたが——俺の背後から早速一人リングに上がってきたので無視した。

「隙ありイ!!」

『『無いわ馬鹿が!』』

喜べ、貴様が(犠牲者)一人目だ!

くくく

狐のお面を付けた人間が4メートル四方のリング上で大勢の人間を相手に大立ち回りを演じていて、それを遠巻きに見て熱狂に酔いしれる観客たち。

その喧騒から離れた場所でひっそりと、電光掲示板に文字が記されている。

プロレス研究部主催 M-1 グランプリ 現チャンピオン

芳澤かすみ

ただ今 21 人抜き!!



## 50時間目 Executitioner

くナツルSideく

「えーっと、以上の理由により：プロレス研究部を：廃部とします  
……よし、送信っ」

自分の腕に着いているデバイスを使って宣言通り、プロ研を潰す手  
続きをたつた今済ませた。

メール一通で簡単に部活を廃部に出来るだなんて、楽な時代だな。  
ちよつと怖くもあるが。

生徒の活動を簡単にかでききる権限持つてしまった自分は  
もつと怖い。権力使うことに慣れてきたのも。

サークルに属している人間を全員（多分）リングに沈めた後、川神  
草の効果が切れそうになった。

その為急いで人気の無い物陰に逃げ込んだ。

とても都合のいいことに、やって来た場所は廃墟と言つていいほど  
にボロボロに荒れ朽ちた一般立ち入り禁止区域、通称" 霊たちの学び  
舎" と呼ばれる所だ。

嘘か真か実際にここで幽霊が目撃されたとか：雰囲気あるから  
いもおかしくはないけど。

しかし割と最近出来たはずの学園になぜこんな廃校舎があるのだ  
ろうか。謎である。

閑話休題。

M―1会場はフォローゼロだったから大騒ぎだろう。まあどうせ  
今日を持って終わる団体の企画だからどうだろうと構いはしない。

それよりいい感じに時間が潰れたな。召喚大会まであとどれくら  
いだ？そろそろ行くか。

……待てよ？

よく考えたら行く必要なくね？どうせ負けようと思つてたし、この  
ままバックれても問題ない：だろ。

強いて言うなら零会長サマに睨まれるが、言うてもその程度だ。数日もすれば忘れる。

あとの懸念は…もしも会長が勝っちゃったら超気まずい状況で決勝に引き摺られて行くだろうって事だが、流石に準決勝まで勝ち残ってきた相手に一対二で戦えば向こうに軍配が上がる筈だ。

よーし、そうとなつたら思いっきり祭りを堪能するかー！食い物とか片っ端から大量買いして、イベントリに入れて食べ比べしよう！

「あつ、いたつ！ナツル——」

——瞬間、俺は駆け出した。

「うおい！ちよつと待てよ!!」

しかし突如進行方向にガタイのいい男が現れ、行く道を塞ぐ。

見敵必殺！スピードを緩めることなく拳を固めつ腕を大きく引いて——！

「いやお前マジで待つ」

「グレイテストコーション!!」

——勢いよく突き出した拳から、まるでドラゴンのブレスのように「気」が放たれ男を襲った。

「ぐぶえつ!!」

へっ、汚ねえ悲鳴だ。

トラックに跳ねられたかのように吹っ飛んだ男を無視して、その横を通り過ぎる。

ところを弓矢が突然飛来し強制的に足を止められた。

「はいストーップ。私たちだよ」

「……椎名か……」

ごく普通な感じで、先ほど別れた少女が弓を構えたまま校舎の窓（一階）から姿を現す。

一瞬幽霊が出たのかと思った。場所が場所だしこいつ無表情だから…

そしてよく見たら今倒したのは島津だった。

一応加減はしたつもりだけどピクリとも動かない。大丈夫かな？

まあ、そんなことより。

「お前今こめかみ狙わなかった？」

俺の頭と同じ高さの真横の壁に突き刺さっている矢を指差しながら椎名に問いかける。

「信頼してるんだよ。瀬能なら当たるはずないって」

「都合のいい言葉だよな信頼って」ちよつと嬉しいのが悔しい。

でも矢を三本も射る必要は無いんじゃないかね？

いくら先端を潰してあるからって一発でも当たれば致命傷だぞ。やっぱり怖いよこの子。

「で、今度はどんな用かねみこやん」

「用があるのは大和だよ（みこやん…）」

直江く？何アイツまたなんか厄介ごと運んできたの？

清涼祭始まってから何度目だよ……よくよく思い返してみれば俺、奴から厄介ごとしか頼まれごとされた覚えはない。

頗る腹が立ってきた。いつか復讐するリストの上位に載せておこう。

「おーい、ナツル！」

先ほどかけられたのと同じ声で再び名前を呼ばれる。

そうかこれ直江の声か。通りで聞いたことあるなと思う訳だ。声のした方へ顔を向けると、小走りに近寄ってくる男が一人。無防備に手の届く範囲にまで来たところどりあえず腹パン。

「なぜっ!？」

「いやなんとなく」

強いて言うならちよつとイラツとしたから。

「で？なんの用なんだよ。俺これから召喚大会で忙しいんだけど」  
どうせ行かない用事を堂々と言い訳に使う。最近理解したがコイツの相手はちよつと嘘つくぐらいがちようどいいんだよな。

「えほつ……その召喚大会に関連することだよ……こほつ」

「……………」

選んだ言い訳はハズレだったようだ。

直江は打たれた箇所をさすりながら尚も言葉を続ける。

「ふー…詳しくは後からやって来る吉井と坂本の二人に聞いてくれ」

「？ お前が説明するんじゃないのかよ」

「長時間クラスの方を空ける訳にはいかないからな。それに…気絶してるガクト運ばなきゃいけないし」

そう言つて地面に転がつている男を指差す。軟弱者めがっ、

……………つて言うかー。

「暇じゃねえつつつてる人間への説明を後陣に託すつてどうなの？大丈夫？俺おつかいクエストみたいにたらい回しにされない？」

「もともと相談したがつてたのが吉井たちだから、他の人の所に話を振られることはないだろ」

ならもつと早くに来いよ。今までいくらでもチャンスはあつただろ。

「おーい、ナツルー！」

俺の心の文句をよそに島津を担いで立ち去っていく直江と椎名（俺を射るためだけに再登場したのか？）を見送っていると、さつきと同じようなセリフで背後から呼びかけられる。

振り返ると吉井が手を振りながら小走りに近寄つてきていた。その後ろには坂本。

警戒心のかけらもない無防備な姿。その胴体にとりあえず貫手。

「は……っ!?…かつ、ひゅ、…ゲホッ！」

「…なんで攻撃したんだ？」

「いやなんとなく」お約束かと思つて

しばし無意味に坂本と無言で見つめ合う。

先の二人とは違つて中々手の届く範囲にやって来ない。多分こちらから近づいたら即座に逃げるだろう。

チツ隙がねえ。あと数歩踏み込めばコイツも被害者四号にしてやるのに…

仕方ない、本題に入ろう。

「それで？俺に用つてなんだよ」

「それを話す前にまず明久を起こそう」

言うが早いのか、いつの間にか気を失つていた吉井を文字通り叩き起こし蘇生（※死んでません）させる。

坂本君ヒドい！友達に対してそんな乱暴な…良心は痛まないの!?

え？お前が言うな？ハハっ、何をおつしやるウサギさん。ぼかあこの学園において友達と思つてる奴は一人もいない。

「へボツ!?はっ…あ、あれ？おじいちゃん？おじいちゃんは？僕が小さいころに死んじゃつたおじいちゃんは？」

「何言つてんだお前は（臨死体験か…）」

「いつまでも寝ぼけてんなよ（死んだつて自分で言つてんだから気付けよ。自分が死にかけてたことに）」

知り合いが死にかけたのに酷くて薄情なクラスメイトたちである。

by 作者

「で、要件はなんだ」

またなんか話がわき道に逸れそうになってきたので、無理やり本題に戻す。いい加減尺の無駄だ。

「そうだな、時間もないし。明久、言つてやれ」

「あ、うん。えつとねナツル、ちよつとお願いがあるんだけど…」

今までとは打つて変わつて真剣な表情を見せる吉井。

なんだ、一体何を言うつもりだ？

「召喚大会で準決勝を勝ち上がって、決勝で僕たちに負けて欲しいんだ」

.....

「ワンモア」

「召喚大会で準決勝を勝ち上がって、決勝で僕たちに負けて欲しいんだ」

本当に一言一句違えずに言いやがった。

「あのな吉井：知らないかもしれないから教えるけど、俺は八百長がだいっ嫌いなんだ」

「ん？そうなのか？」

そうなんです。

この前も体育の授業で、なぜか合同という形で尚且つ模範試合で対戦することになったによわによわ（※不死川 心）が『金をやるからわざと負けろ』とか尊大な態度で交渉を持ちかけてきやがった。

始めはやる気もなく女子相手（しかも見た目が幼女）ということもあつて言われるまでもなく負けようと思っていたのだが、その一言で頭に血が上ってしまった。もともと体温高い上に沸点低いからな俺。

結果。畳に思い切り叩きつけ（きちんと背中から落としたよ？それぐらいの理性はあった）、終いに瓦割りの要領で直下突きを放ち、相手の顔面すぐ横の地面に穴を開けて反則負けになった。

そしてよわ子は尿子になった。

「不死川が不登校になったの絶対お前のせいだよな」

「むしゃくしゃしてやった、はんせいしてないこともない」

「棒読みじゃねえか」

だってあの日から暗殺紛いなことばつか起きるんだもん。

学園内ではやらないみたいだけどそろそろ実家も巻き込むくらい  
されそうな気がする。対策考えなきゃ。

「さて、ここらまで説明した上で尋ねよう。吉井、今なんつった？」

返答次第ではタダじゃおかねーぞ、と睨みつけるように視線を鋭く  
尖らせて次の言葉を待つ。

それに対して吉井はキツと覚悟を決めたような真剣な表情を作り、  
再び口を開いた。

「ナツル、準決勝で勝って決勝で僕たちに負けてよっ！」

「長々と撤回の機会を与えてやったのになんでそのまま言うんだテ  
メーは!!!」

「ぐええっ!!?」

意図して行った訳ではないが、1フレームキル並みのスピードで吉  
井の胸ぐらを掴んでそのまま持ち上げる。

「そんなに死にたいなら望み通り殺してやらあつ!このままキサマを  
頭から回ってるファンに突っ込んで血祭りに上げてやる!辞世の句  
を読め!!」

「ぎゃー!殺戮鬼!」

喜べ、お前が一人目だ!

周りを見回して処刑に適した物を探すと、勢いよく回転しているエ  
アコンの室外機らしきものが目に入る。

この辺は電力が来ていないのになんで作動しているのか——なん  
てことは勿論考えない。おあつらえ向きに外枠が外れててファンが  
むき出しだ。

「落ち着けナツル、明久がバカなのは覆しようのない事実だがバカな  
頼みごとをしたのには理由があるんだ」

「そうかよー」

あえてゆつくりと室外機に吉井を近づける。恐怖を煽るために。

天井から吊るすようにぶら下がっているっていう配置も悪くない。

処刑のシチュエーションにはもってこいだ。

「だから待ってって、訳を聞け！」

「聞いてやるよ。真つ赤な花を咲かせた後にな！」

「咲くと同時に散るだろ！それじゃ遅いんだよ！」

お前今うまいこと言った！覚えてたらいつか使おう。

「いやああー！ー！！待ってまってお願い待って！！」

室外機に後頭部が近づき、巻き起こる風でバサバサと髪が乱れる。

自分の末期を悟ったのか、顔が真つ青だ。

「そのような情けない遺言を残すのはお前ぐらいだろうよ」

「まってえー！ー！ー！！じ・事情がつ、事情あるんだよー！」

どうせ優勝商品のチケット目当てだろ。

「このままだとつ、姫路さんが陰謀で学園の転校がお父さんをスキヤンダルしてババア長を無くなっちゃうかもしれないんだよー！！」

「明久…焦ってるのは分かるがそれじゃ意味が分からんぞ」

「何っ!?!姫路が転校させられる上に学園が無くなる!?!おいどういう意

味だ、詳しく話せ!!」

「なんで今の台詞でそこまで正確に理解できるんだ!?!」

パトス…かな。



## 51時間目 Imperial

（吉井Side）

廃校舎でやっとナツルと周りに気兼ねなく話せる機会ができた。

時間もなかったから結論だけを簡単にわかりやすく言ったのに：危うく殺されかけるといふ酷い目にあつた。

そのことでナツルに文句を言ったら「は？何言ってるのお前、冗談に決まってるだろじよ・う・だ・ん。なに本気にしてんだよ」って眉間にシワを寄せて馬鹿にされた。

ぜつつつたいウソだ。100%やる気だったでしょきみ。

今後はナツルに八百長の話題を振らないようにしよう。

「で？転校や廃校ってのはどういうことなんだ？」  
ボロボロのコンクリートの壁に背中を預けて、気だるげに尋ねてくる。

なんか異様に似合うのはなんで？

まあとにかく、ようやく経緯を説明できる。数分で終わる話なのにすごい時間かかったよ。

あとはなんとか協力してもらっただけだ！

「この始まりは島田からの相談だ。姫路が父親に転校させらそうだからなんとかしたいってな」

「……あー……まあ、普通の親なら現状を知ればそう勧めるわな」

直江君と似たような返事だ。

「でも意外とそういう話今回が初めてだな。他にも女子はいるんだし、不満とかもつとたくさんあってもよさそうなもんだが」

確かに。ナツルの話はもつともだ。

教室どころか校舎内にも入れずに机と椅子はダンボールにゴザ。床はブルーシートなのにクラスメイトたちからの大きな反発はない。

親御さんからの文句も聞いたことはない。一体なんで…？

「…ナツル<sup>おまえ</sup>のやった行いが原因だ」

雄二が苦々しい表情で答える。

「？ 俺のしたこと？」

「試召戦争終わった次の日、戦犯裁判とか言っただけに俺に殺人技かましただろ」

「あー。あつたな んなこと」

「……一応俺、しばらく入院したんだけど……」

僕も。

とくになにか悪いことした訳じゃないのに、なぜか気づいたら美波と姫路さんの二人から折檻を受けていた。

意味が分からない。

「あそこまでの罰則を与えられたのを目の当たりにしたからか、なし崩し的にクラス全員に許されたみたいでな。すぐに待遇のいい教室に移ってやるって感じで親とかに話したから問題にはなっていないらしい」

「そうだったんだ…」

『バカな息子がやる気になった』とかでむしろ学園の株が上がったとかいう話だ」

あの吊るし上げみたいな裁判でそんな効果が…

人生ってなにがあるか分からないなあ。

「それら全ては、俺のおかげ」

「ただ姫路は別だ。どんなに本人がやる気に満ち溢れてても、身体が弱いからな」

「おい無視すんなや」

体調良くないのに外で授業させるとか、よく考えたら問題大ありだよね。

「ん？でも近頃姫路が調子を崩してるところを見た覚えないけど」

「あ、確かに」

Fクラスに来たばかりの時はずつちゅう咳をしてたり保健室に

行ったりしてたけど、最近は元気そうにしてる。

「人聞きだけどナツルの側にいると体調がいいらしい。なぜかは知らんが」

「そうなの!？」なにその謎効果。

「側って…あんまりくつつかれた覚えもねーぞ」

「別に数cmまで近づかなきゃいけないって訳じゃないらしいぞ。同じ教室内に数時間一緒にいると何日か身体が楽とかなんとか」

「都合よすぎなんですけど…」

まっただ。。

「待てよ、じゃあひよつとして…最近姫路の性格がおかしいのってまさか…俺の影響受けてるから？」

「……………」

辺りが静寂に包まれる。

学園祭で賑わっているはずなのに、人の声ひとつ聞こえない。なんだろう。

「…姫路転校の件は分かった。次に学園が存続の危機に瀕している事について話せ」

「分かった。時間もないしな」

僕たちはそれ以上の追求を避けた。

今さら言っても意味がないし、姫路さんが元気になったのがいいことなのは事実だから。

何よりナツルにヘソを曲げられるととても面倒だから。

「こっちは結構複雑だ。まずは他校の経営責任者とかにとってこの学園が邪魔な存在だってことを知っておいてくれ」

「…世界中から注目されて人気が高い上に最新鋭の技術開発しまくってるマンモス校だから？おまけに学費も安くて希望者が多いからか？」

「大体そうだ」

なんですぐに理解できるんだろう。僕は分からなかったのに。ナツルなんて腕力の強いだけのバカのくせに…バカのくせにバカのくせにバカのくせに!!

ゴキリッ

「みぎやあああつ!?!」僕の右腕が本来曲がらない方向へ!?

「お前今俺の悪口考えたら。顔に出てんだよ」

「明久、さっきも言ったが時間がないんだから話を逸らして遊ぶな。迷惑だ」

「二人とも酷いよ!?!」とくに雄二が!

「とにかくそんな訳で、神月学園<sup>ウチ</sup>を蹴落<sup>チ</sup>とそうと虎視眈々とチャンスを伺ってる奴らが大勢いるんだよ」

「物騒な世の中だな」

お前が言うなだよ。あと僕の腕直して。

「このタイミングで動きがあったってことは、そのチャンスが訪れたってことか?」

「ああ、召喚大会の優勝商品である『白銀の腕輪』に重大な欠陥があるんだ。それは——」

「あーいいい。いい。その辺の説明はいらん、時間の無駄だ。要は特大級のスキャンダルで学園長をただのババアにして、ついでに学園も無くしちゃおうっていう感じだろ?」

「…大体そうだな」

察しがよすぎてナツルが怖い…戦闘力がすごい目立ってるから分かりづらいけど、雄二みたいに悪知恵に長けてるタイプなんだなあ。

「そうなる…:さっきのアレはそういう意味だったんだな。年寄りのくせにかっこつけやがって」

なにかを思い返すように顎に手を当てて呟くナツル。

「どうした?」



「ていうかナツル！関節外されたくらいで騒ぐなって普通騒ぐよ！大事だよ！試合なら中断するレベルだよ!!」

「……………そう、だよなあ……」

『やっぱ川神院あそこふつうじゃないんだな……』と、ナツルはなぜか遠い目をしながら乾いた笑みで僕の腕をはめ直してくれる。

一体なにがあつたんだろう。

「事情は分かったけどよ、そもそもなんで俺んどこ来たんだ？」

「もう準決勝なんだ。勝敗を待ってから勝者に交渉を持ちかけるのもアリだろう」

まさか知り合いだからってことはないよな？と言葉を締めくくり、どこからか取り出した掌サイズの長方形の缶から飴玉を一つ取り出して口に入れる。

「その理由は3つだ。1つはお前の言う通り知り合いだから。2つ目は同じFクラスの人間が決勝まで残れば姫路の父親に好印象を与えられるから。とくにお前はFクラスでも珍しく全教科の点数が高いからな」

「あくまでFクラスの範囲で見ればだけどな」

例外もあるし、と言って飴玉をもう一個口に放る。

「3つ目は俺たちと逆のブロック、つまりお前と三郷の次の対戦相手は今回の事件の黒幕、教頭の竹原の手先だからだ」

「…竹原？」眉間にシワを寄せながらも飴玉を一つ頬張る。

「どうかしたか？」

「一回戦が終わったあたりで接触してきた奴だ。…そうか、あれは俺の見た目を確認するためだったんだな。なぜか学内で俺の容姿が一定してないから」

「ああ、なんかお前色々な噂が飛び交ってていまいちよく分からなくなってるよな」

「背丈が2mを超える筋肉隆々な大男とか、その逆で1mあるかないかの小柄な少年とか実は地縛霊とか」

最後の部分のときだけ表情が険しくなった。

あと飴玉を二個同時に口に放り込んだ。

「こつちの事情は全部話した。：協力してくれるか？」

「……………」ナツルは無言のまま飴を口に入れる。

さつきから飴食べるスピード早くない？その割には頬が膨らんでる様子がないんだけど。

もしかして飲み込んでるの？

「八百屋は嫌いだ。するのもしられるのも」

「そんな——」

「だが当人の望んでない転校もどうかとは思う」

…！それって！

「はあ…メンドクせえ、なんで姫路かなあ〜。お前らのどつちかだったらよかったのに。それなら秒で断れた」

「失礼な。俺だつてこの馬鹿やお前なら手を貸してない！」

「そうだよ！僕だつてナツルや雄二なら見捨てたさ！」

「「ああ…？」」

三人が揃つて他の二人にメンチを切る。

またしても学園祭の真っ只中だと言うのに物音一つ聞こえない静寂が訪れる。

「…この件については後でじっくり話し合おうか」↑ナツル

「うん、そうだね」↑僕

「異論はない」↑雄二

姫路さんに料理作ってもらわなきゃ…何人前くらい必要かな？

「で、そう言うってことは次の試合ちゃんと戦ってくれるって事だよな？」

「疑り深いなあお前も」

「きちんと言質を取っておかないと直前で反故をされかねんからな」

「はいはい…分かったよ」

「だが 断る … (c.v. 神谷浩史)」

「なんで!?!」協力してくれる流れだったじゃん!?

「冗談だ」

「…直江君とも似たようなやり取りしたよ。ホントそっくりだねきみたち」

「この場合直江がナツルに似てるんだろうな」

「奴は私が育てた」

「なんで誇らしげなの。」

前にちらつと聞いたことあるけど、直江君や川神さんたちがナツルと知り合ったのは一昨年、中学校卒業間近のときらしい。

十数年来の友達みたいな印象を受けるんだけど。

「渋々ながらもしようがないから決勝で熱戦演じて負けてやる。ただしお前ら勝ち上がって来なかったらクロスから」

「頼んだのを後悔する台詞だな…」

「色んな意味で絶対に負けられない。」

「あと坂本、一つ貸しだぞ」

「だそうだ明久」

「え、僕!?!」なんで!?!

「当たり前だろ。この話はそもそもお前が持ってきたんだ。それとも島田に支払わせるか?」

「うっ…そう言われると…」

「そういう訳で借りは明久が返す。煮るなり焼くなり好きにしろ」

「まあ吉井でもいつか。丁度やつてもらいたいことがあったんだ」

「なんでだろう、すっごい嫌な予感がする。」

「なにを頼むつもりなんだ?」

「新技の実験台」



イヤアアアアアアアア!!嫌な予感的中!!

いつ、イヤっ!まだどんな技をするのか分からない!もしかしたら見た目が大袈裟なだけでたいした威力がないとか

「…使う技は?」

「アロガント・スパーク」

相手を必ず殺す殺意の塊!!

「意外だな。お前なら簡単に再現できそうだけど」

「飛び上がって空中のサブミッションがどうしてもな。テンション上がり過ぎなのか頭と両腕を引きちぎっちゃうんだ。もう何体のダミー人形をダメにしたか…」

「しみじみと言う台詞じゃないよ!」

人間である僕が食らったら大問題じゃないか!

「技の実験台なら雄二の方がいいじゃないか!頑丈だし!」

「俺を生贄にするな!」

「いやー坂本はダメだわ。そこそこ格闘の心得があるだろ?技の最中下手に抵抗されると逆に危ない」

「殺人技かけられて無抵抗って無理でしょ!」

「抵抗の値の差だよ。木を握りつぶすのと絹ごし豆腐握りつぶすのとじゃ違うだろ?」

僕は豆腐なの!?

「というかそもそも練習する必要ないでしょ!?!あんなに連続して僕に仕掛けてたじゃないか!!」

これで今夜も安心して熟睡できるとか決め台詞言いながらも『フィニッシュがイマイチ』と4・5回休みなく技をかけた続けたじゃないか!

教室の床が粉々に破壊されて地面がむき出しになって僕の体中の骨も粉々になってもかけ続けたじゃないか!!

「何言ってるんだお前?」

「大方夢でも見たんだろう」

「そんな訳ないー!!」あの恐怖と痛みが夢であってたまるか!

「それよりナツル、そろそろ会場行かないとヤバイんじゃないか?」

「あ、ホントだ。しよーがねーな、頑張って試合に勝って超頑張って会長説得してくるか」

「悪いな。頼んだ」

「待ってー!行かないでー!!」

「ここで行かせたらなし崩し的に借りを作って僕が必殺技受ける羽目になってしまう。何か他に方法は…!」

「次はお互いに決勝で会えたらいいな」

「何事もなかったかのようにフラグ立てて行こうとしないでよ!」

「うるさいぞ明久。ナツル、こいつは抑えとくから早く行ってくれ」

「了承」

了承じゃなーい!!

雄二に掴まれて身動きが取れない状態にさせられた隙に、まるで忍者のようにその場からナツルが姿を消した。

文句を言う暇さええない!身体能力高いつてレベルじゃないよ!?

「諦める明久。他に方法はない」

「本当に!?本当にそうなの!?!」

「ナツルが決勝に進みさえすれば全てが丸く収まる」

僕の命の保証が入ってないよ!!

## 52時間目 召喚大会⑬

くナツルSideく

「今回もギリギリね」

召喚大会の準決勝が行われる特設会場に繋がる通路。

その途中で三郷雫かいちょうが目をつむり腕を組んで壁にもたれかかっていた。

「遅刻していないとはいえ、もつと時間に余裕を持って行動してくれると嬉しいのだけれど。電話で呼び出すところだったわよ?」

「ああ…待たせたな」

文字通り一直線(建物や人混みを飛び越えて)にやって来たから、どんなに急いでもこれ以上早く到着するのは無理だったろうけど。

「…瀬能君あなた、何かあった?」

ゆっくりと目を開けて俺を見つめてくる。

「なんでそう思う」

「いつもより真面目な雰囲気だから」

そういうのって声だけで分かるもんなの?知り合ってまだひと月そこらでしょ?」

「…会長、提案があるんだけど」

この場で姫路や優勝賞品の不具合について話すのは時間が足りない。

その証拠に司会役の教師のアナウンスが聞こえてきた。

「次の試合はお互い一対一でやらないか?」

「あらどうして?」

「いや、三人の動向伺いながら戦うより一人に集中した方が楽だろ?相手は三年のAクラスらしいしさ」

チーム戦はハイリスクハイリターン。危ない時に助けてもらえらるっていう安心感はあるが、位置取り間違うと自分からピンチを招く。

今回みたいに絶対負けられないって場面じゃ協力しない方がいい事もある。

片方が負けたら一気に二対一で不利になるけど、そう簡単にこいつは負けないだろう。

というのは建前で、本当はただの俺のわがままで。理由は聞くな。

その辺をどう上手く誤魔化して説得するか…却下される確率の方が高いんだよね。準決勝<sup>こ</sup>までタッグプレーで問題なく勝ち上がってきちゃったからさあ。

「…いいわ。その提案、乗ってあげる」

「え?」

「どんな事情があるのか知らないけれど大切な事なんでしょう?あなたの好きになさい」

そう言つて会長は髪をかきあげるいつもの癖を見せて、リングの方へと足を向ける。

……不覚にもカツコいいと思つちまつたぜ。

「貸し一つよ」

アーアー、キコエナイ

☆

★

☆

『さあ…これより…神月学園召喚大会準決勝戦を、始めます!!司会  
は私、柏木典子でえすつ!』

昨日も訪れた場所でマイク越しに立会いの教師の声が響き渡る。

いつもよりハイテンションな人だ。あとなんか化粧がケバ…凄い勢いで睨まれた。

『ま・ず・は・三年Aクラスの二人組!夏川俊平君と常村勇作君!!三年生は出場者が少ないですが、ここまで危なげなく勝ち上がってきた実力派コンビですつ!』

紹介を受けて俺たちとは逆の、対角線上の入場口から歩いてくる坊主頭とソフトモヒカンの二人の男。

どう見ても賢そうではない見た目なんだが本当にAクラスか？いやそもそもAってそんなに頭良さそうなイメージ無いんだけど。なんだろ。

「つーかSクラスじゃねーのかよ…」

最高学年の最優秀クラスが決勝争いに来ないってどういうことよ。

「三年生は基本的にこういった出し物に出ないわよ。進学や就職の準備に忙しいから」

思わず零れた眩きに会長が答えてくれた。

返事は期待してなかったんだけどな。

「準備ってまだ五月だぞ」

「ここは世界的に注目されている神月学園よ？高ランクのクラスの間ほど高い目標を持っていて、そこに向けて努力する事に全力を尽くしてるの。一部の例外を除いてね」

例外：きつと昨日のモモさんのことを言ってるんだらう。あの人は将来は川神院継ぐの決まってるから。ペアで出た和服の人は知らんけど。

目の前の二人はとても努力しているようには見えない。きつとその辺に教頭に協力してる理由があるんだらうな。

『対するは——…えー、二年SクラスとFクラス所属の生徒会コンビです』

雑っ

おざなりすぎる。紹介の仕方の落差が酷すぎなんですけどー？

一部の教師には俺みたいな底クラスの人間を見下したり嫌悪してる奴がいると聞く。コイツもそのクチか？

ム””ツ

メールだ。

『柏木典子。』

三年Aクラスを担当する42歳（独身）教師。

教育態度は真面目だが、自分の美貌に絶対の自信を持っている。

しかし最近若干の肌の衰えを覚え、目立つ外見の女生徒に対して”自分の地位を脅かすのでは?”と思うようになり、敵意を見せるようになってきた。

清涼祭初日のミスコンで優勝出来なかった事で少し落ち込んでい  
る』

おぎなりの理由ってこれ？俺じゃなくて会長のせい!?

自分の地位を脅かす者を敵視って、確かに会長美少女だけど倍以上  
歳が離れてるじゃねーか!

それにこの学園にどれくらい目立つ女いると思うんだよ。見渡す  
限り敵だらけじゃん。この情報送ってきたのも美少女（美鶴先輩）だ  
ろ？

客席を見回すと前日同様、空席が全く無いのに一角だけ大きく空白  
地帯があり、その中心に陣取る二人組が。

迷惑だろ。目立つだろ。誰か止めろよ。

「どうしたの瀬能君？」

「いや、あの人がアホなのかなど」

俺の台詞の理由を見ていた先で察したのか、会長は考え事をするよ  
うに少し黙って、

「……………普段は優秀なのよ、あの人も」

それは絶対フォロージャやない。

☆

★

☆

『———それではあ、そろそろ試合の方を始めてもらいましょう!』  
長々とした試合説明がようやく終わった。

その間中?とくに何もしてないよ。向こうも何故か俺を見てニヤニヤと笑いながら二人してひそひそ話してたし。

「あの、先輩方…気持ち悪いんですけど俺は美少女が好きなんだからあなたがたの好意は受け取れないっす。申し訳ない」

「どんな勘違いしてんだテメーは!?!」

「気色悪い想像止めろ!?!」

坊主とモヒカンが慌てて騒ぎ出す。

なるほど…コレはあれだな。的確に凶星を突かれて焦ってるんだな。

この二人はゲイのカップルで、最近の性活がマンネリになってきたから新しい刺激を求めて俺を品定めしていた…大体こんなところだろう。

まったく、嫌なことに気づいてしまったものだ。梅の木二中の明智と呼ばれたこの頭脳が恨めしい。

「またなにかあんぽんたんな事を考えてるでしょう」

「失礼な。この梅の木二中のアガサと呼ばれた俺に向かって」

「アガサは女性よ」

…そうだったけ?

ていうか今あんぽんたんつつつた?初めて言われたよそんな言葉。

「ふざけやがって…やっぱり最底辺クラスの人間はろくな奴がいねえな」

「速攻で倒して女の方をやるぞ」

どうやらこの二人、連携して俺を狙うようだ。

作戦としては定石なんだが、見た目のせいでクズな発言にしか聞こえないわ。本当にAクラス?

まあいいや。そんな男たちにへらへらと軽薄そうな笑みを浮かべて話しかける。

「別に警戒する必要ないっすよー。俺ら協力する気ないっすからー」

「ああ？どういう意味だ？」

鈍い奴だな。

「決闘の真似事つすよ。そっちかそっち」モヒカンと坊主を順々に指差して、

「どっちでもいい。俺にブチのめさされる覚悟がある方かかってこい」

笑みを引つ込めて睨みつける。

『…っ、』

誰ともなしに唾を飲みこむ音を発し、心なしか周りの温度が下がった気がした。

「ひとつ年下のカワイイ後輩がここまで言ってるんだすよ？まさか逃げたりはしないよなあ？」

「っ！てめえ…」

「なめやがって…！おい常村！こいつは俺がやるぞ、いいな!？」

坊主頭の方が叫ぶ。

「ああ？…ちっ、しようがねえな。さっさと片付けて加勢してくれよ」

「おう。任せろ」

決まったな。

そうだ。ついでに…

「ひとつ聞かせろよセンパイ」

「…完全に敬語じゃなくなったな…なんだよ」

「なぜ教頭に加担する？」

「!!」

その瞬間、二人が目を見開いて驚愕の表情を見せる。

「…？瀬能くん？それはどういう…」

「答えろ」

なにも事情を知らないが故に置いてきぼりを食らっている会長を黙殺して返事を強要する。

彼女にはあとで謝ろう。怖いから。





掛けてきた。

「お前はなんで学園長に味方してんだ？見返りは？」

「ああ？ねーよんなもん」

そもそもあのばあさんの味方になった訳じゃねーし。なりゆきで結果的に学園長が得する感じ？

いや、吉井たちはどうか知らんけど。報酬とかあんのかな？そこら辺聞きそびれてたわ。

「じゃあなんで」

「そりゃあお前——」

——ごめつ…なさツ…本当に…ツ…ごめんつ…なさつ…

「空が泣いたんだよ」

☆

★

☆

「試獣召喚ッ！」

おなじみの掛け声を坊主頭が叫ぶ。

幾何学模様の陣が出現し、そこからアイヌ装束のような服装と剣を持った二頭身くらいの小さな坊主召喚獣が飛び出した。可愛げの力ケラもない。

「試獣召喚！」

今度はモヒカン頭。同じく幾何学模様の陣から召喚獣が出てくる。服の装飾も武器も坊主と似たような感じだな。だから仲良いのか？

「試獣召喚」

その後続くのは会長。

ついさっきまで「説明しなさいよ」みたいな目でずっと黙って見つ

めてきていたが、流石に試合に集中するため今はこつちを見ていない。

試合が終わったらきつと俺は質問責めに合うだろう。即拷問にならない事を切に願う。

三体の召喚獣が揃ったところで、満を持して俺も呼び出す。

どうかせめて、マシな姿の奴が出ますように…！

「試獣<sup>サモ</sup>召喚<sup>ン</sup>ツッ！」

——装備は頭から足まで全身を隙間なく鎧で覆うフルプレートメール。

武器は中世の騎士が使うような乗馬戦用の突撃槍<sup>ランス</sup>。

しかし体軀は人の上半身に馬型の下半身と、ギリシヤ神話のケンタウロスそのものの姿。

正直今までの中で一番強そうでカッコいい召喚獣だ。  
…カッコいい召喚獣なんだが……

Aクラス 夏川俊平 英語 241点

&

Aクラス 常村勇作 英語 223点

V S

Sクラス 三郷雫 英語 437点

&

Fクラス 瀬能ナツル 英語 9点

どうして苦手科目でこの格好が出るかな。

「あなたよくそれであんな大口叩けたわね…」

「まさか英語とは思わなくて」  
トーナメント表をもつとそのままに見とくべきだった。

## 53 時間目 召喚大会⑭

一度だけ――

『あつ、あの！瀬能さん！』

『おん？』

学校からの帰り道。

十分にも満たない僅かな時間だったけど、一度だけ姫路と二人きりで話したことがあった。

☆

★

☆

「てめえええっ！なんだその点数はあぁっ!!？」

俺が対峙する坊主頭が額に青筋浮かべて騒ぎたてる。

「そんな点数で俺を脅しやがったのか!!」

「いやあ、今回は筆のノリが悪くって」

「ふざけんなゴラツ!!」

すごいな。血管切れそうだぞこの人。

「落ちつけ夏川！相手はFクラスだぞ！成績が悪いのは当然だろ！」

「そうだけだよお!!」

「はったりってのは不利な状況でそれを感じさせない程大げさに言うもんだ。見事に騙されたな。（ぼそっ）ださっ」

「うがぁぁぁっ!!」

「だから落ちつけて！」

殴りかかってきそうな勢いの坊主をモヒカンが羽交い締めにして止める。

「そんなザコに期待しても無駄だったって事だろ！俺の方は強敵でやばいんだから、さっさとぶちのめして加勢しろ！」

「そんなザコ？」

何気に初めて言われた台詞だな…忘れてるだけかもしれないけど。

どうしよう。いささか、いや  
すこぶる腹が立つ。

「デメーらごときに二桁もいらねえん、だよッ！」

バゴツツツ!!

無反応で棒立ち状態の坊主の召喚獣に、突撃槍ランスで横なぎのフルスイ  
ング。

「なっ!? てめっ!」

「試合はすでに始まっていますよ」

本体に向かつて言葉だけをかけつつ、相手に駆け寄る。

場外ホームランの勢いでぶん回したが、残念ながら点数が低すぎて  
ダメージはほとんど無い。

手応えの割には大きく体勢を崩しただけで開始位置からあんまり  
動かせてないし：勢いよく啖呵を切ったが一桁は流石にキツいな。

向こうが無防備な今がチャンス、畳み掛ける!

再び射程距離にまで近づいたところで四本ある内の二つ、後ろ足の  
みで立ち上がり――

「ケンタウロスの黒い嘶き!」

ドガガガガガガガガガ――!!

上げた前足で怒濤の連続蹴り。

「うおおっ!」

「おらおらオラオラアー」

胸と言わず顔と言わず。

腕と言わず脚と言わず。

場所を限定せずとにかくやたらめったらと打ち続ける。

もちろん行動に移そうとしたら即座にその部分(手とか)に照準を  
定め、徹底的に動きを封じる。

卑怯？汚い？敗者の台詞だね。

「調子に乗ってんじやねええー！！」

打ち合い（一方的）の途中、坊主が後ろに飛んだ。

人の一歩分ほどだが、距離が空いたことにより攻撃が外れる。

そしてすぐさま坊主が武器を振り上げて距離を詰めてくる。

回避から攻撃へ転じるのにぎこちなさが全くない。この辺は腐っても三年か。

「死ねオラツツ！！」

「だが断る」

風を切る音と共に振り下ろされる剣を、軌道を予測して冷静に躲す。

怒りに任せた全力の一撃を空振りさせられ、坊主召喚獣の身体が大きく流れる。

その隙について急接近。素早く背後に回り、羽交い締めにしてそのまま垂直に飛び上がる。

空中で体勢を整えてそのまま――

「馬式誉れ落としツ！！」

身体が天地逆の坊主の足に、馬部分の前足で乗って地面に着地。

トラック同士がぶつかったような凄い音がした。

Aクラス 夏川俊平 英語 168点

VS

Fクラス 瀬能ナツル 英語 9点

だというのに四分の一ほどしか削れてない。流石は9点。

残念ながら長期戦になりそうだ。会長の時みたい謎現象で一気に大ダメージ与えられないかな。

「おっ、お前…なんでそんなに強いんだよ…？召喚獣って点数低いと弱くて動かしづらいはずだろ…？」

坊主（本体）が信じられないものを見た目を俺に向ける。

「そうだな、確かに動作は鈍い。いつもに比べると格段に扱いづらい

よ」

「じゃあなんでそんなに戦えるんだよ!?!おかしいだろ!？」

なんでって…

「ちよつと昔を思い出しただけだよ」

昔…まだ小学校低学年の頃かな。

当時は武術に無邪気に打ち込むスポーツ少年だった。ただ身体を動かすのが好きで自分より強く上手い奴に挑むのが日課だったわけ。いつからかな？それが嫌になって、胴着を着るのも道場に通うのも辞めた。

でも近頃は… ——

「色々な条件で色々な『強い』と挑み挑まれてきた。それらに比べたらこの程度、ハンデにもなりやしないぜ」

胴着はもう着ない。

でも道場には通っている。

門下生じゃないけどね。

「つ…！最低クラスのくせにカツコつけやがって、ならこんな事されても大丈夫だよなあ!？」

そう言つて坊主は自分の召喚獣を走らせる。

そしてリングの端、客席近くにまで行つたところで止まった。…  
「いったいなにがしたいんだ？」

「へへへっ…」

さらには見下した様子でニヤニヤ笑いを向けてくる始末。

『ビビってんなら乗らなくてもいいぜ?』って意思が透けて見える安い挑発だ。

いいだろう。乗ってやる。

「へのつっぱりはいらんですよ」ナッツを客席の方へ走らせる。



四本の馬脚を巧みに操り颯爽と駆ける姿はさながら神話のケンタウロスのよう…俺自身は二本足から脱した覚えはないんだけどなんで操れるんだろう。謎だ。

「っ”あ!?”」

急に、なんの前触れもなく目に激痛が走った。

思わずまぶたを閉じて手で擦る。

指に感じるザラついた感触、これは…砂?

「へへへ…引つかかったな」

すぐ近くでうすら笑う声がある。

「こんな簡単に騙されるなんて、底辺の奴はやっぱり馬鹿だなっ!」

愉快げな罵倒と共に固い地面を蹴る音が歓声に混じって耳に入る。

…目潰しか。

昨日のモモさんの行いから急遽大会のルールに『召喚者本体への攻撃を禁ずる』というのが追加された。

今の坊主の行為は当然反則だが、審判は注意をする気配すらない。

坊主を鼻肩して言うより単純に気付いてないんだろう。

急に動いた召喚獣の動きを追うので忙しかったはずだ。じやなきや流石にヤジが飛ぶ。

「今度こそ死にやがれッ!!」

坊主が声高らかに宣言する。

ダメージフィードバックで召喚獣の状態はある程度分かるが、視覚と聴覚は無関係だからどういいう状況かは直接見ていないと把握することはできない。

ポケ○ンと五感で繋がる主人公が別の世界線ではいるみたいだけど俺には無理だ。シンクロの練習とか承認なしに召喚獣呼べない奴にはできないからな。

故に目潰しを食らった現状では、無防備に相手の攻撃を受けて戦死するのが通常の流れ。まあでも――

「もう一度言う。断る」

俺は普通じゃないけどね。

袈裟斬りに 振り下ろされた剣を 頭部ギリギリで躲し、  
お返しに逆手に掴んだ槍を相手の顔面に深々と突き立てる。

「は…？」

坊主が得意げにニヤついた表情のまま、間の抜けた声を漏らす。

Aクラス 夏川俊平 英語 106点

VS

Fクラス 瀬能ナツル 英語 3点

あ、点数減ってる。ちよつとかすつてたか？

まあ元々が低かったし、これ以上ダメージ食らわなきゃいいや。

「なんつ、で…」

「あのようセンパイ」

砂のせいでおそらく充血しているであろう目で、ゆつくりとこつちを向いた坊主を睨み返す。

「この俺が不意打ちの目潰しくらい今までに受けたことないと思っただか？」

経験が違うんだよ経験が。

「お前…痛くないのか？」

「はあ？痛いに決まってるだろ」

なんでそんなこと聞くの？つーかよく聞けるな、自分でやったくせに。

涙目で視界はぼやけるしすぐにでも腕で擦りてーよ。水で洗い流してーよ。

でもな、

「今の俺は痛みなんかで止まれるほど生半可な心持ちじゃねえんだよ…！」

☆

★

☆

それはSクラスとの試召戦争から数日経ったある日のことだった。無理矢理入れさせられた生徒会で慣れない事務仕事に四苦八苦しながらもなんとか仕事を終わらせて、疲れた身体を引きずって通学路を歩いていた。

『あつ、あのつ、瀬能さん！待ってください！』

『おん？』

そんな時突然背後から声をかけられて、振り返ったらそこにいたのは姫路だった。

『姫路？お前なんでこんな時間にこんなところに…』

『待ってたんです…一言、瀬能さんに謝りたくて…』

『謝る？…なにを？』

『その…Sクラスとの試召戦争の時、負けて瀬能さんに全部押しつけちゃって…』

『ああ…なんだそんなことか』

律儀な奴だ、そう思った。

正直すっかり忘れていたからな。

『別に気にすることあねえよ。戦った相手が悪かった、それだけだろ？』

『それでも、瀬能さんは勝ったじゃないですか。だから…すみませんでしたっ！』

そう言うのと深々と頭を下げる。

本当に律儀な…っていうかめんどくさいなこいつ。まあそういうところが他のやつらから好かれてるんだろうけど。

『わかったわかった、謝罪を受け入れるよ。だからもう引きずるのやめろ。次は大好きなみんなと一緒に頑張れるように努力すればいいさ』

ひらひらと手を振って自宅に向かい歩き出す。

この時は正直適当で…晩飯何にしようかなんて別のことを考えていた。

『……瀬能さんですよ』

『あっ?』

『 ” みんな ” の中には当然、瀬能さんも入ってますからねっ! 忘れないでくださいっ! 』

その一言は不意打ちで俺の身体にぶち当てられた。

『 』

再び振り返った時、パタパタと走り去っていく後ろ姿しか見えなかった。

それまで知らなかったが姫路の家は俺んちとは別の方向にあるらしい。俺に謝るためだけにわざわざ時間をかけたようだ。

本当に短い間の短いやり取りだった。

しかしそのほんの僅かな会話は、いつまでも薄れることはないだろう。そう思った。

## 54時間目 召喚大会⑮

「…ふっ」

みんなの中には俺も入っている…か。

「なっ…なんだてめえいきなり笑いやがって…」

「前に知り合いが言ったんだ。一人のために一生懸命になれるみんなが好き、って」

「みんなって…お前のクラスか？最低辺のFクラスの連中が好きとか、頭おかしいんじゃないか？」

「テメーより断然マシだ」

Fクラスが好きっていう姫路の考えは俺もよく分からん。どう鼻真目に見てもあそこはバカの集まりだ。

でもバカなだけだ。

俺は小学生の頃くらいに生まれ故郷である沖縄から本州に引っ越してきた。

こんな髪と瞳をしているためか、周りからつまはじきにされて…人間ってこんなもんなんだなと勝手に興味を無くして、自ら孤立した。

中学では幸い…と言っているのかな？同じように孤立した奴らとつるむようになって、他人との距離感を改めた…と思う。

卒業して離れ離れになるのは少し寂しいなって零した時、つるんでいた奴の一人に言われた。

『人生で一番楽しいのは高校生の時だろ？これくらいで満足してんなよ』

……高一の時は信じられなかった。

でも、最近は学校が楽しい。

「ああ、」そうか。

嬉しかったんだ、俺は。

姫路にみんなの中には当然俺も入っているって言われて。嬉しかったんだ。

直江に、「ナツルー野球やろうぜー」って言われて。

嬉しかったんだ。

坂本や吉井に頼ってもらって。

「そうか…そうだったんだな」

「あぁっ？なんだよいきなり…」

「いや…俺、相当なバカなんだなーって」

「はあ？お前なに今さら言ってるんだ？最低クラスなんだから当たり前だろー！」

「クラスでしか語れないアンタはバカですらないけどな」

「んだと!？」

ちよつと黙っててよ。今いいところなんだから。

本当は友達欲しかったんだ。

でも作り方が分からなくて、自分には向いてないって無理矢理誤魔化していた。

バカだよなあ、ホント。…どうしようもないほどに馬鹿だ。

今さら言えないけどさ。

俺も好きだよ、友よ。

——ツキンツ

いつの間にかひび割れたタマゴのようになっていたナツツの身体がバラバラに崩れ落ちる。

そこからなぜか、俺と同サイズと言ってもいいくらいの大ききで、両手に一本づつ剣を装備した金髪で白銀の仮面で顔を覆った女が馬に乗った状態で現れた。

「……………はっ。」

坊主頭も展開についていけないらしく間の抜けた表情を浮かべる。

ザシユツツ

思考が停止してる間に、騎馬女が左手に持っていた剣を坊主に投げつけ突き刺す。

ドシユツツ

間髪入れずに残った剣を顔面に突き刺し——変形した時に元々突き立てていた槍は消滅した——そのまま貫通・斬り捨ててる。

Aクラス 夏川俊平 英語 0点

さらに帰す刀でもう一体の敵——会長が対峙しているモヒカンを、瞬間移動と言ってもいい速度で接近して斬り捨てた。

Aクラス 常村勇作 英語 0点

「…へ？」

「は…??」

……

唐突に起きた出来事にリング上だけじゃなく客席、いや会場中の人間が口を噤む。

『……はっ、しょっ、勝者！生徒会チーム！』

いち早く正気に戻った立会人の教師がマイク越しに大声で勝ち名乗りを上げる。

——なんだよ今の——

——変身だ！変身した！——

——召喚獣って凄いなあ——

——日本の技術力はバケモノか——

徐々に客席も騒がしくなってきた。

面倒事になる前にさっさと立ち去るとしよう。

会長にサシでやろうとか言っというて結局俺が最後に搔っさう形になっちゃったな……あの戦乙女姿になってから操縦不能になったから仕方ないけど、嘘ついたみたいで後味悪いぜ。

……どうやって八百長の説得するか……

☆

★

☆

~~~~~

ざわざわと興奮冷め止まぬ客席。

ほぼ全てが人で埋まっている満席状態の中、一ヶ所だけ空白地帯があった。

その中心部に腰掛ける二人の男女。神月学園生徒会長の桐城美鶴とその父、桐城武治が先ほどの試合について話し合っている。

「……今のは完全にペルソナだったな」

「ええ……それも汐見・有里・鳴上が見せてくれたヴァルキリーと呼ばれ

る個体そのままでした」

「うむ……美鶴、本当に瀬能は影時間やペルソナ対しての適性はないのかな？」

「存在すら知らない筈です……しかし、」

「常人には不可能な行いも彼ならば出来てしまえば、か？」

「っ……勉強以外ですけど……」

「ははっ、少し話をして見たが確かにそんな感じだったな」

「笑い事ではないのですが……」

「先程の召喚獣の変化はペルソナの転生を見ているようだった。適性もなしにペルソナ能力に目覚めたのかもしれない」

「それはありえない……とも言い切れないですね……以前と違い今は黄昏の羽根を使っているデバイスを装着していますから」

「うむ。……早急に手を打ちたいが、急ぎすぎて良からぬ事を企む奴らに気付かれたくはない。昨晚の二の舞になるからな」

「しばらくは静観すると？」

「学園祭期間中は様子を見て、遠くからの監視に留める。デバイスのデータの解析も終わってはいないからな」

「……」

「心配か？」

「ええ……何かトラブルに首を突っ込んでいくのではないかと」

「巻き込まれるじゃなく首を突っ込むか、あり得そうだな」

「なるべく刺激しないようお願いします」

「分かっている。……監視に気付いて攻撃しなければいいんだが……」

「……（これが"フラグ"というやつだろうか……）」

55時間目 召喚大会⑩

くナツルSideく

『さあ、長かった召喚大会もとうとう決勝戦!!数多くのペアの中から勝ち上がってきたのはなんと!二年生の最下級であるFクラスの二人です!!』

昨日今日と何度も足を運んだ特設ステージ。

最後の試合でテンションが上がっているのか、マイクを片手に熱弁する立会いの教師。

自分に酔ってるように見えるのは気のせいだと思おう。

『対するは文月学園生徒会チーム!副会長である瀬能君もFクラスです、これはFクラスが最下級という認識を改める必要があるかもしれない!』

呼ばれてリングの中央へ足を進める。

先に来ていた吉井と坂本が満足げな顔をしていたので、ニヤつと口角を上げて見つめ返す。

「ようお二人さん。待たせか?」

「いや?今来たところだよ」

坂本が軽口に軽口で返してくる。

余裕しゃくしゃくな感じだ。学園長バアさんとの契約はまだ達成していない筈なんだけどな。

「約束通りに決勝まで来てやったぞ」

「ああ、お前ならやると思ってたよ」

「会長さんもいるからねっ!」

吉井くん、あなたもいつも一言多いのよ。

「そういえばその会長…三郷はどうした?」

坂本がチラチラと俺と俺が出てきたゲート先を見てくる。

教師の方も同じ気持ちのようで、観客に一方的な話を送りながら、視線を客席に向けながらも時折俺に「どうしたのか?」と目で語りかけてくる。

こっちは無視しよう。

「どう説得してもSクラス最高峰の会長がお前らに負けるのは無理あるから、ちよつと席を外してもらった」

本当なら俺もバックれたかったんだけど、流石に大会の締めが不戦勝・不戦敗だとバツシング酷そうなので仕方なくやってきました。

ああ、俺ってばなんて真面目。

「…ちなみにどんな感じで？」

「ちよつとスーパーで飴買ってきてって」

「パシリじゃねーか！」

ハハッ、何をおっしゃる坂本さん。僕は人にパシリとかさせたことないよ？

みんないい人だから自分から行ってくれるのさっ。

『まだ少し時間はありますが、このまま三郷さんが来なかった場合生徒会チームは瀬能君のみで戦うことになります』

余談だが学園から一番近いスーパーまで歩いて片道三十分はかかる。そして頼んだのは準決勝終わってすぐ。今頃どの飴買うか悩んでいる頃かなあ。

『……決勝戦開始の時間です。残念ですが三郷さん是不参加ということで、規定通り一人で戦ってもらうことになりましたが…瀬能君、よろしいですか？』

立会いの教師が時計を見て、確認を取ってくる。

この大会のルールでは対戦者二人を倒して勝利が決まる。だから一人でやっても問題はない。

しかし俺は観察処分者。召喚獣がダメージを受ければ何割か還つ

てくる。それを考慮してのことだろう。めっちゃ棄権したい。

でもー、それしたらー、八百屋疑惑とか向けらるだろう。いやするんだけどね。

Fクラスがただのバカの集まりじゃないってことは、こうして勝ち上がったことで証明できたと言っつていいと思うんだが…疑惑の目を向けられたら姫路の親とか納得しないかもしれない。

何よりここでギブアップしたら会長や美鶴先輩に折檻受ける。拷問で自白を強要される。あの二人は絶対やる。

「やります。たとえ一人でも」

「そういえば今回美鶴先輩いないみたいだけど、何かあったのかな。」

☆

★

☆

『それでは、始めてくださいっ!』

教師の掛け声とともに召喚フィールドが展開される。

それを確認し、俺を含む三人が身構えた。

さてどうするかな。最終的に負けるとはいえそれなりに接戦とか演じる必要があるだろう。

でも俺演技とか……がつっぴり指導された上で合格点貰ったことはあるが、今は苦手ということにおいて、(意味不明)

とりあえず相手を倒す気でやるか。

「二人いるから一人倒しても大丈夫かな…」

「ちよつと!?!今なんか不穏な台詞聞こえたんだけど!!」

いかん、口に出ってたか。

「な…ナツル…もしかしてまだあのこと根に持ってるの……?」

「あ?あのこと?」

「学園祭の出し物決めた日にやった野球できみにデッドボール当てた

こと…」

……………

「そーいやそんなこともあったな」

「忘れてたの!？」

最近色々あってさっぱりと。

「思い出したら腹立ってきた」

「馬鹿野郎明久!なんで余計なこと言うんだよ!」

「だっ、だつて!」

そーいやあの日、吉井には折檻したが坂本はやってなかったな。

「坂本はあとでやるとして、まずは吉井を●^ビすでしょう」

「なんで!？」

乗り。

「幸い今回の科目の日本史は俺の得意分野だ!高火力をお見舞いしてやる!」

「なっ」

「うえっ?!」

俺の台詞を聞いて坂本・吉井二人の顔色が変わる。

今まで披露する機会がまったくなかったから驚くのも無理はない。

……それにしてもちよつと驚きすぎじゃない?

ちなみに最大火力は音楽。

「いくぞっ、試獣^{サモ}召喚!!」

掛け声と共に浮かび上がる魔法陣。そしてそこから出現するのは
雨合羽みたいなのを着込み、包丁・ランタンを装備した小柄な存在。
が、三体。

トンベリーズっ!

「つてうええええなんで三体!？」

一人一体でしよ召喚獣つて!？」

今さら人型が呼び出せるとは思っちゃいなかったがこれは予想外だ、なんでトリオ組んでんの!?!俺の中に知らない俺でもいんの?白でも黒でもない世界でパンダ先輩方式?!

「ナツル:お前実は三人いるのか?」

「なに行ってるんのお前も」

坂本もパニックに陥っているようだ。

俺が言うのもなんだけど、俺が三人とか悪夢でしかねーよ。誰得?

呂布ちゃん得?

脱線し過ぎた。本題に戻ろう。

「いくぞナツルッ!」

「えっ!?!いやちよつ、確かに本題はそれだけど!」展開急すぎない!?!
なし崩し的に戦闘が始まり、坂本と吉井の召喚獣が突っ込んでくる。

いつの間に召喚した。

Fクラス 瀬能ナツル

日本史 274点

VS

Fクラス 坂本雄二

日本史 219点

&

Fクラス 吉井明久

日本史 165点

しかも何気に点数高いし。なんで?

「とつ、とりあえず応戦おっ!?!」

動かそうとしたらトンベリの一体が包丁で切り掛かってきた。俺に。

なぜっ!?!

「つておおい!!どこ行くんだお前!？」

残った二体のうちの片方は指示も出してないのにとことこと明後日の方向へと歩いてく。

勝手に動くのはこの際置いとくとして、びつくりするほどのろい。未熟児のハイハイの方がまだ早いレベルだ。

そのくせ武器を振るうハンドスピードは異様に早い。なにこのアンバランスな召喚獣。

「オラアツ!」

「くウツ!」

容赦のかけらもない坂本の一撃が、立ち尽くす最後の一体に襲いかかる。

とつさに左手のカンテラを突き出させると、ガキツ!と鋭い音がした。

よかった、こいつは動かせる。

「そう簡単に俺はやれねえぞ坂もおおおっ!!?」

またもトンベリが逆手に持った包丁で俺を刺しにきた。

しかも今度は飛び上がってからの脇腹狙い。

なぜだ!?!なぜお前は必要に本体を攻撃してくる!?!

攻撃してくるトンベリ——面倒だ。コイツを1号として、無秩序に歩き回るのを2号。操作可能なのを3号とする——に素早く近づいて羽交い締めを抱き抱える。

「暴れるなこら!」

1号が腕から抜け出そうとジタバタと体を揺すり——隙あらば包丁で俺を刺そうとしてくる。

危ない!怖い!力強い!さらにフィードバックで捕まれている感覚もやってくるから試合に集中できん!

「食らえナツル、日ごろのうらみっ!」

その様子をチャンスと見て、吉井が寝ぼけたことを口走りながら呑気に散歩している2号目がけ、木刀を振り上げて背後から切り掛かる。微塵も躊躇が感じられねえ。

「凶に乗んなカス!!」

「ぎよああああっ!!」

とつさに1号を吉井の召喚獣に投げつける。と同時に近くにいた3号の丸い頭を掴んでスローイン。

すると2号が突然振り返り、包丁を天高く振り上げ他の二体と同時に吉井に斬りかかる。

トリプルソード!?

「頭があつ、背中が!!」

Fクラス 吉井明久

日本史 18点

三本の刃が綺麗に決まり、俺と同じくダメージのフィードバックを受けるために痛みでのたうち回る吉井。

地面を転がる馬鹿はとりあえず放置しよう。瀕死だし。

問題は――

「オラッ!」

「げほッ!」

いつの間にか2号の近くに移動していた坂本（の召喚獣）が、メリケン付き拳を使つて勢いよくボディブロウ。

お：おんなじだ……：ナナハン食らった時と、おんなじだ……：……!

これならイケるぜ!!

いやいけねーよ。めっちゃ痛いわ。

「少しは加減しろよオマエ……!」

「そんなのしたらいつまでも終わらんだろうが」

しれつと言いつつ切りやがった。自分の事じゃないからって……

坂本の召喚獣の操作技術はかなり下手だ。さっきの坊主先輩に比べものにならないくらい拙い。

しかしこつちは足が遅く、2/3さんぶんのが言う事を聞かない。

今も関係ない虚空をぼーっと見つめる2号にドカドカと無遠慮に拳を打ち付けられて、3号で必死に護ってる状況だ。

せめて一体ならまだ楽なのに：今回ハンデ多くね？

「オラオラオラ！どうしたナツル、お前の実力はそんなもんか!!」

「坂本キサマア!!」

すごくいい笑顔かおで殴り続けやがって!!相当調子に乗ってんな。

逆の立場なら間違いなく俺もそうするし、負けなきやいけないってのは理解してるんだが：腹が立つのも事実だ。

なので反撃する。

「オラアツツ!!」

「何っ!？」

相手の右ストレートに合わせて3号のランタンを振るい、パリの要領で攻撃を弾き返す。

ヒヤッハー、敵一体、大きく体勢を崩したぜ!!ワンモアチャンス!

「テメーは俺を怒らせたワ」ーヲ!!」

突然鋭い痛みが瀬能隊員の足を襲う!

反射的に視線を下げるとそこには、両手で俺の右足の甲に包丁を突き立てる謎のモンスターが!

でたー！ー！ー！ツツ、トンベリだあ!!

ゾツとしたわ。

実際にゲームで襲われたキャラクターはこんな気持ちなんだろうか。本気でビビっただろうが。

坂本に集中しすぎて存在忘れてたよ。

「おのれはいったい何がしたいんじやあ何がツ!!」

ごく普通の会話の途中なのに容赦なくボディブロー。鬼か。

その攻撃に合わせるようにトンベリ1号が足に刺さっている包丁ヘランタンを叩きつけた。

悪魔か。

つーかマジなんなのコイツ。なんで執拗に本体を攻撃するの？バグ？混乱表記ないけど混乱してるバグ？最悪かよ。

『それまで！勝者Fクラス：あ、坂本くん・吉井くんペア！』

Fクラス 瀬能ナツル

日本史 0点

VS

Fクラス 坂本雄二

日本史 219点

&

Fクラス 吉井明久

日本史 18点

ああもう、なんかぐだぐだのまま終っちゃたし。まともに戦ってないのに。

言いたいこと沢山あるけど、直訴して「じゃあ仕切りを」とかいう流れになったら色んな意味で嫌だ。せつかく悪夢のような試合が終わったのにやり直しか無理だから。精神的にも肉体的にも。

頬と腹と右足がすっげー痛い。特に足の甲がとんでもなく痛い。レベルが違う。(穴とか空いてないよね?)

ほんっとマジで最悪。会長まで騙したのに。

………本当になんで俺、こんな目にあってるんだろう………クラスメイトのために色々協力してやった結果がこれ？

たまに仏心見せたと思ったらこれだよ。世の中クソだな。

「この貸しは高いぞ坂本…」

「明久に言え」

それだけじゃ足んねーよ馬鹿。

56時間目 白銀体験

「くっそひどい目にあった……」

召喚大会も終わり、〃敗者〃として特設ステージをあとにする。すぐに去ったから今頃坂本たちは受賞式の最中だろう。：腹立つのはなんでかな？

「い”っ、つう……!!」

後ろのことに気を取られていたせいで歩みに力が入り、右足に激痛が走る。歩いてるのに走るってこれなんぞや。

召喚獣トンペリに刺された足の甲は、傷こそなかったがダメージは残った。

観察処分者で物とかに物理干渉できるのに無傷なのはおかしいと思うが、多分あの形態が持つ特殊能力なんだろう。出血がないのは喜ばしいことなので深く追求しないことにする。

ただ歩くのにむちゃくちゃ苦勞する。松葉杖でも使おうか。

「：保健室にあるかな……」

あつても貸してもらえない気がする。なんとなく。

昨日頭の怪我見てもらった時もなんか、よく分からない言葉遣いで遠回りな台詞で関係のない話を長々と聞かされ、挙句にはかさぶたで傷が塞がっているをむりやり開かれて消毒液ぶっ掛けられるというとんでも治療をさせられた。

あの銀髪金眼のお姉さんホントに保健教諭か？傷作る保健医とか聞いたことねーぞ。

………なんか、一気に不安になってきた。

「これからはなるべく保健室の世話にならないようにせんとな」
できれば近づくのもよそう。

とりあえず激痛がひどいからどっかで休むか。生徒会の業務？
黙つてりやバレへんバレへん。

つか散々こき使われてんだからこれぐらいいいだろ。

「瀬能!」君!

「ごめんなさい!」

強い口調で名前を呼ばれて条件反射で出た台詞である。

「…どうして謝ったんだお前は」

「え?いえ…あの…」

通路の曲がり角でいきなり顔合わせちゃったからつい…

よりよってなんでこのタイミングで会長と美鶴先輩の二人が登場するんだ。

「おおかたどうやってこの後の仕事をサボるか考えてたんでしよう」

「そんなこと、ないよ?」

エスパーかこいつは。

いやでも…ほらっあれだ、俺が考えてたのはサボってからの時間の過ごしかたであってサボる口実を考えてた訳ではっ。

いかん。美鶴先輩がどこからともなく処刑銃を取り出した。弁明の機会も与えんってか?

「ペンテレシア! (パキインツ)」

「ヒッ!!」

突然の強行に思わず身を縮めて左腕でカバーする。無意味だけど、反射的に。

……?おかしいな。いつもならここでとつくに氷づけになっているのになんともない。不発か?

「瀬能…見えてないのか?」

「??」

見えてないってなに?

「何も…感じていないのか?」

「何を?」

こちらの疑問には答えずに、美鶴先輩は思考の海に沈み始める。

投げっぱなしやめて?見えてないとか感じてないってなんなんだ。スタンドでも出してるのかこの赤毛くるんくるん。

つーかなぜここに、もつと言えなぜ会長と一緒に現れるんだ。
「美鶴先輩とはスーパードからの帰りに出会って、学園まで車で送ってもらったのよ」

「ああ、そう」だからこんなに早いのか。

聞けば先輩は姿が見えない会長を探して外に探しに出てたらしい。通りでさっきの試合客席にいなかった訳だ。

どうやって学外に会長が出てること知ったんだ？

「三郷に聞いたが買い出しの理由はお前に飴を頼まれたからだそうだな。相当焦っていたが…なぜだ？」

「さあ」

ブルーデイなんじゃない？（※↑最低なクス）

「…あなたが言ったんでしよう。飴が切れて禁断症状がつて」

「あれ信じたの？」

ある訳ねーだろ飴の禁断症状なんて。中毒患者か。

どっかの主人公じゃあるまいし。

「……泡まで吹いてたけど」

「お前…」

「演技に自信あり」

リアルシャドーとかで自力で血を流し、演技指導した奴をドン引きさせたからね。

「……………」

「……………」

クール系美少女二人が冷たい眼差しを向けてくる。

やだ…そんな目で睨まれちゃったら…：新しい扉開いちゃうつ。

「きもい」

「きもって会長!?!」

「ああキモいな」

美鶴先輩まで!!

あんたらそんなこと言うキャラじゃないはずでしょ、いったいなにがあったの!?!

「そんなことより瀬能君、あなたつまり嘘をついて私を騙したってことよね？」

「気のせいかな薄らと」
「氣」を立ち昇らせながらキツめな口調で尋ねてくる。

「やっだもー会長さんったらー、そんないつもの表情で睨んで…いつも通りなのにまるで俺がいつも以上に酷いことしたみたいじゃないですか。」

「はははーそんなハハツもう、なにかあつたらすぐ万年筆チラつかせるのやめない？」

「罰として買ってきた飴を今すぐ食べてもらおうわ」

「は？そんなんでいいの？」

「ただし、商品は見ないでね」

なにその言い草。超気になる。

無言の圧力を発せられながら突き出されるスーパーの袋に入った四角いブツ。

「いやあの、それぱつと見広辞苑くらいのサイズがあるんですけど。受け取ってみればずっしりと重い。本当に中身飴なんだろうな。いくつ入ってるんだ。」

「早く食べなさい」

「はいはい…」

形状はサク○式ドロップと同じだな。上の丸蓋を開いて缶を傾げ中身を取り出す…

「この飴でかくなーい？ゴルフボールくらいあるんですけど。普通はボタンサイズだろ？」

色は…白？なんか宝石みたいだな…ドロップか？

とりあえずパクリ。

「美味しい？」

「ん？んん…んん…パイシー!!」

ボツ!!

視界と口の中に衝撃が駆け抜け、意識がホワイトアウトした。痛みはなく、最近の飴玉は刺激的すぎるんだなあ…などと、呑気なことが頭を過ぎる。

ちなみに味はハツカに近かったです。多分。

☆

★

☆

く美鶴Sideく

突如口と鼻と目から閃光を吹き出して倒れた一つ年下の男を無言で見つめる。

その際に手からこぼれ落ちた缶の容器が、床に落ちた衝撃で袋から飛び出した。

"ジエムドロップ"

"様々な属性の付いたジエムで戦闘をサポートします!"

"誤って食べてしまったても大丈夫! ※ただし当社は一切の責任を負いません。自己責任でお願いします"

無責任すぎる文言がパッケージに並んでいる。

"こんなのを口に入れさせてよかったのだろうか…"

三郷が購入したときからずっと見ていてなんだが、今更ながら罪悪感が芽生える。

"大丈夫ですよ、瀬能君ですし"

"凄い信頼だな。顔中の穴から白い光を放出していたが"

"お菓子コーナーにあった物ですよ?"

"それが一番信じられん"なぜ戦闘をサポートするものがスーパーのお菓子コーナーにあるんだ?

"三郷、なぜわざわざ罰を受けさせたんだ? 瀬能の行動には理由があ

ると説明しただろう」

学園までの移動中の車内で、彼が現在巻き込まれている事件など、私が知っている限りを話した。

召喚大会での景品に欠陥があること。

その景品を利用して学園長の権威を失墜させようとする動きがあること。

瀬能のクラスメイトである姫路瑞樹が転校の危機にあることも、三郷には話してある。

姫路の件に関しては私もついさつき知ったがな。なぜか携帯に留守電メッセージとして瀬能から届いていた。

本人は気づいていないみたいだったが…デバイスが誤作動を起こしたのか？

「その説明を本人がしないからです。私はパートナーなんですよ？相談くらい、してくれたっていいじゃないですか」

「三郷…」

「あとは単純に騙されたことに腹が立って」

「三郷……………」

なぜ話にオチをつけたがるんだ。

彼女はこんな人間だったのだろうか？一年生の時は…もつといえつつい数ヶ月前までは冗談もろくに言わないタイプだった筈だが。

……私も、いつかはこうなるのだろうか。悩みどころだな…

普通なら恐怖を覚えるんだろうが、変人奇人が多く通うこの学園では普通である方が苦痛なことでもある。

違和感なく性格が改変されるなら…とも思わなくもない。本当に悩ましいな。

「そういえば桐条先輩はなんでここまで一緒について来てくれたんですか？」

「うん……うんっ？あつ、ああ……」

深く考えこんでいたら三郷から話しかけられてしまった。

えっと、なぜついてきたかだな……

「瀬能にちよつと用があったんだ」

「そうなんですか？それじゃ起こしましょうか」

やめてやれ。その突然取り出した注射器を何に使う気かは知らないがそつとしておいてやれ。

「別にそこまで急を要する事じゃあない、あとでメールでも伝えることにする」

最低限の確認はできた。見えるどころか、顔に触れられても反応は無し。やはりペルソナ使いになった訳ではないようだったな。

元々彼の適性はゼロ。そう簡単に覚醒できたらもつとたくさん使いが現れている筈だ。

……しかしそうなると召喚大会の準決勝での現象はいつたい……

デバイスに搭載されている黄昏の羽根の影響なのか召喚システムの不具合か、あるいは瀬能自身の特異性なのか……最後のが一番可能性が高いと思えるのは普段の行いのせいだな。

念のため検査用に血液を採取しておこう。対価は……明日一日完全休養ということだ。

「それでは先輩、見回りなどがありますので私はこれで」

「ああ、分かった」

ちようど三郷も移動するようだ。

今のうちに……終わったらどこか空き教室で寝かせておこう。

私も暇じゃないからな。

「……そういえばきみたちが準決勝で戦った夏川と常村の姿がどこにもないんだが、何か知らないか？」

「あの二人ですか？さあ……試合終了時に別れてそれっきりですので……」

「そうか……」

試合に負けて大人しくリングを去った二人組。

彼らの性格を考えたら……とくに夏川は異議を申し立てて騒ぐはずなのに、何もなかった。

しかしあの表情。忌々しげに瀬能を睨んでいたから何か仕掛けてくると思っていたのだが……瀬能の様子はいつもと変わらない。

取り越し苦労だったか？

57時間目 黄金三角

.....

.....

...

↳ナツルSide↳

召喚大会準決勝終了直後の特設リングに続く渡り廊下。

熱狂冷めやまぬ会場を会長と二人で並んであとにする。

「.....」

「.....」

お互いに一言も発さずに歩き続ける。
きまずい。

目線も向けないけどさっきの試合で相手チームとの会話していた内容について聞きたいのは明らかだ。ここまで質問してこなかったのは周りの目があったからこそだろう。

無人になった今、すぐにでも話しかけてくるだろう。さてどうしよう。

別に事情を全て話してしまってもいいんだろうよ。いいんだろうけどさ...

会長、クラスメイト姫路が転校させられたり、学園存亡の危機が迫ってるんだから次の試合わざと負けて、Fクラスの二人を優勝させてください
いつ

"イエス"の返事をもらえる自信がない。
ていうかそもそも、この人の協力いるか？

試合開始直後に点数が表示される。学年一位の学力の持ち主だ。どの教科でも千点近いだろう。

そんな絶対強者がザコ二人に負けたら不自然でしようがない。姫路の父親も納得しないだろう。

……いつそ次の試合退場してもらうかな。

しかし万が一決勝に坂本たちが上がってこなかった場合俺だけで戦う羽目に…

ム”ー

『Fクラス2名、召喚大会決勝進出』

大丈夫みたいです。

じゃあ…うん。

「瀬能君、さっきの試合中でのことなんだけど——」

「あ」

突如、全身がびくんと一度大きく震えて、そのまま動きが止まる。

「あ、あ、ああ、あああっ」

「瀬能君？」

会長が問い掛けるように名前を呼ぶが、ろくに返事を返す余裕もなく、ガクガクと身体が小刻みに震える。

それを押さえるよう、抱きしめるように身体に腕を巻きつける。

「ああああやばいやばいやばいやばいやバイ、あ…飴が…飴が切れたっ」

「……………はっ」

なんとも言えない声が会長から漏れる。

それを意に介さず、力無い足取りでよろよろと廊下の壁に近づいて、そのまま体を押し付け倒れ込む。

全身の震えは大きくなり、もはや痙攣と言ってもいいほどで壁を伝って建物も揺らしそうな勢いだ。

「あめ、あめほしい、あめがっ、あめあめあめあめあめめめあめめめ

め」

カニのように口から泡をこぼしながら、おぼつかない手でポケットを探る。

悪戦苦闘しながら取り出したのは掌サイズの四角形の缶。

しかし俺は知っている。中身は空だと。

さつき吉井たちと会話してる時に全部食べてしまった。

それでも、取らずにはいられなかった。あめがひつようだったから

「…私はいつまでその寸劇を見てればいいのかしら？」

寸劇いうのヤメテ。

「ようは飴が無くなったから買って来てほしいんでしょ。それぐらい行ってあげるわよ、銘柄はそれと同じでいい？」

会長は呆れた様子でため息を吐いて、足早に去っていった。

…なんだろう。浅い思惑を見透かされたあげく察せられた感がハ
ンパない…いやそもそも本当に買い物に行ったのか？この飴この辺
のコンビニじや売ってねえぞ。

まあいいや。ひとまず置いておこう。それより…

「オイそこで隠れてる奴、バレてるからとつとと出てこい」

何事もなかったかのように（実際問題ないんだけど）立ち上がり、口
を拭って近くの茂みに向かって話しかける。

ここの渡り廊下は、ドラマとかでよく見る体育館と本校舎を結んで
いるタイプ——土の地面がある外へ直で行き来できる構造——なの
で、死角は多い。

まさに待ち伏せにもってこいのポイントだ。まるで狙ったかのよ
うにな。

しかしただのハツタリだと思ってるのか、声をかけても動く気配
はない。

「はあ……」めんどくせえ。

ゴッ!!

バゴンツ！「うぐえツ!!」

「夏川!？」

持っていた飴の空き缶をノーモーションで投げつけられ、茂みから二人の男の声が返ってきた。

どっかで聞いたような声だ。

そして転がるように飛び出してきたのも、またどっかでみたような姿の二人組だった。

「これはこれは負先輩がた、こんなところでいったい何を？」

「てめえふざげやがって！」

坊主頭の方が頭を押さえて立ち上がる。

投げた缶はコイツの額に当たったようだ。ちよつと腫れてる？

「先輩に対する敬意つてのが感じられねえな」

モヒカンも坊主の後ろについて歩きだす。

「敬意？敬意つてのは尊敬を集められる奴のところに勝手に払われるもんですよ」美鶴先輩みたいに。

「アンタら誰かに尊敬されたこと、ある？」

「てんめえ…!!」

「ずいぶん調子こいてんじゃねーか…!」

二人ともに青筋を浮かべて睨んでくる。

どうやら禁句だったようだ。尊敬されたことねーなコイツら。

「で？もう一回聞けど何用ですかな？」大体予想つくけど。

「テメーのせいでこっちの計画がパアになっちまったからなあ、その落とし前をつけに来たんだよ」

坊主が嫌らしい笑みを浮かべながら、ブレザーの内ポケットからなにかを取り出す。

機械的で黒っぽいあの形状は…

「スタンガンか」

「当たり前だ」

モヒカンの方もブレザーから何かを取り出し、軽く振り上げてから勢いよく振り下ろす。

するとジャキンツ！という音と共に、杖みたいな長さの鉄の棒が出

現した。

「こっちは警棒か。」

「武器があつて、二人がかりだったら俺に勝てるっても？」

「舐められたもんだな。」

「戦力だけが勝敗の決め手じゃねーんだぜ？」

ニヤニヤと笑いながらモヒカンが警棒を持つ方とは逆の手でスマホを操作する。

「これからお前をボコボコにする。もちろん反撃するのは自由だ。その映像を素材に100%お前が悪い動画を作るがな」

「それをネットにばら撒きやあ大問題間違いなしってわけだ」

……………

「おおっと、逃げようなんて考えんなよ？その場合は他の奴が犠牲になるからな」

「吉井や坂本…いつそ女でもいいな。クラス委員とかよ」

恐怖を煽っているつもりか、スタンガンのスイッチを小刻みに入れたり切ったりを繰り返しながら坊主頭がゆつくりと近寄ってくる。

それを見ながらスマホを横にしてカメラのレンズ部分をこちらに向けるモヒカン。同時にかかってくるわけじゃないようだ。

攻め込み役と撮影役。役割分担はしっかり分かれているが、完全に一致している部分がある。

それは今から行う行為を心の底から楽しんでいるってことだ。俺をボコるか陥れるか、あるいはその両方を。

「先輩がたよう、こんなことわざ知ってるか？」

「ああ？なんだいきなり」

「命乞いか？土下座して今までのこと謝罪するなら考えてやってもいい」

「『悪銭身につかず』」

「不当な手段で得た金銭はすぐに無くなって残らないって意味だ」

「教頭の甘言に乗って楽に大学入ろうと思ってたんだらうけど、入学したところですぐに勉強についていけなくて辞める事になるだろうよ。実力が伴ってないもん」

「なっ、」

「つんだとテメエ!!」

「教頭もそれが分かっててお前らに声かけたんだらうな」

うだつが上がらないくせに高望みばかりする阿呆ども。

捨て駒に使うには持つてこいだ。

「カワイソーな先輩二人に最初で最後のチャンスをやろう。回れ右して二度と俺に関わるな。そうしたら今回のことは不問にしといてやる」

「……状況が分かってねえようだな……?」

モヒカン頭がそれまでのゲスい笑みを引つ込めて、怒りに染まった険しい表情を表に出す。

「いいのか? 流石にここまで行き過ぎた小細工をされたら、俺も手加減はできないぞ」

「どんなことができるかやって貰おうじゃねえか……!」

坊主の方も同じく、今にも人を殺しそうな顔で歩みを再開する。

両方とも止まる気はないようだ。

じゃあ、しょうがない。

「しいねえオラあ——つつ!!?」

「どうした夏かわ……なっ!?!」

坊主が『歩く』から『走る』に移行しようと足に力を込めた瞬間、辺りが急に黒く染まる。

しかしそれは布や壁で光を遮って作った暗闇ではなく、宇宙そのもののような“黒”の空間が広がっていた。

まあ俺がやったただけだね。

「漫画やゲームの技を再現するのが趣味なんすよ。現実では実現不可能なものなんて特に習得したくなる」

「なんだよこれ!!なんなんだよこれええっ!!」

話聞いてほしーな。

「でもさ、覚えたはいいけど使い道がないってのが結構多くてね。せつかくだから練習台になってもらうぜ」

「なっ、てめ、ふざけんな!!」

なんか言われたけど無視。きちんとチャンスはあげたよ？

それを蹴ったのはそっち。ケンカを売ったのもそっち。

ならもう、俺の好きにさせて貰う。

左手の掌を二人に向けた状態で胸の高さに持っていく、そこから斜め左下にスライド。

ある程度のところまで動かしたら、今度は地面と水平に右へ空中をなぞる。

最後に起点の場所へ指先を戻せば…指でなぞった軌跡が光の筋と なって残り、綺麗な三角形が形作られた。

「ダメー人形で何度か試しはしたけど、食らったらどうなるのかは俺自身分からん。消えたつきり一度も戻ってきてないから」

「は…?」

「オイそれどういう——」

「帰還できたら感想よろしく」

宙に浮かぶ三角形を押し出すと、怪音波のように幾重にも残像を描いて飛んでいく。

前に進むたびにその三角は大きくなっていき、やがて坊主とモヒカ ン二人共を簡単に飲み込む。

「ゴールデントライアングル」

「うわあっ!?!」

辛うじて普通に立っていた二人は、光が通過するとまるで落とし穴 に嵌ったかのように急降下する。

「うあ、うあああああああああ!!」

「ど、どこにつ、俺たちはどこに落ちていくんだああ—————」
「!？」

「さあな」 さつきも言ったが俺もどうなるのかは知らん。
だが、

「今までみたいな自分勝手は決してできないと思え」

「いやだたすけ」「こんなはずじゃ」

遠のく言葉を切り捨てるように技を解く。

すると数十秒前と変わらない学園の一角の光景が瞬時に戻る。

ただ一つ、俺が対峙していた人間がいないことを除いて。

「おっと、」

何事もなく立ち去ろうとしたが、近くにモヒカンのスマホが落ちて
いるのに気がついた。

ダメだなあ、高校生にもなって落し物なんて…仕方ない、きちんと
持ち主のところへ送っておいてやろう。

再び光の三角形を飛ばし、スマホを異次元へと送る。

…果たして時間差で異次元に飛ばしたものが同じところにたどり
着くのだろうか？

「まあ、いいや」

今度こそ足を進めてその場を立ち去る。

………そういえば今回のこれって ワンキル キル キル にカウントしているの
か？

58時間目 悪の敵

…

……

……………

「……………はっ、」

突然目が覚めて意識が覚醒する。

つて。え、俺寝てた？なんで？

自分の状況が理解できていないが、とりあえず寝っ転がっていた床から上半身を起こす。

ここは…どのクラス・部活も使っていない空き教室か。

なんでこんなところで、しかも床の上で寝てんだ俺。…謎だ。

「まあいいか」

全身に力を込めて立ち上がる。固い地面で眠ってたからあちこちバキバキだ。

しかもフラフラと立ちくらみもする。貧血か？チーズケーキや飴玉ぐらいしか口にしてねえからな。糖分取りすぎ？

それにしても暗いな、今何時だ？…もう放課後じゃねーか。がつつり寝すぎだよ。

一日目もそうだけど二日目もろくに学園祭を体験出来なかった。こうやって少しずつ青春は色あせていくんだな。

「……………帰るか」

生徒会もクラスの出し物も、もう今日は終わってるだろう。家に帰って寝直そう。

そう考えて教室のドアから…と見せかけて窓から直接外に出る。

こつちの方が早い。

「なんたることだ!!」

とつさに身を屈めて姿を隠す。

びつくりしたあ…なんだいきなり。

頭上の窓から、相手にバレないように様子を伺うと、スーツを着た

初老の男が肩を怒らせて足早に歩いているのが見える。

アレは…

「夏川と常村はどこに行った！なぜ電話にも出ない!?雇った他の連中もほとんど使いものにならなくなったし計画が水の泡だ!!」

怒鳴りながら手に持った携帯電話を指で操作して、すぐに耳に当てる。

そしてしばらくしてから離してまた指で操作し、耳に…

教頭の竹原センセはかなりご立腹のようだ。

「くそっ！どいつもこいつも、なぜ思うようにことが運ばないんだ！」
そう言つて立ち止まり、スーツの内ポケットに携帯を突っ込んで、替わりにタバコとライターを取り出してその場で吸い始める。

…よりによって俺が隠れているすぐ側で。校舎の壁一枚挟んで目と鼻の先つて狙つてんのかコイツ。

人の気配は他にはなく、相手は油断しきっている。

学園長の立場からすればここで無力化させといた方がいいんだろうが、それをやる義理はない。

協力関係結んでる訳でもないからな。立ち去るまで大人しくしとこう。

「まったく…！白銀の腕輪の欠陥を利用して学園長の失脚を考えていたのに、肝心の腕輪は手に入らない。第二案として問題児の瀬能に暴行事件を起こさせようとしたのに、こちらもうまくいかなかった」

……………あ？

今なんつった？

「半月ほど前からこつそりと噂を流したり暴れることしかできない低脳な連中をけしかけたりと色々やってきたのに…すべて徒労に終わるとは。Fクラスの単細胞じゃなかったのか？」

誰もいないのをいいことに（本当は一人いる）竹原は次々に自分がしてきたことをグチとともに暴露していく。

バアさんの失脚を皮切りに俺に裁判沙汰レベルの問題を起こさせようとしていたこと、神月学園の周囲にある他の学校と取り引きしていたこと、

その内容は学園に入る生徒を減らし見返りに金品を報酬として受け取ること、昨日の昼に襲いかかってきた奴らは他校から集めたこと、

学園の運営資金を一部ちよろまかしていること、それでマンションを買ったり隠れて豪遊していること、バレそうになったから今回の計画を実行したこと。

見た目は真面目で大人しげだがそれに反してゴミな内面を持つてるなコイツ。腹立ってきたわ。

俺は決して正義の味方ではない。ないが…こういう小悪党見てると自然と拳に力が入って身体が強張ってくる。

気づいたら手の中にウォーズマスクが握られていた。迷うことなくそれを装着して、音もなく立ち上がる。

「ふー…さて、そろそろ行くか。不正の証拠を処分しなくては」「いいや、お前はもうどこにも行けやしない。地獄以外にはな！？」

後ろから両肩を掴み、そのまま壁から離すように前に押し出す。

「なっなんだ、誰だ!？」

「二つ人の世生き血をすすり」

ある程度の開けた場所に来ると腕だけで相手を持ち上げ、上空へ放り投げる。

「うわっ、うわわっ!!」

「二つ不埒な悪行三昧」

飛び上がったのを追いかけるように俺もジャンプして、身体が横になるように調整して弱く蹴り、さらに上昇。

「げふっ、やめいふっ、」

「三つ醜いこの世の闇を」

背面に周り、竹原の両腕を逆向きにねじり上げて、下半身を相手の脇の下から前側に回す。

そして右足後ろ腿と脛を使って首を、左足の膝関節でもって相手の左足を固定して締め上げる。

「駆逐してくれるーアロガント・スパーク!!」

「ゲボヤアツ!!」

汚い悲鳴とともにじじいの口から血が吐き出され、同時に強い音と光と熱が背中を叩く。

演出か？悪くない。

記念すべき一人目を刻むにはな！

素早く自分が上の背中合わせの体勢になり、両腕をひねり上げ両脚を決める。

落下を加速させるために全体重をさらに込めて——！

「死ねええー————（ズキツ）っ!!」

グツ…み、右足がっ…！

足の甲に走った激痛に気を取られてバランスが崩れ、勢いが落ちて普通（？）のアタル版マツルスパークの形になった。

さらには水平だった身体の状態が斜めに傾き、相手の左膝が最初に着地。

「うおおっ!!」

「がっ、」

おまけに衝撃で跳ねてクラッチが解け地面に投げ出される。

…完全に失敗だ。

前半部分は上手くいったんだが…後半はダメだな。やっぱ吉井に

協力してもらおうか。

うつ伏せの状態から土に手をついて、体を起こして立ち上がる。マスクも外れて素顔が丸出しだ。

右足は…踏み込むと痛むな。ちくしょう。

「で、コイツは」

力なく転がっている竹原の様子見る。どうやら気を失ってるようだ。

中途半端だったがアロガント・スパークを食らって全身の筋繊維はズタズタ。さらに左膝は完全に破壊されている。

見たところ闘いとは無縁な一般人そうだからなあ…ダメージは甚大そうだ。最悪酷い後遺症残るかも。

「ま、自業自得ってことで」

ほつといてもそのうち誰か通って介抱するだろう。手当ても救急車を呼ぶ義理も俺にはない。

ケンカは買う方が悪いんじゃない。売る方が悪いんだよ。

死に損ないから背を向け、落ちてたウォーズマスクを回収してその場から立ち去る。

今日はもう帰って休もう。晩飯はなににしよっかな。

59 時間目 学園の祭り、戦士たちの宴

〈ナツルSide〉

・清涼祭三日目。木造校舎内、中華喫茶『ヨーロッパ』第二店舗。

「第一店舗はどうしたんだ？」

確か三年生が使う校舎の一角だったはずだが。

「燃えた」

直江の身も蓋もない返答にずっとこけそうになった。

「昨日の夕方ごろ吉井と坂本が召喚大会の景品の使い心地を試すために打ち上げ花火の水平打ちをしてたら、誤って三年校舎に飛ばしたらしい」

「何やっとなだあいつら…?」

思わず片手で顔面を覆う。

もしかして昨日感じた音と光と熱はそれだったのか？あの二人俺より問題児じゃねーか。

『吉井と坂本はほんとバカだなあ』

『あいつらしいって言えばらしいけどな』

『罰として何週間か謹慎らしいぜ?』

慌ただしく開店の準備をしているクラスの連中も呆れている。

こうまでの大事件起こしたのにその程度の感想って、やっぱこいつらもどっかおかしいよな。

……いやちよつと待て、謹慎？校舎焼いたのに罰が謹慎？

ぬるすぎないか？普通は一発で退学どころか、警察が来てもおかしくないだろうに。それになんで何事もなかったように学園祭続けないの？後始末は？

ちよつと考えこんでたら直江がコソコソと近づいてくる。

とりあえず腹。パン。

ゴンツツ!!

「!?、くくくつ!!」

痛え!

「やるとは思ったけど本当にやったな…」

ため息をつきながら閉じていたブレザーのボタンを外す。

なんとこいつ、鉄板つきの腹巻を装着してやがった!

「念のため巻いてきたんだ。昨日あんな目にあつたからな」

「汚いぞスタッフ!!」

「誰がスタッフだ」

知ってたら「気」を込めて打つたのに!

「吉井と坂本の処罰が軽いのは理由があるんだ」

拳を押さえて蹲って俺の耳元に小声で話しかけてくる。

椎名さん、ちよつと興奮するのやめて?

「昨日ナツルの協力もあつて景品の白銀の腕輪を無事に手に入れる事ができたんだけど、その報告を竹原先生側の人間に盗聴されたそう
だ」

「…犯人を狙撃でもしたつてか」

「ちよつと惜しいな」

惜しいのかよ。花火以外にも遠くの奴を攻撃する手段はあると思うのは俺だけかな。

「正確には録音した内容——腕輪の欠陥について——を屋上の放送器具を使って暴露しようとしたから、中庭から花火で撃つて阻止したらしい。その途中西村先生に怒鳴られて校舎に誤射したとか」

西村つて誰だっけ?

……………ああ、鉄人か。

「学園の危機を救った見返りに処分を軽減？」

「それもあるんだろうけど：焼かれた中心部に丁度竹原先生が使つて教頭室があるから、そのガサ入力で忙しいんだろ。都合よく部屋の主が意識不明の重体で病院に行つてるし」

へーそーなんだー、なんでだろうねー。

「竹原先生の協力者が他にもいるかもしれないから早めに今回の件の証拠を押さえたいけど、相手の妨害が入って大ごとにされたくもないから」

「祭りを中止して何かあつたと思われないためにも続行してると」

「多分そんなところだろうさ」

2ーF^ちとしても設備向上の機会が増えるのはいいことだ、と言いながら直江は離れてブレザーを着直す。

どうでもいいけど俺昨日からずっと夏服なんだよな。俺もブレザー着ようかな。

そもそも持ってたっけ？

「そういう訳で出来れば手伝いの方をおねがひしたいんだけど…」

「悪いな、生徒会の仕事あるから」

結局昨日一日サボっちゃったからな。いくら召喚大会あつたらつて無断で放り投げたら美鶴先輩もカンカンだろう。

最終日くらい真面目にやらなきゃまた処刑されちゃう。

「人数少なくて大変だろうけどがんばってくれ」

「その辺は一応大丈夫だけど…大会で活躍した有名人がいた方が集客率がいいはずだから残念だなあ…」

初日に売り切るまで行つたんだからある程度で満足しろよ。

☆

★

☆

「せっかくやる気出したのに一日休みとか…」

人が行き交う校舎の廊下を適当に歩きさ迷う。

生徒会臨時テント（校舎燃えたから）に行つて美鶴先輩の指示を仰ごうと思つたら、即座に暇乞い^{いとまご}を出されたの巻。

メールしたとか言っただけで携帯電池切れてて分からなかった。流石に買い替えるか。

まあそれは置いて。

「暇になっちゃったな」

これからどうしよう。

クラスの方を手伝ってもいいんだが、休みを出された理由が慣れない仕事で疲れてるからリフレッシュしろって話だからな。働いたら本末転倒だ。

学園祭を楽しめばいいんだけど………友達いないからな、俺。楽しめる気がしない。

「あ、ナツルくん！」

「あん？」

名前を呼ばれたと思ったら、前方からとととと駆け寄ってくる、同じ学園の生徒を示す制服に身を包んだ少女が。

あれは…

「玲ちゃんか」

「うん！やー!!」

「やー！」

目の前で一旦止まり、両手を突き出してきたので、こちらもそれに合わせてハイタッチ。

「ひさしぶりだね！元気だった？」

「大丈夫だ…問題ない（c.v. 三木眞一郎）」

「きみは変わらないな。瀬能」

玲ちゃんが来た方向からまたしても制服姿の人間が一人近づいてくる。

「善くんもいたのか」

いやまあ当然か。

この子ら二人で一つみたいなどこあるから。

「どう、学園祭楽しんでる？」

何気なく尋ねたら玲ちゃん表情が曇る。

…なにかあったのか？

「売られている食べ物を買おうとしたのだが、玲がそのどれもに興味を持って一つも買えてないのだ」

今日二度目のずっこけそうになった瞬間。

「…もう全部買えば？」

「多すぎて私たちの所持金では全ては無理だ」

「ただだけあるんだよ欲しいの。」

まあただでさえうちの学校、クラスやら部やらの団体が他所より多いからな。一学生の小遣い程度じゃちよつと…な。

「すまない玲、私が不甲斐ないばかりに」

「そんな！善のせいじゃないよ！わたしがわがままばかりだから…！」

……………しょうがねえなあ……………

「はいはい。今日は俺が奢ってやるから責任の引つ張りあいはいは止めろ」不毛だから。

「…！ナツルくん、いいの!？」

「まー約束したしな」

我ながら後先考えないこと言ったもんだ。

「約束？」

「うん？あれ、違ったっけ？」

善くんが無表情ながらも怪訝な雰囲気ですぐ尋ね返してくる。

「おかしいな、確か祭りの屋台で好きなもん買ってやるとかなんとか言った気がするんだけど…」

「まあいいか。他の奴だったとしても、この二人に奢ることですら約束果たしたってことにしよう。」

「瀬能、本当にいいのか？玲はよく食べるぞ」

「よく食うって」

「いっても精々が俺の胸元まであるかないかの身長しかない女の子だろ？いくら食欲旺盛でもため込む量に限界が…」

などと樂觀視していたが、無言で見つめてくる善くんを見てると不安感が湧き上がってくる。

一体どれくらい食うんだろう。

しかーし、今の俺なら大丈夫!!

「ふ ふ ふ、ブラックカード〜(ダミ声)」

いつも通りイベントリから黒くてプラスチックのような光沢を放つキャッシュカードのような物を取り出す。

「なんだそれは」

「説明しよう、これは美鶴先輩が貸してくれた特別…ブリリアントなカードで、学園内の出店の支払いがタダになるのだ」正確には美鶴先輩へのツケになるんだけど。

「ホント!?すごいー!」

なんとということでしょう。先ほどまで暗かった少女の顔がみるみるうちに明るくなっていくではありませんか。ゲンキンな。

「きみのために渡された物を玲のために使っているのか?」

「ダメと言われてない事はやってもいい事だ」

スポーツの試合中、審判が見てないところで敵に肘や膝を入れる…いわゆるグレーゾーン。

あれやるのすっごい好き。やられるのはノーサンキューだけど。

体育の授業中は大概俺たちそんなことばっかしている。(そして鉄人に呆れて怒られる)

「それに頭のいい美鶴先輩のことだから、俺が誰かと一緒に学祭回るくらい分かってるだろう」

そう、間違つても一人でしか使わないだろうから大した負担にならないと思われるわけでは決してないはず。

「だから遠慮しなくていい、いやむしろ遠慮しちゃダメだ。先輩の好意に甘えようぜ?」

な?と優しい笑顔で肩に手を置けば、善くんが首を傾げる。

「そういうものなのか？」

「そういうもんなんだよ。というわけで行くぞ！二人とも！」

善くんと玲ちゃんの手をそれぞれ掴み、無理矢理引っ張る。

「おおっ、お・おー！」

「強引だな」

「はっはっは ははーっ！」

周りの目を気にせず高笑いしながら廊下を爆走する。

なんか俺幼児退行してない？こんなガキっぽいマネするキャラ
だったっけ。

ま、いつか。

余談だがこの日、桐条美鶴の個人資産の実に三分の一が消費され
た。

それによりしばらくの間、美鶴のナツルを見る目に殺意が宿ることを
はまだ誰も知らない…

60時間目 真の英雄は眼でコロす

善くん・玲ちゃんと共に、二年校舎を出て外へ行く。

カフェとかもあるけど基本的に建物内は展示やアトラクションしかない。学年棟は特に。

色々と食べ歩きしたいなら、正門通りだな。部活や同好会なんかの団体が屋台出してるから。

という訳で正門に向かいつつ、途中で買い物をする。具体的には

- ① 善くんが無言で店先に立ち続け、
- ② 玲ちゃんが片っ端から注文し、
- ③ 最後に俺が支払う。

なんだこのかまいたち。

「そういえば二人のクラスはどんな出し物やってんだ？」

屋台で買ったものの中で、気に入ったものをさらに追加で購入したのをイベントりに仕舞いながら、ふと気になって聞いてみる。

「むぐむぐ…ふあひいふいほーふあー！」

「なんて？」

玲ちゃんお願いだから食べながら喋るのやめて？

「私たちのクラスは貸し衣装屋をやっている。店名は『アナタ、不思議な国へ』」

「本の帯コメントみたいだな」誰の発案なんだ。

しかし貸し衣装屋か…たしか1―Bの企画だったな。見回りは順路外れてて行かなかったけど。

「普段は着られない服を着れるとなかなか評判がいいようだ」

「ナツルくんもお着替えしてみる？」

「遠慮しとく」

初日の大半を執事服で過ごしたからもうお腹いっぱいだよ。学生

は制服が一番さ。

取り留めない会話を続けながら歩き回り、正門前の通りに到着。そこは模擬店の呼び込みやら外部からの客の話し声やらで大いに賑わっていた。

つい数時間前にいつもと同じくこの道を通って登校したが、人がいるだけで全く違う場所に思えるな。

「すごい人集りだな」ひとだか

善くんが人波にさらわれそうになりそうな玲ちゃんの手を握りしめる。

「学園の玄関口だからな。ただでさえ外から次々と入ってくるのに店とか立ててるから渋滞が起きてやがる」

店の配置に問題あったんじゃないか？

道幅が広いつつつても限度があるからな。そこに屋台を置くのは…すぐに受け取ってその場を離れるんならともかく、そこまで要領よく客を捌いてる店は見たところそんなに多くはない。

しかも食い物だけじゃなくて射的や小物売ったりと、バザーやフリーマーケット紛いなことしてる奴もいるから余計に人の流れが滞って行き来がし辛くなってるやがる。

個人出店は禁止にすべきだと思っただったな…もしくはもうちよつと学園の奥にフリマスペースとか作って、そこでまとめいた方が管理もしやすく

「瀬能？どうした急に考えこんで」

「はっ!?!」

いかん、つい本気で対策練ってしまった。最終日で無意味なのに。つーか俺なんでこんなマジになっただろう。謎だ。

気持ち切り替えて――

「いらっしやいらっしやい！弓道部の射的！一度やってみてー!!」

おうっ、

深呼吸しようと思を吐いた瞬間にデカイ呼び込みの音がぶっかけられた。

息の吸いどころ逃したじゃねーか。どこのどいつだ。

声の出所を探してみれば、ちよつと離れたところの屋台の内側に、両手でメガホン作ってる袴姿の女子生徒が一人。

犯人はお前かバーロー。

「あ、その人ー！射的いかがですかー！一回五百円ですよー!？」

じつと見つめてたら興味あると勘違いされたようで、客としてロツクオンされてしまった。

「射的！面白そう！ナツルくんやってみよう？」

「えー?」

テンション高いな玲ちゃん…反対に俺はだだ下がりだ。

「弓矢つて扱ったことねえんだよな…」

遠くのやつ攻撃するの大概『投げる』か『撃つ』だからな。

「"気"を放出できると弓や銃の必要まるでないから、興味もないし。」

あと椎名と被る。

「とうわけでやるのは無しで」

「私もやめておこう」

「えー」

なんで不満げなんだよ。一人でやりやあいいじゃん。後ろで見てやるから。

「ひとりでもつままないよ…」

「後ろの方は友達じゃないんですか？」

後ろ?おいおい、何を言つとるんだキミわ。

俺たちの背後は無関係で各々好きな場所に移動中の一般大衆しかいませんよ?そんなの友人知人だなんてとてもとても…

「……………」

てホントにいた——————!!!

「呂布ちゃんいつの間にな…!？」

俺を超える身長に脚まで伸びる真紅の長い髪。ウチの学生服に身を包んだ無表情で褐色肌をした女の子が、一言も喋らずにじつと真後ろに佇んでいた。

「さっきからずっといたよ？」

「気づかなかったのか？」

「ぜんぜん気づかんかった…」

地味にシヨック。

ていうか知ってたら言えよ。スリとかだったらどうすんだ。

呂布ちゃんも気配殺すのやめてってゆってんじゃん。いつも。

「つーかどうやって俺の居場所が分かったんだ？」

自由行動許可されたのついさっきだし、お互い連絡先も知らない。そもそもどこに行くか誰にも言っていないし。

それに呂布ちゃん携帯持ってんのか？

「……………主あつちの"気"を辿って来た」

「うわ厨二くせえ台詞」

"気"を辿って来たなんて言葉、たとえ本当に出来ても使わないぞ。

脳天チヨップ食らった。

痛…くはないけどちよつとグラつときた。

「…クラスの方はいいのか？」

「……………休憩」

今午前中なんだけど。まあ善くんたちもそうだろうし珍しくはないか。

「……………主、一緒…」

呂布ちゃんは俯きながら俺の制服の裾を指先で掴む。照れてんの

か？

思えばこいつ、変則で学園に来たばつかだから友達はいないんだよな多分。自分から話しかけるようなタイプにも見えないし。

与一たちはいるけど…どうなんだ？あいつら仲良いのか？

他クラスだからどんな日常送ってるのか——って普段からFクラスに入り浸ってるか。

もうちよいS組の奴らと交友深めろよ。俺はごめんだけど。

「そうだな…呂布ちゃん、そんなに暇なら——」

「……………」

「一人で好きに過ごせよ」

やべえ、呂布ちゃん泣きそう。

「ナツルくんひどい!!」

「瀬能、いくらなんでもその言い方は…」

「うわー…さいってーですね」

「あーあー悪かった悪かった、俺が悪かったよチクショー!!」

無関係な店員まで非難しやがって！

「呂布ちゃん冗談、冗談だよ今の、意地悪言つてごめんね？」慌てて頭を撫でて慰める。

「……………（ぐすつ）」

マジ泣きじゃねーか。ダメージ受けたぞ。ないはずの良心が痛い…!

茜だったらここで鉄拳ぶち込んで無理矢理引きずり回すんだけどなあ…直江や吉井とかでも「なんで!？」って突っ込むとこだぞ。調子狂うわあ…

「よかったら休憩終わるまで一緒に回ろうぜ？奢るからさ」

「……………（コクリ）」

よかった。挽回できたみたいだ。

この娘を悲しませたままだと罪悪感で死ぬとこだったぜ…

「はい、うちの射的は一回につき五本、矢を射ることができますよー」

なんか的屋の店員がグイグイくる。

「やるって言っていないんだけど」

「一つでも的中てれたら飴玉をあげちゃいます。さらにパーフェクトなら豪華景品をプレゼント!」

「聞けよ」

玲ちゃんに弓矢渡すな。

「えつと…」

「弓の弦に矢尻をかけて…」

流されるままにレクチャーされて結局やる羽目に。

弓矢つつつてもこれどう見てもオモチャだろ。いや本物渡されても困るんだけどさ。

絵本のキューピットが持ってそうなこれで数十メートル離れた的に果たして命中させらるんだろうか。どう鼻屑目に見ても数メートルも飛ばなそうな形状してるんだが。

「ん~~~~いっやあつ!」

玲ちゃんが気合を入れて矢を撃ち出すが、案の定2・3メートルほど横向きに宙を舞って地面に落ちた。

力弱っ。

「飛ばないよあんなの…全国大会に出場した部の先輩でも弦切つて終わりなんだから…」

店の内側で椅子に座っていた(居るの気づかなかった…)別の袴姿の女子生徒がぼそつと呟いた。

詐欺じゃねーか。

見つめてたのに気づいたのか、女子生徒がこつちを向いて気まずそうに顔を背ける。

弓道部ってこんなだったっけ?前に生徒会の視察に行った時は、普通な感じはしたけれどもこんな詐欺まがいなことをするようには見え

なかったぞ。

ちよつと気になってデバイスでこの射的屋について調べる。
………出た。

部としてじゃなく、個人で出店してるのか。申請者は…2年Bクラス。呼び込みしてた目の前の女だな。

Bクラスってセコいやり方で他人から利益をかすめ取る奴らの集まりってイメージあるんだよな。なんでだろう。

少なくとも目の前の光景を見た限り、その印象に間違いはないだろう。

「あーん、全部外れちゃった…」

「あらー残念」

しょんぼりとしている玲ちゃんとは対照的に隠しもしないニコニコの笑顔で料金を受け取る名も知らぬBクラス女子。

自分が金盗られた訳じゃないのになんか腹立つ。

さて…どうしよう。

強権で取り潰すのは簡単だが曲がりなりにも生徒会の方で出店を認めた店舗だ。摘発したら後々面倒なことになりそうなのがする。

それに最終日まで営業してるからなあ、会長や美鶴先輩も分かって何も言わないんなら俺が勝手に口出すわけにも…でもこのまま玲ちゃん泣き寝入りさせるわけには…

「主困ってる？」

考え悩んでいたら呂布ちゃんが顔を覗き込んできた。

「ん？ああ…まーそう、だな」

困ってるっつーか悩んでるっつーか。

いや困ってるから悩んでるのか。どうすればいいか分からない。

「……………」

俺の返事を聞いて呂布ちゃんは無言で射的の屋台に向かう。

……まさかこいつ店をぶっ壊すんじゃないだろうな……

突如浮かんだ考えにハラハラする。

普段から言葉数が少なく、表情に変化がないから次に何をするのかさっぱり分からん。

そんな俺の心のうちを他所に、呂布ちゃんは屋台のカウンターに置いてある弓を手取る。

「おや〜？挑戦ですかー？」

「……………」

店員を無視して矢を掴み――

ドガガガッツ!!

「……………えっ？」

女子生徒が間の抜けた声を出す。

一瞬呂布ちゃんの腕が消えた――かと思えるスピードで動いて、次の瞬間には壁にかかっている的全てに矢が突き刺さっていた。

恐ろしく速いスピードで矢をつがえては放ち、台の上の矢を掴んではまだつがえて放つを一工程で行う。

俺のワンフレイムキルを弓術でやりやがった。

しかも全ての的の中心に中てている。

あんなオモチャで真っ直ぐに飛ばすだけでも難しいってのに、皆中を文字通り瞬く間にやってのけるとは…

アホっぽい雰囲気出して忘れがちだけど、中華最強の呂布奉先のクローンなんだよなこの娘。

まあそんなことより、

「的全部に中てたら豪華景品が貰えるんだっつたな？」

放心状態のBクラス女はその一言でハッと我に帰る。

「えっ？ええつとお…」

「そうね。今渡しますからちよつと待ってください」

もう一人の女子生徒が外から見えない所に置いてある何かを取り出した。

ゲーム機スィッチ本体か、五百円で手に入れられる物としては破格だな。

「ちよつと岳羽さん!？」

「なに? あなたが言ったんでしょプレゼントって」

何やら揉めている様子:しかし俺(たち)には関係ねえ。

バンッ。

スイッチを受け取って速攻でイベントリから一万円札を取り出し、カウンターに叩きつける。

「一回五百円だからこれで二十回だな」

「え? な、なにを…」

店側をほつといて呂布ちゃんに顔を向ける。

「オーダーだ呂布ちゃん、ここの景品狩り尽くせ」

「…了解…」

弓を持ったまま立ち尽くしていた彼女の顔はいつもの無表情ながらも、どこか嬉しそうだった。

その直後、一人の二年女子生徒の悲鳴が正門通りに響き渡った。

そしてその数分後、ムンクの叫びのような格好で固まる少女を尻目に、少し早い店じまいを行う袴姿の女子生徒がいたそうな…

61時間目 U m p i r e

「そろそろ他のところも回ってみるか」

正門通りの屋台をあらかた堪能しまくり、飽きが見えてきたのでメニューに提案してみる。

「ええっ！ほかほかのところてん!」

「食いたいのか？」不味そうだけど。

そもそもところてんって紅藻類をゆでて煮溶かして冷やして固めたもんだろ？温めたら溶けそうだけど。

「そうじゃなくて、アトラクションとか遊んでみようって話だよ。射的ぐらいしかやってねーじゃん」

しかもやったの玲ちゃんも呂布ちゃんだけだし。

せっかくの学園祭なんだからもうちよつと色々体験してみた方がいいだろう。普段できないし。

「どんなのがあるのだ？」

おお？善くん乗り気？ちよつと意外。

「クラスの出し物はあまり…お化け屋敷とか映画鑑賞とか代わり映えないものばつかだな。部活のだったら面白そうなのがいっぱいあるけど」

「面白そうなの？」

「木工部部の自作ジェットコースターとか」

「それは学園祭の出し物として大丈夫なのか？」

どうなんだろう。

パンフレット作つてるときは特になにも思わなかったが、よく考えれば学生がジェットコースター製作して客取っていいのかな。

「まあ世界的に有名な遊園地の乗り物でも不幸な事故は起きるしな。問題ないだろう」

「それでいいのか？」

いいんだよ別に。

セツツアーだつて言つただろ、『落ちるときは落ちる』つて。

「わたし、ジェットコースター乗ってみたい！」

「玲、駄目だ」

「そうだね。なんか危なそうだし」

問題ないのと乗りたいかどうかは別だ。割と無茶する頭のイカれた連中多いからな、ウチの学校。

乗ってる最中に「緊急脱出！」とか言つて座席ごと打ち上がったりしてもおかしくはない。

「なるべく地面に両足つけるアトラクションに行こうよ」

「のりで？」

「そう離れないようにべつたりと」

「何が面白いのだ？」

やめようよ天然のボケに乗っただけなのに素で返してくるの。

頼むから俺にツツコミ入れさせようとしなくてくれ。

「呂布ちゃんもなんとか言つてやってよ」

「……（もぐもぐ）」

幸せそうにりんご飴食つてた。

こいつ俺以上に祭りを満喫してるじゃねーか。キミにはがっかりだよ。

ダメだ。この面子全員ボケだから必然的に笑いを分かつてる俺がツツコミに回らざるを得ない。

昔は過激でも固定のツツコミキャラがいたから安心してたのに：
茜つて名前の。

あいつ今何やってるかな。あとで冷やかしに行く。

「とりあえず近場から回つてみるか…まずは」

「ジェットコースター！」

やめようつったじゃん。振りで言つたわけじゃないよ？

☆

★

☆

~~~~~

・野球部出し物『バント・イン・ホール・ワン』

|| ルール ||

ピッチングマシンから発射される球を、バントで地面に開いてる穴に入れよう！

「野球でバツティングつつたら普通ホームランだろ。なんでゴルフを混ぜた」

「去年川神百々代がかつ飛ばした球がビルを直撃して崩壊させたので、平和的に行こうとした結果です」

「二年の時からそんな感じなのかよあの人…」

「善、善っ、バントってなに？」

「分からないが、音楽に関係していると聞いた覚えがある」

「そりやバンドだろうが。そうじゃなくてバントってのはこう、バツトを横に構えて——」

『お前の根性、見せてみる!!』

「あつぶねえっ!!? 砲丸飛んできたぞ!」

「ピッチングマシンが誤作動起こしたぞ!」

「早く電源落とせ!!」

「:野球のボールしか出ないはずの機械から、なぜ砲丸の玉が飛び出してくるのだ?」

~~~~~

・乗馬部出し物『ふれあい馬広場』

|| ルール ||

馬はとでもデリケートな生き物です。怯えさせないようにしてください。

「……行く」

ヒヒーンっ

「すごいっ、あの気難しい性格の三日月号が完璧に言う事を聞いてる！」

「まるで長年コンビを組んでたみたい息ピッタリ！」

（乗馬は初めてって聞いたけど…流石は飛將軍呂布奉先のクローン。馬術はお手の物ってか）

「はいよー!!」

ヒヒーンっ!!

「あののんびりとした性格の満月号があんな荒々しい走りをも?」

「てか走れたのか満月!」

（こっちはよく分からん）

（乗馬経験ないって意味では同じはずだけど、玲ちゃん馬を生で見るとも初めてだよな?なんでそんな慣れた感じで手綱引けるんだ?）

「瀬能、そこから眺めるのは楽しいか」

「楽しいわけねーだろ馬小屋からの景色なんて」

※広場に足を踏み入れた瞬間に馬達が恐慌状態に陥ったため、ナツルは隔離されています。

「すいません。馬を怯えさせないがルールですので…あ、よろしかったらコレどうぞ」

「ニンジン差し出すなニンジンを」

~~~~~

・科学（工作）部出し物『手づくりこーぼー』

|| ルール ||

有り余る素材と情熱で持って自由な作品を作り上げましょう！

「できたー!」

「玲、それはいったい…?」

「うん!えっと…善のこと考えながら作ったんだ。貰って…くれる

？」

「ああ…（私の事を考えてなぜトゲつきの首輪を作るんだ？）」

「とても良い出来ですね。そちらのお二方は…？」

「…完成」

「俺もできたぞ」

「こ…これは…！お二人とも見事な作品です！！」

「瀬能、なんだそれは」

「鉄の絆」

「…正方形の鉄の板にハートマークがついているだけのように見えるが…」

「唯一背中を任せられる戦友との絆の証…ってゆう妄想を目いっぱい詰めてみた。俺には不要だから呂布ちゃんにあげる」

「…！大切に、するっ！」

「はっはっは、大袈裟だなあ」

（…結局なんなのだ？）

~~~~~

・美術部出し物『あまあまジゴク』

ⅡルールⅡ

数十種類以上のフレーバーとトッピングを組み合わせてオリジナルアイスを作ろう！

（※酷い目に合う組み合わせもあります。）

「バニラチョコいちごレモンオレンジピーチグレープソーダ抹茶あずきあんこバナナココナッツアーモンドティラミスタピオカチーズケーキサイコキヤラメルじやがいもとうふししやもでトッピングはコンデンスミルク！くださいーい！」

「かしこまりましたー」

「甘納豆芋けんぴかりんとうぶたようかんくず餅ずんださんましようが焼きスキヤキテリタマハンバーグビフテキ、トッピングはふりかけ

で」

「了解です」

「えへへ…うん、ほろにがつ！」

「……………（冗談だったのにホントに全部アイスで出てきやがった）」

「瀬能？食べないのか？」

「いや…（どんな味がするんだろう…全く想像できん。まあでも死にはせんだろ…多分…）……………いただきます」

ぱくっ

「うごバグツツ!!」

「瀬能!?どうしたいきなり!」

「おおっ!お客さんアタリ引きましたね!」

「(うわっ、あの青い髪の人風花の作ったやつ食べた…)」

「(やめようってみんな言ったのに部長がごり押しでメニューに入れたやつ…かわいそうに…)」

「(昨日に続いて二人目の被害者が…)」

「お客さん、今の気分を一言どうぞ!」

「…テリブルプロビデンス…!!」(お…おんなじだ……姫路の必殺料理ん時と…おんなじだ……!)

62時間目 Passion

善Side

先頭には瀬能。その後玲と私、最後尾に呂布が続き、校舎二階の廊下を当てもなく歩く。

ここは普段、学園の2年生がおもに使っている校舎で、私も玲も来るのは初めてだ。

「私たちが使っている校舎とあまり変わりはないのだな」

「廊下やトイレなんかの共有スペースはな。各クラスの教室は差がすごいぞ」

ただ感想を呟いただけで質問ではなかったのだが、瀬能が律儀に答えてくれた。

「そうなのか…瀬能のクラスはどのようになってるのだ？」

「……………」

「ナツルくんのクラスはどんな出し物やってるの？」

「ちよつとした喫茶店だな。あとで行ってみる？」

「いいの!？」

「この二年棟じゃなくて木造校舎の方で出してるから、すぐには行けないけどな」

「クラスの出し物なのに自分たちの教室でやっていないのか？」

「まー色々事情がありました」

「そうか…そういえば2年はSからFまでクラスがあると聞いたが、瀬能はどこに属しているのだ？」

「……………」

自分のクラスの事になると途端に口を閉ざすようだ。なにか都合でもあるのか？

…口を閉ざすと言えばもう1人、全く喋らない人物がいる。

「……………」

「ナツルくん、呂布ちゃんまだ具合がわるいみたい…」

心なしかぐつたりとした様子の呂布。

玲の言葉に瀬能が立ち止まってこちらに振り返る。

「あんな劇物食った後なんだからしようがないだろ。少し休むか？」

「……大丈夫……」

声に元気が無い。

呂布は先ほどのアイス屋で普通のバニラを頼んだが、一口食べた瞬間に瀬能と同じようになりアクションを取って倒れた。

店員に感想を聞かれたときは「……ゾディアッククラメーション……！」と呟いた。意味はよく分からないがとても強い衝撃とダメージを受けたということはわかった。

「瀬能も口にしたのに元気そうだな」

「流石に三度目だから慣れたよ」※本当は四度目。（姫路料理三回。劇物アイス一回）

……2年生とはそんなにしょっちゅう食事でダメージを受けるのだろうか。

玲が被害を受けないか心配だ。

「……………」

「おいマジで体調悪そうじゃねえか。褐色肌なのに顔が白いぞ」

「……………大丈夫……」

「説得力がまるでないよ呂布ちゃん……」

同感だ。今の彼女はまるで余裕がない。

しかしなぜこうまで頑なに休むのを拒否するのか……

「善、善……」

玲が私の服の袖を引っ張りながら小声で話しかけてくる。

「なんだ、玲」

「あのね、呂布ちゃんが休憩しようとしなくて多分、ナツルくん置いてかれるかもって思ってるんじゃないのかな」

「?…そうなのか?」

どこかに腰を下ろす。

その間に別行動を取る。

瀬能がそんなことを提案するとは考え辛いが…

「考えすぎじゃないか？」

「（今の呂布ちゃんは今まで元気ないから、普段なら絶対ない！って言うことももしかしたらって不安になっちゃうんだよ、きっと）」

そういうものか。

しかし、玲の説明を聞く限りでは私たちが何を言っても聞かないのではないだろうか。

現に瀬能の説得が成功した様子はない。

「前から呂布ちゃん繊細だとは思っていたけど、ここまでとは思わなかった。吉井や直江とは違うな…もう保健室行くぞ」

「…！（ブンブンブン）平気…！」

「首横に振った反動でふらついてるじゃねーか。無理すんな」

体勢を崩して倒れそうになる呂布を慌てて瀬能が支える。

誰の目から見ても限界が近いのは明らかだ。

「（気持ちわたくしも分かるから止められないけど、少しでも別の想いに意識を向けられたら気分転換になるんじゃないかなって、思うの）」

「…？どうするのだ？」

「（ちよつと見てて…）ナツルくん！次はあそこ行ってみよう！」

小声で話すのをやめて、ある教室を指差しながら瀬能たちに向き直る。

玲の指の先にある店の名前は『放課後悪霊クラブ』。お化け屋敷みたいだな。

「…玲ちゃん今取り込み中なんだけど」

「うん、だからっ、行こう！」

「意味がわからないんですけど」

同感だ。

「どういうつもりだ、玲」

見ているように言われたが、つい我慢が出来なくて尋ねた。

「怖い思いしたら不安も吹き飛ぶと思つて…」

「そんなんで体調良くなるわけねーでしょ」

「どうやら瀬能には『不安』が『不調』に聞こえたらしい。

どういう耳をしているんだ。

「つかせめてもうちょっとマイルドなアトラクションにしようぜ、黒魔術部のヤギの毛皮剥ぎとか」

……マイルド？

本当にマイルドなのかそれは？

よく分からないがマイルドとは言わないのではないか？

「そんなこと言わないで行こうよお化け屋敷ー！」

「なんで頑なに行きたがるのよ…そもそも玲ちゃん怖い駄目じゃなかったっけ」

「そつ、そんなこと…ない!よ?」

「なんで疑問形だよ」

私はよく分からないが、玲は『怖い』もの全般が苦手だ。

週末のテレビ映画でホラー作品を見たら、1人で部屋で眠ることが出来ないほどだ。(なぜ見るのをやめないのだろう)

「ううう…善つ、善もお化け屋敷行つてみたいよね!」

突如振り返り私に話を向ける。

その目は肯定してくれと力が入っていた。

「ああ、中がどうなっているのか興味がある」

「ええ、善くんも乗り気つて…呂布ちゃんどうする?」

瀬能は肩を貸しているために密着している呂布に話しかける。

瀬能も身長は私より高い。一般の人間から見ても平均を超えているだろう。

そんな瀬能よりも呂布は頭ひとつ分ほど背が高い。並んでいると差がよく分かる。

「……いっしょ…」

「お前もかい。いやまあみんながいいならいいけどさ」

そう言つて店の前に出ている受付に向かう。

瀬能本人は抵抗などないようだ。きっとホラーなどに苦手意識を持っていないのだろう。

「うう……」

反対に玲は表情を強張らせて緊張した面持ちをしている。

呂布の不安を吹き飛ばす前に玲が不安に陥っているのだが、いいのだろうか。

「いらつしやいませー！5名様でしようか？」

「あ？俺らは四人組だけど…なに、常人には見えない一人がいるとかいう演出？」

店に入る前から凝ってるな…と感心しているが、瀬能が言う『常人には見えない一人』は誰にでも見えるのが明らかだ。

「瀬能、先ほどから呂布の作品がずっときみの後ろについて歩いてるぞ」

「ああ、仕舞うの忘れてた」

そう言っ自分の背後、足元に目を向ける。

腰ほどの身長で、目と眉毛が描かれた頭巾に足が生えた不思議な存在。

工作室で呂布に作り出され、瀬能の作品と交換されたものだ。

確かメジエドとか言ってたか…

「製作風景をあんまり見てなかったけど、こういう仕組みで動いてるんだこれ。あの工房の素材でできてるんだよな？」

「先ほどからずっと周囲から注目されているのはそのせいだろうか」

「善くんが首輪してるのも目立つ原因だと思うよ」

…否定はできない。

行く先々で「あの男の子首輪してる」等の囁きが人混みから聞こえてくるからな。

「もう外したらそれ？」

「しかしせっかく玲が作ってくれた物を…」

「律儀な奴だな…それじゃあ…せめてコレで隠せ。俺まで目立つ」

瀬能はどこからともなく真っ黒い布を取り出し、それを私に押し付

けてきた。

「昨日俺が使ったもんだけど、もう使わないからきみにあげよう」
喋りながらも布を、首輪が傷つかないように丁寧に巻き付けていく。

そうして私は、傍目からはマントを着込んでいるような外見になった。

「不思議としつくりくるな。似合ってるぞ」

「善かつこいいい！」

「そうか？」

そう褒められると悪い気はしない…いや、正直言おう。嬉しい。
しかし…

「瀬能、この布…学校のカーテンによく似ているように思えるのだが…」

「気のせいだよ」

「それにいったい何に使ったのだ」

「所用でちよつと」

その所用を詳しく聞きたいのだが、多分答えてはくれないだろう。

☆

★

☆

バーンツ！

ケケケケツ！！

「ひうつ!?!」

……遊ぼうよ……

遊ぼ…遊ぼ……

「ひゃあ!!」

うふふ……

くすくす……

あはは……

「うづうづう……こわいよー……」

お化け屋敷と化した教室に足を踏み入れてから数分だが、暗い室内と休みない演出に早くも玲の心が折れそうになっている。

「……………」

「素人の作品にしちゃ中々のクオリティだな」

そんな中を瀬能と呂布はいつもと変わらぬ様子で私たちの少し前を並んで歩いている。

この2人の後ろ姿がなかったらきつと、玲は一步も進むことができなかつただろう。何も言わずに先頭を切ってくれてありがたく思う。

「玲、大丈夫か？」

「……………ぴゃー……………」

いかん、目が虚だ。

これ以上は玲の精神が持たない。今すぐここを出なくては。

しかし私たちから言つたのに早々に退散を申し出るのは…

「玲ちゃん善くん。もう限界だからギブアップしていい？」

いつの間にか瀬能たちが私たちと向き合うように立っていた。

「…瀬能、気遣いは嬉しいがその言い訳は無理があるぞ」

「いや気づかいとかじゃなくてガチで」

どこがだ。平然としていて普段通りの顔をしているじゃないか。

「な…ナツルくん…腕がすごい色してる……………」

そこで気付いた。瀬能の腕が、呂布が抱きしめている右の腕が……………

紫色をしている、と。

「瀬能…大丈夫なのか？」

「うん…もう、肩から下の感覚も無いんだ」

末期じゃないか。

「俺を気遣うならとつとどこから出よう。俺が隻腕を利点とした必

殺技を編み出さないうちに」

「わ、わかった…」

それしか言えなかった。

暗くてよく分からなかったが、よく見れば呂布は小刻みに震えており、瀬能は額からあぶら汗を滲ませている。

玲以上に余裕がない。

「……………」

「レッドアームボルトとかどうかな。決め台詞は『真つ赤に燃えただろ?』とか」

「ぜ、善…」

「玲、振り返るな。早くここを出るんだ」

「う、うん…」

大分錯乱している瀬能に背を向けて入り口に向かって歩き出す。思わず早足になってしまうのはしょうがないだろう。

次の目的地は保健室で決まりだな。

「…………こんな可愛くて美人な女の子に抱きつかれてるのにちっともうれしくないなんて…世の中クソだな」

「…………!、…／／／」

「呂布ちゃんさらに力込めるのやめて」

62. 5時間目時間目 学園一の集い

善Side

先頭には瀬能。その後玲と私、最後尾に呂布が続き、校舎二階の廊下を当てもなく歩く。

ここは普段、学園の2年生がおもに使っている校舎で、私も玲も来るのは初めてだ。

「私たちが使っている校舎とあまり変わりはないのだな」

「廊下やトイレなんかの共有スペースはな。各クラスの教室は差がすごいぞ」

ただ感想を呟いただけで質問ではなかったのだが、瀬能が律儀に答えてくれた。

「そうなのか…瀬能のクラスはどのようになってるの？」

「……………」

「ナツルくんのクラスはどんな出し物やってるの？」

「ちよつとした喫茶店だな。あとで行ってみる？」

「いいの!？」

「この二年棟じゃなくて木造校舎の方で出してるから、すぐには行けないけどな」

「クラスの出し物なのに自分たちの教室でやっていないのか？」

「まー色々事情がありました」

「そうか…そういえば2年はSからFまでクラスがあると聞いたが、瀬能はどこに属しているのだ？」

「……………」

自分のクラスの事になると途端に口を閉ざすようだ。なにか都合でもあるのか？

…口を閉ざすと言えばもう1人、全く喋らない人物がいる。

「……………」

「ナツルくん、呂布ちゃんまだ具合がわるいみたい…」

心なしかぐつたりとした様子の呂布。

玲の言葉に瀬能が立ち止まってこちらに振り返る。

「あんな劇物食った後なんだからしようがないだろ。少し休むか？」

「……大丈夫……」

声に元気が無い。

呂布は先ほどのアイス屋で普通のバニラを頼んだが、一口食べた瞬間に瀬能と同じようになりアクションを取って倒れた。

店員に感想を聞かれたときは「……ゾディアッククラメーション……！」と呟いた。意味はよく分からないがとても強い衝撃とダメージを受けたということはわかった。

「瀬能も口にしたのに元気そうだな」

「流石に三度目だから慣れたよ」※本当は四度目。（姫路料理三回。劇物アイス一回）

……2年生とはそんなにしょっちゅう食事でダメージを受けるのだろうか。

玲が被害を受けないか心配だ。

「……………」

「おいマジで体調悪そうじゃねえか。褐色肌なのに顔が白いぞ」

「……………大丈夫……」

「説得力がまるでないよ呂布ちゃん……」

同感だ。今の彼女はまるで余裕がない。

しかしなぜこうまで頑なに休むのを拒否するのか……

「善、善……」

玲が私の服の袖を引っ張りながら小声で話しかけてくる。

「なんだ、玲」

「あのね、呂布ちゃんが休憩しようとしなくて多分、ナツルくん置いてかれるかもって思ってるんじゃないのかな」

「?…そうなのか?」

どこかに腰を下ろす。

その間に別行動を取る。

瀬能がそんなことを提案するとは考え辛いが…

「考えすぎじゃないか？」

「今の呂布ちゃんはまだ元気がないから、普段なら絶対ない！って言うことももしかしたらって不安になっちゃうんだよ、きっと」

そういうものか。

しかし、玲の説明を聞く限りでは私たちが何を言っても聞かないのではないだろうか。

現に瀬能の説得が成功した様子はない。

「前から呂布ちゃん繊細だとは思っていたけど、ここまでとは思わなかった。吉井や直江とは違うな…もう保健室行くぞ」

「…！（ブンブンブン）平気…！」

「首横に振った反動でふらついてるじゃねーか。無理すんな」

体勢を崩して倒れそうになる呂布を慌てて瀬能が支える。

誰の目から見ても限界が近いのは明らかだ。

「（気持ちわたくしも分かるから止められないけど、少しでも別の想いに意識を向けられたら気分転換になるんじゃないかなって、思うの）」
「…？どうするのだ？」

「（ちよつと見てて…）ナツルくん！次はあそこ行ってみよう！」

小声で話すのをやめて、ある教室を指差しながら瀬能たちに向き直る。

玲の指の先にある店の名前は『ごーこんきつさ』

………どういう店なんだ？

「玲ちゃん今取り込み中——玲ちゃんあそこはやめよう」

玲が指差した方向を見ると一瞬だけ固まった。

すぐに動き出したが、なぜか先ほどまでと違い警戒心をむき出しに焦った表情をしている。

「早くここから離れよう。早く、早くっ」

「どうした瀬能、そんなに慌てて」

「バカお前知らんのか!?!あそこにいる人間を!」

あそこにいる人間？

改めて店に目を向けてみる。

「ぐ……合コンやってまーす……」

黒く長い髪をした、赤色のカチューシャとカーディガンを身につけた女子生徒。

『……………』

『……………』

『…川神水おかわり』

そして教室内に用意された複数の卓のひとつに無言で居座っているスーツ姿の女が三人。

いずれもテーブルの上にくつももの一升瓶が空の状態で転がっている。

ガバガバと飲んでいるようだが大丈夫なのか？

「あの3人がどうかしたのか？」

3人の内1人は知っているが…1年生の歴史教科を担当している、小島梅子という教員だ。

他の2人は知らない。全校集会などで見たことはあるが……その時とは全く違い黒いオーラを放っているな。

「三人っつーか正確にはあの内の一人なんだが…本当に知らないのか？婚期を逃して単位を盾に生徒に交際を迫る船越女史のこと」

恐ろしいことを聞いた気がする。

初耳だと返せば、「下級生の間には広まってないんだな…」と呟いた。

なぜそのような問題のある人間が教師を続けていられるのだろうか。

「ちなみにあとの1人は誰だ？あの席で真ん中に座っている…」

「あいつは昨日見たな。確か三年担当の柏木とか言ったか…」

詳しく聞けば例の船越女史ほどではないが、年齢を気にして絡まれると面倒なのだとか。

小島先生はなぜそんな2人と一緒に卓についているんだろうか…

「制服着た奴が少ないわけだけ…俺らも逃げるぞ」

「えー、行ってみようよ合コンー、広大な宇宙の中でたったひとりの手を探し求め煮てさ焼いてさ食ってさの狩人の集い場所なんだよ!」

「あの面子見ると否定し辛いなそれ…」

そうなのか。

しかしなぜ玲はそんなことを知っているのだ？

「だいたい玲ちゃん、行く必要ないじゃん。すでに見つけてるだろ たったひとりの相手」

「え!? なななななっナツルくんなに言ってるのっ!」

「しかも逃げないように首輪までつけて…すでにハンティング終わってんじゃん。次は鎖か?」

「私のことか?」

どういう意味なのだ?

「ちなみに俺はフリーだ」

『!! (ギンツツ)』

射抜かれそうなほどの鋭い視線を感じた——と思った瞬間、横へ凄い勢いで引っ張られる。

そして無理やり物陰に屈まされ——いや、物じゃない。いつの間にか巨大な黒い布をマントのように羽織らされている呂布だった。

さらにその呂布の陰に先に隠れている瀬能。先ほど私を引っ張ったのも彼のようだ。

『……気のせいかしら…今若い男の子がフリーって聞こえたのだけだ…』

『空耳だったんじゃないですかあ、外はざわついてるみたいですし(…)ったく、なんで私こんなところで行き遅れの相手してるのかしら。』

この二人のせいで向こうから来れないじゃないの()

『……………川神水、おかわり』

「とつとと移動しようか。アレに絡まれるのだけはごめんだ」
「……………そうだな…」

玲には悪いが早くここから離れよう。身の危険を感じる。
無事にこの学校を卒業できるか不安になってきた。

63時間目 Force

くナツルSideく

オツス、おらナツル。いやーさつきはえれえ目にあつたぞ。

結論から言うと、フェイバリットも決め台詞も編み出す必要はなくなった。

お化け屋敷を無事に途中退出ギブアップしたので、呂布ちゃんが俺の右腕から離れてくれたから。

しかし全てが解決したということはない。

というのも、解放されたにもかかわらずどうにも腕に違和感が。

なので軽く触診（モモさんと試合を繰り返すうちにちよつとした異常なら発見できるようになった。覚えたくなかった悲しい特技だ…）してみれば、

右の上腕骨が圧迫骨折起こしていた。違和感あるわけだよ。

「腕の骨折を違和感で片付けるのはどうかと思うぞ」

「ナツルくんさつき右手真つ黒だったよ…?」

「現在進行形でえらい目にあっている俺」

血が通ってなかったからね。そりゃあどす黒くもなるよ。

今は若干血の巡りが戻ったから紫色に改善（?）されている。

……この腕、さつきまで呂布ちゃんの豊満すぎるボディに全力で絡まれてたんだよなあ…

ぎゅちりと締め付けられた感触しか思い出せない。クソが。

あと俺は週一で最低一本は骨を折っている。主に川神院で。

悲しい日常だ。

「流石にこの状態で学園祭回るのは無理だな。一旦治療して貰おう」

いや正確には無理すればいつも通りに腕を動かす事は可能だ。

川神流には"気"を使うことで不自由になった身体でも思い通りに動かすことが出来る技があるらしい。(ワン子情報)

その存在を教えてもらってから俺なりにアレンジして習得してみた。

乱装天傀!

ただ"気"が尽きたら動けなくなる。しかも使い続けると半端なく疲れるので、できれば使いたくない。

「とういうわけで保健室に行きたいんだけど…呂布ちゃんいい?」

「……(こくり)」

今度は駄々をこねず素直に首を縦に振る。

あら意外。てつきりまた拒否されると思ったのに。

さつきまであんな頑なに保健室に行くのを嫌がってたのになぜ今になって——はっ、ま・まさか…俺を気遣って!

そもそもキミが負わせた怪我なだけコレ。

もしかしたらただ単純に体調の限界がきたのかもしれない。まだ顔色悪いし。

「二人もいい?」

「ああ」

「はやく行く? ナツルくんも呂布ちゃんも辛そうだよっ…」

辛そうって…俺は大丈夫だけど…なんか…うーん。

今まで骨折級の大怪我しても「ナツルだから」で流されてたからな、こんな本気で純粋な心配されるとなんか…なんだ。

ものすっつごい違和感が。

……………悲しい日常だ…

☆

★

☆

・保健室

キイ　　キイ　　キイ……

(ガタンツ)「ひま、でございます」

「学園祭期間中だというのに、来られた方は数えるほど……これではお出迎えに吊るしたフロストくんがムダになってしまいますわ」

「…数が足りないのでしょうか？」

「……………」

保健室の扉についている窓から中を覗いてみれば、ナースコスの女が回転椅子に座りながら暇を持て余していた。

かと思いきやいきなり立ち上がり、青い帽子をかぶった雪だるま型の人形を天井からロープで吊るし始める。なんだこの猟奇的な空間。

「…すまない呂布ちゃん、俺が間違っていたよ」

「……………」

頑なに保健室に行くのを拒否していたのはこの危機を本能的に察知していたんだろう。それに気づかず俺ってやつは……！一度ここに来たって言うのに……………！

あの教員(?)の存在をすっかり忘れてた。

「逃げるぞお前ら、ここは人間がいていい空間じゃない」

(ガラツ)「お待ちください。ケガ人ですよね？」

(ガシツ)「ひいつ!？」

踵を返した瞬間、突如保健室の扉が開き左手を掴まれる。

不覚にも悲鳴が出てしまった。だって怖いもん。

「おや?おやおやおや?…」

俺の手を掴んだまま扉を完全に開いて姿を現したエセナースは、なぜかその場にいる人を指差し、

「玲さま、善さま、そして瀬能さまではありませんっか!このようなところでお会いできるなんてこのエリザベス、感ツ無量ツ!でございます」

大袈裟に喜び始める。

「え、キミら知り合い？」

思わず玲ちゃん善くんに話しかけた。

俺は一昨日来たから顔と名前知られてるけど。

っーかそのときはこんなリアクション取らなかったぞ。

「いや、初対面のはずだが…玲はどうだ？」

「えっと…わたしも、あったことないはず…です」

「おや？…そういえばまだ顔を合わせたことはございませんでしたね」

ただの電波やないけ。

なんか前にもこんなやり取りしたような気がする。なんで名前知ってるんだ？

「そんなことよりもケガの治療ですよ。詳しく診察いたしますので中へどうぞ」

「え、いやその、保健医さんの手を煩わせるほどでは——」

「まあまあ瀬能さま！保健医などとそんな他人行儀な。わたくしのこととはどうぞ、エリザベスとお呼びください」

そう言いながらも保健医——エリザベスか——はグイグイと室内に俺を引き入れる。

今更ながらここに来たことを後悔してきた。嫌な予感が止まらない。

果たして俺は瀬能ナツルのまま再びこの扉を通過することができのだろうか。不安だ。

64時間目 蒼頭は恐怖した

|| あらすじ ||

呂布とナツルの身体の不調を改善するため保健室へやって来た一行。しかしそこは尋常じやない存在が支配する人外魔境の地であった…

「大変失礼な解説にわたくし、激しく物言いでございます」

エリザベスさん、モノローグに勝手に割り込まないでください。

☆

★

☆

腕を掴まれ、引きずられるように入室した俺。善くんたちもそれに続いて保健室に入る。

そのままなぜかエリザベスだけが椅子に座り、診察が始まる。患者は座らせんのかーい。

今さらながらここはヤヴァイ。直感が焦り声で危険を囁き続けている。

しかし一瞬たりとも腕を離されないので逃走ができない。合気を利用して外すどころか動かすこともできないってどんな力してんだコイツ。

「ふむふむ、診察いたしましたところ瀬能さまの不調は上腕骨の圧迫骨折。それに血流の滞りによる皮膚の変色のようなようですね、見事な紫色です」

「いやいやいやまさかそんな、ご冗談を。これはアレですよアレ、今流行りの片腕紫色染めっていうファッション。知らないんですか？」

所々狂気が垣間見える異様な女なのに、診察眼は確かというのが異様さを加速させる。

シリアルキラ
異常殺人鬼は知能指数が高いらしい。……なぜか昔聞いた豆知識が頭に浮かんだ。

「え？まさかエリザベスさん知らないんですか？うわっマジか…うわ…遅れてるうー」

「なにを言っているのだ瀬能、腕の治療を希望したのはきみだろう」

「ばっかおまつ、余計なこと言うんじゃないやねえよ！」

さつきまで忘れてたけど、人の傷口引き裂いて消毒液ぶっかける女だぞ!?

「両腕のバランスを整えるために掴んでる左腕も紫にしましょう、とか言つて二の腕握り絞るに決まってる！」

「瀬能さまはわたくしをなんだと思つているのですか…そのような治療とも言えぬ行為、このエリザベスがする筈…ごいません」

「え……そつ、そつ？」

「もちろんでございます」

無表情ながらにどこか不機嫌な雰囲気醸し出す彼女の姿に、失礼かもしれないけど少しホツとする。

そうか…俺の考えすぎか…

「バランスを考えるならば左腕は赤くするのが正解でございます」

「たあすけてええー…煮られるー…煮られるー…煮られるー…!!!」

ひいイイツ?!?いつの間にか部屋隅にグツグツと煮えたぎる鍋が用意されている!?!さつきまで無かったのに!?!

「さあさあ瀬能さま、トキは金なりと申します。ズバツと奥まで、あ突、入っ」

「ヤメロおおー…ダチョウクラブじゃねーんだぞ俺は!!」

椅子から立ち上がったエリザベスがそのまま鍋の方へと歩き出す!

こん畜生！なにが「そのような治療とも言えぬ行為する筈ござい
せん」だ！しれつと嘘つきやがって!!

「うおおおおツツ!!」

ダメだ！向こうの方が力が強い！全力で踏ん張ってるのにズルズ
ルと引きずられる!!

|| ライブセレクション ||

次の選択肢の中からひとつ選べ。

①ハンサムなポルナツルは脱出のアイデアを閃く

②仲間が助けてくれる

③逃げられない。現実是非情である

いかん、極限すぎて変な三択出た。

ひとつを選べ？この中でなら…俺がマルをつけたいのには二番目――

ダメだ。突然の状況に善くんも玲ちゃんもドン引きのまま固まっ
ている。呂布ちゃんは限界が来たのかぐったりと壁にもたれてそれ
どころじゃないし。

そもそも俺やエリザベス^コと違い異常性のかけらもないにこいつら
に助けろは酷だ。

となれば当然、俺が選ぶべきなのは①！

「正当防衛だツ悪く思うな!!」

骨折した右腕を“気”で覆い、無理やり動かして手刀を作り振り上
げる。

そしてすぐに勢いよく振り下ろす！

「ナイフツツ!!」

「アラハバキ（パキイン）」

ガギンツツ!!

……ガギン？

俺の手刀とエリザベスの腕がぶつかった瞬間、金属音が響いた。
なんでそんな音するんだ？

いや、俺はいいんだよ。「気」で硬質化してるから。

でも向こうはおかしい。触れた時の感触は普通に人間の腕のもの
だった。なのになぜ金属音が……？

「つて呑気に考察してる場合じゃねー！」

問答無用で引きずられてる最中だった！少しは配慮しろ！

「ナイフツ！ナイフツツ！！」

（ガギンツガギンツ！）「物理無効でございます」

なにその常識無視した特性!?武闘家の天敵か!!

「くっ、川神流雪達磨！ベルリンの赤い雨！」

（パキパキパキツ、ボウツ！）「氷結無効に火炎無効でございます」

「エレキアタック!!」

（バリバリバリバリツ!!）「電撃無効でございます。瀬能さまは多彩で
ございますね」

氷も炎も電気も効かねー……どうなってんのコイツ!?

いかん、そうこうしてるうちに鍋までもう距離がない。かくなる上
は……

「おや?」

突如這い寄るように背後から広がった闇に、エリザベスの足が止ま
る。

背後：つまり俺から放たれた「闇」は、昨日の宇宙のように無数の
細かい光があるものではなく、黒煙のような形で見える者に不安や畏怖
を抱かせる。

習得したけど食らわした結果が分からない技第二弾。何度ダミー
人形に使ってもなにも起こらなかつたんだよね。

多分生物にしか効果がないと見た。かと言って動物とかに試し撃ちするわけにもいかず今日までお蔵入りされていたのだ。

昨日のゴールデントライアングルを使ってもいいんだが、なんとなく効果がなさそうな気がする（即死無効とか言って。知らんけど）。

俺にとつても未知の技でリスクは大きい、しかしそれ故にリターンも大きいはず！この技に賭ける！

「テメエーが一人目だ、喰らえギャラクテイカイリユージョン!!」

無作為に広がっていた「闇」が一齐にエリザベスへ襲いかかる。

それに対してエリザベスは、今まさに振り返り状況を確認したところだ。

いくらなんでもここから大した反撃はできないだろう。回避行動を取るにしても俺の手を掴んだままじゃられないはず。

勝った、第三部完！

「メギドラオンでございませす」

——瞬間、白い光が闇を飲み込んだ。

「は？——へぶアツ!!」

そのまま進行方向にいた俺にぶち当たり、とんでもない衝撃と痛みを与える。

答え ③

答え ③

答え ③

逃げられない。現実是非情である

「おや、どうされました瀬能さま。そのようなずた袋のようなお姿になつて…」

ダメージで全身に力が入らずぐったりとしている俺にエリザベスが話しかける。

自分がやった癖にいけしやあしやあと……今も床に倒れ込みたい俺を、掴んだ片腕を上方向に引っ張り無理やり膝立ちにさせている。人間のやる事じゃねえ。

「少々汚れてはおりますが、まだ赤色には程遠いご様子。これは一刻も早く湯通しをせねばなりませんっ」

そう言つて再び鍋の方へ近づいていく。

もうダメだ……万策尽きた。それに身体が痛くて動いてくれない。

答えは③だ。現実には甘くねーぜ。

きつとこのまま俺は伸ばして畳まれて1ミリ幅に切られてじつくりコトコト茹でられた挙句に醤油ベースの濃い目のつゆにネギや油揚げをトッピングされて玲ちゃんにずるずるすすられる最期を迎えるんだ…（※蕎麦か）

ごめんよ呂布ちゃん…キミを信じてやれなかった俺が馬鹿だった

……

許してはもらえないだろうけど、せめて一言謝りたかつ……た

……

「ま……待つ……！」

諦めが思考を埋め尽くす中、前方から声がかけられた。

「あるじ…煮る……ダメ……！」

いつの間にか俺たちの前方に先回りしていた褐色肌の少女が、両腕を広げて進路を塞いでいた。

「りよ…りよふ…ちゃん……」 お前初めて忠臣らしい行動を…！

しかし今はまずい。

この状況でその台詞はどう考えても死亡フラグ。満身創痍だからデッドエンド待ったなしだ。

吉井や直江だったらいくらでも犠牲にできるが彼女はダメだ。絶対にダメだ。

かくなる上はこの左腕を引きちぎってでも部屋から脱出を――

「おや？ 貴方さまもけが人ですか。では真面目に治療致すとしましよ
う」

ドシヤッ

呂布ちゃんを視界に収めた瞬間、エリザベスはあっさりと俺の手を離した。

あまりに急だったため身構えることも出来ず、重力に引かれるまま地面に倒れ伏した。

……………鼻打った……………

つーか今コイツなんだった？ 真面目に？ てことは今までのはおふざけてこと？ ふざけて人の手茹でようとしたり謎の閃光で傷つけたりしたの？ ふざけんなよ？

いつか必ず復讐してやることを魂に刻む。

「それでは改めまして…治療しますか？ 料金は56800円になります」

「って金とんの!?!」

床から立ち上がった瞬間にそう言われて思わずツッコむ。

右腕の骨折はともかく全身のダメージはエリザベスのせいなんだけど？ 理不尽すぎない？

しかも高いし。

「適正価格でございます」

「どこの適正だよ……」もうなんか色々と疲れたわ。

一瞬またふざけてるのかと思ったが……ダメだな。眼を見てもよくわからない。ふざけてる時と真面目な時の表情の違いがまったく読めない。

基本無表情な人間ってこれだから苦手ですわー。

まあそれはさておき。……どうしようか。

「うーん……」

五万……治療に五万か……

正直言つて高すぎるわ。保険証なしの病院の初診料だつてもう少し安い。

しかしここで払わないとまた左腕赤染めの件をやりかねん……次は本当に煮られるぞ。

でも五万は流石に……払えないことはないけど、払ったら今月ピンチだ。

どうしよう……どうすれば……

………

「……ってカード使える？」

「こちらは電子マネーに対応しております。お支払いはベル払いでよろしいでしょうか？」

「一括払いで」ベル払いってどんな支払い方法なんだろう……

エリザベスがどこからともなく——見てたけどなんか……六法全書みたいな本から出してた気がするけど気にしないことにする——差し出された掌サイズの機械に、ブラックカードを近づける。

持ってて良かったブラックカード。清涼祭期間中の学園内なら支払いがただになるブリリアントなカード。

ありがとう、美鶴先輩。マジありがとう、美鶴先輩。おかげで一命を取り留めることができました。マジで。

液晶パネルが付いてる部分に数秒程かざすと、『ガルペイ♪』と軽快な電子音声が出た。エアじゃないんだ……

「はい、確かに。それでは…イシス（パリンツ）メシアライザー！」
「お？」 「……ん」

おお？

おお？

おおおおっ？

「すげえー！本当に治った!!」

「……ん、絶好調」

ここ最近全く感じることもなかった活力を全身に感じて、思わず手足を動かす。

腕の骨折だけじゃない。昨日召喚獣に受けた足のダメージも、学祭の準備に追われて蓄積されていた疲労も全部無くなっている。いったいどんな技術を使えばこんなことが…？

目の前で見ただけで分厚い本を開いたり閉じたりしてたぐらいで、あとは特別なことは何もしてなかったと思う。ホントどうやったんだろう。

つーかこんな事できるんなら初めからやれよ…いやあれか、あそこまで徹底的に脅さないと金払わないか。

くそっ、よく考えてるじゃねえか…戦略にまんまと乗せられた自分が憎い。

「そしてお二方にはこちらを贈呈致します」

「ん？」

エリザベスが差し出した物体…栄養ドリンクのビンみたいな形状のものを、俺と呂布ちゃんは思わず受け取る。

「なにこれ」

「保健室の初利用者記念品でございます」

あの魔法みたいな治療受けたの俺たちが初めてだったのか…それで適正価格とかどうやって分かったんだ。

「……」 仙桃エキス配合！鼻の涙

「SPとHPが回復します」

「SPとHPってなに!？」

HPはなんとなく分かるけど、SPが分からん。スペシャルポリス？

「……主にあげる……」

「いや俺もいらな…呂布ちゃん勝手に人のイベントりに物突っ込むのやめて」どうやったの？

「じゃ、失礼します」

「ええ、お達者で〜」

学祭初日にもされた見送りの挨拶で保健室を後にする。ただしあのときと今では足取りがまるで違うけど。

清涼祭の準備期間の時よりも身体の調子がすこぶる良い。最高にハイツ！て気分だ。今なら空だつて飛べちやうかも？

だからつてまた保健室あそこの世話になろうとは微塵あこも思わないけどね。二度と来るか。

「さて健康にもなったし次は…「副会長！おん？」

廊下に出て数歩も歩かないうちに声をかけられた。

先ほど出てきた部屋とは別の教室の扉が勢いよく開き、中から数人の男たちが飛び出すように駆け寄ってくる。

「なんだお前ら」

「科学（プログラム）部の者です！」

言われてみりや、全員メガネでなよつとして白衣着てるな。

でもその科学部の連中が俺になんのような？

「副会長？」

「ナツルくんのことなの？」

「あ？ああ、善くんたちは知らなかったか？俺生徒会役員なんだよ。役職が副会長」

「副会長！ナツルくんすごい!!」

「不良副会長だけどね」

隙あらば退会しようとして狙っているし。

「不良副会長！どうしよう善、カッコいい！」

「そうか、よかったな」

そーかなー？

玲ちゃんの感性つていまいち…善くんもなんか、対応がお座なりじゃない？大丈夫？

「あの…」

「あーハイハイ、話止めて悪かったな」

科学部の奴らがおずおずと声をかけてくる。

「いえ…なんか、今日の副会長優しいですね」

「そうか？」

「ええと…今回はウチの部員蹴飛ばされましたから…」

…そんなことやったっけ？

聞けばつい数週間前に協力を仰いだ時に「喧しい！忙しんだ俺は近づくな!!」とか言つて文字通り蹴散らしたらしい。

あのときは学祭準備期間中で余裕がまったくなかったからな…ストレスもめっちゃ溜まつてたし。

「まあ…そんな日もあるつてことで…ところでなんで声をかけたんだ？部費のアップなら無理だぞ」

南條千紗先輩がすべて仕切つてるから。

会計があのお断できない人ひとりつての問題ある気がするんだけど、今のところ円滑に進んでるから文句のつけようがない。同級生だったらと思うとゾツとするわ。

「そこをなんとかっ」

「部長、今はその件は置いときましょうよ」

「話が脱線しちゃいますよ」

白衣の集団が先頭の奴に注意する。

本当になんで声をかけたんだ。もう行つていい？

「ああっ、まっ、待つてくださいいっ。じつ実は副会長に協力をお願いしたく話しかけた次第でして…」

「協力う？」

「はい…」

協力つて…科学部だろ？しかもプログラム、つまりパソコン使った作業が主だ。

ちなみに科学（工作）部はドリルとかハンダゴテとか使った作業を主にする部活だ。

基本この二つの部活でワンセットだけど、学園祭では毎回出し物のテーマで揉めるから事前申請で複数出展する事に決まつてるんだっ

て。どうでもいいねっ。

「俺にインテリ期待されても無理だぞ。成績よくないもん」

「いえ協力してもらいたいのはそのうソフト面ではなくて…ハードの方でして…」

ソフトじゃなくハード？パソコンのフレーム加工ってこと？

いまいちよく分からん。

「とりあえず詳しい事は中で…」

そういうと部長と呼ばれた男以外が、自分たちが出てきた部屋へ戻っていく。

空き教室かと思っただらここも出店舗のようだ。看板が出てた。

「どうするのだ瀬能？」

「うーん」

善くんの言葉に思わず唖る。

今の俺は完全オフだ。つーか例えオフじゃなかったとしても頼みを聞いてやる必要はない。

ないんだが…

「まあ…アトラクションに参加すると思えば…」

「…それで構いませんっ、ありがとうございますっ！」

科学部の部長はバツ！と勢いよくおじぎをして、部員たちが入っていった教室へと走り去った。

「そーいやみんなはいいのか？次はあそこで」科学部の出し物がある教室を指差す。

「問題はない」

「……（こくり）」

「ずっとわたしたちが決めてたし、ナツルくんも自分がやりたいときは遠慮しなくていいよー！」

「ははは、ありがとう」

やりたい…ってのはちよつと違うかな。何するか分かってないし。ただ…

俺の直感が囁くんだ。『この出し物を見ろ』と。

「なんてね…」

戯言を呟きながら白衣メガネの連中の後を追うように歩きます。

どうでもいいけどこの教室の看板に書かれてる名前なんて読むんだ？

P a g o d a : : 英語はさっぱりだ。

☆

★

☆

ガラガラガラ、ピシヤ。

俺・善くん・玲ちゃん・呂布ちゃんが室内に入り、最後尾の呂布ちゃんが扉を閉めた。

中は一教室の半分程の広さで…ってここ元々何に使われてたんだ？

「ここは保健室の備品置き場だったんですけど、なんか今の保険医の先生になってから中の物全部整理して移動させたらしいです。理由は知りませんが…」

「なんとなく予想はつく」 どうせ気まぐれだろ。

ぶつちやけこころ辺の人通りが皆無なのもあの人のせいだろ？この店が人気無いのも。

この部屋頑張れば保健室の様子観察できるぐらい近いもん。…エリザベスまたフロスト人形吊るしてら。(かわいそうだからやめてやれ)

「アレを倒すのは無理だ、諦めろ」

「なに言ってるんですかいきなり!？」

え？違うの？

「この近辺の無人化を解消するために元凶を排除してほしいって依頼なんじゃ」

「ないですよそんなの」

「もう3日目なんだし集客は諦めてます」

そうか……よかった。

ぶつちやけ俺と呂布ちゃんがコンビ組んだとしても手も足も出ないだろうからな。

あの治療術が美鶴先輩の処刑と同じような能力だとしたら、力の源が見えないから対抗できん。

「協力してほしいのはそういった物騒な感じのじゃなくて……我が部で開発した作品の被験をお願いしたいんですよ」

「作品の被験？」てなんの？

俺の疑問に答える代わりに白衣の連中による人垣が左右にはけていく。

そうして現れたのは何やらゴテゴテとした椅子のようなもの。

「これは、人間の脳波を解析して過去の追体験を行える……VRシミュレーションシステムです」

「??」

「簡単に言うと、昔に対戦した相手と仮の世界でもう一度戦える装置……ですね」

……どつかで聞いたことある機械だな……

確かインナーファイターとか……

「ただ相当想像力が強くないと使えないみたいで……まだ1回も動作確認できてないんです」

「ダメじゃん」机上の空論じゃん。

「ですからっ、心体ともに強靱だと言われてる瀬能副会長にっ、何卒ご協力をと思ひまして……!」

「お願いします!」

「我々の悲願なんです!」

「どうするのだ瀬能」

「うーん……」

どうしよう。

いや実験台になるのは別にいいよ?俺も健全なる男子だからVRとか言われてワクワクしちゃう気持ちは当然持ち合わせている。

ただねえ……機械の見た目が……

「なんでこれ処刑用電気椅子みたいな見た目してんの？」
おかげでとても座り辛い。

「予算を節約するために他の部や同好会から不要になった物を使いました」

「こんな物使ってた部ってなによ」

「ええつと…たしか…打首拷問同好会とか、」

本当にそんな団体が我が学園にあんのか？

「電気を通す機能がどうしてもほしくて…他にも欲しがってる団体があつたので、ゲットできてよかつたです」

「こんな物欲しがつた団体ってどこよ」

「えつと…なんていったか…」

「アレですよ部長、Fクラスの人が団長を務めるFFF団とかいう集まり」

………

「ああつ、そうだ、そんな名前だった」

「なぜか異様に執着してましたよね」

「非認可の団体じゃなくてきちんとした部だったらとられてたな…」

………

「しかしいったいなにに使うつもりだったのか…：：：そういえば副会長Fクラスでしたよね、なにか知って」

「——さつさと始めようか。時間は有限だ」

科学部の部長の台詞を遮って、椅子に腰掛ける。

別に俺がFクラスだっていうことを善くんたちに隠すつもりはない。ないんだが…：：：なんか恥ずかしい。

誰にも言っていないけど召喚大会で自分の本心知っちゃったからなあ、にも関わらずなんか素直を認めるのはシヤクというか…

それに話題に上がりはしたが、電気椅子の取り合いしたって話だから別の意味で恥ずかしい。なにやってんのウチのクラス。

「ここからどうすればいいんだ？」

「あ、はい、このバイザーを頭に付けてもらってですね…」

そう言っただけで改造ヘルメットみたいなのを渡される。

この状況で視界を塞がれるメットを被らされるのは遠慮したいんだが…

「次に身体を椅子に密着させます」

「なんで？」

なんで俺の手足を拘束するの？

「電極になるべく多く接してほしいんですよ…なにしろ一度も作動したことはありませんから」

それらしいこと言ってるけど目の前真っ暗な状態でカチャカチャと身体を奪われるのってけっこう恐怖よ？

大丈夫俺？ここからいきなり「11121の男…!!」みたいな言葉吐いて白眼で鼻から血を流す最期迎えたりしない？

……まあいざとなったら引きちぎるなりして脱出すればいいかさつきまでと違っただけ今は体調万全だから。

「ナツルくん…大丈夫なの？」

「……………」

側で玲ちゃん不安げな声が聞こえてくる。

視界が塞がれているから顔は見えないが、純粹に俺の心配をしてくれているんだろう。

一言も発していないが善くと呂布ちゃんも同じ…はず。

なんか背中がむず痒くなってきたな。早いとこ終わらせてくれ。

「それじゃあ…いきますっ、VRシミュレーションシステム、起動！」

「ギャアああああああ!!」

科学部の部長がスイッチを入れた（と思われる）瞬間、俺の身体に紫電が走る！

「なっ、瀬能!？」

「ナツルくん!!？」

「…!?!？」

突然の出来事に慌てふためく呂布ちゃんたち！

果たして瀬能ナツルの運命は――

!!?

66時間目 Constellation

|| あらすじ ||

電気椅子に拘束された瀬能ナツル。彼はそのまま電流を流されて上手に焼かれてしまいましたとき。

「ええっ!?そんなっ、異常は起きないはずなのに!」

突然の異常事態に科学部の奴らも慌てふためく。

中にはなんとか椅子から俺を引き離そうと近づく奴もいるみたいで——流石にそろそろマズイ。

「あー……ごめん。今のは冗談だ」

バイザーで視界を封じられた状態で、若干の気まずさを感じながら口を開く。

「……え?」

「いやだから冗談」

ちよつとしたお茶目のつもりだったんだけどな……思った以上に大ごとになっちゃってお兄さん困惑。

「電流逆ってましたけど……」

「俺自力で放電できるんだよ」

「気」を変換させることで電気に限らず氷や炎なんかを発せられるのだ。すっごい腹が減るけど。

本当に事故が起きて電気に襲われてるんなら言い訳できるが、自分で行って人を傷つけたら罰則もんだから被害が出る前にネタばらししたんだが……

……………

誰も一言も喋らない。沈黙が室内を包む。

非常に居心地が悪い。

「ナツルくん！心配させないでよ!!」

玲ちゃんも初めに沈黙を破った。

ちよつと涙声に聞こえる…りよ、良心が……!

「瀬能、いくらきみでも言っていない冗談と悪い冗談がある。今のがどちらか分かるか?」

今度は善くんが。

やべえ、いつもより威圧感がする。正直怖い…

割とマジで怒ってる。

「わ、悪かったよ…やりすぎた」

「……………」

「あの、呂布ちゃん…?」

彼女だけずっと一言も発さない。が、気配はする。

見えないから自信ないけど、多分俺の頭の真横数cmの距離でじつと見つめ続けてるよね?ものすつごい圧力を感じる。

普段から口でなく目で語るタイプの人間ではあるけど、いつも以上に無言の圧が強い。今のジョークはお気に召さなかったようだ。

もうとつとと次行こう次。このままだと臓器に穴が空くわ。

「副会長、あんまりたちの悪い冗談しないでくださいよ…部活動なんて印象悪くなったらすぐ潰れちゃうんですから」

「悪かったつっの。……しかしこれ凄いな、本当に画面映ってるぞ」
バイザーには何人もの男女が格ゲーのキャラ選択画面のように表示されている。

どいつもこここ数ヶ月の間に一度は対戦したことがある奴らばかりだ。クリスや呂布ちゃんもいる。

「…おおっ成功だつ、さすがは副会長つ」

「やりましたね部長つ」

「しかし凄い人数だ…パツと見ただけでも50人くらいいますね」

俺が見てるのと同じものが別モニターで確認できるみたいだ。

「なんか名前が適当なのが多いんだが」

「表示されてるのはすべて副会長の記憶にある人物ですから、名前を知らない人は副会長が抱いた印象で勝手に変換されているんですよ」

なるほど？

『赤毛のイカれた眼帯軍服女』や『胡散臭い中年汚ヤジ』とかは全部俺が名前つけてる訳だ。われながらネームセンスがひどい。

「しかしこれだけいると迷うな…」 誰と対戦しよう。

名前適当や戦った記憶が曖昧なザコは除外するとして、それでも人数が多い。

モモさんじゃありきたりだし、呂布ちゃんだとキツイし、善くんは選ぶとこの後気まずそうだし（そもそもなんで候補に入ってるんだ？）

うーん……………よしっ。

「せっかくだから俺はこの『??』ってのを選ぶぜ！」

そう言っただけ視線でカーソルを動かす。

こいつだけ顔写真がなく、真っ黒なシルエットに『??』しか表示されない。シークレットか？

『??』？そんな人いませんけど…」

「なにかのバグかな…？すいません副会長少しまって」

「レッツ・ブレインバトルっ」

決定の意思表示が出たので迷わず肯定すると、脳を直接揺すられるような不思議な感覚に襲われる。

三半規管は強いつもりだったけど、洗濯中の衣類になったかのような感覚に吐きそうになり——そのまま意識を手放した。

……………
……………
……………

「うっ……っ？」

めまいに似た感覚に襲われ思わず顔を手で覆う。

しばらくそのまま、感覚が元に戻ったところで手を離して目を開いた。

「……は……？」

先ほどまで学園祭で賑わう校舎の一室にいたはず。

しかし今は薄らと水が張っている地面に周りは一面真っ白のただっ広い空間……いやかなり遠くの方に枯れ朽ちた木や崩壊した建物が見える。

とにかく、そんな謎の場所に俺一人で立っている。

どことなく神聖な空気が感じられて——そしてひどく寂しい。

これが電脳の世界なのか？

「もつとわちゃわちゃしてるのかと思ったが……」

半分か一部かは知らんが俺の脳みそも使っているだろうから。

それとも使ってこれなのか？たしかにゼ●ダの水鏡の間に似てはいるけど……

「……ん？」

気がつけば目の前に人がいた。

見逃していたとかうまく隠れていたとかじゃない。本当にいきなり現れたんだ。そこにいたのが当たり前のように。

「……………」

目の前の人物も突然の俺との邂逅に驚いているようだ。ギョツとした表情をしている。

まあそうだろう。なぜなら目の前の人物は青髪で、青眼で、お互いに初めて顔を合わすけど毎日一度は鏡などで必ず目にする存在……

つまり俺自身だ。

シークレットは俺だったのか……戦ったこと無いのになんで選択肢

にあつたんだろう。謎だ。

謎と言えばこの目の前の俺の格好。白のズボンに白いシャツ、その上から青地に白線の入ったコートを着用していて、両腕に無骨なガンレットの奇抜なファツションだ。

こんなコスプレみたいな格好をしたこと一度もないんだけど。

格ゲーで同一のキャラを使用した場合外見が変わることがあるけど、これもそんな感じか？

「…なんだ、お前は」

おお、目の前のもうひとりの俺が口を開いた。

「俺？俺は俺だよ。アイアムジヨバンニ」

「ふざけてんのか？」

凄いな科学部。ここまで違和感なく会話ができるなんて。ちよつと舐めてたわ。

でもこのもうひとりの俺、ちよつと目つき悪くない？すでに人でも殺してそうな空気醸し出してるんですけど。

もうちよい心にゆとりを持ってよ。近寄っただけで斬られそうだぞ。

「今の俺は冗談に付き合えるほどの余裕はねえ。ブチ殺されたくないかったらとつと失せろ」

「おいおい穏やかじゃないな…なにかいい事あった？」

「…死にたいみたいだな」

そう言つて拳を構えてくる。

本当に余裕がない。

いくらなんでも物騒すぎるぞ。どんな設定すれば出会つて5秒でバトルみたいな選択する俺になるんだ。

まあいいか、ゲームなんだから。闘う理由とか別に。

自分との試合。面白そうだ。

「いくぜー」

まずは様子見でノーモーションからの左ジャブ——!?

「ビエツ!!」

ドギユツ!!

俺が拳を突き出した瞬間、顔面に硬く鋭い「なにか」が勢いよくえ

ぐり込まれた。

刹那、脳裏に浮かんだのは中学生の頃に茜にゴム弾を撃たれた時の記憶。ムダな破壊を一切除外した力を集約した一撃…

ただし威力は桁違い。それがコイツの拳だ。

「くッー」 とつさにバックステップで後ろに下がる。

さらにスウエーで地面を滑るように相手の側面に回り、そのまま距離を取って射程距離から離脱。

幸い向こうは追撃するつもりはないようで、簡単に離れられた。

しかしやめる気もなさそうだ。

その証拠にゆっくりと構えを解いて俺に向き直り——再び拳を構える。

さつきは気づかなかったがああの構え方…それに今のねじれるよう

な衝撃…

「…弾丸か」

肘を固定し、肩と手首を回転させて放つ貫通力の高い左ジャブ。

弾かれたのも納得だ、押し出す力と回転する力。両方の特性を持つスクリューブローは総じて威力が高い。

一時期俺自身使ってはいたが、なんかしっくりこなかったから使うのをやめた。

だがコイツのは随分と堂に入ってる。構えからもそれがよく分かる。

そして一発食らって、さらに分かることがある。

「お前…その拳でいったい何人ぶちのめしてきたんだ？」

当てる部位・突き出しと捻りのタイミング・拳の形…

全てが殺傷力を最大限に発揮されるように追求されたナツクルだ。

鉄甲がなくても人が殺せる程に。

「それをお前に言つて、俺に何か得があるのか？ ジョバンニ」

上下に細かく腕を振る独特なリズムを取りながら、冷たい眼で見つめてくる。

どんな人生送ってきた設定ならこんなクレバーな眼ができるんだろう。殺し屋みたいだぞ。

「ちよつとばかしキツいの選んじやったかな」

思わずぼそりと呟いた。

使用する技の予測はつくけど、実際にどんな攻撃をしてくるかは予想できない。

それなのに殺^ヤる気は満々。呂布ちゃんとモモさんを足して2乗したような奴だな。

だからかなあ。そんな深淵のような瞳を見ると――

「ケンカ売つという背は向けられんよなあ？」

僅かでも闇に光を灯したいと思うんだ。

67時間目 汝は、我

ドギユツ！

「グツ！」

何度目かの左ジャブ。両腕でキッチリガードしたにも関わらず、仰け反って強制的に後退させられる。

地面に水が張ってあるために滑らされるたびに水しぶきが上がり、俺の服に水滴がかかる。

でも濡れた感覚がない。イメージの世界だからか？

いやそんなどうでもいいことより、

「(強い…!)」

「パワーだけなら呂布ちゃんやモモさんの方が上だろう。しかし『的確に相手にダメージを与える』という点では今まで出会った中で一番かもしれない。

相手が俺自身だから、これって自画自賛になるのかな？そんな気全然ないけど。

今のところまったく近づけない。だった数回アタックを仕掛けただけだが、多少のダメージを覚悟しなきゃならんな。

脇を強く締めて、両腕で身体全体を守るよう十字を作る。

さらには前傾姿勢になって打つ場所を限定させ、後は覚悟を決めて

!!

——ドンツ!!

「!?」一瞬で肉薄した俺に、驚愕の表情を返すもうひとりの俺。

瞬動。

足に“気”を集中させ、即座に踏み込み地を駆け抜ける移動技。

一切行動が取れない状態の俺。当然相手が待ってくれるはずがなく、

「エアログ!!リミットグローブ!」

掌に風球が生まれた。と思いきや、すぐに鉄甲の表面を覆うように形を変える。

「シャドウフレア!!リミットグローブ!」

今度は黒煙のような炎が手の中に出現して、すぐにまた鉄甲に宿る。

見つめることしかできないのが大変辛い。

「ドラゴンフォース! (ゴオツ!)」

さらに全身からオーラが噴き出て、一目で体躯が強化されたのが分かる。

やめて、わたしのライフはゼロよ!

「ゴ布林パンチ!」

「ゴブフォ!」

まず右の拳が繰り出された。

しかも一発じゃなく複数。

「ゴ布林パンチ!!」

「ぶごファツ!」

次に左手。これも複数連打。

「ゴ布林ラッシュユ!」

「ウべら!!」り、両方ですか!?

もしかして、オラオラですか~~~~!!?

「へぶっ、」ベシヤツ

暗闇に落とされたときと同様に、唐突に水が引かれている地面にうつ伏せに放り出される。

…鼻打った……

「何？」

離れたところからもうひとりの俺の音がする。

「いつの間に俺の背後に……どうやって逃げたんだ？」

そう言いながら、構えをボクシングのオーソドックスに変えて俺に向き直る。

……さつきまでと同じ空間か……ダメージ受けすぎて緊急ログアウトされたわけじゃなかったんだな。

今の現象はなんだったんだろう。

「おっ、俺自身なにをされたのかわからねー、頭がどうにかなりそうだし……超スピードとか催眠術じゃあ断じてねえ、もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ………！」

「ならその恐怖を胸に抱いたまま死ぬがいい」

——エラチツクフラッター!!

急にもうひとりの俺の姿が消える。

かと思いきや猛スピードでこちらに迫ってきていた。覚醒した聖闘士みたいな動きだ。

気のせいか床から数センチほど浮いて……いや気のせいじゃねえ、水面に波紋もしぶきもできないから実際に浮いてる!

どんな"気"の使い方してんだよ!?!舞空術か!?!

「くっ……」

慌てて横方向へダッシュ。向こうが手を中心に使うんなら俺は脚だ!

一方的にやられてプライドはないのかって？むしろあそこまで容赦がない奴にまともにやり合えるかつ、逃げるんだよー！

と、普通の人間なら考えるだろう。

「!？」

もうひとりの俺が驚いた表情を見せる。

横に移動した瞬間に方向転換して、自分の方へ向かってきたのだから当然だろう。

そのまま喰らえ!!

「グレイテストコーション！」

「ルーム！」

なあッ!?

俺の拳から放たれた"気"の光線が、突如奴の目の前に出現した黒い穴に吸い込まれてゆく。

そしてそのすぐ隣にもう一つ黒穴が発生して、そこから光線が出てくる！

「ちいッツ!!」咄嗟に達磨避けで光線を躲す。

そのまま相手の側面に回り、立ち上がると同時にボディブローをかます。

「オラアッ!!」

「ふんッ、」

ゴッ!!

俺の一撃はしかし、冷静に腕でガードされる。

だが驚きはしない。想定内だ。

「」影分身!」

本体を含めた四人の俺が、鉄甲付きのもうひとりの自分を前後左右から襲いかかる。

「何!？」

「『死刑執行!!』」

驚愕する相手に総攻撃で拳を振るう。

今度こそもらっ——!!

「カアッ!」ガツゴツツ!!

『!!?』

即座に身体を回転させて俺の両隣、奴から見て前方の分身に左ストレート。後ろの分身に右の肘鉄が入られる。

拳を打ち付けたままだった俺は、奴が身を振ったせいで体勢を崩し…その一瞬の隙を突かれて右手で首を掴まれる。

こっ、コイツ、瞬時の対応力が半端なく高え!どんな状況に陥ってもすぐに判断して的確な反応を行なってきやがる!

同じ俺のはずなのに、この差は一体なんだ?どういう経験してきたらこんな風になるんだ!?

「多才である事は認める」

喉笛を捉えながらもうひとりの俺が口を開く。

「だがそれだけだ。覚悟も何もない。道楽で作った技で俺は仕留める事はできない」

「っ、」

今まで色んな眼で見られてきた。

蔑んだ眼、冷たい目、非難した眼差し、軽蔑、恐怖…

しかし、コイツの眼からは何も感じられない。

ただ事実のみを語る“無”の視線だ。

「軽いんだよテメエの拳は」

残った最後の分身が攻撃を仕掛けたが、蚊でもはらうように左手で弾いて頭を掴む。

「だから死ね」

——双頭の極み!!

「ガッ!？」

俺の顔面と分身の後頭部が激しくぶつかり合い、眼前に火花が散る。

「オルギア全開!! (ゴオッ!)」

ヴオ”ン”ッ”ッ!!

もうひとりの俺はすぐに腕を振り上げ——頭同士をかち合わせた際の衝撃で分身は消えた——俺を上空へと放り投げた。

信じられないことに片手でだ。いくら俺が細身だからってウソだろ!?

「ヴオ””””””””””””””””!!」

「ぐエッ!？」

さらに自らをブリッジさせるように何度も勢いよく反らせ、腹筋でさらに上へと跳ね飛ばされる。

こ…これはっ、まさか!?

十分な高さまで来たら俺の首と片足を脚で、両腕をひねり上げて掴んで固定し、胴体をエビ反るようにクラッチする。

うおおッ!間違いねえ、この技は!!

「スグル版マッスル・スパーク!!」

「グがあー””ッ!!」なんだこの技の威力はくっつ!!!

筋肉が引きちぎられそうだ!俺がやってもここまでの威力出ないよ多分!?

「アタル版マッスル——」

「ヤラセネエよおおッッ!!」

——順逆自在の術!!

続けざまに背中合わせの姿勢に移行しようとしたので、それよりも先に技の掛け手と受け手の位置を入れ替え、マッスルスパークの続きを俺が行う。

さらにここから倍プッシュ！落下の速度をあげてえ——！

「アロガント・スパーク!!」

ガガアツンツツ!!

「ガパツツ!!」

もうひとりの俺の両腕・両足。

そして落下の勢いで体勢がねじ曲がり、胸部の五つの部位が地面に叩きつけられて、盛大に水しぶきが上がる。

一瞬の静寂の後、雨のようにうち上げられた水が落ちる。

それを全身に浴びながら、ゆっくりとクラッチを解いて奴から離れる。

「ぐ……うう……っ……な……ぜ…………」

もうひとりの俺が緩慢な動きながらも、床に手をつけて起き上がる。
うとする。

全力でやったんだが、仕留めるには至らなかったようだ。

万全の状況じゃなかったし、相手が相手だからしょうがないということにしておこう。

「なぜ……なぜだ……！俺のマッスルスパークは完璧に決まっていたはずなのに……」

なんだ、そんなことか。

「お前友達いないだろ」

「……なに？」

Orzな体勢のまま、頭だけゆっくりと俺の方に振り返る。

「お前の技威力は高いけど致命的な隙があるんだよ。喰らったらすぐ

分かったぜ」だから返せたんだ。

「バカな、今までそんなこと一度も」

「言われたことないってか？だからだよ」

技つてのは一度習得したらそこで終わりじゃない。そこから発展させていく事が大切だ。

しかしコイツの技は研鑽した様子がない。覚えたらそれつきり、^{スパー}練習とかしないタイプか？

それが悪いとは言わんが、やるんなら隙を無くせよ。どっちが道楽だ、好き勝手言いやがって…

「俺の拳が軽いつてんなら、お前の拳は薄っぺらだ。誰かと繋がってる感じがしない」

「なに!?!」

もうひとりの俺が立ち上がり、怒りの表情で向き直る。

「もういつペン言ってみろ…俺の拳がなんだって……!」

「何度でも言つてやるよ。お前の拳は薄っぺらだ。ペラペラペラペラぺらっぺら」

「キサマア……!!」

「嘘だと思ふならかかってこいよ。お前の攻撃なんてもう怖くねー」
防がれたり返されたりされたから自信なかったが、俺の攻撃はキチンと通じる。

「今度こそ通じる事を祈つてマッスルスパークをまたやってみるか？
それとも俺が知らない技を繰り出して見るか？なんでもいいぜ。ただその技が放たれたとき、お前は八つ裂きになつてるだろうけどなっ」

……

……

……

☆

★

☆

ボンツツ!!!

「!?」

いきなりの爆発音と共に、視界が真っ暗になる。

あれ？

「わあっ、機械が!!」

「しよっ消化器を!」

近くで複数人の慌てふためく声が聞こえる。

なんだと疑問を口にしようとする前に、バキバキツ!と金属製のものが壊れる音がして身体が前方に引つ張られる。

「ナツルくん!!」

「瀬能!無事かっ!」

「……!」

次いで目隠しを外されると一瞬だけ目が眩み…心配そうに俺の顔を覗き込む三人の姿があった。

あれ?もうひとりの俺は?

「きみがブレインバトルと言った後、すぐに機械が爆発したんだ。離れていたから大丈夫だとは思うが怪我はないか?」

「え?あ、ああ…」台詞を言っつてすぐ?

数十分は戦闘していたはずなのに…現実では一秒も経ってなかったのか?

「……?」

「ナツルくん、どうかしたの?大丈夫?」

ちよつと考えこんでいたら呂布ちゃんと玲ちゃんが心配そうな顔で尋ねてくる。

「ああ、いや…ちよつと、な」

「?なにかあったのか?」

「いや…」

さっきのはなんだったんだろうか。

もうひとりの自分との邂逅。そして戦闘。

アレがプログラム？ありえないだろ。学生どころかその道のプロでもあそこまで滑らかに人間らしいAI作れるかよ。

なんていうか……まるで別の世界と繋がったような感じだった。

……まさかな。

バカげた考えに思わず苦笑して頭を振る。いくらなんでもそんなのがあるはずない。

きつと俺の中の俺自身が知らない部分が出たんだろう。

「……あの俺はコーラ好きなのかな」

誰にも聞かれないようにぼつりと小さく呟いた。

68時間目 信じるか信じないかは貴方次第です。

「あああ…装置が…消化剤だらけに……」

火を消し終えた科学部の人間が電気椅子にコードで繋がれたパソコンを前に肩を落とす。

幸い爆発は小規模だったようで、被害はそのパソコン一台のみ。

しかし科学部の部長の言葉通り、小火を消すのに使った消化器のせいで現在は真っ白だ。

ちよつとした惨事だが騒ぎにならなくてよかった。

「せっかくゲイツ先生が手伝ってくれたのに……」

「部長っ！それはナイショにするように……！」

「とくに副会長には……」

「おん？」どゆこと？

「なんでそこで俺が出てくるんだ。しかもナイショって」

「あ、いや……」

「いつ、今のは別に……」

「あやしいな…ちよおつとばかし詳しくオハナシ聞かせてもらおうかなあ？」

ニツコリと満面の笑みを浮かべて一歩踏み出すと、科学部の奴らが一斉に壁際に後退る。

………

さらに一歩前に足を進めると、もう後がないというのに、なんとか俺と距離を取ろうと壁に身体を押し付け合う。

失礼な奴らだ。

「とつと吐け」

「うう…じっ、実はこの装置…私たちの作品じゃないんです」

「構造を練ったのは自分らですが、あとのプログラミングとかはほとんどゲイツ先生がやって……」

手伝ってもらうって言うのかそれ？

構造を練るって考えただけだろ？委託じゃん。そんなんでよく我が部のくと言えたな。

「ゲイツって？」

「この前の全校集会で紹介していたな。確か…三年生の教師だったはずだ」

この前の全校集会…確か先月だったな。呂布ちゃんに初めて出会った日だ。

酷い目にあつたなあ…その翌日。

放課後生徒会に顔出したら修羅のような気迫を放つ美鶴先輩に有無を言わさず処刑された。

連絡してたんじゃねーのかよあのメーブル^バ、嘘ついてたんじゃねーのか？

機会があつたら復讐するでしょう。

閑話休題。

「はい…ゲイツ先生は三年Sクラス担当の先生で、複数の部活動のアドバイザーもしてます…」

「そのSクラスの担任が、顧問でもないのにどうして一団体に肩入れするんだよ。しかも俺に知られないようになって条件付けて」

「そつ、それは…なんでも秘密裏に副会長の戦闘データを取りた
いって話でして…」

なんかちよつと前に似たようなことされたような気がするなあ。

色んなシチュエーションで不良たちに襲撃させてその結果を集計して…

パソコンに取り込んだところで今回みたくおじゃんになった、つて
ほぼ同じ流れじゃねーか。

あの時も確か外人二人組だったな。今回も同一犯か？
でも出た名前は一人だったし…うーん。謎だ。

「あの…」

「ん？」

科学部の部長がおずおずと話しかけてくる。

「怒ってないんですか？」

「怒る？」ってなにに対して？

「勝手にデータ取られそうになって…」

ああ、そういうこと。

コイツらは『協力』とか言っときながら、実際は俺を利用していた。その事について今から復讐されるんじゃないかと戦々恐々してるワケだ。

「たいして親しくもない上に、ろくに喧嘩もしたことない奴相手に拳とか振るえるかよ。俺は理不尽な弱いものいじめはしない主義なんだ」

「そ…そうなんです？」

「うん」

もちろん調子に乗って度を超えた挑発行為してきたら容赦なくぶちのめすけど。

俺の言葉に科学部の奴らがあからさまに安堵の表情を見せる。

「よかった…骨の1・2本折られるかと思ったから…」

「俺も病院送りにされると…」

「遺書の内容考えたぜ…」

「……………」

コイツらが俺のことをどう思ってるか、よく分かる感想だ。

「これ以上ここにいてもお互いにいいことはないだろうから、次行くぞみんな」

「わかった」

「うん！」

「……………(こくり)」

呂布ちゃんたちに確認を取って、教室の出入り口まで移動する。

そしてドアに手をかけたとき、後ろから科学部部长に声をかけられた。

「あのっ！…本当にご迷惑をお掛けしました…」

「いいよ別に。貴重な体験したのは事実だから」

「……………自分は副会長のこと、ちよつと誤解してたみたいです。もつと、短絡的な人物だって聞いてたので」

「その認識は間違つてないぞ」口よりも拳の方が早いつて思うし。

でも善くん玲ちゃん呂布ちゃんの前でシヨツキングな場面はなるべく控えたいかなーつて、柄にもなく考えちまつただけだ。

こんなこと言えないけどね。

「祭りの最中に必要のない問題起こす気にやなれねーよ」

「っ、……………」

がばっ、と勢いよく風邪を切る音がしたのでチラツと背後を見ると、部長が深々と頭を下げていた。

さらに一瞬遅れて、他の部員たちが慌てて頭を下げる。

……

軽く手を上げて、なにも言わずに部屋をあとにする。

まあ報復はするんだけどね。

後日、科学部（プログラミング）部の予算が大幅に削減されることになった。

その決定の影に青頭の存在があつたかどうかは…定かではない。

69 時間目 ナゾ

科学部をあとにした俺たち。

次はどこに行こうかと当てもなく彷徨っていた。

ム”ー、ム”ー、

「瀬能、きみの左腕から変な音がするぞ」

「ああ、デバイスの着信音だ」

音楽とかうるさいからマナーモードにしてる。

のはいいんだけど、バイブはどうにかならんもんかねコレ。振動が強いからメールが来るたび腕が震えるんだけど。今回は電話つぽいが。

くすぐったくてかなわん。

とりあえず立ち止まってデバイスを操作する。

「(ピツ) お前か」

『そうだよ直江大和だよ』

そうか。じゃあな。

『まてまて待て！電話を切ろうとするな！』

通話終了の部位をタッチしようとしたのを察したのかデバイス越しに慌てた声が響く。うるせえなあ。

……ん？待てよ？

「お前なんでこの番号知ってるの？」美鶴先輩からの借り物よこれ？
『ナツルの携帯の番号にかけたんだけど…：そういえばよく繋がったな。いつもだいたい電源入ってないのに』

俺の携帯すぐ電池残量がゼロになるからな。

てかなに、所持者にナイショで取り次ぎでもしてるのこのデバイス？
それとも桐城グループからの計らい？

着脱不能になったり誤作動で勝手に通話したり、色々謎が多い機械だな…

「まあいいや…それよりなんのようだ？なんかあったのか？」

『ああ…ああうん、今店にナツルの姉さんが来てるんだけど』

姉え？俺の？

「俺一人っ子だぞ」

『いいから早く来てくれ。ガクトとかの嫉妬で店内が異界化しそう
だ』

ブツっ、ツー ツー ツー

アイツ言いたいことだけ言って通話切りやがった。

前から思ってたけど俺の扱い結構おざなりじゃない？もしかして舐められてる？

どうすっかな…無視して…いやダメか。教室の設備環境整える
ためになるべく売り上げ伸ばしたいって話があっただけ。

錆びた卓とクリーチャーのウェイターじゃ食欲湧かねーな。バス
りはしそうだけど。

て事で…

「わりーな三人…行く」とも、呼び出しくらったからって早い 早
いよ呂布ちゃん」せめて最後まで言わせて？

俺が変な単語口走ったみたいになったでしょ。なに いくともつ
て。

「私たちも行く！」

「後ほど案内すると言っていたし丁度いいだろう？」

「言っただけだよ…」

今じゃなくてよくない？

直江の口ぶりからしてぜってー問題あるよ。タダでさえ問題ある
クラスなのに、問題に問題かけるなんて逆に平常な状態になっちゃっ

てるかも？

じゃあ問題ない：いやいやいや、問題あるから連絡きたんだろ。

…止めよう。これ以上続けたら無限ループに陥る。不毛だ。

「一つだけ約束してください。クラスのことを嫌いになっても、俺のことは嫌いにならないでください！」

「なにを言っているんだきみは？」

うん、俺もわかんない。

「所属してるクラスがどんな環境だったとしても、それだけできみを嫌いになるなんて事あるはずがないだろう。馬鹿なことを言うな」

「そうだよ！ 私たちがナツルくんのこと嫌いになるなんて、あるはずないよ!!」

「(こくり) ……主、大好き」

「……………お、おう……」

咄嗟に言葉が出てこなかった。

ヤバイ、身体がめっちゃ熱い……！ 不覚にも本気でグツときちまったぜ。

好き……好きか。この俺を嫌いになるなんて……ふっ、ふっ、ふっ。

「言ってる恥ずかしくない？ そういうの」

「？ なんで？」

「なんでって……」

玲ちゃんの本気で分かってないって表情に言葉が詰まる。

三人ともが三人とも、いつもと変わらない様子で俺を見つめ返している。

すげーなキミたち……

「……………主、照れてる？」

「そうなのか瀬能？」

「そっ、んなことーないさー？」

「口調がおかしいぞ」

「気のせいだよ、それよりさっさと行こうか」

返事を待たずにさっさと歩き出す。

「あーナツルくん待ってー!」

慌てて駆け寄ってくる気配がするが、無視して歩調を早める。今顔を見られるのは嫌だから。

赤く染めた上にニヤついた表情してるなんて知られたら恥ずかしいからな。

☆

★

☆

↳直江Side↳

・2―F 中華喫茶『ヨーロッパアン』

「えっと…今連絡したんで、しばらくしたら来ると思います。店内でお待ち下さい」

「うん、わかったー」

長く青い髪のおっとりとした美人と、紅紫色をしたショートヘアのつり目な美人と、黄赤みがかかったツインテールの美少女を席に案内する。

「アミ姉ー、なんか頼んでいい?」

「そうだねえ、ただ待ってるだけってのもなんだし。少しならいいよ」「やった!」

この三人は先ほど「私と同じ青い髪の男子いる?」と突然訪ねてきた人たちだ。

神月学園広しと言えども、青色の髪をした男子生徒は一人しかいない。意外なことに。

なのですぐに電話をしたんだが……

「チクシヨウ瀬能のやつ…こんな美人の姉妹がいたのかよ……!」

必要だ…！

「ナツル…！早く来てくれ…！！たのむ…！！」

「今猛烈に帰りてえわ」

うわビックリした！！

「近くにいるからしようがなく来てやったのになんだよいきなり。クリ●ンみたいな台詞吐きやがって」

いつの間にか来ていた青い髪の学友が、教室の入り口から冷めた目でこつちを見ていた。

その傍らには同じみの呂布と：見知らぬ男女が二人。誰だ？

「なんだい騒がしい…おや」

卓についていた三人組のうち、アミ姉と呼ばれてた女王様チックな女の人が入り口の方を振り返って：なぜか立ち上がる。

目当ての人間が来たから——ってわけじゃなさそうだ。

「あーん？珍しいな。アミ姉のメガネにかなう奴がいたの」

「え？どういう意味ですか？」

ツインテールの子に質問する。

「アミ姉は一目見ただけで相手がSかMか分かるんだってよ。よくわかんねーけど」

SかMって：もしかして性癖？それを一眼で見抜くとか、そうっぽいとは思ってたけどやっぱりそっち系の職業の人だったんだな。

「ふーん…本格的な調教はまだやってないから目覚めてはいないみたいだね。それでも豚を飼ってるのは無意識か？いいねえ、久しぶりだよここまで素質高いのは」

品定めするみたいに呟きながらゆつくりと女王様が歩いていく。

飼ってるのかSとか…：心当たりは一人いるな。

褐色肌で見た目首輪してる女子生徒常に引き連れてたり、戦闘で喰いながら必殺技連打する青い髪の男が。

納得の判定だな。

やがて彼女はナツルたちがいる教室の入り口にたどり着き——

「どうだい？私について自分の才能を開花させてみないかい？」
「え？私？」

——クリーム色の髪をした少女に手を差し出した。
「ってそっち!!？」

「ちよつとお！なんでそっちの方行っちゃうんですか!？」
我慢ができなくて思わずツツコミを入れる。

「もっと相応しいのいるでしょう、これっコレ！この青いの!!」

「おい人を指差すなよ」
うるさいちよつと黙れ！

「そいつはMだね。」

「えっ？」

エム？

えむ。

エム。

「え？ナツルおまつ、Mなの？」

「…？俺はNだけど」

イニシャルの話じゃねえよ!!

「ナツル本当にマゾなのか？とても信じられないんだけど…」

昨日だつて躊躇なくガクトに"気"を放つて昏倒させたし、聞いた話じゃ吉井を換気扇に突っ込んで処刑しようとしたらしいし、とても肉体的精神的苦痛を喜ぶようなタイプじゃ…まてよ。

「ナツル。お前がいつも呂布に好き勝手に付き纏われても邪険にしないのは『こんな無害な見た目の奴にいいようにやられてる俺』みたいな感じで性的快感を得ているから…なんてことないよな？」

……………

「…………何を言つとるのかねキミは」

一瞬の間が空いた後、ナツルが口を開く。

「俺がそんな変態なワケないだろう?」

さらにh a h a h a、と声を上げて笑い、俺の言葉を否定する。

でも顔はまったく笑ってない。

さらにその瞳は深淵のように黒く、見ていると精神が不安定になってきそうだ。いつもは青色なのに。

どっちだ。

とても気になるがこの話題を引きずるのは危険な気がしてきた。こいつがSなのかMなのか、それは永遠の謎にしておこう。

こんな吉井と坂本がいない時に……来てくれてよかったのかな？
あの二人がいても騒ぎが大きくなっただけかもしれない。
いやでもやっぱりいてくれた方がよかつたかなあ？ 普段無駄に
鋭いくせに、殺伐とした店内の様子に気づいてないかのように会話続
けるし。

「私らのこと忘れたのかい？ まあ一度会っただけだしねえ」

「あいにく……いや待った、なんか覚えがあるぞ。確か……『ウチ魔法少女になる！』とか言いながらゴルフクラブ振り回してたイカれたツインテと、それを止めようとしてた姉二人だったな」

「ちげーよ！ とくにウチのくだりが!!」

「なんでそう中途半端に覚えてるんだい……辰に殴られたからかい？」
「……!」

アミ姉と呼ばれている女性の口から『殴られた』という台詞が出た
途端、 呂布の全身からオーラののようなものが発せられた。

「そんなことあったっけ？ てか辰って誰？」

「あんたに抱きついてた娘だよ。 ……そういや自己紹介途中だったね。

板垣亜美だよ」

「私は辰子」

「………天……」

「マジカル☆エンジェル天か」

「ちっげーよツツ!! なんて言ってもねーのにウチの名前知ってんだよ
!？」

「え、お前エンジェルって名前なの？ DQNじゃん」

「またゴルフクラブ頭にぶちかましてやろうか!？」

「……!!」

ゴオウツ!!

「うわっ!？」

なっなんだ!!

突然呂布から突風のような圧が放たれ、思わず身を竦ませる。

これって……“気”か!?使えたの!?

「主、傷つける奴、コロス!!」

「ヒイツ!!」

修羅の闘志纏いながらぶつつ騒なこと言い出した……!!なんか“気”が額に集中してツノが生えてるみたく見える!熱気がすごい!

「おおい主君!従者が暴走してるぞ!早く止めろ!!」

「怪我人が出そうになつたらな」

「い・ま!止めろ!店が壊れる!!」

「えー」

「分かった、なにか飲み物一つ奢るから!」

「ケチくせえなあ、まーしょうがねえ。分かったよ」

なんでそんなローテンションなんだよ!呂布の方は爆発寸前なのに……温度差がひどい。

「おおい呂布ちゃんやい。その辺にしときなさいや、傷つけるつつつても覚えてないし気にもしてないから」

「だめ!主の敵、コロス!」

「あ?」

——呂布のせいで上がっていた店内の温度が、一気に下がった。

……これは……まさか……!

「熱を操る大魔法『パイナップルフラッシュ』……まさかこんな身近に使い手がいたなんて……!」

「大和って本っ当ナツルに似てきたよな」

「うん。でもそんなところも好き」

最近は「ナツルに似てる」って言われてもショックを受けなくなってきた。

そしてお友だちで。

「聞き間違いかな…今俺の言うことが聞けないって言ったか？」

「……！」

「人のことを『主』とかほざくくせに、ずいぶん偉くなったもんだな。舐めてるのか？俺をペロペロ舐めてんのか？舐めてんだな。何味だ？」

ナツル節が炸裂する中、呂布の顔色がどんどん悪くなっていく。

ヤ○ザのやり取りみたいだ。店の印象悪くなるから他所でやってくんないかな。

「別に俺の言うことに全て従えたー言わねえ。だがな、どんな行動がどんな結果に繋がるのか、そこんとこよく考えるこつたな」

「………？」

「分からんか？まーおいおい覚えていけばいいさ。ちなみに俺はブルーハワイだ。青いから」

ちよつといいこと言つたみたいなき感じだったのに、どうして最後に必ずオチを付けるかな。

ナツルらしいっちゃらしいけど、こういうところがあるせいでモテないんだよ。

☆

★

☆

「ナツルくん」

突然青い髪の美少女——辰子、とか言つたっけ——がナツルに抱きつく。

「うおうっ？」

「守ってくれてありがとう。優しくてーやっぱりかっこいいねっ」

「やるじゃないか。見直したよ」

「正直マジでびびったから助かったぜ…」

「……！」

辰子さんを皮切りに残りの二人がより一層、気安い感じに近づいていく。

それを見て呂布が再び嫉妬。険しいオーラを放つ。

おかしいな？ ナツルはモテないって話した直後なのに…なんで女子に囲まれてるんだ？

「……………」

「……………」

「……………」

『……………』

ああ、クラス男子が虚な表情で黒装束身につけ出した。

なんかもう俺も被つちやおうかな。

「だ…ダメ…っ…っ…」

騒ぎの中心にいるナツルの服の裾を、呂布がおずおずと握るように摘む。

「主…取つちや、ダメ…!!」

その姿は先ほどまでとはまるで違い、捨てられた小動物のように弱々しい。

すごいギャップだ…!! 姉さんやナツルと同等かそれ以上の武力を持っているのに、無性に保護欲を掻き立てられる。

萌えでダメージを受けるナツルなんて吐血ものだろう。

「いや呂布ちゃん、俺は俺自身のものなんだけど」

平然と見つめ返してる!? なんぞ!?

おかしいな設定のせいでいつも瀕死になってるのに…慣れたのか?

「えくナツルくん、私のものになってくれない? 駄目?」

「ダメに決まってるだろーが。頭パープリンかあんた」

「そんなあ…あ、じゃあ、弟は? 駄目?」

『『じゃあ』の意味が分かんねーんだけど。ていうか年上?』

「こらこらみんな、人目がある所で刃物なんて研ぐんじゃあない。

あと誰か、漁業部から投網を借りてきてくれないか？

何に使うとは言わないけど素早く動く相手を捕えるには必要だろうから。」

「……俺の一つ上かよ……調子狂うな……つーか弟になれってどうすんのよ。杯でも交わすの？」

「おー。三国志？」

「産まれし日は違えども、死すときは同じ……!!」

「……だ……ダメっ!」

「ん？」

呂布が慌てた様子でナツルの右腕を引っ張る。

よくは分からないけど今のやり取りは彼女の心の琴線に触れたようだ。

さっきの修羅のような危なさはないが、必死さは伝わってくる。

「ナツルくん取っちゃ駄目だよー!」

「おおう」

負けじと辰子さんがナツルの左腕を引っ張る。

丁度両サイドで腕を引っ張られて綱引きされるみたいな状態になった。

二人ともに力が強いのか、引かれているナツルが一瞬苦痛に顔を歪める。

「っっ」

「……!!」

それを見て呂布が即座に手を離した。

彼女が真の母だったようだ。

しかし急に片方の力が抜けたためにバランスが崩れて――

「お?」

「え?」

ぽよん……

辰子さんの豊かな胸に、ナツルが顔からダイブした。

「ゴメンなさつ——!!」

「わーい。ナツルくん」

「わぷっ!」

慌てて飛び退こうとしたがそれよりも早く腕が伸びて、再び胸の中に顔が埋まる。

「……!!」

むにゅ

負けじと呂布が背後側からナツルに抱きつく。

「……!!」

「んん……くせになりそう……」

褐色肌の赤い髪的美少女と、白い肌の青い髪的美少女が競うように身体を押し付けあう。

教室内のS A N値が大暴落していくのを確かにカンジル……

「っだー……!!息苦暑いきくるあつい!のぼせる!離れろ!!」

真ん中で挟まれていた男が大声を上げて無理やり二人を引き離す。

窒息しかけたせいかな、それとも他の理由か、その顔は真っ赤だ。

「……おかしい、絶対におかしい……俺はギャグ系の主人公なのに……なんでこんなラブコメの主人公みたいな目にあうんだ……?」

小声でなんかぶつぶつ言ってる。よく分からないけどメタなこと止めろ。

あとブツクロス……

71時間目 ノロイノシユレッダー

「許せねえ……!!」

「ん？」

「なんか今聞こえたぞ？」

「人前で美人なお姉さんと平気でイチヤイチャしやがって！うらやま——うらやまねたましいぞキサマアツツ!!」

黒装束に身を包んだ人物が、同じ格好をした集団から外れてナツルたちと対峙する。

姿はわからないけどその声は…須川！

その身には血涙を流さんばかりの気迫を纏って——ってよく見たら頭中の目の辺りから赤い液体が流れている。実際に泣いてるのか。言い直したけど本音だだ漏れだしな。

「お前のような不埒なヤツはたとえ神が許しても俺が許さねえ!!くたばれマゾ野郎!!」

台詞が終わると同時に素早い動きでナツルに近づき、拳を振り上げる。

普段の体育とかで見せる動きとは段違いだ！嫉妬パワーか？

前回は呂布が攻撃を防いでいたけど、今回は反応出来ていないみたいだ。これは…当たる!?

「ギヤラクティカイリユージュオン!!」

「ギヤアアアア!!」

ナツルが腕を振るうと、黒煙のような闇が太い鞭のように広がりカウンターで決まった。

正直、失敗する予感はずしてた。

「私、いたずらに人を傷つける人にはときめかないから」
お前自身が『人をいたずらに傷つける奴』だろうが。なんだその悲しげな表情。

「あー…あー!!!」

今度はなんだ!?

闇の攻撃で吹っ飛ばされた須川が、尻餅をつくような形で床に座り込んで喚き出す。

「くつ、クモが…クモがあー…あそこ…あそこ…あぁー!!あつちにも! あぁーこつちにも! ここはクモが住うところだぁぁー!!!」

「なるほど。これがギャラクテイカイリユージョンの効果か。相手を恐慌状態にするみたいだな」

「人を技の実験台にするな!」それもクラスメイトを!

「いやダメー人形にやっても効果ないから実際に人に使って確かめるしかないだろ」

「悪びれるよ少しは!」

「先に手を出したの向こうだぞ」

そうだけだ!

頭を抱え、怯えて取り乱してる姿を見て何か思うことはないのか!?

「うーむ…そう言われるとちと心が痛むぜ」

「だろう!?!」

「確かにこうまで乱心してるヤツにどーこうしようとするのはとても男らしくない事だ。とても後味の悪い呪いのローラー!!」

「ぎゃあああああ!!」

台詞の途中で必殺技決めやがった!
フエイバリット

どこからか(多分イベントリ)取り出した白く四角い物体を頭から須川に押し付けて、反対側から天突きで押し出されるところでんのように——ってあれローラーじゃねえ! シュレッダーだ!!

「うわあああ須川ああっつ!!」

多くの人間が見守る教室内で、あつという間に人ひとりが碁子麵のように細長く細断される。

それらは重力に従い地面へと——落ちる前に引き寄せられるように空中を漂う。

あらよつと!

「お前はコックカあビィ!」

浮かんでいた碁子麵（須川）が行き着いた先には、コック帽を被りお玉とフライパンを持った木彫りの人形がいた。

カあビィシリーズは初日にあらかた壊されたが、アレはなぜか厨房に配置されていたために破壊を免れた。

後で厨房を担当している土屋に聞いてみたところ、ちよいちよい手伝ってくれて大変助かったそうさ。昔話とかに出てくる妖精か。

そんな人形のすぐ側には人ひとりが入りそうな大きな鍋が置いてあり、そこに須川が吸い込まれていく。

全てが鍋の中に収まると——手に持っていたお玉で鍋をかき混ぜる。

時おり調味料らしき小瓶を振るってはまた混ぜるを繰り返して、中身をお椀によそう。

おあがりよ!

「え、俺?」

コックカあビィがたっぷりと汁と麵が入ったお椀を勢いよく俺に差し出した。

……………これ全部須川なんだよな……

血が一滴も流れてないせいか、いまいちスプラッタな雰囲気か沸い

てこないが、中身がクラスメイトなのは間違いない。
召し上がりたくないなあ。

おあがりよ……？

躊躇っているとカアビイが無言で近づいてきて、圧力をかけてくる。

わかった、分かったよ……！

このまま拒否し続けるとどうなるか、どう考えてもろくな結果にならないので大人しく従つとこう。

おずおずとお碗を受け取り、意を決して口につけた……

ズズー ぶっ!!

「げほっ、ごほっ！マズっ!!」

口に含まんだ瞬間、なにか感想を思い浮かべる暇なく反射的に口の中のものを吐き出す。

「ペッペッ！不味い！須川汁、超マツツズイ!!」

今日この時この場所にいたことを後悔するほどのマズさだ！

ハラ立つマズさ！

「そこまで言うことないじゃないか……」

コックカアビイがくれた水（500mlペットボトル）で念入りに口を濯いでいると、鍋の中から全身ずぶ濡れになりながら須川が現る。

そういう復活の仕方？

「なんか言ったか？」↑ナツル

「いえっ、なにも言ってません！」

「いや言っただろ。俺のことマゾとかなんとか——」

「滅相もない！瀬能さんはとても素晴らしく、尊敬できる偉大な人物であります!!」

「どうも」

血を吐きそうなくらい必死な台詞を素っ気なく：興味くらい持つてやれ。

「須川！なんだよ今の言い方!?らしくないぞ!!」

「そうだそうだ!」

「異端審問会の会長なんだからもつと毅然とした態度を取れよ!全力で媚びんな!」

「うるせー!!!ならお前らが行けよ!!もう麵料理の材料になるのはイヤだ!」

よっぽど怖かったんだな、顔面蒼白で今にも死にそうなまさに必死な形相だ。

ナツルに暴力で意思を通そうとするのはやめよう。

72時間目 キマグレでワガママでヒネクレ

やり取りがひと段落したのを察して、皆んなが後片付けを始める。

「ところでナツル、その二人はいったい誰なんだ？」

最初から最後まで置いてきぼりを食らっていた顔も知らない男女に目を向ける。

観客みたいにじっとして一言も喋らなかつたけど、ナツルの知り合いだよな？

「あ、忘れてた。悪いな善くん玲ちゃん」

ずっと廊下に立っていた二人に慌てて駆け寄るナツル。

……男の方が善で、女の子の方が玲、かな？

「終わったのか？」

「まあ一区切りはついたけど……玲ちゃん飯食ってたんだな。通りで静かだったわけだ」

クリーム色の髪をした少女がドーナツツツやらアメリカンドックやらをもぐもぐと無言で食べている。

さつき勧誘されてたはずだけど、その話はどうなったんだ？

「コレが俺が所属してるFクラスなんだが……あー……騒がしくてすまんね、マジで」

「ナツルくんなんであやまるの？みんな仲良しじゃない。ね、善！」

「賑やかだとは思う」

「そんなフオローいいから。黒頭巾被って青色のカツラつけた人形に鉈を振り下ろしてる奴らがいるんだぜ。ドン引きだろ？」

「きみによく合っているんじゃないか？」

……

ナツルは無言で教室の角へと歩み寄り、壁に向かって俯きながら体

育座りをし始めた。

お似合いって言われたの相当こたえたみたいだな…

「…………ストレートに傷ついた…」

「どうした瀬能。ひどく落ち込んでいるように見えるが」

「パンチの効いた皮肉言つといてよくもまあぬけぬけと…」

「皮肉…？単純にクラスに馴染めているということを言いたかったのだが、気を悪くしたのなら謝ろう」

「お前よく恥ずかしげもなく言えるよなそういうの」

呆れた様子で立ち上がり善たちの元へと戻ってくる。

「馴染めていないのか？」

「まあ一年の時よりはクラスメイトと仲良くしてるかな。他んどこだところな風には——ってなに言わせんだおめーは!？」

…びつくりした。

何にびつくりって、思わぬところでナツルの胸の内を知ったことだ。

なぜかやたらと演技が上手いから、もしかしたら本当は俺たちに心を開いてないんじゃないかって思って心配してただけ…杞憂だったんだな。

迷惑なら打ち上げに呼ぶのもやめようかと考えてたけど（ゲンさんが出席辞退したし）、やっぱりナツルにも連絡はしとくか。

「あーもー、ヤメだヤメ！この話題やめ！約束通り案内はしたし問題も解決したから、直江の奢りの飲み物飲んだらさっさと他行くぞ!!」
「覚えてたか」流石にさっきの今だしな。

ただ俺が言ったのはナツルひとりだけに対してなんだが、いつの間にか呂布を含め四人全員に奢る流れになっている。抜け目ない奴だ。

「ナツルくん食べ物はダメ？」

「あんまり長居したくないんだよ。なんか呪われそうだし」

ナツルと善、玲の二人、それに呂布が四人席に座る。

その背後では黒頭巾のクラスメイトたちが何体目かのナツルの顔写真が貼られたわら人形にハンマーで釘を打ち立ててる。せめて見えない所でやれ。

…ここで奢らないとか言ったらまた一悶着ありそうだな。

そうなたらとても面倒なので、諦めて全員分代わりに支払おう。

「(注)注文は？」

辰子さんたち三人が来た時点で男子の大半が嫉妬の権化と化し、店が回らなくなったので、現在Fクラスは一時的に閉店状態になっている。

ウエイトレスやってた女子陣はこれ幸いと学園祭を満喫しに行つたし、ファミリーのみんな以外のまともなメンツもどっか行っちゃったから、仕方なく俺が給仕をするしかない。

調理は無理だから頼まれても出せなかったな。

「コーラ」

「えっと、私はカルピスがいいです！」

「玲と同じものを」

「……ウーロン茶……」

はいはい、コーラとウーロン茶が一つづつにカルピスが二つか。

呂布がウーロン茶なのはやっぱり中国産まれの偉人のクロードだからか？

「ってナツルはコーラなのか？」

厨房へ向かおうとした矢先、咄嗟に立ち止まって振り返る。

「なんだ。コーラ無いの？」

「いやそういうわけじゃないけど……」今まで飲んでるところ見たことがない。

それはコーラに限らず、炭酸が入ってるもの全般にも言える。

だいたい飲むのはポカリかジュースだった。だから炭酸苦手なんだと思ってたんだが……

「あんまり飲まないだけで飲むときは飲むぞ」

「そうなんだ…」

俺たちと一緒に時は手につけもしないのに、自分から進んでの見たくなるような気分させられる。

善・玲・呂布この子たちはそういう相手なんだな…ちよつと嫉妬するぜ。

「二人とはどういう経緯で仲良くなったんだ？」

気になったのでナツルに聞いてみる。

「…経緯？」

「そうだよ。あるだろ、どんなきつかけで知り合ったとか」

俺の言葉にナツルは顎に手を当てて教室の上の方を見つめ、そのまましばらく…

一分ほど待ったが一向に口を開こうとしない。

おいまさか、

「忘れたのか？」

「…：人との出会いは引力だ。近づき触れ合うことに意味や理由なんていらぬ。それなのに言葉にしるだなんて、ヤボだと思わぬか？」

「忘れたんだな」

「ヤダ直江くんのエツチ！そんなこと聞きたがるなんて、ハレンチよ！変態！尻フェチ!!」

「一番最後のは否定しないけど」尋ねただけでハレンチ扱いされる馴れ初めってなに？

「どつと飲みもん持ってこいよ。早く立ち去りたいんだから」

そう言つて視線を向けた先には、破壊されたマネキンの小山が。

いったん片付けないみんな？

「さつさと俺をこの場から追い出した方がいいんじゃないのかね？」

その意見には同意だが、言つて悲しくないか？

☆

★

☆

コーラやウーロン茶はいいけど、カルピスは何味がいいか訊いてなかつたな…種類多いからちよつと迷つちやつたよ。

プレーンにしたけど最悪奢りだからってことで許して貰おう。

「あれ、みんなは？」

厨房から店スペースに戻ってくると、クラスの男子（黒頭巾被ってた奴ら）の姿が消えていた。

「まさかナツルの逆鱗に触れて異次元に……！」

「…神頼み？」

「なんだそりゃ」

「いやなんか、三年でどっか笹使った企画出してただろ」

三年生の企画…ああ、Cクラスがやってたな。

確か『未完成アート展』とか…

「その笹に願い事書いて吊すと願いが叶うとか何とかって噂を信じて出てったぞ」

「あいつら…」神様にナツルを痛めつけてもらいにでも行ったのか？

みんな信じたのかなそんなジंकス…ガクトはともかく、キャップやモロもないし。残ってるのゲンさんだけじゃないか。

閉めてるとはいえ、ひとりだけ残して店を後にするなよ。

「ゲンさんはなんで残ったの？」

「あ？…興味ねえからだ」

窓際の席で所在なげに一人座っていたゲンさんは、ぶっきらぼうに答える。

「本当は店員が直江だけになるのを防ぐためだろ。源くんやっさしいー」

「えっ…ゲンさんそんな、俺のために…！」

「てめえら……」

ナツルの言葉に青筋を立てるゲンさん。

そんな本気で怒らなくても…

「ナツルは行かないのか？」

見たところ飲み物も飲み終わったみたいだ。

今はイベントリから出したであろう大量の食料を四人でシェアしている。

「もうちよつと休んでく」

「…とか言って本当は俺のために…！」

「そーですねー」

軽くあしらわれた。ちよつと寂しい。

「ちなみにCクラスの出し物にはすでに行った」

「あ、そうなんだ。ちなみになんて書いたんだ？」

「人に喋ったら叶わなくなりそうだから言わない」

……どんな願い事をしたんだろう。なぜかすごい気になる。

73 時間目 彼が彼女（たち）に出会ったワケ

数えるくらいしか居なくなつた店内で、思い思いに時を過ごしている。

ゲンさんは俺と交代するように厨房に向かい、そのまま籠りっぱなし。

ナツルたち四人は楽しそうに談笑。あいつのあんな裏表ない笑顔初めてかもしれない。

板垣の三姉妹はそんなナツルたちの輪に溶けこんでいる。

辰子さんはナツルにべつたりで、それに対抗してるのか呂布の主との距離がいつもより近い。

エンジェルはナツルがイベントリから取り出したゲーム機で玲たちと遊んでいて、亜美さんはそれを優しく見守っている。

あれ、もしかして俺今ぼっち？

そんなつ、ギャルゲ界でも屈指のイケメンな俺がつ！

.....

「おいナツル、ちゃんとつつこんでくれよ」

「なにを？」

何をつてお前...分かってるんだろ？いちいち言わせるなよ。

知ってるんだぞ、辰子さんに抱きつかれたままでも教室全体の気配を察してるの。

「あー？突つ込むとかナニとか、おめーまさかソツチ系か？」

「おや、竜と同類かい。連れて来た方がよかつたかね」

「あ、あらぬ誤解！」断じて違いますよお二人さん！

ソツチ系つてそう言うことだよな？京が大好きな部類の男同士のとかのあれだよな!？」

「……………」

…？突然辰子さんが悲しげな表情を…？

「……もつと普通の性癖の弟が欲しかった…」

「なんすかいきなり」

「ゲイの弟なんてほしくなかった……！」

「そんなストレートに！」

ナツルに抱きついたままいきなりさめざめと泣き始めた。

情緒不安定すぎる。さっきまで楽しそうにしていたのに…いったい何が？

……ん？あの手に持つてるのは…？

「川神水？」

「あ、間違えて一緒に出してたのか」

ナツルおまえの私物かよ！申請してないのに勝手に販売してたのかと思っ
たじゃないか！

ていいうかなんで持つてんだよ!?

「酔鉄山の極み使うには酔ってないといけないから」

「使ったことないだろ一度も!!」

そもそも本家である鉄山てつざん靠たかを使えるから必要ないんじゃないか？

「ナツルくんみたいに、優しくてカツコよくて……普通でっ」

「あ？」

あ、まずい。その単語は。

「普通？普通だと!?この俺がか!!」

「なつナツル、ちよつと落ち着いて」

「これが普通のすることかー……!!」

叫ぶように大声を上げると同時に、ナツルの体が下方向へ落ちるよ
うに沈み込む。

ごろん……………

そして青色の髪をした男の頭部が床に転がる。
落ちるようになっていか実際に落ちていた。

つて——

「うわああああああああ!!?」

くっ首! ナツルのっ、ナツルが生首が!!

頭だけじゃなくて手や足、腕・脚・胴体が次々に床の上へ落ちていく。

それらはテーブルから少し離れた場所まで転がって行って……

パズルでも組み立てるように繋がり合い、立ち上がったひとりの人間の姿を形作る。

最後に元気よく両手を広げて

「はいっー!」

ニヒルな笑顔を見せた。

一瞬でも本気でビビって心配した俺が馬鹿だった。

「これが覚悟ってことだぜ…:No. 6」

「誰がNo. 6だ」ブチャ●テイカ

「な…:なんだ今の…:何が起きたんだよ?」

ゲームをしていたエンジェルがドン引きの表情で質問してくる。

「やった! 勝った、勝ったよ善!」

「そうか。よかったな」

その隣で対戦相手の玲が無邪気に喜び、善が無表情で相槌を打つ。
すぐ側で異常な光景が繰り広げられたというのに、少しも動じた様子がない。

より近くにいた呂布も気にしていないようだ。抱きついていた辰子
さんは…:寝てる!?! 神経太すぎじゃない!?

亜美さんだつて若干顔を青くさせてるのに…:平常運転な方が多い

のなんで？

「今の見てなかったのか？」

「瀬能がバラバラになったことか？彼ならばあれぐらい容易いだろう」

「私、テレビでおんなじようなことしてる人、見たことあります！」

多分それは手品だよ。

「……………」

『なにかおかしいですか？』みたいな顔するなよ、おかしいのはお前の主だから！人間の皮被った化け物だから！」

「善くん玲ちゃん。コイツ（直江）に敬語使わなくていいから」

「はーい！」「分かった」

「さらつとなに言ってるのお前!？」

敬語云々とか…もしかしてこの二人って下級生？

「…………明らかに今人知を超えた行為が行われたはずなんだがねえ…あまり驚いてるように見えないのはなんでなのかね…」

亜美さんが呆れたように呟く。

「俺は本気で驚いたんですけど」

「師匠が手も足も出ねーて負けたってのもナツトクなんだぜ」

あの、お願いだから無視しないでくれません…？

「師匠?」

「一月ほど前にアンタに挑んで返り討ちにあつたって言ってたんだけど…覚えてないのかい？」

「全然」

少しは考えろよ。興味なさげに席に戻りやがって。

あと、年上相手に馴れ馴れしくないか？敬語とか使わないの？

「本当かい？ざんばら髪で無精髭で、だらしない服装した胡散臭いおっさんなんだけど」

「ああ、アレかな」

心当たりあるんかい。

その説明で分かる方もあれだけど、師匠とか読んでる人を胡散臭いおっさんとか言っているのか？

「あーん？やっぱり師匠ボコったのテメーなのか？」

「ボコった…：そうなのかな。あの時結構上の空だったから…」

顎に手を当てて天井を見つめるナツル。

そのポーズしよっちゆうしてるけど考えごとするときの癖なのかな。

「まあそういう訳で、先月私らは師匠の敵討ちのためにアンタに挑んだのさ」

「あのおっさん死んだのか」

「死んでねーよ！勝手に殺すな！」

「雨降ってる中一晩中放置されたから、高熱出して生死の境をさ迷ったみたいだけどね」

挑んで返り討ちにあったって言ってるから、倒した後ほっといても問題はないんだろうけど…：雨の日くらい相手を気づかってやれよ。

「仕方ないんだ…：あの時は肉井買った帰りだったから」

「どんな言い訳だよ」人命を優先しろ人命を。

「それならしょうがないね」

「ウチにはコイツを責められねーぜ…」

「ウソお!？」

まさかの共感!？」

いいの!?!自分らの師匠でしょ?!

「ものが必死に頼みこんで持ち帰りにしてもらった愛屋のスペシャル肉井だったからな。早く家に行って食わねばって考えてた時に絡まれたからつい…」

「ナツルくんは悪くないよ！」

「…：(こくこく)」

「よく分からないがそうだな」

「分からないなら納得するな!!」

「直江うるさい。静かにしろ」

おっ、俺が悪いのか？俺がおかしいのか！？
まったく釈然としない！

「ていうかイベントリに入れとけばいいだろ。持ち運びのとき」

「なんか入らなかつた」

「ええ…なにそれ怖い。どういうこと？」

74時間目 用法容量を守り正しくお使いください

〈ナツルSide〉

「つーかあんたら、あの胡散臭いおっさんを師匠って…いったいなにを教わってんだよ」

前回(※) 18時間目 SWK)の戦いを軽く振り返ってみたが、自由奔放にやってたように見えたけど。

師匠って呼び名から勝手に戦闘って考えたけど実は違うのか？賭博とか？

「武術だぜ！師匠はウチら4人全員の師匠なんだ！」

「ファイトスタイルがみんな違うみたいだけど」

使ってた武器も違うし。バス停とかゴルフクラブとか。

いやまあ、ムチャクチャって点では一緒だけどさ。

「それぞれに合った戦い方教えるのがすっげーうまいんだぜ！リュウとタツ姉は格闘術で、アミ姉は棒術だ！」

「…ムチ使ってたかった？」

※ガッツリ使ってみました。

「アミ姉ぐらいになるとぐにやぐにやしたものでも棒みたいにビシッ！となつちやうんだぜ！」

「"気"で固定化してるだけけどね」

「なんでもないように言ってるけど十分凄くない？」 "気"を使えるって時点で。

なんだかんだ言って使い手ほとんど見かけないからな。

「お前はどんなの習ってたよ」

「護身術だ！それだけだどつまんねーからゴルフクラブも使ってたけどな！」

「そんな理由で武器にしてたの？」

訳分かんねーよマジで。つーか護身で武器フルスイングすんなし。

「個性引き出そうとして本筋見失ってるじゃねえか。原点に帰れ」

「意味分かんねーよ!どこだよ原点って!」

使い手であるお前が知らないのに俺が知るか。

「あと辰さんやたら強くない?」

「まあ私らの中で頭一つ抜きんでてるのは確かだね」

だよね。

どっちかって言うのと防御寄りの俺をふらつかせる威力のパンチとか、もはや反則だから。(※お前が反則言うな)

そんな彼女は今、俺の隣で幸せそうに眠っている。

強くてマイペース。呂布ちゃんと同じタイプだな。

「ふふんっ。タツ姉が強いのはジジツだけだよー、ウチだって結構やるんだぜ?」

「自称乙」

もうひとりの姉との連携で決定打を与えられないのに、一人でも強いとか説得力無いんですけど。

「てめーウチを舐めてんな!?クソ、見てろよ!薬使えばてめーなんて…!」

「あーん?」なんだ、いきなりポケット漁り出したぞ?

緋色ツインテが取り出したのは野球ボールほどの大きさのガラスビン。こげ茶な色合いから察するに薬ビンか?

——パシツツ

「あ!?!」

フタを開けようと一瞬動きが止まった隙について、素早くビンを奪い取る。

その際にカラカラと音がした。結構中身入ってるな。

「かつ、返せよテメー!」

「なんだこりゃ。サプリメントか?」

「ちげえよ興奮剤だ！」

興奮剤い？なんだそりや。

いやなんか聞いたことあるな…確か……

「最近急に流行り出したドラッグの一瞬だったかな。少ないリスクでお手軽に強くなれるとか」

「詳しいなナツル」

「まあちよつとな」

街中の噂が集まりやすいところでバイトしてるから。

最近では生徒会とかに入れたせいで全然顔を出せてな——やめよう。話が長くなる。

「だったらなんだってんだ!? センコーみてーに説教でもすんのか！」

「いや別に」しないけど。

自分の意思で決めたらならドラッグでもなんでも勝手にやりやあいい。自分の人生だ、自分の好きにやっていいじゃない。人間だもの。

ただ他人、もつと言えは俺に迷惑をかけるんなら全力でブチコロス。加減はしねえ。

「ジャックハ●マーだつてドーピングしよつちゆうしてるし、強くなる過程なんて人それぞれだ。ただな……」

「ただ？」

「これで俺に勝つのは無理だな」

手に持つてるピンをカラカラとこれ見よがしに振る。

「外部から何かを得ようとするところに隙が生まれる。大概は呆気に取られるかもしれないが、その隙について致命傷を与えられる奴なんてごまんといえるのだよ！」

「なつ、なんだつてー！」

ツインテが両方の髪を雷のようにカクカクつと逆立たせて驚愕する。

ノリのいい子は好きさ。どうやってんのそれ？

「でもそれってどうしようもないんじゃない？」

「ドーピングってのは薬物摂取で身体能力を高めることだから、たしかにどうしようもないね」

直江と亜美さんが会話に割り込んでくる。

「相手に出会う前から服用でもするのかい？」

「中毒になっちゃうでしょ…それよりもっとお手軽で安全な方法がある」

「お手軽で安全って…ドラッグでそんなのあるのか？」

「自分の体内で生成して摂取する」

.....

「えいつ、やつ、とおっ！」

「む…玲は強いな」

無邪気に対戦ゲームを楽しむ善くと玲ちゃんの二人。

さらに店の外から喧騒が途切れることなく聞こえるというのに、室内に静寂が流れた。

「体内で生成って…」

「動物は体内でビタミンCとか作れるって聞いたぞ」

「人や猿なんかの霊長類は無理なんだよ」

そうなのか？

「いや今のは例えだ。生物はな、脳内麻薬ってものを作ることができてな」

「アドレナリンとかエンドルフィンだろ。アレはマラソンで全力疾走とか、極限まで自分を追い込んで初めて分泌されるものだろう」

「俺は好きなタイミングで出せるけど」

.....

またしても静寂が訪れる。
なんで？

「やあっつ!!」

「むっ…負けてしまったな。今のがコンボか？」

こっちは相変わらずだし。

「今なんて言った？」

「好きなタイミングで出せるって。別に珍しくもないだろ。モモさんだってできるだろうし」

「姉さんも？」

まああの人の場合無意識な部分多いだろうけど。

いやそれだと普通の人間もやってるか？よく分からなくなってきた。

「どーやんだよ？」

「脳内麻薬の出し方か？人それぞれらしいけど俺はこう、耳を…」

喋りながら左手で耳を掴み、

コンロのつまみを回すように捻る。

シャキーン!!

「エ・ク・ス・タ・スイ〜〜!!」 漲って、きたあ!!!

「……………」

「……………」

「……………」

「……………(ぐくぐく)」

「くう…すう…」

「善またその人にするの？」

「ようやく少し操作方法に慣れてきたからな」

…上がってたテンションが急速に下がったわ。

だからやらねえんだ俺…普段から高いし。もうやんない。

「ちなみにこの脳内麻薬を利用した広範囲技が俺にはある。その名もステインキングガス…」

「(エンドルフィンスモークじゃないんだ…)」

「前に一度囲まれた時に使ったら狂ったように叫びながら同士討ちし始めたなあ」

「頼むから俺がいる時に使うのだけはやめてくれ」

75時間目 Tank

「さて。一服したしそろそろ行くか」

エンドルフィン分泌して、その効果が消えたから冷静に物事を見れるようになった。考察した結果…

全員が手持ち無沙汰やら暇を持って余してるようだ。ゴメンね？

「なんだ、どこか行く予定でもあるのか？」

「ないけど」

椅子から腰を浮かせたところで直江が声をかけてくる。

「だったら、もうちよつといてもいいだろう。そんな用件終わったらすぐ帰るとか仕事みたいな対応取らなくても」

「結構ダベってたよ？」

四話分ぐらい座って喋ってたよ？

この教室に来てからならもつと長く居たよ、十分じゃない？

「もうちよつと！もう少しだけ居て！一人で店番するの辛いから！」

「知るか」

「俺と一緒に友好を温めないか…？」

「きもい」

マジきもい

コイツこんなウザいキャラだったっけ。俺の影響で変化したの？

もはや変異レベルだよ。暴走してるよ。もう完全に俺の手を離れたみたいだから俺のせいじゃないよね。

「ナツルくん、別に私たちのこと気づかわなくてもいいよ？」

「ほら！後輩の子もこう言ってるし、まだまだ時間潰せるぜ！」

「席に座るな」

わざわざ他の卓から椅子持ってきてやがって。ウェイターなら立つてろ。

「ぶつちやけさー、やな予感がするんだよね。具体的には姫路が来て手料理振る舞うとかさ」

「本当に具体的だな」

『自クラス』で『飲食』ときたら、もうオチは決まってるだろう。タイトルは劇物撮取でナツルくん死すだ。

俺はそのオチを全力でぶち壊す。

「その姫路という人物に料理されるのはまずいのか？」

「マズいなんてもんじゃねえ、この世の地獄を文字通り味わうぜ」

「意味がよく分からないのだが…」

「美術部のハズレアイスが出てくると思ってくれ」

ガタンっ

「あるじ、主っ、早く、早く行こう。早くっ」

今までボーっとしていた呂布ちゃんが急に立ち上がり、俺の袖口を掴んで早口で捲し立てる。ハズレアイスが余程こたえたみたいだな。

「つーか呂布ちゃん、いつもFクラスに入り浸ってクラスメイト全員と顔見知りだろ？姫路の料理の腕がヤバイって——知ったのは清涼祭始まってからか。しかも俺だけ。」

呂布ちゃんそもそも最近ウチのクラス来なかつたしな……来たところで誰かと喋ってるってこと見たことねえ。もう少し他人と交流持つて欲しいようなそうでもないような。

「主っ早くっ、」

「分かった分かったよ」

半ば持ち上げるように（ていうかほとんど浮いてる）俺を引っ張る呂布ちゃんを宥めながら立ち上がる。

流星にここまで必死な彼女を引き止めようとは直江も思わんだろ

う。やったら殴って黙らせる。

さて次はどこの出し物へ行こうか――

ガラガラっ

「ただ今戻りましたー」

「あー楽しかったー!」

「ハイッ!ものすつごく楽しかったです!!」

「ふふっ、よかったですね葉月ちゃんっ」

唐突に扉を開けて見知った女子陣が室内に入ってきた。

……遅かったか…

あと一時間くらい徘徊してりやあよかったのに。

呂布ちゃんが顔を真っ青にして抱きついてきたじゃねえか。

服越しに感じる柔らかな肢体に思わずドキッとしてしまうのが思春期の悲しいサガ。

呂布ちゃんは別の意味でドキドキしてるのに…

「心配すんなよ」

「……………?」

「呂布ちゃんと玲ちゃんと善くんぐらい、俺が全力で守ってやるさ」

自分の意思とはいえ、この場所に連れてきた以上はそれぐらいやらないやあな。

路上でいきなりのエンカウトだったとしても守るけど。

「ナツル、俺は?」

「知るか」勝手に散れ。

「あ、瀬能さん!」

俺に気付いた姫路が近づいてくる。

俺の顔を見た途端にキツと決意を固めた表情するのはなんですかー？

「あの、私またお菓子を作ってきたんですけど！よかったら食べてみてくださいませんか!？」

「嫌です」

「本当は朝言いたかったんですけど…なぜか近づけなくて…」

「ちよūdいからそのままずっと俺に近づかなきゃいいんじゃないかな」

「今回は自信があるんです！きつと瀬能さんも納得してくれるはずですよ!!」

「納得」・他人の考え・行為を理解し、もつともだと認めること。食うだけで対象にダメージ与えて昏倒させるもんを『もつとも』とは認められねえな」

「お店の方で和菓子を中心に出售しているので、私もそれに倣って作ってみました!」

「お前さつきから俺の話聞いてねえだろ」

「くず餅ですよ!」

聞けよ。

最初から最後まで全て無視しやがって。もしかしなくても俺のこゝと舐めてんだろ。ブルーハワイぶっかけるぞ。

「どうぞ!!」

先ほど呂布ちゃんに拒否されたときは比喩物にならないほどイラア…としてたら、姫路が小皿に盛られたくず餅を差し出してきた。

ああいかん、ちよつと隙を見せたところを全力で突かれた。もう少し警戒心を磨かないと。

ていうかそれどっから出したの？

「さあ瀬能さん!ガブっていつてください!」

「その前に一つ聞いていいか？」

庄と共に皿を突き出してくる姫路をやんわり（と見せかけて本気で）押し除けながら尋ねる。

「それってキッチンとレシピ通りに作ってんだよな？変なアレンジ入れてないよな？」

「……………もちろんです」

なんだ今の間は。

「あとお前味見した？」

「……………」

答えろや。

ぜってーしてねえなコイツ。そんな恐ろしいもん口に入れられるか。

昨日の朝に言ったことも実行できないって、人としてどうよ。

「ちよつと瀬能、いい加減にしなさいよ！」

島田が睨みながら話に割り込んできた。

「せつかく瑞樹が作ってくれたのに文句ばかり言って、男なら黙って食べなさいよ！」

「ならテメーが喰らえ!!」（ゴウツ！）

「むぐうつ!?!」

ッパツッ

「おねーちゃーん!?!」

大口開けて怒鳴っていたのをいいことに、無拍子でくず餅をねじ込み無理矢理飲み込ませたら、そのまま吹き出してぶっ倒れた。

口程にもないヤツめ。

「しつ、島田ちゃん！瀬能ちゃん何するんですかいきなり!?お姉さん怒りますよー!」

「お前もオラアツ!!」

「むぐうつ!!」

ブパツッ

「委員長さー！ー！ー！ーん!!?」

理不尽な抗議をしてきた女子のクラス代表に、これまた無拍子でくず餅を放り込む。

すぐに島田と同じく吹き出して倒れた。なにがお姉さん怒りますよだ、俺はその三倍怒つとるわ。

「マヨ!!瀬能あんたねえ——」

「犠牲者その三!!」

「むぐうつ!!」

ボブツッ

「小笠原さー！ー！ー！ーん!!?」

文句を言われる前にギャルっぽい女の口にくず餅を突っ込んで撃沈させる。

「つぎい俺に意見したいヤツはどいつだあ？遠慮なくこいよお」

教室の入り口付近に固まってる女子陣を睨むように見つめる。が、誰も目を合わせようとしない。

「は！男ならとかなんとか偉そうに言ってたくせに、オトモダチの手料理ひとつ食えないのか？大した友情」

「犠牲者その四!!」

「もぐうつ!!?」

いつの間にか忍び寄っていた直江に、背後から姫路のくず餅を口に突っ込まれる。

コイツたまに身体能力高くなるよな。(いつもは普通なのに)

「ウボアッ!!」

先の三人と同じように、盛大に体勢を崩して口の中のものを吹き出す。

味覚を通して襲ってくる虚無感に身体から力が抜ける。

今更だが不味いを通り越して肉体・精神に直接ダメージ与える料理？ってなんなの？

「ナツルくん!?!」「瀬能!!」

「……!!」

――!

意識が薄れゆくなか、玲ちゃんたちの悲痛な叫びが耳に入った。

ダンッ!!

ガシッ!

「なあっ!?!」

脚に力を込めて崩れ落ちそうな身体を無理矢理支え、反転して直江を掴む。

そして最後にひとつだけ残ったくず餅を逆の手で握りしめて、

「なっ、ナツル何を――」

「道みち連れえだアーーーーー!!!」

あああたまは さいごのちからをふりしぼり

やまとのくちに ねじこんだ!

「モガッ!!」

くず餅をぶち込んだ後、素早く口を掌で塞いでブツを吐き出すのを出来なくする。

76時間目 秘書も筆の誤り

・木造校舎棟 廊下

島田を皮切りに四人の人間が倒れ、教室中が騒然としだしたので隙を見て店から逃げてきた。

倒れた奴らがどうなったかは知らん。

とりあえず冥福を祈ろう。(※死んでません)

「さて、これからどうしようか」勢いで飛び出したがまったく当てがない。

一緒についてきた三人に問いかける。

「どこか行きたいところない？」

「え？えつと………」

「とくにはない」

「……主が行くところ」

リクエストも無し、か。

呂布ちゃんのそれは聞く人が聞いたらストーカー発言と取られるから人前では言わないようにね。

しかし困ったな。目的地が消えてしまった。また当てのない屋台巡りでもするか？

「——もし」

「つもーしかーめよーかーめさーんよー」

ハイっ！とばかりに、玲ちゃんに合いの手を振る。

「うええっ!?せつ、せーかいーのうーちーでー、おーまえーほどー？」

驚きどもりながらも歌い、玲ちゃんは善くんに目を向ける。

「歩みの遅い者はない」

歌えや。

無表情に淡々と歌詞そのまま言っただけじゃねーか。メロディ付けるメロディ……まあいいや。

そこまでいつて、自然と最後の一人に全員の視線が集中する。

「……………?!?」

自分に来ると思っただけでなかったのか、呂布ちゃんがあわあわと焦り出す。そして――

「……………」

はらはらと静かに涙を流しだした。

…童謡知らなかったんだな。

「……………教えてやるから一緒に覚えていこうな」

「呂布ちゃん泣かないで?」

「私も詳しい訳ではない」

「……………」

善くんと玲ちゃんも慰めに入る。

無垢な少女を泣かせて俺はいつたいなにがしたかったんだろうか。

「進むべき道が分からず、お困りのようですね?」

「少しは動じろよ」

今の流れ全無視か。

現在進行形で俺が困ってるのは別のことだ。

だいたいどっから話しかけてきてんだ? 廊下の壁際に設置してある…ほったて小屋みたいなどころから聞こえてくるな。

看板に書かれている店名は『占いの館 THE長鼻』:

ちよつと、入りたくないな。ていうかこんな店あったか?

「良ければ私が道を示してあげましょうか?」

「いらん。帰れ」

「信用できませんか? ではひとつ、あなた方を占ってあげましょう」
意味が分からん。

なんで占うことが信用の証明になるんだろう。謎だ。

「本日占いで扱わせていただくのはタロット…どのようなものかご存知かしら？1から10までの数札…4枚の人物札をスートとした4スート56枚の小アルカナと、寓意画が描かれた22枚の大アルカナで構成された78枚1組のカードのこと。今回は大アルカナのみを使わせて貰うわ」

「ナツルくん、ぐういがってなに？」

「比喻ってどうか、抽象的な事柄を表した絵みたいなもの」

「スートは？」

「トランプのスペードやダイヤモンドみたいなマーク」

「きみは博識だな」

なんでもは知らないわ。知ってることだけ。
逆になんで俺こんなこと知ってんだろ。謎だ。

「こちらは不思議なもので、同じようにカードを切っているはずなのに、出る結果は毎回違―あつ」

バララツ

……………

カードをシャッフルする音がしていたと思ったら、いきなりバラバラと札が落ちる音がした。

二十二枚しかないんだからミスるなよ…

「……………」

しばし店側から静寂が響く。

そして―

「ふんっー」

グシャツ!!

「ひっ!?!」

いきなり何かを握りつぶす音がして、玲ちゃんが悲鳴を上げた。
俺もびびったわ。

「失礼しました。痛恨の合体ミスです」

「なにとなにを掛け合わせたんだなにとなにを」

なにもなかったかのように声をかけてくる店主(?)の女。

どうしよう。じんわり恐怖が湧いてきた。あれだ、保健室のときの
エリザベスレアに似てる。

今からでも逃げるか。

「瀬能様」

「はっい、」

考えを読まれたのかと、思わずどもった。

「まずは貴方について占いましょう……」

そう言って集中し出したのか、しばし無言になる。

さっきの不意打ちみたいな安っぽい静寂じゃなくて、今回ののはなん
か…雰囲気あるな。成功しそうだ。

ていうかなんでどいつもこいつも真っ先に俺を指名するんだ。目
立つから?」

「…出ました。貴方、人に言えない秘密を持っていますね?」

「待たせた結果それかよ」当たり前障りがなさ過ぎてどうリアクション
すればいいのかわかんねーよ。

人に言えない秘密なんて誰でもひとつやふたつ抱え込んでるもん
だろーが。せめて内容を言え内容を。

ていうかそれ占いか?」

「あら、言っつていいのかしら?」

「べつに」やましい事なんてないし。

それを恥と思っつてないからな!!

「では言いましょう。瀬能様貴方の秘密は……」

.....

早よ言えや。

訳ありみたいな物言いので引つ張りやがって。実は占い結果出てねえんじやねえのか？

「この一月ひとつきの間に女子生徒を押し倒していますね」

立ち去ろうかと考えた瞬間にエライ爆弾ぶちこんできやがったな

…

俺がなんだって？

「ナツルくん……？」

「瀬能、それは本当か？」

「あつあらぬ誤解！」

善くと玲ちゃんが引いてる！やめて、そんな目で見ないで！！

「する訳ねーだろそんなこと！適当なことほざくなや！！」

「おや、真実ではないと？」

「たりめーだ！俺のコンセプトは"さわやかなゲス"だがそれは暴力系であって、セクシャルな部分には適応されてない！！」

何言ってるのか俺自身分からないが、ここで引いたら性犯罪者のレッテルを貼られかねない。

有象無象からどう思われようとも気にはしないがこの三人からのマイナスイメージはなるべく無くしときたい。なんとなく。

「あ、でもあれか。モモさんの試合とかでなら押し倒したことはあるな」

あの人も一応女子生徒だし。

「そういった戦闘関係ではなく日常生活だよ」

「じゃあねーよ！なあ呂布ちゃん!？」

シヨックから立ち直り、側に控えていた彼女に話しかける。

文化祭準備期間中はあまり一緒にいなかったが、それでもこの一ヶ

月一番近くにいた奴だ。俺がそんな不埒なことしてたら覚えがあるはず！

「……………ない…」

「ほらみろ！彼女もこう言ってる！」

いつもより沈黙が長かったのが気にかかるが、無実は証明された。

褐色の頬がほんのり赤い気もするけど、人前で涙流したのが今更ながら恥ずかしくなったんだろう。きつと。

「…まあ、そういうことにおきましよう」

「しておきましようじゃねえよ、疑惑で終わらすな」そのような出来事はごいけません。

「だいたい押し倒したっていうんなら相手がいるはずだろ。でも被害届は一切出てないぞ」

出てたら学園総出で吊し上げられたうえで会長と美鶴先輩に処刑されてるだろうな。

「被害者側が貴方を庇ってるのでは？あるいは被害と思っていないのか…」

「押し倒されて喜んでるってか？そんな風変わりな奴がいるかよ」

俺なら襲いかかってきた瞬間に反撃するぞ。アロガントスパークで。

77時間目 アルカナ

・引き続き木造校舎 廊下

「このヤブ占い師めー!」

有る事無い事言って疑惑を植え付けた女(店から顔すら出さないから本当にそうかは分からないが…)に向かってヤジを飛ばす。

僅かでも善くと玲ちゃんと疑いの眼差しを向けられたんだ。断じて許さん。

「お前の妹イカレポンチー!!」

「チツ うるさいわね…別の事を占えばいいのでしょうか?」

し…舌打ちしやがった…だんだん態度が悪くなっていくな…

「ただまた難癖をつけられても困るので…貴方たちのステータスチェックで我慢しなさい」

「ステータスチェックってなに!?!」

そんなゲームみたいな現実にあるのかよ。

「善様玲様、呂布様瀬能様…あら、全員既存のではなく特殊なアルカナに属しているようね?」

「特殊なアルカナって?」

「なんなのだいたい」

玲ちゃんと善くんが当然の疑問を口にする。

アルカナってタロットのやつだろ?人にそんなのあるのか?

しかも特殊って…

「そんなもの、アルカナあ〜?」

しーん……………

——グランドアスクラツシャー!!

ドガアアアツツ!!

「うわあ!?!」

「瀬能!?!」

「っ、ー!」

強く握りしめた右手を大きく振りかぶり、即座に振り下ろして地面に叩きつける。

辺りに漂った静寂を切り裂くように拳から発生した衝撃波が一直線にTHE長鼻を襲撃した。

「瀬能、なにをしてるんだいきなり!」

「笑えよ……腹が振れて引きちぎれるくらい笑えよお……!ブラッドフラウアシザーズ!!」

ズダアアンツツ!!

「わああっ!…また!?!」

ゴメン玲ちゃん、でも俺はこの店を店主を許すわけにはいかないんだ。

俺に凍った空気を浴びせさせたコイツを!!(八つ当たりですよん……by作者)

繰り出された技の衝撃波や風圧で周りにめっちゃ迷惑かけてるけど、店にはまったく被害がない。

練習で放った時には地面を削ったりひび入れたりして目標を破壊したのに、どうなってんだ?

……いや、覚えがあるぞこの現象。

保健室でのエリザベスの時と同じ——!

「物理無効よ」

やっぱりか!

「うおおおおー……でもそんなの関係ねー!!!カづくで突破してる!!」

二度も同じシユチュエーションに屈するわけにはいかねえ!なぜ

なら僕は魚雷だから!!

「死ねええー!アナイアレーション(パリンツ)パトラ」…ふらっぷっ…」

…なんだ?頭から火が出そうなほど煮えたぎっていた怒りの感情が、抜き取られたかのようにスツと消えたぞ?

「気は済んだかしら?」

「え?あ、はい…スイマセンっした」

咄嗟の言葉について謝罪する。

…よく考えたらなんでだろう。

最後にしよっぱい風吹かせたからかな。

「ではステータスチェックをさせていただきます。まずは卯月 善様と卯月 玲様から」

「…君らそんな苗字だったの?」

卯月うづきって。

今まで聞いた事なかったから知らなかったよ。

「私も玲も同じ児童養護施設から通っているからな」

「院長先生の名前が卯月だから、私たちも卯月なの!」

「ふーん」

かなりヘビーな身の上してるのね二人とも…!!

なんともないような様子で説明するから、下手に感情込めると傷つくかと思つて気のない返事してみたが、軽い気持ちで聞くんじゃないかな。俺の後ろに控える呂布ちゃんもクローンとして色々なしがらみ抱えてるらしいし…もしかして俺だけ設定薄い?うわやべえ。主人公交代しちゃうかも。

「まず善様は…面倒だからジョブとレベルだけでいいわね。『男子高校生』でLV. 3、玲様は『女子高校生』のLV. 4」

「高校生ってジョブなの?」

「次のレベルに上がるためには友達をあと3人作ることね」

「レベルの上げ方がリアル」モンスター(召喚獣)倒すとかじゃないん

だな。

「瀬能ナツル様…冥闘士、L V . 6 9 4」

「私たちと桁が違うな」

「ナツルくん凄い！」

「いやあ」それ程でも。

「呂布奉先様。聖闘士、L V 7 0 4」

「桁が違うな」

「呂布ちゃんすごーい!!」

「いやああああああ!!!」

弄ばれた！割と本気で照れたのに、持ち上げられて思いきり振り落とされた！

レベルが俺より十も高いじゃねーか！流石呂布ちゃんだよ！

「…あ……う……主、ごめんなさい……」

「いやいいよ…」膝に手をつけて立ち上がる。

つい顔を両手で覆って蹲ったせいで、呂布ちゃんがオロオロと焦りながら謝罪してきた。

ノリでショック受けたけど、この娘ならいくら上いかれてもいいや。劣ってる自覚あるし。可愛いし。

これが吉井だったら手っ取り早く俺が上である証明をするところだ。物理的に。

「ちなみにレベル上げる条件ってなに？」

「聖闘士を倒すことよ」

「上げられる気がしない！」

呂布ちゃん倒すとか無理ゲーだろ。だったら現状維持でいいや。どっかに市とか転がってないかな。

「ちなみに聖闘士のレベルアップ条件は冥闘士を倒すこと…試しに押し倒してみてもいいかが？」

「……………！／／／」

78時間目 Moderation

「これで信じて頂けたかしら？」

「ハイハイ分かったよ信じりやいーんだろ信じりや」
嘘だけど。

ガセ情報とうさんくさいステータス開示しかしてない奴をどうして信じることができようか。

しかし断つても話が進まないだろう。とつとと本題行こう。

「それでは貴方たちの進む道を掲示致しましょう……二年棟の3階の出し物に行くと……良いことがあるかもしれないわよ？」

「二年棟の三階？」

イベントリから学祭のパンフレットを取り出し、パラパラとめくる。

「お菓子屋・射的・アクセサリー手作り体験……あとは映画上映くらいかな」

「映画!？」

玲ちゃんが急に大声を出す。

「映画!映画見たい!です!」

「いやこれ、学生の自作映画だよ?」

しかも一クラスの出し物だし。

映画部みたいな本格的な集まりじゃなくて、完全に素人の作品だろ。絶対いまいちだよ。

そもそもうちの学園に撮影サークルはない。(全部個人だ。土屋とか)

「あまり映画とか見に行くことがないからな。私たちは」

「テレビで放送するけど、他のみんなが見たい番組と時間がかぶってるからいつも途中からしか見れないの……」

集団生活の弊害が……

「だから、一回でいいから、始めから見たくて……」

「分かった、分かったから」

聞いてると悲しくなってくる。今度バイト代入ったら映画にでも誘おう。

貢いでばっかだな俺…

「じゃー次は映画見るってことで」

「分かった」

「わーい！」

「……（こくり）」

正直全く期待してないけど、みんながご所望なら付き合うとしよう。

がっかりしないといいけど。

☆

★

☆

・二年Eクラス出し物『おかんぬ映画祭』

名前からもうすでにながかり感が出てる。

「Eクラスとはどのようなクラスなのだ？」

「主に運動系の部活やってる奴らで構成されてるクラスだな」

一年生はSクラス以外は成績によるクラス分けはないけど、二年からは細かく分けらる。

8教科の総合点数がほしい1200くらいだとEクラスに編入される…だったはず。

「スポーツにのめり込みすぎて成績落とした部活バカの集まりだな」

そう言った瞬間、周りにいた学生服を着た一部の人間が、キツ！と強くこちらを睨みつける。

多分Eクラスの生徒だろうけど、事実だろ？

「ナツルくん言い方悪いよ…」

「間違ったことは言っていないぞ？ただ…」生徒会に入ったから色々と部活動に接する機会が増えた。

「放課後に汗かいてる姿見ると、多分この学園で一番本気で青春してんのが集まってるんじゃないかなあって…」

思うんだよね。と続けようとして気づいた。

周りめっちゃ見とる…：唾然とした表情で。

「…イヤ違うんです」

「何がだ？」

「待つて…待つて待つて待つて、違うんだよマジで！」

「だから何が違うのだ」

「ナツルくん大丈夫？」

おかしい、絶対におかしい！こんなこと言うキャラじゃないのに！

SAN値が上がってるのか!?!これは僕じゃない!!

「そうだ、この学園の校風は『文武両道』！賢くもなくバカにもなり

きれず強くもないこのクラスは、学園一中途半端なんだよ!!」

『なっ！なんたる暴言！』

『自分は最低クラスのくせに…！』

『ひそかに気にしてることを…』

よし、リカバリーできた。

「そんな半端な奴らの作った映画だ！きつと忘れられないシネマデ

ビューになるだろう！玲ちゃん、覚悟はいいか!?!」

「おっす！大丈夫、です！」

「よし、突撃!!」

気合を入れ、拳を振り上げて受付へと向かう。

未成年四人、カードで！

「…結局、何が違ったのだろうか」

「……………」

え？…ここカード使えない？クズが!!

☆

〈鑑賞中〉

☆

数十分後。再びFクラス教室前の廊下へ戻ってきた。

「面白かったね、映画ー!」

「そうかな」

覚悟はしていたつもりだったが想像以上にガツカリだったぞ。

内容は近代ニューヨークのような外国の街を根城にする、ひと昔前のスーパーマンを題材にしたものだった。

自らを絶対正義と主張して好き放題するスーパーマンと、それを良しとしない怪盗とのバトルアクション：バ●トマンなんかのダークヒーローが好きな俺としては胸熱な作品だったよ。シナリオは。

ただ役者の演技が酷い。

台詞はしょっちゅう噛む。

バトルシーンでは距離感を間違えて、分かりやすく空振りしてるのに相手が吹っ飛ぶ。

ギャクの声まで本編に入ってるってなんなの? ギャグ?

文句の付け所しかない三流映画だったよ。

「でもみんな楽しそうだったよ?」

「それが唯一の救いでしょ」

じゃなかったら三流にも入れねーよ。

多分企画立ち上げから製作まで時間なかったんだろーな。リハーサルはほぼ無し。

変にあれこれ注文つけて演者の気分を悪くするより、全部肯定して明るい雰囲気を持てることを選んだんだろう。

生き生きとした表情なら色々失敗してもコメディとして見れるからな。

クラスに少なくとも一人、やたら映画に詳しい奴がいるな? しかも無茶苦茶技術力高いの。

シナリオ作成からカメラワーク、編集まで上手く纏められてる。おかげでストレスなく見れた。

「でもやっぱり演技がダメすぎるぞ。出演者全員ヘツタクソ」

「うちの劇団員を悪く言わないで!!」

「あーん?」

背後から急に怒鳴られた。

なぜ俺に話しかける奴はみんな後ろからなんだろうと思いつつ振り返る。

「…お、お前は——誰だ!!」

……………

……………

いや、本当に誰?

「えっ何そのリアクション。私が誰か本当に分からないの!?!」

「玲ちゃんたちの知り合い?」

「知らないですけど…」

「私も記憶にない」

「……(ふるふる) ……ない…」

「ア・ナ・タ!の知り合いよ!!」

怒り心頭な表情で俺に指を差して怒鳴る白髪おかつぱ赤目女子。
俺も記憶にございませぬ。誰かと勘違いしてない?

「そ…そんなつ、中学校で三年間一緒だったのにつ!」

「三年間…」

「あんなに仲良しだったじゃない!思い出してよ!!」

中学三年間一緒って言われてパツと思いつくのは茜のことだ。

しかし他には…一人はいたようないなかったような……

「そんな……本当に忘れちゃったの……?」

少女は先ほどとは打って変わって、しおらしく、泣きそうな顔を見せる。

その顔を見ると…なんか…心がざわつく。
なぜだ？なんでこんなに着かない？誰なんだこの女は？
うう…頭に靄がかかったみたいだ…
シユワ…ワワワ…

…忘れられない人だった。

忘れたくない人だった。

忘れてはいけない人だった――

「君の名は！」

「なにしてんだお前」

女がいきなり感極まった表情で祈るように両手を組む。
頭おかしいんじゃないかこいつ。

ブチリッ

リリースオーバードライブ
「波紋肘支疾走!!」

「ゴブアアウツツ!!」

ドグシヤアツ

目にも止まらぬ速さで繰り出された肘鉄は正確に俺の脇腹を捉え、
深々と臓腑を抉る。

その際に衝撃と共に、電流のようなエネルギーが打たれた箇所を中
心に身体全体に迸った。

こ…コレは…波紋っ!?

「気」とはまた違ったこの力、覚えがある。やはり俺はこの女を知っている!

正確にはこの女に流れる「波紋」を知っている!!

俺が教えたから。

「お前は…っ…ひ…ひかり……ちゃん」

ドシヤっ

「ナツルくん!!?」

「主っ」

「遅いよバーカ!」

「見事な一撃だな」

激しい痛み。痙攣する身体。薄れゆく意識。

どこか懐かしい体験とともに、

俺は、かつての知り合いと再会した。

79 時間目 生温いコーラ

|| あらすじ ||

ナツルは中学生時代の友人、ひかりと再会した。

「ぐっ……」

廊下特有のひんやりとした床に両手をつき、震えながらも身体を起こす。

気絶していたのは数秒だけだったようで、目覚める前と周りの風景に差はほとんどない。

前に食らった時はもつと長く意識を無くしていたのに：俺も成長したな。

単に気を失うのに慣れたのかもしれない。姫路料理で散々倒れたから。ははっ泣けるぜ。

「久しぶりに顔を合わせた相手に対して、ずいぶんなご挨拶じゃねーか？」

感動の再会が台無しじゃこのスカタンが。

「綺麗さっぱり忘れてた人間にはお似合いだと思っけど」

…否定しづらい。

「いやそれでも、無拍子での波紋頂肘はやり過ぎじゃないかね？」

初めて対人で使った時、相手を一か月は入院させたさ。

「思い出した途端に非難するんだ。ちゃんと謝ったしお見舞いにも行ったのに」

「昏睡状態のときにな」

冗談半分で教えたことの練習してたとき、気がついたら病院のベッドの上で、しかも一週間も時間が過ぎてたってのが俺の（今のところ）最大の恐怖体験。

勉強の遅れ取り戻すの大変だったんだぞ。

「瀬能、きみの知り合いか？」

「え？あー、まあな」

久々の再会に気を取られて、三人の存在が頭から抜けていた。

「こいつは神谷かみやひかり。映画を愛し映画に愛されてるかどうかは知らんが、好きを拗らせて映画館のスタッフにドン引きされる女だ」

「何その紹介!?引かれてないよ!」

『いつもお一人ですね』って受け付けで言われたんだろ？引かれてんだよ。

毎週日曜日に欠かさず行ったりや、顔ぐらい覚えられるわな。

「あと三年間俺と同じクラスだったいわゆる腐れ縁だ」

「それだけでいいじゃない!なんで映画館のエピソード先に入れたの?!」

「今も言われてんのか?」

「言われないよ!H●Uに入ったから」

悪化してんじゃねーか。独り見の。

きつと鑑賞の時間は増えただろうな。

「お前友達いないだろ」

「瀬能くんに言われたくない……」

失敬な、おるわ!

「そう思ってるのはお前だけだよ……」

「出た久々の闇ひかり!」

説明しよう、闇ひかりとは!

過去に辛い経験をした反動か抑圧された内面が表に出たのかは不明だが、とにかくつ、普段は割と人見知りな性格そのままに他人の胸に刺さる毒舌のみを発する彼女の黒い部分だ!

つまり、今のセリフはけっこーグサリと来たのだ……直江とか俺を都合よく使ってるってしよっちゅう思ってたから……

そもそもアイツ友達か?

「先程まで忘れていた割には詳しいな」↑善

「なんか、さっきの波紋電気ショックで記憶が蘇ってきた」

そういえば茜の時も攻撃されて思い出したんだっけ。昔の家電か

俺は。

「このタイミングで出てきたってことは、お前Eクラスなのか？」
うちの劇団員とか言ってたし。

「うん、そうだよ」

「…そうなんだ…」

そういえばこいつ結構成績が残念だったっけ。

中学のときは何度もテスト前に、赤点回避のための泊まり込み勉強
会やったなあ。俺んちで。

なぜ毎回我が家が合宿地に選ばれたのか今だによく分からん…一
人暮らしだからか？

「それでもDクラスに入れるくらいの学力はなかったか？」

「H u ● uで映画観てたら成績落ちちゃった」

馬鹿だ。まごうことないバカだ。成績上げるために三人で結構頑
張ったのに、無駄じゃねえか。

親父さんが頭抱える光景が目に見えかぶ。

「…Dクラスで思い出した。知ってるか？茜もこの学園にいるんだぜ
？」

「知ってるよ。一緒に願書貰いに来たもの」

初耳なんですけど。

初耳なんですけど。え？なにそれ、え？二人で願書取りに行ったの
？

俺なんて最初に学校見学に行って、その日のうちに神月学園（こ）に入学
しようって決めただけで願書貰い忘れて、再び一人で取りに来たのよ!?

「誘えよ俺も！」

「茜ちゃんが『ナツルは絶対騒動起こすから一緒はいやだ』って言って…」

「あのクソアマー！」合ってるのが腹立つ！

行きと帰りで何度も頭がおかしい奴に絡まれた。これは忘れてもいい記憶だな。

「まあいいや…この映画もお前が監督したのか」

「うん。みんな清涼祭当日は部活の方の出し物で忙しう言うから、スケジュール管理からカメラ撮影、編集まで！」

楽しそうだなお前。きつとウキウキで作業したんだろうな。

しかしそうか…こいつが作った映画か…

通りでなんかとどころで既視感があると思った。

「バトルシーンは主に茜ちゃんと瀬能くんのやり取りを参考にしました」

どーりで既視感があると…

「あの女怪盗が警棒でスーパーマン殴打するシーンも？」

「実際にやられてたでしょ？」

うん。

理由は忘れたが怒り狂った狂犬ガールに連撲の極み決められた。思い出したら腹立ってきた。あとで復讐してやる。

「今の映画ひかりちゃんが作ったの!?!」

「っ、!?!だ…誰…?」

玲ちゃんがいきなり会話に割り込んできた。

そーいや自己紹介の途中だった。

「この子は卯月 玲ちゃん。一学年下の後輩だ」

「そ…そう…」

ひかりちゃんの人見知りな部分が出てきたな…俺の服の端を掴まないでくれませんか?もう高校生なんだから。

クラスに馴染めてるの？…いや、自分の企画通せるんだから大丈夫か。

多分不意打ちがキツイ感じかなー。

「映画が好きらしいけど中々観る企画が無いそうだな。だから今回が初上映鑑賞だな」

「…私の、映画が…」

それなのにあんなクオリティでガツカリだよ。せめて俺や茜が出演してたらもうちよいましだったろうに。

ひかりちゃんにがつつつり演技指導受けたからな。

あの頃はなんか…構われるのが嬉しかったんだろな。不真面目な茜と違って本気で練習してたから。

今日の俺の名役者つぷりの根幹こんじちだな。

80時間目 アクティヴィストの足音

「まあ…根幹なのは演技だけじゃないけどな」

思えばあの中学時代を経て、今の俺があるのだろう。

性格から価値観から全て、あの出会いから変わったのだ。

砂を噛むような色あせた日々が急速に彩られた。

封を開けて抜けていく炭酸のように、あつという間に過ぎていった
中学三年間…楽しかったなあ…

「……………どういう意味…？」

「え？」

あれ？もしかして今の声に出てた？

やべえ、今のどこからどこまで喋ってた？めっちゃ恥ずかしい。ポ
エムみたいなのが特に。

直さなきゃとは思っちゃいるんだが、無意識だから直しようがない
なこの癖。

「言わなきゃダメ？」

「……………嫌なら…いい」

呂布ちゃん…台詞と雰囲気一致してないよ。超気になってん
じゃん。

玲ちゃんと善くんもそわそわしてるし、もう語るしかなさそうだ。
ただなあ…

「それを説明するには俺の過去を軽くでも説明する必要があるんだが
…」チラッとひかりちゃんを見る。

俺の過去を語るともれなく彼女の過去も語らなくてはならなくな
る。切り離して説明することは困難だ。

「…いいよ、別に。言っても」

悩んでいるとひかりちゃんがぽつりと呟くように答えた。

「いいのっ？」

「うん。もう昔のことだし…ちよつと嫌な事ではあるけど、それで瀬能くんが友達と雰囲気悪くなるのも嫌だから」

「ひかりちゃん…」

さつき俺には友達いないとか、そう思ってるのはお前だけとか言わなかった？

いや、これを言うのはやめよう。そんな空気じゃない。

「じゃあ言うけど…実は俺中学一年のとき、一時期いじめられてたんだ」

「えっ!？」

「なっ」

「……!!」

「机に落書きとか私物を隠されたりとか…靴箱汚されたりとかしたな」

やー懐かしい。

「それで机や靴箱綺麗にしてくれたり、捨てられた私物を探してくれたのが彼女です」手でひかりちゃんを指示す。

「瀬能くん最初は全く動かなくてされるがままだったよね」

「どうでもよかったからな」

落書き消すのも失せ物探しもひかりちゃんに勝手にやらせて、そのせいで彼女もいじめのターゲットに——やめよう。話が長くなる。

とにかく、中学一年生の時の俺はクラスのほとんどの人間に嫌われ迫害されていたのだ。数ヶ月ほど。

当時は他人に興味無かったからなんとも思わなかったが故にやられてばかりだった。

しかし今だったら千倍返しくらいはしてやるだろう。落書きなんてまどろっこしいマネせず、籍ごと消してやる。

……いや、そもそも二学期向かえるまでにみんな退学してたわ!

「そんなっ…ひどい……!」

玲ちゃんがプルプルと小刻みに身体を震わせて、全身で驚きを表現する。

やっぱりやりすぎてたかな…鬱になった奴とかいたらしいし。

俺じゃなくて茜やもう一人が徹底的にトラウマ刻みつけたんだけど。映像撮ったり。

うーん、確かに冷静に感えたらひど「ナツルくんいい人なのに!!」…うん？

「何故…きみがその様な…！一体何をしたと言うのだ!!」

善くんが全力で怒ってる。

あれ!?予想外の反応が!?

「いや結構ひとでなしよ?」爽やかなゲスよ俺?

「瀬能、適当な事を言っつて自分を卑下するんじゃない。きみがそんな人間ではないことは分かっている」

「そうだよーひとでなしなんて…私だって、怒る時は怒るよ!!」

ろくに俺のことも知らなくせに好き勝手言うなと怒られた。俺自身のことなのに…

おかしいな…もつとこう…俺がいじめる側じゃなくて?とまではいかないけど、驚いたまま追求されると思ってたんだが。

「……………」

呂布ちゃんに至っては背後から抱きついて頭を撫でてくる始末。慰められてる?俺もしかして慰められてる?

「順逆自在の術!」

咄嗟に玲ちゃんと位置を入れ替えて拘束から脱出。

名残惜しいけど男女がいつまでも密着してるのはまずいだらう。

「おおっ?」

「……………」

いきなり見てる風景と密着してる感触が変わってお互いに困惑する二人。

しばし硬直していたが――

「……………」

「…………えへへ…」

何事もなかったように続きをする呂布ちゃん。されるがままに頭を撫でられる玲ちゃん。

…………ほつとこう。

それよりもこつちだな。

「瀬能くん、なんでこの三人こんなに瀬能くんに好意的なの？洗脳でもした？」

「言うわねひかりちゃん…」茜みたいなおことを。

アイツともう一人、なぜかやたら俺への評価低いつてか悪かったからな。

物理に訴えて反論してやりたかったが、いかんせん女に手をあげる覚悟がその時は無かった。(今はモモさんのおかげで躊躇せず殴れる)

中学のとき所属してたグループにあえて不満をあげるとすれば、男が俺一人しかいなかったことだな。

「正直に言っ方がいいよ？レクター博士みたいなおことしたでしょ？」

「俺精神医療に関する知識ゼロなんだけど」

「じゃあパラサイト入れた？」

「手に入れてたら真つ先にお前に使ってやるよ」

地球外寄生生物見つけるよりも幻朧魔皇拳習得する方が早そうだ。

「またそんな厨二病みたいなおこと言っつて…」

「厨二病みたいとか過去みたいに言うなよ…現役だ」

「悪化してるじゃない！」

悪化つて言うなよ…熟成したんだよ、時間をかけて。

そうまるでグルメピラミッドのサラマンダースフィックスから取

れるメロウコーラのように…

「やっぱり悪化だよ！昔はそんな例え台詞使わなかったじゃない！」
そうなん？

……言われてみればそんな気がする。

ひかりちゃんほどじゃないけど俺も結構影響受けてたみたいだな。
茜たちはまるで変わってないのに、理不尽。

81 時間目 逸材の花

|| あらすじ ||

瀬能ナツルは中学時代一時期いじめを受けていた。

しかし本編とは全く関係ない上に本人も気にしてはいない。(ええー…)

「それにしても高校生なのに厨二とか…来年になったら高こうざんびよう三病びようになるの?」

「何言ってるんだお前」ダジャレのつもり?寒いんだけど。

「ズームパンチ!!」

「ぐおっ!!」

メメタアツ!!

突然振るわれたひかりちゃんの拳がダルシムのように伸びて俺の顔面に襲いかかる。

咄嗟にガードしたが波紋は防げなかったので腕が痺れた。

厄介だな波紋攻撃…対策考えなきゃ。

どうでもいいが間接外したただけでなぜ遠くまで腕が伸びるんだろうか。

肉や皮膚は普段通りのはずだから精々数cm程度だろ?1m伸びれば長い方だろ?

ものによつては4・5mは伸ばしてるシーンあるけど不思議でしようがない。ルフィかよ。

「……主」

「ん?なに、呂布ちゃん」

もう玲ちゃんを撫でるのはいいのか?

「つーかこいつ、さつきからずっと俺が攻撃受けてるのに微動だにしなかつたな…本当に従者？」

「それとも、玲ちゃん蕩かすのがそんなによかったのか？もともとあの子だったのにより一層あほっぽくなってるんじゃないか。」

「……………あのまま撫でられてたら、俺もああなつてたのかな…」

「……………さつきから放ってるの、何？」

「え？ああ、波紋のこと？」

「自分が知らない技術に興味あるのかな？」

「…瀬能くん、その人は…………？」

「ああ、紹介してなかったな」ひかりちゃんまた人見知りモード入ってる。

「どうでもいいけど、いちいち俺の服掴むのやめてくんない？伸びるでしょ？」

「俺がいなかったときどうしてたの？」

「彼女は呂布奉先。一か月前あたりに過去の偉人のクローンがどうたらこうたらって話題になった奴らの一人だ」

「なんでかな。すごいこと言ってるはずなのに、全然そんな風に聞こえない」

「そして俺の従者だ」

「なんで？」

「知らん。俺が聞きたいわ。」

「あと呂布ちゃんなんか急に照れだしたけど、俺が従者って認めたのがそんなに嬉しいか？」

「で、波紋なんだが…あー…………アレだ。なんかある日ひかりちゃんが『私をめちゃくちゃにして』と…」

「言ってるじゃないしょー！」

「ああ、あれか。あれは古賀のセリフか。」

「間違えた。『自分の身くらい自分で守れるようになりたい』みたいな

こと言つて俺に格闘を習いにきたのが始まり…だったよな？」

「うん」素直に頷くひかりちゃん。

よかつた今度は合つてた。

「それで拘束されても使える『寸勁』と色んな状況で使える肘打ち、それと『無拍子』と『縮地』を教えたんだ」

「護身術にしては難易度が高い気がするのだが」

それ茜にも言われたよ。護身の範囲を超えてるって。

今振り返つてもなぜそのチョイスなのかよく分かん。なにを指してたんだ？

しかしひかりちゃんは教えたことをさらつと吸収して、数日くらいでそんじよそこらの不良を軽く蹴散らせるくらいに強くなつちやつたからな…天才つて怖い。

初対面の相手に縮こまる人見知りも治らなかつたから、鍛えた腕を俺にしか振わなかつたけど。(ツツコミで肘鉄かまされる度に教え方間違えたかなと後悔してた)

「ただ正直、簡単に覚えられてつまんなかつたからあえて不可能なことを教えたんだ。それが波紋」

「初耳だよ!？」

そりゃ初めて言つたからな。

「思い返してもみろよ…俺が一度でも波紋を使ったことあるか？」

「……………そういえばない!？」

「使えないからな」

波紋どころか、当時は「気」も使えない一般市民だったからな、瀬能くんは。

イメージをなんとなく伝えただけなのに、数日経つた後にいきなり「瀬能くん、私使えるようになったよ!」とか言つて実演して俺を病院送りにした彼女。

口頭説明だけでなんで習得できたんだ？嫌だわー天才つて。

「意外だな、きみに使えないものがあるとは」
「高評価しすぎだよ。特殊な呼吸法で体内の血流を操作して血液に波紋を起こし、太陽光の波と同じ波長の生命エネルギーを生み出すって秘術らしいけど、いくらやっても俺は使えなかったから」
体質が合わないのかな。

「呼吸って、あのこおおーってやつ？」

「そうそう。コオオオオ……」

……ダメだ。やつぱりなんかエネルギーが発生してる気配がない。

「コオオオオオオ……」

「こおおおおつ」

善くと玲ちゃんもマネして息を吸い始める。

玲ちゃん口で言ってるだけでしょ、それじゃだめよ。

「ひかりちゃんはどんなもん？」攻撃前に数秒使ってたけど。

「毎朝十分間息を吸い続けて、十分間吐き続けるって練習してる」

「きみ柱の男とでも戦うの？」

誰に言われたわけでもないのに数年間ずっと呼吸法の鍛錬続けてきたの？毎日欠かさず？

その光景を想像すると間抜けっていうか狂気を感じる。いったい何に備えてるんだ。

「波紋は生命エネルギー……熟練の使用者はいくら歳を重ねても老いを感じさせないと聞く……ひかりちゃんあんまり成長してないのそのせいじゃない？」

「うそお!？」

彼女は今日一番のショックを受けた。

82時間目 絶対私は、忘れない。

「まあできなくてもいいけどね」

波紋とかいうチャチな超能力なんぞ、使えなくても気にはしない。瓶コーラの蓋を手を使わず開けたり、サボテンを爆発させたりとかしたいって思ったことねーし。

羨ましくなんて、これっぽっちも思ってたねーし。

「羨ましいのか?」

「そんなことねーし」

「不満を全力で表現する愈史郎みたいな表情してるけど…」

演技だよ演技。きみのおかげでこんな器用な顔芸できるようになりましたよー?

だいたい波紋^{あんなもの}、使える方がおかしんだよ。応用すれば他人を操るとかもできるんだろ?危険極まりないわ。

「気」の方が安心安全よ。電気は直流より交流よ。(意味が分からん)

「なあ呂布ちゃん」

「……………」

コオオオオオ…

バチバチバチバチ…

彼女を見ると、独特の深い呼吸音と共に、褐色の肌から山吹色の細かい電流が立ち上っていた。

呂布ちゃん波紋使えとる!!!

さつきから静かだと思つたら波紋練つてたんかい!

「凄いな、さつきまでその存在も知らなかったのだろうか？」

「呂布ちゃんバリバリしてる。電気ウナギみたい！」

「数分でさらつとマネされるとなんか：面白くないかも」

「ひかりちゃんより質高くない!？」

放出されるエネルギーの色も量も力強くハッキリとしている。

忘れてた！この娘才能の塊なんだ！数秒見ただけで完コピできるくらいに！天才め！

「チクショー！なんだかとってもチクショー!!（ガンツガンツガンツ）」

「ひゃうっ!？」

「なっ、なにいきなり!？」

俺がいきなり金槌で壁と藁人形に五寸釘を打ちつけ始めたので、女の子二人が身をすくめる。

「氏ね！吉井氏ね!!」

「誰だ、吉井というのは」

「吉井…もしかしてFクラスの？学校で成績が一番悪いって噂のあいつそんな噂立ってたのか。事実だけど。」

~~~~~同時刻。吉井明久宅~~~~~

「ぐああ！ハクシヨン！グアあつくしよん!!」

「どーした明久。いきなり胸なんか押さえて」↑坂本

「分からな…！なんかいきなり胸に激痛とくしやみが同時に…!」

「そうか。もしかしたら誰かがお前を噂して呪ってるのかもな」

「なんで!？」

~~~~~神月学園・ナツルSide~~~~~

「全くの無関係の人間の名前をなぜ出したのだ？」

「それは…まあ、ノリだ」

直江でもよかったんだけどなんとなく。

「ていうか、やっぱり羨ましいんじゃない」

「ああ、そうだよ！羨ましいよー！」

俺だってオーバードライブしてみてえんだよ！！

でも駄目だったよ。ムリだったよ…俺呼吸使えなかったよ。

ジュース入れたコップに指突っ込んで、プリンみたいに固定して齧り飲みしたり、

シャボンランチャーとか言っつて割れないシャボン玉作っつてみたかったのに！！

「願望が幼稚……」

「そんなことして何が楽しいのだ？」

なんか言われてるけど無視。

「それをよりによって呂布ちゃんが使うなんて！」

彼女は…彼女は……ヒロインポジションだと思っつたのに！まさかヒーローの方だったなんて！！

主人公は俺じゃないのか！世代交代か！世代交代なのか！？

竹筒の猿ぐつわはめて桐箱に収まらなきゃいかんのか！？

こうなつたら血鬼術覚えるしか……！

「……………（ゴオオオオ……）」

「つーか呂布ちゃんさつきからずっと波紋練ってるけど、いったいなにに使うんだよ」

ひかりちゃんみたく俺を攻撃するんじゃないだろうな。やめろよ、その勢いで『震えるぞハート！』なんてかまされたら肉が気化するぞ。

「……………主に捧げる……」

「はっ…どういう意味？」

「……………私の生命力に乗せて主に送る。定着すれば波紋が使えるように

なる…」

は？

「オイ何考えてやがる、今すぐやめろ」

確かにその方法なら素質が無くても波紋が使えるようになるだろうけど、やったら呂布ちゃん死んじゃうじゃん。

ツエペリのおじさんみたいに髪の毛真っ白になるよ？

港湾棲姫かんぜんたいにでもなる気？

「命ごとの献身なんて今どき時代おくれなんだよ。重すぎる、迷惑だ」

「……でも主、使いたいって——」

「見損なうなよ、呂布」

「お前を失ってまで手に入れたいものなんてこの世に存在しないんだよ」

これは結構本気だ。

出会って一か月も経ってないが、後ろにこいつが控えてないと物足りなくなってきた。

ピンチのときに助けてくれないポンコツで、たまに幼児みたいなこととする困った娘だが、なんだかんだ言って安心して背中を任せられる存在なんだろう。

それに明確なやりとりは無いが、呂布ちゃんは九鬼家から預かっているようなもんだからな。

俺のくだらん我が儘やミスで命を捨てたとかあったら、詫びで腹でも切らにやならん。

ハラキリナツルとか誰も得しねえよ。

「……………ん？」

そこまで考え込んで違和感に気づいた。やけに周りが静かだ。

視線を周囲に向ければ、何故か呂布ちゃんは顔を…耳まで真っ赤にして俺を見てる。

波紋の練りすぎでオーバーヒートしたか？

玲ちゃんも呂布ちゃんほどでは無いが顔を赤らめて、両手で口元を隠している。

やり取りを見守っていた周りの人間も似たり寄ったりなりアクションだ。(男は睡でも吐き捨てそうな表情してるけど)

ひかりちゃんは…

「……………(ムー…)」

不満を全力で表現する愈史郎みたいな顔してる…女の子がそんな表情していいの？

てかなにこの空気？

「瀬能、つまり君にとって呂布が一番という事なのか？」

「え？えつと…まあ…そう、かな」

「……………!!／／／」

「はうっ…／／／」

「(ア"ー…?)」

周りのリアクションがいつそう深くなった…俺なんか変なこと言っただけ？

……………呂布ちゃん最高峰。

うん、なにもおかしくない。

でも何か引つかかるのなんだろう？

83 時間目 僕は君を想うだろう

なんか変な空気になったけどとりあえず気にしない。気にしない
いっただら気にしない。

波紋についてはいっただん置いておこう。呂布ちゃんが使うんなら
それでいい。

大丈夫、悔しくない！今の俺には「気」があるさ！

……………

冷静に考えると波紋で出来ることのほとんどを「気」で再現でき
てたわ。嫉妬する必要ないんじゃないか？

「……………主…ごめんささい…」

「いいよ。代わりに月の呼吸極めるから」

ちなみに俺は雷の呼吸が使える。肆の型まで。

刀剣なんてろくに使わないくせに。

体育の剣道の授業で披露して鉄人に怒られたよ。理不尽。

「……………」

まだ気にして落ち込んでるみたいだな…マジで気にしなくていい
のに。

呂布ちゃんこういうときに気負うんだから。

……………そうだ。

「あーアレだな。俺の役に立ちたいってんならさ、治療方向にでも能
力伸ばしてくれよ」

「……………」

「俺回復はできないから」

攻撃バリバリ、防御メラメラ、その他色々。

回復さっぱり。それがこの俺瀬能ナツル。

拳が主体のモンクみたいな戦い方するくせにチャクラ使えねーか
らな…忍術の方も分身とかだし。

モモさんでさえ瞬間回復っていう回復技使えるのに…

「もともと波紋って生命エネルギー作る技術だからな。痛み止めくらいはできるはずだ」原作で壊死した脚を治すとかやってたし。

「さっきのひかりちゃんみたく、俺の周りにはすぐ暴力に訴える人間が多いからな。怪我したら癒やしてくれ。その可愛さで」

「……可愛さ：／／／」

「可愛さで怪我を癒せるのか？」

何言ってるんだ善くん！

きみだって俺に「回復だ！」って傷薬渡されるより、「リフレッツシュ！」って玲ちゃんにスキル使ってもらう方が嬉しいだろ!?

「それはそうだが」

「自分で言つといてなんだけど傷ついたわ」

「そういうものか？」って返されると思ってたから…

「……………」コオオオオ…

「呂布ちゃん気持ちは嬉しいけど波紋で心の傷は癒せないよ」

アレって目に見える身体の異常を治せるだけだろう？

それに今のコレ、生産した生命エネルギーそのまま送り込んでるだけだろ。

……いやちよつと待て。なんか…だんだんと気分が高揚してきたような…?

触れられてる背中から活力が沸いてきて、充満して溢れ出しそう
だ。

その辺走り回ってきていい？

「瀬能くん、学園内での不純異性交友はどうかと思うよ？」

表情を戻したひかりちゃんが話しかけてくる。

「しかも瀬能くん生徒会役員でしょ」

「なんだいきなり」

「お姉ちゃん許さないからね！」

誰がお姉ちゃんだ。

やめろよお前：うちのクラス委員長みたいなこと言って……今気づいたけど俺より背低いからトラウマ発動するだろ。

「同じ役員の会長やらに言われるんならともかくひかりちゃんに言われてもなあ、それに交友つつーけどわりと彼女側からの一方通行だし。だとしても呂布ちゃんは純粹でやましいことはひとつも、」

「うるさい黙れ。言い訳するなクス」

普段の彼女とはかけ離れたスムーズな罵倒。

一瞬茜がいるのかと思っただぞ。びっくりした：

怖いから話題変えよう。

「そういえばこの映画のシナリオってひかりちゃんが全部一人で考えたの？」

「うん」

「え、マジで？」

てつきり大まかなストーリーはクラス全員で考えて、細かいところを提案してるんだと思っただ。

中学の時あんなことになったのに、まだ台本書けるんだ。

「瀬能くんたちに盛大にダメ出しされた上に添削されて点数まで付けられたけどねっ、そんな程度じゃ私はめげないよ!!なぜなら私は魚雷だから!!」

「俺お前のそういうところ嫌いじゃない」真っ直ぐで曲がらない感じが。

でも誤字脱字が多いよきみ。チェック入れた後の台本赤字だらけだったでしょう。

当時と同じなら少しは国語とか勉強しなさいな、Eクラスの面々も解説するの大変だったろうに。

「成績最下位組の問題児に言われたくないよっ！波紋キック!!」

「ローキックは脛でカット!!」アンド千鳥流し!

明らかにチンピラとかがやる喧嘩キックを脚で防ぎ、同時に襲ってくる波紋を自ら放つ電気で空中に流す!

バチバチバチツツ!!

結果は――

「ぐふう……」

全く防げなかった。

寧ろ放電したことで体力を使い、身体が弛緩したところを攻撃されたからダメージ増えた気がする。

ドチクシヨウ。

「私なりに頑張りながら書いてるんだよ?今作ってるのはコレ」
「拝見します」

まだちよつと痺れる手で、差し出されたノートを受け取る。

ペラペラと流し読み……………

……………

「内容はトレジャーハンターの冒険物か?」

「うんっ」

「…主人公なんか……ありえないピンチに陥りすぎじゃない?」

序盤で軽く十回は死にかけてる気がするんだけど。

「これってフルCGかアニメ映画なの?」

「完全実写だよ、CGやワイヤーアクションは一切無し」

え?…本気?…

「この落とし穴で100mほど落下ってどうすんの?」

「下にマットとか敷いて」

「炎に包まれるシーンは？」

「ガソリンスタンドの店員さんは特殊な耐火ジェル使ってるらしいよ？」

「猛スピードのトロッコが脱線する場面とかあるみたいだけど…」

「アクションにドキドキハラハラは欠かせないよね！」

同意はするがワイヤーなしで脱線はやばいだろ。崖下に転落って書いてあるぞ。

「こんな目に遭って主人公生きてられるかよ、誰が演じるんだ？」シユワちゃん？

「そうだね…どこかに、どんな目に遭っても怪我一つ負わない不死身のスタントマンみたいなのいないかなあ」

「そんなギャグ漫画の住人みたいな奴この世にいる訳…」

そこまで言ってハツと気付いた。

ひかりちゃんが俺に向けてにんまりと満面の笑みを浮かべていることに。

「…まってください」

「えっ？なに瀬能くん、私の映画出たいのっ？」

「そんなウキウキとした表情するな!!」

確かにさつき俺や茜が出演すればーみたいなこと考えたけども！

この台本はやばい！

ワニに丸呑みにされてワニを殺さず無傷で脱出とか書いてあるもん！どうやるんだいったい!!

「ナツルくん映画出るの!?!」

「うん、そう！私の初監督に主演してアカデミー賞総なめにするの！」

「やめなさいそんな、やめなさい！あほの子騙して外堀埋めようとするのやめなさい!!」

断りづらいでしょう！

「ふざけんな馬鹿野郎！誰が出るか!!どうしても出演させるって言うんなら、カメラ回ってる間ずっと落語を喋り続けるからな!!」

(出演したときのことを語る時点で完全に拒否してない気がするのは気のせいだろうか。by作者)

「(…はっ)呪いで特定の言葉しか喋れなくなった主人公…その呪いを解くために世界各地の遺跡を巡る…：アリだね！台本直さなきゃ！」

「歪みねえなやー！」(お前)

ひかりちゃんは人が沢山いる廊下だというのに、構わずその場で蹲ってノートに鉛筆を走らせる。

ダメだこいつ、強い！

「うーん…でもこれだと会話シーンがちよつと厳しい…かも」

「代弁でもしてもらえばいいだろ…：パートナーでヒロインとか入れろ」

そもそもがこのシナリオ、登場人物少なすぎるんだよ。描写が無いだけで実はエキストラ沢山いるの？

「ヒロイン…瀬能くんは、どんな女の子がタイプなの？」

「なんだよいきなり」

「いいから」

有無を言わさぬ真剣な雰囲気を見せるひかりちゃん。言ってる内容
容はアレだが。

好みのタイプうーん？正直考えたこともなかったな。

うーん…なんて答えよう。

「そうだな…強いて言うなら…」

「…」↑ひかり

「…」↑呂布

「「……………」↑善&玲

「尻ケツと身長タツバがデカイ女の子…かなあ」

「わーん!!!」——オーバードライブ!!

「万象の杖!!」

バリバリバリバリツツ!!

「ぎゃああああ!!」

「たかし!」

無拍子で突き出された鉄拳を右の掌で受け止めて、同時に襲いかかる波紋エネルギーを「気」で体内を流動させ、左の足裏から地面へ受け流す。

勢いよく流れた波紋と「気」は俺の背後（の離れた場所）にいた名も知らぬ一般人のもとへ走り、彼を強襲した。

ひどいっ！罪も縁もない赤モの他人ヲになんてことを…！

「お前はルール無用の悪魔「うるさい女をパーツでしか見れない人間のクズが!!」ウボアツ!!」

台詞の途中でシャイニンググライダー食らった。

しかも当然のように波紋付き。もうお前シヨ●ヨの代わりに吸血鬼や柱の男と戦ってこいよ。

84時間目 君に出会えたキセキ

バキツ、ドコツ、グシヤ!!

「うわーんー!」うべらボア!

顔面への飛び膝蹴りから地面に突き倒され、そこからマウントで無慈悲な鉄槌を食らう。

なんで俺こんなに殴られてんの?

「ぶっーぼほっー!じゅっ、順逆自在の術!!」

「ぼえっ!!?」

きつくなり始めたところで、見知らぬ他人と場所を入れ替える。

「たっ…たかしいいいいっつ!!」

「うわっ、数発で血塗れに!」

「ヤバイぞ早く止めろ!!」

身代わりにしたのはさつきと同じ人物だったようだ。悪いね、終わったら戻るよ。

「ハアハア…くそ、あのアマっ無遠慮に殴りやがって…!」

クソ腹立つ…なにが女をパーツでしか見れない人間のクズだ。男なんて大概そんなモンなんだよ!女だってそうだろ!顔だのステータスだの…

「なあ呂布ちゃん!」

「…で…デカイ…」

「え?」

「…なんでもない」

…気になるけどスルーしておこう。なんとなく。

「瀬能くん!?!いつの間にも移動したの!?!」

ようやく落ち着いたのか、ひかりちゃんがこちらに向き直る。

「俺のことよりあつちを気にした方がいいんじゃないか？」
彼女の背後を指差す。

「動かねえ、たかしが動かねえよ!!」

「早く保健室に運ぶぞ!!」

顔をパンパンに腫らした男子生徒が担架に乗せられ、慌ただしく運ばれるさまはER（救急治療）の最前線のよう。

理由がないだけにやっつてることが俺よりひでえ。

「大丈夫、クラスメイトだから」

「大丈夫の意味がわからないよ」クラスでどんなポジションなのきみ？

気になる…落ち着いたら調べてみるかな。

でも今はいいや。

「これ以上怪我をしたくないからとつと他のところ行こうか」
打たれた箇所をさすりながら玲ちゃんたちに話しかける。

リクエストの映画も見たし、もうここに用はないだろう。

ひかりちゃんとお喋りする理由もないし…酷い目に合いそうだし。
そもそも合えばなしだけど。

さつき回復したばかりなのにこんなダメージ受けるなんて思わなかった。あざになってないよね？

「もうすぐ次の映画始まるけど」

「学祭で二本撮りするな!」

だから演技が拙いんだよ!

「二本じゃないよ。三本立て」

「なお悪いわ!」一本に絞れ一本に!

ただでさえカメラ向けられるのに慣れてないのに、その上セリフとアクション覚えさせられることの精神的・肉体的の疲労!

昔やらされたからよく分かる。ハンパないって!!

「そんなブラックな環境で劇団員がいつまでもついて来ると思っているのか！監督なら他人に気を配れ!!」

「言ってることは正しいけど瀬能くんに言われるとすごいモヤっとするー!」

私はいいの。魚雷だから。

「映画他にもやるの!?!」

「うんっ。恐竜のお話と、ロボットのお話」

「どっちもダンボール製だろ」

さっきの映画も背景や小物のほぼ全てがそれで作られてたみたいだから。

みかんとか表紙に描いてあるロボとかダサすぎて草。ベニヤ板くらい使え。

登場しただけで笑っちゃうだろうから、観ない方がお互いのためだな。

「ひかりちゃん、僕もう帰らなくちゃ」

「:銀河鉄道のジヨバンニ?」

正解。そういえば中学のとき好きだって言ったっけ。

「映画観ないの?」

「玲ちゃん観たいの?」

「うん!」

マジかよ、こんなC級作品。

演じてる奴が運動部なせいとか、やたら声がデカくて寝ることもできねえ一種の苦行なのに。

娯楽に飢えてるとこんなのも心惹かれるんだな…

「そうか、なら一旦ここで別れるか。そろそろ漁業部の方で釣った巨大魚解体ショーが始まるから一時間後にでもまたここに「解体ショー!?!行く!行きます!!」食い気味な意見をどうも」

きみならそう言うと思ったよ。

「えっ、あれ!?!映画は!?!」

「あつその…ごめんなさい!!」

「そんなあ!」

ちよつと迷ったけど頭を下げて謝られた…

「諦める、彼女はお前の作品より魚を捌く場面の方を選んだ。それが
真実だ」

「真実嫌い!」

「マグロに負ける映画…プギヤーム9（ハハ）」

「瀬能くんはもつと嫌い!」

機雷きらいだなんてそんな…私は魚雷よ!

「という訳でじゃあな、ひかりちゃん」

「ちよつ、待つてよ瀬能くん!せめて連絡先交換しよ!」

あーん?連絡先?」

そんなん昔から変わらな…そういうえば高一の時に携帯買い替えた
んだったわ。俺が。

買ったばかりなのに不具合ばつかで、そつちにばかり気が向いてて
昔の知り合いの連絡先のことすつかり忘れてた。

ただでさえ風間一派の絡みが多くて濃いし…茜もなにも言わない
もんで…つい。

そもそも使つてねーしな。

「じゃアドレス交換するか、なんかあったときのために」

「うんつ、…用がなくても気軽に電話やメールしてくれていいよ、友達
なんだから」

………友達?

「俺たちつて友達だったのか?」
「え」

カツ、

ひかりちゃんの手からするりと携帯が落ち、床の上に転がる。

大丈夫かお前、急に顔真っ白だぞ。

「え……う、嘘だよね……瀬能く——」

『共に生きて共に死のう』みたいな仲だと思ってたんだけど」

チームというかファミリーというか……ほぼ毎日一緒にいたし。

居心地も良かったからな……機会はなかったが、必要なら命かけるくらいは平気でできた。

当時俺たちの関係性について誰も聞いてこなかったし言わなかった。

ネタやノリで散々言ってたけど……そうか……友達ってそんなんなのか……知らなかった。

「……どしたのひかりちゃん。蹲ったりなんかして」

今まで話し込んでいた相手が、気づいたら両手で顔を覆ってしゃがみこんでいた件。

「……………落として持ち上げるのずるい……………」

「？」

携帯ならまだ床の上だぞ。拾うんなら早く拾えば？

85時間目 蛍の光

久々に顔を合わせた旧友に別れを告げ、次に向かったのは漁業部と料理部の合同出し物。

内容の描写は割愛するが、まー…現実離れた出し物だった。

「すごかったね！さっきの解体ショー！」

「すごいのを域を超えてると思うけど」

漁業部が海で釣った巨大魚——見た目は5mを超えるカジキマグロだったが——を料理部の顧問教師が、刺身包丁一つでさばっていく光景は目を見張るものだった。

しかもその後、身を削がれ骨だけになった魚を巨大な生簀に戻すと…なんと魚が優雅に泳ぎ出した。

リアルフィッシュボーン。俺を含めた見物人全員が度肝を抜かれた。

繊細且つスピーディーすぎる包丁さばきは食材にさばかれた事を感じさせないと…聞いた事はないな。ト●コかよ。

あの顧問、もしかして千代婆？

「そういえば呂布ちゃん、ふと気になったんだけど」

「……………なに？」

ショーの後に振る舞われた魚料理に舌鼓を打ちながら、同じ卓に座っている呂布ちゃんに話しかける。

「ずっと一緒にいるけど、自分のクラスの方はほつといていいの？」

「……………」

もぐもぐと箸を進めていた手がビシリと止まる。

「俺は一日休業だから大丈夫だけど…玲ちゃんたちは？」

「私たちもぐもぐもぐもぐもぐ」

「だめだこいつ、食欲に支配されてやがる。」

がら店番をしている」

「まあだいたいどこもそうだろうな」

「3日間のうちの1日だけを担当する、という取り決めで、私と玲は初日担当だ」

なるほど、つまり二人共俺と同じ一日フリーか。

じゃ問題ないな。

「で、お前は？」

「……………」

「コッチヲミロ」

顔を背けて聞こえないふりすんな。

ム……、ム……、

不意に、俺の腕についているデバイスから振動とバイブ音が鳴り響く。

電話か？

「(ピツ) お前か」

『はい。葵冬馬です』

葵？Sクラスの？

予想外の人間から連絡きたな……てかなんで俺の番号知ってんの？

『番号については直江君に聞きました』

「…プライベートもクソもねえな」なにしてくれてんのアイツ？

『いやあ、"プレミアム100 別冊オオヤドカリ大全"という希少本を渡したら快く教えてくれましたよ』

「あのクソ野郎ブツ殺す」

えるしっているか、ヤドカリはカニのなかまなんだぜ。

「ヤツへの制裁はこの際置いとくとして、なんの用だよ」

『そちらに呂布奉先さんはいらっしやいますか？』

呂布ちゃん？

『休憩時間が終わっても戻ってこないから心配で…瀬能君のところへ行ってませんか？』

「……」

無言で呂布ちゃんを見ると、まだ顔を背けたまま固まっていた。

しかし、その褐色の皮膚からはダラダラと汗が流れている。

『お客も増えてきましたので、できれば戻ってきて手を貸してもらえたらと』

「…すぐ連れてきます」

「ごめんなさいねうちの子が。」

「て訳で今から2—Sに行くぞ、呂布ちゃん」

電話を切った後、すぐに代金を支払いに席を立つ。

残った料理？イベントリ内でタッパーにドラックアンドドロップして詰めるさ。

「あ…主……いつしよ…」

「俺のせいみたいな言い方するなよ…自分がやるべき仕事はきちんと終わらせてから付き従いなさい」

しよつちゆう生徒会サボってる俺が言えた事じゃないけどね！

「二人はどうする？まだ食べる？」

「もぐもぐもぐ私たちももぐ行くーもぐもぐもぐもぐ」

「支払いも済ませただろう。いつまでも食べている訳にはいかない」

まあそうだね。

じゃ次の目的地は二年Sクラスということだ。

「ほら呂布ちゃんいつまでも座ってないで、立って」

「……………」

「そんな俺の服摘んで無言の抗議とかされても——くつつく波紋を流すな!!」

ビリビリする！

☆

★

☆

・ 2—S 水着喫茶『あるじ様とお呼び！』

「まさかまた来るとは思わなかった」

他のより明らかに設備の質が高い教室を前に眩く。

この学園無駄に広いし、そこまで仲良い知り合いもないから同じところに二度行くってないだろ普通。自分のクラスでもないし。

しかも癖の強いイロモノばっかだしなここ。

「一度来たことがあるのか？」

「初日にちよつとな」

できれば忘れたいし近寄りたくなかった。

でもそんなわがまま言ってもらえない。気を抜くとすぐ足のつま先からくつつく波紋を流し、床にへばり付いて抵抗する呂布ちゃんを引きずって店内に入る。

終始この調子でここまで来るの超疲れた…駄々のレベルが高すぎるよ…

「葵ー、葵冬馬ー！いるかー!?呂布ちゃん連れてきたぞー！」

「ああ、瀬能君！丁度いいときに来てくれました！」

入り口から堂々と入ってきたにも関わらず、葵が嬉しそうに駆け寄ってくる。

「忙しくてもう限界です。呂布さん、着替えなくていいからすぐ厨房に入ってください」

「……………」

「店が終わったら戻ってきていいから、お仕事きちつとしなさい」

渋る呂布ちゃんにそう言っつて、厨房に押し込む。

やれやれ…やつと終わった。

ついでになにか食っつていこうかと考えてたけど、店内のテーブルは

どこも埋まっているし、廊下にまで並んでる奴らがいる。
一緒に並んでたら学祭終わるぞ。諦めよう。

パシヤ、パシヤパシヤッ

「ん？」

再び廊下に戻ってくると、妙な音がすることに気づいた。
なんだ？さっきは呂布ちゃんに夢中だったせいかわからなかった
が、まるでカメラのシャッター音のようなものが……

「……………！（パシヤパシヤパシヤパシヤ！）」

音源を探すとすぐに見つかり、そこには擦り切れんばかりにカメラ
のシャッターを切る見知った男が一人。

ていうかクラスメイトだった。

そーいやさつきFクラス行つた時いなかったな。

「…なにしてんだ土屋」

「……………人違い」

ブンブンと勢いよく否定してるが無理あるぞ。

つーか例え人違いだとしてもだ、水着の女生徒を許可なくローアン
グルで撮影するのは犯罪よ？事案よ？

取り締まりに生徒会呼ぶ案件よ？

「(ガシヤン) オフの俺に仕事させんなよ…」

「…!! (ブンブンブンブン!）」

カメラを構えていた両腕に手錠をかけると、無罪を主張するように
激しく首を横に振る土屋。

無理があるって。現行犯だから。

ちなみにこの手錠、一昨日直江が使っていたものだ。(※32時間
目 容疑者、確保参照)

教室についても一向に外す気配がなかったので自力で外した。

装着してる物をイベントリに入れようとするやと強制的に解除されるんだな…知らなかった…

故に、この手錠に鍵はない。(直江が持つてるかもだけど)

「ほら、キリキリ歩け」

「(ブンブンブンブンブンブンブンブン!!)」

手錠で繋がれている腕の右手を掴んで引つ張ると、土屋の抵抗がより一層激しくなる。

すると奴のブレザーの内側からバサバサと紙のような物がこぼれ落ちた。

「あん？なんだこれ」

「……!!」

床に散らばった物を上から覗きこむ。それは……

メイド姿で満面の笑みを浮かべる俺の写真(※18時間目 シュレ
ディングーのパンツより)

……

「自白を強制させて余罪を追求するのが先だな」

「…!!む…無実…! (ブンブンガチャガチャブンブンガチャガチャブンブンブンブンブンブン!!)」

この近くに人氣が全くない隔離スポットはないかな。

「……………(…これを…!)」

デバイスで検索するために掴んでいた腕を離していたら(代わりに足踏んでた)、土屋が懐から何か取り出し差し出してくる。

なんだ買収か？思わず手に取る。

内容は……

水着で接客する会長の写真

「一番近いのは第三準備室か」

「……………!?……………こっちは……………?」

「また懐から写真を取り出す。」

「今気づいたけどこいつ、呂布ちゃんと口調が被っててなんかイヤだな…」

「とりあえず受け取る。どうせ似たようなもんだろう、どんな拷問技を使うか……………」

「考えながらも手元をチラリ。」

「呂布ちゃんの水着写真 ↑ 制服無しver」

「……………」

「……………データも……………」

「無言でいると勝手に値段を釣り上げてくる。」

「それに対して俺は——」

「スツ……………」

「手錠を外してブツを受け取る。」

「さらに、」

「清涼祭実行委員の見廻巡回ルートだ。もう少ししたら誰か来る」

「周りに聞こえない声量で耳打ちし、小さく畳んだ紙を土屋に握らせる。」

「……………感謝する……………」

「メモを受け取った土屋は足早に去って行った。」

「それを横目に写真とメモリーカードをイベントりに仕舞う。さりげなく会長の写真も受け取ったのはナイショだ。」

「……………」

「……………」

そしてそんな俺たちのやり取りの一部始終を、善くんと玲ちゃんが冷めた目で見ていた。

「瀬能…今…」

「ふ…級友を連行するなんてマネ、俺にはできなかつたよ…」

「ナツルくん悪徳警官みたい」

聞こえんな。

「…きみの『人でなし』な部分を垣間見たぞ…」

聞こえんなあ。

なぜなら僕は魚雷だから！

それを素早くダッキングで躲すと、今度は水面蹴り。
小さくジャンプしてやり過げごし、月歩げつぽうで空中を跳ねて距離を取る。
もちろん人がいない方向へ。瀬能さんちのナツルくんは紳士だからねっ。

「なにが紳士だ!!聞いたぞ!清涼祭の初日に英雄様や忍足たちに暴力を振るつたと!!」

立ち上がるとすぐさま拳を構えて喚き散らしてくる。人間き悪いなあ。

「おいおい、アレは正当防衛だぜ?きつかけを作ったのは向こうだ」
「貴様…!!」

まるで親の仇を前にしたかのごとく、憎悪に満ちた顔で俺を睨みつける小十郎。

気づいたらメイド服着せられて髪をワックスで固められたんだぞ。許可もなく。

普通怒るだろ。

「そうやってすぐに他人に責任を押し付けて自分の行動を正当化する…いつもそうだ!!お前はいつも…、揚羽様の時も!!」

「あれが一番だ」

他の件はいくら『俺わまえが悪い』と言われても構わんがあの一丁だけは別だ。

出会いもきつかけも過程も、その後の結果を改めて思い返してみても、だ。俺は何一つ悪くない。

むしろアレが一番悪いのは――

「お前だろ小十郎?主に一生ものの迷惑かけるとか従者の鏡だな」
「っ、だつまれええええええええええ!!」

指差して言ってるやると型もクソもない、そこらのチンピラのように大きく拳を振りかぶって突撃してくる。

前回とまるで変わってないな。

一方的に俺を罵り、効果が無いとすぐに腕力に訴える。

自分が正しい。自分の信じるものが正しい。頭にあるのはそれだけだ。

自分の主張を通すことのみ執着している。

まるで物語に出てくる独善勇者だ。

熱血バカは嫌いじゃないがコイツはダメだ。熱血でもバカでもない。

「意外と思われるかもしれないが——」

迫り来る拳を片手で掴む。

「くっ!!?」

「俺はまだ一度も人を殺した事がない」

すぐさま逆の手で殴りかかってくるが、同じようにもう片方の手で掴み、そのまま背面に反り返る。

小十郎の身体を引っ張り、ブリッジでもって空中へと弾き飛ばす。

「ぐ、あっ！なっ、なんだっ!」

「喜べ」

困惑する小十郎の後ろに回り、両腕を交差するようにねじり上げ、下半身を燕尾服の脇下から前側に通す。

そのまま右足の腿と膝で首を絞め、左の膝関節で小十郎の左足を固定。

あとは力のかぎり絞めあげる！

「お前が一人目だ!!」「がああああああ!!」

メギメギメギメギ!!

雑巾を絞るように、小十郎の筋繊維が引き絞られる感触を全身で感じる。

——留まっていた空中から地面へと降下が始まる。

即座に背中合わせの体勢へ。俺が空側、小十郎が地面側。

相手の両腕を捻り上げながら両膝の内を踏んで固定。

そのまま勢いをつけて落下すると、小十郎の上体がねじ曲がり、首が逆方向へ……

「アロガント・スパーク!!」

ガガアアンツツ!!!

両手・両足・胸部の五つの部位が地面に叩きつけられ、破壊される音が辺りに響く。

…さらばだ小十郎……安らかに死ね。

「と言いたいところだが、」

「がはっ……」

技を決めた体勢のまま、下にいる小十郎が苦しそうに息を吐く。

「今日はあいにくギャラリーが多い。年に一度の祭りの日だしな」

喋りながら拘束を解き、ゆっくりと離れる。

「八割殺しで勘弁しといてやるよ」

全身の筋繊維断裂。両手・両足骨折。胸部打撲による内出血ってとこか？

でもすぐに治るだろ、バカほど頑丈だし。

今も気絶しないで俺を睨んでるからな。

情けで生かしてもらったって言うのに……こういうの繰り返しでと実力で生き残ったとか勘違いしそうだな。

今のうちに二度と戦闘ができないよう、手足をもぎ取るか？

「そこまでだ小十郎」

糸の切れた操り人形のように崩れ落ちている男を見下ろしていると、人垣を割って一人、歩み寄ってくる。

膝元ほどまで伸びた、白銀に近い白髪。

強い意志のこもったキレのある眼差し。

歩き方から感じさせるのは、戦闘能力の高さと育ちの良さ。

そしてその顔一面には"^{バツテン}??"のような大きな傷痕。

まあいるよな。コイツの主人だから。

「…オヒサシブリデス、『九鬼揚羽さん』」

人目が多い上、善くんと玲ちゃんがいるので努めて普段通りの表情・対応を取る。

「…我と会話するのはそんなに嫌か、瀬能」

「なぜそうお思いに？」

「態度と表情にありありと出ている」

ああ、嘘がつけない自分が恨めしい。

でもしようがない。存在が合わない相手と、できるなら関わらずにいたいと思うのは人として当然の考えだから。

「どうしてここにいらっしゃるんですかね」

「我とて元学び舎に足を運びはする。祭りの時なら尚更な。それにこの学園には弟も通っている」

弟…ああ、そういやSクラスにいたな。それっぽいの。

確か英雄^{ひでお}とかいう…さつき偶然会って少し会話した。

「いい奴ですよなあいつ。殴ったつてのにメイドが粗相した件について謝罪してきましたよ」

先ほど小十郎が言ったように、一昨日ちよつと…いやかなり…無遠慮に殴りまくった。

ばったり出くわした時はその事について責められると思ったが、出てきたのは『あずみが悪ふざけをして悪かった』という台詞。

啞然としたね。九鬼の人間っただけで嫌悪感持ってたから。

しかもそのあとすぐに（不満げながらも）メイドも頭を下げて謝罪してきた。

流れでこっちも謝れば『支配者である我は庶民に多少暴れられても気にはせん！』と豪快に笑われた。

ちよつとイラツとした。

「まあでも、あれも個性だと思えば仲良くはできそうですね」

「そうか…それは、弟も喜ぶだろう」

本当に？

一人っ子だから分らないが、普通自分の姉の顔を傷スカーの男ミタにしたい奴と仲良くしようと思わないんじゃないか？

しかしそれを言ったところでムダだろう。『九鬼揚羽さん』は基本的に俺の言うこと肯定する派みたいだから。興味はないが。

興味はさらさら無いが。

「従者への教育もいいみたいです」

「あずみか…彼女は九鬼家のメイド長を務めている。それに恥じない能力を元々持っている」

俺の言葉の返答としては的を少し外しているような気がする。

が、指摘するのはやめとこう。興味ないから。

「弟を見習って『九鬼揚羽さん』も従者の教育をした方がいいと思いますよ、従者は主人の顔なんです。いきなり殴りかかってくる先触れなんて厄介でしかないのよ」

「き…貴様…!!」

全身で床を温めてる小十郎が怨嗟の声を上げる。

お前のことを言っただよ。睨んでないで行動で示せ。態度に出すな。

「別に、俺はいいんですよ？『九鬼揚羽さん』がどんな従者を側仕えに置いても」存分に好きにすればいい。火葬できるくらいには屍は残してやろう。

いつか必ずひとを殺す。

そう確信しているし、覚悟もしているつもりだ。

ただねえ…

「俺の従者は俺に喜んでもらうためなら命を失うことも厭わないみたいなんです。おそらくは他人のも、だ」

何度でも言うが、俺はいいんだ。いつか必ず他の人間の命を奪うと思っているから。

でも呂布ちゃんは駄目だ。彼女に人殺しはさせられない。

「困るんですよええ…ある日突然、血まみれで白髪女と鉢巻ウニの首を持って俺のところに来るなんてことが起きたら」

「……………」

「そうならもう、彼女と心中するしかないでしょう」

常人をはるかに上回る実力を持つ者は、それを超える理性を身につけなければならぬ。

なぜなら己を止めるのは己だからだ。自分自身の暴走を止められるのは自分の実力を超えた"何か"だからだ。

「呂布ちゃんは失敗作と評価されたみたいですけど、俺から見ればあの娘は可能性の塊だ。周りの影響次第で何にでもなれる」

なぜか俺に懐いてるから俺が一番影響与えるみたいだけど。

「これから色々経験して成長して、幼さがなくなり自分の意思で俺から離れていくまでは一緒に歩むつもりです。その時まで怪物であるならば」

「怪物？」

「心がある人外の領域の住人、それが怪物らしいですよ」

怪物には心がある、化け物にはない。

自身も並外れた実力を持つ武闘家の俺の祖父が言った言葉だ。

「お…まえ…は…！…どう…なんだ…！…」

「あん？」

「か…いぶ…つ…、の…つも…り…かつ…!？」

足下で執事が何かうめいている。

「小十郎、止めよ」

『九鬼揚羽さん』が嗜めるが、奴は構わず俺を睨みつける。

本当に従者の躰がまるでなつてねえな。主の言うことまったく聞かないとか。

俺？俺のはあれだよ。あえて教育してないんだよ。だから呂布ちゃんが言う事聞かなくても問題は無い。

「怪物であろうと化け物であろうと関係ないだろ？構わず狩りに来るんだから。もっともお前の実力じゃ何度生まれ変わってその度に限界まで鍛えても俺に勝つのは無理だろうけどね」

「ぐっ…!!」

「次はなるべく早く人の目のない所で襲ってこいよ。呂布ちゃんがお前を殺す前にな」

そう言つて小十郎の顔面を踏み、ぐりぐりと靴跡をつける。

男前が上がったねっ！

「…瀬能」

「なんですか『九鬼揚羽さん』。なにか文句でも？」どうせいつもと同じでなにも言えないだろ。

「きみが呂布と出会ったのはひと月ほど前と聞いた」

「そうですね」

「なぜそんなに気にかけるのだ。きみにとって呂布はどういう存在だ？」

俺にとっての呂布ちゃん？それは…

「同じ蓮の台を共有する、もう一つの片割れ…ですかね」

「話は以上ですかね。連れを待たせてるんで、そろそろ失礼します」

返事を待たずに踵を返し、その場を離れる。

できればこれが『九鬼揚羽さん』と小十郎との最後のやりとりになつてほしいなあ。

どっか俺の預かり知らぬ所で、適当にくたばつてくんないかな。

「一連托生……か。羨ましいと思うのは、私の身勝手なのだろうな……」
「あ……揚羽様……！！」

86. 5時間目 Gulliver

勢いで立ち去ったけど、冷静に考えたらトイレ行った二人を待たなきゃいけないんだった。

校舎内で比較的単純な造りをしているとはいえ人が多いから簡単にはぐれる可能性がある。なるべく同じ場所にいた方がいいだろう。若干の気まぐさを覚えながら、Sクラス前に戻る。あの二人移動してつといいな。

「——小僧、また力をつけたようだな」

廊下の途中にある狭い横道を通り過ぎようとした瞬間、突然声をかけられて思わず立ち止まる。

周りが騒がしいにも関わらずはつきりと聞き取れる低音^{パス}。これは…

視線を横にずらすと、脇道に髪も髭も瞳まで金色の筋骨隆々な執事服を着たジイさんが、腕を組んで壁際にひっそりと立っていた。

こんな目立つのに人目を避けられるから不思議だ。

『九鬼揚羽さん』と小十郎の主従ペアの次はアンタか、九鬼家ってヒマなのか?」

ヒューム・ヘルシング。

一千人以上いると言われてる九鬼家の従者部隊の序列零位。とかいうジジイだ。

ぶっちゃけ立場がよく分からん。偉いのか偉くないのか…

「馬鹿を言え。秒単位で予定が入っておるわ」

「どこの馬の骨ともしれない善良な一般市民に喧嘩ふっかけるくせに?」

「チツ…ああ言えばこう言う…減らず口め…」

「テメーに足んねえのは他人に対する礼儀だろ」

コイツがこんなだから小十郎とかメイド達（※忍足とステイシー）が素行良くないんだよ。

人生の先輩として、後陣の手下となるようにもう少し態度を改めようと思わんのか？無駄に歳取りやがって。

「あとは目か」

二つあるはずの鋭い眼光が、片方だけ眼帯に覆われて隠されている。

初対面のときはそんなのしてなかっただろ。真島の兄さんのコスプレか？

「貴様が原因だろうが……！」

「え？そうなの？」まったく覚えがないけど。

「意識を刈り取るつもりで串刺しにしてやったのに、気がついたら俺の片目を潰しおって……どうやったんだ？」

「そういうコイツと戦ってから人智を超えた技（順逆自在の術やバラバラ緊急脱出等）が使えるようになったんだっけ。」

「このジジイのおかげと言えばそうなんだけど、礼は言いたくないなあ。」

「だがあえてやる。」

「キミとの戦いは俺を一段階引き上げてくれたよ。メルシイ、ヒューム」（ニコツ）

（ビキビキビキツツ）「……小僧……キサマア……!!」

煽ったら鬼の形相で睨んできやがった。

落ち着けよジイサン。血管切れるぞ。

「九鬼ってクローンとか生み出せるくせに眼玉の再生できないのか？歪な医療技術だな」

「クローン技術を応用すれば臓器を作ることはできる。心臓などはまだ難しいが、眼や皮膚を元通りにする事は可能だ」

「あーん？じゃなんでコイツといいさっきの『九鬼揚羽さん』といい、

傷をそのままにしてんだよ。

アレか、俺に対する精神的な嫌がらせか。そもそも忘れてたから全然こたえてないけど。

「これは『戒め』だ。貴様を他と同じく赤子と侮ったが故に負った傷…二度、二度とこのような傷を作らぬように——」

「あ、善くんと玲ちゃん」

少し離れたところでキョロキョロと辺りを見回してる二人の姿が。

きつと急にいなくなった俺を探してるんだろう。勝手に移動してごめん。

「小僧オオ…！聞いているのかキサマ…いい度胸をしているな…！！」

「キレんなよいちいち」川神の爺さんと違って短気なヤツだな。

ちゃんと聞いているよ。一応。

「自戒もいいけど、いつまでも現役張ってないで後継者育てたらどうよ？他人に指導すると見えなかったものが見えてくるぜ」

「この俺に説教か」

「事実を言ったまでだ」

ワン子に色々教えたり、呂布ちゃんに色々教えたり、

思い返せば、ひかりちゃんとの特訓でも何かを得ていたような気がする。変わっていく自分を。

「大切なことはいつだって、自分じゃない誰かが教えてくれるもんさ」

「……………」

これ以上玲ちゃんを不安にさせるのは可愛そうなので、ヒラヒラと手を振ってジイサンにサヨナラする。

願わくばもう二度と会わないことを祈って。

「待て、小僧」

一歩足を踏み出した瞬間に話しかけられた。

ブチ殺すぞジイ。

「つい先日昔の傭兵仲間から連絡が来た。とある依頼を受けたが失敗し部隊も壊滅したとな」

「……」

「赤子ではあるが、他と比べるとマシンな赤子だった。その奴が今回の件で傭兵稼業から足を洗うと決めたそうだ」

「貴様はどんだん力をつけていく。そんなに強くなってどうするつもりだ？ 際限ない強さでもって世界でも征服するのか？」

「ジジイらしいありきたりな発想だな。頭が固い証拠だ」

「なに…？」

「俺が欲しいものはそんなもんじゃない」

「なら何が——」

「あ！ ナツルくん！」

ヒュームが尋ね返そうとした瞬間、俺に気づいた玲ちゃんが大声をかけてきた。

ぶんぶんと大きく手を振って笑顔を向けてくるその姿は——…失礼だがとても高校生には見えない。（本当に俺の一歳下か？）

「玲ちゃんあんまりオーバーアクションしないでよ。こっちが恥ずかしい」

「ええ！ あんまんに大葉おおばたくさん竹刀滅多はす斬り回し!？」

「それどうゆう状況？」

今ひとつイメージがでкин…この子は俺の想像の斜め上を行っている。

「おい小僧、質問に答えろ。貴様が真に欲しているのはなんだ」

「それぐらい自分で考えろ、老害が。何でもかんでも欲しがりがつて」

引き止めようとするヒュームをほつといて再び足を進める。

介護士じゃねーんだよ俺は。いつまでもジジイの相手なんてしてられっか。

身内でもねえクソ老人なら尚更だ。小十郎にでも遊んでもらえ。

87 時間目 ノーネーム

|| あらすじ ||

浅からぬ因縁を持つ人物と再会し、壮絶に気分を害したナツル。そのことを察した善と玲は、彼の調子を戻すため――

「あつひやつひやつひやつひやつひやつひやつひやつひやつひやつひやつひやつひやつ!!」

ナツルの昔の知り合いのところに足を運んだのだった。

くナツルSlideく

|| 2年Dクラス出し物 『わくわく交遊ランド』 ||

「あつひやつひやつひやつひやつひやつひやつひやつひやつひやつ!!」

俺こと瀬能ナツルは、ダーツバー風に改装された教室で思いつきり、自分でも引くくらい大爆笑している。

さつきまで心に暗雲が立ち込めていたのに、今はウソみたいに晴れやかだ。

笑いすぎて振れそうな腹を押さえて、体を折り曲げて頭を下に。

「あつひやつひやつひやつひやつひやつひやつひやつひやつ!!」

「……………ずいぶん楽しそうだなクソヤロウ……!」

頭上で馴染みのある人物が剣呑な声をかけてくる。

おおっと、地獄の悪鬼も逃げだしそうな勢いだ。店員さんこわーい。

「ちよつと美嶋さん!ダメですよお客さんにそんなヤクザみたいな怖い顔向けちゃ!昨日一昨日騒ぎ起こして怒られたでしょう?あと1日なんだから我慢してください!」

「ぐっ……!わっ、分かってるよ……!」

別の女生徒が茜に注意すると、不満を全面に押し出しながらもそれ

「軽いジョークじゃなかよー。それなのに連撲の極みキメるなんて、大人気ないぞー茜ー」

「うるさい黙れ、口を開くなクス」

接客しながら息を吐くように罵倒された。

迷惑かけた詫びとしてここで軽食を取って銭を落とすことにしたんだが早まったかもしれん。

それにそこそこの腹いっぱいだし…中々メニューリストに手が伸びない。

ただ玲ちゃんだけは嬉々として料理を選んでいる。

ここに来るまでに俺の倍は食ってるはずなんだが。

彼女はなに？胃の中に寄生虫でも飼ってるの？

「水です」

コト ↑善くんの前

コト ↑玲ちゃんの前

……………

「あの、俺のは？」

「ない」

うおーい。やめろよそういうの。

ファミレスで俺の前だけコップ置かれなくてガチへこみしたの思
い出すだろ。

「お帰りください。クソ野郎」
オキヤクサマ

「…このウェイトレス接客態度悪くなくない？」

先ほど茜に話しかけた名も知らぬ女子店員にクレームを入れる。

「美嶋さんは激ツンウェイトレスだから問題はないです」

「激ツンで…」デレはないんかい。

「人気なんですよ？指名が入るくらい」

「マジかよ」

あんなののどがいいいんだ？甘さが一切ないところか？

確かにスタイルはいいけど…

.....

カシヤツ

「テーマなににしてやがる!!」

「はっ!」 いかん、手が勝手に!

「カメラ音がしたぞ...!なにを撮ったんだおい?」

「いやあの」

「どうせその写真使ってあたしを笑いものにするつもりだろ!そんなんだろ!!」

「ああ?するかなん事!」

直江や吉井とかならともかく、中学からの知り合いにいじめ紛いな事はしない!

俺はただ、

「夜のオカズにするだけだ」

「なに言ってるんだてめえ!」

なにして、ナニ?

健全な男子高校生として一般的なことを言ったと思うけど。

「おかず?」

「それで飯が食えるのか?」

「利き手がとても捗る」

「死ぬゲスクズ!!」

>茜の攻撃!警棒をフルスイング!!

>ミス!ナツルは座ったままでヒラリと身をかわした。

「避けんな!」

「無理ゆーな」避けれたら避けるだろ。

さつきからずつとやられたい放題だったけど、痛いのは嫌だよ。痣になるし。

しかも今頭狙っただろ。殺す気か。

「そういえばさつきひかりちゃんに会ったぞ。中学の同級生の」
何気なく、昔の友達のことを話題に上げる。

どうせこの学園にいる事は知ってるから、驚きはしないだろ。

「なんだよやつと再会したのか」

「…ちよつと待って、どういう意味？」

「お前がいつあたしたち二人のことに気づくか賭けてたんだよ」

「『賭けてたんだよ』!?」逆に驚かされた。

「ひかりが」1年生のときに再会^①で、あたしが「卒業しても気づかない」。レッサーパンダが「2年」だな」

「初耳なんだけど!」

「そりやそうだろ。今言っただし」

テメーなんだそのすまし顔!少しは悪びれろ!

あ、ちなみにレッサーパンダってのはひかりちゃんと茜と俺と同じグループに所属していたもう一人の奴のことだ。

一つ年上の女で、先に卒業したんだが…流石にいないよな?この学園に。

その彼女の呼び名については、ひかりちゃんが作ったアニメーション映画の台本が元ネタだ。

俺たち三人を動物?に例えて登場させていたんだが、茜は気に入らなくずつとキャラ名で呼んでる。

見た目は穏やかで優しいで品行方正な優等生を絵に描いたような生徒会長だったが、性格は相当ねじ曲がっていた。

ぶっちゃけ俺に一番影響与えたのあいつだと思ってる。ひかりちゃんと茜もそれは認めた。

故に、レッサーパンダ。時折見せる腹は真っ黒。

そのほかにも俺が三日月型の口のみが白い、猫の形した『青』。気分屋。

茜がハリネズミのように全身の毛を逆立てて、常に骨を啜えている赤い犬。狂暴。

ラフスケツチやラストローラーやらもほとんど出来てて、あとは動画を作るだけって段階で見せられたんだが、肝心のひかりちゃんをモチーフにした動物キャラがいなかったのでもやり直しを命じた。

それ以外にも誤字脱字が酷かったから…修正め^{赤ペン}つちや入れたせいで卒業までにクランクアップしなかったけど、そういやどうなったんだアレ。

「つーかいいい加減名前と呼んでやったら？」レツサーパンダパイセンを。

「はん、必要性を感じねえな」

なんだ必要性って。相変わらずよく分かんねえ奴だな。

どう考えてもレツサーパンダの方が言いづらいと思うんだけど。

「…もしかしてあれか、愛しのひかりちゃんが付けた設定を使いたいとかいういじらしい理由」

「死ね!!」

>茜の攻撃！ 警棒を大きく振りかぶり、思いきり打ちつける！

>ミス！ ナツルは椅子から立ち上がり、ヒラリと身を躲した！

「そういえばこの学園の願書も二人で貰いにきたんだよね！中学卒業とともに恋愛も終了するかと思ってんだけど、まだ恋人同士だったんだ！お熱いね!!」

「それは腹黒レツサーパンダが作って流したデマだろうが!!」

>茜の攻撃！ 警棒を大きく振りかぶり、思いきり打ちつける！

＞ミス！ ナツルは駆け出し、ヒラリと身を躲した！

「はじめての〜の〜チュウ〜〜ひかり〜と〜チュウ〜〜ウフッフ、あかね〜と〜ひ〜かりチュウ〜〜♪」

「ぶっ殺す！」

「おもい〜で〜の〜たいいくかん〜で〜あついチツスを〜しくた〜〜♪」

「屈辱的にコロスツツ!!」

＞茜の攻撃！ ミス！ ナツルは身体を捻ってヒラリと躲した！

＞ナツルの反撃！ 再び振り上げた茜の腕を掴み、立ち関節をきめた!!

「コキネリツイスター!!」

「うわああやめろ変態!」

掴んだ右腕を両手でクラッチ、さらに両脚使つての胴絞め！

どうだ！胴体と一緒に左手も巻き込んだから身動き取れまい！

ただ本家と違い、相手の正面から技を仕掛けたから全然締め上げられてないけど。全身で拘束してるだけ。

ああ：腹部にむにゅうつとした感触が……ちよつと物足りない

…

「お前今なに考えた？」

突如向けられる立夏の気温も凍らす冷やかな眼差し。

いつもの睨みつけるようなソレではなく、深淵のような無表情。

三年ぐらいの付き合いだが初めて見る顔だ。

手を離したら殺される…!

「ははは、何をおっしやるウサギさん」

「……………」

ははは。ははははー、ハハッ。
手首のスナップだけで警棒ぶつけてくるのやめない？地味に痛いんですよ。

☆ ★ ☆

結論から言うと、俺は生きている。腕の痣は増えたけど。技を解く際に警棒を没収したのが功を奏したな。

叩かれた瞬間に奪い取って、素早くイベントリに突っ込んだら「どうやったんだ!」って驚かれた。

(実は俺もよく分からん。気づいたら使えたからなイベントリ…)

警棒は後で返しておこう。茜専用に使われてるから俺が使うとグリップに違和感覚えるんだよな。

「茜ちゃん！注文お願いしますー!」

「うるせえ、ちゃん付けすんなクリーム」

ハイッ!と勢いよく挙手した玲ちゃんの元に、文句を言いながら注文を取りに行く茜。

さつきから静かだったけど、もしかしてずっとメニュー選んでたの？すぐ側であんなにバタバタしてたのに。

人のことあれこれ言えないけど、この娘も大概だな…

………ん?

「ていうか何、君ら知り合い?」

玲ちゃんは紹介してないのに茜の名前知ってたし、茜もなんか玲ちゃんに対して態度が柔らかい。普通ならもっと距離が遠いのに。

初対面のはずだろ?

「なに言ってるんだお前、お前が紹介したんだろが」

「え、」

俺が紹介?

茜に?いつだ?

そもそも二人との出会いは?どういう経緯で仲良くなった?

直江に尋ねられた時も咄嗟に思い出せずに濁したが、全く覚えていない。

茜やひかりちゃんのことまで忘れてしまえる残念な脳だから気にしてなかったけど、これはあまりよろしくない気がしてきた。

「…ハードが異様に頑丈なのはメモリを削ってるからだな」

意味は分からんが多分俺今ものすごい罵倒されてる。

「出会いのきっかけを忘れてることは、あいつらには黙っといてやるよ」

「……………ありがとう」

マジで。

隙間時間　く小さすぎるお話く

・nick自室

ドンドンドン！ドンドンドン！

＞女子高生たちが、必死な様子で閉められたドアを叩いている…

活発そうな短髪の少女「作者、さーくーしやーさーん!?幼なじみ！
かわいい幼なじみの出番がまったく無いんですけどー!？」

メガネでカチューシャの少女「あ…あたし、原作だと恋人同士に
まなつたんですけど…！忘れられてませんっ?」

栗色の髪の少女「女のナツルさんと絡ませてくださいよ！」

茜「なんだあれ」

ナツル「名前どころか存在すら語られない哀れな敗残者どもだな」

ひかり「すごい必死…」

呂布「……………」

活発少女「あ！ナツル！」

メガネカチューシャ「え!？」

栗髪少女「女の!?!?!?!じゃないんですね」

茜「矛先がこっちに向いたみたいだぞ」

ナツル「やだ怖い…逃げていい?」

ひかり「追いかけてくると思う…」

活発「ちよつとナツル！アンタなんで本編であたしのこと話題に出
さないのよ！幼なじみでしょ!?!回想でもいいから絡ませなさいよ！」

ナツル「坂本が霧島と幼なじみって話題が出ればその可能性もあつ
たけど、もう今更無理だろ。マジ恋もペルソナもキャラ濃いから俺の

「設定なんてすぐ埋もれちゃう」

茜「お前の存在が1番濃いじゃねえか」

ナツル「呂布ちゃんとかに比べれば薄いよ」

メガネ「あたしの出番は無いんですか!?もう一つの方もですけど、裏のあたし出っぱなしじゃないですか!」

ナツル「いつから自分が表と錯覚していたのかな……?接点ねーから仕方ねーだろ。幼なじみでも昔のクラスメイトでも従者でもないんだから」

メガネ「原作ヒロインなのに!」

ナツル「この作品のヒロイン枠もう埋まってるのよ。悪いね」

呂布「……………」

百代「私か!」

ナツル「テツメーだけは死んでもネーヨツツ!ころ死合で愛を確かめあうなんてどんなサイコカップルだ!!」

ひかり「Mr. & Mrs. ス●スみたいだね」

栗髪「私はどうなんですか!」

ナツル「女バージョンと深く関わる奴は一人で結構です」

???「冴嶋さんに構って貰えるのは私です!」

ナツル「お前の出番はまだ先です。転校の手続きでもしてろです」

ひかり「うわむかつく」

茜「その口調やめろうざい」

ナツル「ぶつちやけテメーらなんか誰も求めてねーんだよ、散れ!今後ストーリーに関わるか分からない脇役どもが!」

三人『酷い!!』

|| 原作で名前がなかったキャラの方が出番ある説(ヒント:千紗)||

栗髪「雫ちゃん！雫ちゃんもどうして私の話題を出してくれないの!?!」

三郷「瀬能君が話を振ってくれないからかしら」

ナツル「俺のせいにしてないでくれませんか？きつかけがないから振りようがないだろ。そもそも学園にいるのか？」

|| 三郷雫の幼なじみは神月学園の生徒ではない説（真実） ||

ナツル「（チラツ）それにレズ枠もう埋まってっからこれ以上はストーリーに弊害が」

ひかり「リーバツフオーバードライブウ!!」

ナツル「ベへえっ!!?」

茜「死ねオラ!!」 ↑ 連撲れんぼくの極み発動

ナツル「(ドゴッ!) がっ!?(ドゴッ!) ごっ!?(ドゴッ!) ぶっ!?!」

|| この後数時間にわたり波紋入り特殊警棒で殴られ続けた（除夜の

鐘） ||

88時間目 ファイナーレのお時間です

キーン コーン カーン コーン …

『ご来客の皆様——』

「ああ、もうそんな時間か…」

朝に比べるとずいぶん弱くなった日差しを感じながら、放送が聴こえてきた方向を眺める。

学園中をあちこち移動していたら、気づけばあつという間に祭終了の時刻になってしまった。

去年もあつという間だったけど内容が大違いだな。一年の時は三日間寝ただけだけど、今年はがつり楽しんだなあ。

この後は学園関係者のみ参加できる後夜祭だ。キャンプファイヤーとかやるんだっけ？

「全部回れなかったなー、いや当然だけど」

出し物多すぎなんだよこの学園。全部でいくつあったんだ？

「えっ…もう、学園祭終わっちゃうの…っ？」

玲ちゃんが悲しげに顔を歪ませる。

気持ちは分かる。

俺もまだまだ遊び足りない。結構長い時間遊んでたけど…：…：…冷静になって振り返ってみると、結構な時間過ごしたよな。

移動や店での滞在時間考えると1日じゃ足りない気がするんだけど…まるで時間を操られていたかのようだ。

なんてなっ。

多種多様な体験をいっぺんにしたから感覚が狂ったんだろう。

「始まりがあれば終わりもあるもんだよ」

「…なんで？…：…どうして、終わっちゃうの…っ？」

ええー…なんでて…

そんな答えに困る質問俺にしないで。成績良くないんだから…
うーん……そうだな…

「楽しい時間が終わったらまた新しい『楽しいこと』を始めらるだろ？
ソレを見つげるために頑張れる」

「明日に向かうために、辛くても楽しい時間は終わるんだよ」

『寂しい』や『悲しい』と思うなら、その分過程が充実していて、喜び。
そして出会いに溢れていた。

次の楽しい時間には、きつと今回仲良くなった奴と今回以上の喜び
を体験するのだろう。

……やっぱり今日の俺は色々おかしい。祭だからか？

「そう…なのかな…？」

「きつとね」

「…だとしても、この時間が終わっちゃうのは悲しいよ…」

ですよねー。

正直説得は難しいだろうって、知ってた。

「玲、来年もまた学園祭はやる。あまりわがままを言って瀬能を困ら
せるのはよそう」

「うん…」

…俺が悪い訳じゃないんだけど罪悪感を覚えるな…

「清涼祭は終わりだけど日常はまだまだ続くんだからそんなに落ち込
むなよ。学年違うけど暇な時クラスに遊びに来てもいいし」

俺から一年の教室に行くのは流石にハードルが高い。

「それにほら、あともう一件くらいならアトラクション回れるだろ。
どこか行きたいとこない？」

玲ちゃんの隣に立ち、見やすいように高さを調整しながら学園の地
図を広げる。

今なら木工部のジェットコースターも可よ？乗らせんけど。

「えつと…じゃあ…ここ、行ってみたい」

「おずおずと指先を迷わせながらも、彼女が差した場所は――」

「二年体育館？」

基本的に二年生しか立ち入ることが出来ない専用の体育館。

しかしデカ過ぎてどの学年のクラスも部活・団体も使用していないから無人のはずだ。なんでこんなところに？

「いつも、遠くから見てるだけだから…」

「私たち一年生は上級生の施設に近づくこともないからな」

「そういや俺も一年の時はそうだったな」まあ今もそうだけど。

三年生が使う施設も、生徒会に入った時以来行ってないし。(※4

月 15時間目 生徒会へ一属 参照)

別に立ち入りだけじゃなくて、接近するのも禁止されてるって訳じゃない。

ただこの学園は無駄に広い。建物も多い。ついでに人も多い。

だから自分に関係ない場所に行く理由がないのだ。

生徒会に入ってあちこちに顔出す機会が出来たが、それでも行ったことない所や会ったことない人物は多い。

たまに「コイツ不審者じゃねえの？」って個性的な奴と廊下ですれ違う度にワクワク…不安になる。

「なんでこんなところ行きたいの？」

「こんなときしか自由に行けないから…それに…」

「それに？」

「ナツルくんといっしょに入ってみたいなって思ってた…」

「ぐはっ!!」

もじもじと恥じらいながら、つぶやくのは、はんそくなんだなあ。

「大丈夫か瀬能」

「あ、ああ……ただの持病だ」

「そうか」

突然血を吐いた俺に善くんが尋ねてくる。

が、あつさりとした返事をされた。

玲ちゃんもだけど、人が吐血したのに心配した気配のかけらもねえ。

萌えでダメージ受けるっていうイカれた設定を知ってるのか？本当にいつどこで知り合ったどんな仲なんだろう。

「じゃあ、最後に行くところは二年体育館ってことでいいか？」

「うんっ！」

「私も構わない」

「分かった。それじゃ案内しよう、こっちだ」

地図をイベントりに仕舞って先頭を歩く。

ここが最後の運命の分岐点で、己の今後を大きく変えることも知らずに。

☆

★

☆

「べ〜〜ルベルベルベット〜、わ〜が〜あ〜るじ長い鼻〜〜〜
♪」

二年体育館の中に入ると、中央で舞台女優のように歌いながらくるくと一人踊るエリザベスがいた。

保健室の時とは違い、なぜか青い服に着替えている。

「よし、帰るか」

「お待ちください瀬能さま。なぜ、私を見るなり踵を返されるのですか？」

今入ってきたばかりの入り口から外へ出ようとしたら、振り返った

瞬間に腕を掴まれた。デジャヴ。

ちよつとビクツとしたぞ☆(↑あまりの恐怖にテンションがおかしくなってる)

「テメーなんでこんなとこいやがる…!?保健室はどうした…?」あとどうやって一瞬でここまで移動した。100mは離れてたはずだぞ。「ええ、ええ!分かってます。分かっておりますとも、瀬能さまがなぜそのような過剰な反応を示すのか…」

「二度別れたのにその日のうちに再び会い見える。まるで映画のようだ…と」

なにいつてんだコイツ……………

「ああ!しかし何という悲劇!残念ながら私は瀬能さまの運命の相手ではないのです…!」

「いや微塵も残念に思っちゃいないけど」

「ちよちよ切れる涙を堪え、諦めてください」

聞けよ。

世界は広くて世間は狭いな…自分が一番かと思っていたけど、俺以上にアレな奴がまさか同じ学園にいるだなんて。

「それで?なんでここにいるんだよ」

「実は先程瀬能さま達が来室して以降、保健室に他のお客さまがまつたりと来なくなりまして」

『まったり』て、『まったり』か『ぱったり』とか『めっきり』だろ。

「それでとても暇…時間ができたので、前々から思案していた実験を行おうかと思ひ、ここへやって来たという訳です」

保険医が出歩くな。

つか俺以外来てないって…ひかりちゃんがフルボッコした男子は?

よく見ると体育館の隅に大量のたこ焼きやら人形やらが置いてあ

る。俺らが去ってから遊び呆けてたな。

「仕事しろ」

「本来なら誰もいないこの場所で一人ひっそりと作業するはずでしたが…まさか瀬能さま達がいらっしやるとは、お釈迦様でも知らぬがホットケー、と言うやつでございます」

「ホットケー!?!」

「玲ちゃん今そうゆうのやめて」話がややこしくなるから。

堂々と歌って踊り回ってたくせに何がひっそりとだよ。どうせ誰か来るの待ってたんだろ。

その『誰か』がまさか俺らだなんて…神は残酷だ。

「どうせなので皆さま、このエリザベスの研究の成果をご覧ください」
そう言つてズルズルと俺を、腕を掴んだまま体育館の中央へと無理矢理移動させる。相変わらず馬鹿力め。

「おほん、えーそれでは…：…突撃、抜き打ちペルソナチェック!でございませう、はい拍手」

……

「ペルソナってなに?」

「…ああ、すみません。これは私の契約者への台詞でした」

やつぱりこいつ訳わかんねえや。

もはや賞賛レベル。あんたが大将だよ。

本当に帰ろうかな…付き合う義理もないし。

「この世界に生まれ落ちてきてからというもの、私は『何かの気配』をずっと感じておりました」

手を離されたので逃げようと思つたらなにか始まつたらしい。

強制イベントか。スキップボタンはどこだ。

「その正体不明の気配を探る研究を進めてまいりました。寝食を忘れ研究を重ねる日々…具体的には720時間ほど」

「めっちゃ最近じゃねえか」一か月くらい?

「他の世界とは違い、この世界には『生』にあふれている。そう気づいたのが最近です」

「そう……本来訪れているはずの"死"の定めや、不幸な運命を覆すほかに…」

そう言つてエリザベスは、意味深に俺たちを見つめる。うつすらと笑みを浮かべながら。

…なぜだろうか。つい先ほどまで立ち去ろうと思つていたのに、完全に聞き入ってしまったている。

エリザベスはどこからか百科事典のようなサイズをした真つ黒な表紙の本を取り出し、差し出すように軽く掲げながらその本を開く。「皆さま。世界は一つではなく、数多も存在しているのをご存知でしょうか?」

「パラレルワールドのことか?」

「はい。例えば、私が瀬能さまとこうして出会い会話している時間が、別の世界ではお互い存在すら知るよしもない…」

ペラペラと、風が吹いている訳でも手が触れてもいないのにひとりで本が捲られていく。

それなのにページが進んでいる様子がない。

「この本のように、いくつもの異なった『世界』は次元の壁を隔てて、重なるように並行して無限に存在しております。しかし世界同士は基本不干渉。移動などはとてもできるはずは……」

ないと、思っております。

"ひずみ"をベルベットルームに発見するまでは。

そしてその"ひずみ"より、この"球"を入手するまでは。

——エリザベスの眩きと共に、自動でできる捲られていたページがピタリと止まる。

そして開かれた本の間から、複数の球が飛び出した。

それらはまるで意思を持つように勝手に、エリザベスを中心に一定

の距離を取り、五角を作るように地面に配置される。

「全ての生命の源、そして始まり。巡り巡る季節と自然の掟を表す黄色の“豊穰の球”」

「安定と幸せの真っ只中に身を置く素晴らしき恋人たちの喜びを想起させる桃色の“婚姻の球”」

「無とは何か、有とは何か、答えも意味もない虚しき問いかけをしてくる深淵のような黒色の“冥府の球”」

「刹那に揺れる高揚感と踊り戯れ、時間の間隔をも忘れ興奮するかの如く赤色の“祭壇の球”」

「際限のない優しさ全てを包み込む海。または果てなき自由な空を彷彿とさせる青色の“誓約の球”」

紹介された物は全て初めて見るはずなのに、何故か既視感を覚える。

同時に危機感と焦りを。

「今から研究の集大成をお見せいたします…」

「善くん、玲ちゃん、今すぐここを離れるぞ…」

「瀬能？」

気せず出た固い声に、善くんが怪訝な目を向ける。

「えー、まだ途中だよ？ここで帰ったらエリザベスさん「いいから行くぞ!!」、!？」

突然大声を上げ、彼女の腕を掴んでエリザベスに背を向ける。

強引な俺に善くんが止めに入る。

「瀬能!? いったい何を！」

「いーからとつとと逃げるぞっ!ここはヤバ——」

バシンツツ!!

唐突に背後から青白い電光が走る。

それと同時に、今までに感じたことがない強大なプレッシャーが襲ってくる。

心臓がうるさいほど爆音の鼓動を刻み、痙攣を起こしたように足が震える。

ム””””、ム””””、

腕に付いているデバイスから、いつもより一段と高いバイブ音が響く。

『天井付近までジャンプ。今すぐ』

画面にはそんな文言が浮き出していた。

いまいち信用していいか分らんが、今のこの状況じゃそれぐらいしないと逃げられなそうだ。

迷わず跳躍に向けて体を締め――

「きやつ、」

「玲っ!」

――!!

そうだ、ずっと玲ちゃんの腕を掴んでたんだっただ!

天井までの高さまで跳ぶとなると結構ギリギリだ。200メートルをゆうに超える。

俺一人なら問題はない。しかし二人抱えながらは…!

一瞬迷った。

僅かだが、確かに一瞬だけ俺は迷った。

すぐさま空いてる方の手で善くんの腕を掴む。

「善、着地は自分でなんとかしろ!!」

「なっ? 瀬能、何を!？」

「オオラアア!!」

即座に"気"を最大限まで使い、全力で上空に二人を放り投げる。

バリツツツ——
!!!!

その直後、とてつもないエネルギーの奔流が背中から全身を襲い、
駆け抜けていった。

……一瞬だけだったんだ。

ほんの一瞬、気の迷い。

それでも、

俺はその一瞬が許せなかった。

☆

★

☆

〈善Side〉

いきなり空中に投げ出されたと思ったら、次の瞬間には眼下一面が
轟音と共に青白く染まる。

「!!」

「キヤアアアア!!」

あまりの光量に眩む目。すぐ側で聞こえる玲の悲鳴。

そして…巨大な電流に飲まれる青い髪の男の姿。

そこまで考えてようやく、私は自分と玲が助けられた事に気がついた。

「…っ、玲!!」

身体が下降を始めたのを感じ、急いで玲を抱き寄せる。

瀬能は自分でなんとかしろと言った。手助けは期待できない。

不安定だがなんとか体を動かして、足から着地する。

玲には衝撃がいかないようにしつつ、膝を曲げて落下のダメージを最小限に抑える。

「グッ…!」

「善?!大丈夫!?!」

逃しきれなかった苦痛に顔をしかめると、心配そうに玲が詰め寄ってくる。

「大丈夫だ…それより、瀬能はっ?」

「!」

飛びはしたが、私たちは場所を移動していない。

それなのに瀬能の姿はない。いったいどこに…!!

電流の動きを考えると…いた!

「瀬能!!」

体育館の入り口に力なく横たわる男が一人。

その身はボロボロで、ところどころ焦げて煙を上げている。

「ナツルくん!!」

玲が即座に駆け寄ろうとする。

『汝は命果てるまで惑う羊か?』

——寸前で、背後からの声に動きを止められる。

『それとも荒野を踏みしめる狼か…?』

ゆっくりと振り返ると、今までとは違う雰囲気醸し出すエリザベスが、試すような視線で私たちを見つめていた。

その背後には山のような大きな、圧倒的な存在感を放つ巨人が、同じく私たちを見下ろしていた。

『我はゼウス…彼方より呼ばれし者なり…』

ダメだ…一目見ただけで分かる。

あれは常人がどうにかできる存在ではない。

「ひっ…!」

「くっ…」

せめて玲だけでもこの場から逃そうと考えるが、巨人に隙が見当たらない。

少しでも逃げる意思を察知されたら、その瞬間に先ほどと同じく広範囲に電流を放たれるだろう。

『答えよ、汝は狼か?羊か?』

万事休すか…!」

「犬科の動物は嫌いだね。アイツら昔っから無遠慮に本気で噛んでくるから」

背後から、突然声がかけられた。

「かと言って羊ってタイプじゃあない。がつつり肉が好きだからな…」

玲と一緒に振り返ると、先ほど見た時には床に横たわっていた男が

膝に手をつきながら、俯き加減で立っていた。

その身はボロボロだ。しかし、なぜか安心する。

心に溜まった不安を押し流してくれるようだ。

『では、貴様はなんだ？』

「犬でも羊でもなかったら答えは決まってるだろ——虎だ」

瀬能が顔を上げると、その表情は憤怒に彩られていた。

「真っ赤に燃える炎の虎だ。調子乗ったヤツに焼き入れようかあ……！」

『……よからう。試そう……その大言を発せるに足る存在か、否か』

エリザベス：いや、ゼウスか？

ゼウスの興味から私たちは外れたようだ。

もちろんまだ危機が完全に去ったわけではない。しかし……

不謹慎かもしれないがこの戦い、どのようになるのか非常に興味がある。